

まんじ

No.115

2010.2.1

まんじ第百十五号 目次

走る不動産（その一）

三戸岡道夫

第一章 密謀

年号が平成に変つてしまふと、不動産業界に『不動産バブル音頭』という替え歌が流行した。昔はやつた東京音頭の歌詞を替えたものだが、人々は半ばやけくそな調子で歌つていた。

はあー おどり踊るなら

チヨイト バブルで踊ろ ヨイヨイ

泡とバブルの 泡とバブルのまん中で

土地が値上がりれば ヨイヨイヨイ

もつと値上がりよ ヨイヨイヨイ

手拍子にあわせて、手ぶり身ぶりおかしく踊ると、客も女中たちも笑いころげた。

顔にヒヨットコの面をつけているので、よけい面白い。

面といつてもそれは手拭で、手拭いにヒヨットコの面が描いてあり、それをかぶつて後手でしばると、手拭はぴつたり顔に密着して、まるで生きたヒヨットコのように見える。そのヒヨットコの表情に合せて踊る腰の振り方が絶妙なので、

「いやだわ、このお尻！」

眼の前に迫つてきたヒヨットコの下半身を女中が押し返すと、小料理屋のせまい部屋が、ぱつと花が咲いたようににぎやかになつた。

踊り終わるとヒヨットコは、

「どうも失礼いたしました」
そう言つて、ヒヨットコの手拭をはずした。するとその下から意外に、まじめな若者の顔が現われた。それは大願不動産株式会社という不動産会社の、ビル事業部につとめる折原一夫という青年だつた。

「これは、これは、結構な踊りを…」

客席に座つている寺山勇が両手を大げさに開いて拍手した。踊り終つた折原一夫は自席へ戻らずに、そのままするすると寺山の前へ進んで、そのまま

「いえ、お恥かしい芸で、お見苦しかったことと思いまます。さ、先生、どうぞ一杯…」

先生と呼びかけて、お銚子を持つて寺山の盃に酒を注いだ。

寺山勇は不動産鑑定士なので、どこへ行つても先生と呼ばれていた。最近は不動産ブームなので、あらゆる不動産の値段がうなぎ登りに上り、不動産鑑定の仕事がやたらと多い。そのためまだキャリアの浅い寺山でも、いっぽしの売れっ子になつていた。

寺山は、『ジャパン土地建物鑑定研究所』という、長つたらしい名前の会社につとめていたが、この会社は不動産の鑑定については、日本ではビッグスリーに入る信

用のある会社だったので、鼻息は荒かつた。

「さあ、ご返盃…」

寺山と折原の間で盃のやりとりが二、三回行われると、

折原はタイミングを見はからつて、

「ね、先生、さきほどの件はよろしくお願ひいたします。これ、この通りです」

折原は寺山の前に大げさに頭を下げながら、横に座つている国友信彦の方へ、

「さあ、国友さんも、もう一度、いつしょにお願いしてくださいよ」

と声をかけた。

国友信彦は、天山銀行日比谷支店の貸付係である。そして国友信彦も折原一夫と同じように、この不動産ブームをうまく泳いで、業績をあげようとする野心満々の青年だつた。

そう言われると国友も、すばやくお銚子をつまみ上げて寺山の方へ差し出し、

「先生、わたくしからも重ねてお願ひいたします。この貸出が成功するか、しないかは、一に寺山先生のさじ加減ひとつにかかるつてゐるのですから…」

先ほどから折原一夫と国友信彦が寺山鑑定士をくどうてゐるのは、

（六本木にあるビルの鑑定価格を、もっと高くしてほしい）

ということだつた。

事のいきさつをかいつまんて説明すると、こういうことであつた。

最近、六本木にあるビルを、折原一夫がつとめる大願不動産が買うことになつた。値段は十二億円である。そしてビルを買う十二億円の金は、全額、天山銀行日比谷支店から借りる。そして、その貸付担当者が国友信彦だつた。その二人が、

(十二億円のビルの鑑定を、十五億円に上げてくれ)と執拗に頼んでいるのである。

しかし、ビルを買う会社が、ビルの値段を高く鑑定してくれとは、どういうことなのか。逆ではあるまいか。買うとすれば、一円でも安い方がいいにきまつていて。それを逆に高く鑑定してくれというのは、なぜなのか。

その疑問を解く鍵は、天山銀行の国友信彦がにぎっていた。

大願不動産は六本木のビルを買う十二億円の金を、天山銀行から借りるのである。そして担保に、その買ったビルを差入れるのであった。しかし一つ難問があつた。天山銀行の貸出規則では、買ったビルだけでは担保が不足なのだった。

というのは、天山銀行では貸出の担保にとる不動産には、安全度をみて、掛け目が八十パーセントでなくてはならないという、規則があるのである。

そうすると十二億円の八掛けは九億六千万円となり、十一億円の貸出しに對しては、二億四千万円が不足するのである。

すると不足する分だけ別の担保の不動産が必要となる。しかし大願不動産にはそんな余裕はなかつた。

そこで考えたのが、六本木のビルの水増し鑑定である。十二億円の六本木のビルが、十五億円という鑑定評価が得られれば、十五億円の八十パーセントで十二億円と、

天山銀行の貸出担保規定に合格するわけである。

今夜の酒席に天山銀行の国友信彦が顔をつらねている理由は、そこにあつた。銀行経営はいまや金融自由化の真っただ中にあつて、どの銀行も貸出競争に狂奔している。天山銀行も事情は同じで、貸付係の国友信彦の肩にも、ずしりと重い貸出ノルマが割り当てられていた。そのノルマを達成するためには、この十二億円の貸出は絶対実現しなければならなかつた。

「先生、お願ひします、この通り…」

二人は両手を合わせばかりにして、さらに執拗に食い下つた。しかし寺山は慎重で、

「そう言われても、そううまくはいきませんよ。世間相場つてものがありますからね」

なかなか話に乗つてこなかつた。

「でも、先生の、ドロ、ドロ、ドロンを使えば、簡単じゃありませんか」

折原一夫は忍術を使うまねをした。

「その、ドロ、ドロ、ドロンにも、限界がありますからねえ」

「でも、不動産がこんなに目茶苦茶に値上がりしている時には、売買実例なんてのはどうにでもなるでしょう」不動産の値段を鑑定するのには、収益還元法と、売買実例法と、二つの方法がある。そして実際にはこの二つの方法を併用して、鑑定の値段を算出するのである。

収益還元法とは、その土地を買ってビルを建て、そのビルを貸せばこれこれの収益が得られる。すると、その収益を得るために、逆算して、買う土地の値段がいく

らでなくてはペイしないという、金額があるわけである。その値段以上で土地を買ったのでは赤字になる。すなわち土地の値段が収益から逆算できるわけであつて、これを収益還元法という。最も理論的な計算方法であり、堅実な値段である。

しかし現実は理論通りにはいかない。最近のように土地の値段が上つてくると、そんな理論値は無視されて、土地はどんどん高い値段で売買されるのである。この実際の売買価格を参考にして鑑定価格を出すのが、売買実例法という方法であった。

だから売買実例法にしたがうと、鑑定価格はいくらでも高くなる。高いけれども、実際の値段には近いのである。逆に、収益還元法の値段は、現実の値段から離れていく。したがつて、最近の不動産鑑定の主力は、売買実例法が主となり、本来あるべき収益還元法の方が若干の参考程度にしか、すぎなくなつてているのだつた。

このように扱いようによつていくらでも自由になる売買実例の値段を、折原一夫は、ドロ、ドロ、ドロンと言つてゐるのだった。しかし寺山は依然として、
「でも、六本木の近くに本当の売買実例がありません」とねえ。ウソの売買実例を作るわけにはいきませんから」

と、ガードを崩さなかつた。

「わかりました。では、わたくしがその売買実例を探してきましょ。それならいいでしょ」

「そううまく見つかりますかな」

寺山はちょっと謎をかけるような言い方をした。それは（もし見つからなければそつちで、でつち上げればいい）と言わんばかりの言い方だつた。

「ええ、ぜつたい見つけますよ」

折原は意地になつて言い張つたが、もちろん、寺山の言う裏の意味もわかつてゐた。
夜もだいぶ更けたので、宴席はその辺でお開きとなつた。

「では先生、よろしくお願ひします」と心配そうに聞いた。

「大丈夫ですよ。あの先生、すこし勿体ぶつていてるんですよ。いつもあの調子で、結局はオーケーなんですか。もつとも、少しこれがかかりますがね」と折原は人さし指と親指でマルを作り、

「でも、そんなもの、手数料の中にぶちこんで払えば、なんでもありますから」

自信たっぷりにそう言つた。おそらく折原は他の銀行

からも、同じような手口で金を借りてゐるのであろう。

折原一夫は、

「今夜は国友さんに顔を出していただいて、本当にありがとうございました。銀行さんに顔を出していただけと、信用が格段にちがいます。後はわたくしがうまくやつて、後日連絡しますから、待つていてください」

「それにしても、折原さんのヒョットコ踊りには感心しました。名人芸ですね」

「国友さんも覚えておくと便利ですよ。そうだ、これ差し上げましよう」

そう言つて折原は、ヒョットコの手拭いをポケットから出して、国友に渡した。

「やあ、これは…、すみません」

受取る国友の頭に、さつきの不動産バブル音頭のメロディーがよみがえってきた。

はあー、おどり踊るなら

チヨイト バブルで踊ろ ヨイヨイ

泡とバブルの 泡とバブルのまん中で

土地が値上がりれば ヨイヨイヨイ

もつと値上がりよ ヨイヨイヨイ

「ア、ハ、ハ、ハ…、うまくいきますよ」

「頑張りましよう」

東京のネオンの夜空に、すっと流れ星が尾を引いて走るのが見えた。

第二章 駆け引き

翌朝、折原一夫は会社へ出勤した。

大願不動産は日比谷にある、ニユーハリビルデイングの六階にあった。最近出来たばかりの新しいビルで、ミラーガラスという斬新なデザインのビルは、全身に東京の青空を映して、硬質に輝いていた。

午前七時。まだ誰も出勤していない。ビルの中は森閑としている。

六階でエレベーターを降りると、「大願不動産」というドアの金文字が、折原の眼の中へとびこんできた。

ドアを開けて、中へ入る。すでに社長の八溝周三は出社していた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

八溝社長は社員の誰よりもはやく出社する。始業時間は午前八時なのだが、いつも七時には出勤している。昔からの習慣に加えて、近頃は頭が仕事のことで一杯になり、朝いつまでも寝ていられないからだつた。

折原一夫もそれに合せて、七時には出勤していた。それが八溝社長とぴたり呼吸を合わせて仕事をするコツであり、また、そのためには折原は八溝社長から重用されていた。

八溝社長は折原の方に顔をむけると、

「どうだつた？」
「どうだつたとは、昨夜の寺山鑑定士との会食の結果である。

「うまくいきました」

「十五億円の鑑定価格、まちがいないか？」

「大丈夫です」

「それにも寺山先生のジャパン土地建物鑑定研究所つてのは、堅いからな。少しは融通をきかせねばいいのに…」

しかし逆に八溝社長は、

（堅いからいのだ）

とも思つていた。堅いから、世間に信用があるのである。大願不動産のようにまだ信用が弱い会社は、ジャパン土地建物鑑定研究所のような信用のある会社と付き合うことが必要なのである。そうすることによつて、自然に大願不動産にも信用がつくというわけである。人の権力で相撲を取るのである。

「その上、天山銀行の方も堅いよな」

八溝社長はつづけて言つた。
「いまどき、担保の掛け目が八十パーセントなんて言つてゐる銀行はないよ。百パーセントはざら、いや、銀行によつては土地の値上がりを見込んで、百二十パー

セントでも百三十パーセントでも貸すところもあるよ」
しかし八溝社長は、

（天山銀行も堅いからいいのだ）
（一流銀行だから堅く出来るのだ）

天山銀行は都市銀行の雄であるから、天山銀行と貸出取引があるということは、大願不動産にとつても箔がつくわけである。

そのため八溝社長はかねがね天山銀行との取引を切望していた。しかしそのチャンスがなかつた。それが今度の六本木のビルの購入を機に、実現出来るのである。

六本木のビルの売主は赤玉建物といつた。

その赤玉建物は天山銀行の優良取引先である。その赤玉建物が、天山銀行に大願不動産を紹介してくれたのである。

欲しいと思っていた六本木のビルが買える上に、その買取資金を天山銀行から借りることが出来るとあつて、大願不動産としては願つてもないことだつた。土地バブルの時代なればこそである。バブル様々と言いたくなる。

（天山銀行と取引が出来れば、その信用をバックに、他の銀行からも金を借りまくつて不動産を買いまくることができる。そう思えば八十パーセントの掛け目ぐらい、我慢しなくてはならない）

八溝社長はそんな思いを胸に描きながら、

「それにしても、折原君…」

（はい）

「十五億円の鑑定のことは、ぜつたい赤玉建物に知られてはまずいぞ。もし知られてみろ。そんな高い鑑定が出来るくらいならと、もつと売り値を上げてくれと言われかねないから。赤玉建物の社長は、有名なこすつからい爺さんだからな」

「わかつてています。十五億円の鑑定水増しは、わが社と、天山銀行の国友信彦との間だけの秘密ですか」

「うむ、それはそうだ」

「それにしましても、社長、赤玉建物は六本木のほか

にいい売り物のビルをたくさん持っていますよ」

売り物のビルと聞いて、八溝社長の眼が光った。不動産ブームのこの時に、八溝社長はいくらでもビルを買いたがっていたからである。

「どんなビルだ?」

「と言つても、相手もなかなか手のうちは明かしてくれません。しかし、いい物件をたくさん持つていてることは事実です。営業担当の小野川さんがそう言つていまし

たから:」「そうか。それでは、これからよく赤玉建物とコンタクトを取るんだな」

「小野川さんを通してよく探つてみます。それよりも社長、六本木のビルの鑑定で一つ困つたことがあります」

「なんだ?」

「あのビルが十五億円に鑑定できるような売買実例が

どこかにないかと、寺山先生が言うのです」

「そんなもの、自分で探せばいいじゃないか。それが鑑定士の仕事だろう」

「それは、そうなんですがね。しかしいつまでもぐずぐず言つて、煮え切らないものですから、こつちで探しますと言つてしまつたんです。なにかうまい実例はないでしょうかね」

「花の六本木だ。売買実例ぐらい、いくらでもあるだろ?」

「でも、あのビルを十五億円に押し上げるような、割高な売買の実例ということになりますとねえ…」

「うーむ、そうか」

八溝社長も腕を組んでしばらく考えていたが、

「よし、調べてみよう」

それからしばらくの間、八溝社長は社長室にとじこもつたまま、あちこちに電話をかけまくつていた。

するとその日の午後になると、もう八溝社長はなにがしかの情報を掴んでいた。八溝社長は折原一夫などが知らない秘密の情報ルートを持つてゐるにちがいない。

社長室へ呼ばれた折原の前へ、

「これで、どうだ?」

と、一枚のメモが示された。それは六本木といつても外れの方の、麻布十番に近いビルの売買事例で、今度大

顧不動産が買う六本木のビルとは相当離れていた。しか

がつきかねた。

(まあいいや、その辺のことは、寺山鑑定士に任せておけばいい)

折原はそう無責任を決めこんだが、ふと、

(しかしこのビルは本当に売買されたのであらうか)

という次の疑問も頭をかすめた。

折原はそれを登記簿で確認してみようと、車を法務局へ走らせた。そして登記簿を調べてみたが、登記簿に売買の記録はなかつた。

(おかしいな?)

しかし登記の手続中なので、まだ登記簿への記入まで

手続が進んでいないのかもしれない。

それとも最近のように不動産の売買がはげしい時には、買っても、値上がりするとすぐ売つてしまつて、登記を省略する場合がよくあつた。だから登記面だけでは、実態がわからぬ場合があつた。

(この辺のことと寺山鑑定士の方に任せておけばいい

折原はきつぱり返事した。こういう場合、自信を持つて言つたのが商売のコツだということを、若い折原はすでに身につけていた。裸一貫から今日の大顧不動産を作りと、はっぱをかけた。国友信彦は、

「それはよかつた。鑑定価格は十五億円でまちがいありませんね」

「大丈夫です」

折原はきつぱり返事した。こういう場合、自信を持つて言つたのが商売のコツだということを、若い折原はすでに身につけていた。裸一貫から今日の大顧不動産を作り上げた八溝社長の手腕を、見習つたのである。

天山銀行への連絡が終ると、折原は会社の小型車を借りて、赤玉建物へ向つた。

折原としては、鑑定のいきさつはどうであれ、要は十五億円の鑑定書が手に入ればいいのである。

折原は車を西神田へ廻した。

法務局へ寄つたりしたので思わぬ時間をくつてしまい、赤玉建物へ着いたときはもう夕方になつてゐた。

折原は、赤玉建物の営業担当の小野川へ、

「お金の方はうまくいっています。いま天山銀行の方で貸出しの手続をしていますから、もうちょっと待つてください」

「約束の期限には大丈夫でしょうな。それ以上は待てませんよ。他所からも、いろいろ引合いが来てますのでね」

小野川は駆け引きのうまい営業マンと聞いている。どこまでが本当で、どこまでが駆け引きなのかわからない。

しかし折原も、

「絶対まちがいありません。約束の日には全額、耳をそろえてお持ちいたします」

きつぱり返事をした。その辺の呼吸の巧みさは、小野川にもひけをとらず、五分と五分といつてよかつた。

第二章 吊し上げ

天山銀行日比谷支店の貸付係の国友信彦は毎日忙しいので、今朝も寝不足だった。

り、自慢なのだつた。夜遅くまで電気がついていればいるほど、

(うちの銀行はこんなに忙しいんだぞ)

という誇示であり、夜の八時頃にすでに電気が消えていれば、

(この銀行は帰るのがはやいね。やつぱり貸出が増えないはずだ。だから株価も安い)

という眼で見られ、貸出競争の敗北宣言を自ら示しているのと同じなのである。

三階の会議室へはすでに全員が集つていて、朝のミーティングの始まる寸前だつた。国友信彦はかろうじて一番後の席へすばり込んだ。

正面には支店長と副支店長、その両側に貸付係長、涉外係長が並び、その前に貸付係と涉外係の担当者が全員集合していた。

朝の作戦会議といつても、毎朝のことであるから、それほど大した議題があるわけではない。期の始めや月の始めなら、支店長から営業方針や業績目標などの話が出てくるが、その他の日は、日々の業績達成状況や、今後の見通しなどが、担当者から報告され、それにハッパがかけられるのだつた。

今朝も最初に貸付係長と涉外係長から、昨日の貸出と預金の実績、それに今日の予想が発表され、「では、担当者からめいめい、今日の営業活動の予定

眠い目をこすりながらベットから起き上ると、アパートをとび出し、駅で立食いそばを流しこむと、銀行へ駆けこんだ。

朝のミーティングが始まる、ギリギリの時間だつた。

天山銀行の営業開始は朝の九時である。しかし日比谷支店では、毎朝八時には貸付係と涉外係が三階の会議室へ集つて、朝のミーティング（作戦会議）が行われるこになつてゐた。前夜いくら遅くまで残業していようが、この朝のミーティングへの遅刻は許されなかつた。きびしいのである。

昨夜も国友信彦は夜の十時まで残業し、それでも片付かないでの、アパートへ仕事を持ち帰つた。そのため寝たのは午前二時だつた。

(こんなことをしていたら結婚もできないな)

この頃はどこの銀行でも、貸付係は目茶苦茶に忙しかつた。貸出競争だからである。貸出の仕事が洪水のよう押し寄せて、処理しても処理しても溢れてくる。毎夜、十時、十一時と残業がつづくのは普通で、貸付担当者は疲れきつた青黒い顔をしていた。

だからどの銀行でも、夜の十時頃その前を通ると、表のシャッターは下りているものの、まだガラス窓の中は煌々と電気がついていた。貸付係が残業しているのである。

しかしこれが、貸出競争に走つてゐる銀行の誇りである。

について簡単に報告してくれ

どうながされると、担当者一人ひとり、昨日の自分の成績と、今日の見込みについて報告した。

国友信彦の順番になつたとき、

「大願不動産への十二億円の貸出が、今日あたり決まると思います」

国友は少し胸を張つて、そう報告した。

（例の六本木のビルの購入資金だな）

「そうです。今日あたり鑑定書が出来てくるはずですから、来ましたらすぐ貸出申請書を出します。よろしくお願いします」

その申請書作りのために、国友は昨夜アパートへ書類を持ち帰り、午前二時まで仕事をしてゐたのである。

「大願不動産の十二億円の貸出が決まるとな、今月の日比谷支店の貸出も、目標が達成できるな。しつかりやつてくれ

（はい、がんばります）

十二億円の貸出が決まりかけてゐるので、国友のところは簡単にすんで、次は、国友の隣に座つてゐる神川昇の番になつた。

国友のように大きい貸出を持つてゐる者はいいのだが、そうでない者には、朝のこのミーティングは地獄のしごきになるのだった。毎朝、必ず一人はその犠牲者が出了。犠牲者が出ないと、

(今日のミーティングはやり方が甘い)

と、支店長から指摘されるのを、一人の係長が恐れて

いるからだった。

今朝のミーティングでその吊し上げになつたのが、神川昇だった。

「僕の今月の目標達成見込額は、預金が二千五百万円、貸出が千五百万円。」

神川が全部言い終らないうちに、正面に座つた渉外係長が、

「神川君、小さい、小さい。そんな小さい金額ではダメだ。もっと大きいのがドーンと取れんのかい。隣に座っている国友君のように、十億円とか、十五億とかいう大きいのをやらないと、日比谷支店の目標が達成できない。一千万円とか、二千万円とか、そんなものは話にならないよ」

国友の十二億円というすぐ後だつたので、神川の数字が、よけい渉外係長には小さく感じられたのだろう。国友はちょっと神川に、すまないような気がした。

神川昇はこれまで、主として個人客の預金を担当していた。すなわち地域周辺の大会社の重役とか、中小企業や商店のオーナーなどの預金が主であり、したがつて会社を担当している渉外係にくらべれば、預金の金額が小さいのは仕方がなかった。

しかしこれまでは、個人の預金でも、一千万円とか、

ありますから。」

「十五億円でないと、担保の掛目は八十パーセントですから、十二億円の貸出は出来ませんからね」

国友はそう念を押して電話を切つた。

「さて、今日の仕事を片付けなくちゃ。」

国友の机の上には、今日の仕事が山積みになつていて。貸出増額の申請、貸出期間延長の申請、担保不動産差し替えの申請。それに一億円程度の貸出が二件。これらはどうしても今日中に仕上げてしまわねばならない。

午前中はそんな仕事に追いまくられて、ふと顔を上げると、もう昼食の時間だった。だが、まだ仕事は予定の半分も進んでいない。

三階の食堂へ上つた。

昼食を搔きこむようにして食べると、国友は鞄を持つて外に出た。

午後は渉外活動である。最近のように貸出競争が激しいと、貸付係といえども黙つて机に座つてゐるだけでは、商売にならなかつた。午前中はデスクワークであるが、午後はお客様の所を訪問して、貸出金のセールスをするのである。午前中にやり残した仕事は、帰つてからやるしかない。

(今日もまた残業か)

国友は地下鉄に乗り、金を借りそと目ぼしをつけた。おいた取引先を、三、四社、訪問した。

二千万円となれば、日比谷支店の中では相当の評価を受けていた。

ところが最近のよう、急激な金融の自由化、国際化、金融緩和で、預金の単位が大きくなると、これまでの金額では満足しなくなつてきた。その辺の転換が神川昇にはうまくできていないのだった。渉外係長は少し声を荒めて、

「これは、というような、大口のお客はいないのかい」

「はい、今のところはちょっと。」

「今まで通りのことを、くそ眞面目にやつていたのはダメなのだ。発想の転換をやるんだ。いいか、神川！」

神川は次第に首をうなだれて、

「はい」

と答える声も小さくなつていつた。

ミーティングが終ると、国友信彦は急いで自分の席へもどり、大願不動産の折原一夫とのところへ電話を入れた。

「どうですか、鑑定書の工合は？」

「大丈夫です。今日、ジャパン土地建物鑑定研究所の方から届くことになつていますから、来たらすぐお持ちいたします」

「鑑定書の金額、ちゃんと十五億円になつてているでしょうか」

「大丈夫です。寺山先生の方へは、念には念を押して

銀行へ帰ると、もう午後四時をすぎていた。
すると大願不動産の折原一夫が、鑑定書を持ってやつてきた。

「この通り、バツチリですよ」

折原ははずんだ声で、鑑定書の金額欄を開いて見せた。国友は首を突っこむようにして鑑定書の十五億円という金額を見つめながら、

「やつと出来ましたね」

「よろしくお願ひいたします」

「すぐ書類を本部へ出しますから、明後日にはオーケーが出ると思います。本部へはもう事前に説明して、了解をとつてありますから、大丈夫です。とにかくジャパン土地建物鑑定研究所の鑑定書があれば、鬼に金棒ですよ」

折原一夫が帰ると、国友は貸出申請書に鑑定書を付けて、支店長のところへ提出した。そして支店長の印をもらうと、その日の最終のメール便にのせて、本部へ送つた。

(やれやれ、これで一件落着か)
そう思つてタバコに火をつけて一服していると、そこへ渉外係の神川昇がやつてきた。

やつてきたというよりも、神川は影のよう寄つてきて、ぱーっと、そこに立つてゐる感じだった。そして、低い声で、

「国友さん、お願いがあるのですが：」

それは元気のない、哀れっぽい感じだった。

国友は、朝のミーティングで吊し上げられた神川の姿を思い出して、ドキッとした。

第四章 からくり

神川昇は、

「国友さん、お願いがあるのです」

と元気のない声でもう一度言つた。神川は今朝のミーティングで渉外係長から、

「そんな小さな預金や貸出をやつていたのではダメだ。もっと天山銀行日比谷支店にふさわしい、大きい預金や貸出を狙え」

と、支店長以下大勢いる席上で、吊し上げを食つたのである。そのショックが夕方になつてもまだ続いているらしい。国友が、

「なんですか」

とぶり返ると、神川はしょんぼりと立つて、哀願する

ように国友を見ながら、

「渉外係長から、国友さんのところへ行つて、大きな預金が取れる方法を教えてもらってこいと言われたのです。どうかお願いです、教えてください」

神川は深々と国友に頭を下げた。国友は、

「そうですよ。預金は貸出から生まれるのです。それも不動産貸出から…」

「え、えつ…、不動産貸出…？ 僕はずつと渉外係ばかりで、貸付係をやつたことがありませんので、貸出のことはよくわかりません。だから国友さんのようにはできません」

「いえ、簡単ですよ、大丈夫、神川さんにだつて出来ますよ」

「本当ですか、教えてください」

「まず、金を借りる会社を見つけることですよ」「えつ、金を借りる会社…？ そんな会社を探してどうするのですか？」

「不動産を買わせるのですよ」

神川はふたたび眼をハチハチさせた。
「いまは不動産ブームです。不動産を買いたがつている会社は山ほどありますよ」

「その不動産を買うには、金が必要です。その金を銀行から借りるじやありませんか」「あつ、少しわかつてきました」「それに最近は、不動産の値段がうなぎ登りに上つていますからね。ちょっとした土地を買つたつて、すぐ二億円や三億円は必要です。いま日本で一番土地の値段の

「まあ、まあ、あつちへ行きましょ」と神川を壁ぎわの応接コーナーへさそい、「僕にも大したノーハウがあるわけではありませんがね：」

「いいえ、国友さんの預金は凄いです。なんといつても億単位ですからねえ。それに対しても、億単位の預金はとれません。そのやり方を教えてほしいのです」

「昔はそうでした。でも今は違います。金融自由化で、時代は変わりました。億単位の金額の『大口預金』という制度ができて、預金の単位が上がりました。もう五百万円や一千万円では、評価されません。どうしたら億単位の預金がとれるのですか、教えていただきたいのです」

国友はしばらく、どんな言い方をしたら神川が理解できるだろうかと考えていたが、「そんなことは簡単ですよ。カギは貸出ですよ、そう、貸出…」

国友はズバリと言つた。
「えつ、貸出ですって…？」

預金のことを聞いたら貸出という返事が返つてきて、神川は眼をパチパチとさせた。

「なんだか胸がわくわくしてきました」

「そうすると次に問題なのは、その不動産を買う会社を、どうやって探すかですよ。わかりますか、神川さん？」

神川はちよつと考えていたが、「会社を探す前に、ertzを探すんですね」
「ertz、すなわち、不動産そのものを探すのである。ん？」
神川は神川をほめておいて、
「そうです。神川さんも案外、勘がいいじやありませんか」

「不動産がなくては商売になりません。だから、まずその不動産を探すのです。広い東京です。売る不動産は山ほどあります。もちろん東京の不動産でなくたつて、地方の不動産だつていののです。最近は山の中の土地だつて、ゴルフ場になつたり、別荘開発計画があつたりしますからね。値上がりしそうな土地だつたら、どんどん売れますよ」

「不動産を探すんだつたら、僕にも自信がありますよ。

僕が担当しているお客様の中にも、たくさん土地を持っている人がいますから……」

神川は自信たっぷりに言つた。

「それですよ、神川さん、その不動産をちらつかせれば、不動産を買いたい会社がとびついてきますよ。そこへ、不動産を買う金を貸すのです」

「僕にも少し自信が湧いてきました」

「こうして不動産を動かせば、すぐ三億円や五億円の金を貸すことが出来ますよ」

「でも、国友さん、どうして貸出が預金になるのですか？」

「簡単じゃありませんか。不動産を買う人がいるということは、売る人があるということでしょう。土地を売った人のところへは、五億円とか十億円とかいう土地代金が入ってくるわけでしょう。それを預金にしてもらうのですよ」

「あつ……なるほど。貸出金が預金に化けるわけです」

「そうです」

「でも、そううまく、売った人が預金をしてくれますかねえ」

「そこが、われわれ銀行員の腕の見せどころです。最初に売主と約束するのですよ、「土地代が入つたら預金してください」と。そうすれば、だいたいやつてくれるわけですね」

「あつ……なるほど。貸出金が預金に化けるわけです」

「つともっと大きくなることを考え出したんですね」

「人間の欲ですね」

「大きくなるといつても、もう住宅ローンでは大きくならない。そこで一般の不動産を買う金を貸す、すなわち不動産金融の方へ方向転換しているんですよ。そうすれば二千万円とか三千万円といった住宅ローンよりも、五億とか十億円といった貸出が出来るから、業績が挙がるわけです。ときには五十億円とか百億円という単位の貸出も動くことがあるそうです」

「ひやつ、凄いですね」

神川は悲鳴をあげた。

「だから不動産の売買代金には、砂糖に群る蟻のようにな、銀行員が集つてくるのさ」

「横断歩道、みんなで渡ればこわくない、というわけですね」

神川は深くうなづいた。国友は更につづけて、

「だから住専の社員にも、社内での貸出増加のノルマがあるらしい。七つもある住専で、どこが一番貸出が伸びるのが競争しているわけだから、きびしいんだよ」

「住専もわれわれ銀行と同じなんですね」

「だから住専の担当者からは、金を借りたい会社があつたら紹介してくれと頼まれているくらいですよ。神川さんにも、一度その住専の担当者を紹介しますよ」

「国友さんにそんなことまでしてもらつては、申しわ

れますよ。たとえ全額でなく半分だつて、渉外係長が要求する億単位の預金にはなりますよ」

「まさに発想の転換ですね。でも、その貸出金が天山銀行日比谷支店から出なかつたときは、どうしますか」

「他の銀行から借りればいいじゃありませんか」

「天山銀行が貸さないのに、他の銀行がすんなり貸しますかね」

「そんなのいくらでも貸しますよ。今はどこの銀行でも貸出競争で、貸出先を探すのに血眼になつてゐるんですからね」

「たとえば……」

「いちばん簡単なのが、住専さんですね」

「住宅ローン専門会社ですね」

「あそこは資金が余つてあるから、不動産購入資金ならいくらでも貸しますよ。住専はかつては住宅ローンの専門会社だった。ところが最近は、都市銀行や地方銀行も、住宅ローンを積極的に貸すようになつたので、住専の独壇場ではなくつてしまつた」

「そうですね、住専の社会的使命はもう終つたということがなんでしょうね。だからもう住専は要らなくなつたというのが本当なんですね」

「神川さんの言う通り、それが正論です。でも、その通りいかないのが世の中の常……。そうなると住専も急に欲が出てきて、解散なんてことは考えられない、逆にも

ります。住専に貸出先を紹介してやると、お礼に見返りの預金をしてくれるんです。紹介した貸出金の半額程度の金額を、三ヵ月の定期預金にしてくれるのです。これは僕の成績になりますから、僕にとつても大助かりです」

「ああ、なるほど。国友さんの預金の成績がいいのは、そういう所からも大口の預金を集めているからなんですね。そう考えると、住専というのは預金の宝庫ですね。貸出金が預金に化けるからくりがわかりました」

神川は最初とは打つて變つて、晴れ晴れとした顔になりました。

「あー、おどり踊るなら チョイトイ
バブルで踊ろ ヨイヨイ
泡とバブルの 泡とバブルのまん中で
土地が値上がりれば ヨイヨイヨイ
……」

鼻唄をうたいながら、自分の席へ戻つていった。

(づづく)

今川風雲録（七）

千坂精一

應仁の乱

鎌倉公方足利成氏を追討した凱旋の途次に、俄かの病に倒れて身罷つた範忠のあとは嫡男義忠が嗣いだ。父範忠は祖父範政が歿したとき十一歳だったが、義忠は父が三十三歳の若さだったのとまだ七歳であった。

後継者が幼少の場合は、故人の兄弟や甥たちが家督の座を狙つて御家騒動になることがよくあるのだが、このときは義忠の祖父範政が跡目に希んだ父範忠の弟範頼や家臣たちにも不穏な動きがなく、すんなりおさまった。義忠が当主になつて二年後の長禄元年（一四五七）十二月、將軍義政の弟政知が鎌倉公方になつて下向した。

前公方足利成氏追討以来鎌倉は今川が抑えていたので、政知の一行が駿河へ到着すると隨行を命じられた。

だが、鎌倉は兵火に晒され焦土と化していく治安も悪

尚が誕生したことから夫婦のあいだで対立が生じた。

義政が前管領細川勝元を義視の執事にして頼り、富子はわが子義尚の將軍繼承を勝元の舅の侍所司家山名持豊（宗全）に依頼したことから一大派閥が形成され、両者の対立が十年におよぶ大乱に発展していった。

いっぽう関東の乱のほうは、應仁の乱終結の翌文明十年（一四七八）正月に足利成氏が関東管領上杉顯定・扇谷上杉定正と講和して成田に退き、さらに四年後の十一月すでに將軍職を隠退していた足利義政と講和して伊豆を公方足利政知に譲り、ようやく終結することになる。

そのあいだに義忠はたびたび幕府から堀越公方足利政知の救援をさせられながら青年武将に育つていった。

應仁二年（一四六八）二十歳になつた義忠は、細川勝元の要請で軍勢を率いて上洛し幕府の警護に当たつた。義忠が東軍を選んだのは、將軍の牙旗が義政から細川勝元に渡されて幕府軍になつていることもあるが、隣国遠江守護が曳馬城（浜松市）の斯波義廉で西軍に属していたため、祖先が守護だった遠江を回復したい思いもあって斯波義廉と敵対する東軍側にまわつたのであろう。

義忠、無念の最期

義忠は、この上洛中に幕府政所執事（財政事務機関長官）伊勢貞親の姪と懇ろになり、翌年総帥細川勝元から、

く公方が入れる状態ではなかつたので、政知は伊豆国堀越（伊豆の国市堀越）に留まつたまま結局この地を御座所にしたので、（堀越公方）と称されることになった。

その跡地は、現在願成院北方の畠地あたりである。

その後も足利成氏と管領上杉一族との抗争はつづき、義忠も政知に関東の豪族たちを動員させて上杉を援けた。

こうして関東で二人の公方の抗争がつづいているあいだに、京でも大乱が起つた。（應仁の乱）である。

ことの起こりは管領家畠山持國の庶子義就と持國の弟持富の子彌三郎の従兄弟同士による繼嗣争いであつた。

これにおなじ管領家斯波義健の二人の養子義敏・義廉の繼嗣争いが加わり、さらに將軍家においても義政が実子に恵まれぬと判断して弟の淨土寺門跡義尋を還俗させて養子にし義視と名告らせたあと正室日野富子に嫡男義

「駿河に戻つて海道を鎮撫するよう」

命ぜられて帰國するとき、連れ帰つて側室にした。

義忠が上洛していたあいだも関東では前公方と管領の抗争はつづいていて、足利成氏が暴れ回つていた。

義忠は、山名西軍に加担している近隣豪族を鎮圧するより関東との国境を固めるほうが急務であつた。

事実、関東で暴れ回つてゐる古河公方足利成氏が上総の千葉・下総の結城・下野の小山など関東の豪族を動員して、堀越公方足利政知を驅逐せんと遠征してきた。

急報を受けた義忠は、ただちに救援に向かい、関東管領上杉憲定軍と協力してこれを防ぎ、敗退させた。

成氏が政知を斃して公方の座を取り戻そうとしても、堀越公方は幕府の後立てがあり所詮無理な話であつた。

だが成氏の奪回への執念は、鎌倉公方は父祖以来わが家系の世襲と私物化していく凄まじいものだった。

関東管領軍は上野館林や下野古河で立てつづけに成氏方を破つたが、成氏は屈せず千葉孝胤を頼つていつた。近隣の西軍方諸豪族鎮压を命ぜられて帰国した義忠であつたが、関東で騒動がつづいているために国境警固の緊張がつづいていて動きがとれなかつた。

義忠が帰国しているあいだに、東西両軍の総帥山名持豊と細川勝元が相次いで歿殞した。

翌文明六年（一四七四）三月、嫡流の山名政豊と細川政元が講和したのだが、しかしまだ燐りはつづいた。

この大乱に乗じて各地の国人たちが一揆を起こした。関東は前公方が権威を回復させると暴れ捲っているだけで体制の崩壊はなかつたが、守護制度は崩れつづけた。

ようやく成氏の反抗が沈滯したところで義忠は、守護斯波義廉の不在を狙つて遠江を海道鎮撫の槍玉に挙げようとして謀つた。遠江奪回は祖父範政以来の悲願であつた。

その遠江では、横地四郎兵衛や勝間田修理亮らが一揆を起こしていて、斯波守護家に取つて代わろうとしていた。まもなく盛んになる下剋上のはしりである。

この国人一揆鎮撫は、義忠にとって大義名分が立つた。

遠江国は大井川右岸から三河国（愛知県）との境までで、天龍川を挟んで東に磐田原があり西に三方原の台地がある。中心地は国分寺跡のある磐田市だつた。

横地氏は清和源氏のながれで城飼郡横地荘を領し、四郎兵衛は横地城（菊川市東横地）を本拠にしていた。

両氏とも遠江東部に蟠踞する屈強の豪族であった。

義忠は、分家今川貞世の系で、

「今川天下一苗字」

以来名告りを変えた堀越城（袋井市堀越）の堀越貞延

に兵五百を預けて討伐に向かたが、横地・勝間田勢の反抗凄まじく敗れて堀越貞延は討ち死にしてしまつた。

家中分裂

このとき、嫡男龍王丸はまだ四歳の幼児であつた。

義忠が領国を固めてさらに隣国遠江をも併呑しようとしていた矢先の不慮の出来事だつただけに家中の衝撃は大きく、のこされた嗣子龍王丸がまだ幼児だということがさらには拍車を掛けた動搖が激しくなつていつた。

そこで先代範忠が家督を継いだときのことが再燃した。範忠の父範政は弟の範頼を後繼者に希んだことはまことに述べたが、そのときの火種がまだ燃つていた。

その範頼の嫡男新五郎範滿が一廉の人物に育つてい

た。

「たとえ嫡流であろうと幼児では心許ない」

そう思つて範滿を推す親類衆と、幼君であつても嫡流を立てようとする家老衆が激しく対立して譲らなかつた。

このとき駿府館には側室北川殿の兄伊勢新九郎長氏が大道寺太郎重時ら六人の浪人たちと寄食していた。

新九郎は咄嗟の機転で密かに妹親子を館から脱出させると、七人で警護して人里離れた山中の庵に置いた。

内紛を引きつけた堀越公方足利政知は家老上杉政憲を、扇谷上杉定正は家老太田資長（道灌）を調停に送つ

義忠は、掛川城（掛川市掛川）の朝比奈泰盛を再度差し向かたが、朝比奈軍も敵わず泰盛も戦死してしまつた。この期に及んで義忠はついに自身の出陣を決定し、重臣たちの制止も諾かず千余の兵を率いて出陣した。

義忠は、横地・勝間田連合軍の籠もる勝間田修理亮の

出城中村砦（牧之原市中村）を包囲して猛攻撃した。

今川軍の本隊は完膚なきまでに攻め立てたので籠城軍もさすがに抗せず横地・勝間田の両将は自刃して果てた。

義忠は堀越・朝比奈の仇を討つことに満足して、敗兵を追わず砦を焼き払つただけで帰国の途に就いた。

帰路今川軍は城飼郡南山村（小笠郡小笠町南山、現在は菊川市）の塙買坂近くの無住寺に入つて仮眠をとつた。ここから森町を経て北遠江に通する道は信濃への塙の道だつたので、この地の坂を塙買坂といつたのだろう。ついでながら湖西市白須賀にも塙見坂というのがある。

その夜、横地・勝間田の残党が夜討ちをかけてきた。

不意を衝かれた混乱のなかで、義忠は流れ矢に当たつて倒れた。至近距離から射られたらしく矢は鎧を通して脇腹に突き刺さつていただとい。かなりの深傷であった。

矢は抜いたが出血が止まらず、義忠は夜明けを待たず絶命した。僅か二十八年の短かい生涯であった。

た。

調停といつてもそれぞれ三百余の軍勢を率いて上杉政憲は狐ヶ崎（静岡市）に、太田資長は八幡山（静岡市）に布陣したというから武力征伐の魂胆だつたのだろう。

範滿の母は上杉政憲の女であり、父範頼の母は太田資長の主君上杉定正の大叔母であつたから、心情的にはどちらも範滿に肩入れするのには目に見えていた。

さつそく、親類衆と家老衆の両派に使者を送つて、

「今川殿御討ち死にのあと御嫡男の幼少を軽んじて私闘せらるるは何事ぞや。どちらであろうと今川殿に逆心あるほうを討伐せよとの主命を受けて罷り越した。おそらくいつぼうは御敵なるべし。返答次第で『一戦に及ばん』

そう本音を隠して申し入れた。

隣国堀越公方と相模守護からの申し入れに双方恐縮して一日は退いたが、さりとて和解する気配はなかつた。

業を煮やした上杉政憲と太田資長は駿府館に乗り込んで調停をすすめたが互いに譲らず堂々めぐりがつづいた。

一触即発の危機を防いだのは伊勢新九郎の提案だつた。

「御親類がたの推される範滿様はご器量すぐれ守護代行に相応しいおかでござります。そこで龍王丸君がご成まで仕置をお願いしてはいかがでござりましょ」

これなら親類衆の推す新五郎範滿は十数年間、家老衆

の推す龍王丸は成人後に家督を継げることになるわけだ。

この双方の言い分を立てた新九郎の申し出に異を唱える者ではなく、談合は結着して内乱を避けることができた。

伊勢新九郎長氏

ここで今川守護家の御家騒動を未然に防いだ食客伊勢新九郎長氏（のちの早雲庵宗瑞）について触れておく。新九郎は永享四年（一四三二）備中國佐原莊高越山城（岡山県井原市東江原町）で生まれて、いるからこのとき四十五歳であった。父は室町幕府の申次衆伊勢備中守盛定、母は伊勢貞國の女である。

新九郎は成人後盛時と名告り、父盛定が義兄伊勢貞親の重臣になって上洛したあと、高越山城を預かった。

二十六歳のとき上洛して伯父の政所執事伊勢貞親に仕えた。このころ禪寺大徳寺で学び宗瑞の法号を受けた。その後、新九郎は叔父貞藤とともに將軍義政の弟義視の申次衆となつて今出川の邸に移つた。應仁の乱の勃発で渦中の義視は都を逃れて伊勢国司北畠教具を頼つたので、新九郎も随行したが世捨人のような生活に嫌気がさして半年後には都へ戻つた。

その帰洛の途中で宇治田原郷の大通寺家に立ち寄つて從弟の太郎重時と打ち解けて親しくなつたが、そのとき

行することになつて駿河館へ入り、龍王丸は嗣子のまま母北川殿と賤機山（静岡市大岩）の館へ移つた。翌文明九年（一四五七）十一月、十年つづいた大乱がようやく収束して戰火を浴びた京に静寂がもどつてきつた。

その翌年には前將軍足利義政と弟義視の講和が成立したので、新九郎は幕府の申次衆に呼びもどされた。

文明十四年（一四八二）になつて足利義政は足利成氏を赦し、その代償として伊豆国を堀越公方足利政知に譲ることを承知させたので、今川は国境の緊張を解いた。長享元年（一四八七）、龍王丸は十五歳に成人したが親類衆の支援を受けて守護代行の座に就いた。範満はいつたん掴んだ権力の座を離そうとはせず龍王丸を無視した。

妹北川殿からの不満の訴えで事情を知った新九郎は、六人衆と相談すると急遽手勢を率いて密かに駿河へ下り、石脇城（焼津市）に入つて龍王丸側の家老たちと連絡をとつて兵をあつめると、十一月に突如駿府館を奇襲して範満らを打ち取り、龍王丸を守護の座に就けた。

翌長享二年（一四八八）、新九郎はこの功を賞されて愛鷹山麓の富士郡下方莊依田、橋原、柳原、吉原など十二郡と興國寺城（沼津市根古屋）を与えられ、五十七歳の遅咲きながら徒手空拳で一城の主になつた。

ところがそこは駿河国の東端に位置していて関東管領

田原郷の尼寺に預けられた異母妹の千尋が駿河守護今川義忠の側室に決まつたことを知らされた。

その後、堀越公方足利政知に供奉して上洛した今川義忠と伯父貞親が催した酒宴の席で対面した。

義視に見切をつけて致仕し浪々の身となつた新九郎

は、おなじ志を抱く従弟の大通寺太郎と諸国行脚に出た。

大和（奈良県）から伊賀・伊勢（三重県）などを遍歴しているうちに五人の同志を得た。荒木兵庫勝宗、山中才四郎盛之、多日權兵衛、荒川又次郎、在竹兵衛である。

七人は伊勢大神宮に詣でて神水を飲み、頭分に推された新九郎の發案で、

○たとえいかなることがあろうとも不和にならぬこと。

○互いに助け合つて功名を立てよう。

○一人が身を立てたら六人は家人になつて力を尽くそう。

そう誓い合つた。

七人は諸国を遍歴して駿河へ入り、駿府館に逗留した。当主義忠の義兄にあたる新九郎は家中で客将の扱いを受けたので、六人は新九郎の家臣たちのようであつた。

そして新九郎らは御家騒動に巻き込まれたのである。

小鹿範満誅伐

義忠のあとは新九郎の調停どおり小鹿範満が守護を代

上杉氏の分国相模と伊豆に境を接し、富士山を隔てた北方は武田氏の甲斐国という要衝の地だったので、新九郎は上杉と武田の動静を探りながら誓いどおり家臣になつた六人衆の協力を得て精兵を養成する必要に迫られた。

堀越公方家の騒動

伯父伊勢新九郎長氏が小鹿範満を斬殺した年に龍王丸は堀越公方足利政知の烏帽子親で元服し氏親と名告つた。

その後政知が中風で倒れると知つた氏親は、今川家の当主として初めて伊豆国に入り堀越の公方館を訪ねた。

政知は兄義政につづき弟義視も嘗い氣弱になつていだ。

そこへもつてきて嫡男茶々丸が粗野で頑迷で乱暴者のうえ酒乱がひどく意に添わぬ腰元を斬殺するなど狂人同様の振る舞いが多く、政知にとつて心痛の種であつた。

持て余した繼室が政知に訴えて座敷牢に閉じ込めた。

四人の男児のうち茶々丸だけが先室の子であつた。

弟義視急死の三箇月後、政知は五十七歳で世を去つた。座敷牢にいた茶々丸は父の死を知らなかつたが、家中に氣脈を通ずる者がいていつか知るところとなつた。

脱出の機会を窺つていた茶々丸は、葬儀後屋敷内がち着きを取り戻した頃を見計らい佞臣と示し合わせて座

敷牢を破ると、義母圓滿院と幼弟潤童子を斬殺した。

二人の弟義澄（後の十一代将軍）と政氏は天龍寺（京都市右京区嵯峨）の門跡になつてゐたので難を逃れた。

このとき伊勢新九郎長氏は新九郎の名を嫡男氏綱に譲つて早雲庵主宗瑞と改め、伊豆修善寺で湯治していたので堀越公方家の騒動を逸早く耳にして駿府へ馳せつけた。

氏親に茶々丸討伐を謀つて許可を得ると、宗瑞はいつたん興國寺城へ戻り、軍勢を率いて伊豆へ攻め入つた。

そして、十一月十一日に堀越館を攻略して茶々丸を願成就院（伊豆の国市寺家）に追い詰めて自害させた。

まえにも述べたが、もういちど説明するとこの願成就院の北方二五〇メートルあたりの畠地が堀越公方御所跡と伝えられていて、近くに北條政子産湯の井戸という古井戸や御座所の地名も残つております、このあたり一帯が堀越御所以前は北條時政屋敷跡だつたともいわれている。

ともあれ宗瑞はこの北條の地に拠つて伊豆平定に乗り出したので、二代氏綱からは北條を名告るようになる。

（つづく）

小説 家康と廻狂いの右近

—遠州菊川の義人中条右近太夫物語—（2）

堀内永人

なつて、浜松城に帰るチャンスをうかがつていた。

一方、武田信玄は病氣のため、いつまでも浜松城の攻略にかかわっていられなくなり、屠蘇氣分が抜けない元

龜四年（一五七三）一月中旬、その本隊を細江村からさ

らに西へ移動した。

そして一月下旬、三河（愛知県東部）の野田城を攻め、

二月十日にはこれを攻め落とした。

しかし信玄は、野田城を落とした直後から、持病の肺

結核が悪化して、たびたび喀血し、武田軍の西進は一時

停止の状態となつた。

その後信玄は、しばらく長篠城において療養してい

たが、快方に向かう気配がないため、四月には遂に甲斐

に戻ることになるのである。

幸運にも家康は、信玄が細江村から兵を引き上げたた

めに、予想していたより早く、糸家から浜松城に帰ることになった。

家康は、帰城する日の前夜、糸家の奥座敷で糸藤兵衛、

（二）
三方ヶ原の戦いで、徳川軍に勝利した甲斐国の武田信玄は、犀ヶ崖の本陣で、論功行賞のための首実験を行つた。
そして、その翌日の元亀三年（一五七二）十二月二十三日には、浜松城攻略の長期戦を避け、兵を西進させて三方ヶ原台地の北西、引佐郡細江村に宿陣した。

一方、三方ヶ原の野戦で大敗した徳川軍は、浜松城に籠城したまま鳴りを静めていた。

このとき浜松城には、家康になりすました影武者が、総指揮官として采配を執つていたが、所詮影武者は、外形こそ家康そっくりであるが、本物ではないので、だんまり戦術しかとれなかつた。

しかし、結果はそれが功を奏して、戦力の消耗を防ぐことができたのである。

この頃、浜名郡雄踏村の地侍、糸家に匿れていた本物の徳川家康は、糸家の掛り人糸よしと仮の夫婦に

ふみ夫婦と、糸よし、松吉改め中条右近を前にして、威儀を正して一ヶ月余に及ぶ逃避生活のお礼を述べるのであった。

「藤兵衛殿、ふみ殿、お一人の親身も及ばぬ庇護のおかげで、明日、城に帰ることができます。いずれ改めて挨拶するが、ともかくにも、この通り礼を申す。ありがとう」

家康は、糸家の配慮がよほど嬉しかったのであろう、身分の壁を超えて深々と頭を下げた。

「いえいえお館さま、もつたいない」

「ふみ夫婦と糸よし、背を丸め、額を畳に付けんばかりに恐縮した。

すると家康は、今度はよしと右近の方に身体を向け、「武田の兵が、予を探して糸家に来たときは、なんと言ひ逃れようかと必死であった。絶体絶命とはあのことだ。本当に危なかった。あのとき、よしと右近が打合せしてあつた如くに、機転を利かせてくれた。おかげで予は、九死に一生を得た。感謝の言葉もない」

と言つて、頭を下げる。

母親の傍らに行儀よく座つていた右近は、いつもと違ひ、威厳と周りの人を温かく包み込む、包容力のある家

康に接して、尊敬と、ほのかな愛情を抱くようになつていたのである。

一方、家康は、鄙には稀な美しさと、しとやかさを備えたよしに対し、男の情感が高ぶつてくるのを抑えられなかつた。

「二人の間には、目には見えない感応が火花を散らし、一触即発の状態となつてゐた。一人のうちのどちらかが手を伸ばせば、そのまま愛のつぼと化したであらう。二人は、お互いの息遣いを痛いほど感じつつ、ほとばしる歓喜の欲情を抑えおさえていた。

息苦しい一瞬が過ぎた。

「夜更けに参つて申し訳ない。少し訊ねたいことがあつてな……」

と、小声で話出した。

「武田の兵が予を探しに来たときは、もう駄目かと思つた。が、その方のおかげで助かつた。改めて礼を申す。ところで明日は、いよいよ城に帰らねばならない。そこで不羨ながら訊ねる。そちは何歳か？」

「はい、二十二歳でございます」

よしは、家康の胸の内が判らないまま、正直に答えた。

家康と母親の顔を見ていた。
よしは、仮とは言え、家康と夫婦の形となつて、寝所こそ別であったが、一ヶ月余も同じ屋根の下で、生活をともにしたのである。よしでなくとも、自然に情が移るうというものである。

一方、家康は、六歳のときから人質として苦労を重ねていたので、普通の領主と違つて領民に対する思いやりが篤く、さらに人情の機微に触れる気配りがあった。

家康は、その日の夜四つ（午後十時）過ぎ、皆が寂静まつた頃、よしの寝所に足を忍ばせた。

廊下に人の気配を感じたよしは、夜具の中で、夜着の襟もとを搔き寄せ、からだを固くした。

しばらく部屋の中を窺つていた家康は、静かに障子を開け、遠慮がちに部屋の中に入ってきた。

身長五尺三寸（一六〇センチ）、体重十七貫（六五キロ）、やや小太りの家康の身体は、夜目に慣れたよしには、すぐ判つた。

「お館さま、こんなところにお越しになつては困ります」

よしは、からだを固くして、家康を拒むしぐさを見せたが、直ぐに畳の上に座り直して頭を下げる。

「よし……」

「おやかたさま……」

「……」

「……」

「うーむ、二十二歳とな。それでそちは、夫重蔵が亡くなつて、このさきどうするつもりか。予は、そちのこれから身の振り方が気になつて、それを聞きに参つたのだが……」

「よしは、さらに一步踏み込んだ質問をした。
家康には、若い未亡人であるよしの今後について、家康なりの考えがあるようであつた。

「……」

よしは、とつさに返事ができなかつた。
家康はさらに関口を開いて、

「よしは、かかるべき婿をとつて、糸家を盛り立てていくつもりか」

と、夫重蔵の死後、一年間もの間、よしの胸の深奥に閉じ込めてある女心について、問い合わせてきた。

家康の思ひかけない言葉に、よしは、一瞬ドキッとして、すぐには答えられなかつた。

よしは、しばらく顔を伏せていたが、

「いえ、そのようなことは、まったく考えておりません。糸家には、弟の新兵衛などがおりますので、家督を継ぐ人に困ることはずぎません」と言葉少なに答えた。

「さよか、重蔵の舍弟が糸家を継ぐのか。それではそなたは、これからどうするつもりかな」と家康は、さらに関口を開いた。

しばらくして、よしは重い口を開き、とぎれとぎれに、「これから申し上げることは、まだ勇さまにもお話してあります。しかし夫重蔵の五回忌の法事が済みましたならば、わたくしは、この右近を連れて実家に帰ろうかと考えております」

と、よしは意外なことを打ち明けた。

「なに！ 実家に戻ると。して、実家はどこであるか」

家康は、よしの言葉に大いに関心を持った。

「はい、実家は御前崎岬に近い、城東郡嶺田村（静岡県菊川市嶺田）というところでござります。小笠原さまのお城の高天神城から東へ一里（四キロ）ほどのところでございます」

よしは、嶺田村のある東の方角に目を向けて了。

「そうであつたか、小笠原長忠のところか。それで、嶺

田とやらは、豊な土地であろうな」

と家康は訊ねた。よしは、わずかに頭を振り、

「いいえ、かの地には大沼があつて、いろいろな鳥や小動物が、たくさん棲息しておりますが、嶺田村を始め周辺の村々には水がなく、農民は皆難儀しております」

そう言うと、老いたる両親を偲んで涙ぐんだ。

「なに、大沼があつても水がないと。なぜじや」

家康は、不可思議なこともあるものだと思つた。

「ハイ、日照りが続きますと、田圃の水は勿論のこと、日々の生活に必要な飲み水にいたるまで、すっかり水が

な水に流されて、村びとはいつも泣いております」

とよしは、子供の頃の悲惨な情景を思い出して、また涙を流すのであつた。

「そうであつたか。水が無くても困るが、多すぎても困る。治水治山はいつの世でも、どこでも欠くことのできない政治であるな。でも、井戸があるであろう。井戸水はどのようになつておるか？」

家康は、支配下にある土地の状況、特に水利は農耕に欠かせないので、大いに関心を持つたのである。

「それが……」
よしは、出生地の悲惨な生活を思い出して、言葉が

出なかつた。

「いかがした。まさか、井戸がないわけではなかろう」と家康は、よしが言いよどむのが、不審でならなかつた。

「はい、井戸はございます。しかし、あの土地の井戸水は飲めません。いくら深く井戸を掘りましても、どういう訳か、水はいつも茶色に濁つており、そのうえ苦みがござります。そのため飲料水にこと欠くのは勿論、洗濯なども入浴もできません。井戸水で沸かしたお風呂を使う手拭いは、ものの一日もすれば茶色に染まってしまいます」

家康は、よしの話を聞いて驚愕した。
「なに、井戸水が茶色だと。どうして井戸水が茶色なのか。井戸水が使えなくては、暮らしていかれないでは

なくなつてしまします。それで嶺田村や隣りの堂山村の農民は、水の確保に大変な苦労をしております」
そう答えると、よしは、飫家に嫁いで来るまでの十八年間の、水の苦労を思い出して、また涙がこぼれた。
「そうであつたか。でもかの地は、菊川という大きな川があるではないか」

家康は、高天神城の役人から、菊川のことを聞いていたので、どうして水が不足するのか解せなかつた。

「私は、詳しいことは解りませんが、菊川は、嶺田村から北へ四里（一六キロ）の、牧之原の北側にそびえる粟ヶ岳（標高五三三メートル）に源流を発しております。しかし山のふところが浅く、上流地域には、下流の村々を、潤すだけの水を蓄える力がないようでございます」

よしは、乏しい知識の中でそのように、答えるのであつた。

「それで嶺田村周辺は、年中水がないのか」と家康には、水不足が不思議でならなかつた。

「いいえ、梅雨時や、大雨が降つた時などは、山のふところが浅いため、水が一度に流れ、そのうえ土地が平坦で流れがゆるやかなため、菊川のほか、嶺田周辺の村々を流れる牛渕川などが氾濫して大洪水となります。そして土手を越えて流れ来る川の水で、家も田畠も水没します。その挙句、家も作物も、人も馬も牛も、み

ないか」と、矢継ぎ早に質問をした。
「はい、仰せのとおりでござります。井戸水が使えませんので、嶺田やその周辺の人たちは、雨水を水桶や甕に溜めて、それを少しずつ使っております。溜め水がなくなりますと、農民は菊川の上流二十町（約二キロメートル）ほどのところの奈良渕まで、桶を担いで水を汲みに行くのでござります。この水汲みは女衆の仕事でございますが、それは、それは大変にきつい仕事でござります。特に夏場の日照り繞きのときは、それは大変でござります。女衆は、暑さと過労で疲れ果て、一町（一〇〇メートル）担いでひと休み、また半町行つてはひと休みといった有様で、夏場の水汲みは、地獄の責苦のような苦行でござります。したがいましてこの地方では、奈良渕までの水汲みが、住民の大変な日課になつております」

よしは、さらに話を続けた。

「それだけではございません。雨期には洪水に泣かされますが、反対に、夏場の渴水期になりますと、飲み水のほか、田畠に通す水もなくなりますので、その水の確保がこれまた大変でございます。そのため毎年隣り村との間で、激しい水争いが起こり、血を流すことしばしばでござります。農民は、命がけで田畠に使う水を確保しておるのでございます」

「なるほど、水がなくては困るであろうな。そちは、この雄踏村にいれば苦労をしなくともよいものを、なぜそのように大変なところへ帰るのか」

と家康は訊ねた。すると、

「私には、実家に年老いた両親がおります。そして不幸にも、私の兄妹は、若くして亡くなり、今は、私のほかには両親の面倒を見る者がおりません。ですから、どうしても私が実家に帰つて、両親の世話をしなくてはならないのでござります」

遠く離れていても、親思いのよしは、年老いた両親のことが気にかかるなかつた。さらに、

「そして、右近が成り立ましたらば、父の後継者として、村の世話役を務めてもらいたいのです。右近が成人すれば、私は自由の身になりますので、そのときは、お館さまのおそばで使つていただきとうございます」

よしは、ここまで話すと、冷え切つたからだを、

(ぶるつ)

とふるわせた。その様子を察した家康は、

「さようであつたか。あい分かつた。いつでもそちの都合のよいときに、城にきてくれ。決して悪いようにはせぬ。それが予のそちたちへの恩返しである。夜分に邪魔したな」

と言つて、想いを残しつつ、静かに立ち上がつた。

そのとき、よしの隣に寝ていた右近が、大きく寝返り

次に家康は、よしと右近の方を向いて、

「よしと右近は、持ち前の機転で、武田の兵から予を救つてくれた。ありがとうございます。右近よ、成人した暁には、必ず城へ参れよ」

そう言うと、二人の方へ歩み寄つた。

「もつたいないお言葉、ありがとうございます。お館さまのご武運をお祈りしております」

よしは、顔をやや上気させ、名残惜しげに家康を見つめた。

「よしと右近よ、僅かな期間であつたが、仮の夫婦、仮の父子の生活も楽しかつたぞ。右近よ、いま一度『ととさま』と呼んでくれぬか?」

そう言って家康は、右近の前に片膝をつき、満面に笑みを湛えて両手を差し伸べた。

すると右近は、小さなからだを小躍りさせて、「ととさま、ととさま」と家康が伸ばした両手に飛びついた。

「おお、右近よ。母者の言うことをよく聞いて、しっかりと学び、立派に成人するのだぞ。よいな!」

そう言うと家康は、右近を両手に抱き抱えて、高々と差し上げ、

「右近よ、浜松城はあちらの方角だ、忘れるな!」

と言つて、東方へ身体を向けた。

右近は、高く差し上げられて怖がるかと思ひきや、

した。それを見た家康は、

「右近よ、立派な男になれよ」

そう言つて、わずかな灯りに照らされた右近の寝顔をじっと見て、よしの寝所を出て行つた。

家康が立ち去ると、よしは、張り詰めていた緊張の糸が切れ、傍らの布団に、寝息を立てて眠つてゐるわが子右近を、思わず抱きしめた。

その翌朝、浜松城への帰り度の整つた家康は、駿藤

一月二十二日の三方ヶ原の戦いに敗れ、死を覚悟した崖の仮陣屋から、ただ一人逃れて一ヶ月余の間、ここ

駿家に置われることについて、篤く謝意を表した。

「藤兵衛殿、ふみ殿、大変お世話に相成つた。お蔭で城に戻ることができる。この恩は、家康生涯忘れはしない」

そう言うと、家康は、二人に深々と頭を下げた。

藤兵衛とふみは、昨夜につづき、今朝も家康から、身にあまる言葉をかけられて、

「何をおっしゃいます。そのようにもつたないお言葉をいただいて、うれしゆう存じます。わたしどもは、当然なすべき務めを果たしたまでのことで、お館さまからお礼を申されでは、恐縮いたします」

と感激するばかりであつた。

「キヤツキヤ」と言つて喜んだ。

「おおお! 可愛い子じや!」

熟慮慎重型の家康も、この時ばかりは珍しく感情を露わにして、相好を崩した。驚いたよしは、

「まあ、この子は!」

と言つたまま絶句し、涙を懸命にこらえた。

家康は、右近を抱き下ろすと、妄念を振り払うがごとく、一度、三度両手のこぶしを強く振り、愛馬「疾風」の手綱を執ると、ひらりと跨つた。

そう言うと、馬首を浜松城に向け、よしへの想いを断ち切るかのように、愛馬「疾風」に、ピッシリ!と、むちを当て、迎えの家臣と共に去つて行った。

やがて家康の姿が視界から消えると、よしの眸から、これらにこらえていた惜別の涙が、どつとあふれた。

家康が浜松城に帰つてから、半年経つた七月末、よしは、夫重蔵の五十四忌の法要を済ませ、舅と姑に何度も礼を述べた後、「子中条右近を連れて、遠州御前崎岬に近い、城東郡嶺田村(静岡県菊川市嶺田)の実家へ帰つたのである。つづく

誠忠の茶園（三）

太田精一

五、江戸城明渡し

（二）精銳隊と彰義隊

上野東叡山大慈院に引きこもつた慶喜は、月代さかやきも剃らず、髪も伸ばしたまま、木綿の羽織、袴を着てじつと庭を眺めていた。

家康公以来、二百六十五年も続いた徳川の時代が音を立てて崩れていく。その渦中にあることすら忘れさせるほどの静けさである。

四十雀が、高い声を上げ飛び去つた。止まつていた枝には、蕾が膨らみ、若芽が顔を出し始めている。慶応四年三月、春の夕日が薄く庭を照らしていた。

（予が、何故朝敵の汚名を着なければならないのか）

慶喜は、朝敵とされてしまつた自分の政治力のなさを責めた。同時に、薩長のやり方に憤りを感じた。

だが、今幕府軍を率いて薩長と戦うことは、日本全体を戦乱に巻き込むことになる。それこそが歐米列強の思

う壺である。それだけは、避けたかった。

（有力大名による合議政体が実現したとしても、今となつては、徳川家がその主導権を取り戻すことは困難である。陋習、門閥、官僚機構がシロアリのように巢食い幕府の屋台骨を腐らせてしまつた。それに、外から開国という大波が押し寄せ、日本全体を呑みこみ、支配されかねない。その大波に呑みこまれないためには、天皇の名のもとに力を結集して、新しい政治体制を築くことが必要である）

慶喜は、そう考えた。

だが、それだけではない。政治の裏に渦巻く権力闘争の醜さにも嫌気がさしていたのだ。今はただ、徳川家の存続を願うのみであった。一命にかえてもそれだけは守りたかった。

（ひたすら恭順するしかない）

慶喜は、目を閉じた。すると、迫り来る東征軍の足音

が、聞こえるような気がした。
老中の板倉伊賀守、小笠原豈岐守は、すでにいない。松平肥後守は江戸を出て会津若松に帰っている。庄内の酒井忠篤も帰藩した。幕閣を構成し、権勢を誇つた大名は、一人も周りにいなくなつた。

大慈院の外には、中條景昭、山岡鉄太郎（鉄舟）、大草高重、関口隆吉、松岡萬などの精銳隊士五十人と高橋精一（泥舟）率いる遊撃隊百人が警護している。

高橋泥舟は、夕日を浴びた木立を眺めている慶喜に声をかけた。

「浅草東別院に上野の上様をお護りするといつて集まつた者どもが、彰義隊と名乗り氣勢を上げているそうです。その連中が、暴挙に出ると厄介なことになりかねません」「予の警護であれば、精銳隊と遊撃隊で十分である。あまり多くの人数が集まると恭順の真意が伝わらなくなる。まさか幕府の復活を願つてているのではあるまいな」

「漏れ聞くところによりますれば、もと一橋の家臣で、渋沢成一郎という者が頭取として彰義隊をあやつっているようです。それに上州甘樂郡岩戸村の名主の次男坊天野八郎という者が副頭取として隊を取り纏めているようです」

「どれくらいの人数が集まつているのだ」

「かれこれ六、七十人と聞いています。幕臣は、まだそれほど多くはありません。しかし、薩長のやり方に不満

を持つ者が集まつて来ているようで、このままで上様を担いでこの上野に立てこもり、薩長と一戦を交えるなどと不届きな考えを起こす者も現れかねません。そうならないうちにここを引き払い、どこか安全なところにお移りになつたほうが得策と心得ます」

泥舟は、慶喜が、武力闘争の渦中に巻き込まれることを怖れた。

京では、有栖川宮熾仁親王を東征大総督とする征討軍が設けられた。慶喜を逆賊として討ち、徳川家を滅亡させなければ、新政府の基盤は、いつ徳川家によつて覆されるか分からぬとの懸念が、渦巻いていたのである。

その頃、勝安房守（海舟）は、慶喜の信任を得て、陸・海両軍の軍事一切を取扱う徳川家の軍事総裁となつていた。

勝は、幕臣の中では、最も内外の情勢を見通すことのできる人物である。

（幕府は、制度疲労を起こし、もはや幕制の改革だけでは、どうしようもないところまで来ている。西欧列強の力に対抗するには、強力な政府に導かれた近代的な国力を結成する以外にない。そのためには、内戦による国力の消耗を避け、新しい政治組織のもとに、日本を造り直すことが必要である）

勝は、その考え方をことごとく慶喜に伝えていたのである。

慶喜は、薩長から朝敵の汚名を着せられても、じつと耐えていた。誇りを捨て、恭順を守り通し、内戦の口実を与えないようにして来たのである。その忍耐力と朝廷に対する尊崇の念は、水戸徳川家の血脉を引く慶喜の中に生き続けていた。

勝は、江戸を戦火に巻き込まないために、主戦論を唱える危険分子を江戸から体よく追い払うことを考えた。

新撰組もその対象とされた。鳥羽伏見の戦いから帰つて来た新撰組の近藤、土方が、東征軍を迎撃つために結成した甲陽鎮撫隊に、武器及び資金援助と大名取立ての約束をして、甲府に追いやっている。

新撰組が甲州勝沼に到着した時には、すでに乾退助（板垣退助）率いる三千の兵が甲府城に入っていた。鎮撫隊は、散々打ちのめされ、隊は、ばらばらとなり、命からがら江戸に逃げ帰つて来た。しかし、江戸では、敗残の鎮撫隊を受け入れるところはない。近藤、土方などの幹部は、やむなく江戸を出て佐幕派藩主水野日向守を頼り下総を目指した。

彰義隊は、天野八郎が渋沢成一郎を追い落とした頃から、旗本の一、三男坊たちが隊に加わり、徳川家も資金援助をするようになった。それによつて、家格の高い幕臣が頭に据わつた。天野八郎は、頭並となり、その下についた。さらに、組頭格の会計掛、器械掛、本當詰、天

は冷たい風が吹いていた。江戸城総攻撃も近い。

「安房守よ。そちは西郷と親しい。駿府まで出向いて西郷と会い、予の恭順の誠を伝えてもらいたい。徳川家としては、朝廷に逆らう気は毛頭ない。何とか戦にならずに収めたいのだ。だが、そちが行つては、江戸が留守になり、城に残つてゐる抗戦派を抑え切ることができない。誰かそちの代わりに信頼できる人物はいないか」

「はあ、精銳隊の中でお側に仕えている高橋伊勢守（泥舟）がよろしいかと思ひます。あの者ならば冷静、沈着かつ腹も座つています」

「しかし、伊勢は予の側近としてつねに側にいて貢わねばならぬ」

「しかばば、伊勢守と相談してみましよう。その上で決めたいと存じます。後のこととは、この勝にお任せください」

「相分かつた。その方に任せる。江戸総攻撃は徳川家だけの問題ではない。江戸の町民を薩長との争いの中に巻き込みたくないのじや」

慶喜は、江戸城総攻撃が、幕臣たちの薩長への反感を強め、ひいては朝廷にまで怨嗟の声が広がるのを恐れた。これから日本国を一つにまとめて行くためには、朝廷の権威にすがるしかないと考えていたのである。

勝は、すぐに高橋泥舟に相談した。

泥舟は、何のためらいもなく義弟の山岡鉄舟の名をあ

王寺詰、真如院詰などの幹部職制を敷いて、組織の充実が図られた。その頃には上野に本拠を移している。

また、この彰義隊の指揮下に砲兵隊、純忠隊、臥龍隊、旭隊、松石隊、浩氣隊、水心隊、などが附属機関として置かれた。俸給も幕府から支給されることになり、隊員も一二〇〇人を超すまでに至つた。だが、幕府の正規軍ではなく、強力な指揮官もいなかつた。

一方、中條景昭、大草高重、関口隆吉などの率いる精銳隊は、彰義隊が「錦切り取り」と称し征討軍兵士を襲うことを防ぐため、夜中見回りを強化し、江戸の治安維持を図つてゐる。

慶喜の護衛をするだけではなく、江戸の治安維持から、慶喜の助命嘆願活動まで積極的な働きを見せた。なかでも精銳隊幹部の関口隆吉は、輪王寺宮におすがりして、朝廷から慶喜の命と名誉を保障するお墨付きを戴くよう画策している。

(二) 江戸城総攻撃回避

慶喜の恭順の誠は、東征軍にはなかなか届かなかつた。

最後の手段として、駿府まで攻め上つて来た西郷隆盛のもとに特使を派遣することになつた。

慶喜は三月五日、勝を呼んだ。

大慈院の周りの桜も綻びかけてゐる。不忍池の水もぬるみ、水鳥が活発に動き始めた。だが、慶喜の心中に

「解つた。では、その者にしよう。駿府に行く前に、わしが西郷さん宛に書状を認めるので、拙宅に取りに来るよう申し付け願いたい」

その後、鉄舟は、慶喜から直接内命を受け、その足で勝の屋敷を訪問した。

「よう来なさつた。これがわしからの西郷さんへの書状じゃ。ところで、征討軍の中を通り抜けて行くわけだから西郷さんに辿りつけるかどうか分からん。西郷さんをよく知つた益満休之助を連れて行くが良い。あの男は、江戸の薩摩屋敷にて、江戸の町の治安を乱したので、牢屋に入れておいたのを赦免したばかりだ」

「そうします。益満さんなら拙者も知つていています。西郷さんとも親しいと聞いていますので便宜を計らつてくれるでしよう。では行つてまいります」

「何分頼んだよ。徳川家の存亡が掛かつてゐるからね。西郷さえ引張り出せば、後はわしが何とかする」

勝は、鉄舟の眼差しに並々ならぬものを見た。彼ならば、慶喜の真意を伝えてくれるものと確信した。

この時、勝海舟は四十六歳、山岡鉄舟は三十三歳であつた。

勝の書状には、徳川家が恭順を守っているのは、単に徳川家のためだけの問題ではない。それ以上に日本の現状が心配だからである。日本人同士が兄弟喧嘩をしている時ではない。外国の侮りを受けないために、一致団結して国難に当らなければならぬ。それでも、貴方が江戸を攻撃するというのであれば、こちらも覺悟がある。江戸の町を焼き払つても戦い抜く、というものであつた。益満は、途中箱根で倒れ、清水次郎長一家が代わつて駿府まで鉄舟を送り届けたともいわれている。

三月九日、山岡鉄舟は、駿府に到着、料亭松崎屋で西郷と会つた。鉄舟は至誠の涙を流し徳川家の立場を訴えた。

「西郷さん。もしお手前が拙者ども幕臣の立場であれば、どのようににされるのでござらうか。主家を救うためとあれば、たとえ朝敵の汚名を被らうとも、あらゆる犠牲を払つて東征軍と一戦を交えなければならない。勝さんもそう申しておりました。江戸城総攻撃を取りやめていただけのならば、城を明け渡すことをお約束いたします」

「分かり申した。じゃつどん、おいどん一人で決めるわけにはでき申さん。大総督宮のご意見を伺い、次第によつては、帝のご聖断を仰ぐことになるかも知れ申さん。そつなると十日や十五日かかるとみていただきとうごわ

す」

西郷は、三月十五日に予定していた江戸城総攻撃をひとまず延期し、京に飛んだ。二条城では、三条実美、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允、廣沢真臣、後藤象二郎と西郷隆盛が大激論の末、慶喜は、死一等を減じられ、水戸で謹慎と決まつた。慶喜の助命については、木戸が西郷とともに岩倉や大久保を説得したという。

勝は、鉄舟からの報告を二月十日に受けた。幕府は、江戸町民に、東征軍との話し合いがついたので安心するようとの高札を出している。

東征軍の本營は、三月十二日池上本門寺に入った。

勝は、万一東征軍との話し合いが、決裂した場合は、下町に住む火消し、侠客、川岸の連中を動員し、江戸の町を焼き払い、東征軍の駐留を困難にするという作戦を立てていたのである。

三月十三日、高輪南町の薩摩屋敷、同十四日、芝田町の薩摩屋敷で、勝は、江戸城総攻撃中止についての西郷との会談を行つた。二人は、肝胆相照らし、多言を要することなく終わつた。

城明渡しの条件については、数回のやり取りがあつた。当初、慶喜の蟄居先は、備前岡山池田御預りとの申し渡しであつた。だが、勝の強い要請により、水戸に謹慎と変更されている。

会談に先立ち、勝は、横浜の英國公使館を訪れ、パ

クス公使に、慶喜の助命と徳川家の処遇について、新政府が寛大な处置をとるよう口添えを頼んだ。そのことも新政府の態度を軟化させる結果となつたのである。

勝が、無事会談を終え、江戸城総攻撃はなくなつたとの噂が広まり、町民が安堵の胸を撫で下ろした翌日、元外國奉行の川路聖謨が自害した。

砲火を交えることなく江戸城明渡しが決まつたことを見届け、徳川幕府の崩壊の端緒となつた開国を断行した責任を取つたのであらう。

新緑に覆われ、初夏の装いを始めた四月十一日、江戸城の明渡しが行われた。徳川宗家の跡取りとなつた田安中納言徳川家達が出迎え、東海道先鋒總督が入城した。上段に先鋒總督の大将橋本実梁これに西郷隆盛、海江田信義などが居並んで、下段に家達、大久保一翁らが控え、受け渡しが行われた。幕臣たちは、悲憤の涙をこらえ、城内の武具、家財を整え、征討軍に引き渡した。

(三) 慶喜上野から水戸へ
城明渡しの当日、四月十一日の朝、慶喜は、江戸を去り水戸に向かつた。

頬はこけ、顎には、無精髭が伸びている。

中條景昭、大草高重の精銳隊二百十六人、高橋精一の率いる遊撃隊百七十二人が警護に当つた。谷中から千住に向かう途中、多くの江戸町民が、土下座して見送つた。

高重は、提灯を左手にかざした。
月代が伸び、汚れた着物をまとつた浪人風の男が、光の中に浮んでいる。
「慶喜公のご一行とお見受けした。拙者新撰組の生き残りである。警護の一人に加えていただきたい」
「残念ながら引き受けするわけには参らん。新撰組のお方が、この一行に加わつているということが明るみに出来ば、慶喜公の恭順の真意が、朝廷側に伝わらない怖れが生じよう。誠に相すまぬが、堪えて、この場を立去つていただきたい。あえて貴殿の姓名は聞き申さず」
新撰組の生き残りと名乗るその男は、高重の気迫に押され、説得に応じた。その悄然とした背中には、敗殘の影が漂つていた。

藤代、土浦、片倉を経て十五日には水戸の弘道館に着いた。精銳隊、遊撃隊が、手分けして弘道館周辺の警護

に当つてはいる。四月二十一日には、大総督戦仁親王が江戸に入城したとの報せがもたらされた。

中條景昭は、大きな体から、高橋泥舟に声をかけた。泥舟は、黒い筒袖に白い陣羽織を羽織つて篝火の脇に悄然と座つてゐる。肩が落ち淋しげであつた。

水戸に着いてから、慶喜の御用取次ぎは、気配りの細やかな平岡丹羽に代わつたのだ。誠実で一本気な泥舟は、疎まれるようになつてゐるのである。

「中條さん、大草さん。上様に対するそれがしの役割は、もはや終わつたような気がする。警護には、精銳隊の面々がおられるし、上様の謹慎が解けたら江戸に戻ろうと思つてはいる」

「高橋さん。それは今しばらく思い止まつていただきたい。ご貴殿がいればこそ、彰義隊や主戦派の連中から慶喜公をお守りすることができたのです。大草殿もそう思つてはおりませんか」

「中條さんの言われる通りです。今となつては、攘夷は、もはや時代にそぐわなくなつてしまつましたが、慶喜様をお守りして、徳川家の存続を見届けるまでは、高橋さんは、お側にいてもらわなければなりません」

水戸にも初夏の風が吹き、卯の花が咲き始めた。新撰組の近藤勇が、板橋庚申塚で首を切られたとの報せが入つた。慶喜が水戸に到着してしばらく後の四月二十五日のことである。

「首は、塩漬けにされ、京の三条河原に晒された。近藤の娘瓊子の許婚男五郎が、処刑を見守つた。勇五郎は、勇の父や兄にすぐ知らせ、駕籠かきを雇い、首のない遺体を菩提寺の龍源寺に埋めた」との風聞が伝わつてきた。高重は、毎日のように、慶喜に召し出された。これといって特別な用向きがあるわけではない。そうした日常の話題の中に、高重の改名のことが出た。

子孫の大草省吾氏と郷土史研究家塚本昭一氏の共著による「牧之原と最後の幕臣、大草高重」は、その時のいきさつを次のようによんで表している。

「貴公の名は、他喜次郎と申すが、太平の世であればしかりと存ずる。が、この後の日本はどう變るか解らぬ。予は、世捨て人なれども、貴公は、これから世に出る男と見る。他人が喜ぶこと以上に自ら足を地に着け、太く立ち上る相がはつきり見える。依つて『太起次郎』と書き名を変えることをすすめるが如何か？」

「他喜次郎は、親から授かったものにて、大切に修めて参りましたが、今は徳川家に一身を持って捧げる者にて、上様からの仰せは諱名に通ずるもの・・有難くお受けし、これより太起次郎としてご奉公いたしく存じます」こうして、大草他喜次郎は、名を大草太起次郎と書き改めることになつたとある。

この時、陪席していた高橋泥舟が、記念に一筆認め、

高重に与えるよう慶喜に懇請した。そこで慶喜は、一首の歌を詠み、高重に与えた。その歌は、今でも大草家に、大切に保存されている。

六、救国の恭順

(一) 彰義隊壊滅と戊辰戦争

大総督戦仁親王の江戸入城以来、東征軍の横暴が目に付き、江戸の町民からも反感を買つた。治安も悪化して來た。

彰義隊は、勢いを増し、佐幕派の武士たちが続々と上野の山に集まつてゐる。

旧幕臣や脱藩浪人で結成された純忠隊、遊撃隊、歩兵隊、神木隊などが合流し、三千人にも達したのである。

それを見て、事態を憂慮した東征軍作戦參謀の大村益次郎は、彰義隊に総攻撃を仕掛けた。黒門口を鹿児島、熊本、鳥取藩に、背後の谷中方面には、長州、佐賀、久留米、大村などの諸藩を配置し、本郷の台地には、福岡、岡山、佐賀藩が大砲を据えて上野を取り囲んだ。

彰義隊は、山の周囲に木柵を設け、保塁を築いた。

五月十五日早朝、征討軍の攻撃が始まつた。降りしきる雨の中で、白兵戦が展開された。

だが、戦局を決定付けたのは、本郷台地から打ち込まれる無数の砲弾であった。彰義隊の陣地に炸裂して壊滅的な打撃をあたえたのである。

江戸無血開城を行い、彰義隊の鎮圧を果たした東征大総督府は、これまでの東海、東山、北陸三道の先鋒総督兼鎮撫使を廃止し、会津、庄内の二藩討伐のため、新たに白河口、平潟口、越後口の三総督を任命した。

まず、主力をもつて北陸を衝き、残りの軍が、白河口に進撃して会津諸道を封鎖する。その一部を裂いて平潟方面に進出し、浜街道の諸藩を帰順させるというものである。

これに先立つ慶応四年（一八六八）五月二日、仙台、米沢、庄内藩が中心となつて奥羽列藩同盟が形成された。その翌日には、越後長岡藩など北越諸藩が加わり、奥羽越列藩同盟に拡大している。

東北諸藩は、恭順をし、謹慎中の会津藩主松平容保の征討令を総督府が下すことは、公明正大の措置ではないとして、建白書を太政官に提出した。が、取り上げられなかつた。

奥羽越列藩同盟に加盟した東北諸藩には、外様大名が多かつた。仙台伊達家、米沢上杉家を始め、徳川家に忠誠を誓うほどの恩義はない。同盟を結成した最大の理由は、薩長に対する不信の念であつた。

新政府への反対勢力の一掃を狙つて隣邦会津、庄内を悪者に仕立てたやり方に対する憤懣が、同盟の結成を促進したのである。

高重は、奥羽越列藩同盟の動きが心配でならなかつた。同盟に参加する水戸藩士が後を立たず、慶喜を担ぎ出して、同盟の盟主とする動きが察知されるからである。それだけは、何としても避けねばならなかつた。

越後長岡藩は、当初奥羽越列藩同盟に参加する意志は

なかつた。家老の河合繼之助は、新政府側にも奥羽越列藩同盟側にもつかず、中立を保ちながら時勢を見極めようとした。しかし、その願いは、東征軍には届かなかつた。そのため、やむなく立ち上り、すでに東征軍と干戈を交えている。会津攻略も近い。

高重は、江戸に出て、五月一八日、鉄舟と面談した。彰義隊は、すでに壊滅していたが、生き残りの隊士は、町のあちこちに潜んでいる。

高重は、慶喜の身柄が拘束される怖れのあることを鉄舟に話した。

「山岡さん。慶喜公が、このまま水戸にいると奥羽越列藩同盟に拘束されることになりかねません。勝さんに頼んで駿府あたりにお移りいただけよう取り計らい願えないだろうか」

「そうですか。それは、憂慮すべきことですね。早速、勝さんに相談してみましよう」

翌日、二人は、勝の屋敷を訪れた。

勝は、関口隆吉に、西郷、大久保に実情を訴え、慶喜の赦免と身柄の駿府移転を要請するよう頼んだ。

関口は、すぐに小松帶刀のもとに走つた。帶刀は、大久保利通に有栖川宮大綱督に伺いを立てるよう手紙を書いた。

関口は、その手紙を大久保に手渡した。

「大久保さん。折角、慶喜公の恭順が本物であると国

内外にも知れ渡つて來た。これで日本も大きな戦はない」と、諸外国も踏んでいる。政の具に利用されることは困るのです。慶喜公を水戸から駿府に移し、そこでしばらくじつとしていただくことが、新政府にとつても大いに助かることになると思います」

「分かりました。このことは、有栖川宮大綱督や西郷さんにも図り善処します」

大久保は、早速有栖川宮に上申し、許可を得た。

奥羽越列藩同盟に立ち向かわなければならない新政府は、慶喜の水戸での存在も気になるところであつた。

勝は、水戸在住の精銳隊の半数を江戸に戻るよう命じた。

高重は、水戸に帰る途中、久し振りで家族のもとに立ち寄つた。高重の留守宅には、父高克、長男高政、妻うらがいた。高重には當時もう一人和田家に継嗣として出した次男勝重がいる。三男の金十郎が生まれたがこの時にはすでに早逝していた。後に、牧之原入植後は、さらに四男、二女に恵まれ、大草家は大家族となつて連綿と続いている。

(二) 水戸から駿府へ

慶喜の駿府への移転が決まった。

水戸で慶喜警護に当つていた精銳隊二百人のうち百人が残り、後の半数は遊撃隊の三百人と共に江戸に帰ることになつた。

警護のために残つた精銳隊士も慶喜に従つて船で駿府に行く者と、慶喜とは別に陸路駿府に向かうものとに分けられた。慶喜の信頼が厚く、腕利きの厳選された者が、船で随行することになった。

勝は、山岡鉄舟を交え江戸に来た高重と慶喜の駿府移転について話し合つた。その結果、高重は、急ぎ水戸に帰り、慶喜を護衛して海路駿府に移動する。鉄舟は、慶喜の受け入れ体制を固めるため駿府に赴き、大久保一翁と協議する。勝は、江戸に残つて、新政府との調整を図り、旧幕臣の身の振り方を考えるということになつた。

高重は、水戸に着くとすぐ精銳隊、遊撃隊の幹部に江戸での会談の模様を伝えた。その時、鉄舟から書状が届き、駿府の久能山東照宮が、新政府の手にゆだねられる怖れがあると書き送つて來た。

東照宮には、神祖家康公が祀られている。何としても新政府軍から守らねばならない。

精銳隊頭の中條景昭は、全員駿府に赴き、久能山を守ることを命じた。

慶喜は、北越、会津での戦争が続いている限り、水戸においては、恭順の誠を貫くことは困難であると判断し、駿府移転に同意した。

慶応四年七月十九日夕刻、慶喜は、水戸を出発した。景昭と高重は、松岡萬^{つむる}と共に厳選された精銳隊員を率いて警護に当つた。

下町から小船で那珂湊に着き、祝町から徒歩で鉢田に出て、再び舟に乗り、鎌子に到着した。

鎌子沖には、榎本武揚が回航させていた旧幕府軍艦「蟠竜」が停泊している。それに乗り清水湊へと向かった。海上三日の船旅である。

高重は、甲板に立ち、物思いに耽っている慶喜の姿をしばしば見かけた。その沈鬱な表情は、何人も近づきがたいものがあった。

清水湊に着いた慶喜は、精銳隊に護られて松並木の街道を進み、宝台院へと向かつた。とっぷりと日が暮れ、灯明が闇の中に光っている。精銳隊の他には、お供は、医師、御膳所の者を含めて十人ほどしかいない。

宝台院は、徳川家康の開基で、二代將軍秀忠の生母西郷局昌子ゆかりの寺である。もともと竜台寺と称す寺であつた。

寛永五年（一六二八）七月、西郷局へ朝廷から正一位追贈がなされた。その時贈られた「宝台院殿一品大夫人松誉貞樹大禄尼」の法号宝台院をとつて、三代將軍家光が竜台寺を宝台院と改めたのである。

寺領三百石、格式の高い寺である。

宝台院には、中條景昭、大草高重など精銳隊士が慶喜の身辺警護に当つた。

慶喜は、精銳隊全員が、宝台院の周りで警護に当るのを、恭順中の身にはかえつて目立ち過ぎるとして、人数

も五百人余の犠牲者を出して奥羽での戦いは終わつた。

しかし、それだけではまだ済まなかつた。戦いは北海道へと持ち越され、榎本武揚率いる榎本軍との函館五稜郭戦争が翌年の明治二年四月に始まつた。

この函館戦争も明治二年（一八六九）五月十八日、両軍合戦で千人余りの戦死者を出し、榎本軍が降伏して終結した。

一年半に及ぶ明治戊辰戦争は、これをもつてすべて終結し、薩長を中心とした新政権が、権力を掌握した。

（三）困窮する幕臣たち

景昭と高重は、高橋泥舟、山岡鉄舟と相談し、精銳隊を「東照大權現の守護」を目的とする集団に切換えた。

そこで、久能山の山麓の近くにある石藏寺、照久寺、大王寺、本覚寺などのほか三保神社や名主、豪農の納屋などを借り、隊士を住まわせることにした。その時、精銳隊という名称は、新政府軍を刺激することになるとなると考え、明治と改元された九月八日、東照宮守護を目的とした新しい組織であるという意味を込め、「新番組」と名付けた。

慶喜たちが駿府に入つた時には、すでに新政府軍は駿府を引払つていて、壊される怖れはなくなつていた。そのため、実際には東照宮守護は、もはや名目だけに過ぎなくなつていたのである。

を減らすよう景昭と高重に言つた。

駿府には、無様移住の旗本たちが、続々と集まつて來た。まず住むところの確保をしなければならない。ところが、駿府は、江戸に比べて町の規模が小さい。近隣の農家や町屋を借り受け居住する者も少なくなかつた。その頃の駿府の民家は四千戸。とても収容しきれるものではない。夜具も不足した。近郷近在から借り受け居住する者も少なくなつた。何とか凌ぐ有様であつた。物価も高騰した。

清水湊では、鉄舟と親交の深い清水次郎長の子分たちが近くの民家や寺院を借り受け、続々と舟で到着する旧幕臣たちの宿泊所の確保に尽力している。

北越の地を朱に染めた凄惨な戦いは、八月半ば過ぎまで続いた。長岡藩の兵力は少なく他藩からの応援の方が多い。加えて、「衝鋒隊」のように上野戦争に参加し、敗れた部隊も、この北越戦争に参戦している。後に牧之原の開拓に大きな足跡を残した今井信郎も「衝鋒隊」のリーダーの一人として参戦した。

慶応四年七月二十九日東征軍千人余、長岡軍千二百人の戦死者を出して北越戦争は終結した。

さらに、明治元年（慶応四年九月八日に明治と改元された）九月二十一日会津藩、二十三日庄内藩、二十五日盛岡藩が相次いで降伏した。東征軍と戦つた会津、庄内、盛岡の藩兵及び応援部隊合わせて三千人が戦死。東征軍

高重は、景昭と共に照久寺を宿舎とした。この寺は、久能山城の守将榎原清政の一子照久を祀つてゐる。晩年の家康は、照久を側近として重用したという。

新番組の隊士は、宿舎が定まつたので、いよいよ家族を江戸から呼び寄せることになつた。

慶応四年八月、徳川宗家を継いだ家達は、駿府に向けて江戸を発つた。行列は、御側用人、御小姓、御小姓衆奥詰目付、御徒目付、合わせて総勢百人足らずであつた。かつて駿府奉行を務めたこともある大久保一翁が、八月十五日江戻で出迎えた。家達の入城に当つて受け入れの準備をするため先着していたのである。

駿府入りした行列は、まず宝台院を訪ねた。謹慎中の慶喜に挨拶し、西郷局の御靈屋に参詣した。

数えで六歳になつたばかりの家達は、まだ子供で、駿府七十万石を支える力はない。

「何分にもよろしく頼む。徳川家も予の代で潰さなくて良かった。これから世の中が大きく変る。そちや勝などが亀之助（家達）を盛り立てて、家臣の暮らしの立つようしてくれ」

慶喜は、徳川家の命運を大久保一翁や勝海舟に託したのだ。

「承知いたしました。この一翁一命をもつて徳川家をお守りいたします」

大久保は、慶喜の心中に去来する複雑な思いを察し、

顔を上げることができない。陪席していた高重も平伏してしまじつと嗚咽をこらえていた。

家達が宝台院を出て駿府城に入つたのは、正午過ぎであつた。城は緑に包まれ、ひつそりとしている。木々の葉を揺らす風に秋の気配を感じられた。

勝海舟は、この頃、新政府軍の連絡方として江戸に残つていた。七月十七日に江戸は、東京と改められ、天皇の御所が、京都から江戸に移つた。九月八日には、慶応から明治へと改元されている。

勝が残務整理を終つて、駿府に移つたのは十月の末である。高橋泥舟も家達の用人として十二月初めに駿府に到着、いざれも山岡鉄舟が出迎えた。

温暖な駿府にも冷たい風が吹く季節となつていた。

高重は、毎夜、頭取の景昭と会合を重ねている。同志の宿舎割当は済んだが、江戸から呼び寄せた家族の生活のことなど早急に解決すべき問題を抱えていたのだ。

この頃までに、旧幕臣の多くが江戸から駿府に移り住んでいる。駿府は徳川の家臣たちで溢れていた。家族、使用人を含め、一度に四万人の人が増えたことになる。だが、徳川家からの禄はもはや期待できない。

景昭と高重は、慶喜公の警護に当つた精銳隊士だけでも身の立つようにしたかった。精銳隊が慶喜警護の役割を担つてゐるうちは、俸禄にもありつけた。

だが、東照宮を護る組織に変り、新番組となつてからは、駿府藩から支給される「一時救済の制」による扶持米に頼るよりほかはなかつた。この制度では、かつて千石以上の旗本は四人扶持、五百石以上三人扶持、百石以上二人半扶持、二十石以上一人扶持、それ以下は一人半扶持である。一人扶持とは、一日玄米五合の基準で計算されている。

翌、明治二年からは、その倍額が支給されることになつたが、最低限の生活を維持することさえ困難な状況であつた。

「中條さん。隊士の中には、三日も四日も食い物がなく水ばかり飲んでいるという家族が出る始末です」

高重の話に景昭は、耳を傾けながら言つた。

「確かに困窮している。江戸にいた頃は、お互に一つの物を分けあい、助け合つて生きてきた。ところが、最近では、隙があれば人の物でも掠め取つて食おうという輩が増えている。新番組には、そこまで落ちぶれた者はいないがこのままでは、そうなる懼れがある」

二人は、旗本としての誇りを捨てず生き抜く方策を模索し始めた。

(つづく)

天智・天武両帝に愛された額田王（三）

島津隆子

ぬかたのおおきみ

大友皇子方の苦戦

大友皇子方つまり近江朝廷方の内部は最初からガタガタであった。大海人の“快速”ともいえる軽快なフットワークに比べ、近江朝廷側の腰は重く、總てに鈍重さが目立つばかりで、何一つ有効打が打てないでいた。それは生前天智天皇が心痛されたように、大海人と大友の器量が段違いであつたことにも起因する。

二十四日の午後、大海人の吉野脱出が近江の宮中に伝わると、皆非常な動搖をきたし、慌てふためいて逃亡する者まで現れたことが『日本書紀』に記されているほどだ。

さつそく大友を中心に作戦会議を開いたのはよいが、その席上、

「吉野から逃れてゆく大海人を、多数の馬をもつて追撃すべし」

とする廷臣の提言は却下され、朝廷側にとつて唯一最善の好機を失つてしまつた。もし、この時、廷臣の言うとおり馬で急進撃していたら、大和・伊賀の境か、遅くとも伊賀の北端では、手勢わずかな大海人の一行に追いつき、全滅させるのも可能だつたはずである。

それが作戦会議の結果は、諸国に使者を派遣して兵力を集め、大兵力になつたところで攻撃を開始するといふ、坊ちゃん氣質丸出しの大友と、機動性に欠ける頭の旧い重臣たちの描いた作戦計画であった。

例えは悪いが、今火事場泥棒が逃げてゆくのを見ながら、警察署まで歩いて行つて応援を求めるようなもので、

敏速を欠くことこの上なく、大海人の一行は虎口を脱して“雲よ霞よ”と逃げ去ってしまったのだ。

今次太平洋戦争で米国に勝てる唯一のチャンスであつたといわれるミッドウェイ海戦において、圧倒的優勢な兵力を有し、敵を見ながら、モタモタと正攻法に固執して全滅の憂き目に遭つた時の、日本海軍に瓜二つといえるかもしない。この海戦の敗北もただ一言、“拙速”に原因があつたのだ。

それはとにかく、近江朝廷側は作戦方針のとおり東海・東山・山陽、それに遠く北九州にまで使者を放つた。だが、東国方面の使者は道という道で、先手を打つた吉野方の兵士の待ち伏せに遭い、捕まってしまう。また、山陽・北九州方面には大海人に心を寄せる者が多く、地方豪族の拒否にあって、事は上手く運ばなかつた。

大海人方の反撃

今や立場が逆転した吉野方では、兵力の集中を完了したところで七月一日、猛然と総攻撃の火蓋を切つた。

吉野軍の大部隊は一手に別れ、一つは伊勢・伊賀を南から押して大津京を攻め、二つは不破の関を東から押しで大津京を攻略する作戦である。伊勢・伊賀を通つた第一の部隊は各地に激戦を交えながら大和平野の中央部に

ととのふる鼓の音は雷の声と聞くまで吹きなせるくだもの音も仇みたる虎のほゆると諸人のおびゆるまでにささげたる旗のなびきは冬ごもり春去りくれば野ごとにつきてある火の風のむたなびくが如くとりもたる弓はずのさわぎみ雪降る冬の林につむじかもい巻き渡ると思ふまで

戦陣を整え、進撃を合図する鼓の響きは、雷の鳴るさまと思えるばかりである。吹き立てる角の響きも、仇敵に襲いかかる虎の咆哮ともきこえる。あらゆる人がおびえ慄き、捧げもつ戦の旗の靡くさまは、春先に野を焼く火のごとく風とともに燃え広がり、手にする弓の鳴る響きは、雪が降る冬の林につむじ風が渦巻いて吹きつのり、ひた押しに押し渡つてゆくかと思えるのだ。

ここを先途と力の限り戦いぬいた朝廷軍だったが、もはや時の勢いには抗すべくもなかつた。その日の夕刻までに総崩れとなり、本營である大津宮は、翌二十三日に墮ち、ことごとく灰塵に帰した。

大友皇子は山前まで逃れたが、もはやこれまでと、自害して果てた。二十五歳であった。古代王朝の帝王として輝かしい将来を約束されながら散つた皇子の、哀れな最期である。

進出、七月六日、近江朝廷軍と決戦を行い、これを破つた。

不破の関を出発した第二隊は近江朝廷軍と識別するため、全員赤い衣を着け、旗差しも赤とした。

これは衆人環視の中で敵将の股の下をくぐつて失笑を買ひながら、やがて天下を取つたという漢の高祖が赤を好み、その戦旗も赤であつたという故事によつたものである。

大海人は大勢の人の目の前で頭を丸め、吉野に出家遁した自身の姿を「高祖の股くぐり」になぞらえたのかかもしれない。

この赤色の第二隊も破竹の勢いで進撃し、犬上川の一戦に近江朝廷軍を破つた。

この時、朝廷側では重臣の蘇我果安臣が戦死した。さらには横河、鳥籠山、安河の各陣営が一陣二陣と攻め落され、とうとう大津京への関門である瀬田川の橋まで追い詰められた。瀬田川は朝廷軍最後の防衛拠点である。

七月二十一日、吉野軍は總大將高市皇子を先頭に全員火の玉となつて、朝廷軍に襲いかかつた。

各地に激戦を交える大海人の機略と、この時死亡した高市皇子の奮戦など、吉野軍の兵士の勇猛さは、朝廷軍を圧倒していくつた。

柿本人麻呂はこの戦いの有様を詠つている。

一方、大海人の近江朝廷に対する処置は極めて寛大なものであつた。

兄天智天皇によつて作られた内閣首脳で生き残つた者のうち、左大臣蘇我赤兄臣は流罪、巨勢人臣も同じく流罪、紀大人臣は無罪となり、死刑は右大臣中臣全連ただ一人であつた。

天武帝の誕生

大海人は戦いの終つた翌年、弘文天武二年(六七三)二月、飛鳥淨御原宮で即位した。天武天皇の誕生である。

古事記・日本書紀の編纂は大海人、つまり天武帝によつて企てられたのであり、わが国の皇室の基礎を名実ともに確立した帝ともいえる。

その天武帝の額田に対する愛も消えることなく燃え続けていた。帝の敵になつた大友はもちろん額田の実子ではない。弟である天武帝が兄天智天皇の子を滅ぼしたとしても、それほど心の痛みも覚えない。

“それどころか実力で皇太子から天皇の位につき、史上屈指の親政で古代天皇制を強力に確立してゆくこの英邁な弟帝が、昔のままに変ることなく、年老いてゆく自分を思慕していくれる、女としてこれほどの幸せがあるだろうか……”

と天武帝を想う額田の愛も深まるのだ。

み吉野の玉松が枝は愛しきかも
君が御言を持ちて通はく

吉野から松の枝に結んだお手紙をもつて、何て可愛らしい使いの方がいらっしゃったことでしょう。あなたの恋のお言葉をもつて、この私のところへ通つてくれのですもの

これは天武帝が皇子を使として、吉野の離宮から額田に贈った恋文への返歌である。自分も変らずあなたさまをお慕い申し上げていますよ、と言外に余韻を漂わせている。

その額田の臨終の際には、額田の病床の枕辺に寄り添つて、切々と別離の悲しみの情を吐露する天武帝であつた。

この史実をもつて一人の才色兼備の兄嫁を巡り、天下の大乱を招いたという見方は皮相に過ぎ、あるいは早計というそしりを招くことはよくわかる。だが、少なくともその一因であつたこともまた事実であろう。

一つの感情の渦が、対外的には天皇と皇太子、個人的には兄と弟の対立を生んだとすれば、天皇といえどもいかに生々しく、あまりにも人間的な葛藤の中に生きたかが理解されよう。

漢詩

潮騷錄（六十）

鯨游海

漢詩

賀庚寅春

平成廿二年元旦

美國榮華終宴年

虎威狐里只茫然

政權交替雖天命

何爲俄多阿世賢

（庚寅の春を貰す）

（かのえどら
美国の榮華 終宴の年

虎威の狐狸 只だ茫然たり

政權の交替は 天命と雖も

何爲俄多阿世の賢の

（注解）

美國＝米国の現代中國語。

終宴＝宴を終える。壮大なマネーゲームの榮華の終焉。
虎威狐狸＝虎の威を借る狐の棲む国。現下の我が國を

「大君は神にしませば」と謳われた天武帝がその波乱万丈の生涯を閉じたのは朱鳥元年（六八六）九月九日のことである。享年六十五歳といわれる。

み吉野の玉松が枝は愛しきかも
君が御言を持ちて通はく

「大君は神にしませば」と謳われた天武帝がその波乱万丈の生涯を閉じたのは朱鳥元年（六八六）九月九日のことである。享年六十五歳といわれる。

☆乱れ舞ふマネーに狂ふマンハッタン

宴の後は寂しかりけり

平成廿一年三月

島倉東京哉媽耶

美空舟溜也阿爺

古關古賀何程者

今我流行作曲家

押韻・耶爺家

〈樂聖船村徹先生贊歌・連作(九)流行の作曲家〉

島倉の「東京だよおつ媽さん」

美空の「舟溜だよ お爺つあん」

古關古賀 何程の者ぞ

今我流れの 作曲家

〔注解〕

水魚の交友である同郷の作詞家高野公男を病魔に奪われた先生は、夜毎紅灯をさ迷い酒を呷つて悲しみを紛らわせた（なお倉は漢音では平声だが呉音では仄声）。

この間、酔いに紛れて狂ったように五線譜に向かって数々の名曲を生む。痛恨の魂の呻吟が人々の胸に響く。島倉千代子、美空ひばりの唄と共に後世に残る代表作が続々と世に出た。そして中堅作曲家として名声を得、自信に満ち大先輩古賀政男、古関裕而をも凌がんとする。

☆今宵また巷に流るわがメロディ

終に越えしか影を慕いて

(十一) 泰西留學

平成廿一年三月

猿飛佐助沸江湖
銀幕音聲下命吾
旋律幽玄金賞譽
泰西留學就鴻圖

押韻・湖吾圖

〔注解〕

「猿飛佐助」 江湖を沸かす
銀幕の音声 吾れに下命さる
旋律幽玄にして 金賞の譽れ
泰西留学 鴻図に就く

江湖||世間。世の中。

鴻圖||鴻の志。大きな計画。

この頃、映画「猿飛佐助」が作られ、江湖を沸かす活劇として注目された。この映画の音楽の作曲及び音楽監督として先生に白羽の矢が当てられた。時代の先端をゆく先生の感性が映像製作関係者の間で認められたのである。期待に違わずこの音楽は国際的に評価され金賞を射止め、褒賞として歐州留学が実現した。

☆夢に見しモーツアルトを育くみし

歐州の空歐州の風

平成廿一年三月

聲動梁塵餘韻香

詩操嫋嫋響玲琅

是正天稟歌唱賞

名曲哀愁波止場

押韻・香琅場

〔注解〕

声は梁塵を動かし 余韻香んばし

詩操嫋々として 韶き玲琅たり

是れ正に天稟の 歌唱賞

名曲ぞ 「哀愁波止場」は

〔注解〕

聲動梁塵||美声の寓意。劉向・別録「余りにも声が美しいので梁の上の塵が感動して動いた」という。

詩操||詩の感情、情緒。嫋嫋||音声がか細く、続くさま。

玲琅||玉の冴えた音の形容。天稟||天与の、天性の。

美空ひばりの唄った「哀愁波止場」は、この年創設された第一回歌唱賞を受賞した。

押しも押されもせぬ第一線で活躍する流行作曲家としての地位を確立した名曲となつた。

☆つややかに天使と紛ふ天稟の

ひばりの美声梁に響けり

(十二) 王 將

平成廿一年三月

吉報雁來狼狽歸
吟聲濫濁却揮威
銅鑼亂打祝勝宴
八百八橋駒若飛

押韻・歸威飛

〔注解〕

雁||信書。たより。音信。雁帛、雁信、雁書とも。漢

の蘇武の故事より。蘇武が匈奴に拘禁され雁の足に信書を結びつけて送ったという。狼狽||狼も狽もおかみで慌てふためくさま。濫濁||渋いダミ声。ここでは村田英雄の浪曲師の声来形容した。曲と詩と声とが融合した。

先生が欧州留学直前に作曲した「王將」が、村田英雄の歌唱力と相俟つて空前のヒット曲となつた。その祝賀の宴が開かれることとなり急便欧州から帰国する。(続く)

八百八橋駒飛び跳ねつ

《漢詩の流れ49・明その③季夢陽》

百年に及ぶ蒙古の圧政を脱し自由をとり戻した明の社会は急速に繁榮し、商業も盛んとなり都市も本来の閑達さを恢復した。その結果庶民の力が強大となり、口語体の戯曲や小説が未曾有の発達を遂げ、多くの傑作が生まれた。反面正統の純文学たる伝統的詩文の凋落ぶりは顯著となつた。明代前半は從つて高啓、劉基の他特筆すべき詩人は少ない。高啓死して百年、漸やく李夢陽が出る。

送周判官（周判官を送る）

明燈綠酒五花裘

明灯綠酒

五花の裘

客舍新秋螢火流

客舍新秋

螢火流る

問君不飲眞何事

問君に問う

「飲まざるは眞に何事ぞ」

明日出城風葉愁

明日、城を出でなば

風葉愁えん

（注）五花の裘

李白・将進酒

「五花の馬 千金の裘

児を呼び将ち出して美酒に換え……」と飲酒を賛美した名句があるがそれを引用した。

「五色の花びらの模様のある名馬と豪華な上質の裘を質に入れ工面した金なんだぞ。君一体どうしたのだ、ちつとも飲もうとしないではないではないか。本当にどうしたわけだ。明日この街を出て行つたら風に吹かれる木の葉のように愁いがいっぱいなんだよ」

短歌

行雲流水（二十六）

石黒修身

北米東部

北米はいま黄葉の盛りにて東部の街は黄金色に映ゆ

首都D・Cホワイトハウスにペンタゴン世界平和の鍵を秘するか

日米の絡み微妙な国交に不安持ちつつ白亜館望む

世界をば震撼させしテロ跡地グランドゼロに暝しつつ立つ

叫喚の悲劇の跡は今はやクレーン昇りて槌音響く

祝出版

世界史 ミステリー 33の真説

森 実与子著

新人物往来社 1,500円

日本人だけが知らない真相

ハーレムは異形の街ぞ黒人の聖地なるかなゴスペル響く
ニュヨーク洋食に飽き街に出てささやかな膳酒と刺身の
無名なる戦士を祀るアーリントン靖国を偲び思い複雑

多人種のルツボの如きこの国の愛国心のルーツ知りたし
疲弊せる大国はいま喘ぎつつ復活の途を歩むと識れり

文楽

国立の小劇場で文楽の深みに触れて心啓けり

文楽の三人遣いは人形が生けるが如く演ずる巧み

文楽の淨瑠璃の演巧みなる人形捌きに義経を聞く

淨瑠璃に合わせ演ずる人形は生き生きとして遣い手は見えず
冷泉家

冷泉家の和歌守展うたもりでは華麗なる王朝和歌の世界に触れり

冷泉家この真摯なる和歌守は「奇跡の御文庫」現代に伝えり
「乞巧奠」典雅なるこの催しに王朝文化の神髄を覗き

王朝の和歌読みおれば時代ときを経し現代短歌の有りよう思う

三浦雄一郎君

閉む会二浦は宣べり八十才はちじゅうでチヨモランマ征す夢は捨てじと

いつまでも夢を持たんとフロンティアスピリット説く同期の友は

かずかずの故障矯めつつ今もなお体鍛えて壮拳目指すと

ひさびさの再会なるに淡淡と懐旧語る畏友は優し

幾星霜瓦に年を重ねども語れば甦る青春の貌

日常

この夏も花咲かせたる醉芙蓉枝剪り落し秋深まりぬ

短歌をば語つて居りぬ早朝の小さきセミナー恥を忘れて
自しが短歌うたを文芸などと口にするその疚しさをひとり恥らう

無意識にスナック菓子を食うようにお笑いテレビ続く夜更は
親しみし従兄あに逝きてより十余年おかげ柿届き面影の顯つ

喜寿よという吾一世を永らえて妻と過せし五十年を祝ほぐ

喜寿数え金婚の賀も重なりし恩遇の年いまし迎えん

王朝和歌集とその周辺

—冷泉家を中心として—

石 黒 修 身

(二) はじめに

(二) 勅撰集

去る十一月末、晚秋の上野公園の東京都美術館で、「冷泉家・王朝の和歌守展」を見学した。

「冷泉家時雨亭叢書」完結記念と朝日新聞創刊百三十周年記念と銘打った一大イベントで、その充実振りが話題を賑わしている。

筆者にとつてその内容の理解度は甚だ心もとないものであるが、展示された文物を見て、かねてから関心があり、また疑問に思っていた事などで、初めて知り得た、乃至は解明されたことを中心にテーマを選び述べてみたい。

テーマの選択が恣意的であることと、解説、所見が皮相的で未熟である点は忸怩たるものがあることを付言して各論に入りたい。

広辞苑には「勅命または院宣を奉じて編算した歌集」とある。

その時々の皇室の最高権力者、天皇や上皇（院）の命により作られる和歌集が、勅撰の名のもとに編まれた最初は、醍醐天皇の時代の「古今和歌集」である。古今集に続き「後撰集」「拾遺集」が編まれた。まとめて三代集と呼ばれる。

院政の始まる十一世紀後半から「後拾遺集」「金葉集」「詞花集」「千載集」「新古今集」が続いて編まれ、三代集と合わせて八代集と呼ばれている。後述する冷泉家の記述と重なるが、「千載集」を藤原俊成が、「新勅撰集」を子息の定家が、「続後撰集」を孫の為家が、夫々単独で編んだことにより、御子左家集と呼ぶ。

長家は「本朝歌仙正統大祖」つまり歌人のおおもとと称されている。

長家の流れである「御子左家」（前記）は、子の忠家、孫の俊忠と歌人が輩出し、曾孫の俊成、その子定家と孫の為家も続けて撰者になった。為家の子為相が冷泉家を創設した。

このような流れの上に和歌の家としての冷泉家がある。

「万葉集」以後、言い換れば平安遷都以後、長い間漢詩文の隆盛時代が続き、和歌は朝廷の場に出なくなつていた。その後平安時代に近づき、ようやく復興の気運が向いて来て、歌合せ等の催しも盛んになり、遂には醍醐天皇の時に勅撰和歌集の第一号として、「古今和歌集」撰集の勅命が出た。

ときに延喜五年（九〇五）四月十八日で、受けたのは紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人であつたが、友則は撰集中に死亡したので、その後は貫之が代表して仕事を進めたと伝えられる。

（註）藤原俊成、定家によつて確立した和歌師範の家筋、定家の孫にあたるのが、冷泉家を創設した為相である。

(三) 冷泉家の系譜と役割

時雨亭文庫とは、冷泉家の典籍、文書類を伝存する文庫で、その名称は藤原定家が嵯峨野に営んだ山荘に因んだものである。

冷泉家は、藤原氏の一派であり、藤原為相（一二六三～一三三八）が創設した。藤原家の繁栄に伴い多くの分家が生れたので、区別の便宜上、道路名などを呼称して区別したと伝えられている。

(四) 時雨亭文庫と時雨亭叢書

冷泉家邸内にある土蔵「御文庫」は、京都を焼き尽した天明の大火灾（一七八八）をはじめとする災禍から免れ、歴代が八百年の歴史の中で収集してきた古典籍を現代に伝え、「奇跡の御文庫」と呼ばれている。

時雨亭叢書とは、文庫蔵書のすべてを精巧な写真版による複製本（影印本）として公開したもので、最新版全

八十四巻が一〇〇九年一月に完結した。

今回の「冷泉家、王朝の和歌守展」はこれに因んだ行事である。図書としては、朝日新聞出版の刊行で、頒価は全巻で約一百四十五万円である。

個人としては容易に購入する価格ではなく、大学等の研究機関などが購入するのである。

図書館は拠点都市の中央図書館等に備えてあるとのこ

とである。

筆者は、横浜中央図書館でその実物を借り、数巻の頁を繰り古典籍の触感を味わってみた。

(五) 明月記

冷泉家では「めいげつき」と呼んでいる。藤原定家自筆の日記で、公武間の関係、故実、和歌などの見聞を記したものである。

定家の青年期である、治承年間（一一七七～八一）に書き始められ死亡の八十才直前まで書き継がれたと言われているが、日記の記述が現存するのは、治承四年（一一八一）十九才から嘉禎元年（一二三五）七十四才までの五十五年間である。

冷泉家の時雨亭文庫に保管され、平成十二年六月、十二年間にわたる修理が完成した際に国的重要文化財から国宝に格上げされている。なお、叢書では五十六～六十

するところではないの意である。

そしてそれは定家にとって、宮廷人として、家学である歌の道の専問家に徹することであつたと解する。

二十五代現当主為人の言によれば、この家訓が代々守られて来た理由として精神面では、何が何でも、如何なる時にも和歌に専心して、典籍類を「神」と崇め代々継承保存に努めたことを挙げている。

実体面では、一子相伝であり奥儀は口伝であった。時代的には、明治時代東京に遷らずに京都に残ったため、関東大震災と第二次大戦の空襲という二つの大災に遇わなかつたことなどが挙げられるだろう。

余談となるが、十一月十一日テレビ朝日の「徹子の部屋」で、当主為人の妻貴美子は要旨次のように語っていた。一九八〇年朝日新聞の当家の保存事業の紹介が契機となり、国が学術調査に着手し、「財團法人冷泉家時雨亭文庫」が組成された。

そのため税制面の措置や資金の補助等があり、住宅の解体、修理が出来所蔵品の保存と維持が容易になつた。

それまでは、冷泉家の資産と収入のみに依存し、彼女の父（二十四代為任）もサラリーマンであり、彼女も高校の歴史の教師をしていた。など「徹子」と交々語つた貴美子は和服姿のふくらとした上品な婦人であった。

卷に所収されている。

日記は、巻紙に毛筆で、日付、天候（例えば天晴、朝間午後晴の如く）に始まり諸々の事柄が記されている。年代順に五十八巻にまとめられ、巻はすべて巻子装、紺表紙、見返しは白地銀切箔散らし、紐は紫平打、軸は木切軸ないし牙切軸で装幀されている。（叢書五十六巻解題より）。

余聞となるが、「明月記」は古い占いをつかさどる陰陽師の天体記録を纏り込んでおり、そこに銀河系内の超新星とみられる天体が三つ出てくるそうである。そして、それは天文学上の「一級の史料」として科学者から称賛されていると言う。

定家も自分の日記が、後世にこんなかたちで喜ばれるとは思わなかつただろう。（朝日新聞十一月二十四日夕刊窓（コラム）より）

(六) 冷泉家の伝統

冷泉家が、このような厖大かつ貴重な典籍類を今日まで維持保管して来られた背景を探つてみたい。

「世情ノ乱逆追討耳ニ満ソト雖モ之ヲ注セズ、紅旗征戎吾ガ事ニ非ズ」これは定家が「明月記」の冒頭に記し、以来家訓として遵守されて來た一節である。

この定家十九才で記した言葉は、戦乱などは公卿の閑知

(七) 百人一首

「百人一首」は定家が晩年に編んだものと言われている。

「明月記」には、文暦二年五月二十日親類の宇都宮頼綱から、山荘の障子に張る色紙を頼まれ、「古来の人の歌各一首」を書き送つたとあり、定家が百人一首の成立に深くかかわつたと考えられてきた。

然し、この辺の事情は江戸時代以来の論争の種だつたと言われている。とくに戦後になって論争に一石を投じたのが、別に定家が撰んだ百一人の各一首を収めた「百人秀歌」という歌集である。論争の要点は、「百人一首」にはこの「百人秀歌」の一部が深くかゝわつてゐることであり、「百人一首」には「百人秀歌」の一部が收められていると解釈して良いのではないかろうか。

(八) 定家と源実朝

鎌倉三代将軍実朝は、詠歌に熱心で、京都の新古今歌壇に深い憧れを抱いており、定家を師と仰ぎ、「近代秀歌」や相伝の「万葉集」の写本を送られている。

実朝は、これらの和歌集を読み自己流の本歌取りを試みた。

「金槐和歌集」（註1）収録の九割余りが万葉集や古今、

新古今からの本歌取りと言われている。

元久二年、新古今集の撰集成り、これが特別のはから

いで、九月一日鎌倉の実朝のもとに届けられる。

「將軍和語を好ましめ給う」故と言う。時に実朝十八才、定家四十八才であった。またこの年の四月に実朝は、十二首の和歌を詠じたと、「吾妻鏡」(註2)に記されている。

その後、実朝は定家に歌を送り、批評を乞い、定家はすぐに目を通し、批評を加え、他に万葉集や近代秀歌などの歌論集を贈っている。この辺の事情が先述の吾妻鏡に記されている。

公卿である定家と將軍の実朝が師弟と言うのは適切でないかも知れないが、定家は実朝の歌に非凡の才を感じとり、多大の好意をもって対応したのであろう。実朝はその後作歌に打ち込み、四年後に前述の家集「金槐和歌集」をまとめている。

実朝についての歴史的説明は省くが、この時代から武家階級にも和歌を嗜む風潮が生じ、東国武士の頭領たる源氏長者の教養の一環として慇懃されたのだろう。

(註1) 金槐和歌集 源実朝の家集一巻、金は鎌倉の鎌の偏、槐は大臣の意(漢名)

(註2) 吾妻鏡 鎌倉後期成立の史書五十二巻 幕府の事跡を日記体に編述したもの。

(十) 近世の評価—正岡子規ほか—

これまでには王朝和歌への正統的な解説と称揚のケースを述べてきたが、終りに明治以降近世になつてからの評価の中で、正面からアンチテーゼを唱えた正岡子規の論述の一部を紹介する。一主として子規の歌論「歌よみに与える書」(註1)より引用—

平安初期の成立以来、「古今集」は和歌の規範であり、歌人にとっての聖典であつた。その権威を支えたのが「古今伝授」(註2)である。

古今伝授は近世の国学者により批判にさらされたが、その権威を決定的に破壊したのが正岡子規である。

子規は、「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集にて有之候」と記している。

この背景を探れば、明治の歌壇は子規以前に与謝野鉄幹により短歌革命の火の手が上げられ、これに対抗して子規は「日本」紙上などで、一層過激に旧派歌人を攻撃し、「貫之には歌らしき歌は一首もなく、定家という人は上手か下手が訳の分からぬ人」云々と、旧派歌人の権威の根源たる古今集と貫之を否定し、それに連なる歌人を罵倒している。明治三十一年のことである。

子規が以いた手法、戦略は彼が既に成功をおさめている俳句革命に使つたのと同じである。彼は芭蕉の句を貶め、埋もれていた無村を発掘し革新の狼煙を上げた。そ

れと同じ手法で古今集と貫之を否定し、万葉集と源実朝を激賞した。

私見であるが、皇室の権威が絶体の世にあつて、勅撰和歌集をこのように激しく批判し、またそれが許されたのは、子規のショック療法的な手法が革新の名のもとに寧ろもてはやされた時代背景があつたのかも知れない。勿論古今集に対する全面否定には拒否感をもつ文学者は多いと言う。何と言つても明治という疾風怒濤の時代の落し子としての彼の主張が大方に認められたのだろうか。このあたりの論議が昨今の現代短歌にどのような影響を及ぼしているかは識者の見解を待つことにしたい。

(註1) 明治三十一年一月一二日～三月四日前後十回にわたり新聞「日本」に掲載されたものを特定の人に伝授すること。

参考とした図書
冷泉家、王朝の和歌守展 朝日新聞出版
冷泉家、時雨亭叢書 朝日新聞出版
古今和歌集、新古今和歌集 小学館
王朝秀歌選 岩波文庫
新古今集新論 塚本邦雄著 岩波セミナー
実朝考 中野孝次著 講談社文芸文庫
古今よみに与ふる書 正岡子規著 岩波文庫

冷泉家二十五代当主為人の妻貴美子(二十四代為任の娘)は次のように述べている。

明治以前は勅撰集が編まれなくとも、王朝人らは和歌会を催し、歌を詠み、披講した。

歌会は公の場であり、そこであからさまに私情を表現するのは最も下品なこととされた。そこでは洗練された言葉の美と教養の蓄積された文芸が展開する。

その形の美が、能に、絵画に、工芸に、茶道に影響を与える「和」なるものが形成された。

明治以降は、和歌も文学として受け入れられ、宮中でさえもすべて芸術となつた後も、細々と「和歌」を守り続けて来たのが冷泉家であると自負している。

そして、現代短歌は「喜怒哀樂を表し、自己表現を第一とする」と評し、その相異を強調している。

これには、伏線として後記する明治代の正岡子規らの王朝和歌に対する批判に對峙する意図があるのではないかと筆者は推察する。

このような冷泉家の意見は、和歌の王道を守ろうとする主張であろうが、現代短歌に扱る歌人達は如何に受け止めるべきなのか、筆者も問い合わせたいところである。

短歌三十首

曾根竣作

惜別

才長けし奴の零落思ほえず、けふ靈園にひぐらしを聴く

向き向ぎに凌霄^{のうせん}の花巻きのぼりそびら閑けく夏雲の湧く

溪流^{みなも}の水面を搏ちてかなかなのこゑ澄みとほり谷^{やつ}を吹き上ぐ

定番の「雪の降る街」口遊む 白皙のひと高英男逝く

ビブラートを効かしし美声もう聴けず「枯葉」の秋が直やつてくる

尺余なる若魚^{いはな}は網に焼かれをり不羈狷介の顔をさらして

いただきに大輪白き泰山木夏の驕りを一樹にあつむ

湧き上るドビュシーオの樂その曲を矯めてみさきに乱雲高し

合掌のかたちに閉ぢし川蜻蛉^{あさつ} 翅の向かふに夕陽が落ちる

岬とほく残月かすむバシー海峡黙^{もだ}ふかくかの夏ぞ逝かしむ

九条

波の秀^はを陽光^{ひかり}あまねく研ぎ上げて潮けぶり立つ九月朔日

沖に白くクルーザー泊つる由比ヶ浜さねさし相模の湾明けゆけり
すずやかに沙羅立ち上り天指さば一夏^{あま}の憶ひ遠去かりゆく

雪嶺を仰げば崇^{たか}し母逝きて十有余年つね反省期

白南風に吹かれ汽水をもとほれる白子の漁夫しらすが纜ともづなを投ぐ

盈月に引地川ありその岸辺花すすき垂り水面をはらふ

穂すすきの重く群れるて白狐など現れむ夜か月かたぶきて

いますこし夏衣なついかづきて過ぐさんか白魚粥を吹く老いの縁先えんせん

「九条を守る歌会」の誘ひあり改憲論のわれと知らずに

據りて立つ軍事同盟當てにならず他国のために死ぬ若者ものはなし

獺 祭 忌

土用波泡立つみぎはわたつみを蟹は見放みさくる甲かぶあらはれて

潮けぶる稻村ヶ崎かみやいばその上の刃投なげしもののふ憶ふ

ここよりは鎌倉やかた指呼の間ひとむちの下知に軍は渡りき

時を経て海ふかぶかと藍青らんじやうにすでに早駆けも能はずなれり

水の面もを払ふ柳糸のうすみどり百年経ても古都は変らず

流されし上皇見しやこの島の崖のなだりにそよぐすすき穂

ふんわりと秋の黄蝶のただよへる浜木綿のかたへ坐せば日昏るる

ただ一花いつわここに生くると醉芙蓉はかなき闇のエピローグたれ

手にかるき文庫本など渉猟せふれふし小さき店出づけふ獺祭忌だつさいき

注：獺祭忌—正岡子規の忌日

俳句 春夏秋冬

勝山道子

春

霜なくて八十八夜忘れ去る

花冷に読経しめる夫年忌

菩薩顔父母を偲びて花見月

亡き人をうらやみうなづく花疲

曾孫を抱きて眺むる雛祭

わが余生句あり文ある春日和
春雨に音なく石にしづくあり

夏

君知るや焼野原の終戦日

わが青春まつたゞ中の敗戦忌

只一輪水蓮花^{はな}は水清め

たくましき夏の吟行切磋あり

スコールの去りたる後に芭蕉ゆれ

常夏のジャワの百花はみだれ咲き

宮殿の舞に見せたる汗の糸

形よく色よく梨の実秋の王
アリ

語ること少くなりぬ桐一葉

菊人形袖のまるみが揃ひける

痛むのか引きずる人の杖冷えて

名月の去りゆく窓辺われも追ひ

点滴の光る水滴秋の雲

庭師来て手早く刈れる松手入れ

冬

寒椿逝きてし君とかさなりぬ

初雪に気がかる庭も清められ

寒すゞめ己の姿飛び立たず

七分まで雪化粧した富士間近

寒ぼたんトツセ十年も前の想ひあり

老しわれ年の瀬静かに憮れ去る

老いて今悔いることなく懐手

古い物・遠い夢

忠内正之

唐津の茶陶

(三) 唐津茶碗

先づ唐津焼から辿つて見よう。

昔から茶人が「一樂・二萩・三唐津」といって大切に扱つてきた唐津焼である。

古い茶会では唐津がどのようにして出てくるか、つまり「唐津陶」はいつ頃から、どんなものが使用されたかー先輩の研究書から少し引いてみよう。

「古織正伝慶長御尋書」には

慶長八年五月之朝 織部所にて

一、水指 唐焼置合て

一、茶碗 唐津焼

慶長十三年六月六日之朝、織部風呂の数寄、盆にて被

立候覺

一、水こぼし 唐津焼

また「古織全書」には、慶長八年の項に

一、唐津 花入

一、唐津 足有御水指

一、ちやわん 唐津焼

一、唐津焼 すじ水指

などが記載されている。

これらの記録によつて、慶長八年から十四年、五年頃まで唐津陶が盛んに使用されていたことは明かである。

(佐藤進三著 「肥前の唐津焼」より)

更に奈良の茶人、「松屋久好」の「古織伝書」慶長九年十二月十三日の項に「唐津」に関する興味あるエピソードが記されている。

古田織部と久好が春田又左衛門という茶人の茶会によ

りするところ、(津とは港、町)という意味から唐津と名づけられた。

鎮西の領主であつた、松浦党の子孫、波多源次郎が後嵯峨天皇の寛元三年(一二四三)、今の東松浦郡北波多村鬼子嶽に吉志見城を築き、波多家の祖となり、この鬼子嶽(岸岳)の城下町は代々栄えて來た。(以降岸岳名稱を使つ)。

岸岳西方の山中に文禄(一五九二)の頃、初めて朝鮮系の鉄釉薬を使う飯胴甕窯が築かれ続いて不透明な海鼠釉を使う帆柱窯などが開窯されている。

元来唐津焼の起源は須恵器の時代にさかのぼるといわれているが、本格的な唐津焼が作られたのは、瀬戸のように古い伝統によるものではなく、豊臣秀吉が朝鮮出兵した文禄前後のことである。そして日用雑器の窯として壺、徳利、片口、皿、擂鉢、茶碗などが沢山焼かれた。城主波多家の保護獎励が当然加えられている。

つまり、文禄、慶長の役で捕虜として、連れて來られた朝鮮の陶工たちが主役を演じたのであり、瀬戸物が中國系であるのに対し唐津焼は朝鮮系である。

一般に当時の唐津焼は茶陶など高級品として焼かれたのではなく、多くは日用品として、唐津藩や鍋島藩平戸藩などが産業獎励と稅収の増加を計る目的で生産し、全国いたるところに出荷されその名を馳せた。

唐津焼は、今の佐賀県全域と長崎県の一部にまたがる地区、即ち昔の肥前国でつくられた焼物の総称である。

豊臣秀吉の文禄、慶長の朝鮮役前後から今日に至るまで、その窯数は三百以上にも達し非常に隆盛を極めた。とくに唐津に近い岸岳山麓に古くからの窯の中心があり、また唐津港から製品が各地に発送されたので唐津焼の名で呼ばれた。関西方面では陶磁器全般を指して唐津とよび、名古屋以東の地では瀬戸物と言い、瀬戸とともに日本陶磁器の代名詞となつてゐる。

唐津市はこの唐津焼の輸出港として、徳川時代にはその繁栄ぶりを示した。元来唐津は日本と、朝鮮、中国との交通貿易などの要衝として發展した所で、唐船の出入

古来茶人たちが名品に扱つた唐津焼のほとんどは、雑器の中から見立てられたものが多い。そして今日貴重にされているものを焼いた窯としては、岸岳系の飯胴甕窯、帆柱窯、皿屋窯、道納屋谷窯などがある。

その頃、東松浦地方の領主は松浦党の波多三河守親であつた。親は文禄の役に従軍して朝鮮に渡り文禄三年二月に帰国したが、肥前名護屋に陣取りして総指揮を取つていた秀吉の政略により所領を没収され、身柄は徳川家康に預けられ、後に常陸に流刑された。

一説によれば、波多三河守親の内室は希に見る美形であつたという。好色家の秀吉はこの内室に横恋慕した。成行きが旨くいかなかつたので、理由をこじつけて絶家にしたのだという。老境の秀吉にその様な精力が余つていたか疑問であるが話としては面白い。

三河守親は慶長三年許されて帰るが病死して絶家となる。記録によれば内室は龍造寺隆信の娘、秀の前であつたとされている。

波多家が没収となつたのでこのため岸岳の各窯は廃窯となり陶工達は各地に逃れて離散した。

波多氏の旧領は寺沢志摩守広高に与えられた。その広高は、奇しくも古田織部と同郷の美濃出身で利休門下の茶人であつた。(表千家四代江岑は若いころ広高に仕え

家の脚色であろうか？)

寺沢家は約四十年間續き、この間唐津焼は、産業奨励や献上の目的もあつて保護され発展した。茶器なども本格的に焼かれたようである。

寺沢家が亡びて、唐津はしばらくの間幕府の直轄領となつたが、慶安二年大久保加賀守が藩主となり、椎の峯地区の陶工に命じて、いわゆる本格的な献上唐津といわれる薄手の雲鶴や狂言榜をつくり(いずれも高麗の名品写し)幕府や諸藩の贈答用に供した。

さらに松平和泉守、土井周防守、水野和泉守、小笠原主殿頭と藩主が次々と代つたが、いづれも御用窯の制度を守り幕府への献上もつづけて明治初年にまで及んだ。

故十三代中里太郎衛門(人間国宝)は御用窯の御茶碗師頭取を代々務めた陶工の子孫であり、中里家の窯元は現在も盛業中である。

小堀遠州は唐津茶碗をあまり評価しなかつたといわれる。だがその理由は、茶道の師織部がかなり唐津焼に打ち込んでいたものの、大坂方への内通を疑われて自刃した悲運を慮つて、意識して避けたかと思われる。

現に唐津焼の茶道具の中に、遠州の箱書きは無いものの捺印してあるものが散見されるという。秘かに認めていたのであろう。

唐津焼は古田織部の他、細川三斎、松浦鎮信、片桐石

た。

文禄の役にともに名護屋城で後備役にまわった両者の交遊は密接であったと思われる。広高はたいへんストイックな性格であったといわれるが、経済に明るい武将で、唐津焼の復興に意を用いて保護育成した。古田織部がこれを指導応援して、寺沢領内でできたやきものを茶会に使つたので、唐津藩内のやきもの、すなわち唐津焼として天下に名を知られるに至つたものと思われる。

また織部の影響によつて織部唐津とも称される織部色の強いものが多く製作され、それが唐津焼として全国的に広く流布し、有田、三河内地区で始まつた名物(磁器のこと)に対し、土物(陶器)はすべて唐津焼だといわれるようになつた。

寺沢広高は豊臣大名であったが、関ヶ原では徳川方につき四万石の増加を受け十二万三千石の大名となつた。二代目堅高は寛永十五年の島原の乱により四万石を召し上げられ、これを嘆いて正保四年自殺、そのため無嗣絶家となつた。

俗説によると、堅高は父親広高のストイックな性格を受けつがず、女色を好み粗暴な振舞が多かつたという。唐津藩の元家臣の子供である播磨院長兵衛に親の仇と狙われた。長兵衛は旗本奴の頭領、水野十郎左衛門の助けによつて見事に恨を晴らしたものといわれるが、芝居作

州、松平不昧公、さらに多くの茶人たちに愛用されて来た。近年は市価もかなり騰つている様である。

世に名高い唐津の名碗は次の通りである。豊臣秀吉が名護屋に在陣中、織部を通じて作らせ、萩内剣仲(桃山時代の茶匠)に贈つた「菊桐の絵唐津の筒茶碗」、遠州藏帖の「斑唐津銘すはま」、「奥高麗」(唐津最古の茶碗といわれる)では松平不昧公(江戸後期の大名茶人)愛蔵の「深山路」、「眞蔵院」、「秋の夜」、その他大坂久保家の「是閑唐津(銘三宝)」、根津美術館の「中尾唐津」など。

筆者は右の殆んどを拝見するチャンスがあつた。

(四) 筆者の蒐集品——会寧焼と唐津茶碗

筆者は今日まで、幸運にも三個の古い唐津関係の焼物を手に入れることができた。唐津焼の源流ともいわれる、朝鮮の会寧焼の鉢と、二つの古唐津の茶碗である。

唐津焼最古の窯であるといわれる岸岳唐津窯群は、その源流が朝鮮の会寧地区であるという。

昭和二十二年、岸岳の古窯、帆柱窯が研究発掘された時、最下層から中國宋釣窯の天青磁を思わせる藁灰釉の陶片が多数出土した。釣窯風の釉は、会寧、明川附近のみ見られるもので、ここに陶工が松浦党(和冠)に連れて、岸岳山麓に開窯したものと推定される。朝鮮

の会寧附近の陶業は戦前までは操業していたというが、戦後の情報は不明で、しかも北朝鮮の北辺にあり、古窯調査など不可能で確かめる手段がない。

唐津焼は、会寧仕込みの釉薬（土灰薬、蔓灰薬、鉄薬）と渡来した陶工たちの指導で雅味のある焼物として完成された。

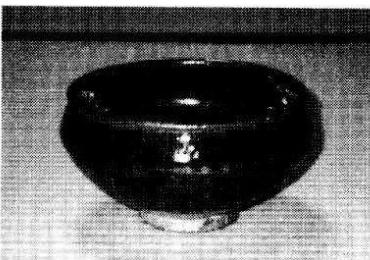
更に唐津から、高取焼、上野焼、八代焼、小代焼等へと、技術が伝播して、西国全般の焼物文化の発展に大きな影響を与えた。

なみのない焼物だが、当然戦前の舶来品であろう。

会寧の名にひかれて買った。当初店主は今日、さる数寄者の家から出たばかりの品で、すぐには賣りたくないといつていたのを無理をいった。

次の機会にその店を訪ねて、詳しく仔細をたづようと思いつち寄ったが、折悪しく休業していた。聞くと店主が急逝して閉店となつたようである。不思議な出会いであつた。

その後唐津焼を勉強するに及んで、会寧焼の存在を改めて認識し貴重な品と喜んでいる。

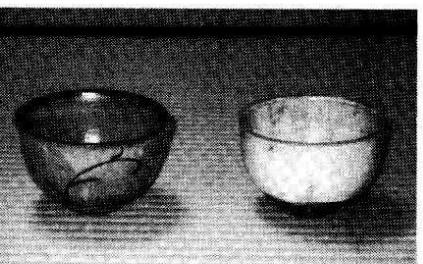


写真① 会寧焼 鉢

写真②は古唐津の茶碗二つである。右は斑唐津、左は絵唐津である。縁あつて知人から三年越しに格安の値段で譲つてもらつた。

二つとも茶碗として焼かれているのでさ程古作とはいえないが、江戸初期までの古さは充分にあるものと確信している。

古唐津は次の美的條件を満たすことが必要とされる。



写真② 右 斑唐津茶碗
左 絵唐津茶碗

さて、会寧の鉢は写真①である。平成十年ごろ熱海に遊んだが、徒々なままに、熱海銀座の骨董店に立ち寄つた。その店で珍らしい鉢を発見した。土はザラザラで（南鮮に比して北鮮の粘土は質が悪い）造形はざっくり

けた、帰化朝鮮人の作陶と思われる。斑唐津は先述した三種の釉薬が混然として使われ独特の雰囲気を出したものである。唐津の窯の中で最古といわれる岸岳帆柱窯以外では斑唐津の陶片は発掘されていないというから帆柱窯産と考えられる。

遠州流十二代家元、宗慶宗匠の箱書きがある。

左の茶碗は絵唐津である。絵唐津については、唐津の殆どの窯跡から陶片が出土しており、どの窯の出来か確定は至難である。現在では古窯跡の発掘は全く厳禁されてしまつて詳しい調査は不可能である。

絵唐津は瀬戸（美濃）の志野や織部焼にも見られる幼稚で雅味のある簡単な絵が鉄釉で描かれている。文禄の役の時古田織部が肥前に来て、織部風を指導したのが本格的な絵唐津の起りといわれており、絵唐津の優品は慶長の年代に岸岳の道納屋谷窯で多く焼かれたというので、全窯の所産と信じたい。

なおこの茶碗は「皮鯨」といって口縁が鉄釉で飾つてある。茶人はこれを「紅」と名づけ有難がるが、絵唐津の茶碗に「紅」は珍品という。

右の茶碗と同様に宗慶宗匠から歌銘入りで極めがいただいてある。左に之を披露する。

〔極め〕

古から津 口べに 茶碗

二つの茶碗は一、二の欠格はあつても略条件を満たしており、茶会に通用する立派な茶碗であると自負している。

右の斑唐津茶碗は端正な造形で恐らく「ろくろ」に長

(裏)

さらでだに 心のとまる 秋の野に
いとも まねく 花薄かな

八十四翁 江心宗慶 (花押)
後拾遺和歌集 源師賢朝臣

右の茶碗は稍、小ぶりで優雅であり女性的である。左の茶碗は大ぶりで重量感があつて男性的である。いわば二つは抹茶の夫婦茶碗としてピッタリの感がする。

約四百年もの長きに亘つて大切されて来た物は、美しく味がある。眺めても、使つても嬉しく楽しい。マニアとしては堪えられない感がする。

しかし、この茶碗を作つた人、作らせた人、また之を使つた人たちの夫々の人生の哀歎が凝集されている気がして考えさせられる。大切に使つて後世にキチンと伝えていかねばならないと思う。

(終)

〔参考資料〕

世界陶磁大系 (唐津)	小学館
やきものの事典	平凡社
やきもののふる里 村山 武著	求龍堂
茶道美術全集 (茶碗和物)	淡交社
家康暗殺 (謎の織部茶碗) 森眞沙子 詳電社	他

狩谷祓斎讃歌 (八)

新井 宏

(二十六) 本朝度量權衡攷

いよいよ『本朝度量權衡攷』について書く時がやつてきた。この書物について語りたいがために、書き始めた小稿でもある。我が想いをどう伝えようか。あれもこれも書きたい。だから、ほとばしるように書けるはずであった。しかし事実は、ここで筆が止まつてしまつたのである。この項目だけは何とかうまく書きたいという意識が、重くのしかかってきて、最初の一行為が書けない。

関連する論文は、既に十分に書き上げた。祓斎の「律令期の大尺小尺が唐の大尺小尺と同じであつた」とする考察が、やはり正しかつたのである。後世の歴史学者や考古学者がともすれば祓斎の説を探らず、「令大尺は高麗尺、令小尺は唐大尺」としているのは皮相的な見方で

あつた。だからそのことを書くだけでも、狩谷祓斎讃歌になり得る。

ところが、そもそも「律令期のものさし」などについて簡単な知識を持つている人さえ珍しい。どうしても、解説をしながら書くことになる。それは論文を書くのに数倍する難しさであり、もたもたしてては、途中で放り出されてしまう。なんとか読んで下さる方を惹き付けて書きたいと思うと、また筆が止まつてしまう。

しかし、何はどうもあれ第一歩を踏み出さねばならない。

まず、江戸時代における度量衡研究が、現在ほどマイナーな存在ではなく、度量衡考を書いた学者が極めて多かつたことから始めよう。

江戸中期を代表する儒学者・思想家・文献学者の荻生徂徠(一六六六—一七二八)は大部の『度量衡考』を書いている。それ以前にも、儒者ながら天文地理、度量衡、

音律にまで精通した中村惕齋（一六二九—一七〇二）は『律尺考験并三器攷略』を表し、同じく儒者の伊藤東涯（一六七〇—一七三六）も『制度通』で尺度論を述べ、国学者の荷田在満（一七〇六—一七五二）は『度制略考』を書き、平田篤胤（一七七六—一八四三）も『皇国度制考』で独特的尺度論を主張している。それに加えて、関流和算家中根元圭（一六六一—一七三三）は数学者の立場で『律原發揮』を書いている。著名な学者はみな度量衡に深い関心を抱いていたのである。

それは、もちろん儒学で盛に「律の高低は国の興亡にかかわる」と言っていたことに関連している。律とは音程のことであるが、音程を決めるのが尺であり、尺度のことも律と称していた。したがって、律の乱れが国の興亡にかかわると言うのは、尺が乱れると耕地面積から租米の収量まで乱れ、社会が不安定化するとの意味でもあつたであろう。秦の始皇帝による度量衡の統一が、如何に大事業であつたかを思い起せば、ある程度の納得が行くであろう。

ちょうどその頃、すなわち十八世紀末にはヨーロッパでもメートル法への動きが活発化していく、度量衡制度の統一やそれに関連した歴史研究が大きな関心事になっていた。

被斎の没後、平田篤胤が「尺座」を設立しようとしたのも、一連の流れとして理解することができる。「枠座」

「秤座」によつて、まがりなりにも量と衡については管理されていたが、比較的に安定していた「度」について感覚では見て欲しくないという私の願いに他ならない。

それにしても、これら数多く生れた度量衡考の中でも、狩谷被斎の『本朝度量權衡攷』は質も量も他を圧倒していた。

平凡社の東洋文庫に収録された富谷至氏の校訂版で見ても、注釈を含めれば六百ページを越す大著である。被斎はこの大著を四度にわたつて書き直したというが、それでも満足せずに、結局、生前に公刊されなかつた。それは『和名類聚抄箋注』の場合と良く似ている。公刊されたのは一九一六年になつて滝本誠一編の『日本經濟叢書』の卷三十に集録されたのが最初である。

『本朝度量權衡攷』は、本編として、本朝度攷、本朝量攷、本朝權衡攷、附録として、卷上之上、卷上之下、

卷中、卷下之上、卷下之下、図譜、沿革表から成つている。

被斎は『本朝度量權衡攷』の研究の動機について、附録・卷上之上の冒頭で次のように述べている。

予、弱冠の頃より、皇國の制度を知らんと思ひて、歴史・律令・格式などくり返し読むに、知り難き事の多かる中に、度量權衡は今も日々用ふる物ながら、今と古へと同じかりしや、異なりしや、たしか知らねば、先達の人々に問ひ質ししに、委く教ふる人も無かりしかば、その筋の事、書けるものども、彼れ是れ取り集めて読み見るに、能く考へ明らめたりと見ゆるも、をさをさ無かりければ、何くれと尋ね求めて考へしに、皆な李唐の制を写し給ひしなりけり。……

実は、ここに示されている極めて平凡な見解、すなわち「皆な李唐の制を写した」と言うのが被斎の重要な結論なのである。

その程度の結論ならば、素人でも出せそうなのに、被斎は心血を注いだ精緻な研究によつて導いた。それは、被斎以前の学者が別の見解を持つていたからである。しかも、現代の歴史学者や考古学者は、被斎の結論に批判的であり、むしろ被斎以前の学説に戻つてしまつてゐる。これを再び被斎の結論に回帰させなければならない。そ

れが私の終生のテーマなのである。

要は、律令制定時の尺度、すなわち「令大尺・令小尺」が「高麗尺・唐大尺」に対応しているか（A説）、「唐大尺・唐小尺」に対応しているか（B説）の一説があり、対峙しているのである。ただし、はつきりしているのは、和銅期以降になると、「大尺は唐大尺、小尺は唐小尺」が確立させていたことである。そうなると、どうでも良い論争と思われるかもしれないが、その帰趣によつては日本の古代像が大きく変わるのである。

ここで中国と日本の尺度の歴史を簡単に紹介しておこう。

中国では、前漢・後漢期のものさしが百本ほど発見されていて、漢の時代、一尺が二十三・三センチメートル前後に安定していたことが判つている。ところが、三国時代になると北方民族の侵入等によつて、尺度が乱れ、徐々に長くなり、東晋の頃には二十四・五センチメートルほどになり、更には隋や唐では一尺が二十九・七センチメートルほどのものさしが常用されるようになる。しかし唐では二十四・五センチメートルほどのものさしも一部で使われていたのでこれを小尺とし、二十九・七センチメートルほどのものさしを大尺として、小尺と大尺の間に、一対一・二の関係を規定した。

日本の律令期は唐の時代であり、遣唐使などを通じて

入ってきた尺度は唐の大尺である。この唐大尺はやがて天平尺と呼ばれ、時代の経過と共にやや長くなり、曲尺と言われる頃には三十・二センチメートルほどになる。長くなつたとは言え、世界で最も安定していたものさしだある。それだけ日本の社会は安定していたと言うことであろう。ちなみに、中国においては、唐の大尺は清の頃、三十二センチメートルほどまで長くなっている。

さて本題に戻る。このあたりからは、読んでいただきたいから書くのではなく、ますます、書きたいことを書くことになる。いわば自己満足。それが讃歌の特徴なのだと割り切つている。

自明と思われる被斎の結論がなぜ受け容れられないかには、当然大きな理由がある。それは、大宝令の条文と和銅六年二月十九日の和銅格を忠実に比較して読むかぎり、令小尺が唐大尺であり、令大尺は唐大尺の一・二倍（多くはこれを高麗尺と称する）であつたと理解するのはある意味で当然なのである。被斎より前の学者、例えば荷田在満もこのA説を探つていた。

大宝律令は大宝元年（七〇一）に唐の永徽律令（六五一年制定）を参考にして制定されたと考えられている。その編纂の起源は天武天皇の詔（六八一年）まで遡り、まず行政法・民法に相当する令として、持統三年（六八九）

① 凡そ度は十分を寸とせよ。……北方の秬黍の中の者、一黍の広さを分とせよ……。十寸を尺とせよ。一尺二寸を大尺とせよ。十尺を丈とせよ。

② 凡そ地を度り、銀銅穀を量る者は、皆な大を用いよ。この外は官私黍く小なる者を用いよ。

③ 凡そ地を度るには五尺を歩とせよ。三百歩を里とせよ。

ところが、令の制定から十二年後の和銅六年二月十九日の格で、③の項について早くも「六尺を歩」とするよう改定される。解説によれば、五尺の歩も六尺の歩も同じとされているので、ここに言う六尺は令小尺によるものとなる。しかも、和銅以降は、唐大尺の六尺が歩であつたことは誰でも知つていた。ここに令小尺が唐大尺、

令大尺が唐大尺の一・二倍（これを高麗尺と通称）と決まる。だから荷田在満のいう通りなのである。

しかし、被斎は、詳細な検討を経て令の規定には唐令導入時の混乱があつたとし、「令大尺は唐大尺、令小尺は唐小尺」のB説をとつたのである。

その根拠のひとつは、①の規定と全く同文が唐令に見られることである。……北方の秬黍の中の者、一黍の広さを分とせよ……などと言う定義は、日本独自のものではありえない。定義から言えば、無条件に、令の大小は唐令の大小である。もつとも、この北方の秬黍の規定は「令集解」にあるだけで、当初の大宝令にはなかつたとの見解もある。

もうひとつは、日本では唐大尺の六尺を歩としたにもかかわらず、③のように「五尺を歩とせよ」と唐令と同じ規定にしていることである。そのため、唐大尺の一・二倍の令大尺（高麗尺）を規定して辻縫を合わせる必要が生じた。しかし、このような辻縫合わせは長く続かず、和銅格によつて「六尺を歩」と変えることになつてしまつた。すなわち、令小尺が「地を度る」基準にも使われるようになつたのである。令大尺は「地を度る」場合にのみ使う規定であつたから、令大尺はどこかへ行つてしまつた。

しかも、天平期の大小尺が唐の大小尺であつたことを被斎は詳細に実証している。そうであるならば、大宝か

に飛鳥淨御原令が発布され、後に刑法に相当する律が加わって成立した日本初の本格的な律令である。しかし原文は現存しておらず、「令集解」の古記によつて、七五七年に施行された養老律令におおむね継承していることが知られていて、それを元にして大宝律令の復元が行われている。大宝令の前に飛鳥淨御原令もあり、区別できない場合もあるので、通常はただ「令」と言つている。

その令の雜令には、度量衡の項があり、尺度に関して次の三点を規定している。

① 凡そ度は十分を寸とせよ。……北方の秬黍の中の者、一黍の広さを分とせよ……。十寸を尺とせよ。一尺二寸を大尺とせよ。十尺を丈とせよ。

② 凡そ地を度り、銀銅穀を量る者は、皆な大を用いよ。この外は官私黍く小なる者を用いよ。

③ 凡そ地を度るには五尺を歩とせよ。三百歩を里とせよ。

ところが、令の制定から十二年後の和銅六年二月十九日の格で、③の項について早くも「六尺を歩」とするよう改定される。解説によれば、五尺の歩も六尺の歩も同じとされているので、ここに言う六尺は令小尺によるものとなる。しかも、和銅以降は、唐大尺の六尺が歩であつたことは誰でも知つていた。ここに令小尺が唐大尺、

作られている。だから大宝令の前も後も唐制なのである。

時間が見ても、唐尺が入つてきたのは大宝令よりも五十年近くも前のことで、前期難波宮は確実に唐大尺で作られた。したがつて、被斎が主張するように、令の当初の規定は、錯誤に近いもので、実質は唐制と同じであつたとする見解は極めて合理的なのである。そうであれば、唐尺の一・二倍の令大尺は全く実体のない机上の尺度に過ぎなかつたことになる。この主張が被斎の考案の真意なのである。

しかし、錯誤があつたとしても、いつたん制定されば、法は法であり、これがある程度まで実施されたことは否定できないであろう。だから、表面的には荷田在満のA説が正しく、実質的には被斎のB説が正しいというのが、結論となるが、その程度の相違ならば、大きな問題ではなかつた。

むしろ、被斎のB説が無視されA説に回帰するようになるのは、現代になつてから、大化前代の土地制度研究をめぐつて、唐大尺の一・二倍の高麗尺が注目を浴びるようになつたからである。すなわち、大化前代には代制

という土地制度があり、その五十代(東代)が一段に相当していた。しかし令の一段の規定は三六〇平方歩なので、代との対応関係は良くない。ところが、高麗尺の六尺を歩とすると、段は二五〇平方歩になり、代が五平方歩に対応することになる。そこから、令前には高麗尺が用いられていたとの学説が有力化したのである。

しかもそれを支えたのが、和銅格の改訂をめぐって、令集解田令長条古記に記載された「問答」である。その中に、一段が三六〇平方歩から二五〇平方歩になり再び三六〇平方歩になったことを示唆する記載があり、これが大化改新との関係で何時のことなのか、昭和三十年代から「田積三遷」として大論争になつた。段が二五〇平方歩となれば、歩は高麗尺の六尺しか考えられず、高麗尺がますます注目を浴びたのである。そうなると、被斎の見解は無視される。

しかし、この大論争も現在ではほぼ終息している。金沢悦男氏が平成五年に「田積田租法の変遷」に関する研究史をまとめた結果によれば、この古記の問答は、昭和三十六年に虎尾俊哉氏が発表した卓見すなわち「仮想問答」に過ぎなかつたことにはほぼ決着したのである。

そもそも令集解は令の解説書である。したがつて、この古記の問答が、和銅格による「歩の五尺から六尺への変更」の解説にあつたことは疑いない。その視点で読めば、その問答の趣旨は、「和銅格を読んで、平方歩の面のよう」に解いたのである。

天平という一時点に於いて、「和銅六年の改定によつて高麗尺六尺一步制、従つて二五〇歩一段制が採用され、その後いつか再び三六〇歩一段制となつて天平時代に至つた」という、一時点に於ける一つの誤解が存した、乃至そのおそれがあつた。

いうなれば、「想定問答」の記述の中に高麗法とか高麗術という用語が出てくるだけなのである。したがつて、段二五〇平方歩の制度も仮想のものに過ぎなくなり、令前に存在していた制度と見なすことはできない。

ところが、この仮想問答に登場した段二五〇平方歩制が、令前の代制に結び付けられてしまつた。令前の代制では一段が五十代(東代)であつたことに階調していくからである。その説が有力化したのは、他に令前の代制を説明する方法がなかつたからでもある。

さて、一段五十代と高麗尺による一段二五〇平方歩制

積が一・四四倍となつたと誤解し、一段が三六〇平方歩からいつたん二五〇平方歩になり、そして更に現在の三六〇平方歩に戻つたと思う者がいるかも知れないが、和銅格の前も後も現在も、歩の長さは変わらない」ということなのである。そうであれば、一段二五〇平方歩の制度は実在したものではなくなり、被斎の名譽は自動的に回復されなければならない。

しかし、高麗尺があまりにも歴史や考古学研究者の間で広まり、現在では日本ばかりでなく朝鮮半島でも遺跡図面に高麗尺を当てはめて見ては、高麗尺で設計されたことのできる。そうであれば、一段二五〇平方歩の制度は実在したものではなくなり、被斎の名譽は自動的に回復されなければならない。

被斎は唐大尺の一・二倍の令大尺すなわち高麗尺について、積極的に否定したわけではないが、高麗尺の否定なくしては、被斎の名譽回復は十分にできない。だから、次の項で、高麗尺の虚構性を述べる。

(二十七)まぼろしの高麗尺

高麗尺といふ名前は中国や朝鮮を含めて史書のどこにも出ていない。あるのは、既に述べた令集解の「和銅格の仮想問答」の回答中にある高麗法とか高麗術という用語のみである。

その内容を見ると、まず「令が五尺を歩としているの

を対比すると代は五平方歩である。対応関係はあるけれど完全とは言えない。だから、錚々たる歴史学者たちが、五平方歩を基本単位とすることに違和感を感じていた。

内田銀藏氏は代の法が歩を基定として起つた徵証はないとして、高麗尺説を斥け、凡そ稻一束を得べき田積を一代としたにすぎないと論じた。これに対して坂本太郎氏も「初め稻一束を得べき地は一代と言われたろう」と一定の理解を示し、弥永貞三氏も「その最も小さな単位は、一定の長さを一辺とする正方形として表現されると考へる方が常識的ではなかろうか。……再考の余地があるのではないか」と述べている。

岸俊男氏も代制の方格地割を論じる中で、高麗尺の五歩が先にあつたとするのは順序が逆であると、弥永貞三氏の考へに同調している。

更に亀田隆之氏は、一段二五〇歩制の出てくる「今足勸文」は慶雲三年格(七〇六)に則つて書かれていながら、当の慶雲格には二五〇歩の記載がないことから、高麗尺の五歩を起源とする説に強い疑問を投げかけている。その後も、虎尾俊哉氏や吉田孝氏などの有力な研究者が同様な意見を出している。

その上、高麗尺の六尺は一二四センチメートルにも達していて、とうてい從来の歩(歩幅二歩)の概念には合わないことも大きな問題であった。

このように、懷疑的な意見が多いなかで、高麗尺が準

定説の地位を得たのは、何と言つても藤田元春氏の『尺度綜考』によつてである。昭和四年に出版されたこの著書が出版文化賞を得て、歴史考古学研究者の尺度に関するバイブルとなつてしまつたことが不幸であつた。

この著書は、歴史研究者には受けが良かつたが、計量史の専門家の間では極めて評判の悪いものであつた。例えば、計量史の先達で、物理学者としても著名だつた天野清氏は『尺度綜考』を「確たる根拠もない昔の尺度の寸法を五桁目まで並べ：まことしやかに書いたり……幼稚な記述があるのも驚くに足りない」と痛烈に批判しているし、同じく計量史研究の第一人者で著書も多い小泉袈裟勝氏も「とうてい科学的な考証に耐えるものでなく、かの狩谷被斎の著述からも大量に引用しているが、結果に置いて被斎の科学性からはるかに後退したものとなつてゐる」と述べている。しかし、小川琢治氏や内藤湖南氏の序文を得た『尺度綜考』で述べられた高麗尺の影響は大きかった。同書で藤田元春氏が高麗尺の根拠としたのは、次の項目である。

- ① 中国の東魏尺が高麗尺に一致。

- ② 四天王寺の現存建物を検出。

- ③ 法隆寺の建物が高麗尺に一致。

- ④ 山田寺、川原寺、比曾寺、毛原寺、高宮寺の柱間等が高麗尺に一致。

(5) 難波京の地割や韓國慶州の地割が高麗尺に一致。これだけ多くの証拠があるのだから、歴史研究者が高麗尺に信を置いたのも当然であろう。しかし、これらの全てが現在では、まったくその証拠能力を失つてしまつてゐるのである。

まず東魏尺は『隋書律歷志』の記載に誤記があり、正しくは『宋史律歷志』が示す唐大尺と同等尺と判明した。また、四天王寺の場合は発掘調査の結果、現存の建物とは全く異なる柱間であつたし、奈良の各寺院の柱間も発掘調査によるものではなかつたので全く信頼できる数値では無かつた。

その中で、唯一の証拠能力を持つたのが法隆寺の建物であるが、これも精密な解析の結果、高麗尺の四分の三の長さがモジュールであり、古韓尺に一致することがわかり、根拠とならなくなつた。難波京や慶州の地割も想定と全く異なつていてそれが発掘調査によつて明らかにされている。

このような状況にもかかわらず、高麗尺が延命していたのは、その後の研究者たちが、遺跡や遺物に高麗尺を当てはめて見ては、高麗尺に合う事例を増やし続けているからである。尺度の当てはめには「そう思つて見るとそう思えてしまう」怖さがある。

この誤りを明らかにしなければならない。それが私のライフケースであり、まず「まぼろしの古代尺—高麗尺」

はなかつた!』を吉川弘文館から上梓した。これは本格的な議論ではなかつたが、出版社が副題として「高麗尺はなかつた」と付けてくれたことで、それなりの効果があつた。しかし、それでは不十分で、学術的な検討によつて、高麗尺検出の事例を全て再検討してその虚構性をあきらかにしたのが、平成十七年の『朝鮮學報』に載せた論文「日韓古代遺跡における高麗尺検出事例に対する批判的検討」である。

被斎が知りえなかつたことを現代の学者は知つていながら、狩谷被斎の業績を軽視した。だから私は、被斎の知りえなかつたことを基にして、被斎の名譽を回復し、新たな研究に結び付けなければならないと思つてゐるのである。

いつの間にか、狩谷被斎讃歌のはずが、自己讃歌に変わつてしまつたかも知れない。しかしあ少し続けたい。それは、被斎に導かれて、古韓尺という尺度を発見し、更には古代の日韓の土地制度が同じであり、古墳築造でも同じ計量系が用いられていたという壮大な構想である。

ここで項を改める。

社 生口(内規)

☆ 同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品發表のための共有の（ひろば）として季刊發行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌發行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会員へのお誘い

本誌愛讀者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になつていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティへのご案内などを差し上げ交流を行つております。

* 同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振

り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座 ○○一七〇一〇一六四五九一
加入者名 まんじ

「秋田県散歩」をゆく

山田嘉久

昭和末年に書かれた「街道を行く二九(秋田県散歩)」は、「ひさしごりで東北の山河や海をみたいとおもつたが、どこへゆくというあてはない」というやや意外な言葉で始っている。

そして最初は「気になる土地」としての庄内を考えてみるが、「自分の不勉強におびえて」(藤沢周平を意識したか?)結局、秋田県に決めた。

「街道をゆく」シリーズは司馬が全国の街道を歩いて、その地にまつわる歴史的事件(コト)や人物(ヒト)を考える読み物だが、「どこにゆくというあてもなく」始った「秋田散歩」だけに、「場所」(トチ)よりも「人物」(ヒト、この本では彼の言う「精神的蒸留酒」)を持った秋田県人)に重点をおいた紀行文となっている。

1 司馬の好きな東北人

司馬は「東北人にしばしば見られる高度の市民感覚と

2 内藤湖南のこと

平成二十一年五月、東北新幹線を盛岡で下車。バスでまず向かった先は秋田県の東北部に位置する鹿角であった。此処は、明治時代の東洋学の権威である内藤湖南(一八六六—一九三四)の出身地である。

正確には「秋田県鹿角郡毛馬内」であるが、江戸時代

か、精神の貴族性」を「蒸留」したような人間群として次の人物を挙げている。

陸羯南(青森県)、原敬(岩手県)、高橋是清(宮城県)、狩野亨吉(秋田県)、内藤湖南(秋田県)など。

さらに「スマート」な海軍軍人の典型として米内光政(岩手県)や井上成美(宮城県)を挙げている。彼らはいずれも「明治の薩長型のよう、閥をつくってそれによって保身をはかるというところがいっさいない」私欲、功名心というものから遠いというのである。

には此處は秋田藩ではなく南部藩に属していた。したがつて、明治後は岩手県に所属すべきところ、意外なことに秋田県に入れられた。

しかし、この地区は民俗的にも学問的にもあくまで南部藩的で、たとえば学問でも秋田佐竹氏の学風(朱子学)ではなく、荻生徂徠派的な「折衷学派」だった。後世、「鹿角教学」または「鹿角学」と呼ばれたが、湖南は幼少の頃から、この学風を学んだことが、彼の独自の学問を打ち立てたことに影響したと司馬は考えている。

なお湖南の祖父の天爵、父の十湾も著名な学者だった。

歴史的に見れば、幕末の南部藩は奥羽列藩同盟に属した佐幕派だったのに對して、秋田藩はいち早く官軍に属してしまったので、日頃、仲の良かつた両者は敵味方と分かれてしまった。最初に仕掛けたのが南部藩。したがつて鹿角兵は南部藩の尖兵となつて隣町の秋田藩大館に攻め入つた。湖南の父も從軍したが、結果は南部藩の負け、鹿角は「朝敵」となつた。

そして翌年、鹿角は秋田県に編入された。

毛馬内にある内藤家は南部藩から派遣されていた城代

の櫻庭氏に仕えていたが、その毛馬内館は正式には柏崎館とか柏崎新城と云われていたらしく、大手口に至る坂道に建つてある白い標柱はすべて「柏崎」となつていた。その一つ「柏崎新城古絵図」を眺めると、独立した城跡のように本丸、二の丸、三の丸、御蔵奉行所が並んでいた。この新城は南部藩主(第二十七代南部利直)が慶長十三年(一六〇八)に、じきじきに繩張りして作つたとある。

その手前に「内藤寅次郎郷宅」の表札がかかつっていた。勿論、湖南自身は昭和九年、京都の山荘で没しているので、今ではだれか肉親の人が住んでいるのだろう。

「秋田県散歩」によると、司馬はアポイントなしにこの家を訪ねているが、彼を接待したのは湖南の姪にあたる老婦人で、あまりにも伯父湖南に似てゐるので驚いたといふ。この老婦人もその時、八十歳だったと記しているので、とつぶに亡くなつてゐるだらうと思ひながら、旧宅を覗いた。

坂を下つたあたりに武家屋敷群があり、このあたりで湖南は生まれたようだ。その近くに小ぶりな「鹿角先人顕彰館」があり、入つてみると殆どが湖南の資料だった。そのほか和以内貞行(十和田湖で虹鱒の養殖に成功)の資料も展示されていた。

しかし、この館は「秋田県散歩」には書かれていないところをみると、平成に入つてから作られたものかもし

れない。

司馬は終生、歴史家内藤湖南を尊敬し続けた。

「秋田県散歩」でも「湖南は世界の古今をおおう感覚を持つていた。しかもその資料の選択にはじつに厳格だった。その透き通った合理主義と、鍵盤の多いピアノのような知的感受性はたゞまなく卓越した「勘」をうみだした」と書いている。

湖南こそ自由闊達な京都大学の学祖ではなかつたかといふのである。

司馬が湖南を敬愛する最大の理由が、江戸中期の無名の独創的思想家富永仲基（一七一五—四六）や江戸後期の思想家山片蟠桃（一七四八—一八二二）を発見したことのようである。

特に蟠桃は大阪出身の商人学者ということもあって、司馬の大のお気に入りで、「街道をゆく」シリーズでも、この「秋田県散歩」のほか「六「仙台、石巻」」「八「耽羅紀行」四「北のまほろば」等に頻繁に登場している。また、司馬の発案により、現在大阪市には「山片蟠桃賞」が設けられている。（因みに最初の受賞者はDキーン）

蟠桃は播磨の百姓家に生まれた。幼少のころに大阪の両替商升屋に丁稚奉公に出されたが、生来の利発さと読書好きを見込んだ主人升屋平右衛門の好意で、大阪の町人によって設立された学問所「懐徳堂」に学び、町人の

露伴は一年間だけ講師を務め、二年後に博士号を取つたが、以後、小説書きに没頭した。

亨吉は露伴だけでなく、前記の同僚夏目漱石も京都帝大に招ぼうとしたが、これは実現しなかつた。

亨吉が湖南に注目したのは、湖南の独創性だったといふ。その学殖に惚れた亨吉は一高校長時代にも、教授に招聘しようとしたが、湖南の勤務先の朝日新聞社が手放さなかつた。京都帝大の時には、文部省が横槍を入れた。文部省の内規によれば「京大教授の任に当たる者は必ず帝国大学の卒業生であること」の条件を満たしていないというのである。

しかし亨吉の奔走によってようやく実現した。

秋田師範学校中退に過ぎない湖南に京都帝大の将来を賭けたというのである。事実、湖南は日本における東洋学の基礎を築くことになる。

湖南が山片蟠桃を発見したのは前述の通りだが、同じ

ように思想家の発見といえば、亨吉の発掘した人物が江戸中期の思想家安藤昌益（一七〇三—一六二）である。

司馬も「秋田県散歩」で「昌益と亨吉」の章を設けて、両者の関係を書いているほか、昌益については、他の「街道をゆく」シリーズ（三「陸奥のみち」、九「潟のみち」、一〇「羽州街道」、一一「因幡伯耆のみち」）

身ながら当代一流の学者となつた。

彼のペネーム「蟠桃」は彼の職業「番頭」から取つたといわれる。

代表作「夢の代」は長い間公にされなかつた著作だが、

その独創的な思想内容が湖南によつて紹介されてから一躍有名になつた。

晩年の彼は破産寸前に陥つていた仙台藩の財政再建に

一役買つているのは「仙台、石巻」に詳しい。

3 狩野亨吉のこと

内藤湖南を京都帝大に招聘したのが、大館出身の狩野亨吉（一八六五—一九四二）だつた。亨吉と湖南は一つ違い、亨吉の父も前記の大館対鹿角の戦いには従軍した。ただし敵味方に分かれで、

亨吉と夏目漱石は日本初の中学校令でできた府立第一中学（現日比谷高校）の同級生であるばかりでなく、同じ五高の教授仲間だつた。以後、亨吉と漱石は深い交友を結び、漱石が結婚したときにはお祝いを届けたことは漱石夫人鏡子の「漱石の思い出」にも書かれている。

その後、亨吉は三十四歳の若さで第一高等学校校長となつた。

さらに新設の京都帝大の文科大学（文学部）長に任命され、幸田露伴を招き、露伴は日本文学史を講じたと司馬は書いている。

でも多く触れているのは、彼の昌益に対する関心の深さを示すものだろう。

司馬は昌益を評して「江戸時代の日本人が生んだ共産主義的思家」（陸奥のみち）と述べている。

昌益は在世中も無名の人で、明治末期、亨吉によつて発見されるまで、この名を知る人はいなかつたが、今は中、高校の教科書に載るまでに知名度は高くなつてゐる。

昌益は亨吉と同じ大館の人。四十二歳のとき、南部藩八戸で町医を開業して、やがて代表作「自然真営道」を著わした。

彼の思想は、徹底した平等主義で、人はすべて同一であるから、ひとしく「直農」（農業労働）に従事すべきもの。しかし現実には上下の身分の差別が定められてゐるので「盜」や「乱」が生じることになる。

昌益が認めるのは農民だけだから、老子、莊子、釈迦などの聖人も認めない。まして將軍、大名や商人も認めなかつた。かなり過激な思想だったので、亨吉は最初、昌益を「破格的人物」と疑つたようだが、詳しく調べるうちに第一等の思想家であると確信したようだ。

4 象潟にて

我々にとつては最後のコースだつたが、昭和六一年秋、大阪から飛行機で秋田入りした司馬はその足で先ず、山

形県との県境にある象潟を訪ねている。

この地は芭蕉の「おくのほそ道」に出てくる地というよりも、司馬にとつては、かつての戦友の住んでいる地なのである。

昭和十八年、学徒動員によつて加古川の戦車十九連隊に入つた司馬は、その後、満州（中国北東部）四平の戦車学校に移る。

この学校で一緒にいたのが、現在、象潟の蚶滿寺住職をしている熊谷能忍なのである。

戦後、司馬はこの戦友とは昭和三十年代に一度会つてゐる。戦友が丹波の僻村にある寺の住職をしている頃だった。

その時、熊谷夫妻と共に迎えてくれたのが幼女の「チ一ちゃん」だったが、二十五年後、象潟での再会時にはチ一ちゃんは「モデルのようにすらりとしたお嬢さん」に成長していたことに司馬夫妻は驚いている。

今回、更にその二十年後（平成二十一年）に蚶滿寺を訪れた我々を迎えてくれたのも、このチ一ちゃん（熊谷智恵子さん）だった。今は東京と象潟の両方で生活をしているという彼女は歯切れのいい標準語で境内内を説明してくれた。

父親の熊谷住職は長期入院中のことだった。

（帰途の車中で読んだビジュアル版「週刊街道をゆく」（秋田県散歩）には智恵子さんが司馬に茶を勧めている

た。

「君がつくったのか」私は、熊谷に、えもいえぬユーモアを感じた。

「つくったんだ」熊谷はいった。

「葦も植えたのか」「植えた」

禪というのはそうあるべきものだと思った。』

と司馬は書いているが、ガイド役の智恵子さんの話では、これは全くの司馬の創作で葦は昔から茂つているとのことだった。

作家の紀行文は油断ならない。

蚶滿寺は平安初期、円仁（慈覚大師七九四—八六四）の創建というだけに境内には堂塔や樹石だけでなく、歴

史的産物（伝説も含めて）が多くある。

西行が歌を詠んだ西行桜、菅原道真の子（歌舞伎「菅原伝授手習鑑」では菅秀才）にちなむ梅の木、また親鸞が腰をかけたという石などである。

さらに北条執権時頼の植えたというツツジもあった。伝説では神功皇后もここに寄られたといふ。

この狭い処だけが温いんです。冬もここだけは雪が降らないんですね」

この本には熊谷夫人がこう言つたと書いてあるが、今回、その子の智恵子さんも同じことを言つていた。

その証拠には、大振りな芭蕉の木が大変な勢いで茂つていた。それが芭蕉の碑の隣だったのがおかしかった。

スナップ写真が載っていた)

勿論、この蚶滿寺は芭蕉の句で有名である
〔象潟や雨に西施が合歡の花〕

境内の中心に芭蕉句碑が建つているが、碑には「象潟の雨や西施がねぶの花」とあつた。推敲前の句だろう。

いずれにしても、象潟を訪れた芭蕉が越国の悲劇的な美女西施を連想した前衛的ともいえる作風には唸るほかない。彼が、先に訪れた太平洋岸の松島を「陽」（楊貴妃）に比して、日本海岸のこの地を「陰」（西施）と唱えたのであろうか。

司馬は「芭蕉は象潟というどこか悲しみを感じさせる水景に、西施のうつくしさと憂いを思い、それをねぶの色に託しつつ、合歡という漢語をつかい、歴史を動かしたエロティシズムを表現した。」と見事な文章を書いている。

その芭蕉がこの地を訪れた時は、このあたり一面、海だつた。

芭蕉がこの地を去つてから百十五年後の文化元年（一八〇四）に起きた象潟地震によつて、象潟の海の底が三、四メートルも隆起し陸地になつてしまつた訳である。

芭蕉が海から島に上がつてきた場所には葦も茂つてい

田に落ち着くが、二十代から七十年代の死まで漂流の人生だった。

彼が秋田時代の一時期住んでいたのが秋田の郊外にある奈良屋である。今では国指定の重要文化財、県立博物館の分室となっている。

我々は江戸期の代表的な大型農家である奈良家の数多くの部屋を見学したが、建坪は百二十八坪と土間の一隅に書かれていた。その数多くの部屋のうち、一番奥の六畳の間（上屋敷）が菅江の書斎に提供されていた。

この部屋で秋田佐竹藩主佐竹義和（一七五五—一八一五）にも拝謁した。藩主の方が面会を希望したものだが、権力の嫌いな菅江は別に会いたくなかったが、「頭巾のままでよろしいなら」と条件をつけたという。（彼は寝るときにも頭巾をかぶっていたので「常かぶりさん」といわれた。）

藩主義和は文化にも理解を示す名君だったが、佐竹家は代々由緒ある大名である。江戸期、二七〇余の大名が殆どが戦国期の成り上がりであつたが、源頼朝以来の大名となると、薩摩の島津氏と佐竹氏しかないと司馬は指摘している。

佐竹家は長く常陸国にいたが、豊臣政権の世では、五十四万石（一説では八十万石）までになった。しかし関が原では三成に好意的中立を保つたため、家康によつて滅ぼされてもやむを得ない立場だった。それが家康の名馬は指摘している。

つたが、そのうち冬から春にかけて日本海に吹きつける季節風によつて埋め尽くされてしまう田畠を何とか守ることに腐心する。

役職も「物書」のまま「砂留役」となり、砂防植林に着手するが、肝心の藩も農民も冷淡だった。

彼一人で、まず藁を束にして砂に半分埋める。それを壁にして柳の苗を植えた。翌年、その柳の稚樹のかげにゲミとハマナスを植える。翌々年にはゲミのかげにねむの木を植える。それらが全部活づいたときに、はじめて砂防の主役である黒松の苗を植えるのである。それには八、九年を要した。

その間、彼は砂の動きを知るために、寒中、ムシロをかぶつて砂丘で寝ることも多かつたという。

司馬は栗田こそ秋田における最大の先人であつたと讃えている。

現在、南北十四キロ、東西一キロに及ぶ日本最大規模の能代海岸砂防林（愛称「風の松原」）にきれいに同じ間隔で立ち並ぶ七百万本といわれるクロマツは、海から吹きつける潮風や飛砂との戦いを示すように、海側に背を向け、同じように傾き、幹に深いシワを刻んでいた。我々は男鹿半島の突端にある寒風山（三五五m）の展望台から、この広大な砂防林を眺めた。

家好みによって減封と国替えだけですんだ。（秋田に移され二十余万石）

このことは会津百二十五万石から米沢三十万石になつた上杉家と似ている。

広大な奈良家敷地内には本邸のほか、北米蔵、南米蔵、座敷蔵、文庫蔵、味噌蔵などが並んでいた。明治十四年、明治天皇を迎えた小休所もあつた。

奈良家初代はその名の示すとおり、大和國（奈良県）小泉の出身で戦国時代に秋田にやつてきた。したがつてこの地は現在でも小泉という。大和出身の当主が、自分の開拓した地に故郷の名をつけたわけである。

5 栗田定之丞のこと

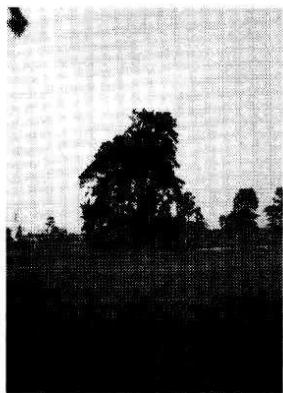
栗田定之丞（一七六七—一八一七）といつても秋田県人以外の人は殆ど知らないだろう。

彼は秋田佐竹藩の家中で、高橋という小さな身分の家に生まれたが、十四歳のとき栗田家の養子となつた。

栗田家も十五石五人扶持の小身で、彼の役職は「物書」（記録を書く役、書記）だが、それも定員外の「加勢」だつた。

そんな名もなき定之丞を有名にしたのは、彼が一人で日本有数の砂防林「風の松原」を作り上げたことだつた。

最初は日本海に出没する異国船を見張る藩所の番人だ



象潟

陰翳の美学（その一）

外山 知

はしがき

花は盛りに月はくまなきをのみ見るものかはと鎌倉期の徒然草に詳述されている。

古来、陰翳の美を贊美するは日本人の特質といわれる。谷崎潤一郎も「陰翳礼讃」の中で、日本の書院に見る隅を取り上げ、陰翳を贊美する論を投げかけている。

明るいリズムを持った歌の翳に、哀調を帯びた短調の曲調に魅せられるのも、その一つと言つてよい。また中世の能の分野においても、シテ役に対しワキ役の重要なが言われるのも、そのためである。私もこの陰翳の美にこよなく魅せられる者の一人である。

古来からこのような美意識に日本文化は栄枯盛衰をたどつて来た。それを改めて見直すことも新しい美意識回復に繋がることと思い、かかるテーマを掲げた次第で

ある。たしかに物象の二面相は必ず私たちの前に現われ、それを意識するか否かは別として、物象を構成する要因となつてゐる。私はこの二面相の翳の部分により美意識を感じる。

表面の明るさに比べて翳の要素は、はかないものと感ぜられるかも知れない。しかしさかないと故に、その価値を認めないではいられない。表面が鮮明に浮き彫りされるのは、翳の力があるからである。翳なくては表面美は浮き立たず、構想力もはかない。逆説的に言えば翳があつてこそ、表が生きるわけである。無邪気に遊ぶ子供達の影法師に二重の相を見、ご婦人の美的アイシャドー。忘れ得ぬ要因として論の展開をなして見たい。

私はこの論攷をもとに、国語国文の持つ素材に哲学的思惟を構想力に生かして、素朴な翳の美をかえりみ、日本文化論の持つ陰翳の美学を取り上げて見たい。

第一章 日本人の美意識

一、四季の美を愛する感性

日本人の美意識の創造は四季を折なす風土にあると言われる。「春は花 夏ほどとぎす秋は月 冬雪冴えて冷しかりけり」と道元禪師（一二〇〇年—五三年）が「本來ノ面目」の中で四季の美を讃え雪月花、花鳥風月にその美を詠いなしたのも、美意識を讃える民族性が風土と調和して育くまれた物と思われる。枕草子でも「五月ばかりなどに山里にありく」の段に、女房達が野山を歩き、牛車の動きにつれて初夏の匂いも濃厚に漂よつくる風情をたたえ、新鮮な感覚を表している。

更に三代集、八代集などの規範的な歌から、やがて連歌を生み、私家集等々と共に、歌を競う習慣が表面化するに及んだ。そして点者が優劣を判定する中世連歌から、和歌の発句、俳諧の道、すなわち室町末期頃から卑俗、滑稽を中心とする俳諧連歌が近世に至つて独立した文芸となつた。

文芸の民衆化する時代の動向をうけて、連歌の繁雜な形式から解放されようと、山崎宗鑑、荒木田守武などによつて、改革されていった。やがて松永貞徳を中心とした貞門（旧派）に集まつた人達が、貴族的な堂上派の学問を民衆へ渡す役割を担い、俳諧式目を定め俳諧確立の進展をなした。

連歌は雅語を、俳諧は俗語を使用し、形式的に用語の自由化が個々の作品に見られる。掛詞、縁語など、洒落、滑稽さを俳風に生かし、おかしみを顕現させた。旧派の制約を排除し、自由な言語使用をなした談林派（新派）の西山宗因一派によつて、古典、謡曲、比喩、掛詞などによる、洒落な軽妙洒脱さを俳風に樹立していく。

歌人西行法師、俳人松尾芭蕉は歌風、俳風の中に美意識を切り開く手振りとして各地への行脚を敢行し、旅先での感性が、美的感受性となつて美学形成に寄与したことは論をまたない。

近世初頭の仮名草子から、文学性豊な浮世草子作家へと活躍した井原西鶴も、貞門俳諧から談林派の急先鋒と蘇生する。花鳥風月を読み込んだ美的感受性の中につけて、その深さは、受け取る側にもたしなむ風格を見得る。

して、大矢数誹諧を生んだ。明暦（一六五六）—寛文、延宝（一六八〇）間の多量の速吟は、やがて浮世草子、散文様式を支えるものとして注目を浴びた。

さらに、蕉風誹諧を樹立した蕉門十哲、与謝蕪村（天

明期）小林一茶（文化、文政期）の古典趣味による華麗さ、印象的、庶民的な生活性に根ざした俳風も、また自然界から人間的な生活感情に、こよない美学を発見した。そうした美意識の対象を眺めることによって、より深い美を創造した。

談林派の誹諧から矢数俳諧を樹立した井原西鶴は、大衆化、娛樂的な川柳、狂歌などの町人文學の知的な遊戯の影響を受け、浮世草子作家へと転身し、新しい美意識の地平を開拓した。すなわち元禄文学の金字塔をうちた。

近世小説は西鶴の模倣の域を越えられず、商品化戯作化の道をたどった。しかし近世初期前期上方時代に、芭蕉や西鶴と共に劇作家である近松門左衛門の淨瑠璃を逸する事は出来ない。琵琶及び三味線の伴奏による語り物として、言語だけではなく音の立体的世界に、操り人形の美を芸術にまで高め、やがて歌舞伎の全盛期を迎えることになった。

後期江戸町人の生活感覚や美意識にあつた通人文學に目を向け、赤本、青本、黒本、黄表紙、合巻と前期読本時代。続いて後期読本時代を代表する諸本にも、江戸末

期に見る町人文化の美意識。江戸の粹、意氣の理念を育み、町民の氣つ風のよさを顕現させた。これも美学の陰翳と言つてよい。

二、美に対する感受性と流れ

近代の黎明を告げる文明開化は、啓蒙期の作業として、先進諸國の文化の移入にあつた。中央集権的近代国家体制確立途上で、あくまで皮相的な導入だった。根幹は前時代の戯作文学、啓蒙家による新文学、翻訳小説、政治小説が僅かに流行した。

福沢諭吉の「學問のすゝめ」「文明論之概略」坪内逍遙の「小説神髄」などは脚光を浴びた。本格的には明治も二十年代になつて、硯友社を中心とした擬古典主義、そして「文學界」に集まつた前期浪漫主義者が台頭した。しかし性急な文明開化と、極端な欧化熱は、鹿鳴館を期に保守的思想や國粹主義を生み、擬古典主義が再評価の対象となつた。當時歐洲を風靡した浪漫主義文芸思潮が、この期を二分する文壇の潮流となつた。やがて主知的傾向を担う本格的な文人として、鷗外、漱石の二大巨匠の作風が展開された。

鷗外はドイツ留学によつて、ハルトマンの美学に傾倒し、主知的傾向を浪漫主義的作風に生かした。大正期か

ら歴史小説で武士の倫理を問題にし、自然科学的実証方法による史伝に移行。現実と理想、個人と運命を諦念する思惟へと考察された。

漱石はイギリスへ留学、低徊趣味を唱えて高踏派、余裕派と呼ばれ、俳諧的手法を巧みに創作に生かした。虚偽と因習に、東洋的倫理觀と西欧的合理主義によつて批判を浴せた。同時に醜いエゴイズムを追求し「則天去私」によつて救われようとした。その手法は近代日本文学の明暗といつてよい。

先行するヨーロッパ文学は、導入期に浪漫主義文芸思潮の取り入れ試行に終始していた。我国では既にヨーロッパで翳の存在となつていた自然主義思想を、逆輸入の形で攝取するに至つた。

島崎藤村は明治の現実に絶望し、漂泊の旅の中から、新体詩の世界に曙光を見出した。信州小諸での結婚生活は一つの転機となつて、自然の風物の写生を経て、詩から散文に向かつた。若菜集は青春の夢と哀愁をうたつた、新鮮な日本近代詩の記念碑的存在でもあった。

落梅集で、回想と感傷を語る漂泊者が五七調の珍重な韻律で、青春の終焉と詩への訣別をなした。浪漫主義から自然主義文芸思潮へと、相次ぐ作品群に新鮮さを育くんだ。ヨーロッパの思潮と前後した関係もあつてか、自然主義を支える近代的自我の解放が、やがて私小説のジヤンルに、大胆な自己表白を展開することになつた。

明治の社会を批判し因習の打破と、自我確立をめざしたが、當時急を要したヨーロッパ思潮の科学思想などの欠如もあつてか、本質的には対決出来なかつた。下層庶民の陰の生活を描くに終始した。その下降性に脚光を浴びせたのが、白樺派であり、耽美派、第三、四次「新思潮」の新理知派であつた。

自然主義への反動として、世紀末的退廃、官能美への耽溺により、人間の感覚を開放し進んだのが耽美派であった。ヨーロッパ文学最盛期の思潮導入現象は、この頃に至つてネオ文学となつた。いわゆる、新現実主義、新感覺派、後の革命の文学、プロレタリア文学として、大正末から昭和の社会主義風潮に精神的に変動する中で、前衛芸術運動となり、散文にも波及、新旧交替期の感を思わせた。

昭和十年代に左翼文学の弾圧、崩壊となつて、新心理主義、主知主義、いわゆる芸術派作家の成熟、行動主義の主張も、戦時色に窒息していった。そして戦後の文学は混乱と廢墟の中で、

一、既成作家の私小説、風俗小説

二、戦後派文学

三、プロレタリア文学

と、三分類され、民主主義文学の誕生をなした。

戦中の暗い悲惨な体験を負つた次元から、戦後派文学がマス・メディアの登場で純文学と大衆文学の区別が少

なくなつて、ル・ポルタージュや、ノン・フィクションが登場した。前後するが朝鮮戦争勃発、翌年、講和条約、日米安全保障条約調印などは、少なからず文学者にも影響を及ぼし、政治と文学の関係も絶望、分裂状況を生んだ。

三十年たつても戦争の傷痕は癒えず、映像で育つた作家達による断絶は、同時に再生と循環を繰り返しながら作品を生んだ。その頃、文芸春秋社長菊池寛の発意で、「芥川賞」と「直木賞」を授賞することになり、活気を呈した。芥川賞の第一回は石川達三の「蒼氓」であつたが、戦後、昭和三十年下半期に「太陽の季節」が新鮮な青春の感覚で受賞し、石原慎太郎は時宜を得た。既成の道徳や習俗に対し理由なき反抗を宣言したのは、余りに有名で破格的存在だった。

今日の諸文学は、旧態打破の中にアイデンティティーを表現意図に、自由奔放さを競つてゐる。長短編小説を時の思潮の中で、その動きを捕えてきた。前述した森鷗外、夏目漱石、芥川竜之介、川端康成等については、作品感覚に対する陰翳の美学を捕えることなく割愛してしまつたが、後に譲りたい。巨匠川端康成の作品が、四三十年代に世界的に認められ、ノーベル文学賞受賞となつたので、日本文学の美意識が、世界性を帯びるに至つた。これをきっかけに我が文壇も大きく進展したことは論を待たない。日本人の美意識の中で本流をなす分野を思

野派の正信、元信などによつて、周茂叔愛蓮図、大仙院花鳥図など、ルネッサンス様式と呼応する所が多い。

彫塑、彫刻の領域は絵画、工芸の世界より早く、ごく素朴なものとして、古墳時代の埴輪に見る男女の服装、豪族の居館を構成する。また、切妻造の屋根六個の堅魚木をのせる正殿など、埴輪と共に古墳から発掘された。

繩文、弥生時代の土器も生活に密着した形で弥生中期（BCとAD）まで進展した。壺（貯蔵用）、甕（煮炊き用）、高杯（供饌用）繩文期に比較すると薄手で硬く、均齊がとれている。赤褐色、淡褐色となつた。古墳時代の土器、須恵器はそれぞれ弥生式土器の系統と朝鮮系の土器で、須恵器は五世紀に伝えられ形態も進化した。勾玉などが身体装飾、祭祀に使用され、硬玉、碧玉、めのう等も出土した。

飛鳥、白鳳期には仏教文化の世界性を見るようになつた。忍冬唐草文様、即ちスイカズラの葉と蔓を連続文様にしたもので、エジプトに起り、ギリシア、ローマ、サン朝ペルシア、西域に伝わり、仏教美術と結合して、中国南北朝、朝鮮、日本に伝来した。

建築で法隆寺金堂、五重塔、中門、歩廊、彫刻では北魏様式に法隆寺金堂釈迦三尊像、夢殿救世觀音像（木像）、飛鳥寺釈迦如來像、南梁様式になると法隆寺百濟觀音像（木像）、広隆寺半跏思惟像（木像、国宝一号）、中宮寺半跏思惟像（木像）、などが有名である。

想史の形で論述して来た。忘れてはならない他のジャンル評論、近代詩、口語自由詩、昭和の詩人、今日の詩人、短歌の革新、近代歌人の系譜、流派。

更に近代俳人の系譜、俳人の流派、戯曲、主要新聞、雑誌等々だ。長短編の小説群同様に思潮を構想力として取られ、その中に陰翳の美学を鑑賞しなくてはならないが、これは後述することとする。

三、美術、工芸、彫塑と仏教文化

次に美術、工芸、彫塑の世界に移る。

ヨーロッパのアラベスクからロココに至る諸芸風は、奈良期に唐草文様として白鳳、天平の仏像絵画に影響した。平安の両界曼荼羅、高野山聖衆來迎図、平等院鳳凰堂扉絵など、いずれも仏教絵画から物語文学の物語絵に、またロマネスク、鎌倉期の動的な絵巻、伝記物、縁起物、合戦物等の絵巻、草紙など、室町末期には、絵画家、狩野永徳の洛中洛外図屏風など、狩野吉信の職人尽図屏風「機織職人」などに、大和絵の技法等が重ねられた。やがて水墨画が北山文化に明兆、如拙（周文など）によって、寒山図「可翁」、妙心寺退蔵院瓢鮎図「如拙」が描かれた。そして東山文化を代表する雪舟の四季山水図巻「山水長巻」、秋冬山水図、つづいて土佐派の光信、狩

絵画・工芸では、法隆寺玉虫厨子扇絵・須弥座絵・施身聞偈図など、工芸では玉虫厨子（金工）、獅子狩文様錦（染織）、金銅灌頂幡、中宮寺天寿国繡帳（刺繡）、伎楽面などがある。

白鳳文化の建築には、藥師寺東塔、彫刻には法隆寺阿彌陀三尊像（金銅像）、夢違觀音像（金銅像）、興福寺佛頭（金銅像）、藥師寺東院堂聖觀音像（金銅像）、藥師寺金堂藥師三尊像（金銅像）、絵画、法隆寺金堂壁画、高松塚古墳画、古墳壁画を飾る彩色あざやかな仏像及び女人像などは、七世紀末から八世紀初めのものと推定されている。

天平期建築には法隆寺伝法堂、夢殿、東大寺法華堂、（三月堂）、転宮門、正倉院宝庫、唐招提寺金堂、講堂などがある。

彫刻にあつては、興福寺八部衆像（乾漆像）、興福寺十大弟子像（乾漆像）、東大寺法華堂不空羈索觀音像（乾漆像）、東大寺法華堂日光・月光菩薩像（塑像）、東大寺法華堂金剛神像（塑像）、東大寺戒壇院四天王像（塑像）、唐招提寺鑑真像（乾漆像）、唐招提寺盧舍那佛像（乾漆像）、聖林寺十一面觀音像（乾漆像）、新藥師寺十二神將像（塑像）。絵画に正倉院鳥毛立女屏風、藥師寺吉祥天像、過去現在絵因果経などがある。

工芸には、正倉院宝物（螺鈿紫檀五絃琵琶）、東大寺大仏殿、八角灯籠など、一つ一つ国宝、重要文化財に列

挙され、仏教文化の粹となつてゐる。そこには日本人の美意識の内に秘める陰影の美学の深さを、そこはかとなく感じさせるものがあつた。

室町期から安土、桃山文化は、西欧のルネサンス様式の影響をうけて、我國でも国風の花を咲きそめた。書道の分野には三筆、嵯峨天皇、空海、橘逸勢、三蹟としては小野道風、藤原佐理、行成などの書家があり、仏教、神社平家納經等。いずれも絢爛豪華な装飾、金泥の紋を輝かせる陰影の隈が、美を引出させる役割をになつている。

国宝、この美学は、やがて建築に城郭様式となつて現れる。代表的なものとしては、連立式小天守に大天守をもつ優美な平山城、西本願寺飛雲閣、二条城二の丸御殿の遠侍、大広間、黒書院、白書院などである。桃山文化を代表する遺構が、今日世界遺産、あるいは国宝、重要な文化財として当時の権勢を偲ぶ。様式は西本願寺唐門に入母屋造、前後に唐破風がつき、豪華な彫刻装飾が施されている。同じく書院鴻の間は豪華華麗な書院造で、伏見城の遺構と言われていたが。

近年では江戸初期の新築とみなされ約二百畳からなり、上々段には違い棚、付書院が設けてある。ルネッサンス様式で比例と調和を重んじる傾向として、

一、自然から人間性へ、即ち物と心、自然の理念との

融合として人間性を描く。
二、レオナルド最後の晩餐は一点透視、遠近法。
三、中世の職人的な性格、依頼主の注文に応じて壁画、絵画、彫刻の作成。

すなわち万能の天才的な手法が我國にも多分に影響したのである。

四、豪華な建築と貴族社会

続いて寛永期の文化になると前様式からバロック様式へ、特徴として国王の権力を背景に華麗で豪華、壮大で劇的な要素を持つた。この期の建築では、宮廷の建築様式、桂離宮、(数寄屋造)、日光東照宮陽明門、(權現造)修学院離宮庭園、清水寺本堂などがある。

絵画では俵屋宗達の風神雷神図屏風、狩野探幽の大徳寺方丈襖絵などがある。

工芸には、舟橋蒔絵硯箱(本阿弥光悦)、色絵花鳥文

深鉢(酒井田柿右衛門)、など有田焼、薩摩焼、唐津焼、高取焼、平戸焼などと注目を引く作品が多い。

元禄文化期には、仏教は幕府の保護と統制のもとで、教義上の新たな発展はみられなかつた。かわつて儒学、国学、自然科学、絵画、工芸などが発達した。特記すべきは、絵画の土佐派、秋効鳴鶴図(土佐光起)、住吉派

の洛中洛外図巻(住吉具慶)、装飾画では紅白梅図屏風。六曲一隻屏風では、室町期桃山文化の唐獅子図(狩野永徳筆)が見られる。

更に六曲一双にも発展するが、光琳の紅白梅図屏風は中央に装飾された水流を、左右に紅白梅を描き、梅の一本枝に至るまで考え方抜いた画面は、何一つ動かすことの出来ない構図を持つてゐる。光琳の生涯が凝縮された作品といえる(二曲一双)。また同じく燕子花図屏風は、燕子花の花と葉だけを金箔の地に緑青、群青の色彩で仕上げ、花の群の大小、疎密、高低のみで画面を構成している。陰翳の美学の典型と言つてよい。

菱川師宣の浮世絵に見返り美人図があり、師宣が浮世絵の一枚摺りの版画を始めたことは、絵画史上画期的なことであつた。

工芸には、八橋蒔絵螺鈿硯箱(光琳)、色絵藤花文茶壺、色絵月梅文茶壺(野々村仁清)(京焼)、満月の下に咲き香る紅梅を上絵付した作として注目を引く。高さ三十七センチの壺の表面に見事に陰翳の美を生かしてゐる。パロツクから口ココへと十八世紀になつてフランスを中心に行はれた美術や建築の様式が我國へも入り、浮世絵、(錦絵)として美人画、役者絵、相撲絵、風景画と、鈴木春信、喜多川歌麿、葛飾北斎、東洲齋写楽等が輩出し、中でも、富嶽三十六景(北斎)、高名三美人、(歌麿)などは繊細優美な錦絵を描いた。

文人画は明・清の南画の影響を受け、文人、学者が余技として描いた池大雅、与謝蕪村、田能村竹田、谷文晁、渡辺華山などで、華山の「鷹見泉石像」は陰翳をほどこした洋画的な筆運びで写実的に描いてゐる。近世肖像画の傑作といつてよい。池大雅の「十便十宣図」(釣便図)、は十便のうち釣便図は約十八センチ四方の小画面だが、南画の特色を構成に生かしてゐる。

写生画は応挙の「雪松図屏風」は、狩野派の画法に西洋画の遠近法や陰翳法を加えて、客観的な写生画を創作した。洋風画なものでは平賀源内の「西洋婦人図」があり、これは蘭学の興隆と共に化政期に洋風画學習の先鞭をつけた作品である。銅版画も試み遠近法の手法を駆使した。

十九世紀にはロマン主義、写実主義と並んで、自然主義の印象派、また野獸派のマティス、ルオーなど、フォルムの単純化を鮮明な原色による大胆な表現が現れた。また立体派のブラック、ピカソなどは、対象を幾何学的に分解し、立体的に再構成することによつて、抽象化をはかつた。

我國の絵画も、日本画、西洋画、それに彫刻と、それぞれ明治文化を支えた。「悲母觀音」は狩野芳崖が死の直前まで筆をとつてゐた作品である。橋本雅邦の童虎図は、六曲一双の屏風に風をまき、波を起して対決する童虎を、伝統的な狩野派の豪壮な題材として取上げ、狩

野派の技法を生かしながら、新しい構成と色彩を生み出している。

横山大観の「無我」は、早春の野に歩み出た子供の何気ない主題の中に、日本画の道を示唆している。西洋画では高橋由一の「鮭」は身近な題材を選び、色や形だけではなく質感や重量感も出そうとした。静物画に迫力ある作品を残している。この荒縄につるされた「鮭」は、まさに日本での西洋画の出発点といえる。

黒田清輝の「湖畔」（一八九七）は西洋画の発展に貢献し、夫人をモデルに描いた。苔の湖を背景に風景と人物を巧みな構成でまとめている。和田英作の「渡頭の夕暮」は、一日の農作業を終えた一家が家路につくため渡船を待っている。夕暮の詩情の中で一日の終わりを巧みに表現、これはミレーの晩鐘や、落穂拾いを思わす伝統的手法を持つ作品である。

彫刻には荻原守衛の「女」（一九一〇）があり、これはロダンの「考える人」に感動して彫刻を始めた三十才の遺作となる。竹内久一の「伎芸天」はシカゴ万博の出品作で、伎芸をつかさどる天女を華麗な極彩色で仕上げている。

建築にあつては、

鹿鳴館（明治十六年）（設計者コンドル）は、舞踏会が欧化政策の象徴となつた。

ニコライ堂は日本ハリスト正教会の聖堂。（東京駿河台）

「旧日本銀行本店」辰野金吾、明治の銀行建築の代表的な物。「旧赤坂離宮」（片山東熊）、これはヴエルサイユ宮殿などを手本に、大正天皇の東宮御所として建築。

東京駅「辰野金吾の作」鉄骨煉瓦造。

大浦天主堂（長崎市）、フランス人宣教師が建立。木造であったが一八七五年煉瓦造に改造。

以上多くの西洋建築様式が今日でも、そのまま現存し、価値的に文化遺産を誇っている。

二十世紀絵画の特質は、クレーの表現派、超現実派、抽象絵画を現出させた。我国でも大正・昭和前期の文化を代表する横山大観の「生々流転」（一九一三）は約四十メートルの長巻で、山あいの溪流が大河となり海に流れこむ、移り行く水の姿で人の世の変転を表現した大作である。

西洋画では岸田劉生の「麗子微笑」がある。これは肩掛けをかけた娘麗子を描いた最も優れた作品とされる。また梅原龍三郎はフランスでルノワールに師事したが、「長安街」では強い色彩を用い、自由奔放で東洋風な絢爛豪華な画面を作成、個性豊かな作風を完成した。この他にも主な作品としては「裸婦扇」「紫禁城」「天地鏡秀」「北京風景」等がある。

彫刻では高村光太郎の「手」（ブロンズ）（一九一七）が有名である。自分の手を見ながら製作、人差指を中心

に手のもつ空間的広がりを巧みに表現している。

近代建築では巨匠アーメリカ人、ライトの傑作と言われた旧帝国ホテル（現愛知県明治村）は、煉瓦と大谷石の材質を生かした壁面構成が有名である。また横河民輔の「三越本店」なども、昭和期を飾る芸術作品と見てよい。

戦後は絵画、彫刻、工芸、建築など、自由奔放な手法で展開され、とくに二十一世紀になると超高層ビルが我が物顔に偉容さを誇っている。

なお、貴族社会の美意識で欠くことの出来ない茶道について述べる。

茶は中国で薬用として漢代から飲用され、唐代（六一八から九〇七）には僧侶の修行に淹茶が用いられ、一般化された。九世紀頃、陸羽が「茶經」を著し、茶礼が文人間で嗜まれ、宋代（九六〇—一二七九）に抹茶法が、南方禪学僧の間で生まれた。

我国へは奈良朝の遣唐僧によって、もたらされた。たゞ文献には嵯峨天皇（八〇九—八二三）が近江、唐崎行幸の時、僧永忠が茶を奉った事をきっかけに、公家社会に広まつたと記されている。当時は唐風の「淹茶」、鎌倉期には宋風の抹茶法で、南方禪学の栄西禪師、弟子明惠上人によつて、修行僧の間で広まり一般に普及した。南北朝、室町初期にかけ公武の上流社会で、宋代の闘茶が流行し、その後で酒宴が行われた。点茶は禪院の茶礼として和様化し、「茶の湯」へと発展した。

利休は織田信長、豊臣秀吉の権力地位を利用して、改革を大成した。数寄屋の茶室も、四畳半、三畳、一畳半、一畳半も作られ、高貴、下人の区別なく、躰口から出入りした。茶室に付属する庭も露地と称し、会席料理もわび仕立に振舞い、質素なわびたものに禪の境地を茶道の中に完成させた。亭主は客を露地に入る時から出るときまで一期一会の心境でもなし、形式と精神が一体となつて大成された。

しかし千利休は豪華絢爛好みの大閤秀吉とは所詮合わ

ず、権力の前に抹殺された。

「高きを知るものは、より低きを顧みない」

剛よく柔を踏みにじるに等しい。壮大な権力も時に権力意識を失つて権力攻争の中に倒れるのが常と言つてしまい。利休なき後、茶道は利休七哲といわれる、蒲生飛驒、細川二斎、瀬田掃部、芝山監物、高山右近、牧村兵部、古田織部などに受け継がれた。

古田織部は徳川秀忠の茶道指南役として、織部の創造した織部焼は茶器として名高い。その門弟に、小堀遠州、本阿弥光悦が傑出した。遠州は茶室建築、庭園、国焼窯と新体系を築き、将軍家光に茶の指南役として、遠州流が江戸期武家社会に大きな勢力を握つた。しかし千家も後に許されて再興し、長男道安の弟子に金森宗和、桑山宗仙がいた。宗仙の弟子片桐石州は四代將軍家綱の指南役として幕藩を支配し、鎮信派（松浦鎮信）、不味派（松平不味）と、各流派に分かれ発展した。

千家の長男道安は細川家の茶頭となるが、病身だったので、次男少庵に利休の茶室「不審庵」が与えられた。三世「宗旦」（少庵の長男）には四人の子があり、宗左が不審庵を継いで「表千家」を、宗室が「不審庵」の裏に「今日庵」を建て、「裏千家」を、そして、宗守は高松藩の茶頭を辞して京都武者小路に「官休庵」を建て、三人が「三千家」として「上流」を、藪内流を「下流」と称して競いあつた。

日本では古きよき時代の装飾感に魅せられ、日本的な美意識が見なおされている。殊に女性の着物着付教室に愛着を感じる婦人層にも、日本人の美意識の中に潜在性を見得る。西陣、友禅染、大島紬、唐津染などが、着こなし上手と相まって、伝統的な個性美を顕現する。豪華な美を挙げなくとも、ちよつとした素材をたくみに着こなす愛らしさに、思わず美を感じずにはいられない。

建築でいえば、古代からの建築様式、檜を用材に生かした日本建築の善さといえようか。床の間の違い棚、書院風の明り取り窓、内部様式、隈をもつ柔らかな障子、唐紙の棧、茶室兼用の間、食卓の構造様式など、それぞれの雅にあやどられた様式が今に息している。日本建築のよさは西洋建築を合理的に取り入れようとする、近代建築と相対をなす。鉄筋のよさは、和風様式を一変するものを持つ。

窓枠の大きさ、日射度と部屋の感覚、生活空間の広がり、その生かし方、白亜の色調など、どの内部様式にも、インテリア感覚、合理論的な生活のしやすさ等を育んでいる。これも時代の生活様式に併せて和洋折衷の生きた

その他に宗偏流、庸軒流、普齊流、松尾流、久田流、堀内流、織部流、遠州流、宗利流、石州流、表千家不白流、江戸千家流等がある。茶道が幕藩体制の中で、大名、武家等の嗜みとされたからである。

そのような中から、家元制度が確立され、格式化して、秘事口伝の風習が止まなかつた。しかし明治以降は新時代に順応して大衆化する事で発展した。戦後は時代の欲求もあって「立礼」など、新しい点前も普及している。

五、美と風土性

美しい環境風土に包まれた我国にあつては、日常生活の起居動作は、すべて美の中に去来すると言つて過言ではない。

或人は日常茶飯事に使用する食器、陶芸、食物の美的な味い方、四季を通して我々は、その美を食卓に供する。美味なものを育くむ意図作用は、我々の日常生活の中に取り入れられ、美味覚を感じる。それは衣服を例に取つても明らかで、かつては日本の風土に密着した風雅をそのまま、染織の技に導入して来た。流麗、風雅さを装い着こなした。

美的な表面性に、陰の部分の特性を、如何に具現化したか。雅も世の移り變りと共に実用性が支配して、美的的であり、個性的日本美を培つてゐると言える。「日本人と美意識」と題して論攷し芸術的分野の流れを一部分、垣間みて來た。

奥深い分野については、更に後述にとゞめる。四季の変化に富む我が國は古くから、その時々に応じた生活の変転を楽しみ、その環境の中で美意識を培つてきた。そこには我々日本民族が持つ、美に対する感受性、感覺性が、風土に育てられ、風土に密着している。個性的現代感覺の中に息づいていることを思えば、より日本的な感性が蘇り、感覺が細やかに我々文化を包んでくれる。

古きよき時代の感覺形成を抹殺することなく、現代感覺の中に生かして行くことが、我々の急務と言つてよい。現代人の意識も大きく変化している今日、破格、分別、

結合、統一、復興と、種々な傾向をもつて歩み続けてい
る。

価値意識も多様化している。現代社会の中でアイデンティティが強く求められる時、美意識の多様化も必然的に顕現される。そんな多様な文化を遺産として守り続けることが、今切望される。

第二章 美意識に見る陰翳

一、わび・さびの理念

以上日本人と美意識と題し、美に対する感受性を展開して来たが、次に中世日本人の精神構造、禅の哲学など、美意識の陰翳について述べる。

中世の文学理念「わび・さび」の源流は、臨済宗を宋から招来的禅師によって発展し、中世日本人の精神構造を作りなしたと言つてよい。当時に見る石を組みする事によつて庭を鑑賞する「石庭」雅は、美的構造の一端といえる。

敷きつめられた白砂が波を表現し、金銀に輝く中の石組みの調和は、まさに「虎の子渡し」で有名な禅寺の竜安寺で、組み方も、どの方角から見ても、一つの石が翳をなすことによって、表面立てられた美を顕現する。静かに座して黙すれば、その感覺美が陰翳の中に浮かび上

がり、我々を釘づけにさせる。

そこから禅が生まれ、禅の哲学が生れる土壤を作りなしたと言える。そこに「絶対無」という東洋哲理の根本が投げかけられたと言つてよい。その禅寺を鑑賞、探勝すれば、そこに「わび・さび」の理念を生むに至つた茶人の雅がわかる。茶の伝来については、留学僧を通して持ち込まれ鎌倉初期、宗派の区別なく茶は仏門を介して広まつた。やがて流派を生み发展。

庭園鑑賞と茶の湯は不分離の関係で進展し、茶道に見る陰翳の美は、茶の湯を立てる茶室にある。それは「一拳手一動作」による、翳の要素を作りなすことによって、光を顕現させる。これによつて茶室の構造も前述の如く大きく変化して行く。利休の二層の小空間に亭主と客人が座つた、分別する台目柱のゆがみこそ亭主のわび意識を象徴させる物として、注目される。これが「わび茶」の育成となつた。利休の禪的なきびしさ緊張感こそ、「わび茶」の象徴であったことは論をまたない。

二、書の美学と禅文化

書の分野でも、古今の禅僧の墨蹟が、生きものであるかのように伝わってくる。そこには見る者の心を大きく包み込んで、語りかけてくるような美や、磨かれた人間の個性美が、より感覚的で、直接的に伝つてくる様な、心洗われる感動を受ける。それは作品の中に人の心を打つ、高僧の「心の世界」が、筆跡となつて私達にせまつてくるからである。

空海の「風信帖」、最澄の「久隔帖」、中国で学んだ学僧などの墨蹟は、禅僧の修行の総決算なのであるのだろうか。末期の絶筆遺偈は最後に到達した心境を渾身の力を振りしぼって書いたもので、死生の域を超えた深い悟りの境地とでもいえようか、迫り来るものを感じる。

聖一国師（円爾）の作にも技法の巧拙ではなく、それを超越したものを見ることが出来る。当時大陸佛教界の新風であつた大陸禪の伝来は、宗教だけでなく禅文化全般にわたつていた。

従つて、当然書の世界にも大きな影響があつたことは、前述の通りである。大陸の書風を学んだ崇西の「孟蘭盆・一品經縁起」も、宋代の黃山谷の書風を伝受した。曹洞宗の道元も深草時代に「普勸坐禪儀」を美しい蝶篆に楷書で書かれ、その剛直で典雅な筆法は、純粹で理想家肌の人柄をよく表わしている。

鎌倉期に入ると禅文化が茶道と相まって、それまでの野性味を帯びた鋭い書風が、大徳寺の茶掛の墨蹟のようになつていつた。禅宗の書家達によつて、禅文化が支えられた。豪壯な書風は、中国書家に多く、京都五山、鎌倉五山に散見出来、共通な陰翳を踏んでいることは見逃せない。

潤滑に見る枯山水は、中国を時めいた当時の書家に加えて、我国の禅文化の象徴といつてよい。やがて五山の禅を象徴する夢窓国師と、その門下の義堂周信、絶海中津などによつて、五山特有な型に整つていつた。

もちろん、元朝の趙子昂、虞伯生などの書風の影響が支配的であつたことは論をまたない。さらに室町から江戸期に尊円入道親王が開いた、青蓮院の末流である御家流も形骸化し、芸術性を失つた。そんな中にあつて、一般的には文人や儒者の唐様が書の中心をなしていつた。

黄檗禪の隱元隆琦（いんげんりゅうき）、木庵性瑫（いんげいじょう）即非如意（そくひにじゆ）（一六一六—一六七二）は、隠木即の三筆と言われ、肉太で力強い。この大陸風の書は、萎縮していた当時の書道界に新風を注いだ。寂巖（じくさん）（一六一一—一八四）慈雲飲光（じうんおんこう）（一七五八—一八二二）などは、唐の懷素や平安朝の代表的な「秋萩帖」（あきはぎょう）を学び、無類の純粹さと氣高さを持つ。時代を超えた永遠の創造性を生み出し得たのも、この頃であつた。

茶道にまつわる禪文化の中で、書の分野をかいま見てきたが、陰翳の持つ思惟的世界は、同時に禪道の深淵さに直結するものであることに改めて思いを馳せた。

現代の書は懷素、王羲之の「十七帖」を盛んに習い込み、独自の書風を樹立した。亡き鈴木翠軒の「唐詩七言二句」昭、三四等。淡墨のよさを生かし、李白の詩句を書いた作品には日展出品漢字の部で驚愕させられた。

良寛の仮名では「寸松庵色紙」の影響を見のがしがたい。陰翳の美を極端に意図した異色書家で、書風は直観的、感覚的な情趣の世界に青墨の美を追求し、一世を風靡した。比田井天来、尾上柴舟は、国文学者で、同時に仮歌を書に上代様復興の気運を、平安朝に求めた。特に仮名の王朝趣味、美しい料紙を継いだ巻物に万葉集の歌を抜き書した作品は、学術的研究に裏打ちされた陰翳を見る事が出来る。

宮島詠士、川村驥山、木俣曲水、豊道春海、手島右卿、日比野五鳳、安東聖空、金子鷗亭、青山杉雨、宮本竹逕、村上翠亭、樺倉香邨、女流書家では、熊谷恒子、藤田保子、筒井敬玉などの若い新人は、古典技法に新たな諸感覚を折衷させ、自己の生きる境地を見出している。

女流書家で最も心引かれる京都の「園家文苑女史」の「心書の会」は、京都・東京に多くの門弟を持ち、作風は新しい造型性の上に感覚的なものを加え、陰翳の美を表現に生かしている。「文苑女史」は鈴木翠軒門下の直

次に舞台芸術についての陰翳の美学を触れてみたい。舞楽、能、狂言、歌舞伎、文楽はともに、日本の伝統演劇である。舞楽は一千余年の歴史を持つ宮廷貴族の芸能、古くは七、八世紀頃アジア大陸の各地から輸入され、固有の民族様式を持っていたと思われる。平安初期には日本古典舞楽として整理統合され、今日の舞楽の原形が形成された。

左方、唐樂を中心とした中国系統と、右方、高麗樂の伴奏をともなう朝鮮系統の二分類や、序破急の整備など、左舞と右舞を一曲ずつ組合わせた番舞など、今日でも宮廷舞楽に伝承され雅楽として演奏されている。一人舞の「陵王」、二人舞の「青海波」、四人舞の「春鶯囀」といった舞のほか、優雅な「平舞」と、「万歳樂」「延喜樂」など動きの激しく活発な「走物」（陵王）などに分類されている。さらに、楯や鉾など武具などを用いた武舞や、子供が舞う「胡蝶」「迦陵頻」などの童舞もある。

舞楽の動きもさることながら、舞楽装束が曲目によつて決っている。左方の「万歳樂」十五曲、右方の「延喜樂」十五曲では、袍、下襲、半臂、忘緒、金帯、指貫、赤大口、踏懸、糸鞋の一揃が用いられる。袍の地は左方が朱色、右方が萌黄色で、左方、右方ともに、五彩の糸で獅子丸の刺繡がされている。

左方は「五常樂」六曲、右方は「登天樂」四曲を用い

流書家に幼なくして師事し、古典書法を学び、独自の書芸を磨き「書は心なり」の境地を体得した。現代の文字から自由な発想で「心」を創作する書へと、「生・心」など、あます所なく顕現している。

創作過程の中に入墨、入魂の技なるか、淡墨、青墨、茶墨を駆使、創作途上させずして出来上がった状態。「小円空」（あわぶく）が水泡、水玉、しぶき、又楽しさや、音を表す擬態を表出し得た感触に驚喜し、淡墨で作品「生」を描き続ける。

墨の放つ五彩で「心書」に陰翳の美学を顕現させている。印象派でもなく前衛派とも異なる独自の心を持つ異色書家として、個展に活路を切り開き好感を呼んでいる。国内はもとより、ニューヨーク、パリーと国際的にも高く評価され、陰翳の美学に富む、作風樹立に精魂を傾け、京の雅を感性に滲ませていると、言つてよい。

今、禅僧の持つ書の分野に陰翳を求め、また今日の「心書」に磨きあげられた作風を観る時、私達の持つ潜在的な美意識を如何に表現に結び付け感性美を昂揚化して行くか。流動変転する高き感受性と思惟的世界。まさに哲学（美的内在）の世界にほかならない。なお、カントは純美学を「判断力批判」で説くが、感情面で体系的バランスを欠くとも指摘されている。

三、雅楽と能、狂言

ている。色は全般的に左方が朱で、右方は緑を基調としている。装束を着用して舞曲に合せて演舞する姿は、上代様式の陰翳の美が、そこはかとなく感じられ、宮内庁雅楽寮、京都御所、熱田神宮等で拌觀して伝統美に触れ得た喜びを私はいまかみしめている。

能、狂言は六百年前に完成した武家貴族的芸能であるが、猿樂や田楽などの民間芸能も同時に集成された。謡、囃子、舞の三要素をもつ独自の様式になる歌舞劇であり、狂言と舞台をともにして、現代でも上演されている。作品は南北朝から室町にかけ作られ、江戸中期には演出様式も固定化された。

奈良時代に唐から散樂として奇術、幻術などの芸能が入り、平安時代には滑稽な物まねを主流にした猿樂がはじまり、今日の母体をなした。鎌倉時代には賤民猿樂者の集団が、「座」を結び、対話劇として狂言の原形となつた。

猿樂の能は呪師や延年など影響のもと、今様や白拍子、曲舞などを吸収しつゝ育つていった。

一方十一世紀末頃から上下を問わず流行した田楽は、能を演ずるようになつて、室町時代には田楽能、猿樂能、前述の「今様、白拍子、曲舞、延年」を統一化して、観阿弥、世阿弥父子によって、能が人成された。

ここで観阿弥、世阿弥父子について少し説明したい。観阿弥は南北朝時代の能役者で、名は清次。芸名は観世。

法名は觀阿弥陀仏（觀阿弥・觀阿）。奈良で活躍した山田猿樂美濃大夫の養子の三男。長兄が宝生大夫。世阿弥の父。觀世元重（音阿弥）の祖父。大和猿樂の祖父。大和猿樂結崎座（後の觀世座）に所属していた。

京に進出して足利義満に見出され、大和猿樂の向上をはかった。芸域が広く、近江猿樂や田樂の長所を取つて幽玄な芸風をうち出し、曲舞を取り入れて謡の様式を改革した。

作能に「自然居士」「卒都婆小町」「松風などの原曲がある。（一二三三一一二八四）右記の如く猿樂能と呼ばれる上品で深みのある演劇として完成された。今日では能、能楽と呼ばれている。

その詞章を謡曲（謡）ともいう。前の論攷にも触れ得たが謡、囃子、舞の三要素が中枢で、舞台装置も、演技も極端に省略された、象徴的芸術である。全体の進行は序破急に構成されている。

題材や演能の順序から神、男、女、狂、鬼の五種に分類されている。題材は「伊勢物語」「源氏物語」「平家物語」など古典に扱つたものが多く、全体として莊重で象徴的、夢幻的であると言える。

次に能理論を大成した觀阿弥の子である世阿弥についてのべる。室町初期、貞治三年（一二三三三？）嘉吉二年（一四四三）。觀阿弥は前述の通り田樂や曲舞などの長所を取り入れ、猿樂能を作りあげた優れた能役者であつた

が、世阿弥もまた大和猿樂の觀世座二代目の大夫であった。幼名は藤若。通称は三郎。実名は元清である。父觀阿弥の通称觀世の名で呼ばれ、法名的芸名は世阿弥陀仏（世阿弥、世阿）。

父と同様に足利義満の庇護を受け、同時に鑑賞眼の高い足利義持の意にかなうよう、能を優雅なものに洗練させ、父から与えられた芸道を、後継者として、発展させている。それは物まね中心の能を幽玄美を理想とする歌舞中心の能に磨きあげた点にある。

世阿弥はまた、芸術理論を開いて、「花伝書」、「花鏡」、「申樂談儀」などをはじめとする、多くの演劇論を著した。それと並行して、能の作者としても、優れた才を發揮し、数多い傑作を残し、夢幻能形式を完成させた。晩年は後継者である長男元雅の死に遭遇したり、自らも佐渡に流されるなど悲惨であった。

「花伝書」は応永七年（一四〇〇）以後に成立、正しくは「風姿花伝」秘伝書として残された芸術論である。内容は芸道修業の心得、演出上の注意、猿樂の歴史、能作の心得など、世阿弥の能理論が中心になっているが、「花」や「幽玄」についても言及している。「花」は演能に当たつて観客が美しく面白く感ずる、その感動の根源を比喩的に表現したもので、それを生み出すものが「幽玄」であるとする。

「花鏡」は応永三年（一四二四）に成立した。長男

元雅に与えたもので、世阿弥晩年の芸道上の習得を子孫に伝える能楽の真髓書である。

「申樂談儀」は永享二年（一四三〇）頃に成立した。世阿弥の次男である元能が、父の芸談を筆録したものである。内容は田樂と猿樂の相違、大和と近江の芸風の相違、名人の芸風、能の作り方、作曲法、上演の心得など、断片的だが具体的、実際的で当時の芸能の実態が知られる。

「世阿弥の花」「花」は世阿弥の理論の中核をなす重要な概念である。くすんだ美ではなく、貴族女性や、少年のもつ花やかな美をいう。定家の幽玄、有心体に近いものといえよう。

また能理論書にも詳述されていたが、近江の唯美主義、演劇性本位の大和の幽玄の情緒を詩劇として理論を確立した「世阿弥十六部集」は高い芸術論として忘れ得ない存在と言える。

桃山時代に豊臣秀吉の権力もあって、面や装束が改善され、技法も洗練進歩を重ねて、大衆化された。江戸期に入つて觀世、金春、宝生、金剛の四座が、幕府公認の儀式芸能として、古典芸能の道を歩み、家元制度、分業制度の確立と相まって、武士道鍛錬によつて迫力をともなつた。能は武士階級の専有物となつていたが、能から分離した「謡」は、町人階級に流行していく。

（つづく）

能は明治期に入つて新興貴族を背景に再生し、大正から昭和、第二次世界大戦前後にかけて芸術上の黄金時代を迎へ、各流派を生み専門化していく。

焼失した能楽堂も復興され、戦後は若い世代の意識の変化もあつて、前衛芸術として、国際演劇祭参加以来、その評価も高い。

一九五七年能楽は重要無形文化財の総合指定を受け、個人指定（人間国宝）は、七十年から受けた。

シテ方に、喜多六平太、近藤乾三、後藤得三、桜間道雄、

ワキ方に、松本謙三、

囃子方に、故川崎九淵、幸祥光、故龜井俊雄、柿本豊

次、安福春雄、

狂言方に、故喜竹弥五郎、野村万藏などが指定されている。

この分野の巧みな技は、はかり知れない練磨の象徴といつてよい。勿論この道一筋の芸道に生きた先達の、磨かれた領域は正に神技と言つても過言ではない。東京の国立能楽堂を始めとして、全国の有名な神社、仏閣などで、今後もこの伝統を受け継ぐ古典的美学を、鑑賞出来る事を切望してやまない。

私の健康と有難い主治医

吉田忠雄

私の健康

誰でもそうだと思うが、年をとるにつれて自分の健康問題に关心を持つようになる。子供のころはよく風邪をひき、自分でもあまり健康な体ではないなと思った。小学生のころは、運動会ではいつもびりで、相撲はいつも負けてばかりで、運動は苦手だなと思っていた。

しかし、小学校6年生になると、跳び箱ができるようになり、空中回転などもできるようになり、自分の運動神経も捨てたものではないなと思うようになった。また、その頃の夏の最大の楽しみは、近くの渡良瀬川に行つて水遊びをすることであった。

旧制中学時代は戦争末期であり、家も貧しく家の手伝いばかりで、腹を空かしている時が多く、あまり楽しい思い出はない。しかし、毎日片道2キロメートルの徒步

通学をしたので、体力は着実に上がつていったものと思う。

中学3年の時に終戦となると、まず野球が入つてきた。やつてみるとこんな面白い遊びがあったのかと思った。最初は野球から始めたが、その後同級生とソフトボールをやるようになり、家の手伝いをさぼつて毎日のように放課後ソフトボールをやるようになった。これも私の健康改善に役立つたであろう。

あまりよい思い出ではないが、何年か浪人して東大に入つた。最初の身体検査で担当医から体がだいぶ弱っているといわれた。また、駒場寮での最初の夏休み中にひどい腹痛を起こし、医者からは大腸カタルだと診断された。当時は食糧問題は好転してきたとはいえ、まだ十分な栄養ある食べ物が食べられる時代ではなかつた。また食費も切り詰めていたので、自分では必要量は食べてい

たつもりであつたが、その割には、排泄量は少なかつた。自分でも栄養失調ぎみかと思つた。

東大教養学部時代にもよい思い出がある。まず予備校時代に知り合つた人たちと山登りに行つたことである。最初に奥多摩の鷹の巣山という山に登つた。すっかり奥多摩の山と谷の美しさに魅せられた。山登りは、健康と心の両方を満足させてくれる。爾来、多くの山歩きをした。

大学後半は親からも仕送りを受け、並の大学生活を送つた。親友もでき、ともに旅行もし、精神的にも豊かになり、あきらかに健康的になつた。

大学を卒業すると、山口県の火薬工場に就職した。最初野球部に入ったが、体力が持たないのでしばらくしてやめた。最初に配属された職場は、ダイナマイト原料のニトログリセリンの製造工場であつた。この職場でニトログリセリンはいかに危険性の高いものであるかを知つた。

2年目の職場は同じくダイナマイト原料のDNT（ジニトロトルエン）製造工場であつた。この職場は私にとっては理想的な職場である。DNTはニトログリセリンに比べればずっと安全な物質である。かなりの実験研究ができる。上司に恵まれた。課長の山末さんからは、本務の製造現場監督をやつた上で、いくらでも研究をやつてよいと言われた。そして、2人の現場作業員岩井さ

んと藤井さんをつけてもらつた。

この職場の隣には空き地があつた。毎日昼になると、キャラメルひと箱を賭けて2チームに分かれてソフトボールの試合をやつた。私の体力も回復し、そそこの打撃実績を示したので、このソフトボール試合の重要なメンバーとなつた。その後この職場チームは工場全体を代表するチームとなり、山口県体育大会で準優勝するチームにまで育つた。しかしこの話題は私の健康問題とは直接関係ないので省略する。

それからわたしは数年後に東京大学に転職し、燃料工学科に勤務するようになつた。健康には留意し、学生や院生と野球に興じ、コンパにつきあい、旅行、登山や合宿に付き合つた。ただし、登山では歳を思い知らされた。学生・院生たちと一緒に登山に行くと、私は彼らについていけないのである。

これらは私の健康の維持に役立つたと信じている。一方では、徹夜の実験を厭わず、よく働いた。年をとるにつれて自然に徹夜などはできなくなつた。ただし、土曜日、日曜日はほとんど大学に出て、データ整理や論文作成を行つた。

40代から50代にかけて、いくつかの健康上の問題が起つた。まず盲腸を患つて手術をした。しかしこれは過儀礼のようなものである。ただし、退院してすぐに家で酒を飲み義母に電話をしているときに、貧血で倒れて

しまった。その後も貧血で倒れることができたことがある。

つぎは、ある年暮れに歯肉がはれ上がった。東大病院に行き多くの歯を抜く手術をした。悪性でないボリープであるといわれた。幸いにして同じようなボリープはできていない。

つぎは、尿酸値が高くなってきたことである。教職員の定期検診でそのことを指摘され、毎日朝1錠ザイロリックを飲むようになった。私の知り合いには痛風の経験者が多い。幸いにわたしはまだ痛風の発作を経験していない。いつ来るかわからないので心構えだけは持とうと思っている。歯痛だけでもおろおろする私だから、痛風の発作がおきたら、どんな醜態をさらすかわからないう。現在は、尿酸値が少し高くなってきているので、ザイロリックを毎日2錠飲んでいる。

次に指摘されたのは成人病である。体重が標準を超えており、血糖値が高い、などである。そのために、通勤時にひと駆飛ばして歩くことや節酒・節食を実行した。しかし、酒好きの私は毎日酒を飲むことはやめなかつた。その努力の結果、約1年で体重は65kgから61kgに減つた。しかし精神的なストレスがたまり、無気力になつた。そこで選択を迫られた。このままこの生活を続けるか、老後はそれほど長くないのだから、あまり無理な節制を続けることをやめるか、である。結局後者を選んだ。

これらの論調に対抗して自分の考えをまとめようとした。

ひとつは、働く間は働いて税金を納め、高齢者の役に立つことである。もうひとつは、健康ができるだけ維持し、多額の医療費のかかるよう様な高齢者にならないことである。しかし世の中は人知の及ばないことがある。万一寝つきの状態になった場合は、延命処置は行わないことである。

このような考えを持つたのは、70歳になる直前であった。それまでは、医者と言えば歯医者さんと大学の診療室のお医者さんしか知らず、健康維持にかかる金は、歯の治療、職場の定期健康診断と痛風予防薬とドライアイ点眼薬だけであつた。

竹内先生のお世話になつてからこれに定期血液検査と先生の検診が加わつた。これは日常の健康状態をモニターリし、いざという時の応急措置ができる点で有効であつたと思う。深酒が続いたあとなど、血圧や血液検査結果に影響が出るので、時々竹下先生から軽い注意が出された。中性脂肪が多いのはかねてから問題であつた。

平成19年9月3日の朝、電車の中で意識を失い、乗客と駅員に助けられた。それでも当日は二つの仕事をこなし、帰宅した。よく朝早速常見町クリニックに行き、竹下先生の診断を受けた。一時的な虚血症と診断された。そしてすぐにMRIで脳内写真を撮り、専門の先生の診

断を仰いだ。幸いにして、MRIでは問題は見つからないことであつた。

竹下先生からはいろいろ適切なアドバイスを受けた。「やはりお酒ですかね」とやんわりと言われた。「運動をしたほうがよいですよ」とも言われた。

その後しばらくは、常見町クリニックに通い、点滴を受けた。さすがに酒好きの私も約3か月酒を飲まなかつた。それから少しづつ酒を飲み始め、昔に戻つた。しかし加齢の影響で酒量は減つた。

電車の中で意識を失つた直接の原因是血圧が上がつたためと言われた。常見町で測つた血圧は上が169であった。竹下先生の処方は、血圧降下剤、血液凝固防止剤、中性脂肪降下剤であつた。毎日飲む薬が増えた。私の医療費も増えてきた。やはり後期高齢者になると医療費が増えることを実感した。

今年の4月で勤めを終え、責任のない立場になつた。健康を維持するために、歩くこと、テニスをやり、バッティング・センターやプールに行くことを心に描いた。下の娘の小学生の子どもたちがテニスを習つていると聞いたので、ある時一緒にテニスをやつた。つい夢中になつてやつて肉離れを起こしてしまつた。翌日竹下先生の所に行ってパテツクスを貼つていただいた。竹下先生は苦笑いをされていた。

年取つてからの怪我は治りが遅いことを実感した。ひ

次の起きた60歳代のわたしの健康問題は、ドライアイである。ある時から目が痛くなつた。勤め先の近くの目医に行つた。ドライアイと診断された。さらに将来白内障になりうると診断された。2種の薬をいただいた。ひとつはドライアイ用のもので、ひとつは白内障予防用であつた。おかげで目の痛みはなくなつた。またドライ

アイもなくなつたようで、現在目薬の点眼はやめている。平成14年夏に急に口渴頻尿になつた。これは今日まで続いている。口渴対策としてはポカリスエットを携行してのどが渴いたら少しずつのむ。頻尿は夜2時間起きて用をたす。この症状は2人のお医者さんに診断を受けたが原因は分からなかつた。

以上が私の古希の前の健康状態と健康問題への対処であつた。

竹下先生

私は、68歳で故郷足利に職を得た。幸せなことであつた。そこで常見町クリニックを経営する竹下院長と知り合つた。私の甥が医者の卵で当時竹下先生のお世話になつていたからである。それ以来竹下先生には主治医としてお世話になつてている。

いま後期高齢者医療制度が問題となつてゐるが、今から9年前の当時も高齢者問題が話題となつてゐた。高齢者は医療費がかかるという論調であつた。私は個人的に

と月余りもびっこをひいて歩いた。今でも、肉離れを起

こした左足の脛のほうが右足のすねより固くて太い。これで退職後テニスをやりバッティング・センターに通う夢は潰えた。

残っているのは今のところ歩くこととプールである。

退職してからタクシーは乗らないで出来るだけ歩くことしている。おかげで外に出かけると万歩計の歩数は1日1万歩を超えることが多い。むしろ過度に足に負担をかけないように注意している。

自宅にいるときは近くの埼玉県健康福祉村のプールに行くことにしている。自転車で片道15分である。今このところ25メートル・プールを200メートル泳ぎ、200メートル歩くことにしている。中間で一度水からあがり休む。かなり疲れる。その代り帰つてからの酒と食事がうまい。

このプールには、ふろ、シャワー、サウナ、体重計、血圧・脈拍計およびマッサージ機が備えてあり、これらをみな利用する。1回350円（プール）と100円（マッサージ機）の高齢者料金では申し訳ない気がする。しかし、この施設によつて高齢者の発病による医療費が減るのであれば有効な施設であるというべきであろう。

私はしあわせである。

ジを指導してくださる。

入れ歯を支えている冠をかぶせた歯の向きが少し変わつて痛くなる。そのときは支持バネを除いて痛まなくしてください。

弱い歯をもつた老人の私にとつては秋山先生は救世主である。

秋山先生

秋山先生の歯科医院は、むかし私が住んでいたところのすぐ近くにある。お父さんも歯医者さんであった。秋山先生自身は私より6、7歳下で一緒に遊んだことはほとんどない。

私が足利に通うようになつてから、これは年寄りの宿命で、入れ歯が悪くなつた。恐る恐る秋山先生のところを訪ねた。先生はあまり必要以外のこと話をされない。また入れ歯の治療でもあまり無駄なことはされない。しかし手早く適切に処理してくださる。

最初にお世話になつたのは、東京に勤めていた時代に作つた入れ歯が折れてしまつた時であつた。仕方がないので、折れた入れ歯を小さなポリ袋に入れて秋山先生の所に行つた。先生はそれを見て口の中で合わせてみたりして、「直しておきますから夕方きてください」と言われた。歯医者さんは何日もかかるものと覚悟していたが、一日で出来てしまうのを聞いて驚いた。

つぎに、差し歯の具合が悪くなつた。結局、差し歯の土台がダメになり、差し歯の代わりに今まで使つていた入れ歯を改造してもらった。秋山先生は手際がよく、あまり時間をかけずに作り上げてくれた。

年をとると、歯は良くなることはなく、どこか痛んでくる。痛くなると秋山先生の所に行く。特に痛い時は薬を下さるが、腫れが引くと薬は止めて、歯茎のマッサー

祝出版

秋山兄弟 好古と真之

瀧澤 中著

朝日親書 780円

人材が育つ社会とは

無意識の佳人

亞木陽

毎日履いている靴の底がすりへつて両足とも大きな穴が開き、歩きにくくなつた。婆さんは靴に詳しい坂上さかうえの次男の嫁さんに電話を掛けた。

わしは結ぶのが大の苦手で、ヒモの靴をいちいち結ぶのは面倒だ。

それを見ていた嫁さんは、別の種類のグレーのモダンな靴を搜して来た。ヒモもなく、見た目もいい。

早速履いてみる。

な靴屋を知っている。

足が抵抗なく、すっと入った。
これはいい。
早く履いてみる。

広い店内をまごまごしていると、店員がやつて来て、「最近はヒモの靴が流行つて、ますよ」

足元がすつきりすると、腰が伸びて姿勢がよくなる

「最近は、この靴が流行っている」と
言いながら、ヒモの靴をいくつか持
てこ覆してみる。

両足を揃えて見ると、嫁さんがすかさず「最高」と笑った。

店員はそう言つたが、きつくて履きにくい。

あまり高いので、びっくりした。

思い切つて買おうか。

嫁さんが一千円出して、

【ありがとう。助かるなア】

外に出ると、わしの目の前に急に自転車が止まつた。

「うちの次男の嫁」

坂上だよ

幸せだなア

卷之三

(123)

(122)

THE DAY · DREAM

鍋屋次郎

宮坂暁男は目覚めて時計を見ると午前五時半。隣の布団には妻の姿はなく、もう起き出したらしい。

昨夜は十二月十四日、赤穂浪士が吉良邸へ討ち入った日で、「元禄の花」と題した討ち入り物語のテレビを見て夜更しをしたので、もう一眠りすることとした。

暫くして目覚め、時計を見ると六時半。

暁男の今日の予定は九時半に大手町ビルの中にある「M精密化學」の常務取締役を訪ねる予定になつていて、着替えて寝室の雨戸を開けると、冷たい空気が入つてきた。曇り空を眺めて「今日は寒いだろうな」と思いながら一階に下りて玄関を開け、ポストに朝刊を取りに行つたが入つていない。

「今日は新聞が休刊日？なぜだ？」

と不思議に思いながら、庭に廻り和室の雨戸を開いた。

玄関からリビングに入つたが、妻の姿はない。いつも

この時間には用意されている朝食も準備した形跡はない。食卓の上は、昨夜寝る前に飲んだウイスキーグラスとチーズを盛つていたお皿があるのみ。

トイレ、浴室、キッチンと見てまわつたが妻の姿はない。二階に上がり寝室以外の二部屋も覗いたが姿はない。

再び玄関から庭に出て、小さな裏庭も見たが姿はない。「どこへ行つたのだろう。今朝早くからどこかへ行くと言ふような話はなかつたが」

と思いながら、妻が予定を書き込んでいるカレンダーを見た。妻は冷蔵庫に「出前寿司」のカレンダーを磁石で留め、日付の横の空白に自分の予定を記入していた。

十二月十五日の欄を見ると、そこは空白で何も書いてない。

暁男が新聞を取りに行くとき玄関は中から鍵が掛けつたが、新聞を書き込んだりカレンダーを書き込んだりする時間はない。

ていた。雨戸の鍵も暁男が外した。
玄関には日頃妻が履いている靴はある。念のため妻のスリッパは？と思つて探すと、寝室に入るドアの前に、就寝時に脱いだままの状態で揃つている。外に行つた形跡はない。

階段下の空間を利用したりビングの物入れの中に、妻はバッグや財布を入れていた。そこを開けてると、バッグも財布もある。財布の中にはお金もカードも玄関の鍵も入つていて。

大手町まで行く時間が迫つてきた。朝食は駅で牛乳でも飲むとするか、と思つて髭を剃り、歯を磨いて、外出着に着替えてから、妻宛に「何處へ行つたのか知らないが、仕事に出かけるよ。帰りは六時頃かな」と、電話機の横のメモに書いて出掛けた。玄関に鍵を掛けようとして

「待てよ、妻の鍵は財布の中についた。玄関は鍵を掛けない方がいい」
と思ってそのまま出かけた。

家の前の私道から阿佐ヶ谷の商店街や地下鉄につながる道路に出たが、人間がない。小学生や中学生が学校へ行くいつもの姿もなければ、通勤する人もいない。全

くいない。

この時間であれば開いている「弁当屋」も閉まつたま

ま。道路のあちこちに、乗用車が斜めに家に突っ込んだり、追突して停まつていて。近寄つて中を覗くと、どの自動車にも人間は誰も乗つていない。

暁男はこの光景に驚き、何がどうなつているのか全く理解できない。辺りを見渡しても人はいない。

追突したり、家に突っ込んだりしている乗用車を覗くと、自動車のエンジンキーは差し込まれたまま、運転者の物と思われるカバンや荷物は助手席や後部座席に置いてある。ドアロックはどの自動車も中からロックされていて、外からは開かない。

では、運転していた人間はどこから出たのだろうか。自動車を出てからロックするためには鍵が必要だ。でも、鍵はちゃんと鍵穴に差し込まれたまま。

商店街から大通りに出ても、人影は全くなく、道路上はあちこちで自動車がぶつかって止まつていて。ガードレールに斜めに衝突して停まつた車のあとに、次々と車が追突して、大通りは車が散乱している状態。商品配達の大型車がガードレールを突き破り、商店の中に前部を

突っ込んでいる。

暁男はこの現象がどうして起きたのか、全くわからぬ。怖くなつた。今日の営業訪問どころではない。いつも地下鉄の駅に向かって歩く人、地下鉄の駅からやつてくる人で多くの人が行き交う歩道であるが、今日は誰も歩いていない。普段は甲州街道方面に向かう車で混んでいる車道も、衝突した車が散乱しているのみ。

何が起きたのか家に帰つてテレビを見ようと思い、恐ろしさに後を振り返ることなく家に戻つた。

再び妻の姿を探したがいない。スリッパはさつき見たままの状態。

テレビを点けたがNHKも民放も、どのチャンネルも、夜中の放送終了時のように、画面は白く「ジー」と音が出来るのみで、映像は一切映らない。テレビ販売店から「映像が映らないときは、このカードを出し入れしてみて下さい」と言われたカードを、出し入れしてみたが、映像は映らない。仕方がないので、ラジオのスイッチを入れた。ラジオも何処の放送局にあわせても「ジー」と鳴るのみ。

息子の家に電話したが呼び出し音のみ。息子の携帯電

茶碗にご飯を盛り、電気の消えた冷蔵庫の中の佃煮と梅干しで昼食をとつた。ポットの湯は残り少ない。急須に注ぐ湯量を加減した。

食べ終わつて、妻を捜しに近隣を歩くことにした。

外は、朝と全く同じ光景。商店は一軒も開いていない。二十四時間営業のコンビニがある。電気は消えているが入口の扉は開く。入つてみると、冷蔵ケースは電気が消えているが品物はそのまま置いてある。お弁当を見ると賞味期限時間が過ぎている。

「そうだ、夕食と明日の朝食はどうしよう

と思い、食パンと水とコンビーフや果物の缶詰少々、オカカと梅のおにぎりを籠に入れて持ち出した。お金を支払わないことに少々後ろめたさを感じたが、そのまま持ち出した。

地下鉄の駅も全く無人。駅員もいない。朝から電車は動いていない、と考えざるをえない。商店も、オフィスビルも電気は消えて人の気配は全くない。

どこからか犬の吠える声が聞こえる。あちこちの犬が異変を報せあつているような気もする。通りに面した大きな屋敷の庭を覗くと、ゴールデンレ

話にも掛けたが「近くにおりません。留守番電話にメッセージをどうぞ」というので「この電話に気がついたら、直ぐに電話をよこすように」と伝言して切つた。

会社に電話したが誰も出ない。途方に暮れていると、テレビの画面が消えた。暁男は、テレビが直つて映像を映し出すことを期待して電源を入れて置いたのだが、消えた。ラジオだけは電池式のため「ジー」の音は鳴っている。

壁際のスイッチを押してみたが、部屋の電気は点かない。洗面所の上にあるブレーカーを確認したが、ブレークは下がつていない。

「停電か」

昨年「オール電化」の住まいにしたため、ガスはなく、停電では湯も沸かすことができない。

停電で電話も使えない。携帯電話を取り出して、登録されている電話番号に次々と掛けたが、誰一人応答はない。

時計を見るどもう正午を過ぎている。ジャーの中から

「ドドリバー一匹が暁男の姿を見つけてフェンスのところにやつってきた。盛んに尻尾を振つてゐる。暫くすると、暁男の方に来たいのか、「くんくん」という声を出して、フェンスに鼻をくつづけている。暁男が歩き出してから振り向くと、犬はまだこちらを見ていた。

近隣のどこにも妻の姿は見えない。どころか、朝から一人の人間にも出会っていない。

家に戻つたが、テレビもラジオもダメ。新聞はない。情報は全く入つてこない。

十二月十五日、日の暮れは早い。蠟燭がないのに気がついた暁男は、先ほどのコンビニに行き、クリスマス用の色とりどりの太めの蠟燭を何本か籠に入れ、ついでにライターも数個持ち帰つた。

どこかで火災が起きているのか、南の方角の空が赤くなつてゐる。

暁男は家中の雨戸を閉め、リビングに布団を持ち込み、何かあれば直ぐ逃げ出せるように準備した。蠟燭の火を見つめる以外、なにもすることはない。部屋の中は寒くストーブに火を点けた。その明るさと暖かさで少し落ち着いた。

電話機の横からメモをとりだし、

「人間は皆何処へ行つたのか。それはいつなのか」とテーマを書き、その下に

「新聞が配達されていない」

蜘蛛とストーブを消すと真っ暗闇の世界。犬の遠吠えが聞こえる。主のいない寂しさに、犬同士互いの存在を確かめ合っているような気がした。なかなか寝付かれないと。

「新聞が配達されていないことから、午前三時前に、全ての人間が、一斉に消えていなくなつた、としか考えられない。睡眠中の人はその布団の中から、自動車を運転していた人は、自動車の中から消えた。運転者がいなくなった自動車はそのまま走つてガードレールや街路樹に衝突したり、前の車に追突して停まつている」

「人が消えたのはこの地域だけなのかな？」
のテーマには

「わからない。新聞、テレビ、ラジオ、電話など一切の報道通信がストップしているのでわからない。ラジオの周波数全てを試したが、放送は聞こえなかつたことから、相當に広範囲にわたるものと考えられる」

時計を見ると、まだ午後七時半。この状態がいつまで続くのかわからないが、蠟燭にしても灯油にしても節約を考えなければならない。ガスは携帯用のガスコンロとガスボンベがある。明日朝からは湯を沸かしたり、簡単な調理はそれを使うことにしよう、などと思ひめぐらした。

男にとつてはこの犬たちが唯一の仲間だ。何か嬉しくなってきた。きっと、犬たちも同じ思いであろう。

焚き火を消して水を掛け 家に戻ろうと立ち上かると
犬たちも立ち上がり暁男についてきて、庭に入り込んだ。

暁男はストーブの上で湯を湧かし、インスタントラーメンで簡単な昼食をとり、再び公園に行こうとすると、犬たちもついてきた。

と、子犬を抱きかかえた一人の女性がこちらへ向かつて来るのが見えた。

ア！ 人間がいた！ と驚きと嬉しさで手を振ると、女性も手を振りながら暁男のところに掛け寄ってきた。

「あー怖かった。朝、公園から上がる煙を見て、誰か人がいるに違いない、と思ってやつてきたのです。私、あそこのマンションの十四階に住んでいます。マンション

「詰もいないと思われる、マンションは怖くて停電でエレベーターは動かないし、静まり返っているし、通路は暗いし、ここから上がる煙を見るまでは怖くて階段を下りることもできませんでした。煙を見て人がいるに違いない、と思ってやつてきたのです」

暁男の隣に座つた女性は、磯優子と名乗つた。

「十五日の朝目が覚めると、主人も子どもも布団の中にいないので、どうして今日は早起きしたのだろう、と思つて自分も起きた。ところが家の中にはいない。玄関は中から鍵が締まっていて、主人と子どもたちの靴はある。外出したとは思えない。主人のスーツ、カバン、定期券、財布と全て家に置いたまま。子どもたちのランドセルもそのまま家にある。私は、十五日は一日中家族の帰りを待つて家にいました。テレビ、ラジオ、電話が全てダメ。携帯電話で兄弟や登録してある友人の全てに電話しましたが、誰も出ません」

どの位眠ったのだろうか。すこと眠らなかつたよう気がする。待ち遠しかつた朝がやつてきた。暁男は近くの公園に行き、落ち葉を集め火を点けた。昨夜の犬の遠吠えからヒントをえて、もしもどこかに自分と同じようない人がいるとすれば、煙を見てやつてくるのではないか、と思っていた。

しかし、一時間くらい経つても集まってきたのは数匹の犬だけ。暁男と焚き火を遠巻きにして眺めている。中には引き綱を首輪に着けたままの犬もいる。空腹に耐えかねて引っ張っているうちに外れたのだろう。暁男は、焚き火をそのままにして、直ぐ近くのコンビニに行き、パンとおにぎりを持ち出して公園に戻ると、犬たちは焚き火の周りで、枯れ葉の中に餌を探している。

犬は昨日の朝からは何も食べていなかつたのだ。パンとおにぎりを与えると貪るように食べ始めた。晩男は公園の水場に行き、落ちていた空き缶に水を汲み、犬たちに与えた。食べ終えた犬たちは晩男の周りに座り、晩男のすることを見ている。人間と全く接触のない晩

と一気に喋つた。

暁男の隣に座つた女性は、磯 優子と名乗つた。

「十五日の朝目が覚めると、主人も子どもも布団の中にいないので、どうして今日は早起きしたのだろう、と思つて自分も起きた。ところが家の中にはいない。玄関は中から鍵が締まつていて、主人と子どもたちの靴はある。外出したとは思えない。主人のスーツ、カバン、定期券、財布と全て家に置いたまま。子どもたちのランドセルもそのまま家にある。私は、十五日は一日中家族の帰りを待つて家にいました。テレビ、ラジオ、電話が全てダメ。携帯電話で兄弟や登録してある友人の全てに電話しましてが、誰も出ません」

暁男が差し出すペットボトルのお茶を一口飲んでから続けて

それから、二人は時が経つのも忘れて、突然の人間蒸発としか考えられないこの現象について話し合った。

優子は暁男に

「私、今晚も真っ暗闇の中に一人でいることは怖くてできません。お宅のどこでもいいですから私を居させていただけませんか」

と頼んだ。暁男も一人よりも一人のほうがいいので

「部屋はありますからどうぞ」

「わがまま言つてすみません。有難うござります。それでこれから歯ブラシとか生活用品を取りに帰るのですが、誰もいないあの大きなマンションには、怖くて一人では戻れません。」「一緒に来ていただけないでしょうか」と、真剣な眼差しで暁男を見つめた。

「分かりました。ご一緒に行きましょう」

といつて立ち上がった。

二人が歩き始めると犬たちも立ち上がってついてきた。優子のマンションは大きくて、薄暗く不気味であった。

十四階までの階段はきつかった。犬はマンションの入り口で待たせた。

優子が必要なものをボストンバックに詰めて、暁男と一緒にマンションを出ると、犬たちは再びついてきた。途中コンビニでお茶、水、温めるだけで食べられるご飯、

する犬を叱つて、よし！ と言う号令で一齊に食べ始めた。

電気が消えて真っ暗闇のなかで、驚きと不安、独りぼっちで過ごした昨夜と、蠟燭の明かりの中に二人で食事をとっている今の暁男と優子には、一緒に過ごすことのできる人がいる、と言うことの安心感は大きかった。

食後、優子は自分の家族のことを話し始めた。夫は三十六歳、大手パソコンメーカーのソフト制作の技師であり、優子は三十四歳、もと航空会社の客室乗務員で目下専業主婦。子どもは小学五年生の娘と二年生の息子の四人暮らしだと言う。

暁男も自分と家族のことを話した。

二人は、この状態が長続きすることを前提として、先ず食料と水の確保をどうするかを話し合つた。今は水道が開いていたのだから入れる筈だ。明日はそこへ行って、こない限り復旧の期待はできない。二十四時間営業のショッピングセンターであれば、人間蒸発時も出入り口は開いていたのだから入れる筈だ。明日はそこへ行って、サーキュライト型の大きな懷中電気とできるだけ沢山の電池、携帯ガスコンロ用のガスボンベ、これも持てるだけ調達しよう。生野菜は今のうちであれば使える物がある

缶詰、インスタント味噌汁と、犬の餌二袋などを持ち出して暁男の家に着いた。

玄関に入る前に優子は立ち止まつて

「貴方のこと、なんてお呼びしたらいいでしょうか。私は優子と読んでください」

と言つた。暁男は

「お互ひ名前で呼び合いましょう。暁男と呼んでください」

と言いながらリビングに向かつていった。

昨夜リビングに暁男の布団を持ち込んでいたので、優子を隣室の和室に案内した。ところが電気もつかずエアコンも使えないのにリビングに移つた。

暁男が蠟燭とストーブを点け、携帯用のガスボンベを取り出して湯を沸かし始めると、優子が夕食の準備に取りかかった。

優子が連れてきたダックスフンド（名前はピピ）は部屋に入れ、専用のトイレを持ってきているので安心している。

公園からついてきている六匹の犬は庭に座り込んで餅を待つていて。プラスチックの大きなお皿に餅を盛つて行くと、皆立ち上がって寄ってきた。我先に食べようとなりかかった。

優子が連れてきたダックスフンド（名前はピピ）は部屋に入れ、専用のトイレを持ってきているので安心している。

昨日は心配で一睡もしていない優子は、夕食を済ませ、暖かな部屋で、ともかくも一人ではない安心感から眠くなつてきた。それを見た暁男は

「優子さん、あちらの部屋に布団を敷きましょう」と言うと、今にも泣きそうな表情で首を振る。

「この部屋に敷いてください。なんとかお布団は二つ敷けるでしよう。一人になるのは怖いのです」と暁男を見つめる。

暁男は隣室の押入から布団、シーツ、毛布、枕を取り出し、優子と一緒に暁男の布団の横に敷いた。やがてリビングの片隅で、持参したパジャマに着替えた優子は一言

「おやすみなさい」

暁男も起きていても何もすることがない。昨日目覚めてからの一部始終を書き留めたが、時計はまだ午後十時。ウイスキーを取り出して、お湯割一杯だけ飲んで蠟燭とストーブを消して布団に入った。

暁男も起きていても何もすることがない。昨日目覚め

てから的一部始終を書き留めたが、時計はまだ午後十時。ウイスキーを取り出して、お湯割一杯だけ飲んで蠟燭とストーブを消して布団に入った。

昨夜と違つて、優子の寝息と、存在そのものが気になつて寝付かれない。

庭にいる犬が急に吠えだした。六匹が一齊に吠えていた。喧しさは尋常ではない。何事かと懐中電灯を持つて玄関から庭へまわると、ガレージの外に三~四匹の犬がいて、ガレージのアコードンドアの下の隙間から庭にもぐりこもうとしているが頭が入らない。それを見ていた六匹が威嚇して追い払おうとしている。暁男の威嚇で外の犬が立ち去つて、ようやく静かになつた。

リビングへ戻ると優子が目を開けていた。部屋は暁男が持つている懐中電気の光だけ。暁男は優子に「消すよ」

と言つて懐中電気を消して布団に入つた。優子の小さな声が耳に入った。

「暁男さん、怖いのです。朝になると暁男さんがいなくなつてゐるのではないかと思うと、暁男さんの手を握つて眠させてください」

の声に、暁男が右腕を優子の布団の中に伸ばすと、指が

暁男の手を軽く握つた。暁男は優子の指のふくよかで柔らかな感触が気になつて寝付かれなかつた。

翌日は、優子と大通りの食料品と諸雑貨を売る量販店

に行つた。道路上の衝突した車は十五日の朝見たままの状態。相変わらず通りにも全く人間の姿はない。量販店は食料品が二十四時間営業のため入り口の扉は鍵がかかっていない。押すと直ぐ開いた。階段を使って二階と三階に上り、ガスボンベや電池を大量に持ち出すことができた。一階の食料品売り場には各種の缶詰が揃つていて、優子が選択しては籠に入れていた。

六匹の犬は、相変わらずどこへ行くにも着いてきて、夜は庭の軒先に座り込んでいるので、暁男は朝と夕に餌を与えていた。

優子のお陰で、「籠城」の準備は着々と整いつつある。その夜、優子は、この状態が一年、いや長く続くと仮定した場合、食料や水の自給自足が必要になる。どうするか、と話し合つたが結論は出ない。いや、今早急に出す必要もない。

寝る前に浴室に蠟燭を灯し、二人は携帯ガスコンロで薬缶一杯に沸かした湯を使つて体を拭いた。

その夜も昨夜と同じように、優子は暁男の右手を握つて寝た。

暫くして、暁男は優しく

「こつちにおいて」

と言いながら優子の左腕を引き寄せた。優子は遠慮がちに暁男の布団に入り、後は暁男のなすがままに任せた。優子は洋服の上から見た感じよりも、愛撫した胸や腰は豊かだった。優子は自分の布団に戻ることなく、そのまま朝まで暁男に寄り添つていた。

翌日は、優子が

「暁男さん、今のうちはいいけれど、水道が出なくなつたら私たち生きて行けませんよ。良い知恵ないかしら。お洗濯もできないし」

戦災で焼かれたとき、この地域の人たちが避難したと言われている家の屋敷の中に、井戸があることを思い出した。

優子と行つてみると、母屋から屋根続きの土間に、汲み上げポンプがあるのを見つけた。ポンプの柄を上下して水を汲み出すと、最初は赤茶けた水だつたが、間もなく透明の水が出てきた。

水が出るのを確認してから、土間を伝つて母屋に向かつた。出入り口と思われる引き戸が簡単に開いたので中に入った。

奥の座敷は布団が敷かれたままで、朝着替えると思わ

れる衣類が枕元に置かれ、人間は誰もいなかつた。

優子は笑顔で

「暁男さん、今晚はお雑煮にしましよう。お餅の買い置きがありましたから」

と言つて、持つてきていた袋にそこにあつた野菜類を詰め込んだ。

土間には大根や里芋、人参などが無造作に置かれていたのを見た優子は

「暁男さん、今晚はお雑煮にしましよう。お餅の買い置きがありましたから」

と言つて、持つてきていた袋にそこにあつた野菜類を詰め込んだ。

その夜はこれから用意しなければならない品々を一人で検討した。調味料はできれば樽で探せないか、とか、洗濯用の洗剤、トイレットペーパー、などなど優子の想は凄い。暁男よりも遙かに生活力はある。

その夜は最初から暁男の布団で寝た。抱き寄せて舌を絡ませての暁男の優しい愛撫の後は、優子は昨夜とは別人のように、両足を暁男の足に絡ませ、両腕を暁男の背中に力強くまわしていた。終わつてからも、暁男にしがみつくようにして眠りに入った。

暁男は人の声で目が覚めた。見渡すと自宅の寝室で、既に雨戸は開けられ、ガラス戸越しに陽が入っている。布団の足下の押入をあけて、衣類の整理している妻の由美子が

「何時だと思うの？ 今日は日曜日だからいいけど。もう九時半になりますよ」

と言っている。

暫くの間、どちらが夢で、どちらが現実なのかわからなかつた。暁男の体には優子の柔らかく、そして甘い感触が残つてゐる。

あれは夢だったのか？

洗面所で髭を剃つているとき、M精密化学仙台工場の主任研究員嵯峨美和子の口から出た

「宮坂さんのお誘いで私が東京に行くときは、世界中の間がいなくなつたときね」の言葉を思い出した。それは、男が彼一人きりになつたときのことではなく、お互いにそれぞれ自分の世界の人間関係が多く、いろいろな立場があり、二人はたまにこのように会うのが無難で、それ以上になりたくもれない自分たちを感じていたからこそその言葉であった。そのときの彼女の微笑んでいる目元が魅力的だつた。

暁男は嵯峨美和子のその言葉を思い出して、「世界中の人がいなくなつて、一人切りになつたときはどうなるのだろう」となどと電車の中で想像を巡らしたことを思いだした。

そう言えば夢の中の優子は、どことなく嵯峨美和子に似ていた。

完

化粧のルーツを訪ねて（十）

第七話 古代中近東の化粧文化

鈴木 守

はじめに

オリエントには、古代文明発祥の地・エジプトとメソポタミアがある。古代オリエントの化粧文化を検討するに当つて、メソポタミアを中心とした中近東とエジプトに分け、今回は中近東に焦点を当てる。

中近東・西アジアの地は乾燥性気候条件下にあり、草原の遊牧民やオアシスの農耕民は、不足しがちな穀物を補うために早くから交易活動を行つてゐたが、農耕地帯の中心であるメソポタミアでは、灌漑農業の必要から強大な専制国家が生れた。しかし、ユーラシアとアフリカの接点であるため、この地は民族の坩堝となり、古代から現代に至るまで絶え間ない紛争が続いている。

古代中近東の歴史を辿ると、歴史書に最初に現れるのは、最古の都市・イエリコ（前八〇〇〇頃）、次いで、前二五〇〇年頃に、チグリス、ユーフラテスの河口近くにシュメール人が樹立したウルなどの都市国家群である。シュメール人は、楔形文字を考案するなど進んだ文化を築いていた。

前二四〇〇年頃、北方に起つたアッカド人の侵略を受け、前二〇〇〇年頃、アムール人がバビロニア王国を建て、ハムラビ王（在位前一七二四～前一六八二）の時メソポタミア全域を支配した。王の死後、バビロニア王国は衰え、前一六〇〇年頃ヒツタイト人の侵入を受けて滅んだ。アナトリア半島（現トルコ）やレバント地方の地中海沿岸では、ヒッタイト（前一六〇〇～前一〇〇〇？）、ヘブライ（前一二三〇～前七二二）、フェニキア

(前一二一～前九世紀)などの諸民族が活動した。

前七三〇年頃アッシリア人がオリエント諸民族を統一してアッシリア帝国を樹てたが、前六二二年にメディア、新バビロニア、リディア、エジプトに分裂し、その分立を前五五〇年にアケメネス朝ペルシャが統一した。ペルシャもアレキサンダー大王の東征により前三三〇年に滅亡、オリエントはマケドニアの支配下に入った。アレキサンダー死後、ヘレニズム国家が並立したが、紀元前後にローマ帝国が支配するところとなつた。

第1節 古代中近東諸国の化粧資料

古代中近東の化粧史として、アレキサンダー大王東征以前、ペルシャの時代から遡ることにする。

一 アケメネス朝ペルシャ

(前五五〇頃～前三三〇)

ペルシャ人たちは、紅の使用は少なかつたが、男女ともに香料と化粧品、特に顔のクリームと目の化粧料をふんだんに使い、庶民階級の男性でもヘンナで顎鬚や髪、眉毛を染めていた。顎鬚はカールさせて油をつけ、付け鬚を加えて長く見せることもあつた。なお、口、頬、顎の“ひげ”をそれぞれ、髭、髯、鬚と表わし、ひげ全体を指す場合は、漢和大字典に従つて髭鬚と表記する。い香入りの風呂を浴びたといわれている。

四 フエニキアとヘブライ

(前一二一～前八世紀頃)

フエニキアには、カールした頬鬚とアイラインを特徴とした高貴な男性のレリーフが残されており、細かくカールした髪を被つた女神像には明瞭なアイラインと太い眉が刻まれていた。

ヘブライ人は華美な装いを否定したといわれているが、前八、九世紀のヘブライ人が使つた化粧用パレットが発見されており、旧約聖書にも当時の化粧が散見される。例えば、列王記は王妃イゼベルの顔の化粧を非難しており、エレミア書には「ああ、荒らされた女よ、貴女が紅の着物を着て、金の飾りで身を装い、顔を彩るのはなんのためか！」と悲憤慷慨していた。また、旧約聖書には燻香も記されていた。

五 バビロニア、アッカドの時代

(前二二〇～前二〇〇)

バビロニアでは、病気の手当てや魔除けに、香を焚き

そのほか、スサとエル・ウベイトの墓出土の小瓶に緑色の化粧料が残っていた。この化粧料は目を保護し、視力を増し、緑色には魔力があると信じられていた。

二 新バビロニアとメディア

(前六一二～前五二五)

新バビロニアの若い男女は、肌を滑らかに保つために軽石で擦つて香油をつけ、顔に鉛白と辰砂を塗り、アンチモンでアイラインを描いた。髪はカールさせ香油をつけた。髪や体に香油を施した目的は、整髪・整肌のほかに、匂い付け、蚤・虱の駆除でもあつた。

香料は宗教的目的にも使われた。発掘された粘土板に「儀式では祭壇に香物を供え、呪文を唱えて燻香を焚いたので、神殿や聖塔から漂う香りがバビロンの市内を包んだ」と楔形文字で記されていた。メディア人も香料を盛んに使い、化粧を施していた。アスマイアージス王は厚化粧し、アイラインを引き、巻き毛を垂らした見事な髪を被つていたそうである。

三 アッシリア

(前七三〇頃～前六一二)

アッシリアでは、男女とも眉と睫毛を染め、アイラインを描いていた。女性は勿論、時には男性も顔に鉛白を塗り、唇と頬を赤くし、ヘンナで爪や掌を染めた。前八世紀のウルの港には香料香木、化粧品が集積され、婦人たちは黄土を“顔の花”とか“黄金の土”と称して愛用していた」と記している。また、大英博物館には、緑、黒、水色、褐色の化粧用顔料の塊を始め、楊子、耳搔き、毛抜きが所蔵されており、ウル周辺の墓から化粧壺、化粧用の匙、甘皮押し用の金属棒も出土している。

ほかに、男性彫像数体と前二二〇～二〇〇年頃の王妃シユブ・アドの遺骸が発掘されている。男性像には接近した眉と、くっきりしたアイラインが描かれていたが、髪と髭鬚を剃つた像と、それとは逆に整つた髪と鬚鬚が刻まれた像もあつた。シユブ・アドの遺体の傍らに髪飾、耳飾、口紅が残されており、彼女の復元図には、髪と耳の装飾品、肩にかかつた髪、接続した双眉、薄く縁取った眼、紅を指した唇が描かれていた。

第2節 古代中近東の化粧史

中近東地帯には、新石器時代に既に都市がみられたが、化粧資料はシュメール期になつて始めて現われた。したがつて、シュメール以降の化粧史を、それぞれの化粧毎に若干の考察を交えながら取りまとめる。

一、眉と目の化粧

前三二〇〇年頃のシュメール人胸像には、眉と目の化粧跡が認められ、前一〇〇〇年頃の王妃シュプ・アドの両眉は接続し、目の周りは薄く縁取されていた。また、緑色、水色、褐色、黒色の顔料が発掘されているので、シュプ・アドは目を青緑色に彩つていたと推察される。

バビロニアやアッカドの時代には、目の化粧はみられなかつたが、フェニキアの男女彫像には、眉と目の化粧が残され、アッシリアでは、男女とも眉と睫毛を染め、アイラインを描いていた。新バビロニアの若い男女、メディアの王がアイラインを引き、ペルシャ人は庶民の男性でも目に化粧し、ヘンナで眉を染めることがあつた。ペルシャ人は緑に魔力があり、緑色のアイマークは目を保護し、視力を増やすと信じていた。

中近東地域では、眉化粧と目の隈取り化粧は、シュメールの頃からペルシャの時代まで受け継がれ、アッシリアではマスカラも登場し、シリア人は呪術的な意味で目付けしていた。

中近東地域における香料利用の歴史を考察すると、芳香植物が生育する南アジアから西アジアの地域で香料使用が始まつたのである。恐らく、乾燥させた香樹香草を焚香として、呪術や宗教に利用した時代を経て、遅くてもアッシリア以前の時代までには、香料を油脂に移香させた香油、香膏を得て化粧品的利用が可能となつたのであろう。その結果、神に仕える聖職者、あるいは神に準ずる王者の表示に使われ、さらに、香料入手が容易になると、上流社会の人たちも使用するようになつたといふ経緯が推察される。

四、清浄化粧と基礎化粧

シュメールの出土品に、爪楊子、耳搔き、毛抜きがあり、身体を清潔にする風習は既に始まつた。それはそれとして、シュメール人の石鹼の発見は文化史の中でも特筆に値する事柄である。この石鹼は、暖かい灰の上で羊毛を脱脂乾燥させる際、羊毛脂が灰のアルカリと鹼化してできた産物である。

時代が飛んで、アッシリアでは香油と入浴が登場し、新バビロニアでは、肌を滑らかにするため、軽石で垢を

を緑に染めていた。しかし、眉と目の化粧発生の理由を述べた資料は得られなかつた。

二、彩色化粧

、シュメールの女性は、顔に黄土を塗り、ウル王妃が口紅を使っていたので、顔の彩色化粧もシュメール期に始まつた。次いで、旧約聖書に顔を彩るヘブライの女が記され、アッシリアでは、男女とも鉛白を塗り、唇と頬を赤く彩り、爪や掌をヘンナで染めた。新バビロニア人も紅白粉を塗り、メディアでは王の厚化粧が認められたが、ペルシャ人は紅をほとんど使わなかつたという。掌や足をヘンナで染める化粧は、現在でもオリエントから南アジアに至る地域で認められる。

シュメールの女性は、黄土化粧を“顔の華”と称していたので、黄化粧は美的演出を目的に登場したはずであるが、その後、その足跡は途絶えてしまつた。しかし、華美な装飾を疎んじたヘブライ人でさえ、赤く彩つていたのだから、美を演出する化粧が途絶えたとは思えない。したがつて、黄化粧が白化粧に転化して美的化粧を維持したと考えたい。

三、香り化粧

前三二〇〇〇年代末のウルの港に香料香木が陸揚げされ、バビロニアでは魔除けに、ヘブライや新バビロニアは、ペルシャ人が顔にクリームを使用していた。以上、清浄化粧はシュメールの時代に始まつていたが、その後の資料に乏しく、アッシリア王の入浴が後を繼いだ。基礎化粧の初出の資料はアッシリア王の香油であり、新バビロニア人は香油を忌避剤として使つていたので、薬用化粧料が誕生したことになる。クリームはペルシャが初であつた。

五、毛髪の化粧

毛髪の化粧には、髪とひげを整える化粧がある。

シュメール期の毛髪化粧を示す男女彫像が数体発掘されている。男性像には、カールした髪と鬚髪を蓄えた像と無髪無鬚の像があつた。女性像は、髪をバンドで留めた像と後髪を鉢巻き状に纏めた像であつた。アッカドとバビロニアの時代には、王の彫像は整つた髪を長く伸ばし、ハムラビ法典碑には髪を蓄えた主神と王の姿が浮き彫られていた。前一〇世紀以降、フェニキアにはカールした頬髪が特徴の高貴な男性像と髪を被つた女神像があり、アッシリアの壁画には髭髪が豊富な男性が描かれ、歴代の王は髪と頬髪をカールさせ金糸で編んでいた。彫像にみられる毛髪化粧以外に、シュメールには毛抜きがあり、アッシリアでは、染毛剤やカール鍛を使用してい

た。新バビロニアの若い男女は髪をカールし香油をつけ、ペルシャでは庶民階級の男性でも顎鬚や髪を染め、顎鬚

をカールさせ油を塗り、付け髪を用いていた。

中近東の毛髪化粧を振り返ると、シュメールには長髪有鬚と剃髪無鬚がみられた。この相違をセム族が前者、シュメール族が後者とする民族表示説もあるが、ここでは、長髪有鬚は仮髪と付け髪で飾る宗教的な風習とする説をヒントにして、シュメールからペルシャに至る間の髪と髭鬚の資料に基く中近東の毛髪の化粧史を考察する。

中近東地域の人たちは古い昔から、ハムラビ法典碑の神のように、髪を蓄えた男性神をイメージしていたのであろう。シュメールの頃の神職者は髪を整え髪を伸ばすようになり、アッカドのサルゴン一世などは、髭鬚を権威の象徴にしたのではないか。前一〇世紀頃には上流階級の人たち、前七世紀頃のアッシリアの男性たちが鬚を伸ばすようになり、髭鬚化粧が普及し始めると、王は髪と鬚をカールさせ金糸で編んで権威の象徴とした。時代が下がると、庶民層の人たちも、染毛剤や香油、カール鎌付け髪を使うようになった。

女性の整髪の証拠は、シュメールの頃から認められたが、その後の資料は少なく、フェニキアの髪、アッシリア以降の染毛剤、香油、カール鎌が断片的にみられる程度であり、髪化粧の流れを纏めるには至らなかつた。

古代中近東の化粧史を資料で見る限りでは、シュメールが始祖で、アッシリアが中興の祖のような印象を受け、歴史の流れとしては櫛比が欠けたような状態であった。また、女性の化粧に比べて、髭鬚のような男性化粧の資料が目についた。このような傾向は、中国の春秋戦国時代と日本の中世に共通していた。中近東の歴史は、古代から現代に至るまで戦乱が続き、貴重な文化遺産とともに化粧の証拠も葬り去られた傷跡であろう。

それにしても、人間という動物は懲りない面々の集まりである。現代社会でも紛争が継続している。現代の戦争は、大量破壊兵器によって文化遺産はもとより、環境

あとがき

を破壊し人類滅亡の危機さえ招きかねない。中近東の歴史を辿ると、ついそんなことを思い出す。今日は丁度、八月十五日・終戦記念日であった。

参考文献

- R・コーソン著、石山彰監修、メークアップの歴史、
ボーラ文化研究所、一九八六
J・パンセ、I・デランドル著、青山典子訳、
美容の歴史、白水社、一九六一
春山行夫、おしゃれの文化史、平凡社、一九七六
春山行夫、“西洋の化粧文化史”、化粧品のすべて、
国際商業出版、一九七八
世界美術全集2、古代初期、平凡社、一九五六
同全集3、古代西アジア、一九五七

(次回は古代エジプトの化粧)

化粧のルーツを訪ねて（十一）

第八話 古代エジプトの化粧文化（1）

鈴木守

古代四大文明発祥の地、最後の一つエジプトに到達した。古代エジプトの化粧史を検討する前に、政治文化史の概要を示し、次いで、絵画彫刻、出土品などに見られる化粧資料を紹介した上で、ヒエログリフで書き残されているパピルスなどの記録を参考にしながら、古代エジプトの化粧史を化粧種ごとに振り返ることにする。

第一節 古代エジプトの歴史

エジプトはナイル川の氾濫によって地味が肥えていたので、古くから農耕が行わるようになり、前四〇〇〇年頃、集落ノモスが造られ始め、前三〇〇〇年頃にエジプトは統一され、初期王国の第一、第二王朝が成立し、ティスを都とした。以降、

前二六五〇頃、古王国。第三～六王朝、メンフィス。
前二三〇〇、前中間期。第七～一〇王朝。
前二〇五〇、中王国。第一一～一三王朝、メンフィス、
テーベ。
前一七七八、後中間期。第一四～一七王朝。
前一五六七、新王国。第一八～二〇王朝、テーベ→ア
マルナ→テーベの歴史を辿った。

新王国時代にはエジプトの全盛期を迎えたが、前二
三〇年、第二一王朝以降、前七世紀前半にアッシリア、
前五〇〇年頃にペルシャ、前三三〇年にアレキサンダー
大王が支配。大王の死後、前三〇五年にブトレマイオス
朝が樹立、前三〇年にクレオパトラの自殺により古代エ
ジプトの幕は閉じた。

この間の王朝は、ナイル川三角州地帯のタニスやアレ

キサンドリアなどを転々と遷都した。新王国前の首都は

ナイル上流から、現ルクソール付近のテーベ、現ティニスのティス、アマルナ、現アルギザ近郊のメンフィスに所在した。

古代エジプトでは王朝の推移はあったが、ほど二千年の間、政治形態は殆ど変わらず、王はファラオと呼ばれ、神權的な專制君主であり、中央集権的な官僚政治を行っていた。

文化史的には、古代エジプト人は宗教的な意味で死後の世界を信じていたため、古王国の頃には、ギザ、サッカラ（アルギザ近郊）に巨大な王墓ピラミッドを造営した。これらのピラミッドやその他の遺跡から、絵画彫刻、工芸品などが多数発見されており、古代エジプト人の化粧風習を垣間見ることができる。

第二節 古代エジプトの化粧資料

古代エジプトの化粧史を著している成書には、歴年を記したもののが少なかったので、ここでは、美術全集などに収載されている絵画彫刻、ミイラ、出土品から古代エジプトにおける化粧の証拠を探すことにする。なお化粧そのものではないが、後述する理由により、王冠や頭巾などの装着も髪化粧の範囲に含める。

一、古代エジプト末期

かつて、パスカルは「クレオパトラの鼻が一センチ低かつたら、世界の歴史は変わっていたらう」と彼女の美しさを表現した。パスカルならずとも、エジプトといえば、クレオパトラを思い浮かべるであろうが、彼女の姿はイシス女神の化身として描かれているだけで、生の姿は残されていない。アレキサンドリアの海中に眠っていることを願いながら、彼女の化粧を記載した二・三の書を参考にすると、「彼女は長い付け睫毛を施し、眉と睫毛を黒に、上瞼を暗青色、下瞼をナイルグリーンに彩り、白粉や頬紅、口紅は勿論、額の血管上に青い線を入れ、濃い緑色の髪を被っていた」と著されている。私の印象は、エリザベスティーラー扮するクレオパトラである。巷間では、「香料を巧みに使つた」と言われているが史実かどうかは知らない。

ブトレマイオス朝時代には、グレコローマン風の化粧様式を取り入れた婦人、男性、少年を描いた絵画があり、前二〇〇年頃の化粧容器や軟膏壺もあった。

前三世紀から前七世紀頃には、立て鳥帽子様の髪と付け髪姿のオシリス神座像があり、この図にはホルス神の象徴である隼（あるいは鷹）の姿も描かれていた。また、神官頭部像は剃髪し髪も生やしておらず、前六〇〇頃の化粧壺も見つかっている。

二、新王国時代

全盛を誇った新王国時代の絵画彫刻、用品用具類が多数発掘されている。ツタンカーメン王の棺の蓋には遺影が刻まれ、眉目は青く彩られ、胸まで届く前垂れと額部に南北エジプトの王を象徴する隼とコブラが刻まれた頭巾を被り、顎に叢智を表わす付け鬚が添えられていた。

南北エジプトは、それぞれナイル上流地域と下流の地域を指し、頭巾はメネスと呼ばれている。また、ツタンカーメン王座の背もたれに、王妃と過ごしている生活の様子が描かれていた。王は付け鬚を外し、頭巾の代わりに鬚を被り、その上に豪華な王冠を乗せていた。王妃の肌は赤褐色で王の体に香油を塗っていた。王と王妃の眉と目の縁は黒くはつきりと描かれていた。また、ハトシェプスト女王像は紋章と前垂れ付きの冠を戴いていた。

エジプト三美人の一人に数えられているネフェルティティの胸像は、紋章の付いた鳥帽子風冠を被り、眉目は黒く描かれ、口紅を施していた。彼女の胸像の写真を一枚見たが、いずれも右側から写してあった。残念ながら左眼が損壊しているため、左側や正面の写真は少ないといわれている。

そのほか、上流階級や庶民層の人たちの化粧姿を表した三十点近くの美術品に目を通したが、冠、頭巾、付け鬚は見当たらなかった。しかし、眉目の化粧と鬚は殆どの像に認められた。

ブーン、顔料を混ぜる皿、眉や目を描くステイック、鏡、櫛、手抜き、道具箱、鏡筒があつた。これらは石灰岩、ガラス、象牙、青銅、アラバスターなどで作られ、クレンジングクリームは油脂と石灰を混ぜたものであつた。

三、中王国前後の時代

中王国前後の中間期についても、この頃で述べることにする。

後中間期の絵画彫像の資料はなかつたが、第一四から第一七王朝時代のコール壷、コール用ステイック、化粧皿、象牙製の化粧容器などの用具が発掘されている。

中王国では、センウセルト王の立像は肌色が赤褐色で、目と眉が強調され、無鬚だったが、同王の座像には付け鬚があつたので、顎鬚剃毛のよい証拠である。メントウヘテプ王の立像は冠と付け鬚を装着し、眉目はくつきりと記されていたが、肌は黒く塗られていた。この点、南方系の王かどうか、古王国や初期王国の資料をみた後に検討する必要がある。

女性像では、左手に鏡、右手に香油の杯を持つて匂いを嗅いでいる女性が石棺に浮彫りされていた。彼女の前に立っている奴隸は壺から別の香油を杯に注いでおり、後の奴婢に短髪を整えさせていた。恐らく、髪を着用するので自毛は短くしているのである。また、奴婢像二体があつた。彼女たちは主人の墓所に供える供物を持ち、

上層階級の人たちの化粧例を挙げると、壁画の女性像は、眉目に黒化粧を施し、整えた髪を胸にまで垂らした髪を被り、上腕と胸は白く、顔と前腕は赤褐色に彩色されていた。化粧の直接的な証拠として、化粧中の女性を描いた絵が残されていた。彼女は左手に鏡を持ち、右手口紅を指していた。

ほかに、第一八王朝ラームес墳墓の『哀悼する女たち』の絵には、悲しみの涙を流している女性が描かれていた。彼女たちは白いリネンの衣装を身に着けていたが、胸乳が透けて見えたり、胸乳が露わになつた者がおり、中には裸身で陰毛まで描かれた女性もいた。それはそれとして、哀悼の意を表して上に捧げた彼女たちの腕の先に長く伸びた爪が認められ、爪を伸ばす風習を窺うことができた。

庶民階級の人たちの例では、肌が赤褐色の歌姫と舞姫を描いた壁画は、眉目を黒く染め、編んだ髪を肩あるいは胸まで垂らしていた。農作業中の夫婦四組を描いた壁画では、赤銅色の体に白い衣裳を纏つた彼らは皆、眉目を黒くし、女性の髪は背中と肘の上にまで垂れ、男性の髪は項が隠れる程度、顎はちょび鬚か無鬚であった。ほかに、髪を被らずに前髪だけ残して他の頭髪を剃毛した女子像と剃髪の男子像もみられた。

用品用具類には、クレンジングクリームおよびクレンザーが残っている化粧容器、顔料の容器、顔料を掬うス

眉目に化粧し、一体は中央で髪を分け、胸乳の上まで垂らした髪を被つていたが、他の一体は髪が自毛か分からぬが、束髪を結つていた。

出土した化粧用具や用品類に、クリーム、コール、紅などの壷や瓶があり、これらの容器は黒耀石、金、石膏、アラバスター、水晶などで作られていた。ほかに、乳棒つきのパレット、銀製の鏡、化粧壷と鏡を納めた道具箱もみられた。

前中間期の資料は乏しく、遺品としてコール壷のみであつた。

四、古王国以前の時代

古王国では、第三王朝初代のジュセル王の墳墓がサッカラに造られ、これが最初のピラミッドとなつた。次いで第四王朝の時、ギザに最大のピラミッド、クフ王の墳墓を含む三大ピラミッドが設立された。この時代を過ぎると、ピラミッドの造営はみられなくなつた。

化粧関連の資料としては、第四王朝時には、無髪無鬚の男性彫造が三体みられ、王子ラー・ヘテプ座像の皮膚は褐色で髪は短く、口髭を蓄えていた。ほかに、墳墓壁面に直毛の髪および縮毛の髪を被つた故人の姿が浮彫りされ、神官像は祭儀用の髪を被つていた。これらの像は皆、眉目に化粧が施されていた。また、壷に蝋を塗っている労働者像の体は赤褐色であった。

第三王朝では、ジュセル王の座像は体を黄色、髪を黒く、着衣を白く彩られ、肩まで垂らした髪と付け髪を着けていた。カフラー王とメンカウラー王の彫像は、角巾と付け髪姿で、眉目の化粧を認めた。メンカウラー王と並んだ王妃の像では、眉と目の化粧と胸まで垂れた髪が認められたが、特に興味をそそったのは、リネンの衣装をまとった薄衣の下に、綺麗に整った偏平なデルタが透けてみられ、陰毛の手入れも行っていたような印象を受けた。ほかに、ラー・ヘテブ王子妃ネフェルトと村長夫人の像は眉目に化粧し、肩にかかる程度の髪で、王子妃像の体は淡黄色だった。

初期王朝時代に入ると、ピラミッドの建築はなく、その前身のマスターが王の墳墓として造られた。第二王朝カセケム王の座像は、白い立て烏帽子風の王冠、第一王朝セメルケト王のレリーフは、立て烏帽子状の冠と付け髪であった。両者とも異民族征服の勇姿をモニュメントにしたものである。かつて見た、加藤清正の立て烏帽子と長く伸ばした髪が目に浮かんだ。これは威嚇から始まり、勇者の象徴に転化したものであろう。初期王朝時代の王は勇者でなければならない。勇者の象徴、立て烏帽子と付け髪は、やがて英雄、更に王者の標準となり、立て烏帽子は王冠へ昇進したのはなからうか。

王以外では、第二王朝時の男性胸像の一体は、項が隠

れる程度の縮毛の髪を被り、他の一体は、髪を中央で分けて鳥帽子は王冠へ昇進したのはなからうか。

初期王朝以前、前三五〇〇年頃の化粧用スプレー。さら

に、肩の上でカットしたお河童風の髪姿であり、短かい髪を生やしていた。第一王朝時の「蛇王の碑」にホルスの化身・隼が刻まれ、女性裸像も残されており、像は綺麗に整髪した髪を被っていた。

出土品では、第一王朝時のパレット二点、一点はナルメル王のパレットで、立て烏帽子と付け髪姿が彫られていた。また、第一王朝の墓から賦香した軟膏と化粧道具が発掘されていた。

初期王朝以前、前三五〇〇年頃の化粧用スプレー。さらに古く、日の化粧に使つた新石器時代（前六～七〇〇〇頃）のパレットも発見されている。

五、ミイラが語る化粧

吉村作治監修の『ミイラの謎』には、ミイラの写真が収載されている。八十歳のラメセス一世のミイラには頭髪が残り、顎髪はなかつた。持ち上げられた左手の爪は長く整えられ、爪切りの風習を暗示していた。左手が持ち上っているのは、何千年も地下で眠るうちに、熱で組織が変形して腕が動いたためであるとされている。ほかに九体のミイラ頭部の写真があつた。二体の女性の一体は長い髪をカールさせ、他の一体は短髪を染めていた。男性ミイラの多くは、不精髪だつたが、一体は顎髪と頬髪が整えられていた。以上がミイラが語つた古代エジプトの髪や鬚髪の化粧である。化粧には直接関係はないが、

興味深い資料があつた。上手く作られたミイラでは、指紋が綺麗に残つており、拡大写真でみると、汗腺孔まで観察することができる。

ところで、エジプトではミイラ制作技術を応用して化粧品作りを発展させといわれている。遺体から脳や内臓を除いて没薬（ミルラ）などの香料を詰めて縫合し乾燥させたため、ミルラが訛つてミイラと呼ばれるようになつたという。それはそれとして、ミイラの製法を紹介しておく。

ミイラ職人は遺体の左腹部に切れ目を入れて肝臓、胃、腸、肺を取り出し心臓を残す。心臓は感情、意識、命の中核と見なされたためである。脳の除去には、左の外鼻孔から青銅の鉤棒を挿入して篩板を壊し、脳髄を出した。その後、暖めて液状にした樹脂を頭蓋の空洞に流しこみ、これらの作業が終ると、脇腹を縫い遺体を洗つて、ナトリウム粉で覆つて水分を吸収させる。ミイラが乾燥すると、ナイルの水で洗つた後、香油を塗つて遺体の表面を柔らかにし匂いをつけた。ミイラ作りには七十日くらいかかるそうだ。

六、化粧用原料成分

古代エジプトで使われていた原料成分を羅列して括弧内に化学名あるいは和名を示す。

古王国の時代までに登場した素材には、青緑色顔料の

孔雀石（塩素性炭酸銅）、油脂類では、亜麻、オリーブ、胡麻、大根、紅花の種子油、動物性脂質の蜜蠟、香料では没薬とオリバナム（乳香）があつた。

中王国の頃には、テレピン油、アラバスター粉、ナトロン（天然の炭酸ナトリウム）、蜂蜜、ロバの乳、人乳が使われていた。

使用開始時期が不明の原料成分を挙げると、色素類では、黒色顔料の方鉛鉱（硫化鉛）、カーボン（炭素末）、アンチモン（硫化アンチモン）、マンガン（黒色酸化マンガン）。青緑色顔料の綠青（塩基性炭酸銅）、珪孔雀石（含珪酸炭酸銅）、その他の顔料では、赭土と代赭石（赤酸化鉄）、黄土（黄酸化鉄）、鉛白（塩基性炭酸鉛）、植物染料のヘンナと藍があつた。また、コールがしばしば登場するが、石炭や木炭の意味ではなく、黒色顔料で作られた眉墨やアイライナーの意味に理解したので、コールをそのまま使うことにする。

油脂類はアーモンド、ヒマ、椰子、レタスなどの種子油、アンテロープ、牛、ガゼル、カバ、鴨、猫、羊、豚、蛇、ライオン、鰐などの脂肪が使われていた。

香料はアイリス、サフラン、シナモン、麝香草、セロリ、ナルド（甘松）、薄荷、花薄荷、バルサム種子、百合、レモングラス等々の精油であった。

ナゴマメ）などが使われていた。キヤロブは地中海沿岸の乾燥性地帯に生える喬木の実である。

参考文献

- 世界美術全集二巻、古代初期、平凡社、一九五六
同全集四巻、古代エジプト、一九五六
吉村作治、クレオパトラの謎、講談社、一九八三
コーソン著、石山彰監修、メークアップの歴史、
ボーラ文化研究所、一九八六
酒井傳六、古代エジプト人の肌色と美、
化粧文化一五号、一九八六
リズ・マニカ、ファラオの秘薬、八坂書房、一九九四
デュナン、リシタンベール共著、吉村作治監、
ミイラの謎、創元社、一九九四

(第三節以降は次号へ)

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（十五）

松下魏三

ばかりの三井宏美氏が就任した。

昭和二十八年（一九五三年）に創設された東大の応用研究の教授にはタンパク質学者として著名な大阪大学教授の赤堀四郎博士が兼任教授となり、助教授には植物生

二十四 タンパク質の合成の研究

昭和二十八年（一九五三年）に創設された東大の応用研究の教授にはタンパク質学者として著名な大阪大学教授の赤堀四郎博士が兼任教授となり、助教授には植物生化学の分野で優れた実績のある丸尾文治氏が就任した。この時赤堀教授と丸尾助教授とは互いに隣村の出身であることを初めて知り、格別な親近感とともに不思議な縁に驚いた。そして助手は東大の農学部農芸化学科の坂口謹一郎博士のもので酒石酸代謝の研究で優れた研究成果をあげた野村眞康氏ともう一人の助手は当時名古屋大学理学部教授で生化学者の江上不二夫博士の研究室で学位をとった

た。

当時わが国ではまだ放射性のアミノ酸は市販されていなかつたので、若い研究者たちはクロレラを放射性同位元素の¹⁴Cの化合物¹⁴CO₂の中で培養し、放射性アミノ酸をつくつた。

その後この放射性のアミノ酸はアイソトープ協会を通して多くの大学や研究機関に配布されるようになつた。

そして昭和三十一年（一九五六年）には、丸尾文治助教授はアメリカのベンシルバニア州立大学に留学し、A・A・ベンソン博士について研究を進め、帰国後は再びタンパク質の生合成の研究を続けることになつた。

この研究は、ある枯草菌^(註2)が分泌するアミラーゼの量が他の枯草菌のDNAで変わるかどうか調べたところ変化することがわかり、多くの実験を繰り返した結果最初の生産量の三〇〇〇倍以上を生産する菌をつくるだけではなく、簡単にアミラーゼの結晶をつくることができるようになつた。

この研究によつてタンパク質の生合成には多くの制御装置がかかわつてゐることがわかつた。

そしてまた遺伝子の本体であるDNAがどのようにして特異な酵素タンパク質の生合成にかかわつてゐるかといふ遺伝学上の問題を試験管の中で生化学的に捕えるという野心的な研究への道が少しずつわかつてきただのである。

（註1）隣村

〔赤堀四郎教授の出身地〕

● 静岡県小笠郡千濱村成行（現静岡県掛川市千浜）

〔丸尾文治助教授の出身地〕

● 静岡県小笠郡池新田村池新田（現静岡県御前崎市池新田）

両者の出身地の距離は東西約四キロメートル

（註2）枯草菌

バチルス属の非病原性細菌の一種。自然界に広く分布し、空気中にも存在する。芽胞をもつため乾燥や高温に抵抗性がある。

（註3）DNA
遺伝子の実体であるデオキシリボ核酸・遺伝子の本体。

（参考文献）

○ 生化学 第七八卷 第六号

丸尾文治『時々刻々時は過ぎ、時々刻々人は動く・貴重な巡り合せを大切にしよう』

○ 遺伝 一九九四年五月号（四八巻五号）

野村眞康『私と分子遺伝学』

はまだ基本的な問題として研究されていなかつた。

これは敗戦国である日本の窮屈の状態から考へてもやむをえなかつたと思われる。

このような厳しい時代ではあつたが、赤堀博士は五年余りを東大の応微研の教授として、また十年間は東大理学部化学科の教授として研究と教育指導に専念するかたわら研究者一人一人のことによく考へ、親代りになつて世話をしたので研究者一同から心服されていた。

昭和三十二年（一九五七年）には、野村眞康助手はタンパク質の生合成の研究をしていたアメリカのイリノイ大学の細菌学部のスピーゲルマン教授の研究室に留学した。

この時、アメリカではハーバード大学のワトソン教授をはじめ何人かの研究者がリボゾームの構造について研究していることを知り、リボゾームの構造を解明するこゝがタンパク質の生合成の機構を解明する手がかりになることを知つた。

その後リボゾームの構造についての研究は多くの協同研究者の助力によつて進められ、リボゾームの立体構造の解明について世界の多くの研究者が真剣に立ち向つてゐた。

その後、野村眞康氏は昭和三十五年（一九六〇年）に日本に帰り、大阪大学助教授として蛋白質研究所においてリボゾームの再構成に関する研究を続け、三年後には

再びアメリカに戻り、東大・応微研でタンパク質の生合成のために微生物代謝生化学について研究した時から考えていた新しい分子生物学の分野に移り、何年も苦労した後に、初めて分子生物学の主流に影響を与えるようになつたのである。

(註1) ワトソン

アメリカの分子生物学者。英国のクリックと共同して、ウイルキンズの協力のもとに、DNAの一重らせん構造説を提唱。クリック・ウイルキンズとともに一九六二年ノーベル生理学・医学賞を受賞。

(註2) クリック

イギリスの分子生物学者。一九五三年・DNAの一重らせん構造の模型を提案。一九六二年ノーベル生理学・医学賞を受賞。

(註3) リボゾーム

すべての生物の細胞中に含まれる顆粒。小胞体の表面に付着してまたは離れて散在して、タンパク質合成に中心的役割をはたす。

れんししゅう（恋詩集）しさくのかなしみより その九

松 下 壽 男

連絡

—この次は

わたしの方から連絡します

せつかく誘つていただきながら

あなたに済まないことばかり——

閉ざされた私の心に

あなたへの感謝があふれ

言葉のひびきにはじめてふれた

赤子のような私がいた

(参考文献)

○学術月報 Vol. 25 No. 4

「日本学士院賞」
野村眞康『リボゾーム再構成に関する研究』

悲しいアメリカ——プラグマティズムの研究を通して——その四

松下壽男

1933—ニューディールとニューフロンティア

世界恐慌からの脱却のためにルーズベルト大統領は、建国以来自由の原則を貫いてきた経済に對して、大胆な介入に踏み切りました。ケインズらの近代経済学に裏付けられた技術を政治経済に導入したのです。

ニューディールと呼ばれる政策は、直訳すれば再分配、リセットという意味です。アメリカは、自由な大衆の購買力に新たなフロンティアを求めていきました。人為的な技術を導入し、自らを自然と同様に扱うことができるところまで、人文科学と經濟機構と大衆は育っていたのです。
とはいっても、自然が相手のフロンティアと、大衆を相手のフロンティアとは、対する常識が異なります。僕約は消費の美德にとつて変わります。
さらに、大衆を相手のフロンティアに正対するという

その時まで戦争とは、領土を奪い、敵の国民を支配することが目的でしかけるものでした。しかしその時から、アメリカの戦争は、敵国民の自由を守り、解放するための戦争となりました。まるで十字軍のような戦争です。
とはいっても、アメリカは、新たな利権に目覚めていたのです。相手が国土であれ、異国の大衆であれ、宇宙であれ、ニューフロンティアを手に入れさえすれば、アメリカはアメリカで在り続けることができるのです。

します。

一 言論・意思表明の自由、二 信教の自由、三 欠乏からの自由、四 恐怖からの自由、という四つの自由の達成のためには、本来、五つ目の「戦争からの自由」が不可欠でしよう。しかしアメリカは世界の人民の四つの自由のために戦争を始めたのです。アメリカの大衆がそれを認めたのです。しかも悲惨な戦争を早く終わらせるためにという理由で、原子爆弾という、最新の最終兵器を投入しました。プラグマティズムの、効果のためには目的も手段も選ばないという本質をあからさまにした戦争でした。

しかし、戦争に役立ちそうなことなら何でも研究させてみようという軍部のプラグマティズムによって、後に創造的なフロンティアを切り開く研究が生み出されたことも事実です。

1945—パックス・アメリカナ

戦後のアメリカは、世界を舞台に自国の歴史を繰り返

ことは、プラグマティストが自分自身に正対することでもあるのです。そのことは哲学者や心理学者や精神科医に難問を突き付けました。しかし大衆は難問は代理人に任せて、お手盛りや自家撞着の出来事に一喜一憂するのです。

1941第二次世界大戦

ニューディール政策は、大衆の自由な主体を奪つて專制君主制に逆戻りしたり、植民地政策を強引に推し進めたりして世界恐慌を乗り切ろうとした国々が戦争を始めた。ヨーロッパで再び大戦が始まると、アメリカは前回同様世界の武器庫となり、一気に景気を回復します。そして、ルーズベルトは「四つの自由」を掲げて参戦を決意します。

まず占領国というフロンティアに進駐し、そのフロンティアを、今度は自国の歴史とは反対に、東へ東へと追い込んでいきます。国際連合という連邦政府もどきを樹立しながら、これもまた自国の歴史とは攻守を逆転した南北戦争を戦い、小国や少数民族のゲリラには、グリンベレーが、まるでインディアンに対する騎兵隊のようにして戦います。

フロンティアでは、冷戦といわれる、実際の戦闘以外のありとあらゆる戦略がとられました。核開発と軍需産業はフロンティアの存在から富を生み出しました。また国内へのニューフロンティア政策は、人種差別撤廃政策によって新たな大衆を育てました。

アメリカは、世界の東西対立のフロンティアに力で立ち向かうことで、自らに繁栄をもたらしました。

しかも自国の歴史の通り、フロンティアの文化を根こそぎ大衆化し、第二段階のフロンティアへと導くのです。それは四つの自由を掲げたプラグマティズム流のシナリオです。

アメリカは、まず核という最終兵器を無言の圧力をとして軍事力にものを言わせます。次に経済活動という普遍的な交流で、自國の流儀をグローバルスタンダードとして押し通そうとします。そして他国の国民を消費者になると、消費文化である大衆文化を送り込み、相手国の民

俗習慣を根こそぎにします。

しかも、プラグマティズムは、文化の難解な部分は、エージェントに任せます。したがつて、文化人と言われ人々が担う、上流文化までを根こそぎにすることはあります。

しかし、これまでの歴史上の植民地支配や文明開化が、上からの文化交流だったのに對して、アメリカの大衆化による文化交流は、その国の中盤となる民俗習慣を根こそぎ崩壊させるのです。

それが、今現在の日本の状況なのです。

日本にも、アメリカ誕生時の常識と同様に、勤と儉と利を得ることが徳に通じるとする庶民の文化伝統がありました。その代表が報徳思想でした。

しかし敗戦後日本を占領したアメリカは、独立後も日本をフロンティアの一つとして、大衆文化を送り込み、庶民の伝統文化を根こそぎにしました。

そうなる背景には、アメリカの常識と日本の常識の麗しい親近性がありました。それはプラグマティズムと報徳思想の間の親近性でもあるのです。

と同時に、その反面、ゲームズが広めたプラグマティズムと報徳思想の間には、真理観や価値説について大きな違いがあります。

しかし、常識の哲学は、難解な部分は、エージェントに任せるのであります。そして庶民の伝統的な思想である報徳

を大衆化させることは考えていませんでした。とはいえるアメリカだけでなく日本やフィンランドなど世界の若者は、自力でアップルなどのパソコンやコンピューターを開発しました。しかもビル・ゲイツらによつて、コンピューターのソフトウェアの開発は、創造性さえあれば微々たる資本で莫大な経済効果をもたらすことが実証されました。また、人類の文字や絵、音楽、映像化された遺産はすべて情報化されることも実証されました。さらに斉一的な自然現象だけでなく社会的経済的な現象までもコンピュータでシミュレートでき、再現や予測ができるようになりました。

こうして現代は、マルチメディアの情報がインターネットで瞬時に世界を飛び交う時代を迎えました。インターネットは情報化の最前線であり、巨大なフロンティアです。そのフロンティアをもたらしたのはアメリカです。しかし世界中の一人一人がウィルスという形でフロンティアを荒し始めています。それを食い止める保安官も、FBIも、CIAもまだいません。

アメリカの常識は、勤と儉と利を得ることが神の召命に通じるとするキリスト教新教の宗教難民の考え方が出発点でした。そして国土のフロンティアの存在が新たなアメリカの常識を生み出し、機械化の力によつてフロンティアが消滅する頃、プラグマティズムというアメリカの哲学になりました。アメリカは大衆の購買力に

は、消費文化によって隅に追いやられ、日本の高度成長で庶民が軒並み豊かな大衆になると、忘れ去られていきました。

1988 フロンティアの崩壊とプラグマティズム

東西の冷戦は、表向き兵器開発の科学技術戦争の様相を呈していました。しかし裏では熱い情報戦争が繰り広げられていました。両大国がボタン一つで地球上を何度も壊滅させることのできるだけの核兵器を持つてしまって、後は、正しい情報と、可能な限りの対話が、一国の、そして世界の運命を左右するのです。キッシングや外交や、サミットが冷戦克服の先駆けになりました。そして、鉄のカーテンをかいくぐつていた市民レベルの情報が、ベルリンの壁を崩す大きな要因だつたことから、情報の果たす役割が再認識されました。

東西の冷戦は、東側の国々が体制を覆したことによつて終結しましたが、アメリカのフロンティアも消滅しました。アメリカは領土を手に入れることはできませんでしたし、進駐という形で相手国の大衆にアメリカの常識を植え付けることも、もはやできません。

1988 情報と第三のフロンティア

しかし世界の一部の若者たちは、新しいフロンティアに気付きました。それが情報というフロンティアです。

アメリカ軍部は原子爆弾の開発の一環としてコンピューターも開発していました。そして核と同様にその技術によって、急速に進展しながら、変貌しつつあります。その進展と変貌は、情報というものが自然や、文化と同様に経済効果を持つシステムであり、フロンティアであることを示唆しています。

2008 情報フロンティアの可能性

しかし一方で、大衆化と情報化が一度に押し寄せている現代社会では、情報や情報機器を悪用した犯罪や、過失、人権侵害が相次ぎ、大混乱を来しています。そして大衆に対し情報モラルを求められているのです。

新たなフロンティアの扉を開きながら、そこが無法地帯になると、道徳を求めるのです。しかし、求められる道徳とは、人々が大衆化する中でプラグマティズムの常識と引き換えて捨て去ったものではないでしょうか。

とはいえて、新しいフロンティアは、自然の問題も、経済の問題も、道徳の問題も、情報という新しい概念によつて、一元的に統一的に解明かす可能性をもつてゐるのです。

1830, 1960 「荒れ地の力で荒れ地（フロンティア）を耕す」創造的なプラグマティズム展望の視点

情報という新しいフロンティアで形作られる新たな常識が、プラグマティズムを推し進めるものなのか、それとも破綻させる全く新しいものなのか、今では、まだ解りません。

とはい、それを探る糸口の一つを、私は、見出しています。物心二元論の行き詰まりを情報という新しい概念によって一元的に統一的に打開する可能性の姿として、私は、視覚心理学者ギブソンの提唱したアフォーダンスの理論に注目をしています。

その理論は、環境を無尽蔵の情報と捕らえ、環境と主体的な人との関わりを通して、価値が生ずると考えるのです。

しかも、アフォーダンスの理論は、環境に実在する価値すなわち徳に出会うこと説くという点で、「物にも徳がある」と説く報徳思想と深い親近性をもっています。また、プラグマティズムの創始者のパースは、より大きな記号論の創始者であり、その記号論の延長としてプログラマティズムを唱えたのでしたが、その記号論が、現代の情報理論の基礎になつていることを忘れてはなりません。

そのことからも、ギブソンのアフォーダンスという概念も、パースのアブダクションという概念と親近性をもたらされたものといえ、リーマンショック以来の大不況です。情報化時代の常識の哲学をこのままにしておいていいものでしようか。

それは、きっと数量に価値を見出すのではなく、かけがえのない関係に価値を見出す常識の哲学ではないかと想像します。

それについても、フロンティア（耕すべき荒れ地、沃野との交流域）を求め夢を追い続けてきたアメリカのプラグマティズム流の常識は、ついにはグローバルスタンダードになつても、世界をアメリカにすることしかできません。

そして、その結果もたらされたものといえば、リーマンショック以来の大不況です。情報化時代の常識の哲学をこのままにしておいていいものでしようか。

報徳思想の現代化に踏み込まない限り・・・私のプラグマティズムの研究は、悲しいアメリカの研究なのです。

つてていると思われるのです。

第三のフロンティアと目される情報化時代の常識の哲学を展望するためには、プラグマティズムの創始者で、荒れ地を耕すフロンティアスピリットの哲学を体系付けたパースの思想に立ち返ることが有意義でしょう。

しかも、ジエームズがプラグマティズムを常識の哲学として普及させたことを念頭に置き、ジエームズの見落としていた部分を大切にしながら、パースの理論に立ち返ることが重要でしょう。

その立ち返りにとって、現代のアフォーダンスの理論と日本の報徳思想は、絶好の視点を与えてくれるにちはあります。

なぜなら、ギブソンの要素は、パースと同じく天空や荒れ地を望む実証科学に裏付けられているのです。

そして、また報徳思想も、荒れ地の力で荒れ地を耕す二宮尊徳の実践に裏付けられているのです。

しかも彼の要素は、天・地・人などの向かい合う関係の図式で抽象的に表現されることによつて、記号化や関数表現、プログラミングなどの情報処理の可能性が開かれているのです。

ギブソンのアフォーダンスの理論による透析を通したならば情報化時代に報徳思想をよみがえらせることができ、その情報化時代の報徳の視点に立つてパースの思想を読み解くならば、新たなフロンティアである情報化時

還暦からの考古学（十九）

二角縁神獸鏡に対する考え方の変化（その十二）

中山喬央

まえおき

三角縁神獸鏡に対する考え方の変化という副題についての掲載を始めたのは、五回にわたった玉の話メソポタミア・エジプト版が一区切りついた『まんじ102号』からでした。

玉の次は鏡だ。その鏡のなかでも最も注目を集めている三角縁神獸鏡について、何か新しい考え方を打ち出す事は出来ないだろうかと、僭越にも挑戦的な「三角縁神獸鏡に対する考え方の変化」という副題をつけたのです。以来三年が経過しました。今では自分のなかには明確に、従来とは一線を画す思考が確立しつつあるように思われます。

幸いにも、このたび『まんじ114号』終了時に、藤本強・三戸岡道夫両氏より期せずして中綴めをするように

とのご指導を戴きましたので、本項をもちまして「三角縁神獸鏡に対する考え方の変化」という副題の掲載を終了すると共に、「まとめ」を行うことといたします。

結論

「三角縁神獸鏡は魏の鏡ではない。卑弥呼が魏からもらった鏡ではない。魏の年号が入っている景初三年鏡を含めて、全て日本列島で鋳造された鏡である」ということです。

理由

① 日本列島産青銅製品としては、弥生前期末から製作された銅鐸があるが、すでに同范銅鐸と鑑定されるような類似品を作り出す鋳造技術が存在していた。

その技術が伝承されて、三角縁神獸鏡が製作されたとです。

古墳文化発展に寄与した事が考えられる。

る。これに対する朝鮮民族の抵抗が続き二二三年には高句麗が楽浪地方を併せ翌三一四年には帶方郡を陥れる。そのような背景の下、相対的に平和で鉱物資源豊富な列島には、優秀な鉱山師、金属鋳造技術保有者が大陸・半島より渡来し、日本列島の弥生・古墳文化発展に寄与した事が考えられる。

説明

① 梅原末治が同范銅鐸と認めた泊銅鐸と新庄銅鐸、三木文雄が同范銅鐸とした神戸・恩智・倭文の各銅鐸、佐原真も「守山市新庄の銅鐸は、（合計四個の兄弟をもち、流水文様の間に、狩り・脱穀・トンボ・カニ・シカ・トカゲ・スッポンなど多くの生物が描かれて面白い」と紹介している銅鐸の、鉛同位体比が符合しなかつたのである。

これは同じ坩堝から同じ鋳型で大量生産していたという従来の考え方を否定されただけでなく、当時の青銅工人の技術水準が専門家が同范と見誤るほどの類似品を作り出す能力を有していた事を示すものである。この技術水準は弥生時代後期の平原遺跡一号墓から出土した徑四六・五cm、重さ七九五〇gの内行花文八葉鏡四面の同型鏡製作に引き継がれる。これは金属の原型から複数の粘土型をつくる技術を使つて、漢鏡をおかれ樂浪・真番・臨屯・玄菟の四郡が置かれ

れているものである。

一方古墳時代前期に古墳より出土する三角縁神獸鏡にも同範鏡説があつた。

それを立証すべく梅原末治は山崎一雄に椿井大塚山古墳出土三角縁神獸鏡のうち、四組の文様が同一のいわゆる同型鏡について分析を依頼したが結果は否定的なものであつた。

山崎一雄の分析結果を述べます。

四組の同型鏡についてM七とM八、M九とM十、M二十とM三十一の鉛同位体比は明らかに誤差の範囲を越えて異なつており、鉛の同じ原料を使用したものとは考え難い。すなわちこれらの組は一つの坩堝で融解した青銅で同時に鋳造されたとは考え難い。

之に対しM十三、M十四、M十五の組は同位体が近く他の同型鏡とも比較して検討した。山口県竹島御家老屋敷古墳と川崎市加瀬白山古墳の出土鏡と、大塚山M十二、M十四、M十五との五面は同型であるが前二者と後三者の鉛同位体比は異なり、同じ材料で作られたとは考え難い。大塚山M十四の同位体比はM十三とM十五とは僅かながら異なるが、M十三とM十五の数値は近接し、特に207/206の値は極めて近いから、両者は同一材料で鋳造

是に対する筆者の考え方を述べます。

先ず舶載鏡、仿製鏡問題です。三角縁神獸鏡には、一部に粗雑化、文様の退化、銘文の簡略化がみられるので、それを仿製鏡とし、技術水準の劣った日本列島内で模倣製作したのだとする考え方です。しかし学者、研究者毎にその区分けはまちまちです。

肝腎の中國鏡でも、中國国内で同様の退化傾向が見受けられますので、この考えは成立しないと考えます。

次に『魏志倭人伝』の記事について言及します。

『魏志倭人伝』には「特賜汝紺地句文錦三匹細班華罽五張白絹五十匹金八両五尺刀二口銅鏡百枚真珠鉛丹各五十斤皆裝封付難升米牛利還到錄受悉可以示汝國中人使知國家哀汝故鄭重賜汝好物也」という記載がある。

この文の平野邦雄（東京女子大学教授 日本古代史）による現代語訳を掲載します。

「特に汝に紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十匹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠・鉛丹各々五十斤を与えるよう。これらの品物は、みな包装して難升米、

された可能性がある。

また大塚山M十八と長岡京市長法寺南原古墳出土の四神四獸鏡は同型であるが、その同位体比はやや異なり、この組も同じ材料で鋳造されたとは考え難い。……

このように三角縁神獸鏡についても銅鐸同様、大略同範説が否定される結果がでております。

これは魏の官営工房における、同時に倭国向けに特別に大量生産したという考え方の否定につながります。

② この点について三角縁神獸鏡、魏鏡説派の言い分は次の通りです。

卑弥呼が魏から下賜されたと『魏志倭人伝』に掲載されている三角縁神獸鏡は百面だが、その後も四回にわたり魏に使者を派遣している。其の都度百面ずつ三角縁神獸鏡を下賜されたとすれば合計五百面となる。一方で三角縁神獸鏡には魏から下賜されたものと、それを模倣して日本列島内で作成した仿製鏡が二百面上存在し、中国から来た舶載鏡は三百面だから五百面の範囲内で辻褄は合う。

中國大陸・朝鮮半島で出土しないのは魏の官営工房で邪馬台国宛、特別に鋳造した為である。

牛利に託するので、彼等が帰国したら、この詔と内容を照合して受取り、悉く汝の国人々に示し、魏が汝を大切に思っていることを知らせなさい。よつて鄭重に、汝に好い品物を与えるのである。

決して喧伝されているような「汝の好物である銅鏡を与える」という、特別に鏡を重視する内容ではあります。

「ここで三角縁神獸鏡が魏の皇帝より耶馬台国の卑弥呼に下賜された鏡であると提唱した最初の人物を紹介します。管見するところ、それは内藤湖南です。

富岡謙藏は彼の著書『古鏡の研究』のなかで次のように述べておられます。

『魏志』の倭人伝に就いては、古來幾多の学者の研究あり、就中卑弥呼の何人なるや、又其の耶馬台国の何地を指せるかは、最も興味ある研究の対象として、種々論議されつゝあり、今に至つてなほ定説を聴くを得ざるも、彼を以つて九州の酋長と解し、従つて邪馬台国を其の一部に比定せむとする説を探る者多きが如し。されど是を上述の遺物の示すところによれば、当時既に大和朝廷の主権の確立して、宏壯なる墳墓を當

み、これに副葬するに多数の支那将来の精巧なる鏡鑑を以つてし、前代に特殊なりし九州北部の一種の遺跡の全く跡を絶ちて、その鏡を出す遺跡の畿内の墳墓と同一なるに至れる事実は、日本の文化の統一の行われたるを告ぐるものに外ならず。而して中心の畿内なりしことよりせば、所謂倭人の酋長として魏と盛んに交通せる卑弥呼の、正にこれを大和朝廷の或る勢力ありし女性を指せりと解するを最も妥当とすべく、邪馬台国は当然大和に当つべきものなるを思う。此の点において吾人は我が内藤博士の卑弥呼即倭姫説によく遺物よりする研究に一致するを認むるものなり。

更に富岡謙蔵はこのようにも述べております。

余の三国を中心とする時代の遺品と考定せる半肉刻神獸鏡（三角縁神獸鏡？）及び画像鏡（画文帶神獸鏡？）に至りては、上述の如くその出土畿内に最も多く、而して何れも宏壯なる前方後円墳又は円墳において発見せり。この事実は先に九州北部を主とする彼比の交通が大和朝廷の確立と共に、前代より既にその一部が存在を認められし、畿内に其の中心の移れるを示せるものにして『三国志魏志』の倭人伝に見ゆる彼の國との交渉の記事を明瞭となし、従つて又当時の我国の状態を窺わしむるものなり……。

内藤湖南、富岡謙蔵の時代は、鏡の理化学的手法による成分分析は行われず、発掘実績も乏しい状況でしたから、大陸半島の動向を調査研究した上で、北九州ではなく、畿内を中心とした古墳から出土する三角縁神獸鏡が魏の皇帝から卑弥呼に下賜された鏡であるとの考え方は、まことに優れたものでした。

先ずその魏鏡説を前進させた最大の発掘成果は、昭和二八年（一九五三）椿井大塚山古墳で三三面の三角縁神獸鏡を含む三七面の鏡が検出されたことでした。これは小林行雄の三角縁神獸鏡同範鏡説をすゝめ、大和王権の支配権確立の象徴として一世を風靡します。

しかしその後の発掘実績と理化学的分析手法導入による研究成果は、その仮説を裏付ける方向には進みませんでした。

森浩一は自分が発掘に参加した大阪府和泉市・黄金塚古墳の鏡の出土状況につき次の様に説明しています。

この古墳は長さ八五mほどの前方後円墳で、後円部の頂上に三つの粘土郭があり、それぞれ銅鏡を埋納していた。中央の壮大な粘土郭には長大な木棺がおさめられていて、その木棺内には遺骸の足元から少し離れたところに半三角（斜）縁の二神二獸鏡（徑十七・四cm）一面がおさめられていた。……これに対しても、景初二年という『魏志』倭人伝に記録されているのと同一の年号を鋳出した平縁の画文帶神獸鏡（徑二三・八cm）一面は、棺外の郭内に鉄製武器や工具類と共に雑然とおかれていた。……この景初二年銘の神獸鏡は文様構成のうえから見ると……この同型鏡を持つ古墳は五世紀後半から六世紀初頭のものが多く……すなわち和泉黄金塚の景初二年銘の神獸鏡は、もし中国で類似した鏡がないかぎり、これら的一群の鏡との関連がたどりそうである。

なお島根県加茂町の神原神社境内の方墳で出土した景初二年銘のある三角縁神獸鏡は、内区の主要な文様構成では酷似するが、銘帯や縁の表現が異なり、とく

に銘文が完全に近く、和泉黄金塚の銘文はそれを省略しているところから理論的には先行する。

次に未盗掘のまま学術的調査が行われ、三三面の三角縁神獸鏡と一面の画文帶神獸鏡が出土した黒塚古墳についてお話をします。

一九九〇年十月に刊行された『黒塚古墳調査概報』「あとがき」で調査の担当者、河上邦彦は次のように述べています。

石室の床面は盗掘の痕跡が無く、副葬品がすべて残されていた。全長一三〇mの前方後円墳の副葬品がすべて残されていたことの学術的価値は極めて高い。棺内副葬品は画文帶神獸鏡一面と若干の刀剣類および朱の固まりのみで、それ以外のすべてが木棺と石室壁体との隙間に置かれていた。また、三角縁神獸鏡はいずれも木棺側に鏡面を向け、西棺側に十七面、東棺側に十五面、棺北小口に一面を、棺の北半部をコの字

形に取り囲むように配列していた。前期古墳の豊富な副葬品の内容と、副葬時の配列方法が具体的に判明する貴重な資料である。

この出土状況から、昭和二八年の京都府椿井大塚山古墳の配置状況がほぼ事実であったことを裏付けるとともに、鏡の多数埋納が単に副葬品を石室に入れるというものではないことを示した。……

鏡は葬具として埋納されたのではないと私は考えている。……

小林行雄による椿井大塚山古墳の被葬者が鏡の配布者であるという説は否定されるだろう。しかしながら三角縁神獸鏡は中国鏡であるか否かについての問題については、現状で解決すべき材料はみつかっていない。

この河上邦彦の考えに筆者は共感を覚えました。

(3) 三角縁神獸鏡が出土するのは出現期古墳ではなく、前期古墳です。時代は四世紀です。一方邪馬台国の卑弥呼が魏に使者を遣わしたのは三三九・一四〇・二四三・二四五・二四七年の五回でしかも極限られた期間内ですから、三角縁神獸鏡の古墳出土との間が五十年～百五十年と開きすぎます。

(4) このため伝世鏡説が誕生します。梅原末治は香川県・石清尾山古墳群から出土した方格規矩四神鏡に手ずれがあつたところから古墳から出土する鏡は伝世するものがあると紹介します。

しかし三角縁神獸鏡にはこのような手ずれをしたものは見つかっておりませんし、被葬者が生前手許において愛用していれば伝世しなくても手ずれは生じる訳で、このような伝世鏡説は成立しないと考えます。

更に鏡は土器と異なり一つの型式が終つてから次の型式に移るものではありません。従つて作り始めた時期は判明するのですが製造が中止される時期といふのはその鏡の出土状況をみて判断するものなのです。従つて伝世鏡であると云う事を立証できるのは、神社の御神体である等の特殊な場合に限定されます。

其の上、一九七一年発掘された武寧王陵からは膨大な副葬品見つかり、何れも同一古墳に埋葬されていました、同時期であることを立証する貴重な学術的資料として活用されているのです。

(5) これにつきましては、「まんじ」一〇七号（粉飾決算だつた残留脂肪酸分析・粉飾の疑い濃厚な我が國鉛同位体比研究・鉛同位体比法とは・日本産鉛に対する

る不当と思われる見解）、一〇八号（日本列島の地質構造について・日本列島における鉱山地質についての検証・日本の地下資源と鉱山）、一〇九号（日本列島の形成・日本列島、朝鮮半島、中国大陆産鉱鉱石の鉛同位体比）一一〇号（青銅器文化についての考え方・朝鮮半島出土の青銅製品・中国北方系・前漢時代の鉛同位体比・日本列島出土前漢鏡と弥生彷彿鏡の鉱石原産地・日本列島出土銅劍の鉛同位比・銅鐸の素材原産地）で自説を述べておりますのでご参照ください。

要は日本列島産の鉛鉱石のみ七四点中二十点を正当な理由無くして検討対象から外した行為は、限りなく粉飾決算に近く、従つてそれから生じる検証結果は受け入れ難いとするものです。

更に検証はあくまでもA式図とB式図の全ての指數を使って行わなければならない事は、鉱山所在地と製品出土地の地理的条件、交易可能範囲かどうか、あるいは製品と原材料の動きはどういった方向性を示すのか、それが経済の原則にのつとめた動きなのかというような検討を先ず行った上で結論を出すべきだと云う事です。

(7) 本項に該当する日本列島に青銅器文化が発生したと考えられる、紀元前四〇〇年頃から紀元後四〇〇年頃までの中国大陆と朝鮮半島の情勢を考え、三角縁神獸鏡という鏡がどのようにして誕生したかを考えようとするものです。

先ず中国大陆では前四〇三年から戦国時代が始まっています。秦の始皇帝が初めて中国を統一したのは前二二一年のことですが、長続きせず前二〇二年には劉邦が項羽を滅ぼして前漢を建国します。

前一九四年頃、燕の衛滿が、箕氏朝鮮を倒し、衛

(167)

(166)

氏朝鮮が興ります。しかしこの衛氏朝鮮は前漢の武帝に攻め滅ぼされ前一〇八年、樂浪・真番・臨屯・玄菟の四郡が置かれます。ところが前一〇〇年頃高句麗が佟佳江中流域に台頭し、この影響で前漢の昭帝は前八二年、真番・臨屯の二郡を廢止し、前七五年には玄菟郡治を遼東郡の東に移します。

紀元前後の頃、倭人は百余国に分かれ、一部の国は前漢樂浪郡に朝貢します。

一方後八年には前漢にかわって王莽が皇帝となり新を建国します。後九年高句麗がしばしば中国に入寇し、遼西郡太守の田譚を殺します。後十二年には今度は王莽が高句麗侯驥を殺し、高句麗を下句麗に改めてしまいます。

後二五年、劉秀（光武帝）が後漢を建国します。

後三十年、後漢は樂浪郡の嶺東七県を廢棄します。

後三二年、高句麗が後漢に入貢して、王号を復活されます。

後三六年、後漢の光武帝が中国を統一します。

以下年代順に出来事を羅列し、年号の後表示を取り止めます。

四年、韓の廉斯人の蘇馬謨、樂浪郡に入貢し、漢廉斯邑君の号を受ける。

一〇五年、この頃遼東の公孫氏、樂浪郡の南に帶方郡をおく。

二三〇年、曹丕、後漢に代わって魏王朝を建てる。

二三一年、劉備、帝位につき蜀漢を建てる。

二三二年、孫權、自立して吳を建てる。

二三八年、魏、遼東の公孫氏を滅ぼし、樂浪・帶方二郡を領有する。

二三九〇—二四七年、五回にわたり邪馬台国、魏に朝貢す。

二四四年、韓の母丘儉、高句麗の丸都城を攻略する。

二四六年、韓の数十国、魏に服属する。

二四七年、滅の不耐侯、魏に入貢し、不耐滅王を授けらる。

二六一年、韓・滅、魏に入貢する。

二六三年、魏、蜀を滅ぼす。

二六五年、司馬炎（武帝）、魏に代わって西晋を建てる。

二七八年、馬韓、西晋に入貢する。

二八〇年、西晋、吳を滅ぼし、中国を統一する。

馬韓・辰韓、西晋に入貢する。

二八七年、馬韓再び西晋に入貢。この後もしばしば入貢を続ける。

二九一年、八王の乱始まり、西晋混乱する。

四七年、高句麗の蚕支落の大加である戴升ら、樂浪郡に内属する。

四八年、匈奴南北に分裂し、南匈奴、後漢に服属する。

四九年、高句麗、後漢の右北平などに寇す。

五七年、倭の奴国王が後漢に朝貢し、光武帝から印綬をさずける。

一〇五年、高句麗、遼東六県を侵す。

一〇七年、倭国王帥升ら、後漢の安帝に生口一六〇人を献ずる。この頃倭は朝鮮の弁韓・辰韓の鉄をさかんに輸入する。

一一一年夫余、樂浪郡を侵す。高句麗、後漢に入貢する。

一二一年、後漢の幽州刺史ら、高句麗・馬韓・濱貊を討つ。

一四六年、この頃、高句麗遼東に侵し、樂浪郡太守の妻子を略奪する。

一六九年、玄菟郡太守の耿臨、高句麗を討つ。

一八四年、中国で黃巾の乱起る。この頃、韓・濱貊が強く、樂浪の民多く韓・濱に流入する。又この頃倭国大いに乱れ、たがいに攻伐しあい、長い間盟主なしと伝える。

一九六年、曹操、後漢の獻帝を擁して許に都し、屯田制を設ける。

三〇〇年、高句麗の美川王が即位するという。

三〇二年、高句麗、西晋の玄菟郡を侵す。

三〇四年、匈奴、山西で自立し、五胡の乱始まる。

三一三年、高句麗、樂浪郡地方を併せる。この頃より百濟、新羅の台頭が著しい。

三一四年、高句麗、帶方郡を陥れる。

三一六年、匈奴、西晋を滅ぼす。五胡十六国時代始まる。

三一七年、司馬睿（元帝）、江南に東晋を興す。

三四二年、前燕、高句麗を攻め、丸都城を掠奪する。

三四三年、高句麗王、前燕に入貢し、平州牧・遼東帶方2国王を授けらる。

三四六年、百濟の近肖古王、即位するという。

三五五年、高句麗王、前燕から征東大將軍營州刺史樂浪公を授けらる。

三五六六年、新羅の奈勿王、即位するといふ。

三六九年、高句麗、百濟を攻めるが敗れる。

三七一年、百濟、高句麗を攻める。高句麗の故國原王、敗死する。

三七二年、百濟王、東晋に初めて入貢し、鎮東將軍領樂浪太守を授けらる。

三七七年、高句麗・新羅、前秦に入貢する。（新羅の最初の中国遣使）

三八〇年、前秦・鮮卑・烏桓・高句麗・百濟・新羅などに兵を徵する。

三八三年、肥水の戦い。東晋、前秦の南下を破り、中国の南北対立の形勢確立する。

三八六年、拓跋珪（北魏の始祖道武帝）、代国を建てる。

三九一年、高句麗の広開土王即位し、永樂年号を用いる。

三九六年、高句麗・百濟を攻めて五八城を取り、人質をとつて還る。

三九八年、拓跋珪、平城に都し、北魏の帝位につく。

三九九年、東晋で孫恩・慮循の乱起る。新羅、高句麗に救援を乞い、倭に備える。

四〇〇年、高句麗・新羅を救援し、倭を討つ。

これがBC四〇〇年～AD四〇〇年、八百年間にわたる中国大陸と朝鮮半島、及びそれに付随する日本列島の状況です。

戦乱に明け暮れていた当時、多くの人々が相対的に安全で生活が保証されている日本列島に渡来したと考えられます。しかもいつたん渡来してきた人々は再び中国大陸・朝鮮半島に戻る事は無く、日本列島のそれぞれの地

を裏付けるものだと考えています。

次に紀年鏡についてですが、これは其の年号より前にはその鏡がつくられていなことを証明するだけで、決してその年号の年に作った鏡を意味するものでは無いと云う事です。更に魏の年号だから魏で作られた鏡、吳の年号だから吳で作られた鏡というわけでもありません。因みに三角縁神獸鏡五一〇面のうち、紀年鏡は僅か四面です。

様々な仮説を述べて参りましたが、これを立証すべく『まんじ』一一一～一四号にかけまして、具体的な事象につき検証を行つてみました。

以下その内容に付き概説して本項を閉じます。

『まんじ』一一一号、荒神谷遺跡出土銅劍の鉛同位体比－弥生中期中葉～後葉にかけての三五八本の中細形C類銅劍原材料の供給鉱山の大半は、日本列島の北陸から東北にかけて存在するが一部に朝鮮半島及び中國大陸・山東半島及び遼寧省の鉱山の鉱石が使用しているものがある。

『まんじ』一一二号、

岡山県倉敷考古館所蔵青銅製品鉛同位体比分析

位体比－弥生時代前期終末期～弥生時代中期前葉に鑄造された銅鐸は、型式の古い四点は朝鮮半島産鉛鉱石を使

で、定住するようになつていつたと思われます。

このような情勢のもと、渡来した金属铸造工人を含む鉱山師達は、既に金属文化の地盤があつた日本列島において、新鉱山の開発に成功し、その豊富で相対的に低価格となつた銅鉱石を利用して、中国鏡の平縁神獸鏡の内区と、三角縁画像鏡の外区を合わせ、中国鏡に比べはるかに大型の三角縁神獸鏡を開発しました。これは三角縁神獸鏡の鉛同位体比がそれまでの青銅製品とは異なる事からも裏付けされます。その鏡は日本列島内諸豪族が、自らが葬られる際の、破邪の鏡として珍重した為、彼等鉱山師を配下に置いた大和の支配者に莫大な富をもたらし、やがては日本列島を支配していく経済力を付与したのだと考えています。

むすび

ここで幾つかの補足説明をします。

先ず福永伸哉の長方形鉗孔と外周突線からの三角縁神獸鏡、魏鏡説については、中国大陆北方系の青銅工人が渡来して三角縁神獸鏡を日本列島内で製作したこととすれば、何ら矛盾するところはありません。更に三角縁神獸鏡の長方形鉗孔内が、鋳放しで実際に鉗を利用した形跡がみられない粗雑さは、魏の官営工房での特鑄説に相反するものであり、この三角縁神獸鏡の鉗の状態はかえつて、中国大陆北方系鉱山師・青銅工人グループの渡来

用し、相対的に新しい一点は日本列島産の鉛鉱石を使用していた。

一方銅矛は弥生時代中期中葉～後葉に作られたものであるが、十六本のうち二本に朝鮮半島産の鉛鉱石が入っていた可能性があるほかは、すべて日本列島産の鉛鉱石が使用されていた。

又同范の可能性があるといわれていた九号と十号の銅矛は鉛同位体比が大幅に異なつたおり、同范説が否定された。

『まんじ』一二三号、

二里頭遺跡出土銅器鉛同位体比分析結果

夏の時代から商時代の早期まで五段階にわたり時期区分される銅製品は、時期ごとに合金の比率が変化を示し、純銅から銅と錫の合金、そして銅・錫・鉛の所謂青銅製品に変化していく。其の一例で、銅鉱石の供給鉱山は遼寧省を中心に、東は朝鮮半島、西は甘肃省、南は山東、江蘇、浙江、江西と一部を除いて中国大陆東北部への集中傾向が見られる。

点、日本列島の鉱石使用が二点であるのに対し、古墳時代のものは、十三点中、遼寧省・朝鮮半島の鉱石使用が三点、日本列島の鉱石使用が十点となつた。

また漢式鏡といわれている鏡三点の鉛同位体比指数が何れも中国の鉱山の鉛同位体比と一致せず、日本列島産鉱石の鉛同位体比と符合することが判明した。

このように三角縁神獸鏡の考察に端を発した鉛同位体比による青銅製品原材料供給鉱山検証作業は、中国大陆における金属文化が從来言われてきたような、青銅製品として始まつたのではなく、メソポタミア同様先ず純銅製品で始まり、それが相対的には短期間のうちに青銅製品が開発されるようになつた事を始めとして、中国大陆内における鉱山開発の動向、日本列島に大陸・半島から金属文化が伝わる経路を解き明かす上でも有力な資料として活用し得ることが判りました。それはそれとしてこれらは、ただ単に交易の経路解明に留まらず、思想・文化の流れから階級社会発生等広範囲な研究分野に及ぶものであると考えます。

今回触れる事の出来なかつた三角縁神獸鏡を重用して、日本列島各地の豪族心理面についても機会を改めて考察をしてみたいと思考しております。

鏡（その11）

中山喬たかひろ

神の鏡

モーセの鏡と古代神統系譜学

神に選ばれた者に現れる多くのヴィジョン（視覚）は、謎めいたヘブライ語で指示されるが、それは鏡に相当する名詞によつてなのである。

トラファエル・ミラーミは一五八二年、イタリア、ボローニヤの北東に位置するフェラーラで刊行された『鏡の学第一部への序論』2頁で述べています。

一方パリで一九四一年刊行された『旧約聖書』第一卷「出エジプト記」第三十四章二九—三〇には

モーセはその手に律法の板一枚をもつて山を下つたが、その顔の皮が、エホバと言葉を交わしているあいだに

光を放つようになったことを知らなかつた。アーロンとイスラエルの民はモーセを見て、その顔の皮が光を放つのに気付き、あえて彼に近づこうとはしなかつた。

と掲載されています。

これは神の栄光がシナイ山頂で恐るべき舞台装置と身振りによつてモーセに告示された結果現れました。エホバは雲に降り、モーセにエホバの名を告げ、モーセはエホバと共に四十日四十夜一緒にいたのですが、遂にその顔を見ることなく、この会合後下山するのですが、帰つてきたとき容貌が変わつていたのです。

この顔面表皮の発光は、神の栄光が反映したものでした。出会いの深い証拠が預言者モーセの顔に刻まれ、神はそれを自分の光を映す鏡としたのです。

聖書はそこに滑らかな金属のように輝く顔面の表皮の変質があつたと物理的な性格を強調していますが、反映

はまぶしく、イスラエルの民に話し終えた時には、モーセは自分の顔をペールで覆つたほどでした。

古代神話も映像のなかで、はじめてまともに見ることの出来る恐ろしい存在について伝えています。

それはギリシャ神話の最高神ゼウスの息子である英雄ペルセウスが、頭髪は蛇、黄金の翼を持ち、目は人を石化する力があった三人姉妹の怪物ゴルゴン（ステノ・エウリュアレ・メドウサ）のうちただ一人死すべき存在であり、自分を見るものすべてを石としてしまうメドウサに近づき、その首を一刀のもとに切り落とす為に、バッタミラーの原理を利用したというものでした。

ローマの詩人オウェイディウス（前43～後17）は彼の著書『変身譚』卷四、七八〇～七九〇のなかで荒涼たる風景のなかに設定された、その場面を次の様に説明しています。

人里離れた道もない場所をさまよい、森に囲まれたごつごつした岩地を横切つて、私はゴルゴンの棲家にたどりつきました。このあたりは野原にも道にもいたるところにメドウサを見たために石になった人間や動物達がころがっていました。しかし私は左手に持った青銅の楯に映るメドウサの恐ろしい顔だけ見ていました。そして彼女と彼女の頭髪である蛇どもが深い眠り

たサマリア人に次の様に説明しています。

天地を覆つたと書かれているような者が、契約の欄の棹の間でモーセと口をきいたなどということがありえましょうか

といって、凹面鏡を持つてこさせ、それに映つた像を眺めるように言いました。サマリア人は自分の姿が大きくなっているのを見ました。その後彼は凸面鏡を持つてこさせましたが、そこでは映像は小さく見えました。それでメイルはサマリア人にこう言つたのです。

肉と血から成る貴方が意のままに自分の大きさを変えることが出来るのだとすれば、世界中で語られ称えられる者はさらにどのくらいのことを成し遂げられるでしょう。彼は望めば天地を覆うことが出来ますし、また櫛を支える一本の棹の間でモーセと話す事も出来たのです。

律法学者エフダ（一五〇年頃）は、鏡が聖櫃の金属の蓋によつて構成されていたと言っています。その時それは青銅の凸面鏡になつて縮小された世界の像を示し、その像が櫛のように聖櫃の上にかぶさつていたのです。

に落ちたときに、首を切り落としました。

このようにエホバもゴルゴンも反射光学的手段によつて、始めて人間が近づくことができました。

しかしその後メドウサはギリシャ神界最大の女神アテナの楯に嵌めこまれて、その表情は時と共に和らぎ、ゴルゴンはヘスペリス達と共にオルペウスの園の門の守りを固めることになります。

ユダヤ思想は、反射による間接的啓示を巡る聖書のテクストを取りあげて、この問題に関する思弁を重ねてまいりました。

そして語源学では『旧約聖書』との一致を見ております。すなわち冒頭に述べたミラーミに加え、スーシはフランス・リヨンで一六二六年刊行された『鉱物学あるいは自然哲学宝典』468頁で、ヘブライ語では鏡と視覚と同じ言語によって表現されることを指摘しています。

紀元初めの律法学者達の注釈も、両者を比較対照して、そこから神学的・専門的な結論を導きだしています。モーセ自身は神を直接的ではなく、反映のうちに見たといえるのでしようが、そのメカニズムの復元が試みられてまいりました。

律法学者メイル（一五〇年頃）は、それを彼に質問し

この素晴らしい道具を容れる聖所の前に、もう一つの似たような反射装置が置かれていました。それは幕屋の建設者ベザレルがエホバの指図に従つて作り上げたものでした。

「出エジプト記」第三八章八には「彼は集会の幕屋の入口に集まつていた女達の鏡で、青銅の洗盤と青銅の台を作つた。」とあります。

それも又、イスラエルの民が神に向けた鏡のあらゆる力を集中した鏡でした。そこで禊を行う事で司祭達は自分の魂が穢れなきものかどうか実際に確かめることができます。聖書史の周辺に成立したある種のユダヤ人伝説によりますと、この聖櫃の洗盤から水が湧き出て、その水を姦通の疑いを受けた女は自らの無実を証明する為に飲むなければならなかつたとあります。

それはどんなに小さな暇でも暴くことのできる拡大鏡に関係していたのです。凹盤の洗盤と凸型の聖櫃の蓋が対をなして、遠近法的短縮を作り広大無辺な大空を見ることが出来たのです。

神を顕わす鏡のことが多くの文献の中で述べられています。『民数記』第一二章六のヘブライ語版も、エホバの姿を鏡の中に見ることが、モーセ一人の特権であつたことを伝えています。反射光学的な天啓についての律法学者達の解釈は、聖書と付き合わせれば確認する事が出

来ますし、それは古代ギリシャの諸説と一致すると云々。

ユジュデはニューシヤテルで一九五七年刊行された『聖パウロのコリント人への書簡における鏡の隠喩』115～136頁のなかで述べています。

神はその姿を鏡のうちに現すが、直接にはその身体も魂も見るとはできない……

とボルピュリオス(233～304)は彼の著書『マルケラへの書簡』のなかで述べていますし、古代ギリシャの哲学者・著述家であるプルタルコス(46頃～125頃)によりますと

彼(神)は自らの姿の極めて美しい像を空に置いたが、それは太陽で、鏡は仲立ちをすることによって太陽を眺めることのできる者達に提供するところの表象である。

と太陽が不可視の神の像を反射すると述べています。

月だけが諸世界を、地球を、海洋を、太陽黒点を反射する事ができたのではありませんでした。太陽もまた同じように神の業である栄光で、神を映す鏡だったのです。

宇宙の調和の原理を数とそれの比例とした紀元前四世紀のピュタゴラス派のピロラオスは、次の様にこれに対

して詳細な定義を与えています。

ガラスの円盤が宇宙の火の輝きを受けて、我々に光を送り返す。それゆえ空に三つの部分を区別する事ができる。まず天の火、次にその輝きと鏡のそれにも似た反射、最後にこの鏡によってわが地球に降り注がれる太陽光線である。この反射こそ、我々が太陽と呼ぶところのものであつて、それは像の像にほかならない。

従つて太陽は光と熱の源ではないことになります。それは幻影を反射する冷たい物体だつたという考え方です。

ドイツの画家デューラー(1471～1528)は、太陽の鏡を持つギリシャ神話の光明の神アポロンを描き、現在大英博物館が所蔵していますが、その閃めく光を放つ太陽の鏡面にAPOLOという名を、逆文字で反射させております。

イタリアの詩人ダンテ(1265～1321)は、金属体としての太陽を考えいました。

『神曲』「天国編」第十七歌一二一で、彼の先祖カツチャグイダが火星天で見た事を次の様に語っています。

光に包まれて珠玉が生じるのが見えたが、

それは陽光に閃く金の鏡のように眩い光を放つた。

ギリシャ人は昔からガラスの太陽、金の太陽、錫や合金や様々な材料でできた月が、天空の反射装置であると想定していました。更に金と銀の合金、琥珀金から出来ている黄色い金属で著しい輝きを放つ宇宙の鏡もあると考えていました。

古代ギリシャの詩人ホメロス(前九世紀頃)は繰り返しそれについて語っていますが、それらは既に前十六～前十二世紀にギリシャ文明の先駆となつたミュケナイ文

明の金銀細工において用いられていたものでした。

は魂の浄化装置であり、人々は、幕屋の洗盤に聖職者達がしたように、そこに自分の姿を映し、そして自ら靈となる。歴史的君主によつて考案された機巧は、いきなり宇宙開闢説的な装置の中心に位置するわけだ。

鏡は、それを眺める者が東洋を見られるように、西洋側の七つの門の上に据えられるが、そこでは幕の上に知性の光が燃えている。というのも、それは南側と可視界の上に、十二の家(黄道十二宮)とプレアデス星団(和名では)昴が置かれているからである。

と云々、ユジュデは、パリで一八九三年に刊行された『中世の化学、第一巻、シリアの鍊金術』「鍊金術師ゾシモス」55～56頁で述べています。

エジプト生まれのギリシャ人鍊金術師パノボリスのゾシモス(二世紀～四世紀)によりますと、その発明はマケドニア・アレクサンドロス大王(前356～前323)によるもので、彼は人々を絶滅させる恐れのあつた雷を防ぐ為に用いたと述べています。すなわち護符として役立つ鏡を作り、彼の後継者達は、それを先ず家中に次いで七つの門の神殿に据え、効驗あらたかなものとみなしました。

鏡は神の靈を受肉(キリスト教で、三位一体である神の子が人間(肉)として生まれたこと)させる。それ

ガラスの円盤が宇宙の火の輝きを受けて、我々に光を送り返す。それゆえ空に三つの部分を区別する事ができる。まず天の火、次にその輝きと鏡のそれにも似た反射、最後にこの鏡によってわが地球に降り注がれる太陽光線である。この反射こそ、我々が太陽と呼ぶところのものであつて、それは像の像にほかならない。

従つて太陽は光と熱の源ではないことになります。それは幻影を反射する冷たい物体だつたという考え方です。

ドイツの画家デューラー(1471～1528)は、太陽の鏡を持つギリシャ神話の光明の神アポロンを描き、現在大英博物館が所蔵していますが、その閃めく光を放つ太陽の鏡面にAPOLOという名を、逆文字で反射させております。

宇宙は精神的であれ、物質的であれ、こうした鍊金術の秘法に緊密に混ぜ合わされています。その為、琥珀金についてのテクストは、常に一方から他方へと一挙に移行します。

壮大な啓示の後にはアレキサンダー大王によつて地上に播かれた護符の物語りが続きますが、それらの護符の上には人が馬に乗つている自分の似姿が刻印されています。と思うと次には突然次に述べるような飛躍が到来します。

しかし貴方は思惟によつて、見ることの出来る宇宙の一部に過ぎない下界の外へと上昇しなさい。

神の子と聖靈に結びついた御言葉とによつて作られ、三位一体の靈性に満たされた二つの知性である琥珀金の精神的な鏡を用いて、あなたの魂を見つめなさい。

創造主としての父なる神と、贖罪者キリストとして世に現れた子なる神と、信仰経験に顯示された聖靈なる神とを唯一の三つの知性と意志を備えた独立の主体とする三位一体の靈性に満たされている琥珀金の鏡を通して自分自身を考えなさい。

このように東洋的異教と古代的異教との混合物に直接接木されることによつて、キリスト教の異端思想である人間が肉体・物質世界から淨化され自分が神である事を

青の漂流（十・最終回）

宅 見 勝 弘

十 赤の漂流

【前号までのあらすじ】一八六九年（明治二年）、蝦夷地（北海道）白老の仙台藩元陣屋の近くのアイヌ集落で、アイヌ人夫婦と仙台藩士が斬殺された。その翌日、択捉島から帰還した支倉兵衛が現場に居合わせ、生き残ったアイヌの碧眼の幼女を保護した。幼女の手には犯人の物と思われる赤い花弁が残されていた。支倉は仙台に戻り、幼女を蒼と名付けて、育てた。成長した蒼は、両親の斬殺方法が生麦事件の殺害と同じ特異な剣術と氣付いた。その後、蒼は結婚し、大津へ移つた。大津で、ロシア帝国ニコライ皇太子が襲われる姿を目撃した。ニコライの碧眼が鮮血で覆われる姿に、蒼は白老の惨劇を連想した。ニコライ襲撃の犯人が西南戦争の官軍であったことから、白老の犯人が戊辰戦争の官軍ではないか、と連想した。その後、男の高山左京が米比戦争の中、フィリピンで死んだ。蒼は長崎へ移り、安奈という女性と知り合つた。安奈はロマノフ王朝の血を引き継いでいた。鹿児島へ移つた蒼は、「白老の花弁がハイビスカスとも呼ばれ、琉球の花・ハワイの花であることを知つた。また、殺害の剣術が、野太刀自鎧流の抜刀斬であることを知つたのであった。その後、蒼は息子夫婦とともに沖縄に住むことになった。蒼と安奈は、一九四五年の沖縄戦に巻き込まれるが、奇跡的に助かつた。戦後十年が経過し、一九六七年（昭和四十一年）、蒼は百歳の誕生日を祝つた。那国島に残された左京の手記を蒼が読み、白老の事件の犯人が左京であることが判つた。

白老の事件の犯人は、舅である高山左京であることに蒼は気付いたのであつた。白老の事件から百年近い年月が経過していた。

斧を振りかぶつて自分を斬り殺そうとしていた武士の姿を蒼は思い出した。あの時の武士の姿と左京とが少しずつ重なってきた。

蒼の様子を見て、安奈が心配そうに気遣つた。蒼は安奈に勧められて、暫くは椅子で休んでいた。

「白老の犯人が分つたの」

蒼は落ち着くと、安奈に呟くように言つた。

「犯人は高山左京、お義父様、お舅だつたの。左京さんの手記に白老の事件の事が書かれていたの」

蒼はそう言つて、左京の手記を安奈に示した。

認識することで救われると説くグーネーシス的キリスト教が、古代ギリシャの哲学者アリストテレス（前384～前322）の弟子である偉大な王の名と結びついた合金伝説のなかに認められるのです。

参考文献
ユルギス・バルトルシャイティス著・谷川渥訳『鏡』図書刊行会、一九九四年。

左京が蒼に経済的に手助けをし、自らの養子・京輔の妻を迎えたのは、贖罪の気持ちだったかもしれない、と蒼は思った。

左京が自らの墓を蒼たちに秘密にしたことは、蒼に対して罪悪感を抱いていたからであると理解できた。蒼は、暫く左京の手記から目を離すと、支倉の記録とハイビスカスの絵を取り出した。事件から百年近く経過するが、蒼は二つの証拠を常に持ち続けていたのであった。

蒼は、幼児の自分の掌にハイビスカスの花弁^{ひざな}が舞い落ちてくる情景が自然に思い浮かんだ。「支倉兵衛が、白老の事件について五つの手懸りを残してくれたの」

蒼は古びた紙を安奈に見せた。

支倉が記録していたのは、謎を解く五つの手懸りであった。その五つとは、「一、赤い花弁」「二、名刀「国包」「三、遺体の刀傷」「四、五稜郭の武士」「五、碧い眼」である。

その疑問のほとんどが左京の手記により解決した。

蒼は、左京の手記の上に、手元から支倉の書いた紙を開いた。

『一、赤い花弁』

白老の惨劇の時に蒼の掌に握っていた赤い花弁は、仏桑華つまりハイビスカスであった。

ハイビスカスは、江戸時代に薩摩藩主の島津家久が徳川家康に珍しい琉球の花として献上して、初めて本土に伝來したものであつた。徳川家が好きな花ということで、幕府と関係あるかと若い頃の蒼は誤解していた。徳川家の葵の御紋は双葉葵で、全く別の植物である。

異国の花ということで、フランス側の幕府軍かイギリス側の朝廷軍と支倉が考えていたが、関係が無かつた。

ハイビスカスの押花は左京の故郷の証のようであつた。

しかし、それ以上に深い意味が未だ隠されているようになつた。しかし、それ以上に深い意味が未だ隠されているようになつた。

『二、名刀「国包』

国包は仙台の刀匠なので、支倉は犯人が仙台藩士かもしないと疑いを持っていた。

国包を三好が持つ身分でないと支倉は言っていた。しかし、箱館での戦乱の中で他の仙台藩士から譲り受けたか、偶然に手に入れたのかもしかなかつた。

押花島には下級武士ばかりで、国包を持つ武士は居なかつたが、箱館であれば国包を持つ家柄の仙台藩士が駐在していても不自然でなかつた。

手記によると、左京が国包を持っていたのではなく、三

好から奪つたものであつた。左京が矢で射られて、三好の上に倒れた時に、杖代わりにしたのであつた。

『三、遺体の刀傷』

三人の遺体は全て、右腰から左肩へ斬り上げる独特の刀傷があつた。

それは抜即斬^{ぬきそくさん}という薩摩藩の野太刀自顯流の技による刀傷であつた。野太刀自顯流は、武が習っていた流派である。

一時期、蒼は拔刀術（居合道）による傷かと思つていた。

鎧捲流拔刀術を使う紀州藩出身の陸奥（伊達）政春を疑つたこともあつた。

拔刀術では、拔刀は守りで、返す刀で攻撃に繋げていく。しかし、抜即斬は拔刀そのものが攻撃である。

抜即斬は、生麦事件でイギリス人が殺された時に使われた剣術であつた。

『四、五稜郭の武士』

この五稜郭の武士というのが、正に高山左京であつた。当初は、犯人が朝廷軍でなく、幕府軍だろうと思つていた。

五稜郭から逃亡した幕府軍の敗残兵かもしれないとい

う思いが強かつた。当時は、幕府軍の敗残兵が困窮して、アイヌの集落を襲うということもあつた。

勝つた側の朝廷軍がアイヌ夫婦を殺した理由も分らなかつた。

国包が有つたので、支倉は仙台藩同士での仲間割れも考えていた。陸奥政春を疑つたのも、政春の紀州藩は朝廷軍側だったが、幕府軍を支持する者がいたという理由もあつた。

しかし、蒼は大津でニコライ皇太子が襲われた事件を目撃して、考えが変わつた。

ニコライ皇太子の碧い瞳が血で覆われるのを目撃して、白老の事件での自分に二重汚しになつた。犯人の津田が巡查で西南戦争の官軍と聞いて、白老の犯人も官軍だつたらと思った。

手記には、戊辰戦争が終わつたことに三好が納得しないで、襲つてきたので、左京が応戦したと書いていた。幕府軍の敗残兵ではなく、敗残兵を追いかけた朝廷軍の左京であつた。

『五、碧い眼』

幼児の蒼を左京は殺そうとした動機が分からなかつた。

養父の支倉が手懸りの五番目として碧眼のことを挙げていたが、手記を読むと、逆に謎が深まつた。手記にも動機について書いていなかつた。左京自身も記憶を失つていたようであつた。

手記では明らかに書いていないが、前後の記述から左京が蒼を両親よりも先に殺そうとしたようであった。

そして、娘を助けようとした母親が殺された。その後に、アイヌの父が妻子を助けようとして左京を殺された。

蒼の父が三好に加勢したことが、蒼の父を殺した理由となつてゐる。しかし、直接の原因是、蒼の両親が蒼を守ろうとしたためである。

赤ん坊の蒼を殺そうとした動機については謎のままであつた。碧眼が左京を狂気に駆り立てた理由が、蒼には分からなかつた。

「もう一つの手記の方に答えるが有るかもしれない」

その手記は高山左京の父親など先祖についての記録が記述されていた。

左京の父親は薩摩で生まれたのでなく、琉球王国で生まれ育つたようであつた。

「それで、左京さんは琉球の花であるハイビスカスの押し花を肌身離さず持つていたのだわ」

ハイビスカスは薩摩の花というだけでなく、琉球の花の象徴でもあるから持つていたのだと蒼は考えた。

琉球王国は一六〇九年に薩摩藩の侵攻を受けて以来、薩摩藩の支配下にあつた。

琉球王国は、一四九二年に尚巴志の三山統一により成立した。十五世紀に明の支配下にあつたので、明と薩摩の二重に属することになつていてるのである。

「これはフィリピンを指しますわ」

安奈は外務省にいた優輔と一緒にフィリピンに居たので、すぐに分かつた様子だつた。

曾祖父は、江戸幕府の鎖国の影響が少ない、日本で最西端の与那国島にフィリピンから密入国したのである。

左京とフィリピンとが初めて繋がつた。

「左京さんがフィリピンに拘つたのは、もともと先祖が

フィリピンに居たからなのだわ」

「馬尼拉」という文字も出てきたが、フィリピンの首都マニラを指すことが分かつた。

「左京さんの先祖は二百年もの間、マニラに住んでいたのね」

左京の祖先の一族は二百年にわたり、マニラの日本人村で血脉を続けてきた。江戸幕府の鎖国政策により日本に戻れずにいたが、帰国することが一族の祈願であつたといふ。

高山一族の帰国への計画は、与那国島から琉球王朝を経て薩摩藩へと、左京を含め四世代をかけた遠大なものであつた。

フィリピンでの日本人は現地人と同じように、スペイン系のヨーロッパ人に人種的迫害を受け続けていたようであつた。

フィリピンではスペイン人のみが城壁都市を築き、その中に居住し、現地のフィリピン人や日本人は不便な土

一八七一年の廃藩置県で鹿児島県に編入された。翌一八七二年には琉球藩となつた。一八七九年の琉球処分で国王の統治権が無くなり、日本本土の一部となつたのである。

父は琉球の武道である唐手（トゥーディー）後の空手の達人であつたことから、その武術を買われ薩摩に呼ばれた。

その父は薩摩藩の下級武士の一人として、鹿児島に住み着いた。

彼の父つまり左京の祖父は、与那国島の出身であつた。祖父の弟の子孫が与那国島に代々住んでいたのであつた。

「この場所にお墓を作つたのも、一代を遡ると与那国島の住民だつたからなのね」

それでも墓の場所を秘密にしていた理由は分らなかつた。

与那国島は一五二二年から琉球王朝の支配下になつた。

琉球王国は、尚巴志の三山統一により成

立した。十五世紀に明の支配下にあつたので、明と薩摩の国していと記述されていた。

蒼は曾祖父が住んでいた場所を手記から見付けたが、漢字が読めなかつた。手記には『比律賓』と書かれていた。

地での居住を強いられ、人間としての扱いを受けてなかつたという話であつた。

祖先で最初にマニラに渡つたのは、『高山長房』であると書かれていた。

『高山長房』というのは、戦国大名の高山右近のことだわ

左京の祖先をさらに一百年遡つていくと、戦国時代のキリスト大名である高山右近に繋がるということであつた。

蒼が高山右近の名前を知つていたのは、旧姓と同じ名字の支倉常長と同時代人だつたからである。

実際に血が繋がつているかは確認のしようがなかつたが、高山姓はフィリピンに由来するのであつた。

蒼は、その事実を左京からも京輔からも聞かされなかつた。京輔もその事実は知らされていなかつたようだつた。

一六一六年（慶長十三年）、徳川幕府の伴天連追放令が発令されたが、高山右近は、キリスト教を棄教しなかつたため、翌年、フィリピンのマニラに追放されたのであつた。

高山右近と一緒に、妻ジュスター・娘ルチア・五人の孫（死亡した息子の子）がルソン島のマニラに流された。支倉常長が、伊達政宗の命令により慶長遣欧使節団としてヨーロッパへ渡つていた時期（一六一三年から一六

二〇年)の間のことであつた。

支倉常長と高山右近が三百五十年前の戦国時代の同じ時期に生きていたことにも運命的なものをを感じた。

蒼は幼い頃は支倉の名を名乗り、結婚して高山姓となつたのは、何か縁が有つたと思った。

当時のマニラには倭寇たちを含めた二千人の日本人がいたようであつた。

高山右近はルソンに移つてから、四十日後に病死した。右近の死により、妻と娘、孫の一人は日本に戻り、孫の四人がマニラに残つた。

残つた四人の孫の内の一人が、高山左京の先祖と繋がるのかも知れなかつた。

代々の血脈の証として、ハイビスカスの押花を常に身に着けていた。

いつか日本に戻るという一族の意志が脈々と続いていたのであつた。灼熱の国に育つた赤い花を自己の証として、高山右近から一族は持ち続けていたのであつた。

フィリピンにはハイビスカスが多く咲いている。隣国マレーシアがハイビスカスを国花としているように、東南アジアの島国にとつてハイビスカスは象徴的な花であつた。

「ハイビスカスは琉球の花だけでなく、南国のフィリピンの花の象徴だたのだわ」

左京は単に薩摩の花としてハイビスカスの押花を身に

のである。二百年かけて日本に戻つた高山家の血脈がイギリス軍により絶たれたのである。

薩摩藩が薩英戦争後に親英政策を取つたからといつて、個人的な欧米人に対する憎悪は拭えなかつたであろう。

生麦事件でも、左京は直接にはイギリス人への殺害に加わらなかつたが、それでも大名行列を横切つたイギリス人に対する憎悪の念が起つていた。

幼少時に植えつけられた薩摩藩の尊皇攘夷思想が蘇つたこともある。

左京の先祖が二百年に亘りフィリピンで人種的差別を受けたことから、欧米人に対する憎悪が、左京の血の中に入つていた。

欧米人に対する憎悪の感情が左京の潜在下の意識にあり、蒼の碧眼が呼び覚ましたようであつた。
トリカブトの毒が憎悪の意識を起こし易くしたかもしれないなかつた。

蒼は自分なりに碧い眼が事件を引き起こした理由を考えた。今となつては眞実の理由を知ることは不可能であるが正しいだろうと思つた。

真相が分かつても左京を責める気持ちは蒼になかつた。蒼は左京の罪を既に許していたのであつた。
百年近い事件の真相が分かつたことで、安堵の気持ちで満たされていた。

着いていたのではなかつた。フィリピンから血脈の証として持つていたのであつた。

二百年前住んでいた祖先の血の中に入つていたものであつた。

「私の碧い瞳を見て、殺意が生まれた理由も分るような気がする」

蒼は、左京が赤ん坊の自分に殺意を抱いた理由を漸く理解できるようになつた。

残酷な事件を犯した動機は、欧米人への憎悪が誤って碧眼の自分に向けられたものでないかと、蒼は思つた。

トリカブトの毒により、正常な意識が働かなくなつたのだと、蒼は考えた。

碧眼は日本人にはほとんど居ないので、欧米人を連想したのかも知れなかつた。碧眼は若いほど、明るい色をしているので、赤ん坊の碧眼は、左京にとつて特に大きな刺激を与えた可能性があつた。

もともと、左京には欧米人に対する憎悪の念は心の深層に押さえ付けられていた筈である。

薩英戦争では、左京の妻と実子がイギリス軍の砲撃によって殺害された。薩英戦争では、鹿児島市街の非武装の一般人までが攻撃を受けていた。

その後は、左京は妻帯もせず、実子も居なかつた。京輔など多くの養子を迎えたが、血を継ぐ者は居なかつた

*

蒼が沖縄に戻つて一週間後に、蒼にとつて初めての玄孫(やしやご)孫の孫が誕生した。昭は結婚をしていましたが、夫婦の間に女兒が誕生したのであつた。

ナオミと名付けられた女兒は、美しい碧眼をしていました。母親自身は碧眼でなかつたが、外国の碧眼の先祖を持つようであつた。

「まるでサファイアのようね」

母親は、蒼と安奈に女兒を見せて言つた。

蒼が女兒の瞳を覗き込んだ。碧眼は年齢と共に色素が沈着するので、蒼の瞳はほとんど黒色になつていた。
「サファイアは、日本の昔の呼び名では『蒼玉』というのですよ」

蒼は、自分の名前と同じ字の蒼玉の話をした。
この女兒が碧眼のために数奇な運命にならないだろうか、と蒼は思つた。

碧眼に生まれたことで、白老では危うく殺されそうになつた。自分は死を免れたが、実の両親は碧眼のために殺されたといえる。

しかし、碧い瞳のために百歳まで長生きをすることができるのかも知れないと蒼は思つた。

両親を殺した犯人によつて、生活の上でも助けられて、その息子と結婚し、幸せな人生を送つた。

そして、碧眼の為に沖縄決戦の際にも結果的に集団自決から免れ、命が救われたといえる。

蒼の頭の中では、生まれてから今までの人生が蘇ってきた。その内の一つは大津でニコライ皇太子が襲われたのを目撃したことであつた。

蒼はニコライのためにハンカチを差し出したことを思い出した。

記憶の中でも、ニコライの傷口を覆ったハンカチが見る間に鮮血で染まっていった。

れたようで、安心した毎日を過ごしていた。
蒼が玄孫と会つてから、一ヶ月が経過した。

朝を迎えるも蒼が起きて来ないので安奈が不審に思つた。既に冷たくなつた蒼に安奈が気付いたのであつた。

百歳の天寿を全うした安らかな死顔であつた。蒼の葬式は沖縄の風習に従つて行われた。沖縄ではハ

イビスカスを後生花として、死者を弔う風習が有つた。蒼は生前から赤い葵・仏桑華に囲まれたいと言つてい

たことが遺言となつたのであつた。
棺桶の中に横たえた蒼の遺体は、真赤なハイビスカス
の花弁に全身を包まれて葬られた。

の花弁に全身を包まれて葬られた。
蒼の墓の周りには、ハイビスカスの花が多く植えられ

皇帝一家全員分の遺骨が確認されたのである

世一家の没後九十年の死を悼む十字架行進が、全国から来た数千人の参加者で行われた。

二〇一四年六月二十四日

容易に進まなかつた。当時は発見された遺骨が本人でないという主張も有つた。ロシア国内ではニコライ二世の鑑定するための証拠品が少なかつたのである。

遺体の頭蓋骨に大津事件の傷が残っていないか調査されたが、頭蓋骨の表面が磨耗しており確認できなかつた。ロシア政府保健省は、ニコライ一世の遺骨の鑑定のため、証拠を滋賀県庁に依頼した。

滋賀県立琵琶湖文化館には、一〇〇年前の力洋事件の
物品が保存されていたのである。

一九九三年（平成五年）、ロシアの調査団が琵琶湖文化館を訪れた。調査団は証拠品の一部の切断を要求し、滋賀県庁の許可を取った。調査団は、証拠品の一部を取り、ロシアに持ち帰った。

採取量が少なくDNA検査には不充分であつたが、血液検査に使用されたという事であつた。

調査団がロシアに持ち帰った証拠品とは、流血したニコライが傷口を拭つた、血染めのハンカチであった。【完】

エピローグ ニコライ一世の遺骨

一九七九年（和暦の昭和五十四年）七月にエカチエリ
ンブルクで、ニコライ一世一家と思われる遺体が発見さ
れた。しかし、その事実はソビエト連邦政府により秘密
にされていた。

一九九一年（同平成三年）、ソビエト連邦が崩壊し、六十九年の歴史に幕を閉じた。崩壊と同時に公開された記録から、皇帝一家の遺骨が発見された。皇帝・皇后・

アナンタシアを含む三人の皇女の遺骨と確認された。しかし、皇太子アレクセイと第三皇女マリアの遺骨は見つからなかつた。

がんがんでか
皇帝一家虐殺から八十年経た一九九八年（平成十年）
七月、ニコライ一世の国葬が行われた。

二〇〇〇年（平成十二年）八月、ニコライ一世はロシア正教会により聖人に列せられた。

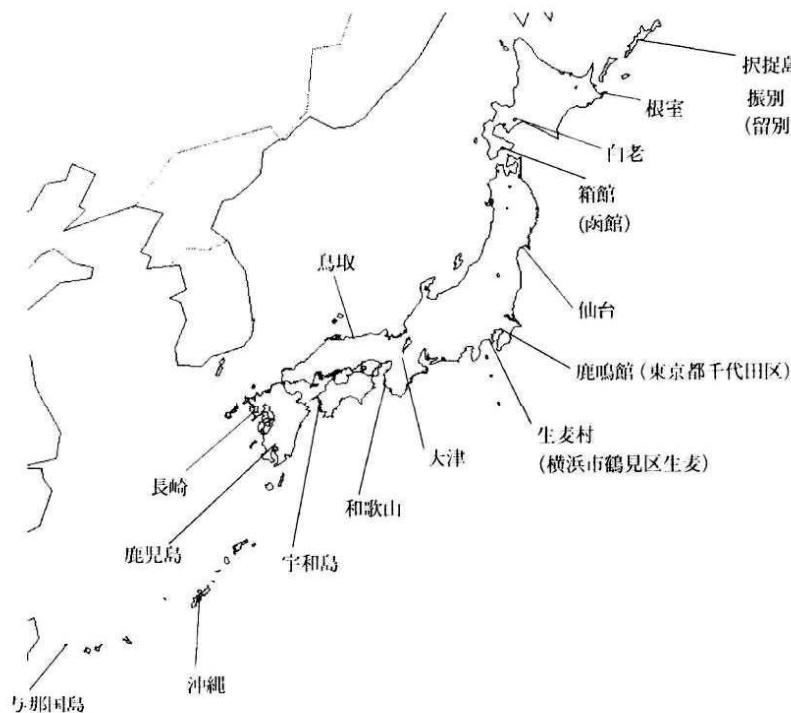
ニコライ二世一家が虐殺された家は取り壊され、二〇三年に『血の上の教会』という名のロシア正教の教会

が建てられた。
一〇〇七年七月、エカチエリンブルク郊外で新たに二

翌年、アメリカの機関によるDNA鑑定の結果、皇太子アレクセイと第三皇女マリアのものであるということ

が確認された。ニコライ一世の虐殺から九十年を経て、

卷之三



編集後記

旧冬十二月三十日の日本経済新聞・春秋は、二〇〇九年六月三十日、国指定重要文化財となつた大日本報徳社大講堂の入口にある石造り門柱に、大きな漢字で左右に刻まれてゐる「経済門」と「道徳門」について触れ、尊徳の思想は「経済なき道徳は労多しくして功なし、道徳なき経済は永遠の道おぼつかなし」であり、尊徳が経済感覚も重視したのは農村の復興に力を注ぎ、お金の大切さが身にしみていたからだと述べている。

三戸岡さんの「走る不動産」の連載が始まった。一九八五年（昭和六十）九月二十二日、アメリカの貿易赤字を縮小する為、我が國が円高の容認と内需拡大を約束したプラザ合意に端を発する土地価格高騰は、金融機関の經營者に「土地本位制度」の誤解をもたらし、不動産価格は値下がりしない、不動産を担保とする融資こそが最も安全で経営の最重要課題である最高の収益をもたらしてくれるものであるとの經營理念を生ぜしめ、その導入に走った数多くの企業・金融機関の破綻を招く事になつたのであるが、その経緯が極めてわかりやすく書かれている。あらためて報徳仕法の偉大さと、それを成し遂げるには闘争心をもつて事にあたらなければならぬことを我々に教えてくれる。

本誌の同質性を排除し各分野で切磋琢磨しようとする同人各位に大きな影響を与えていた、鯨さんの漢詩「潮騷録」が連続六十回を迎えた。正に「継続は力」である。引き続きの健筆を期待する。

新加入、外山さんから力作「陰翳の美学」をお寄せいただいた。今後の展開が期待される。表紙は引き続き田寺さんで、今年は「夢おいかけて千里を走る」です。お楽しみください。

(T·N)

まんじ第115号

平成22年2月1日発行（非売）

発行人 三戸岡 道夫（みとおか みちお）

編集長 中山喬央（なかやま たかひろ）

事務局長 鍋屋次郎（なべや じろう）

（事務局） 〒223-0056 横浜市港北区新吉田東五丁目 76-35 太田善朗方

TEL・FAX 045（544）5947

（郵便振替口座） No.00270-0-64592 加入者名 まんじ

（印刷製本） 日東印刷株式会社

〒142-0054 東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について

「夢おいかけて千里を走る」

田寺 怜 葦画

まんじ

No.116

2010.5.1

まんじ第百十六号 目次

THE DAY · DREAM (一)	高取の茶陶	忠内正之
誠忠の茶園 (四)	鍋屋次郎	忠内正之
今川風雲録 (八)	千坂精一	忠内正之
走る不動産 (その二)	太田精一	忠内正之
司馬雑感二十三 秋山好古と習志野	三戸岡精一	忠内正之
短歌 三十首	千坂精一	忠内正之
わが愛誦歌 (十) —昭和から平成へ—	千坂精一	忠内正之
短歌 行雲流水 (二十七)	千坂精一	忠内正之
王朝和歌集とその周辺 (二) —源実朝と金槐和歌集—	千坂精一	忠内正之
漢詩 潮騷録 (六一) 『漢詩の流れ50』	千坂精一	忠内正之
二八に帰るすべなし (二)	千坂精一	忠内正之
—愛する北国のひとに寄せて—	千坂精一	忠内正之
伊治	鯨石 石曾 曾根 嘉道	鍋屋次郎
游哲	修修 修竣 竣作	鍋屋次郎
哲	身身 作作	鍋屋次郎
:	:	:
91	86 79 76 71 66 56 43 30 21 12 4	忠内正之

古い物・遠い夢

忠内正之

高取の茶陶

(二) はじめに

豊臣秀吉の文祿、慶長と二度に亘る朝鮮出兵は大失敗であった。このため豊臣政権は命運を縮めた様なものであるが、こと我国の茶陶に関する限りでは、これ程収穫の大きかった戦争は他になかったのである。

各地に転戦した大名たちが、それぞれに高麗茶碗その他優品を探して持ち帰ったばかりでなく、かの地の陶工たちを連れ帰り、さつそく自国で製陶を始めさせたのである。

現地の陶工たちを強制的に連行したとの定説が中心であるが、地元に残しておくと日本軍に協力したとの咎によつて罰せられる懼れがあるので連れ帰ったのだと言う

しかし主たる理由は、大名たちが自領の産業奨励への便益を慮り、またその頃盛んとなりつつあつた茶道を楽しむために優れたやきもの技術を導入したかったのである。

導入された朝鮮半島のやきもの技術は主として二つある。一つは蹴口クロで、それまで日本にこの蹴口クロというものは存在しなかつた。蹴口クロは足を使って回転させてるので早くも遅くも自由自在、そのうえ、両手はフルに造形に使えるのであるから極めて便利で量産にもつてこいである。古い唐津、高取などのきりつとした姿は、この蹴口クロに負うところが多い。

その二是連房式登り窯である。山の斜面を利用して、何室も連ねて窯を築いたもので、下の室から焚きはじめる。

熱はだんだん上の室にあがつてゆき、それぞれの室の横

にあけてある差し木穴から薪を投げ入れる仕組みとなつてゐる。薪も労力も少なくてすむ能率的なシステムの窯である。これ等の効率的なやきもの技術の普及は、萩、唐津、高取、上野、八代、小岱、薩摩、伊万里など九州陶の大いな発展を促したばかりでなく美濃地区他のやきものにも好影響を与えたのである。

ここで九州陶を盛んにした、大名家と関わった渡来工を一覧にして見ると概略次の通りとなる。大名家の盛衰や移封等もあって、後に藩窯として育成拡大したもの、唯單に庇護に止まつたもの、様々である。

とは殆んど関係ないが、我国の陶業界に及ぼした影響が大きいので掲げた。また他の窯は、茶陶と雑器の両方を生産している。

(二) 高取焼の沿革

筑前四十七万三千石の城主であつた黒田長政は、文祿、慶長の役に従軍した。帰還する際朝鮮から連れて來た陶工八山父子（家族ぐるみの移住であつた）に命じて、筑前鞍手郡鷹取山の西麓（現在の直方市永満寺宅間窯床）に開窯させたのが高取焼の起源である。そして鷹取の地名にちなんで、高取の姓と八藏の和名を与えて、士分に取立て、七十人扶持を給して厚く遇した。

九州茶陶（朝鮮渡来陶工） 大名名

萩	季匱光、李敬	毛利輝元
唐津	複数の渡来工	波多 等、寺沢広高
高取	八山	黒田長政
上野	尊楷	加藤清正、細川忠興
八代、小岱	尊楷	全右（上野の分かれ）
薩摩	金海他	島津義弘
（註）伊万里	伊万里（李三平）	鍋島直茂

（註）伊万里焼（有田焼）は磁器が中心であり茶陶

その後七年を経て漸やく藩主忠之の勘気が解け、以前で作られていたが、慶長十九年内ヶ磯（現在の直方市頓野内ヶ磯）に移つた。元和九年（一六二三）八月藩主黒田長政が没したので八藏は朝鮮に帰国を申し出たことから、長政の嗣子、黒田忠之の怒りに触れ祿を没収されしまつた。やむを得ず自力で山田窯を現在の嘉麻群山田市大字上山田に築き、細々と雑器を中心に焼き生計を立てていた。

その後七年を経て漸やく藩主忠之の勘気が解け、以前

より少ない八石八人扶持を給せられ、新に穂波郡合屋川内中村の白旗山山麓（現在の嘉穂郡幸袋町）に第四次目となる白旗山窯を築いた。この時期は寛永六年頃に当たる。

この白旗山窯の時代に当時有名な茶人大名である小堀遠州の指示を仰ぐため、藩主忠之の命により、八藏親子は京都伏見の小堀遠州のもとに行き、よき指導を得て帰国後、ここで有名な遠州高取と呼ばれる茶器類が作り出されたのであつた。

忠之は茶事に熱心であるということと併せて眞の意図は、將軍家指南役である遠州に接近し、さらに徳川家との結びつきを深めたいためであつたかも知れない。

初代八山が遠州の屋敷に茶入を千個持参した際、遠州はその中から、たつたひとつ茶入を選び出し、残り九百九十九個は破棄してしまったという逸話が残っている。遠州はそれだけ厳しい目を持つて指導したのである。因みに残された一個は、中興名物（名物茶道具のうち、小堀遠州が選んだ、利休没後世に出たものを言う）「秋の夜」の茶入ではなかつたかといわれているが定かではない。

（遠州は何事にも広く興味を持つた人であつたが、とりわけ茶道具へのこだわりはよく知られる。高取焼をはじめ、さまざまな国焼を自ら指導したばかりか、海難器をつくり藩の收入にするため商人に販売させた。つまり東山窯は幕府などへの献上用の高級品を焼いたので両者は共に藩の御用窯ながら性格は全く違つたのである。

として明治四年廢藩まで続いた。
更に、黒田家五代藩主宣政の頃、東山窯の西にもう一つ窯がつくれられ、これを西山高取とよび、一般民需品の雜器をつくり藩の收入にするため商人に販売させた。

（三）高取焼の作柄とその時代
高取焼ほど激しく移動した御用窯は他に例を見ないであろう。情勢の変化によつて色々と支障が生じたためと推察される。
作柄の変遷について時代別に見てみよう。

高取焼を五つの時代に分類する。

遠州高取

一、古高取時代 慶長七年（一六〇二）から寛永六年（一六一九）頃まで。（永満寺宅間窯、内ヶ磯窯、山田窯の時代）
二、遠州高取時代 寛永七年（一六三〇）から寛文四年（一六六四）頃まで。（白旗山窯時代）
三、小石原高取時代 寛文五年（一六六五）から幕末（一八六八）まで。

かくして遠州高取はこの時代に確立されたが、承応三年（一六五四）八月初代八山はこの地で没した。

窯は次男の新九郎が継ぎ、八藏貞目と称した。そして寛文五年（一六六五）第五次の窯移転があり、朝倉郡小石原村字金床に築窯された。これを小石原高取焼という。この時、肥前唐津の城主寺沢家に仕えていたが、主家の滅亡により浪人をしていた五十嵐次右衛門が藩命により参加し、高取焼に唐津焼の技術を付加したと伝えられている。古い唐津焼と高取焼の分別がはつきりしないものがあるのもこれらが一因であろう。

黒田家四代藩主綱政は享保元年（一七一六）、福岡市西新町に八藏の子孫に窯を築かせて製陶を始めさせた。これを「東山」とか「東皿山」と呼んで黒田家の御庭焼

四、福岡皿山時代 享保元年（一七一六）から幕末（一八六八）まで。（東山、西山両窯時代）
五、明治以降

古高取の作柄

この時期の作品は、茶褐色釉の上に、斑のにぶい白釉が施され、一見斑唐津に似たものが多い。また山田窯は唐津岸岳系の作と殆んど同一である。釉の調子などは朝鮮の会寧、明川の窯に似ている。陶工八山は北朝鮮方面の出身であったかも知れない。

作品は唐津焼と混同されている物が多いと言われ、この頃の焼物は雜器が主体であり世に出ている茶器は少ない。

非常に洗練された美陶である。総体に薄作りで古高取のような素朴さが薄れ、光沢のある美しい高取特有の艶のある光の強い黒飴釉が器の全部または一部に掛け流されており、至極魅力的である。小堀遠州好みの、奇麗さびの心が遺憾なく發揮されたものと言える。
中興名物、「染川」などの茶入はこの期の作品である。

小石原時代

雑器が主として焼かれ、茶器は少ないが中には薄作りの恰好のよいものに黒鉢釉の掛けた粹な茶入を見ることがある。

唐津から転入して来た、五十嵐次右衛門の影響を受けているものと思われる。

福岡皿山時代

初めて福岡市内の近くに開かれた窯である。東皿山窯は藩の御用品の窯で伝統の美しい高取釉を掛けたものが多。また京都風の色絵や彫刻のある花入れなども作られた。

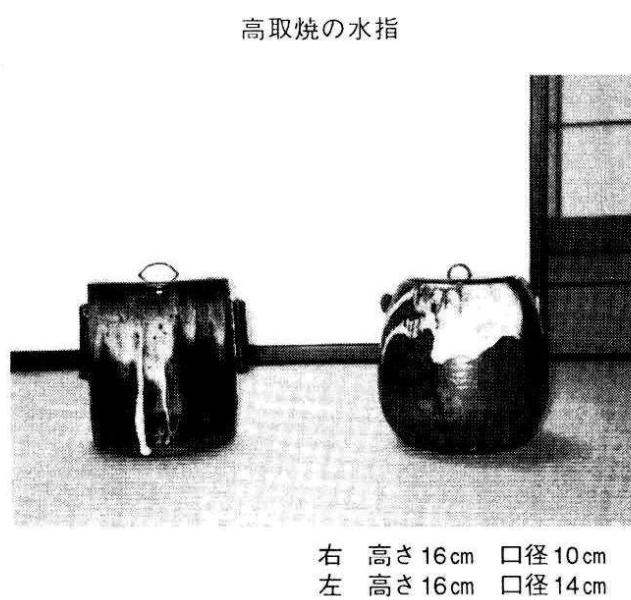
一方の西山高取窯は日用雑器が主体。

明治以降

高取焼は明治維新の変革によつて黒田藩主の庇護がなくなり、さしもの名門も衰退の途を辿り、東皿山窯は廃止された。

下手作窯であった西皿山窯で上手物が焼けるようになり、上手物の復活が計られた。

現在では第十二代高取八山、第十三代亀井味楽が代表



高取焼の水指

水指二題

既に何度も述べている様に、筆者の茶道具収集は若い頃からの骨董好きに始まって、妻の趣味である茶道への情熱とコラボしたもので、道具の数だけは知らぬ間に溜まっている。

では所蔵する二つの高取焼の水指について説明したい。先づ写真をご覧いただく。

右の水指所見

高さ十六cm、口径十cm、肩先に相対して小さい貝型の耳がついている。小さい耳は遠州好みと言われる。胴が少し膨らみ、尻張りとなつていて、比較的重く安定感がある。

胴体に荒い口クロ目がめぐり、肩先より胴中にかけて光沢のある釉が掛かり、その両面の一部に白釉が広がってなだれています。またところどころ浅黄釉がかかり釉色の変化が美しく見所となつていて、裾の下方に朱泥色の上を見せていています。

内部は口縁から上部にかけて白釉が掛かり、以下に口クロ目がめぐり底中央が渦状をなしている。薄作りでは

的な高取焼の窯元として伝統を守つていて、しかし現代作品の味合いは古き時代のものにくらべ近代感覚に溢れているとは言え、釉薬に落ちつきがなく光の反射が強く奇麗さびの心からは遠くなつてしまつた。

(四) 高取焼の水指二題

筆者が愛蔵する高取焼の水指を紹介したい。茶道具の中では何と言つても茶碗と茶入が必ず第一に注目される。だが「たかゞ水指、されど水指」。茶席では必須の道具の一つであり常に話題にされる。

水指とは

お茶を点てる時に、釜に補給する水や、茶碗、茶筅などをすぐ水を入れておく壺の類である。材質は大きく分けて金属、陶磁、木、竹などがあり、形状は桶、芋頭、釣瓶など豊富。唐物から和物まで産地は広く各宗匠の好み物も多い。水指は茶の湯の歴史とともにあり、初期は本地の水桶の類、東山時代の殿中の茶の湯には唐物の金属の物や土の物や手桶の類が使われ、侘茶の発生とともに備前、信楽の焼き物が好まれ、木地の釣瓶や曲物が使われ、また青磁、祥瑞、染付などの中国陶磁や高麗および国焼の瀬戸、伊賀、高取など、その種類は多い。

(以上は角川書店刊茶道大辞典、水指の項から抜粋)

高取焼は筆者の大好きな焼物の一つである。我国の茶陶に大きく貢献した渡来朝鮮人陶工たちの涙ぐましい苦労のあとが窺われ、素朴な土の匂いが侘の心を伝えている。また江戸初期の大茶人である小堀遠州の特別な指導を受けて奇麗さびが完成されているからである。

いくら好ましい焼物だとは言つても同じ高取焼の水指を二つも所有するとは当初から考えていた訳では無い。一期一会の出会いの結果、右の水指は二十年前に、左の水指は五年前にと、時を隔てて筆者の前に現われた。夫々気に入つたので思い切りよく手に入れられた。

ないが、精巧に出来ており、高取焼の特色を充分に發揮している。

黒田家伝来の茶入「染川」^{そめかわ}は中興名物で白旗山窯で焼かれた代表的な遠州高取であると言う。その茶入と感じが似ているのである。茶入と水指との仕様は当然異なる訳であるが、同じ茶陶であり、写真からではあるがよく似た感触が窺える。

高取焼が茶陶として名声を確立したのは、小堀遠州の指導が入った白旗山窯の時期である。よって雅味があり、侘茶にぴったりのこの水指は白旗山窯の出来で、十七世紀の遠州高取であると自賛する次第である。

左の水指所見

高さ十六cm、口径十四cmの桶形水指である。古銅器の装飾をまねたと言われる管耳が口縁の左右に付いている。と言つても近代高取焼水指に見られる程の精巧なものではなくまだ棒状の管である。

外側は黒い飴釉が下までたっぷり掛かり、白釉が上部を飾つており、正面の前押せ（形成する際、手で押された飾り。遠州の創意によるもの）に向つて二条の白釉が流れて見所となっている。

内側は黒釉が全部にたっぷり掛かりロクロ目がはつき

り解る。内底中央は同様に渦状をなしている。

誠に美麗でしかも貴婦人の様な気品のある水指である。これ程上手に出来た作品は多分黒田藩の御用窯の出来であろうと思われる。持主が大切に扱っていたらしくいま焼き上つて来た様な初々しさと艶やかさがある。但し箱と覆われていた布はボロボロの年代物であった。

古い高取焼の水指を二つも持つなど、贅沢極まる当初は怯んだが、この様な極上品を見逃すことはコレクターとしての沾券にかかるものと、否応なしに之を求めていた。

東皿山の藩窯の出来であると推察すると、二百年以上は経つている訳で古くて新しい物の典型であると自慢したい。

古高取は古唐津に化けているものが多いという。朝鮮唐津として世に出ている物の中に高取製の物が紛れている様である。

逆に筆者のこの高取は朝鮮唐津に負けない雰囲気の出来であると考え、この水指を「朝鮮高取」と名付けたいと思っている。

まだこの水指は茶会にデビューしていない。いずれかの機会にと出番が来るのを心待ちしている。

参考資料

神の器

中翰均著
里文出版

日本陶器の鑑定と観察

常石英明著

現代日本の陶芸家と作品

小学館
金園社

小堀遠州綺麗さびの極み

新潮社

大正名器鑑実見記

小田栄一編

やきもの事典

淡交社

他

THE DAY · DREAM (一)

鍋屋次郎

暁男は雨戸を叩く雨と風の音で目が覚めた。蛍光塗料が塗られた目覚し時計の針は午前二時半を指している。

優子は暁男を抱えるように寄り添つて眠っている。玄関のドアの所でカリカリと音がする。犬が立ち上がり前足で爪を立てている音で、時折遠慮したような「ワン」と低い声を発して家の中の様子を窺っている。犬たちを玄関の中に入れてやろうと起きあがらうとした途端、雨戸の隙間と欄間を通した閃光が一瞬部屋を明るくした。同時に真上でドカン！といつたと同時に、大きな雷鳴が家を響かせ、徐々に遠ざかっていった。優子が目を覚まし布団の上に座つて

「雷？ 今の音」

と暁男に聞いた。

「そうだよ。どこかこの辺に落ちたかな。庭で犬が雨に濡れて家中に入りたがっているから、玄関に入れてあ

げよう」と立ち上がった。

懷中電気をかけて玄関のドアを開けると、六匹の犬が雨にびしょびしょに濡れて、ドアを開けるのを待っていた。濡れた毛が胴体に張り付いている。家中に上がらなければ困るから、暁男は優子に「和室のテーブルを持ってきて、ここに立て掛け。犬が上がるないようにするから。それまでは僕がガードしている」といつて両手を広げた。

テーブルを立て掛けたあと、暁男と優子は、玄関のタイルの上で、何枚もバスタオルを使って犬の体を拭いた。犬たちは安心したのかタイルの上に静かに座り、暁男が持ってきたプラスチック容器の中の水を美味しそうに飲み始めた。

「天気予報も分からぬ、外の雨風がこれからどうなるか分からぬ。今さつきの地震の震源地がどこで、どこにどのような被害があつたのかも分からぬ。これから何がどのように起ころのかも何も分からぬ。情報が何もないということは、僕たちは犬と一緒に自然に対しても全くの無能力。手も足も出せない」

続けて

「今まで人間は地上の全てを征服していたと思っていたが、情報がなければ対応の仕様がない。恐怖だけが残る」言い終わらぬうちに、また家が揺れ始めた。二階で再び大きな音がした。暁男は優子の手を引いて階段を駆け上がりつた。子どもの頃、三河大地震の写真で、東海道沿いで潰れた家が、潰れた一階の上に二階が乗つていてことを思い出し、万一倒壊の場合は二階なら助かる、と思つたからだ。

まだ揺れは続いている。天井から吊されている電気は弧を描くように揺れている。暁男が書斎として使つている部屋に入り懷中電気で照らすと、二つの本棚は倒れ、部屋は本と棚の上にあつた置物が散乱して足の踏み場もない。

揺れは治ましたが、用心のため優子と二階の寝室で寝ることとした。

優子が急須と湯飲みを持って來たので、熱いお茶を一杯飲んだ暁男は

けると六匹の犬は外に出て、庭の片隅でオシッコを始めた。我慢していたのだろう。

暁男は外の様子を見ようと思、サンダルのまま道路へでて驚いた。私道の先の道路は川になつてゐる。暁男の家は商店街に続く道路より五十cmくらい高くなつてゐる。膝まである長いゴム長靴に履き替えて道路にてた。商店街にでるとマンホールから水が噴出している。反対側を見ると、地震で水道本管が破裂したのか、車道の中央部では二階の屋根に届くくらいの高さに水が噴き出している。その水とマンホールから噴出した水は合流して勢いよく流れゆく。歩道を水の流れに沿つて歩いて行つて驚いた。水は全て地下鉄入口の階段を流れ落ちてゐる。ということは、全ての地下鉄はどこかで繋がつてゐるので、東京の全地下鉄が水浸しになる。場合によつては巨大な貯水池化するかも分からぬ。テレビも新聞もラジオも電話もないから何も分からぬ。

帰りに地下鉄駅前のコンビニから水を持ち出そうとして、入口のドアの所で驚くべき光景を見た。なんと十四以上の犬がコンビニに入り込み、おにぎり、弁当、パン、バナナなど、台の上に乗つて食べている。暁男がコンビニに入ろうとすると、一匹の子牛くらいありそうな大きなシェパードが姿勢を低くしてうなり始め、今にも暁男めがけて飛びかかりそうな気配。恐ろしくなつた暁男は

そのままドアを閉めた。ドアの軽さから、大きな犬が体で押せば、簡単に開くことが分かつた。
考えてみると、このところコンビニから食料品や生もの腐つた異臭が漂つてゐた。嗅覚が人間の二千倍といわれてゐる犬が、この臭いを感じないはずがない。

出直すこととして一旦帰宅すると

「暁男さん、大変！」
と優子の叫び声が聞こえる。驚いた暁男は玄関からリビングに入ると

「暁男さん、大変！ 水が出ない！」

と水道の蛇口を指差している。

暁男は今見たばかりの、五メートルくらいの高さにまで噴き上がつてゐる噴水を思い出し

「矢張り、そうか」と呟いた。

「矢張りつて？」

「うん、今大通りで五メートルくらいの高さまで噴き上がつてゐる噴水を見たのだ。埋設してある水道本管が破裂したのだろうね。さつきの地震が原因かもしれないね」

朝食は、ご飯と海苔と鰹節、インスタント味噌汁。コンビニにある卵は全て賞味期限切れ。肉、魚も冷蔵庫がないからダメ。牛乳も勿論ない。

水は一リットルしかなかつたので、朝食で完全に使い終わつた。

朝食後、いつも見る新聞もテレビニュースも何もない。先ず水のことから解決しなければならないと思つた暁男と優子は、二日前に確認した「井戸」へ行つてみた。

ポンプの柄を上下に動かし続けると、やがて赤味がかった水が出てきて、そのうち真水が出ると思つて動かし続けていたが、出てきたのはなんと泥水。先ほどの地震で、地下水のどこかの水路が崩れたのだろう。

優子は
「暁男さん、どうすればいいの？ 私たち、もう生きて行けない。どうして私たちだけ残されてこんなに苦労しなければならないの。一緒に消えればよかつた」といつて、その場に座り込んでしまつた。

暫くの沈黙の後、暁男は

「とにかく家に戻つて考えよう

といつて歩き出した。優子も漸く立ち上がり、
「水がないからコンビニによつて帰りましょ」と言いながら歩き出した。

暁男は、コンビニが犬に占拠されていたことは、まだ優子に話していない。帰るのには少し遠回りになるが、

帰り道に暁男が今朝見たコンビニがある。優子は中を覗いて、犬たちの狼藉の跡を見て

「ここもやられている」と声をあげた。

「だけど、水は大丈夫」

と言いながら入つて行った。コンビニの中はひどい臭氣。食物の腐つた臭い、犬の臭い、犬の排泄物の臭いが混ざり合つてゐる。

先ほど見たコンビニでなく、別のコンビニを目指した。

コンビニの近くまで行くと、優子の足は速くなつて、暁男を追い越して歩いていた。優子がコンビニの入口ドアに手を掛けて中を覗くと同時に金切り声で

「きや！ 暁男さん見て！ 沢山の犬が！」

と、後は声にならない。

暁男が覗くと、先ほど見た犬集団とは違う十匹以上の犬が台に上り、パン・菓子・サンドイッチ・弁当などを手当たり次第に食べている。

暁男と優子の気配に気づいた一匹のシェパードが唸りながらやつてきた。暁男達は物陰に身を隠して少し離れた所から見ていたが、シェパードは外に出てこなかつた。戻つてまた食べ始めたのだろう。

二人は二リットルのペットボトルを片手に二本ずつ、一人で八本を持って出た。暁男は優子の姿を「火事場の馬鹿力」とはよく言つたものだと思つて眺めていると「暁男さん、コンビニには水がまだあつたから、帰つたら直ぐ取りに行きましょう。犬が来ないうちに」の声が飛んできた。

結局、コンビニにあつた全てのペットボトルを家に運び込んだ。

その日は終日、これから的生活をどの様にするかを二人で話し合つた。

- ① 電気・ガス・水道などのライフラインは潰滅。
- ② 電話・テレビ・ラジオ・新聞など情報機能も潰滅。
- ③ 食料では米以外の肉（タンパク質）・野菜は缶詰のみ。卵・牛乳もなし。
- ④ 都会生活の危険性（地震・火事・水害や大集団）から逃れて、清流があり、空き農家の家屋と、隣接して畑もある場所を探すこととした。

それから二年後、暁男と優子はすっかり農夫とその妻になつていて。場所は福生市から少し北に入った所で、母屋の前には南傾斜の畑が広がり、その下には清流が流れている。

最初の年は、素人の農作業であつたが、じやが芋・さ

つま芋・とうもろこし・なす・きやべつ・ねぎなどの収穫を得た。一人だけだから沢山は要らない。

ところが二年目にはいると、この収穫を喰い付けた猿・いのしし・狸・熊がやってきて、芋の根を掘つて齧り、どうもろこしを食べ、追い払つてもそのときだけは逃げるが、朝になれば畑は見るも無残な状態になつていた。

そこで二人は畑で作る事をやめて、山に生えている山菜と木の実を採ることとした。清流では鮎や鮒が獲れた。

ここは空気が澄んでいるのか星がよく見える。星を眺めていると、流れ星より大きな、ゴルフボール大の淡く青みがかった球状の光が、東の空から西の空へ、また北の空から南の空へ一瞬の間に飛び去つて行つたり、家の前の畑の上に数個のその光が漂つていることが多くなつた。全部戸締まりがしてある家の中にも入つてくることがあつた。

暁男はその光を布の袋で捉えたが、袋の中の光は、袋を破ることなく通過して飛び去つた。

優子が畑に出ていて、暁男が農具の手入れをしていたとき

「ごめんください」

の人の声に驚いて玄関先を見ると、いかにも疲れ果てた

といつた様子の二十歳前後の娘が立つていった。

「人間がいた！」

と驚いて玄関先に行くと

「済みません。少しの間休ませてください」

と言つて、玄関に腰を下ろした。

どこから来た、名前は、など何を聞いても返事がなく、

肩で息をして切なそうにしている。

「奥の部屋で横になりますか」

と言うと、かすかに頷いたので部屋に布団を敷いて案内した。

暫くして様子を見に行くと、布団の上に起きあがり

「我が儘を言つてすみません。行水をさせてください」

といふ瞬き一つする間に、その見事の裸身は消え、淡い青色の球状の光に変わり、暁男の目の前の格子窓から飛び去つて行つた。風呂場には衣類はじめ何一つ残されているものはなかつた。

雨水を貯めた桶から盥に水を入れ、風呂場に案内した。

暫くしても物音がないので、風呂場の外の格子窓からそつと覗いた。暁男は息を飲み込んだ。なんとその娘の裸身は、胸・腰・四肢全てがふくよかで、疲れ果てたと言つた先ほどとの様子とは全く違う。

瞬き一つする間に、その見事の裸身は消え、淡い青色の球状の光に変わり、暁男の目の前の格子窓から飛び去つて行つた。風呂場には衣類はじめ何一つ残されているものはなかつた。

その翌年の春先、暁男と優子が山菜を探りに山奥に入

「知らない」

と首を振ると、光からの声が続いて

「この宇宙には宇宙の質量の一・二・三・%を持つ、光を出さない暗黒物質があるのは知つてゐるか」

暁男が

暫くの沈黙のあと

「来年にはその暗黒物質に動きが出て、それが太陽系の星相互間の引力バランスに影響して、星相互間の距離に

変化が生じる。その結果、太陽と地球の距離が十六分の一短縮するので、地球に降り注ぐ太陽光エネルギーの増

加と、地熱の上昇から、地球の平均気温は五度以上上昇するだろう」

「地球はそれが原因で北極や南極の雪と氷は全て溶け、ヒマラヤの万年雪も消える。それによってインドから中東方面は、雪解け水がなくなり、砂漠化して行く。チベットから中国奥地も同じだ。海面は三メートル以上上昇する」

「そうなると動植物の生態系に変化が生じて、人間の生存条件も変わってしまう。そのようなことを人間に知らせたら、地球全体がパニックになるだろう。だから突然ではあつたが地球人全員を七次元の世界に入れて、今眠らせている」

優子が
「眠っている人たちを、いつ起こしてどうするのですか」と聞くと

「この地球にも、外界の世界はどんどん時間が過ぎて行くのに、自分だけは時間を止めている。そして千年以上も経つてから自分の時間を刻みはじめたものがあるだろう。知っているかい？」

優子が首を振ると

「古代蓮のことだよ。どこかの古墳で発見された種から咲いた花の形態は、学説的にも千四百年以上前の形態と言われている。だから、種だけは時間が止まっていたの

「もしも地球に人類が残っていたら、海面の上昇によつて家や田畠が浸水した民族、雪解け水がなくなつて土地が沙漠化した民族、平均気温が摂氏四十度近くなつて生活できなくなつた民族などが、緑地を求めて大移動する。国連は全く機能しなくなり、民族間での殺し合いが始まること」

「地球は人種毎に言葉が異なつていて人種毎に国を作つている。これが全ての争いの元である。新しい地球では全員言葉は同じで、全人種が一緒に生活し、国はなく、全員が地球家族といった状態になる」

暁男が

「どうすればそのような平和なパラダイスができるのですか」と聞くと

「七次元に住む我々にはできないことはない。人間の脳の改造もある。地球での記憶が邪魔になるからだ。三年

以前の地球の新聞記事にも掲載されたIPS細胞と細胞外マトリックスの利用方法を進化させて、人間が構成されるために必要な全種類の細胞が一つずつあれば、そ

の人は細胞分裂から再製できる。ただ、細胞内に病を持つている人間は、細胞分裂が規則通り行かないこともあり、再製確率は高くない。五十%程度であろう。植物の種も全部芽しないことと同じだよ」

「そして、脳の言語を司る細胞に、今までのその人の言

だね。種の外の時間はどんどん過ぎていっても。あなたの目の前から消えた人々は、七次元の世界では、古代蓮の種と同じ状態になつていてるよ」

「それで、あなた方には、南極や北極の雪も氷も溶けて、ヒマラヤの万年雪も溶けて、海面が二メートル以上上昇した状態を見せてから七次元の世界に入つて貰うよ」

ここまで言つてから

「あなた方が避難先としてこここの地を選ぶように、あなたの方の脳に指令を出したのも私だ。では二年後にまた会おう」

と言つた瞬間、淡く青い光は消えていた。

二人は暫くの間は不思議な声の言うことを信じていたが、毎日の食料確保に忙しく、あまり気にしなくなつた頃のある日の夜、寝ている部屋の天井に、淡く青いゴルフボール状の光が出てきて

「暁男、優子、話を聞きなさい」と声がした。

二人が布団の上に座ると、その光は二人の目線と同じ高さまで降りてきて
「太陽系からあまり離れないところに、もう一組の太陽と月と地球を作つた。暗黒物質のエネルギーの小爆発を利用して作つた。地球の自転も公転も今の通りにした。二年後には全員そこへ行つて貰う。地球にはもう住むことはできないからだ」

語記憶を全て削除して、その人のそれまでの程度に応じた新しい共通の言語能力を入れて置く」

優子が
「それでは全く新しい人間になつてしまふのですか。地球の時の家族はどうなるのですか」と聞くと

「新しい地球では、人種を越えた家族構成を作り、それを各人の記憶の中に入れるので、目覚めたときから新らしい家族ごとに集まつてゐるよ。あなた方はあちらに行つても夫婦としよう」

それから半年経つて再び淡く青い、ゴルフボール状の光がやつてきた。

「暁男、優子、今から北極と南極、ヒマラヤの頂上、三メートル海面上昇の陸地変化を見に行こう」と言つたので、暁男は

「飛行機も何もなくてどうやって行くのですか」と聞くと

「今から二人を七次元の世界に入れる。七次元の世界では、あそこへ行きたい、と思えば次の瞬間はそこにいるのだ。地球人のように距離を行くのに時間を掛ける必要はない」

優子がそのようなことがどうしてできるのか、と怪訝な顔をしたので

「それが七次元の世界さ。説明？ そうなつてているのだから説明なんてできないよ」

次の瞬間、暁男と優子の目の前にヒマラヤ山脈と標高八、八四八メートルのエレベエスト山の姿が広がった。どこにも雪も氷も見えない。どこまでも荒々しい岩肌が連なっている。水の流れているような所も見えない。

次の瞬間には大きな南極大陸が見えた。雪も氷もなく、ベンギンが水際に沢山いるが、なんとなく元気がなさそうに見える。

北極へ行き、フィリピン上空に来て、海面上昇で小さくなつた島を見て、中国黄河河口から上流に遡つた。黄河河口は幅が広がつて湾のようになり、遡ると至る所で堤防が決壊して、田畠は水没し、家は見渡す限り水中に浸かっている。

完

お詫び

前号（まんじ一一五号）の本稿（THE DAY · DR EAM）は一一六号に続けることとしましたので、勝手ながら前号一三四頁全文をカットします。

今川風雲録（八）

千坂精一

の疑念を抱かせてついに忠臣を誅殺させてしまった。

それが顯定の陰謀と知った定正は山内家討伐に立ち上がり、両者の同族争いが関東の動乱に発展していった。

山内顯定と扇谷定正は二年のあいだに四度戦い、いずれも扇谷軍が山内軍を凌駕したのだが、五度目の高見原（埼玉県比企郡小川町高見）の再戦で定正が荒川で落馬して急死してしまったので顯定は管領家の面目を施した。

しかしこれで両家の抗争が終了したわけではなく、定正のあとを嗣いだ甥の朝良が河越城（川越市）に拠つた。顯定は武藏國上戸（川越市）に布陣して河越城を攻めたが堅固で陥らず、諦めて江戸城攻めに切り替えた。

顯定の動きに朝良は氏親と宗瑞に援軍を求めてきた。宗瑞はただちに軍勢を率いて相模國柳形山（川崎市多摩区生田）に出向き、氏親の出陣を待つた。

氏親、遠江國を奪還

伯父伊勢新九郎に愛鷹山麓の富士郡下方莊十二郷（富士市）と興國寺城を与えて関東境の固めを持んだのだが、その新九郎が堀越公方家の騒動に介入して伊豆を平定すると北條（伊豆の国市葦山）に本拠を移してしまつた。

だが氏親は、新九郎が名告りを変えて本拠を移しても伯父早雲庵宗瑞が頼りであることにかわりはなかつた。

そのころ関東では上杉家の同族争いが激化していた。

ことは関東管領山内上杉顯定が拮抗してきた扇谷上杉定正の勢力を削ごうと企んだことからはじまつた。扇谷家の家宰太田資長（道灌）は智将猛将の誉れ高く、関東の動乱では管領家を凌ぐ目覚ましい活躍だった。

山内顯定は太田資長抹殺を謀り、扇谷定正に資長謀叛

武藏國白子（和光市）に布陣して江戸城を窺つていた

顯定はこの報らせを受けると先手を打つて南下し、北上してきた今川軍と立川原（立川市柴崎付近）で激突した。永正元年（一五〇四）九月二十七日のこの戦闘は扇谷軍が優勢であったが、両軍とも多くの死傷者を出したので雌雄を決するまでにはいたらず、痛み分けになつた。

氏親は隣國扇谷朝良からの要請であるから派兵も頷けるが、早雲庵宗瑞はなぜ積極的に支援したのだろうか。のちに三代がかりで関東を席捲したことから推して、宗瑞は支援を好機に両上杉の戦力を観察したのである。

このあと顯定は扇谷軍を武藏國柄田（八王子市）や相模國真田（平塚市）に破つて朝良を河越城へ追い詰めた。

朝良はついに顯定に和睦を請い、河越城を開城して江戸城に引退したのだが、それを宗瑞は傍観していた。

氏親は、関東遠征の翌年三河國を侵犯して八名郡今橋（豊橋市今橋町）周辺を掃討すると、幕下の豪族牧野古白に命じて城を築かせ三河國侵攻の拠点づくりをした。この今橋城はのちに吉田城といわれ、その跡地に戦前陸軍歩兵十八聯隊がいたが現在は豊橋公園になつている。

城跡は豊橋市のほぼ中心部で、豊川に架かる現在の豊橋は吉田大橋といつて東海道三大橋に挙げられていた。この國には豊川のほかにも岡崎市を挟んで乙川と矢作

川の大河があつたので「三河國」と称されたという。

今橋はその後吉田と地名が変わり、江戸時代は東海道の要衝で江戸から三十四番目のこの宿駅は軒を連ねた旅籠に飯盛女が多いことで知られる指折りの宿場になつた。

俗謡にも

吉田通れば二階から招く

しかも鹿子の振袖が

と唄われるほど賑わつた城下町として栄えたのである。

氏親はこの今橋城に伯父早雲宗瑞を入れて三河國內を攻撃させるいつばうでは遠江國侵攻に心血を注いだ。

尾張・越前・遠江三國の守護で偶々遠江國にいた斯波義達を刑部城（浜松市北区細江町）などに攻めたりした。

永正九年（一五一二）閏四月二日宿将朝比奈泰熙に斯波義達と大河内貞綱在城の曳馬城（浜松城）を攻撃させたが、このときは頑強な抵抗に遭つて陥とせなかつた。

満を持した氏親は五年後にふたたび攻略をかけて大河内貞綱父子を自害に追い込み、ついに攻略に成功した。

氏親は念願の遠江國奪還を成し遂げたのである。

甲斐國奪取に失敗

氏親のつぎの狙いは甲斐國を手中にすることであつ

た。

甲斐守護の武田信虎は二十八歳の青年武将である。

大永元年（一五二二）十月、氏親は遠江國天方城（静

岡県周智郡森町向天方）の福島正成に武田攻めを命じた。正成は一万五千の軍勢を率いて富士川沿いに北上する

と甲斐國の西部一帯を荒らしておいて、十五日に躰^く躅^{じゆ}館（甲府市古府中町）を目指して進撃を開始した。

そして正成は、荒川を挟んで西方七キロの龍地臺（甲府市龍地）に布陣するとその威容を示して威嚇した。

信虎はこのとき存じを覺悟したらしく身重の大井夫人を背後の山中にある要害山城（甲府市）に避難させておいて、十六日早朝雌雄を決すべく一千余の騎馬隊を率いて荒川下流の飯田河原（甲府市）に進出してきた。

これを知った正成は、大軍で押し包んで一気呵成に殲滅しようと意氣込み、鶴翼の陣形で押し出した。しかし武田の騎馬隊は包み込まれるまことに中央突破して福島軍の背後にまわり後方から襲いかかったので、福島軍は浮足立ちさらには伏兵に崩されて龍地臺に退いた。

十一月二十三日、福島正成はあらためて信虎の本拠躰^く躅^{じゆ}館を挾撃すべく、二隊に分けて攻撃を仕掛けた。だが福島軍は武田の部将萩原常陸介の策に嵌められて、荒川上流の上條河原へ追い詰められてしまつた。

その夜、武田軍少數精銳の別働隊に背後から本陣を奇襲され、正成は原能登守友胤に討たれて戦死した。

今川假名目録

氏親の代は守護大名から戦国大名に転化する曲期的時代であった。検地の実施がそれを如実に物語っている。

貴族の所有地（莊園）を警護する守護の立場ならぬも他人の財産を悉々調査する必要はないわけで、検地を施行したということは自分の財産だと思つてゐるからであるから、検地施行は即ち莊園制度の否定なのである。

もうひとつは氏親の定めた「今川假名目録」である。

三十三箇条から成る家法で、内容は家臣団の統制と領内の民衆支配とに大別されているが、ことに後者に多くの条目が割かれているところをみるとこの「今川假名目録」はあきらかに『分国法』であり、これを氏親が領内に公布したということはつまり今川家が室町幕府から自

立したことを見たことになるわけである。

氏親は、このときから室町幕府の職制守護職を捨てて自立し、駿河・遠江二箇国領主になつたのである。

独立領主になつた氏親は『今川假名目録』制定から二箇月後の六月二十三日に五十四歳で病歿してしまつた。だが、残念なことに氏親は『今川假名目録』制定から二箇月後に六月二十三日に五十四歳で病歿してしまつた。

氏親後室壽桂尼

氏親の生母は室町幕府政所執事伊勢貞親の姪で、新九郎長氏（早雲庵宗瑞）の妹であることはすでに述べた。

その北川殿は氏親の父義忠の寵を受けて駿河へ伴れてこられたことから東国の風習に馴染めず雅事恋しい思いをしてきたので、わが子氏親の正室には身分の高い公卿家から京風の洗練された女を迎えたいものと希つていした。

そこで伯父伊勢貞親に斡旋を依頼して選ばれたのが、藤原北家の岐れ勸修寺流中御門宣胤の女悠姫であつた。

幕府に仕える武人伊勢貞親の推挙だけあつて悠姫は貴人の家に生まれ大切に育てられた世間の汚れを知らぬおつとりした姫ではなく、男勝りの気丈な女であつた。

氏親が世を去つたとき嫡男氏輝はまだ十四歳の少年であつたが、亡き夫氏親の菩提を弔い得度して壽桂尼となつた悠姫がよく氏輝を補佐して今川家の安泰を保つた。

もつともこの時期は先代氏親が義兄伊勢新九郎の援助を得て三河國方面（愛知県）まで進出していたので、氏輝は父氏親の敷いた領国拡大路線を継承すればよかつた。

だがそれだけではわが子氏輝の存在感が稀薄になつてしまふと考えた壽桂尼は、独自の施策を打ち出させた。

なかには軍團に馬廻衆を創設したり、領内の商業活動を振興させるなど、いくつかの見るべきものがあつた。

氏輝はまた母の血を引く文化人でもあって、近衛尚通から『古今和歌集』を贈られたりしている。

氏輝は長ずるにおよんで父氏親が果たせなかつた甲斐國略取を思い立つたが、相手は武田信虎ゆえ再度の失敗はゆるされぬところから相模の北條氏綱と同盟して挾撃作戦で斃し、分割領有することで謀議を成立させた。

天文四年（一五三五）八月、氏輝率いる今川軍は國境の萬澤口（山梨県南巨摩郡南部町万沢）に進出した。

急報を受けた武田軍が富士川沿いに南下してきた。

十九日に戦端が開かれたが一進一退の繰り返しで徒らに戦力を消耗し、いつこうに結着がつかなかつた。

氏輝は、長陣の不利を覚つていつたん兵を退いた。

いっぽう北條氏綱一万四千の軍勢は籠坂峠（山中湖村）を越えて郡内（都留地方）に侵攻し、小山田信有と勝沼信友の防衛軍を破つて府中（甲府市）に迫ろうとしたが、信虎と同盟している扇谷上杉朝興の軍が小田原に向かつ

たとの報で急ぎ兵を返してしまつたので、今川・北條同盟軍の挾撃作戦は中途半端で終わってしまった。

この戦いでの負傷が急病かは定かでないが、氏輝は半年後の翌年二月十七日に二十四歳で急逝してしまつた。

花倉の乱

氏輝には子がなかつたので壽桂尼は同腹の弟梅岳承芳（ほいがくじょうこうほう）を還俗させて後嗣にした。

承芳は幼名を芳菊丸といい、永正十六年（一五一九）生まれでこのとき氏輝より六歳下の十八歳であつた。

芳菊丸は七、八歳のころ父氏親が三顧の礼をもつて迎えた駿河國の人で京の禅寺建仁寺の僧太原崇孚雪齋に預けられ、富士郡善得寺（富士市今泉）で養育されていた。壽桂尼は承芳に家督を継承させたが、しかし承芳には重臣福島左衛門の女を母とする異母兄玄廣惠探がいて、志太郡花倉の遍照光院（藤枝市）の住持をつとめていた。

家中はこの惠探を後嗣に推す福島彦太郎や篠原刑部少輔らを中心とする勢力が擁頭してきて、嫡出子承芳を是とする正統派と分裂して権力抗争へと発展していった。惠探は遍照光院に近い葉梨川上流の花倉城（藤枝市花倉）を拠点にした。先祖が駿河守護として入国したとき本拠にした由緒ある地に構えて主導権を握ろうとした。

五月二十五日未明、惠探派の福島らが承芳の駿府館

（静岡市）に奇襲をかけたことによつて戦端がひらかれた。

いつたん館を逐われた承芳だつたが、その日の夜には奪回したので福島らは久能城（静岡市）に立て籠もつた。

承芳派は十日をかけて駿府付近から惠探派を一掃したが、しかし以西は惠探の拠点花倉城の勢力下にあり、方

上城（焼津市）や葉梨城（藤枝市）が駿府を脅かした。

それだけではなく、以東でも富士郡代官福島彌四郎や彦三郎、井出らの土豪が蜂起して由比城（静岡市清水区由比）でも激しい攻防が繰り広げられて、承芳派は惠探派に東西から挾撃される状態に陥つてしまつた。

両派が拮抗して膠着状態になつてしまつたので、なんとか打開を図る承芳派の太原雪齋は同盟関係にある相模の北條氏綱に救援を依頼して、派遣された岡部左京進親綱らの活躍により惠探を花倉城に追い詰めて攻囲した。

惠探は城を脱出してなんとか瀬戸谷の普門庵（藤枝市瀬戸ノ谷）まで逃げ延びたが、そこで自害して果てた。半月で抗争を終了させた承芳は、十二代将軍足利義晴の遍詣を賜わって義元と名告り、駿河浅間神社（静岡市葵区宮ヶ崎町）に黒印状を発して領國內に家督継承者であることを見たことを知らしめ、名実ともに九代当主の座に就いた。これから今川氏の全盛時代に入つてゆく。

訣別と庇護

今川の統領になつた義元に早速難題が持ち込まれた。

異母兄玄廣惠探との家督継承抗争で支援を頼んだ北條氏綱から駿東郡分譲を要求してきたのである。

氏綱にしてみれば助勢してやつたから統領になれたのだから、領国的一部を分割してくれても当然ぐらに思つただろうし、それも父早雲の旧領をといつているのだからまんざら無理難題ではないと考えていたに違いない。

ところが義元は、父氏親が早雲に富士郡下方荘を与えたのは早雲が今川の臣下だったときのことと、その後早

雲は伊豆・相模を奪取して今川から独立したのだから今川領内の下方荘は所領でなくなるのが当然で、いまさらなにを言うかと一笑に付して氏綱の申し出を却下した。

氏綱は、駿河・遠江・三河三國の大守になりながら駿河國の一部をも割譲しようとしている義元に肚を立てた。

このことで、今川・北條の同盟関係に罅が入つた。

その年の閏十月七日に三河國岡崎城（岡崎市）の松平清康の嫡男仙千代が僅かの供にまもられて頼ってきた。

前年暮れに二十五歳の青年武将清康は宿敵尾張國古渡城（名古屋市中区）の織田信秀討伐に向かい守山城（名古屋市守山区）に在陣していたとき、馬が暴れ出して騒ぎになつたのをかねて逆臣の噂を立てられていた父阿部大藏が成敗されるのかと早合点した嫡男彌七郎が、清康のもとに駆け付けてその場で主君を斬殺してしまつた。

父清康の非業の死で岡崎城を逐われた仙千代は、伊勢・三河などを流浪したあと義元を頼つてきたのである。

義元は、親をうしない城を逐われて寄る辺のないこの十一歳の少年を不憮に思い、松平家を再興させるまで庇護してやることにして駿府館に居住させておいた。

武田信虎と同盟

義元は訣別した北條氏綱の動向が気懸かりであった。

氏綱と武田信虎は敵対関係にあるといつても油断はならなかつた。機に臨み変に応ずる駆け引きに長けた両者であればいつ利害一致して手を結ぶか計り知れなかつた。

太原雪齋も同様の危惧を抱いているらしく武田信虎との同盟を進言してきた。先手を打とうというのである。

義元もそれを考えていたが、母の壽桂尼は首を傾げた。夫氏親と嫡男氏輝の親子二代にわたり長年敵対してきた今川と素直に同盟を結ぶはずはないというのである。

大博打には違ひないが背に腹はかえられなかつた。

意を決した義元は太原雪齋を使者にして甲斐へ送つた。

交渉の結果は案するより産むが易く、信虎も今川と北條を敵に回す不利を感じていてどちらかと手を結ぼうとした。

信虎の女を娶つて四年後の天文十年（一五四二）六月、

その信虎が嫡男晴信に追放されて義元を頼つてきた。

義元は男という厄介者を預かるについて雪齋と岡部美濃守を甲府へ送り晴信の確認をとると、信虎の身辺を世話をする女中と武田関係者全員の滞在費用を提供させた。

七月に北條氏綱が五十五歳で歿し、嫡男氏康が嗣いだ。

天文六年（一五三七）二月十日、今川・武田同盟の証しとして十九歳の義元が同一年の信虎の女を娶つた。この婚姻を北條氏綱は父早雲以来の友好関係を断ち切る裏切り行為であると烈火の如く怒り、義元と断交した。六月に義元は、庇護した仙千代を元服させて廣忠と名告らせ岡崎に帰した。この廣忠が徳川家康の父である。

信虎の女を娶つて四年後の天文十年（一五四二）六月、

その信虎が嫡男晴信に追放されて義元を頼つてきた。

義元は男という厄介者を預かるについて雪齋と岡部美濃守を甲府へ送り晴信の確認をとると、信虎の身辺を世話をする女中と武田関係者全員の滞在費用を提供させた。

七月に北條氏綱が五十五歳で歿し、嫡男氏康が嗣いだ。

松平と織田の抗争

このころ尾張國の織田信秀は隣國三河の併呑を企て、岡崎城を奪取して足掛かりにしようと目論んでいた。

天文十一年（一五四二）八月、織田軍岡崎に迫るの急報に義元は救援軍を派遣したが、このときは判断が甘く

三河國小豆坂（岡崎市）での遭遇戦に敗れてしまつた。

松平廣忠の正室於大の兄刈谷城主水野信元が織田信秀に属したので、廣忠は於大を離別して信元と絶つた。のちに於大は阿久比城（知多郡阿久比町）主ひまつとから

翌年三月六日、あろうことか松平廣忠が廣瀬城（豊田市西広瀬町）将佐久間九郎右衛門に殺されてしまった。比奈泰能を副将にそえて三河へ出陣させた。

こんな事情を知つた義元は、翌年春太原雪齋に軍勢を預け朝か奈泰能を副将にそえて三河へ出陣させた。義元はこの悲報を受けると直ちに岡崎城を接収した。

に再嫁した。廣忠の嫡男竹千代（家康）の生母である。翌天文十四年（一四五五）八月、小田原の北條氏康が駿河へ侵攻してきたので義元は武田晴信の救援を得て対陣したが、膠着状態になつてしまつたので晴信が両軍の和解を調停して北條軍を撤退させ事なきを得た。駿・相はいち應落ち着いたが、二河の争乱はづいた。

義元は松平廣忠を支援して吉田城（豊橋市の旧今橋城）へ籠もつたのを知りこれを攻略して臣従を誓約させると、吉田城代に復帰させてやつて女を継室に迎えた。

その戸田康光が、廣忠の恩情を裏切り報復してきた。

廣忠は織田信秀に通じた一族の忠倫を討つたあと、義元に全面支援を請うため嫡男竹千代を人質にして駿府へ差し出す途中吉田城下で戸田康光に奪われ織田信秀に売り渡されてしまつた。その価は五百貫とも千貫ともいう。

このことは今川軍が三河國小豆坂で織田信秀軍を破つた。

そして十一月、義元の命を受けた雪齋と泰能は織田信廣（信長の兄）を安祥城（安城市）に攻めて捕えると、織田に売られた松平竹千代と人質の交換を成立させた。

雪齋らは戸田一族の居城上野城（豊田市）を攻略しておいて竹千代を岡崎城に戻すと、あらためて人質として預かり、駿府城へ護送して無事義元の許へ届けた。

これによつて八歳の少年当主を義元の許に囲われた岡崎松平家は、以後今川家に臣従していかなることがあるうとも離坂することはできなくなつたのである。

北條氏康と同盟

天文二十年（一五五一）三月三日、尾張の織田信秀が四十二歳で死去し、十八歳の二男信長が家督を嗣いだ。義元は武田夫人が三十二歳で病歿して絆が切れたので、武田晴信の嫡男義信に長女を嫁がせることを承諾させてこの年十一月二十七日に輿入れして絆を回復させた。

天文二十二年（一五五二）信長の素行を案じた傳役平手政秀が諫死した年の二月二十六日に義元は父氏親が定めた家法『今川假名目録』三十三箇条に二十一箇条を追加して行政改革と家臣団の統制を強化した。

そうしておいて義元は、三河國奪取に本腰を入れた。その留守を北條氏康に狙われて富士郡を占拠されてしまつた。

まつたので、義元は兵を返して刈屋川で対陣したが、武田晴信の支援を得たにも拘らず痛み分けに終わつた。太原雪齋は、北條氏康と敵対をつづけていたのでは三河國と尾張國を奪取しての領国拡大は難しいと考えた。なんとかして氏康と誼を結ばなければならなかつた。氏康はいま関東の上杉攻めにかかつてゐるから、今川と手を結べば後方の憂いは解消されるはずであつた。

もう一人武田晴信がいるが、これとも手を結ばせればいい。晴信とても信濃國奪取で長尾景虎と敵対しているから、氏康と手を結べれば好都合のはずであつた。

雪齋は、利害一致する二者同盟は実現すると確信した。

義元に否やはなく、雪齋に推進の大任が一任された。

雪齋はまず甲府へ出向いて武田晴信を説得した。

晴信も後方の氏康が氣懸かりだつたので乗ってきた。

あとは現在敵対している北條氏康の籠絡であつた。

だが、これまた案するより産むが易い結果になつた。

太原雪齋が軍師として出向いてきたことで今川が屈服して和睦を申し入れてきた恰好になり、おなじ思いでありますから自尊心が許さず自縄自縛だつた氏康も愁眉をひらき、一族や重臣たちの手前も面目が保てたのである。

今川の黒衣の參謀太原雪齋の見事な心理作戦であつた。

雪齋は、間髪を容れず三者を現在住持をつとめている善得寺（富士市今泉）に招聘して不可侵を誓約させると、

それぞれの領国背後の上杉、佐竹、長尾、織田、松平などに対すべく『三国同盟』を締結させた。

しかしこの善得寺の会盟は一抹の疑心暗鬼がのこつた。

そこで雪齋は、駄目押しするかのように同盟の証として三家が姻戚関係で結ばれることを提案したのである。

すなわち、武田晴信の女を北條氏康の嫡男氏政に、北條氏康の女を今川義元の嫡男氏眞に嫁いでいることはすでに述べたが、これで三家は雁字搦めになつた。

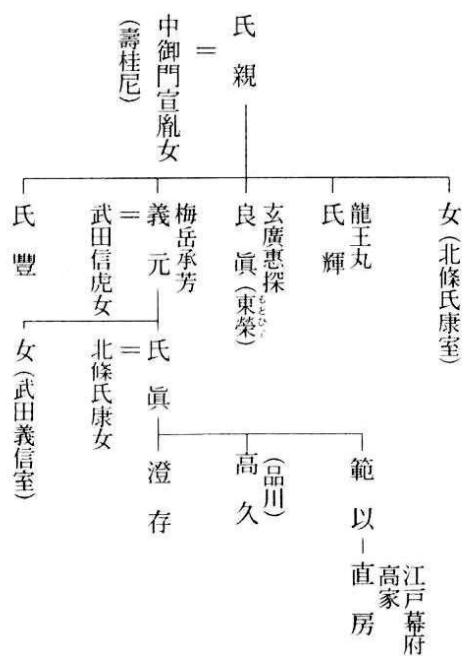
その年七月武田晴信の女が北條氏政に嫁ぎ、おくれて十二月に北條氏康の女が義元の嫡男氏眞に嫁いできた。

翌天文二十四年（一五五五）、太原雪齋が身罷つた。この年四月、織田信長が主君にあたる織田彦五郎信友を討つて居城の清洲城（清須市清洲）を奪い取つた。

そして弘治と改元された閏十月、信濃國川中島へ出陣した武田晴信が、大塚に本陣を置いて犀川を挟み越後國の長尾景虎と対峙したが、膠着状態になつて滯陣が長引き二進も三進も行かなくなつてしまい、義元に調停を依頼してきたので、これを斡旋して両軍を撤退させた。弘治三年（一五五七）十一月には、信長が弟信行を誘殺して名実ともに織田家の統領の座を安泰にした。

永祿元年（一五五八）八月に義元は三河國御油宿（豊

◎今川氏略系譜



誠忠の茶園（四）

太田精一

七、剣を鍔に代えて

（二）帰農の決意

中條景昭、大草高重の率いる新番組の隊士三百人が、駿府に移り住んだ明治二年の春、予期しない出来事が起きた。

新政府の中心となっていた薩摩、長州、土佐、肥前の四藩の藩主が支配する領地と農民を天皇に返還すると申し出たのだ。

他の藩も相次いで追随した。版籍奉還が行われ、各藩の領地と農民は、天皇のものとなつたのである。徳川家達もそれにならない、駿府藩から静岡藩へと藩名を変え、藩主ではなく、知事となつた。静岡の藩名は、土地柄が四季を通して、温暖で静かであるというところからつけられたという。

軍事と徵税の権限は、まだ各藩に残されていたので、

帰農するということになれば、安心するに違いない。今は、新政府を刺激しないほうがいいからね。ところで、どこかいい土地の当てもあるのかね』
勝が、景昭に訪ねた。

『実は、先日、精銳隊仲間の関口さんが、我々の身の振り方を心配して久能村を訪ねて來た。帰農は、関口さんも大賛成で、恰好の土地があるとのことです』

景昭は、高重や松岡萬など新番組の幹部を交えて関口隆吉と会合を持ったときのことを話した。

『ほうそれで関口さんは何と言つていた』

『関口さんは、大井川の右岸から御前崎にかけて広がる牧之原台地は、広大な原野で、徳川家の所有地であるから藩庁にお願いすれば、下げ渡して貰えるのではないかと申していました』

『中條さん、大草さん、それはいい話ですな。徳川家にも、そんな土地があつたとは気付かなかつた。大久保さん、その土地を新番組の連中に与えたらどうでしょう。その他にも百姓をしたいという家臣たちがいれば、分け与えたらいい。そうすれば、この駿府に溢れている無祿の家臣たちの救済にもなる。また、新政府も徳川の家臣團が刀を鍔に変えたといえば、安心するに違いない。その安心料として、新政府から金を引き出しましょう』

『分かりました。徳川家の家臣たちの救済に役立つので勝は、大久保の同意を求めて熱心に語つた。』

徳川家の家臣たちにも知事から扶持米が支給された。だが、天領だけで四百万石あつた所領が七十万石に減つたのだから、多くの家臣を抱える徳川家にとって、扶持米の支給は、重い負担となつた。そのため藩から支給される扶持米は、五分の一にも満たなくなつたのである。新番組の隊士たちも家族の生活が成り立つ方策を考えなければならない。

隊長の中條景昭と副隊長の大草高重は、静岡藩の重役大久保一翁、勝海舟、山岡鉄舟たちに相談を持ちかけた。『我々は、家族を抱えて暮らしが立ち行かない。扶持米だけではどうにもならない。何とか隊士がまとまつて暮らせる方策はないかと話し合つた。その結果、帰農して、皆で土を耕そうということになりました』

景昭は、隊士たちの苦渋の決断を代弁し、勝に伝えた。『そうさな、それはいい考えだ。新番組の連中が何もないで久能山の麓にいる。それだけで新政府も警戒する。

あればよい。正式には上様の決済を仰がなければならぬので、藩庁に嘆願書を提出ください』

大久保、勝の内諾を得て、景昭、高重たちは、勇躍、久能村に帰つた。

牧之原は、徳川幕府の天領で金谷原といわれていた。大井川の右岸から御前崎にいたる広大な台地である。

東西八キロ、南北二十八キロに広がるこの台地は、標高三百メートルの金谷町の西北方から東南に向かつて少しづつ低くなり、駿河湾の海岸近くでは、百メートル足らずとなつてている。

小松や雑木が茂り、狐や狸の住む原野として放置されていた。このうちの千四百二十五町歩（千四百ヘクタール）が新番組へ正式に下げ渡されることになつたのである。

（二）開墾地視察

明治二年（一八六九）、旧暦六月初旬、中條景昭、大草高重、山岡鉄舟等は、関口隆吉の案内で、牧之原の視察を行つた。

島田から大井川を舟で渡り、谷口原から生い茂つた雑草や灌木を搔き分け、牧之原の台地を登る。梅雨明けの強い日差しが照りつけている。

汗を拭きながら一時間ほどして、頂上の台地に出た。突然眺望が開け、眼下には大井川がゆつたりと流れてい

る。

北東には、富士山が青空の中に屹立している。駿河湾を隔てて伊豆の山並みが浮かんで見えた。

「見事な眺めだ。ここに立つと世俗の憂さを忘れるような気がする」

感動した景昭が、思わず声を上げた。

「まったくその通りです。これを見たら、移住を拒む者も減るでしょう。ただ、土地を耕し収穫を得るまでには、時間がかかる。その間、どうやって食い繋いで行くかが問題です。藩庁に、その間の生活資金を支給頂くよう交渉しなければなりません」

高重は、足元の荒れ地を眺め、入植当初の隊士の生活を心配した。

すると山岡鉄舟が、すかさず答えた。

「拙者の承知しているところでは、新番組の牧之原開墾は、藩命によるものである。それ故、隊士には御手当金が支給されることになると思う。十分ではないが、何とか家族が当面暮らせるくらいの金は出るはずです」

鉄舟は、大久保一翁、勝海舟、平岡丹波などがすでに相談して、藩庁から御手当金を出すと決まっていることを明かした。

「ところで、この地には、どんな作物が適していると思いか。見るところ荒れ地で、薄の草むらの中に松や雑木が点在している」

の地で暮らせるなら、開墾の苦労も乗り越えられよう。それが、徳川宗家の御膝元でできるのだから贅沢は言うまい」

高重は、景昭が刀を鍔に代えてまで守り抜こうとする誠忠の志しに共鳴し、改めて結束を誓い合うのであった。

久能村に帰った景昭と高重は、松月院に新番組の組頭たちを集めた。

紋付袴に威儀を正した景昭は、中央に着座し、高重は、その横の須彌壇の前に座っている。景昭は、おもむろに口を開いた。

「今日お集まり願つたのは他でもない。かねてからご相談申し上げていた開墾地について、大草さん、山岡さん、関口さんと共に牧之原を視察してきた。大井川が眼下に流れ、北東には富士山を仰ぐ景勝の地である。荒れ地ではあるが、広大な未開墾の上地がある。徳川の所有地で、その一部を新番組の我々に、お下げ渡し下さることになった。そこで百姓をやろうと思う。皆が力を合わせれば、荒れ地も緑野に変えることができる。牧之原に移つて刀を鍔に代え、かの地に骨を埋める覚悟で、励もうではないか」

景昭の言葉を補足し、高重が言つた。

「牧之原の開墾に従事する者は、静岡藩士の身分で、開墾方という役職になる。したがつて藩から手当が支給さ

が、景昭に聞いかけた。

「そうさな。ソバか、さつまいも位しか育たないかもしれない。水田は無理で、陸稲にしても米作りは難しかろう」

景昭の答えを聞きながら、高重は、雑草の生い茂る中に隠れた土を掴んで、言つた。

「二百人の隊士が家族を抱えて生きて行くためには、金になるものを作らねばならない。それをこれから皆で考えなければならないませんな」

すると鉄舟が、景昭、高重、隆吉を見て語つた。

「牧之原開墾は、藩命であるとはいえ、武士としての本来の仕事ではない。それ故、必ずしも従う必要はない。だが、これだけの広大な土地を開墾するには、多人数で一致協力しなければ、成し遂げられない。その点、中條さん、大草さんのいる新番組は、精銳隊以来結束が固い。それに隊士全員が、徳川家の行く末を案じて自立の道を講じようとしている。見上げた心構えだ。世間は、この開墾の成否を注目しているので、おそらく他藩でも真似する者が出てくるであろう」

「どんな作物を作るにせよ、この景勝の地で新番組の隊士が離散せずに、徳川宗家の盾となる事ができるのは良いことだ。そう思わんか。大草さん」

景昭は、高重に同意を求めた。

「これまで苦楽を共にしてきた新番組の面々と一緒にこ

れれる。百姓をするといつても身分まで百姓となるわけではない」

「それでは、藩は、われわれを見放したわけではなく、藩士のままで、領内の石高を上げるために新田開発を直接家臣にさせるとということですか」

隊士の質問に景昭は答えた。

「まあそんなところだ。ただ、見て来たところ台地になつていて、水を貯え、水田にするのは相当難しい。したがつてまずは畑作を中心と考えざるを得ない」

ついで高重が、入植希望の有無について言及した。

「これは君命であつても、強制ではない。家族ともよく相談の上、牧之原に移り住む者は明夕刻までに申し出られたい」

翌日までに新番組隊士のほとんどが牧之原への移住を決意したのである。武士の身分のまま金谷開墾方として、入植できることが魅力であったに違いない。

乏しい家財道具を積んだ大八車の行列が続く。その車を引く者、後を押す者、いずれも武家風の男たちである。周りには砂埃が立っている。月は、一本差したままで、

つづらや風呂敷包みを背負つた者も少なくない。

沿道の住民は、この異様な風体の一団を好奇の眼差しで眺めている。

昼時に、島田の宿に入った。そこで昼食を済まし、南へと進んで、大井川の堤に出た。対岸には、赤茶けた崖が広がっている。その崖の上にわずかに松や灌木の点在する台地が見える。

「あの対岸に小高く盛り上がつて見えるところが牧之原だ」

一行の誰かが、西に傾いた太陽の下で光つて見える場所を指差した。

「なるほど、台地になつてゐる。あれが“終の棲家”となる牧之原か」

新番組の面々は、お互いに顔を見合わせ、迫り来る苦難を乗り越えようと互いに誓い合うのであつた。

久能村を発つてからすでに十時間になる。炎天下八里ほどの道のりを歩いてきた。大井川の河原石も焼けつくよう暑い。

島田宿の旅籠屋の主人、清水栄藏他十数名の町民たちが、出迎えに出て、道案内と渡船の手配を行つた。

対岸を渡り、生い茂る雑草と灌木をかき分けながら山道を登る。すると突然眺望が開けてきた。牧之原台地の平坦な頂である。夕日を受け、大井川がキラキラ光つていた。夕闇も迫り、一行は、付近の寺社に分宿した。景

昭は種月院、高重は、医王寺の本堂にそれぞれ宿を取つた。

翌朝、景昭の呼びかけに応じて、牧之原で眺望の最も優れた谷口原台地へ全員が集合した。

日の出を遙拝する。これから直面する苦難の道を乗り越え、開墾に専念することを互いに誓い合うのであつた。

現在、その地には、中條景昭を顕彰する立像が立つてゐる。

牧之原入植と同時に新番組は、解散された。

新たに静岡藩から金谷開墾方という名称が与えられ、静岡藩の一組織となつた。開墾方の収入は、大幅に減少したが、旗本当時の禄高に応じた手当で支給されることになったのである。

開墾地は、おおよそ千四百二十五町歩（千四百ヘクタール）で、これを地区ごとに十一組に分け与えられた。開墾方頭の中條景昭は、加藤光正、成瀬春久、などと共に総勢十五名で谷口原に入植した。

一方、頭並の大草高重は、和田勝重、小島勝直、石井兼正らと共に総勢十六名で、岡田原に入った。その他、六本松、大沢原、庄内原、沢水加原、牛渕原などにもそれぞれ入植した。いずれも家族を久能村に残したままの単身赴任である。

景昭の割当の土地は、七十五町歩（七十四ヘクタール）、

畑を作つていたのである。

高重は、この池を「大草の池」と名付け開墾地の水不足を解決しようとした。

ところが、地元の百姓にとつては、いきなり入植してきた開墾方の武士に大切な水源を奪われるのは、死活問題である。

この土地は、もともと徳川家のものである。その中にある池だから、所有権は徳川家にある。大草家がその払い下げを受けたのだから、所有権は大草家に移転したことになる。

これまで通り水が使えなくなることを怖れた百姓たちは、大草家に嘆願した。高重も地元民との融和を図るために、百姓たちの利用を従来どおり認めることにした。だが、その呼び名は「大草の池」で押し通した。

家族を呼び寄せるため、高重は、居住に適した土地をあちこち探し回った。すると医王寺の境内からすこし離れたところに「いぬが沢」といわれる沢があつた。この地は、蛇の生息地として、地元の百姓たちも近づかなかつたところである。だが、生活に必要な水と強い西風を防ぐのに適当な林があつた。

高重は、この地を岡田原入植の本拠地と定め、家を建てることにした。

静岡藩の開墾方の役人の身分である高重は、百姓たちを日雇いとして出役させ、普請を急いだ。共に入植した

和田家、石井家、小島家の普請も同時に行われ、こうして久能村にいる家族を呼び寄せる準備が着々と整えられたのである。

八、茶園の形成

(二) 地元民との軋轢

牧之原に大挙してやつてきた武士たちを見て、地元民は驚いた。しかも百姓をするというのである。

もともと幕府の直轄地であった土地なので、異を唱えることはできない。

だが、これまで「林場」として使っていた入会地までいきなり静岡藩に取り込まれてしまつたのである。百姓たちは、危機感を抱いた。

せめて林場だけでも、確保したいと考えた。

入植して間もないある日、高重は、岡田原の庚申塚の黒松の上から見える範囲の原野を岡田原入植組の土地とした。その目印に赤い布切れをつけた竹竿をその土地の間に立てた。

ところが、その竹竿を地元の百姓の何者かが抜き去つてしまつたのである。

岡田原の開墾方の武士たちは激怒した。

高重は、中根正種、加藤則元、近藤正守の三人を現地に派遣した。徳川家の家臣に、与えられた土地を踏み荒らすことは許せなかつたのである。

三人が現地に着くと、暗闇の中に三十人余りの百姓たちがたむろしていた。

「おい、そこの者たち何をしているか」

中根が、白刃を振りかざし、大声で咎めた。突然、闇の中から抜刀した武士の姿を見た百姓たちは、震え上がり、慌てて逃げた。腰を抜かし、逃げ遅れた百姓が一人捕らえられた。中根は、周りの百姓たちに聞こえるよう

に大声を上げた。

「何故、我々の埋めた竹竿を引き抜いた。誰がやつたのか詮議のため、医王寺に連行する」

翌朝、坂部村五人の世話役の連署による嘆願書が届けられた。それには、

「坂部村は、ずっと以前からこの土地を林場として使っている。没収されても、肥料も作れない。特段の思し召しを頂きたい。また連行された若者一人を釈放願いたい」との要旨のことが、記されていた。

夕方、坂部村総代本間賢三と名乗る男が、医王寺の本堂に高重を訪ねて来た。

「坂部村の林場のことでの開墾方のお役人様に、お話を聞いて頂きたく、罷り越しました」

本間は、服部一徳に取次ぎを頼んだ。夕日が医王寺の本堂に影を落としている。

「通せ」

高重は、重い口調で言つた。

「本間賢三と申したな。面を上げい。ここに来るからには、相応の覚悟をして参つたであろう」

本間は、頭を上げた。前に、剣先に刺さつた饅頭が本間の面前に突きつけた。

高重は、久し振りに死を覚悟した武士の潔さを見る思いがした。爽やかな気持ちに突き動かされた高重は、本間の願いを聞き届ける気になつていてある。

牧之原一帯の原野は、徳川の士族に与えられ、林場として使っていた入会地も坂部村を除いて、すでに士族の手に帰している。

だが、坂部村の百姓たちは、本間賢三の指導のもとに士族から借地権を得ることができた。ただ、目廻り三寸以上、背丈以上の木を切つてはならないという条件がついていた。それ以外の雑木や下草は、これまで通り、刈り取つても良いことになつたのである。

(二) 茶の栽培に着目

牧之原に入植した開墾方の武士たちにも、当初どんな作物が適するのか分からなかつた。鍬を持つのが始めての連中ばかりで農業の知識に乏しい。

土地の百姓に訪ねても、的確な答えは得られなかつた。水利に恵まれず、瘦せたこの土地は、百姓たちからも半ば見捨てられていた。せいぜい大根かさつまいも位しかできないと思われていたのである。

そんな時、松岡萬が、牧之原にやつて來た。勝海舟から伝言を頼まれて來たのだ。

「勝さんは、牧之原には、茶の木を植えるといいのではないかと言つていた。あの人も牧之原のことはいろいろ

気にかけているようだ。だから一度話しに行つたらどうであろうか」

景昭と高重は、早速、松岡の案内で、服部一徳をともない静岡の勝宅を訪れた。当時、勝は、藩政を大久保一翁や山岡鉄舟にまかせて、静岡から三里ばかり北の山村にある白鳥家に身を寄せ、隠棲していた。

白鳥家は、庄屋でこの地方の山林を所有する豪族である。

勝は、一行の来訪に満面の笑みを浮かべ、離れの居間に案内した。

「やあ、よく来てくれた。まあおくつろぎください。牧之原で何を作るか。思案しかねていると松岡さんから聞いています」

「そうです。ソバ、麦、さつまいもの類であれば、何とか育つとは思いますが、多くの収穫は望めない。植林するにしても時間がかかりすぎ、当面の暮らしの助けにはならない」

高重は、苦しい胸の内を明かした。

しばらくして、勝は、おもむろに口を開いた。

「茶がいいと思う。茶は大井川奥の川根で昔から作っている。あそこでは百姓でも茶を飲んでいると聞く。同じ川筋の牧之原の土だ。合うかもしれないよ。それに茶は、これからも外国にどんどん売れる。長崎に行つた時に茶の輸出で大儲けをした大村の“おかげ”という女商人おんなあきなとに会

寄せ、久し振りで正月を家族揃つて迎えることができたのである。

茶は、種を蒔いて収穫するまでに、三、四年かかる。

景昭と高重は、その間の資金について話し合つた。

茶の栽培は、地質が礫層で水はけの良いところに適する。根が腐らないからである。茶の木は、幹の何倍もの根を張り、その根は、石の間に上にしつかり入り込んでいる。根は、幹を切つても枯れず長い生命力を保つ。栽培も水田ほど難しくない。茶の木の間に野菜を作ることもできる。

勝は、茶についての栽培知識があつたわけではない。だが、換金作物として、茶が将来有望であることの先見性を持つていたのである。

また、松岡も静岡藩の治山、治水掛として農山村を视察して、産物にも詳しかつた。その上、後に静岡県知事となつた関口隆吉も父が、御前崎の佐倉村の出身であつたので、牧之原の地理にも詳しく、茶の栽培に適した土地ではないかと感じていたようである。

そうしたことから、勝は関口からもすでに話を聞いていたのかも知れない。いずれにせよ、茶の栽培は、科学的根拠にもとづいて行われたわけではなく、川根茶の例に鑑みて、何となく牧之原に適するのではないかという思いが、商業的見地

つたことがある。また、開港以来横浜では、生糸と茶でずいぶん儲けている商人もいるというじゃないか」

高重は、若い頃幕府への献上茶を運ぶ採茶使として、宇治に出張したことがあつたので、茶の栽培や製造について現地を観察し、ある程度の知識を持つていた。

「なるほど。茶は、他の作物と違つてすぐ金になる。それに、たしなみ深い人たちが喫する高尚な作物であるから、武士が作るにふさわしい。中條さん、茶を植えましょう」

景昭の横で聞いていた松岡が、すぐ賛意を示した。

「早速、川根に行つて茶の実を仕入れて来ましょ。茶の実は、この季節に採取しますから、百姓も持つていてはずです。春の種蒔きにはちょうど間に合う」

この頃、松岡は、静岡藩の治山、治水の仕事を担当していたので、川根にも知り合いができ、種の入手先についても目途がついていた。

景昭と高重は、栽培すべき作物が決まり、日の前の霧が晴れる思いがして、勝宅を辞した。

明治二年晚秋の風は、上気した高重の顔に心地よく感じた。

（これで、開墾地に植えるべきものも決まつた。家もだいぶできた。もう少しすれば家族も呼べる。何もかもが新しく始まるのだ）

高重は、一ヶ月後の明治二年十一月末には家族を呼び

からの発案と相まって、栽培に踏み切るに至つたのである。それが幸運にも牧之原の土壤に合つていたのである。

景昭と高重は、牧之原の開墾方全員を集めて、勝との会談の結果を報告し、一致協力して緑の茶園にすることを熱く説いた。

茶園を作ると決まつた後の二人の行動は早かつた。

まず、島田の町に住む坂本藤吉を牧之原に招請した。坂本は、茶の生産から製造に至るまで精通していて、栽培方法を開墾方藩士たちに懇切丁寧に教えた。また、宇治で修業したこともある煎茶、抹茶、玉露、薄茶などの製法にも詳しく、その加工方法についても教えている。春は近い。

種蒔きから苗木を育てるには人手がいる。明治三年の節分を過ぎる頃には、久能村から続々と家族が牧之原に移住して來た。

上野の戦いで敗れた後、彰義隊上は四散している。捕らえられた者、北越、会津、函館戦争に参加した者、江戸の町中に潜伏した者、さまざまである。

（三）彰義隊殘党の内紛

新番組の隊士が牧之原に開墾方として入植した頃、彰義隊生き残りの幕臣たちが静岡にやつて來た。しかし、役職も禄もない。

上野の戦いで敗れた後、彰義隊上は四散している。捕らえられた者、北越、会津、函館戦争に参加した者、江戸の町中に潜伏した者、さまざまである。

明治二年の大赦令によつて、こうした彰義隊生き残りの者たちも自由の身となつた。だが、頼るべき徳川家は、すでに江戸を引き払い、駿府に発つた後である。

旧彰義隊士の中に、古くから高重の友人である大谷内龍五郎幸重がいた。

彼は、下総八万石の土井大炊頭の家臣早川總右衛門の次男として生まれ、長じて千五百石の旗本大谷内家へ婿入りしている。神道無念流の達人として世に知られている。

三十四歳で彰義隊に参加し、九番隊長として、上野黒門口で両腕に傷を負つた。殊に右腕は重傷で、薩摩軍に捕らえた。高重とは同年輩で、古くからの友人である。

大谷内は、大赦令で釈放後、駿府へ行くことに決め、高重を頼ることにした。その話を聞きつけた旧彰義隊の隊士が、駿府移住を希望し、九十六人にもなつた。

大谷内は、隊長に選ばれ、駿府へ移動の途中、沼津の城から半里ばかり東の横田の番所で咎められた。彰義隊の残党の駿府入りは、好ましくないとされたのである。その後、何とか駿府入りが許されたものの、静岡藩では、彼らを邪魔者扱いにして一切援助はしなかつた。

「何故、徳川家からかくも冷たくされなければならぬのだ。徳川の滅亡を防ぐために命を張つて戦つてきた我々の忠節は、しよせん独りよがりのものでしかなかつたのか」

大谷内は、徳川家への忠誠心が、かえつて徳川家の存

藤以上に、赤貧洗うがごとき生活であつた。二人は、この生活苦から逃れようとして、沼津勤番組に密かに仕官を求めていた。

そのことが発覚したのである。

抜け駆けの獄官活動だとして隊士の不信を買つた。
明治二年十二月二十七日、大谷内は、上野岩太郎を呼んで詰問した。

「上野さん。我々は、血盟を誓った同志ではないか。何故、抜け駆けしてまで誓いを破ろうとしたのだ」

上野は、大谷内に両手をついて、家族の窮状を訴え、離脱の許可を求めた。

「拙者は、老母と家族を抱え、百姓屋の納屋に仮住いしています。藩からの扶持米もなく、江戸から持つてきました金目の物はすべて売り尽くしました。神社や寺の池の鯉や鰐などを夜陰にまぎれて獲り、なんとか糊口をしのいできました。だが、もういけません。一家心中を考えている時に、旗本時代の同輩が、手を回してくれてやつと見つけた仕官の口です。この機会を逃がしては、冬を越せません。隊規に背き、まことに申し訳ありませんが、どうぞお見逃しください」

上野は、悲痛な叫びを上げて畠にひれ伏した。

木枯しが吹き、すきま風が、大谷内の家の中にも流れ込んでくる。破れた障子から擦り切れた畠を這うように、その冷たい風が、彼の膝元を通り抜けた。

亡を危うくするものになつたことを感じ取つていた。

徳川家としても、新政府に反旗を翻した彰義隊の残党を保護することは、憚られた。新政府に徳川攻撃の口実を与えることになることを怖れたからである。

そのため、静岡藩としては、彰義隊の関係者とは係わり合いを持ちたくなかった。慶喜の恭順の意に服さなかつた家臣は、静岡藩士とは、認めるわけには行かなかつたのである。

百人近い旧隊士が家族を抱えて、困窮し悪事に走る者も少なくない。彰義隊生き残りの評判は、ますます悪くなるばかりであった。

そこで、大谷内は、厳しい隊規を制定した。その上で、結束を固めるために、各自勝手な行動をしない、との誓いを立てさせ、その証として連判状を作成した。その連判状を藩に示し、見返りに生活の保障を得ようとしたのである。

だが、連判状に血判を押し、隊規に従うと誓約しながら、違反する者が現れた。

斎藤金左衛門と上野岩太郎である。

斎藤は、六人家族で、妻と十六歳の長男（養子）を含め四人の子供を抱え、生活に困窮していた。歳は、五十に近い。

上野岩太郎は、老母、妻、弟、五歳の女子を抱え、斎

「分かつた。やむを得まい。血盟の誓いを破つてまでも仕官を求めるのは、よくよくのことには違いない。貴公のことは、他の隊士にも話をしよう」

「悉く存じます。誠に勝手ながら、他の隊士によしなにお伝えください」

上野が大谷内の仮住まいを辞し、暗闇の中を田圃道にさしかかった。その時、闇の中から人影が動いた。

「上野殿でござるな。血盟の誓いを破つたお主を生かしておくわけにはいかん」

「誰だ、待ち伏せしていたな」

「藤田寛三だ。裏切りは許さん」

「待て、拙者の話も聞いてくれ。今、隊長に脱隊のお許しを得てきたところだ」

「隊長が何と言おうと拙者は許せん。暮らし向きは、皆苦しいのだ」

藤田も抜け駆けをしたかった。だが、それは、武士の面目を捨てることもある。純真で一本気なこの若者は、己の心の弱さを断ち切るように、刀を抜いた。一閃した刀身は、上野の首を断ち切つていた。上野が、刀に手をかける暇もないほどの一瞬のできごとであつた。

藤田は、その足で同僚の吉沢力松を誘い、下徳村にある斎藤金左衛門のもとに走つた。斎藤は、謡の稽古から帰宅する途中であった。

「斎藤金左衛門殿であるな」

「左様、この夜更けに何用か」

「ただ今、上野岩太郎殿を成敗して來た。斎藤殿もお覺悟召され」

「はて、何のことであるか。拙者には、思い当たる節はない」

「血盟に背き、己だけ仕官をしようとした。許しがたい行為である」

抜刀した一人を前に斎藤も刀を抜いた。もはや話し合ひは、通じないと判断したのだ。にらみ合いが続いた。

斎藤の左方にいる吉沢が、切りかかった。斎藤はそのまま太刀を払い、切つ先を吉沢に向けた瞬間、右から藤田が、脇腹を狙つて太刀を振った。その刃先をかわそうとした一瞬の隙に、吉沢の太刀が斎藤の左肩に食い込んだ。

斎藤は、よろめきながら刀を青眼に戻そうとした。その時、藤田が、腹を突いた。

腹をえぐられた斎藤は、うめき声を上げて、その場に倒れ伏した。

翌日、藤田と吉沢は、斎藤と上野の首を風呂敷包みにくるみ、沼津郡役所に投げ入れ、行方をくらました。

この事件は、静岡藩を愕然とさせた。もはや彰義隊の残党を放置するわけには行かない。だからといって、今更、追放もできない。静岡藩は、扱いに苦慮したあげく、暮らしの立つ道を講ずることにした。

そこで、新番組の開墾方にならって、扶持を与え、牧

之原の開墾をさせる案が浮上した。体よく駿府の近くから追い払うこともできる。

こうして、旧彰義隊士の牧之原移住が決まった。しかし、誰が彼らを説得し、牧之原への移住を決意させるかが、大きな問題として残った。

武士としての誇りを捨てきれないでいる彼等に移住を決断させ、百姓をさせるには、さまざまな手段を講ずる必要があったのである。

それだけではない。

この殺傷事件は、旧彰義隊内部に大きな波紋を投げかけ、後に、中條景昭、大草高重の率いる開墾方の藩士を巻き込む大事件へと発展するのである。

(つづく)

走る不動産（その二）

三戸岡道夫

第五章 預貸金ノルマ

国友信彦が手続きした大願不動産への十二億の貸出は、本部へ申請書を出した翌々日には、オーケーの決裁が下りた。

その通知をファックスで受けたとき、国友は、

（ついに、やつたア！）

と内心歓喜の声をあげ、すぐに大願不動産の折原一夫へ電話を入れた。

（十二億円の貸出、オーケーになりましたよ。すぐ手続きをしますから銀行へ来てください）

（ありがとうございます。すぐ社長へ報告いたします。社長もさぞ喜ぶことでしょう）

（そのついでに、ビルの売買契約も銀行の応接室と一緒にやつたらどうですか。そうすれば手続が一度で済みますよ）

「そうさせてもらえば助かります。赤玉建物へもすぐ連絡します」

こうして翌日、天山銀行日比谷支店の応接室へ、大願不動産の社長の八溝周三と、担当の折原一夫、赤玉建物の社長の赤山玉太郎と、担当の小野川忠などの関係者が集合した。

そして天山銀行日比谷支店長が挨拶をした後、貸付係長と国友信彦の立ち会いのもとに、取引の手続きが開始された。お互いに慣れた事務なので、流れるように進んだ。

まず大願不動産が、天山銀行からの長期借入金の契約書に判を押すと、十二億円の金が大願不動産の当座預金へ入金された。

並行して六本木のビルの売買契約書に赤玉建物と大願不動産が判を押すと、その瞬間にビルの所有権が赤玉建物から大願不動産へ移ったわけであり、その代金として

十二億円の金が大願不動産から赤玉建物へと支払われた。もちろん、その金がいま天山銀行から大願不動産へ貸出された十二億円であることは言うまでもない。

つづいて大願不動産は購入したビルに抵当権を設定して、天山銀行へ担保に差し入れた。こうしてすべての手続は無事完了したのである。

売主、買主、銀行とも、職業柄慣れている手続とはいえ、取引完了までは緊張するものである。中でも特に緊張したのは、十二億円のビルの鑑定を十五億に水ましした、国友信彦、折原一夫、八溝社長の三人であった。その作業は極秘のうちに進めてきたから、ばれる心配はないとはいうものの、取引が終了するまでは全身が緊張するほど心配した。しかし、そんな気配いをさとられてはならない。三人は互いにそ知らぬふりをしつづけ、ついに無事取引完了に漕ぎつけたのである。

応接室の中はほっとした雰囲気になり、まず大願不動産の八溝社長が、

「ありがとうございました。これを機会に、よろしくお近づきのほどをお願いいたします」

と、赤玉建物の赤山社長へ礼をのべた。八溝社長は部下の折原一夫から、

（赤玉建物は良質の売り物のビルをたくさん持つてい

る）

ということを聞いていたから、この機会に友好関係を

る。一人の間には事前に無言の合意が出来上がっていたわけである。

一同が帰ると、席へ戻った国友信彦のところへ、渉外係の神川がやってきて、

「国友さん、ついに大きな預金を射止めましたね」

羨望の眼ざしで言つた。国友は、

「赤玉建物の社長はビルを売ると、その代金は使わないと、必ず全部、定期預金にする主義なんですよ。だから、ありがたいお客様なんです」

「これで国友さんは、もう、今年のノルマは達成してしまったんでしょう」

「しました。大達成です。今日、貸出金が十一億出で、同時に定期預金が十二億入りましたから、合計で二十四億円です。これまでにすでに六億円達成していますから、合計すると三十億円達成です。僕の今年のノルマは二十億円ですから、これで百五十パーント達成ということですね」

「うへつ、凄いですね。年度の途中ですでに百五十パーント達成だなんて…、これでは年度末になれば、絶対二百パーントは超しますね」

「超すかもしないな」

「僕から見たら気絶しそうな金額です」

いくら預金と貸出金の合計金額がノルマだとはい、神川には考えられない金額だった。

深めようとしたのである。

赤山社長の方も眼を細めて、

「いや、こちらこそお願ひいたします。大願不動産のような立派な会社に買つていただいて、六本木のビルも幸せです」

「赤山社長さんは、その他にもいいビルを沢山お持ちだとお聞きしましたが…」

「いや、いや、大したものは持つておりませんよ。八溝社長さんの方こそ、いいビルを山ほどお買い集めになつておられるとか…。またご縁があつたら、ぜひお買い上げ下さい」

そこへ再び天山銀行日比谷支店長が顔を出し、取引のお礼をのべて、解散となつた。

一同が応接室を出ようとするとき、国友は、

「ちよつと…」

と赤玉建物の小野川を呼びとめて、

「いつものように定期預金でいいですね」

と、赤玉建物が受取った十二億円の預金の交渉の再確認をした。小野川はそんなことは当然といった調子で、

「ああ、いいですよ」

といとも簡単に答え、国友の方も、

「いつもありがとうございます。では、預金証書を…」

と十二億円の定期預金証書を差し出した。預金証書はすでに作られていて、国友の手で用意されていたのであ

天山銀行のノルマは、かつては預金のノルマだけだったが、最近ではそれに貸出金が加わって、預金と貸出金の合計をノルマとする、

（預金貸金合計ノルマ）

になつていた。

かつての預金だけがノルマの時代は、預金だけを集めていればよかつた。貸出金はいくら増やしても、評価されなかつた。評価されないどころか、貸出金が増えても預金が増えないと、

「あいつは貸出ばかりやつて、預金を集めるのが下手だ」

と逆に批判された。しかし、金融自由化がはじまるところが一転して、貸出を増やすのも大事な仕事なのだ

と、いわれる資金運用の時代に入り、どこの銀行でも貸出競争が始り、預金ノルマのほかに、貸出ノルマも課せられるようになつたのである。そのノルマも、預金と貸出金が別でなく、預金と貸出金の合計でいくらになるという『預金貸金合計ノルマ』が出来たのである。

たとえばこれを国友信彦の例で言つてみれば、今年度の預資金合計ノルマは二十億であるが、その内訳については、預金で二十億円でもいいし、貸出金で二十億円でもいいのである。

また預金と貸出金が半分半分でもいいし、その割合はいくらでもいいのである。とにかくその合計が二十億を達成すれば、それでいいのである。

國友信彦は六本木のビルの成功でノルマが突破し、気持ちに余裕が出来たので、

「僕は今自分で目標はクリアしましたから、これからは神川さんの応援をしますよ」

「えつ……それは本当ですか。ありがとうございます」

神川には國友の姿が神様のように見えてきた。その視線を受けて國友は、

「それじゃ今夜は、その前祝いといきましょうか。い

い場所へ案内しますよ」

その夜の残業が終ると、國友と神川はそろって銀行を出て、闇の中へ消えた。

一方、その日、天山銀行日比谷支店から会社へ帰った大願不動産の八溝社長は上機嫌で、一緒に帰ってきた折原一夫を、

「まあ、コーヒーでも飲んでいけ」

と社長室のソファーアに座らせると、

「赤玉建物の社長は、こすっからい野郎だと聞いてい

たが、会つてみると、案外よさそうな奴じゃないか」

「ええ、見た目はそうですが……、中身はなかなかした

たか者で……」

でもあつた。

八溝社長と折原が入っていくと、

「あら、いらっしゃいませ、社長さん……」

顔なじみのママの案内で席についた。

「景気がいいじゃないか」

「おかげさまで……」

ここも不動産バブル景気でうるおつてているのである。

大勢の客が先を争うようにして、カラオケでがんがん歌っている。

「社長さんも何か新曲を聞かせてくださいな」

「そうだな、何にしようか……」

などと言って、ひょいとカラオケの舞台の方を見ると、ヒヨットコの手拭をかぶった若者が歌っていた。

「おい、なんだ、あれは……？」

折原一夫が見ると、それはいつかの夜、折原が天山銀行の國友信彦にやつたヒヨットコの手拭だった。ヒヨットコの若者の横に、國友の顔が見えた。

「天山銀行の國友さんが来ていますよ。こっちへ呼びましようか」

「うん、それがいい」

國友信彦とヒヨットコの若者がやつてくると、急に席がにぎやかになつた。國友は、八溝社長の前で深々と頭を下げて、

「本日はお取引き、ありがとうございました。このお

「まあ、いいや。奴さん、どんな物件を持っているのか、よく調べといてくれ。とにかく今日はよくやつてくれた。今夜は祝杯をあげるとしよう」

と八溝社長は折原一夫をねぎらつた。

こうしたところが、若い頃から独力で会社を築き上げてきた、八溝社長の使いのうまさだつた。人使いは荒いが、大仕事が一段落すると、間髪入れずねぎらつてくれる。苦労人なのである。もちろん部下はそれを当然にして働いているわけではないが、人間だからそうされば結構うれしく、したがつて次の仕事も、

「よし、やるぞ」

という気分になつてしまふのである。

夕方になると八溝社長と折原一夫の二人は、銀座の並木通りにある天ぶら屋で夕食をすませると、新橋のレジヤービルの中にあるカラオケスナック『ストリング』へ行つた。

このレジヤービルの名前は「タイガン23」といつて、大願不動産が持つてゐる二十三番目の賃貸ビルなのである。「タイガン」はもちろん『大願不動産』の大願である。ビルの中にはバー、カラオケスナック、レストラン、居酒屋などが、ひしめいて入つていて。

八溝社長が部下と軽く飲むときには、このレジヤービルで飲むことにしていた。それは同時にビルに入つてゐるテナントのバーやスナックの繁盛ぶりを視察するため

店『ストリング』は折原さんの紹介で、いつも使わせてもらつてゐます。こつちは、僕の同僚の神川君です」とヒヨットコの若者を紹介した。神川昇はヒヨットコの手拭をまるめて、ポケットに突っこみながら、

「神川と申します。よろしくお願ひいたします」

と、八溝社長と折原一夫に頭を下げた。

「さあ、さあ、どんどん飲んで歌つてください。今夜はほんとうに楽しい夜ですね」

八溝社長は、若い國友信彦や神川昇に一生懸命に氣をつかつていた。八溝社長は永い間、天山銀行と取引するのが念願だつたのである。都市銀行の中でも一流中の一流といわれる天山銀行と取引が出来れば、大願不動産のような成り上り企業には窓がつくからである。成り上り企業が社会的に信用をつける一番いい方法は、一流都市銀行と取引をすることである。

(天山銀行から金を借りてゐる)

と言えば、世間では、

「へーっ、大願不動産も大したものだ

と信用が高まり、どこの銀行でもスムーズに金を貸してくれる。

また、天山銀行のような優良銀行だと、いい会社とたくさん取引をしているから、その会社と知り合いになれることもある、商売上のプラスにもなる。そう思う

と八溝社長は、

(この天山銀行の若い二人は、大事にせねばならない)

と酒をすすめる手にも力がこもつた。

店の中は次第に客で溢れ、酒の酔いとカラオケで盛り上つてきただが、あまり騒々しいので、八溝社長が、

「だいぶ混んできましたな。もう一軒、場所を変えましょう」

と立ち上がったので、若い三人もそれにつづいて店を出た。

外に待たせておいた車に四人が乗りこむと、八溝社長は急に、

「国友さん、今度は私の家へご案内いたしましょう。すぐそこでですから、お時間はとらせません。いい酒も少しは揃えてありますから…」

それは『ストリング』を出るときから、すでに八溝社長が考えていた予定のようであった。国友信彦はあわてて、

「いや、社長さん、それは困ります。そんな迷惑をおかけしては…」

そう断わると、折原一夫が、

「いいんですよ。社長は自分の家を見せたいのですから…」

小声でそうささやいた。

ドアを開けて、中に入る。

広い玄関口のフロアは厚いガラス張りで、その底が水槽になっていた。そして国友たちの足の下で、巨大な金魚の群が泳いでいるのが、照明に浮き上つて見えた。

高く吹き抜けになった天井からは、大型のシャンデリアが垂れ下がり、二階へ伸びた曲線の階段には、まつ赤な絨緞が敷きつめられていた。

正面の重々しい木の扉をあけると広い応接室で、そこも中世ヨーロッパの王侯の部屋さながらに、飾り立てられていた。

邸の外部といわず内部といわずの、その成り金趣味に、國友はいつか見た古いフランス映画を思い出した。貧しい田舎出の娘が、華やかさに憧れて、花のパリへ出てく

る。娘はその美貌と肉体を武器に稼ぎまくり、次々に男をだまして富を手にする。そして有名人の住むパリの一派マンションに居を構え、金にあかして飾りたてて自慢する。そんな女の、華やかさの裏側の悲しさのようなものが、八溝社長の上に重なってきた。

そんな雰囲気は神川昇も感じたようで、小声で国友に、「ちょっと、ゲテモノ趣味ですね」とささやいた。国友はあわてて神川の腰のあたりをギュッとつねると、

(そんなこと声にして言つちやダメ…)

第六章 ビル倍増計画

車はネオンきらめく夜の東京の街をしばらく走ると、明治神宮の森に近い、高級住宅地の一角に停つた。

「着きました、さあ、どうぞ…」

八溝社長が先に立つて案内した。

その邸宅は、八溝社長が『家を見せたい』と自慢するだけあって、あつと驚く豪華さだった。一口に言えば、小宮殿といつてよかつた。

広い敷地はしやれた坪で取囲まれ、西洋庭園風によく刈りこまれた植木が、点々と置かれた夜行灯に照し出されていて。そしてその正面に、ヨーロッパの王宮を縮小したような、白亜の館が建っていた。

「これはすばらしいお家ですね」

国友が酔つた勢いでほめ言葉を吐くと、

「いえ、そうでもありませんがね。でも、近所からは八溝御殿なんて呼ばれているらしいんですよ。お恥ずかしいことで…、ワッハッハアーッ」

と八溝社長はうれしそうに笑い、

「それに、この土地が大変なしろものなんですよ」

「そうでしょう。こんな都心の超一等地、よく手に入りましたね」

「昔はさる宮家のものでしたが、うまく売りに出されましたね。でも競争相手が多かったので高くつきました」

八溝社長はすかさず、

「國友はすばらしいお家です」

と眼で合図した。そして、

(神川さんも、そのゲテモノ趣味に飛びこまなくては、大きな預金は取れませんよ)

と無言で神川に伝えたが、果して國友の意図が神川に通じたか、どうか、それはちょっとわからなかつた。

やがて八溝社長は派手な部屋着に着替えて、応接室に現れた。國友はすかさず、

「社長さん、すばらしいデザインですね」と如才なく嘆声を発すると、

「いや、この前の世界不動産会議でパリへ行つてきたとき、ちょっと買つてきたものです。ほんの寝巻き代りですよ」

そこへ若いお手伝いさんが、さまざま洋酒を次々と運んできた。

「家内はちょっと音楽会へ行つて留守にしておりますので、失礼します。なんとかいうヨーロッパの有名な歌手のリサイタルだといつていましたが、私にはよくわかりません。まあ、そんなことはどうでもいいですから、どんどん飲んでください。ほら、折原君、お好みをお聞きして、どんどんお注ぎして…」

「はい」

たちまち折原一夫はボーカルに変身した。

そんな高級酒を飲みながら、國友と神川は、応接室の不思議な壁を眺めていた。

それは一人が応接室へ入っていたときから気になつてゐたのだったが、広い壁に、おびただしい写真が貼つてあるのだった。

「どれも、ビルの写真ばかりだった。」

どの写真も一定の大きさに引きのばされて、パネル張りにされ、整然と間隔を置いて、壁いっぱいに貼られていた。その数はざつと数えただけでも、百枚は超えていた。

それは、まるで廣告代理店の会社の、廣告展示ホールの壁を見るようで、豪華な応接室の内部とはちょっとチグハグな感じだった。

（なんだろう、これは…？）

国友と神川は心地よく酔つた頭で、ぼんやり考えていた。

（どうしてビルの写真ばかりなんだろう？）

だが、よく見ると、どのビルにも『たいがん18』とか

『たいがん63』とかいう、数字の看板が見えるのである。

瞬間、国友の頭に稲妻のような予感が走つた。

「八溝社長さん、これは全部、八溝社長さんの大願不動産が所有しているビルの写真なんですね」

（よくぞ聞いてくれました）

と言わんばかりに尻下がつて、
「そうなんですよ。全部、わたしが持つてているビルな

国友信彦と神川昇はソファーから立ち上がり、壁の写真を一枚一枚見た。レジャービル、オフィスビル、マンション、ホテル、インテリジェントビルと、ビルの種類はさまざまあつたが、八溝社長が横に寄つて来て、

（このレジャービルはですね…）

とか、

（このオフィスビルはですね…）

と、一つ一つのビルの特色や、入手したいきつなどを、こと細かに説明しはじめた。どのビルにも、八溝社長の思い出がしみこんでいるのである。その説明を聞きながら、国友は、

（このビル全部を買うのに、どのくらい銀行から金を借りているのだろうか）

と銀行員らしい胸算用をしてみた。

一棟のビルを平均十億としてみても、百のビルでは一千億円である。写真でみると、けつこう大きいビルもあつたから、全部では三千億円以上にはなるのかもしれない。

（今日買った六本木のビルの写真も、まもなくこの壁に貼られるのだ）

そう国友が思つていると、突然、神川昇が八溝社長にむかつて、神川昇が八溝社長に

（社長さん、僕にもこのビルの写真群をふやすお手伝いをさせてください）

んです。だから、どのビルにも『たいがん』のネームと、順番の番号がつけてあるのです。私はビル買って増えるたびに、必ず写真にとつて、この壁に貼つておくのです

「凄い数ですね」

「かれこれ、百ぐらいはありますか。私ははやくビルの数を三百にするのが念願なんですよ」

「へーっ、三百ですか。凄い計画ですね。まさにビル倍増計画ではありませんか」

国友は、大願不動産はもつと小さな会社かと思つてたのに、百ものビルを持つてているとは驚いた。すると今度は八溝社長は神妙な顔で、

「私はね、朝会社へ出勤する前と、夜寝るとき、必ずこの壁の写真群に手を合せて、『はやくビルが三百になりますように』って、拌むのですよ」

「すると、この写真の壁は、八溝社長さんにとつては神棚というわけですね」

「そうなんです。神社です。大願神社なんですよ。私はビル倍増の大願の成就を願つて、会社の名前を大願不動という名前にしたのですから…」

（ああ、そうなんですか。ずいぶん変わった名前の会社だなあと思つていましたが、八溝社長さんの願いがこめられた名前なんですね）

国友は、八溝社長のビル経営意欲のすさまじさに圧倒された。

(この百のビルの写真のことは、あの二人の口を通じて、支店長の耳に入るだろう。ひょっとしたら、本部の重役たちの耳へも入るかもしれない。そうすれば、天山銀行との取引の親密さが一段と増していくのだ)

と八溝社長は期待感を高めた。百のビルを一百にするビル倍増計画には、金が必要だ。それに八溝社長は、(これから買うビルは、これまでのビルよりも、大型で高級なものを買いたい)

と思っていた。これまでのビルは、八溝社長が裸一貫からスタートして買い集めたものなので、質や規模を選んでいる余裕がなく、いわば玉石混淆の感があった。だから、今後増やすビルは、大型で質のよいものに揃えたのである。

幸い今は不動産ブームであるから、探せば、大型で質のいいビルはいくらでもある。しかし、その代わり、値段が高い。となると、キーポイントは資金調達力ということになる。

これまでの大頼不動産の取引銀行は、数は多いが、柱となる都市銀行がなかつた。その時々に借りられる銀行から借りて、その場をしのいできた。そのため取引銀行といえば、地方銀行にはじまつて、長期資金銀行、信用金庫、住専、それに形ばかり付き合ってくれている都市銀行、といったようなものだつた。

これから更に百棟ものビルを買おうとすれば、これま

八溝社長は大学を卒業すると、ある大手の電機メーカーへ就職した。今から三十年も前のことである。その会社は、学歴無用論を人事採用のトレードマークにしていた。八溝は『名もない大学』を卒業していたので、(この会社なら『名もない大学の卒業生』を『名のある大学の卒業生』と同じに扱つてくれるであろう)と期待した。しかし実際に会社に入つてみると、見ると聞くとでは大ちがいだつた。学歴無用論はまつ赤な嘘で、学歴尊重の典型的な会社だつた。

(こんな会社にいつまでいても、ろくなことはない)八溝青年には、度胸のよさと図々しさ、それに加えてねばっこい交渉力があり、さらにその上、商売の勘が鋭かつた。それに更に『名もない大学の卒業生』というコンプレックスが腹の底から、(なにくそ、一流大学の卒業などに負けてなるものか)と、鬪志となつて湧き上つてくるのだった。そのため八溝は業績を伸ばしていった。販売実績は数字によつて表示され、業績も数字によつて評価される。八溝青年はいつもそのトップを走つていた。そのため彼は不動産の仕事に満足していた。

でと同じ金額で済むはずはない。一つのビルが平均で二十億円としても、二千億円である。いや、そんな金額ではとても足らないであろう。三千億円、いや、ひょっとして四千億円、五千億をも覺悟しなくてはならないかもしない。

とすれば、これまでのような玉石混淆の銀行集團では、とてもやつていけないであろう。天山銀行のような一流都市銀行を柱にした取引銀行團を作つて、金を大量に借りていくシステムを作らなくてはならない。

(その糸口が天山銀行からの十二億円の借入れで、やつと出来たのだ。これもバブルのおかげだ。バブル様々だ…)

そう思うと、眼の前の壁に貼られたビルの写真が、八溝社長の頭の中でもみるみるうちに増殖し、壁いちめんが一挙に二百のビルの写真で埋つていく幻想にかられるのだった。

壁に貼られたビルの写真の一枚一枚に、八溝社長の思い出がしみついていた。どの一つをとつても、八溝社長の血と汗と涙とで、手に入れたものばかりだつた。たとえ小さなビル一つにしても、それを手に入れたいきさつや、苦労した思い出が、頭の中に鮮明に残つていた。

そうした意味で、この壁の写真群は、八溝社長の苦闘の歴史の圧縮図といつてよかつた。

しかし、やがて不満が八溝青年を追いかけてきた。それはいくら働いても、業績をあげても、給料にそれほど差がつかないからだつた。ボーナスに多少の差がつく程度だつた。

(大きな仕事をやつて、大きく儲けてやろう)

という野心に燃える八溝青年には、物足らなかつたのである。

(これでは、いつまでたつても金はたまらないし、大きな夢も実現できないな。同じ不動産業をやるのなら、自分でやればもつと儲かるはずだ。おれはサラリーマンに向くではない。独立して、自分でやろう)と決心したのである。

しかし、慎重な八溝青年はすぐ会社を退めるようなことはしなかつた。まず、その準備を始めたのである。

手はじめに八溝青年は、貯金しておいた給料に、不足分をローンで借りて、中古マンションの一室を買った。そしてそれを他人に貸した。すると給料のほかに、家賃が入つてくる。家賃はすぐローンの返済の方に消えてしまつても、(こんな小さなマンションの一室だつて、おれはオーナーなんだ)

という充実感が、若い八溝を夢中にさせた。この感動が、終生、八溝青年をビル経営へ狂奔させる原動力となつたといつていい。

(53)

毎月、家賃が入つてくる、ローンの返済分を差し引いても、なにがしかは残る。貸し家を持つということが、これほどの魅力のあるものだと、八溝は知らなかつた。

彼は自分の人生観が変わつたのを感じた。すると、

(はやく二つ目のマンションを買いたい)

という強烈な欲求が、八溝青年の中に突き上げるようになつてきました。

だから、生活費を切り詰めるのにも、張り合いが出て

きた。余った金を極力貯金し、それにまた次のローンを借りて、八溝青年は二軒目の中古マンションを買ったのである。

このように自分でマンションの世界へ入つていくと、わずかな頭金さえ払えばローンで買えるマンションがあることや、売れ残りのマンションをよく探せば、かなりダンピングして買えることなどもわかつてきた。

こうして夢中でマンションを買つていてうちに、いつしか貸しマンション室は五部屋ほどに増え、八溝青年は、(いまが独立する潮時だ…)

と決意すると、会社を退職し、大願不動産を設立して、自分が社長になつたのである。その時の八溝社長は、(どうせ貸しビル業をやるなら、貸しビルを百は持ちたい)

という、とてつもない大きい夢を持つたのである。夢は大きいほどいい。そこで八溝社長は、

(時こそ到れり)

とばかり眦を決して、ビルを買いまくつた。
やがて石油ショックによつてその不動産ブームも終つたが、ブームを夢中で泳ぎ切つた八溝社長がふと振り返つてみると、いつのまにか所有するビルの数は五十を超えていて、
(貸しビル目標、百棟)

という大願は、半分以上達成されていたのだつた。

(うん、自分ながらよくやつた)
(大願の目標は百なのだ)

強烈な経営意欲が八溝社長の中で火を吹きつづけていた。

だから昭和四十年代の不動産ブームが去つても、引きつづきいいビルがあれば積極的に買い集めた。

(どうか賃貸ビルが百になりますように)

と神様に大きな願をかけ、その大願が成成就するよう

にと『大願不動産』という会社名にしたのである。

(ビル業界の成功者になりたい…)

その夢を果たすために、八溝社長は文字通り寝食を忘れて働いた。ビルやマンションを、買って買って、買いまくり、その金を銀行から、借りて借りて、借りまくつた。

いつたん狙つたビルを、決して八溝社長は逃さなかつた。そして銀行から金を借りるときも、いつたん断わら

れても絶対あきらめず、そのため八溝社長は不動産業界では、『蝮の周三』と渾名されていた。しかしなんと言われようと、八溝社長は平氣だつた。

(ビル業界で有名になり、世間をあつと言わせてやるのだ)

そのために、八溝社長はできるだめ目立つビルを買つた。そして順番に『たいがん21』、『たいがん22』など、名前を番号をつけたのである。すると、

(八溝さん、また買いましたね!)

ビルの数が増えるたびに、そうした称賛の声が渦巻くのである。

そして、この八溝社長の『目立ちたがりや』、すなはち『目立つビルを買う』という作戦は、結果的に大きなプラスチなつた。というのは『目立つビル』は、だいた

すると第二の不動産ブームが、昭和六十年代にやつてきたのである。

ふたたび八溝社長は大願成就にむかつて馬車馬のように走り出し、いつのまにか所有するビルの数が百を超てしまつていたのである。その奮斗の記録が自宅の応接室の壁の写真なのであるが、その写真群を眺めていると、さらに八溝社長の意欲は高揚してきて、

(ビルの目標は二百だ!)

と、大願の目標が百から二百へと塗り変えられたのである。

(つづく)

秋山好古と習志野

—もう一つの郷土史—

山田嘉久

一 房総の歴史は「牧の歴史」
房総の歴史は、見方をえれば、古代から近世まで「牧の歴史」でもあつたといえる。

「延喜式」によれば房総三国（下総、上総、安房）の地には七馬牧と二牛牧が記され、毎年左、右馬寮への献上を始め、軍団や駿馬、伝馬用として各地に送られていた。平安時代にこの地を中心として起きた平将門の乱（九三九—九四〇年）や平忠常の乱（一〇二八年）もその戦闘力の背景には馬牧があつたと考えられる。

鎌倉時代から戦国時代にかけて軍馬供給の必要は更に増し、家康の江戸入府以降はその整備が完成された。江戸幕府は小金五牧、佐倉七牧、峯岡五牧を支配下に置くと共に、野馬の養成や訓練を業とした牧士制も導入された。

江戸時代の大和田原周辺（現船橋市習志野台から高根

で雨滴が玉座を濡らせたという。天皇よりあまりの大雨なので演習を見合せたらどうかとのお言葉もあつたが、指揮の篠原少将はなんのこれしきりと最後まで立派に演習を終了し大役を果たした。

天皇は、その時の篠原の見事な指揮振りを讃めて「篠原を見習うように（見習篠（志野）原）といわれたことから、以後、この地が「習志野原」と呼ばれたという有名な逸話が残っている。

同年五月十三日、勅令が発せられ、以後この地は「習志野原」と命名された。

以上の「習志野原命名のいきさつ」は現在、船橋市習志野町の一角にある「明治天皇駐蹕之地記念碑」に刻まれている。なお、表記文字は公爵山縣有朋の書によるとある。

この時期の陸軍はフランス軍事顧問團の指導を受けていた頃で、その影響が最も強い時代であった。将校の服装は紺のマンテル（フロックコートの短いもの）、近衛騎兵は青いマンテルで中央のみボタンがついているフランス式の服装であった。明治陸軍の創設に極めて重要な役割を果たしたのはフランス軍事顧問團であつたので、習志野原を演習地に選び、設置を計画したのは日本人ではなくフランス人であった可能性が大きい。

なおその後、天皇自ら習志野原その近辺を毎年春秋の二回、演習観閲のため訪れている。明治天皇の第一日目

台周辺の地域）もその例外ではなく、此處は幕府直轄の放牧場であり、広々とした牧が展開していた。

二 明治六年の天覧大演習

明治に入ると、明治六年四月二九日には、この地で明治天皇ご臨席の陸軍大演習が実施された。創立間もない日本陸軍にとっては、最初の本格的演習でもあつた。

この日午前六時、天皇は宮城を出て馬上にまたがり、近衛歩兵四大隊、騎兵一中隊を率い、行動すること一〇里。下総国千葉郡大和田に行幸し、ここで三日間にわたり演習を総監したのである。

参加した士卒およそ二千八百名、少将篠原国幹が隊長となり、大将西郷隆盛も本營に参画して左右にはべつた。演習中のため天皇の特別の行在所は設けず、天幕を張つて玉座をつくりその場所で露營をした。折りしもの豪雨

に昼食をとられた場所が旅店業「桜屋」を営む山口丈吉宅。その後も天皇はしばしば山口方をご利用になり、通算すると宿泊十回、昼食五回、小休憩二回に及ぶという。現在「明治天皇行在所跡」（現千葉銀行船橋支店前、県文化財）の碑が建つている。

また、その後の篠原については明治六年、西郷が征韓論に敗れて下野すると、彼自身も近衛長官の職をなげうつて鹿児島に帰り、明治七年に桐野利秋、村田新八らと共に私学校を設立、その監督となつた。当然、西南戦争では副司令格となつて重きをなしたが、吉次越の戦いで戦死した。享年四十歳。

このあたりの状況については司馬遼太郎が西南戦争を壮大に描いた長編「翔ぶがごとく」に詳しい。

三 騎兵第一旅団長としての秋山好古

それ以降、「習志野原」は日本陸軍の「演習メッカ」となつていく。

西南戦争が終わった翌年明治十一年には、この地で陸軍歩兵第一連隊（東京、連隊長乃木希典少佐）対陸軍歩兵第三連隊（佐倉、連隊長兒玉源太郎少佐）の実戦演習が行われている。結果は兒玉軍の圧勝で、この頃から兒玉の「戦上手」に対して乃木の「戦下手」の定評が確立したようだ。

明治二七、八年（一八九四、五）の日清戦争以降は次

第に歩兵よりも新設の騎兵が主力となつていった。

日本は日清戦争で勝利を収めたものの、その後の三國干渉によってロシアが遼東半島及び満州に勢力を拡張し、朝鮮半島にも軍事的圧力をかけてきたことにより、ロシアとの対決に備えた陸海軍拡充の気運が高まつてくる。

明治二八年（一八九五）十一月の第九議会で対露戦争に備えた軍備拡張計画が可決された。そして明治三年（一八九九）に騎兵第一、第二旅団の正式設置が決定され、習志野がその地に決まつたのである。

その編成が完了したのは明治三四年末であつたが、騎兵第一旅団隸下の騎兵第十三、十四連隊、第二旅団隸下の第十五、十六連隊に連隊旗が親授された。旅団司令部は四つ並んだ連隊の真ん中の南に位置していた。（現習志野市大久保）

そして日本とロシアの間に緊張が高まつた明治三六年（一九〇三）四月、前庭に満開の桜咲く、この司令部に着任したのが司馬遼太郎の名作「坂の上の雲」の主役の一、秋山好古少将（当時）であつた。翌年には、成田街道沿いの二宮村薬園台（現船橋市薬園台）の広い庭付きの一軒家に家族を呼んで居を構えた好古は、司令部までは毎日、愛馬にまたがつて通勤した。（現在、住居跡は洋服チェーン店コナカとなつていてる。）彼は日露戦争において、当時世界最強といわれたロシ

ア、コザック騎兵隊と互角に渡り合い、さらに凌ぎ、後年「日本騎兵の父」と謳われたが、彼の戦法はすべて習志野時代に培われたといわれる。

好古が詰めていた旅団司令部跡は現在、習志野郵便局となり、隣の八幡公園内には「習志野騎兵旅団司令部跡」の碑が建つていて、なお、隸下の騎兵第十三連隊跡には東邦大学、第十四連隊跡は日本大学となり、第二次大戦後の習志野がかつての「騎兵の町」から「文教の町」に様変わりしたことを見せていく。

なお第十三連隊跡（東邦大学キャンパス内）には「司馬遼太郎の碑文」がある。

「かつて存在せしものは 時代の価値観をこえて保存し記念すべきものである それが、文明というものである」とあります。

司馬遼太郎が亡くなつた平成八年に「騎兵第十三連隊会員志」が建てたものだという。

また昨年、NHK「坂の上の雲」ドラマ化を記念して、

薬師寺脇（習志野市大久保）に「秋山好古顕彰碑」が建立された。

四 日露戦争と好古

日露戦争における好古の活躍については、司馬の名作

「坂の上の雲」でありますことなく描き尽くされている。

明治三十七年（一九〇四）、日露戦争が勃発するや彼

は騎兵第一旅団長として、日本陸軍の精銳、習志野騎兵第十三、第十四連隊、千五百余騎兵を率いて五月五日、遼東半島南部の大連北方の塩太澳に上陸し、南下して金州、南山を攻めた。

注1 第一騎兵旅団は当初、第三（名古屋）、第四（大阪）、第五（広島）師団と共に第二軍（司令官奥保鞏大將）を編成していたが、遼陽会戦以降は第三軍（司令官乃木希典大將）に属した。

注2 習志野には好古指揮する騎兵第一旅団のほか騎兵第二旅団（第十五、十六連隊、旅団長閑院宮載仁親王）があつたが、渡溝も遅く戦場に到着したのは遼陽南山を攻めた。その報を受けた大本営參謀がゼロが一つ多いのではないかと云つた話が伝わつてゐる。なお乃木希典の長男勝典が戦死したのもこの戦いである。

好古は、ついで大連に進撃して、五月三十日同地を占領して、まず最初の任務を無事達成した。

大連占領後、第二軍は一転して遼陽を目指し北進し、六月二十五日には大石橋、當口を占領した。

遼陽会戦で敗退したロシア軍側は一〇月初旬、劣勢を挽回すべく各地で一斉に攻勢に出た。之に対する日本軍

注1 以降、秋山騎兵旅団は「秋山支隊」と呼ばれた。この陣容は秋山戦術の一つ。彼とウマの合った上司奥大將から特認してもらつたもので、これが上司乃木大將だつたら実現しなかつたであろう。

注2 拠点の一つであった首山堡の戦闘で橘周太（静岡歩兵三十四連隊）が戦死、後に海軍の廣瀬武夫と並んで陸軍の「軍神」と呼ばれた。しかし司馬はこれら「軍神物語」には全く触れていない。

は紗河で遭遇戦が行われた。歴戦の秋山支隊は主力の左翼で激戦して、この方面的ロシア軍を撃退した。

明けて明治三十八年、日本軍の最左翼に位置する秋山支隊が手薄とみたロシア軍が反撃を仕掛けたため、秋山軍は大苦戦に陥ったが、弘前第八師団の応援などもあり、かろうじて日本軍の勝利となつた。(黒溝台会戦)

日露戦争の最大の激戦であった奉天会戦(日本軍二十五万に対しロシア軍三十七万)では第二騎兵旅団も秋山支隊の中核となり、大房身の戦闘で敵精銳部隊を撃破した。さらに敵主力の側背を攻撃してその行動を大いに掣肘した。

会戦後、両旅団は味方主力の外側で敵騎兵軍の奇襲に備え、むしろそれまでの会戦より多くの犠牲者を出したが、勝利に貢献した。この戦中、有名となつた永沼挺身隊、長谷川挺身隊は騎兵十三、十四連隊の兵士によつて編成されていた。(永沼秀文中佐は満州事変時には騎兵第一旅団長(少将)となつてゐる。)

五 コザック騎兵隊に対する秋山戦術

ところで、好古は強敵コザック騎兵との戦闘では、極力、騎乗戦は避けたといふ。人馬ともに体格で劣る騎乗戦は日本軍にとつて不利なことを好古はとつくり見抜いていた。特に軍馬は明治以来、馬体改良を目論みながら遅々と進まず、日露戦争時でも「日本騎兵は馬らしいも

が、その冒頭、「騎兵の本質とは」といつてから、かたわらの窓ガラスを素手で割つた。騎兵は集団で敵の不意を働き、これを粉碎する。しくじれば全滅する。これが「騎兵の本質」だと学生たちを頓悟させた。

さらに司馬は言う。信長の偉いところは、この奇襲作戦を生涯二度と使わなかつたことである。奇襲はあくまで一度限り。それ以降の信長は常に敵に倍する味方を得てから戦いを仕向けていた。更に桶狭間の戦いで、信長が最も賞した者は、敵將今川義元の首を捕つた者ではなくて、義元の在り処の情報を齎した者であつたということ。この信長がと全く逆のことを行つた(やたらに奇襲をかけ、情報を軽んじた)のが昭和の陸軍だつたことまで触れている。

若い頃の好古は騎兵の研究のためフランスのサン・シール士官学校に留学したが、教官カルパンティエが「騎兵の天才はモンゴルのジンギスカン、プロシャのフレデリック大王、フランスのナポレオン、プロシャのモルトゲの四人に過ぎない」と云つたのに対しても、好古はこれに源義経、織田信長を加えるよう説得したといふ。

日露戦争従軍中の好古は葉園台(現船橋市)の留守宅宛に多くの便りを送つてゐることは孫の哲児氏が最近の「文芸春秋」で紹介している。

のに乗つてゐる」と西欧から軽蔑されていた。

そこで好古がとつた戦法は、騎兵本来の任務である情報収集では軍馬の機動力を活かすが、戦闘には騎兵といえども馬を降りて戦うことだつた。馬の代わりに機関銃をもつて敵に立ち向かつた。ここに「支隊」という機動部隊の意義があつた。事実、騎兵数ではコザック兵に劣つたが、機関銃数では相手を上回つた。日露戦争で最初に機関銃を使つたのは好古だといわれているが、乃木大将のよう機関銃を見たこともなく、機関銃音を聞いて「あれは何の音だ」と云つたという逸話がある。

好古は日清戦争のころから騎兵が火砲または機関銃を持つことを上申していたが、日露戦争勃発直前に旅団内に機関砲隊が設けられた。(輸入の繫駕式速射機関砲、戦後ようやく国産化されて三八式機関銃となつた。)

機関銃を持つてコザック騎馬隊に立ち向かつたという好古の戦法は、なにかしら戦国時代、織田信長が当時珍しかつた鉄砲をもつて、最強と謳われた武田騎馬軍団を打ち破つた「長篠の戦い」を連想させるが、果たして司馬は「街道を行く(濃尾參州記)」で秋山好古を登場させてゐる。

信長が桶狭間でやろうとした戦術は、近代戦術でいえば騎兵の集団運用による奇襲で、好古の戦術と共通のものだつたといふのである。

好古は日露戦争後、陸軍大学で講義したことがあつた

ど、「最後の武士」と謳われた好古にも、意外な家族思ひの一面を知ることができる。

六 好古の凱旋

日露戦争に勝利して、好古率いる第一旅団が習志野に凱旋したのは明治三十九年二月である。当時の新聞記事に「今回凱旋したるは騎兵第一旅団長秋山少将以下の精銳部隊で、一昨日午後二時、両国橋発列車にて習志野の本隊に帰着せり」(千葉毎日新聞明治三十九、二、十一)とある。

また、翌日の記事には「騎兵第十四連隊凱旋―連隊長騎兵大佐豊辺新作以下百名は一昨日午後二時四十分、品川発車にて凱旋したり。生憎の大雪なるも歓迎は相応に盛んにして愛國婦人会を見受けたり」(千葉毎日新聞)とあるので、先発組、後発組に分かれ凱旋したことになる。

(なお豊辺大佐は司馬の長編「峠」の主人公河合繼之助の従兄の子だが、繼之助のライバルで「米百俵」で有名な小林虎三郎の書生をして苦勞して、陸軍幼年学校に入つた。後に中将まで昇進した。)

新聞の同記事には「(彼等は)満州にて我中央軍より左翼にかけ始終ミシチエンコ騎兵大集団を悩ました」とも付け加えている。

また明治の千葉郡誌には「当時の津田沼町の町民はそ

の日午後七時を期し各自提灯を携え大久保にある騎兵旅団司令部前に集まり、万歳を三唱した後、雪降りしきる中行列して自宅に帰れり」との記述がある。

なお余談だが、それを記念して作られた「騎兵連隊除隊記念盃」は習志野P.R.のヒット商品となつたという。

七 陸軍騎兵実施学校長としての好古

習志野を有名にしたには二つの騎兵旅団の存在だつたが、今の船橋市に位置する陸軍騎兵学校も「騎兵の習志野」の構成員だつた。

騎兵学校ははじめ陸軍乗馬学校として創設され、ついで騎兵実施学校に変わり最後に騎兵学校となつた。明治二十一年（一八八八）東京麹町に開校したが、二十四年に目黒区上目黒に移転した。明治三十一年に騎兵実施学校となつた。

明治二十九年、好古は中佐で目黒村の陸軍乗馬学校（後に陸軍騎兵実施学校）の二代目校長になつた。そして明治三十三年、義和團事件で中国に出征するまで、その任にあつた。

その間、明治三十年には有名な「本邦騎兵用法論」を執筆し、「騎兵の秋山」の名を高めた。明治三十二年には「陸軍獸医学校長」も兼務している。（別表「好古年表」参照）

日露戦争後の大正五年、騎兵実施学校は習志野原（二

宮町）に移転し、翌六年、陸軍騎兵学校と改称した。

習志野に移つてからの陸軍騎兵学校では、大正七年に自動車、装甲車、戦車に関する研究に着手している。また同九年にはフランス製ルノー戦車が交付されたが、一方では騎兵学校で行われる習志野乗馬会は年々隆盛を極めたという。

昭和三年、オランダのアムステルダム、オリンピックには馬術に四人参加したが、全員が騎兵学校の教官であった。そして昭和七年、ロスオリンピックで教官西竹一中尉が金メダルをとつたのは有名である。映画「硫黄島からの手紙」で有名になつた栗林忠道中将もこの学校の卒業生で、その上、彼は二十代目の同校校長にもなつている。

この学校の卒業式には天皇陛下が必ず臨席した。天皇が臨席したのは東京帝国大学のほか、陸軍関係では陸軍士官学校と陸軍騎兵学校のみであつた。

また、我々昭和一ヶタ年代が少年時代に熱中した冒險小説「敵中横断三百里」（山中峰太郎著）の主人公建川美次は秋山校長の秘蔵つ子で「坂の上の雲」にも再三登場している。彼はこの当時、少尉か中尉の下級将校だったが、すでに有名人だったので児玉源太郎大将までが彼にサインを頂戴している場面を司馬は書いている。

ついでに建川は満州事変時には大本営の作戦部長（少将）に昇進し、シナ事変時には駐ソ大使までなつてている。

八 騎兵部隊から装甲部隊へ

騎兵部隊の日露戦争での活躍は騎兵の拡充と質的向上を図る契機となつた。

秋山戦術の通り機関銃、騎砲の制定、軍馬の改良が進められ、大正八年（一九一九）、には第十三、十五連隊に機関銃中隊が設置された。

しかし一方、機械化のため騎兵はもう時代遅れとか、大正一〇年（一九二二）のワシントン會議などの軍縮のため、大正期は旅団司令部に近い大久保の商店街を歩く軍人の姿がめつき減つたといわれた。

昭和に入つて満州事変が勃発する（昭和六年、一九三二）と情勢が変わつた。

昭和七年、第一騎兵旅団には機関銃隊、騎砲兵中隊、装甲自動車中隊が設置され、満州に進出した。

九 習志野捕虜収容所

日露戦争におけるロシア兵捕虜は合計七万九四五四人に上つたといわれる。

これらの捕虜は当初、大陸の仮設収容所に集められていたが、隨時日本に護送され長崎、松山、広島など二十ヶ所に分かれて収容された。明治三十七年三月十日、

仁川沖での緒戦で撃破されたロシア軍艦ワリヤーク号の負傷兵が松山に収容されたのが最初だった。

明治三十八年五月には習志野にも新しい収容所が完成された。その結果、同年十月には約一万五千名の捕虜がかつたから、それに倍する捕虜が収容されることになる。

しかも当時の日本は戦争直前に締結したハーベルト条約（捕虜、傷病者の取り扱い）を忠実に守ろうとしたので捕虜に対しては極めて寛大だった。（投降するロシア兵は「マツヤマ、マツヤマ」と叫んで率先して捕虜となろうとしたし、その松山駅では「祖国ロシアのために勇敢に戦ったみなさまへ。我々は心温かく迎えます。」とロシア語の看板が建てられたことは有名である）

習志野でも例外ではなく、近隣の学校から教員に引率されて見学に訪れる児童生徒も多く、一般市民も関心も高かつたという。特に捕虜の外出も比較的の自由だったのと、休日などは狭い街中にはロシア兵が目立っていたであろう。

この習志野捕虜収容所は第一次大戦後にも使われた。当然、捕虜はロシア兵からドイツ兵（ハンガリー兵、チエコ兵を含む）に変わった。

年号(西暦)	好古(真之、子規)太字 習志野関連	社会の動き
安政6(1859)	誕生	神奈川等3港開港
慶応2(1866)	松山藩校明教館で学ぶ	薩長同盟
〃4(1868)	武智愛山に習字稽古(子規1867、真之1868誕生)	明治新政府
明治8(1875)	大阪に出て小学校教員となる	樺太千島交換条約
〃9(1876)	大阪師範学校卒業	日朝修好条約調印
〃10(1877)	上京、陸軍士官学校入学	西南戦争
〃12(1879)	陸軍士官学校騎兵科卒業(子規、真之松山中入学)	琉球処分
〃16(1883)	陸軍大学校入学(子規、真之上京、共立学校入学)	新聞紙統制強化
〃18(1885)	〃卒業(〃江ノ島へ無銭旅行)	対清国天津条約
〃20(1887)	フランス留学	二葉亭四迷「浮雲」
〃24(1891)	帰国、騎兵第一大隊中隊長(真之、軍艦高千穂乗組)	大津事件
〃26(1893)	結婚(真之イギリス出張、子規東大中退)	海軍軍令部設置
〃27(1894)	日清戦争に騎兵第一大隊長として従軍	日清戦争始る
〃29(1896)	陸軍乗馬学校校長	進歩党結成
〃30(1897)	「本邦騎兵用法論」執筆(陸軍大佐)	尾崎紅葉「金色夜叉」
明治31(1898)	陸軍騎兵実施学校校長(乗馬学校を改称)	福建省不割譲条約
〃32(1899)	獸医学校長兼務	ハーベルト平和会議
〃33(1900)	義和團事件に伴い中国出征	義和團事件
〃34(1901)	清国駐屯軍司令官	第一次桂内閣
〃35(1902)	陸軍少将(子規、子規庵で没)	日英同盟締結
〃36(1903)	帰国、騎兵第一旅団長、ロシア旅順視察	東郷連合艦隊長官に
〃37(1904)	日露戦争に動員、遼陽会戦、沙河会戦に参加	日露戦争
〃38(1905)	秋山支隊を率いて黒溝台、奉天会戦に参加	ポーツマス条約調印
大正2(1913)	第十三師団長	山本権兵衛内閣
〃4(1915)	近衛師団長	対華二十一ヶ条要求
〃5(1916)	朝鮮駐劉軍司令官(陸軍大將)	夏目漱石没
〃7(1918)	(真之、小田原で没)	ニコライ2世処刑
〃9(1920)	陸軍教育総監	日本、国際連盟加盟
〃13(1924)	前年に予備役編入、松山北予中学校長となる	加藤高明内閣
昭和5(1930)	校長を辞任、東京で没する	ロンドン海軍軍縮会議

した。今、東習志野幼稚園前にはロシア捕虜収容所の碑が建つている。

習志野市(一部船橋市)の日露戦争関連施設

軍施設他	設立	その後ほか	現在
騎兵旅団司令部	明35		習志野郵便局
第一騎兵旅団	〃	昭17戦車第3師団	東邦大学
第二騎兵旅団	〃	昭16解散	日本大学
高津厩舎	明29		市営住宅
陸軍騎兵学校	大5		陸上自衛隊
捕虜収容所	明38		東習志野幼稚園
明治天皇行在所		(船橋市)	千葉銀行(船橋)
習志野原命名碑	大6	(船橋市習志野町)	自衛隊正面前
日露戦争戦没者	大6	〃	東斬寺
秋山好古社宅	明37	(船橋市葉園台)	コナカ店
司馬遼太郎碑文	平8	(騎兵第13連隊跡)	東邦大学
秋山好古顕彰碑	平21	(大久保商店街内)	薬師寺

短歌三十首

母校

企てし凡そ終はりて冬ぬくしあかねの果にいわし雲浮く
地獄へはまだ遠いぞと石蕗の花いく曲がりせる駅舎の径に
天心の月べうべうと冴え返り孤をなぐさめてちぢろ聴くなり
浅葱いろの翅ふるはせてマダラ蝶わたつみ高く外つ国目指す
伝へ聞くのみにあれども信じ難きアサギマダラの長征の旅
外敵より逃れて千里海越ゆる蝶にいかなる楽土ありなむ

ひかがみ
臘をのばして行進する兵列どこかの国もかつて然りき

いまは早や「成功高級中学」となりし台北二中わが母校なり
北二中の同じクラスに学びたる呉建堂君逝きしは師走

よくぞまあ歌作続ける台湾の歌壇の人らにエール送らむ

(注) 成功高級中学：成功は鄭成功から来ている。

呉建堂：『台灣万葉集』の編者。筆名「孤蓬万里」。

曾根竣作

逆流するか

木の葉散るとき秀麗に晴れわたり異郷の定住やむなしとしよう

懷郷の思ひはうすれ校庭の緋寒ざくらもはるけき景か

八十路過ぎし日向にふつと憶ひ出づ教官H少尉のその後

応援旗風にさからひへんぽんとはためく時ぞ少年老いつ

とりすがる杭の無ければ黄蓮(きはちす)のあした開きし池畔にあそぶ

墓辺たる栗の大樹のさわ立ちて手桶の水にわくら葉散らす

銃器庫の隅にタバコをもてあそび父兄召喚されし十六歳(じふろくさい)

帰らんと急ぐ足許吹き抜けて都市(まち)の芥が追ひ越してゆく

肩触れし東京駅の青年は逆流するかざつたふの果て

西陽さす古書店の棚初版なる へたそがれ清兵衛(ちんまりと) ちんまりと座す

ベルリンの壁

羽博くを止めて気流に乗れる鳶くつたくもなく冬自在なり

冬庭にふてぶてしくも花梨実りたり口に入るを頑と拒みて

鵠沼もいくらか限界集落に近づくごときシャッター街往く

ベルリンの壁こぼたれて二十年東独になほ格差きは立つ

若者の流出つづく元東独の辺境の地に寒波すさびて

「心の壁」永久につづくか元東独の青年職なくうらぶれて冬

銀色のケースより抓る 〈ゲルベゾルテ〉 紫煙くゆらせし父羨しみき(とも)

「マッチ擦るつかのま海に・」を名歌とすおそらく喫煙シーンであらう

いまさらにやめても遅いと主治医言ふ彼は飲み助タバコをやらぬ

煙草火の影近づきて夕ぎりに対岸模糊とかすみてゐたり

(注) 「マッチ擦るつかのま海に・」は寺山修司作、

このあと「霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」と続く。

わが愛誦歌（十）

——昭和から平成へ——

曾根竣作

○次々に走り過ぎ行く自動車の運転する人々な前を向

く
『三齡幼虫』（昭・54）所収。この歌は、果してわが愛

誦歌に入れるべきかどうか迷つたが、不思議に記憶に残る作品である。当り前のことを詠んでいるが、現代短歌の一つの領域として「ただごと歌」を認知せしめたのは、

作者である。「に」「の」「を」の三つの助詞によつて運ばれるリズムの力が、この一首に韻律誌としてのエネルギーをもたらしているのである。

また次のような歌もある。〈船虫の足が一齊に動きて船虫のからだを運ぶ〉へ不思議なり千の音符のたゞ一つ彈きしがへてもへんな音がすなど、凝視の力と明快な疑問が、わたしたちの一般的な世界認識をゆさぶる。

人とは違う異常な生活の中に生き、そこに生まれる極

めて特殊な事柄や感情をうたうのが、ある時代までの短歌であった。たしかにそのやり方のほうが、個性的である。また目立ちやすい。奥村晃作が発見したのはそれとちがつていた。それは平凡なる日常の中のごくごく平凡な事柄でも、堂々とうたい上げれば歌になるというこ

とであった。

奥村の第一歌集『三齡幼虫』は、そうは言つてもまだ凡庸主義に徹しきれてはいない。非凡から凡庸へと移つてゆく橋の上に立つてゐるような痛快な本である。

それが、『鵠色の足』『ビシリと決まる』と進むに従つて、いよいよ「ただごと歌」の論を展開しつつ、平行して初期からのただごとの作風を意欲的に推し進めて來た。

〈ボールペンはミツビシがよくミツビシのボールペン買

いに文具店に行く》〈最前線に出された者が分けもなく

殺し合うのが戦争である〉〈結局は一人ぼっちのボクだから顔ぶら下げてそのままに行け〉へ一晩に十万人をギヤクサツせし三月十日の米のクーパク〉

○愛された記憶より愛したる記憶多しさびしくもあるか
冬に入る日よ

馬場あき子

『飛天の道』(平・12) 所収。永らく朝日歌壇の選書を、佐々木幸綱、高野公彦らと共に勤めて来られ、現代女流の大御所にして“かりん”とふ結社を経営され幾多の女流の若手を育てて居られる。

馬場あき子の歌には、広い意味のヒューマニズムがある。人生への応援歌として読むことも時に可能だ。掲出歌、5・11・6・8・7・の可成りの破調であるが、一読してそれ程気にならない。

歌としては、結句の「冬に入る日よ」だけで括った述志の氣持を言い表しているが、これも或る意味で応援歌の匂いが強い。

○迷いなどなき生などはなしわがまなこ衰うる日の声
凛とせよ
なども、自分への励ましと同時に同世代へのエールであろう。また男への呼びかけがあちこちに出て来て楽しめる。

○水ぎははいかなるものぞ小次郎も武藏にやぶれたり

は内省的深みをかもし出している。

むさむざと過ぎた青春を惜しみわびしむ思いは、その端正さの中に強くひびく。作者は、文語調を主とする伝統派であり、歌の様式調べを何より重んじている。一方で同じ「未来」の岡井隆の影響を強く受け、現代的な修辞に巧みである。

昨年の秋だったか、大辻隆弘著の「アララギ脊梁」と言う本が出版され、早速買って読んでみた。当初は、その経歴から考えてアララギ礼賛の本かと思っていたが、さに非ずアンティ・アララギさえ感じさせる極めて行間の濃い、面白い内容であった。特に、終りに近く斎藤史、山中智恵子、葛原妙子などなどの歌の解説の仕方は見るべきものがあった。

〈やがてわが街をぬらさむ夜の雨を受話器の底の声は告げある〉〈星合といふバス停にバスを待つぼくたち、夏の風をみつめて〉〈朝庭に空き瓶を積むひびきして陽さし触れあふごときその音〉〈あけがたは耳さむく聴く雨だれのボル・ボトイふ名を持つをとこ〉〈緑さむくかがやく壺ゆひとすぢの乳はよぢれつつ注がれてゐつ〉なお、平成14年刊の『デブス』には、〈紐育空爆之図の杜快よ、われらかく長くながく待ちゐき〉〈突つ込んでゆくとき声に神の名を呼びしか呼びて神は見えしか〉の二首があり、米国に対する或る種の偏見が分らないでないが、國家、宗教、テロといった問題に、果敢に個

し水ぎは

というのも水際にやられて負けてしまった者の武芸者に寄せる思ひから現在の普邊を言い当てている。

作者は、今まで歌集『桜花伝承』『阿父古』『飛種』など数限りなく出しているが、評論も多数出版している。

また、鬼の研究、能楽の研究では玄人すぢに入る勢いあり、現代短歌に古典や歴史との新しい通路を拓き、女性歌人という枠を超えて現代短歌史の一水脈を作れる。王朝和歌、女歌の文体を核に、歴史と個人の情念を結んで陰影深い大作を数多く制作する。

△万羽いる出水の鶴の静寂のゆるぎもあらず夜深みたり
△みなごろしに勝ちたる盤上に笑ひ湧けば國中のさくら散るけはひする△名停とふりアリズムあり鈍行といふシニシズムあり鈍行でゆく△火の文化衰へて殺戮の火を生めりしづかに懐れゆく大地の音す△

○疾風にみどりみだるれ若き日はやすらかに過ぐ思ひる
しより

『水廊』(平・元) 所収。第一歌集『水廊』のなかの作者二十八歳のときの作品である。まだ若いのであるが、

はるかに遠去かつたように「若き日」が回想されている。
「疾風にみどりみだるれ」は情景としては鮮烈で、生動感があるが、韻律を先立てた言葉の流れによって、むしろ静謐な印象を与える。下句の斡旋によつて、この一首

の感情を重ねて贊否両論を呼んだ

○中庭に薔薇を育てて来し光ゆるやかに薔薇の枝を曲げたり

香川ヒサ

『パン』(平・11) 所収。バラは育つのでなく育てられたのだ。この発想の転換によつてこの歌は始まっている。

光に、雨に、大地に、存在するということは様々に気づかぬうちに付き添われてあるというのである。この歌には自然の営みへの知的な物思いがあり、透明な視線がある。

香川ヒサは、理知的な好奇心によつて私達の意識の死角に宿る思いがけない詩を発見してきた歌人だ。

○神はしも人を創りき神をしも創りしをいふ人を創りき
人はしも神を創りき人をしも創りしといふ神を創りき
この二首を見てみよう。神が先か人が先か、神と人と
の摩訶不思議な関係を鋭く言いつてて。一見軽い言葉遊びのように見えながらその奥に深い人間洞察を秘めている。ここには神を創り出さずにはいられなかつた人類の寂しさへの問いかけがある。軽やかに言葉の表層を撫でると見せかけて、今日の人類が宿すさまざま矛盾や問題を提起し極めて知的である。

△飛行士の足形つけてかがやける月へはろばる尾花をささぐ△人あまた乗り合ふタベエレヴエーター舟日の中
に鬱の字ほどに△白き雲鯨と思へば鯨にて鰐と思へば

鰐なるが浮く／魔女狩りで火あぶりにされた人たちを
魔女だつたと信じてあげよう

最後の「魔女」の歌は、中世のヨーロッパに於ける宗教に関する魔女裁判を思い出すが、果して魔女などと言ふものが実在したのだろうか。ジャンヌ・ダーケをはじめ、採り上げたらキリがない程であるが、これはパラドックスの歌、一応魔女であつたことを信じてあげようと言む。反面魔女ではなかつたかも知れないと言う所。

（ローマ軍に敗れて街は始まつた　いづれ歴史は戦後の歴史）。

○叙事がそのまま述志であり鼓舞である明治軍歌は日本晴れなり

『農鳥』（平・14）所収。人間の歴史のなかで、「眞に偉大であった」者、絶対の英雄などいるのか。否だ。どんな英雄も人知れず弱さを抱え、それぞれの生を必死に生きたまでの事。時間と歴史はそれを平然と飲み込んでゆく。

事を叙べることが述志であり、又鼓舞であつた明治の一時期、司馬遼太郎の「坂の上の雲」を想起する。結句の「日本晴れなり」は、列強に伍しつつも殆んど恐いもの知らずで歩んで来た当時をよみがへらせる。

三枝昂之は初期から観念性の強い清冽な抒情質を個性にしていた。例えば、（ひとり識る春のさきぶれ銅より

あかるくさむく降る杉の雨）などは初期の作者を代表する一首であろう。

三枝昂之は、福島泰樹と同じ様に学園闘争世代であり、その挫折の苦さと悔しみを内向する孤独な心情が一筋にうたわれて美しい。中年期に入る作者の目は日常に向かうが、ごくありふれた日常を歌う場合も、作者の文体は観念の清潔さをにじませる点では初期から一貫しているといえる。

（鳩舎もつ家の夕焼けどのように昏れてもいまだ戦後が匂ふ）眞に偉大であつた者なく三月の花西行を忘れつつ咲く／齢一つ加えて歩む春霞芽吹けばなべて身中の花／綠陰をゆきつつ想ふ父の夢繼がざるものはいまだあたらし／静かなる沖と思うに網打ちて海に光を生む男あり

三枝には、二歳年下の弟浩樹が居り、両者とも歌壇の中堅として活躍している。同じく「りとむ」に所属しているが、その詠風は似ており、清浄と苦悩が同居して居る。（少年も果実のように熟れていくうれて失う問をかかえて）朝のポストに手紙を入れる少女いて雪あたらしき今朝の連嶺）。

○落ちてゆく陽のしづかなるくれなゐを女と思ひ男とも思ふ

『讃歌』（昭・60）所収。スケールの大きい一首である。

みづうみ／しろがねの月を抱きて眠りこむ江津の湖面を何もて擲たむ／全天をひしと埋めていわし雲てんぐ大事けなげに秋深むかな／大寒に入りてゆく日の薄ひかり法然淡く親鸞辛し／厨刃に水を垂らしてゐる朝 胸冷えびえと今日をはじめよ。

参考文献

- 現代歌人二五〇人（牧羊社）
- 現代名歌鑑賞事典（桜楓社）
- 現代百人一首（朝日文芸文庫）
- 現代短歌の鑑賞事典（東京堂出版）
- 現代の短歌（講談社学術文庫）

落日の「くれなゐ」の美しさは、古代から現代まで、変わらず人々が讃嘆しつづけたものである。そして、どのよう見つめようともその美しさの謎は解けない。宇宙の根源の神秘が「しづかなるくれなゐ」の内に在ることを、奥行き深い平明な詠み方で表わしていると見るべきであろう。

そして、大和言葉だけでうたわれたこの一首にも、作者の親しんで来た漢籍による中国思想の影響がほのかに透けて見えるのを感じるのである。

安永路子は、結核の鬱病のため、三十半ばを越えてデビューしたが、最初から独自の作風を持つ、完成された歌人であった。豊かな漢籍と日本古典の教養に裏打ちされた流麗な作品は、塚本邦雄初めて多くの歌人に讃嘆された。

日本の風土、とりわけ生れ育った熊本の風の風上の中で、きびしくおのれを律して立ち向かう志の歌人と言えよう。なお、十二年間の長きに亘り熊本の教育委員を勤め、その半分は教育委員長として、地域に貢献している。も一つ表現のジャンルとして書の世界を持ち、歌と書との拮抗するエネルギーが創作の源となっている点も他の歌人にはない特質である。

（雪積みて深く撓みしりラの枝ああ祖国とふ遠国ありし）
（盛衰のなかなる哀のうつくしく岸に枯れゆくくれなるぞ葭）
（朝露の薄れゆくまま江津と呼ぶ冬麗母のごとく

短歌

行雲流水(二十七)

石黒修身

歌会始

今まさに歌会始を見終えたり静かなる昂揚身のうちに満つ

歌会は壯嚴の裡に進みたり古式の披講殿中に響く

詠進は二万首あまりと報ぜらる吾の一首を禁裏に届くと

来る年のお題は「葉」と決まりたり慎みて一首献じたきもの

源実朝

金槐集展^{ひら}きし余韻さめぬ間に実朝慕い歌たてまつる

鎌倉の実朝の遺跡^{あと}辿りたり金槐和歌集読みし後の日

寿福寺に実朝の墓詣でたり寒梅白く人影はなし

奥津城は実朝・政子と並びおり悲運偲ばる寿福寺の境^{にわ}

金槐の和歌集読めば悲運なる将軍^{わが}天^あき誌魂きらめく

故郷の冬を思えり 一夜明け雪を被りしこの街に居て

蟹の脚せせりて食めば故郷の東の涯はのオホーツク思う

一瓢の酒旨ければ残生はまだ捨て難く喜寿を迎えり

娘むすめが呉れし誕生祝の琥珀濃きモルト余市よしの「竹鶴」を酌む

「似てるかい」吾が遺伝子を孫たちの見かけ仕草に覗きて愉たのし

「坂の上一朶の白き雲」を追う夢は持ちなん若者たちよ

王朝和歌集とその周辺（一）

—源実朝と金槐和歌集—

石 黒 修 身

（一）はじめに

筆者は、かねてから実朝と金槐和歌集には漠然とした関心と興味を抱いていた。

それは、実朝が単に鎌倉三代将軍、そして新古今時代の王朝歌壇の影響を受けた歌人という、史的な捉え方のみではない。彼の鎌倉三代将軍としての短かい生涯にみる人物像と和歌の世界に歴入する背景、そしてその境遇から滲み出る絶唱とも言える和歌に寄せる関心であつた。

加えて、筆者が親炙し愛読していた現代の作家らが書いた“実朝論”的影響を受けたことは否めない。以下に可成り恣意的な組み立てではあるが、知り得たことに自説を交え項目に分け記述する。

鎌倉三代将軍実朝は、父頼朝の死、次いで二代将軍である兄頼家の廃嫡の後、十二才で将軍職に就いた。然し政事の実権は頼家の代から執権である北条家にあり、為政者としての機能は最初から期待されておらず、政治に係る余地は全くなかつた。

彼は将軍としての権威の象徴であれば良かつたのである。

実朝は兄頼家とは違い、聰明かつ温雅で、幕政の実権は北条の執権に委ね、京都朝廷との関係を重んじ、当時の藤原定家に代表される宫廷歌壇と交流し、和歌に打ち込み超然としていた。

源氏の正統を守ろうとする勢力と、執権政治を強化し朝廷から独立をはかるうとする、北条勢との権力争いが

交錯する中での将軍としての立場であつた。

承久元年正月の雪の夜、二十七才の実朝は、鶴岡八幡宮での右大臣就任式の帰途、兄頼家の子公暁の手により殺され、源氏の正統は絶えた。悲劇の背後には、権力争いの陰謀がめぐらされていたことは言うまでもない。

(三) 和歌との出会い

実朝がどのようにして和歌を詠み始めたか、まだれが手ほどきをしたかは明確でない。

しかし、彼は公家社会の頂点である、後鳥羽院の従姉妹に当る女性（坊門信清の女）を妻に迎えている。元久元年十三才の時であった。

また、関東武家の統帥という立場からも、和歌は備えるべき教養として求められていたものと思われる。

折しも京では「新古今和歌集」が撰出され、京都歌壇の盛大さは、新妻の周辺からも伝えられ、彼の作歌意欲をそそつたのであろう。

「吾妻鏡」には、元久二年四月十二日の条に、「將軍家十一首の和歌を詠ぜしめたまふ云々」とある。実朝十四才の時である。

また、父頼朝は和歌や連歌にも通じており、その和歌は「新古今集」以下の勅撰和歌集に十首選入されているほか、慈円の「拾玉集」等にも多数の歌が収められている

歌」と呼ばれる歌論書で、実朝はこれを言わば教科書として学び、その作歌活動に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

定家は更に万葉集を送るなどして実朝との交流を続けている。

公卿である定家と、将軍の実朝を師弟と呼ぶのは適切でないかも知れないが、定家は実朝に非凡の才を感じ、多大の好意をもつて対応したのだろう。一方公卿として、将軍家に対する好誼を得ようとすると意図があつたかどうかは分からぬ。

(六) 金槐和歌集

実朝の家集「金槐和歌集」は、その奥書、所収歌、部類配列から大別して建暦三年本と柳営亞槐本の二種類に分けられる。

建暦三年本は通常定家の所伝本と呼ばれている。藤原定家が、巻頭などを書き、他の大部分を家人に書写させた古字本が伝存するからである。これは、もと前田家に藏せられ、昭和四年五月に金沢の松岡家で佐佐木信綱が発見し、昭和五年一月に解説を付して複製刊行された。

内題はなく、春・夏・秋・冬・賀・恋・旅・雜に分類した六百六十三首を収載している。

卷末に定家筆で「建暦二年十二月十八日」とあり、次

る。何れも鎌倉開府以前の作品である。

この辺の事情から、実朝の歌才は父頼朝の和歌の素質を受け継いだものとの見方もある。

(四) 王朝和歌の影響

元久二年九月、実朝は京都から「新古今和歌集」を受け取り、父頼朝の歌二首をはじめ、敬愛する後鳥羽院の歌や、父頼朝が偶然鶴岡八幡宮で出会い、一夜和歌について歓談したと伝えられる西行や、父が上京中歌を詠み交わしたと聞く慈円の歌の多いことに驚いたと言う。

そして何よりも関心を寄せたのは定家の歌で、難解ではあるが高度に芸術的であることに感銘し、総じてこの勅撰和歌集に魅了されたものと思われる。

(五) 定家との交流

このテーマについては、前号において触れており、若干重複する部分がある。

実朝が先述の「新古今和歌集」を受領したのは、配下の内藤知親が定家の弟子であつたことによるが、その後同人を使ひとして、自作の三十首を定家のもとに届けさせ、合点（批評）を依頼し、定家はこの返答と共に「詠歌口伝」一巻を献上している。この書は普通に「近代秀

の頁に後人の筆で、「かまくらの右大臣家集」と記されている。

この家集は、実朝自身の手によつてその詩魂の最盛期に編まれたもので、彼の秀歌の殆んどが収められていると言つて良い。

柳営亞槐本は、実朝自撰の建暦三年本の部類、配列を編者である柳営亞槐が自己の見解で改変しており、遺憾な点が多い。ただ、勅撰集や吾妻鏡その他の資料から採歌、増補した実朝の歌を含んでおり、建暦三年本の疎漏を補い得るから、資料的には看過出来ないとされている。「金槐和歌集」の書名は、一般には「金」は「鎌倉」の「鎌」の偏、「槐」は「槐門」と同じく大臣の意と考えられ、全体として鎌倉右大臣の歌集を表すものと解されている。

実朝が右大臣に任せられたのは、健保六年十二月であり、翌年正月には悲業の死を遂げてるのでこの書名は実朝の歿後に付せられたものであろう。

誰が付けた呼称かは不明であるが、硬く澄んで爽やかな語調をもつ「金槐」は、すぐれて美しい詩魂を抱きながら、若くして悲命に倒れた右大臣実朝に相応しい家集名でなかろうか。

「無垢な詩魂の遺書」と、ある解説者はこのような稍感傷的なサブタイトルを付している。筆者も同様な思いをもつてこれを捉えていることは、冒頭で匂わせたとこ

ろである。

(七) 実朝の歌風と文学者らの評価

実朝の歌は、一般的には定家との交流により、当時の王朝和歌の影響を受ける筈だが、新古今調の技巧がなく、むしろ「万葉集」の世界を把握し、独自の歌境を開いたと言われている。

そこで、後世の文学者らによる評価を夫々の著述や論考から拾い簡記してみたい。

芭蕉（一六四四—一六九四）

芭蕉は、弟子の木節に「中頃の歌人は誰なるや」と問われ、言下に「西行と鎌倉右大臣ならん」とこたえたそうである（俳諧「葉集」）。これは有名な賀茂の貞淵の実朝発見より可成り古いことである。

そこには純粹な芭蕉の鑑識眼があると思われ、興味ある“伝説”と言つて良いだろう。

子規（一八六七—一九〇二）

子規は、明治三十一年、新聞「日本」に十回にわたり連載した、「歌よみに与ふる書」において、古今、新古今の王朝和歌と歌人らを過激に攻撃し、罵倒しているのと対照的に、実朝とその歌を絶賛している。

要約すると、実朝があと十年生きていたら多くの名歌を残しただろう。力量と見識があり、時流に染まらず、

んだと記している。

他に実朝に関する評論等を残している文学者に、齊藤茂吉、大佛次郎、大宰治、吉本隆明などが居る。

(八) 吾妻鏡について

実朝とその周辺の史実を記したものとして、吾妻鏡について触れておきたい。

鎌倉幕府が編纂した幕府自身の歴史書で、將軍ごとの編年体の形をとっている。鎌倉後期成立の五十二巻、幕府の事跡を日記体で編述したもの。

鎌倉幕府の通史として、研究には不可欠の文献であるが、北条氏の都合により事実を曲げた記述もあるとされる。世に言う「曲筆」である。

(九) 西行への敷衍

西行は、文治二年、六十九才の折、東海、奥羽の行脚の途上、鎌倉に至り頼朝に謁した云々の記述が吾妻鏡にある。また、定家は「新古今和歌集」に西行の歌を九十四首選入している。従つて実朝も新古今に親しむことにより、王朝歌人とは対照的な西行の歌風に接したことであろう。

実朝は、父頼朝と西行との交流を知り、西行の歌に関

世間に媚びないところは、王朝歌壇の公卿たちとは違う、云々である。

現代の文学者では、筆者がその人物や作品に、ある程度理解と共感を持てる二人につき記述する。この二人は、自らの文学者としての信念や思惟により捉え方が異なり、多分に主観的ではあるが、実朝を近代的なイデオロギーと感覚の持ち主として向き合つている点で共通している。そこに現代の批評家としての意義があるのである。

小林秀雄（一九〇二—一九八三）

小林は、吾妻鏡の記録を辿り、また子規ほかの論評との比論、そして個々の歌の解釈を通して、実朝を近代的視点で観察している。

「彼の歌は、彼の天稟の開放にほかならず、感傷もなく、邪念を交えず透き通つていて。決して世間と馴れ合おうとしない天稟が云々」（『文学界』昭和十八年一、五六月号に連載）と述べている。

中野孝次（一九三五—一九〇四）

中野は、本来ドイツ文学者で、その分野の著述と翻訳のほかに、現代的評論とエッセイが作品の主流であり、古典に関するものは珍しい。

実朝とその歌を、彼自身の現代的視点と美意識で捉え、人生論的な叙述を残しており、彼の文学的転換のひとつの起点であつたと言われている。

彼はあるエッセイで、実朝の孤独に惹かれ、孤愁を好

心を持ち、影響を受けたことは想像に難くない。

筆者は、頼朝から実朝に継がれた西行との接点、そしてそれ以前の、定家らの王朝歌壇と西行との関わりに興味があり、何れ機会を捉え論述したいと考えている。

(十) 代表的な和歌

①けさ見れば山もかすみてひさかたの天の原より春は来にけり 正月一日よめる
実朝の詠んだ和歌から、彼の生き様を象徴すると思われる十首を選び列記する。

多分に恣意的であるが、類型的な選択をしたつもりである。

②山は裂け海は浅せなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも
金槐和歌集卷頭の一首である。このように正月を詠ずることで、実朝は後鳥羽院の居る都の春に思いを馳せる歌であり、これは卷末の次の歌と見事に照應している。

金槐和歌集は、この歌で結ばれている。卷頭、卷末の歌とも後鳥羽院に寄せる畏敬と忠誠の念を詠んだものである。

(3) ものいはぬ四方の獸すらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ。

獸にも親の子に對する慈悲心が本能的に備わっていることへの感動を詠む。

(4) 時により過ぐれば民の嘆きなり八大竜王雨やめさせたまへ

実朝二十才の作である。心に掛けている土民の苦しみを鎮めるためには、ただ祈るのみであった。「ただ真心より詠み出でたらんが、なかなか善き歌と相成り候ひしやらん云々」と、子規は「八たび歌よみに与ふる書」で記している。

(5) 箱根路をわが越えてくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

所謂万葉調と評されている有名な歌である。

二所詣（伊豆權現と箱根權現）の途次に詠まれたもの。

実朝の孤独で悲しい心情が表れている。

(6) 大海の磯もとどろに寄する波破れて碎けて裂けて散るかも

岩頭に碎け散る大波の勇壮さを捉えている。

ただしその背後には、波とともに碎け散ることに快感を覚えるような虚無、孤独な心が読みとれる。ある日

詠んだものと記されている。

「庭の梅を覽て禁忌の和歌を詠じ給ふ」とある。実朝が

この日の異変を予感してのことと言うのであろうか。

(十二) おわりに

実朝の時代は決して近くはない。南北朝、室町、戦国時代を経て江戸幕府、そして近代と、今日までおよそ八世紀を経過している。

然し、筆者にとり鎌倉と実朝は何故か身近かな存在であつた。それは、「古都鎌倉」と呼ばれる歴史的な観光地として頻繁に訪れていたこと、もうひとつは、鎌倉幕府の異色の将軍実朝に人間的な興味を覚えたことである。

そして、金槐和歌集という美しい響きをもつた詩篇に惚れに近い思いを抱いていたことなどがその理由であろう。

冒頭にも記したように、かねてから関心のあつた事柄を拾い出し、自己流はあるが体系づけてまとめようとしたのがこの小論である。

さる二月、実朝と政子の墓のある、鎌倉扇ヶ谷の寿福寺に詣でた。寒梅がちらほらと咲く墓地の奥に夫々の五輪塔がひとつそりと並んでいた。

閑々として波に見入っている実朝の孤独な姿を見る。

(7) 塔をくみ堂をつくるも人げなき懺悔にまさる功德やはある

敬神崇仏の念に篤かつた実朝が、当時の善男善女の宗教感覚を感じたもの。反面その時代の人々の所業に対する嘲笑的なものがあるとの評もある。

(8) 世の中は常にもがもな渚ごく海人の小舟の綱手かなしも

舟の綱を引くのに懸命な漁夫を見て、この世が彼等にとり苛酷、無情なものでないことを祈っている。定家撰の「新勅撰集」「百人一首」に選入された代表作のひとつ。

(9) わが心いかにせよとかやまぶきのうつろふ花に嵐立つらむ

父頼朝亡き後、母政子の実家である北条氏により兄頼家や身近かな武将たちが、次々と殺されてゆく孤独と絶望の中で、二十才の実朝はこの歌を詠んだ。

(10) いでていなば主なき宿と成りぬとも軒端の梅よ春をわするな

吾妻鏡には、実朝横死事件に先立ち、出立の期に及び

参考とした図書

金槐和歌集 新潮日本古典集成
歌よみに与ふる書 正岡子規

実朝考

モオツアールト・無常という事 中野孝次
その他資料 小林秀雄

潮騷錄（六一）

鯨游海

寄三戸岡道夫先生著二宮金次郎之一生受
賞日本文藝金賞

尊徳記傳金賞榆

歡天喜地悉傾壺

先生何故獨憂色

門弟雖群子夏無

押韻・榆壺無

△三戸岡道夫先生の著さる二宮金次郎の一
生が日本文藝金賞を受賞せらるるに寄す

尊徳の記伝

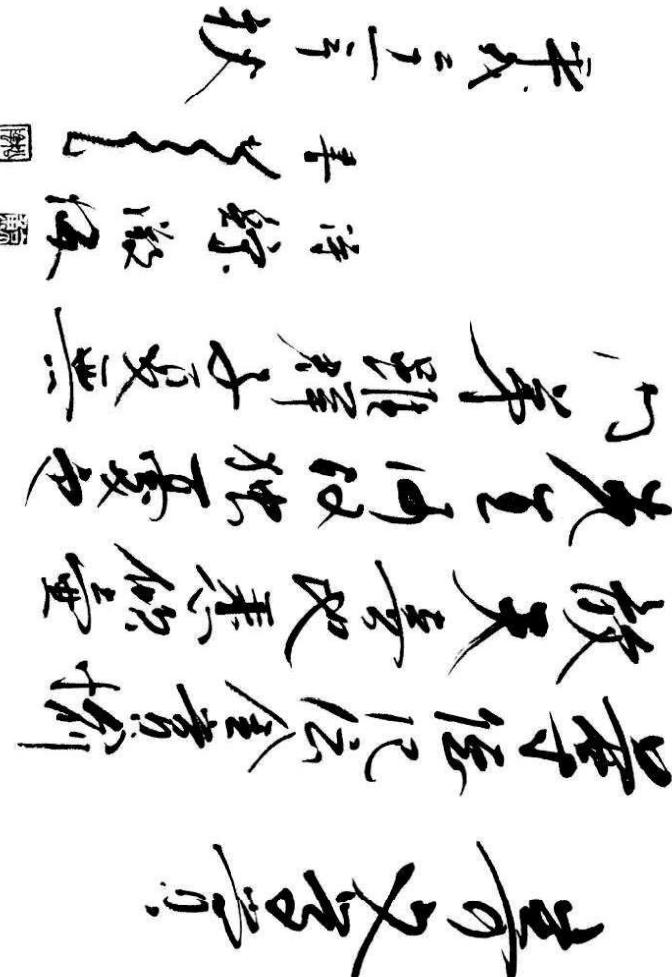
天に歓び地に喜びて悉く壺を傾く

先生何故ぞ獨り憂の色

〔注解〕

記傳歴史と伝記。名著「二宮金次郎の一生」を指す。

△三戸岡道夫先生の名著「二宮金次郎の一生」が、平成二十一年度「日本文芸アカデミー・ゴーラード賞」に選ばれ受賞された事は先生は元より門第一同榆びに堪えない。早速、私学会館に門弟たちが集い祝賀会が催されたが、



潮騷錄（六一）

鯨

游

海

△歓天喜地 || 歓喜天地の互文。互文とは平仄の配置等の関係で敢えて交互に用い一語を双方に掛けて意味を強調する表現法。「天地長久」を「天長地久」と書くのと同じ。天に歓び地に喜ぶ || 大喜びするさま（水滸伝）。

△なおここで訓讀は意味を重視して文字通りとした。傾壺 || 酒壺を傾むけ盡くし空になつたさま。陶淵明「壺自傾」より。祝宴が盛んな形容。

△子夏 || 孔子の門弟。特に詩才、文才に優れた若者で、子游と並んで文学に造詣の深い俊才。詩經を後世に伝えたという。

〔口語訳〕

△三戸岡道夫先生の名著「二宮金次郎の一生」が、平成二十一年度「日本文芸アカデミー・ゴーラード賞」に選ばれ受賞された事は先生は元より門第一同榆びに堪えない。

△早速、私学会館に門弟たちが集い祝賀会が催されたが、

満場歡喜に満ち溢れ、天地を挙げての大祝宴となり、卓上の酒壺が悉く空になる程盛り上った。

所が一体どうした事であろうか。肝心の先生が独り浮かぬ顔をして憂いに沈んでおられる。

恐らくそれは、大勢の弟子の中に誰一人として自分の後継者に相応しい、あの孔子の弟子で文才溢れる子夏の如き俊才が居ないからであろう（先生の今一番の関心事は後継者でその育成に心を碎いておられるのだから）。

☆宴闇けて何處に在らん子夏子游

群るる弟子の一々を観る

樂聖船村徹先生讃歌・連作13泪船

平成廿一年四月

北島三郎雖美聲

路傍歌手未知情

泪船何得新人賞

伯樂勿忘星野名

押韻・聲情名

（樂聖船村徹先生讃歌・連作13「泪船」）

北島三郎 美声と雖も

路傍歌手未知情

泪船何得新人賞

14辭社稷得伴侶

平成廿一年四月

千萬無量辭社春
生涯伴侶娶佳嬪
此時徒弟既幾十
再爲演歌巡禮身

押韻・春嬪身

（14社稷を辞して伴侶を得）

千万無量 社を辞せる春

生涯の伴侶たる 佳嬪を娶る

此時徒弟 既に幾十

再び 演歌巡礼の身と為る

〔注解〕

社稷||土地の神と穀物の神。これを祭ることは古代國家を治める必須条件であった。転じて国家。ここでは生活の糧を得る団体―会社の意。先生のそれはコロムビアレコード株であった。これを辞することは安定収入が無くなることである。佳嬪||令夫人の名は佳子なので懸念した。家庭と無収入の門下生を養う為に先生は、ギターを肩に再び流しを始め各地を経廻つたのである。

☆男児ゆえ社稷を捨てて妻娶る

これに過ぎたる大事あらんや

伯樂を忘るる勿れ 星野の名を

〔注解〕

伯樂||馬の良否を見分ける名人。転じて教師の代名詞。

星野||作詞家星野哲郎。

今、歌謡界を代表する北島三郎だが、この頃はギターを弾き乍ら唄う流しであつた。

流しの歌手は、一応そつなく美声を凝らして注文客を満足させはするが、巧く歌おうと阿ねる為か今一つ情を欠く。船村徹先生はそれが不満であつた。一口で云うと個性に欠けるのである。才能を惜しんだ先生は作詞家星野哲郎氏に依頼し、特に北島三郎向けの歌詞を作らせ彼の長所である小節（微妙に声を震わせる裝飾的な節回し）を利かせた一曲を唄わせた。

この歌が見事にヒットし、当年の新人賞に輝やく成果を収めた。将に名伯樂は船村徹と星野哲郎といえよう。

爾来、北島三郎は斯界の寵兒に駆け登つていく。

作詞家星野哲郎の名調子と北島三郎の才能とが合体して名曲「泪船」が生まれ、同時に名歌手が誕生した記念すべき年であつた。

☆歌巧き人多かれど何か在る

北島三郎ただ独り在れ

15兄弟船

平成廿一年四月

待望俊才謳聳肩
詩魂乘曲愈渾然
咆哮對海男浪漫
鳥羽一郎兄弟船

押韻・肩然船

（15兄弟船）

待望の俊才 肩を聳して謳ふ

詩魂曲に乘じて いよいよ渾然たり

咆哮して海に對ふは 男のロマン

鳥羽一郎ぞ 「兄弟船」ぞ

〔注解〕

この頃、特に目をかけていた弟子の一人、鳥羽一郎の才能が華開いた。肩を聳かして絶唱する独特的スタイルが名曲「兄弟船」にぴったりであった。

新人鳥羽一郎のデビューである。

先生にとつては北島三郎につづくスターを歌謡界に送り出したことになつた。

☆青海原天に届けと咆哮す

汐もかなひぬ鳥羽の一郎

平成廿一年四月

嚴冬猛夏訪刑徒
慰問巡回我壯圖
柄木女囚滿堂寂
一彈流淚不歌無

押韻・徒圖無

〈16 女囚の合唱〉

嚴冬猛夏に刑徒を訪ぬ

慰問の巡回は我が壯図なり

柄木の女囚満堂寂

一たび彈けば涙を流し歌はざるは無し

〔注解〕

壯圖||壯大な企て。男の美学が為さしめる信念の行為。
柄木の女囚||罪を犯し刑に服役する人々の人生は重い。

特に女性の場合は背後に男の姿がかい間見える。西の和歌山、東の柄木が女性専門の刑務所であった。
先生はこれら刑務所への慰問ボランティアにも熱心に活躍された。春秋の好季節は通常の音楽シーズンで多忙なので、かかる奉仕活動は厳冬期や猛暑のさ中に催される。黙する女囚達。やがて大合唱に昇華していく。

☆女囚らの黙す念ひは児か母か

エレジー弾きて心開かん

二一八に帰るすべもなし（一）

—愛する北国のひとに寄せて—

伊治哲

雪

ませんか
　　という妻の苦笑いに、ようやく一矢を報いることがで
きたからである。

「館修平」、この年三十九歳である。
去年の夏、共栄銀行の五反田支店長に栄進したばかりだ。

栄進したといつても、歴史の浅いこの銀行は中堅層不足で、同期入社組のほとんどはもうとつぐに本部の次長や支店長に昇進している。いつてみれば、修平はそのしんがりを承つたというわけである。

それでも修平は「長」という初めての肩書に快哉を叫んだ。小なりとはいえ、「國二城の主」に違ひはないと胸を張ったのだった。

「あなたがどこかの『長』になるなど、信じられないワ。だって若い頃から暴れん坊で“不逞の輩”などといふありがたくない別称をいただいていたというじやあり

《漢詩の流れ50・明その④李攀龍》
李攀龍（一五一四～一五七〇）字は于麟。山東省濟南市の人。家貧しく詩歌を愛好した文学青年。進士。

「文は漢、詩は盛唐。それ以降は観るに堪へず」と我が正岡子規が和歌を評した如く論じ、復古を主張した。

我が江戸時代以後流行した「唐詩選」の編者とされたきた（異説あり）。晩年宰相嚴嵩の罪状を彈劾して刑死。

于郡城送明卿之江西（郡城に于て明卿が江西に之くを送る）

青楓颯颯雨淒淒 青楓は颯々たり 雨は淒々たり
秋色遙看入楚迷 秋色遙かに看る 楚に入りて迷うを
誰向孤舟憐逐客 誰か孤舟に向かいて 逐客を憐れむ
白雲相送大江西 白雲あい送る 大江の西

（都を追われた旅人である君を乗せた
一艘の舟に惜別の情を抱くのは誰だ
ろう。それは白雲だ……）

ばという気負いが全身に漲つていた。

この日も、仕事が一段落してから、上だつた部下を集め、修平流儀の“仕事と人生”などという、柄にもなく大それた話を聞かせたばかりだ。

修平は彼らに語りかけた。

「この道ではオレの右に出るものはない、といえる職人になれ。そしてその棟梁になれ」

「どんなに小さな、狭い分野でもいい。小さな世界、狭い範囲でいいから、オレはこれをやり遂げたと、胸を張って誇ることのできる足跡を遺せ」

「一人ひとりが、それぞれの得意分野で、自分にしかできない足跡を遺したとしたら、その一つひとつがどんなに小さなものであつても、積もり積もつて、とてつもなく大きな力を發揮することになるのだ」

『昔、天台宗を興した最澄上人が言つた。『一隅を照らすもの、これ国の宝なり』』と

「〈ここにいる一人ひとりが、一隅を照らす棟梁、にならうではないか〉

……

修平は“一隅”とか“棟梁”という言葉が好きだ。いま自分の置かれている立場がこれだと思ったかつた。それでも、われながら随分氣負つたものの言いかたをしたものだ、とも思つた。

細い雪道をなぞるように荷馬車が通つたのだろう。今度は子どもたちがそのわだちの跡を伝うようにして、滑つたり転んだりしながら、小学校にかよつた。中学校へは三里の道を自転車で通学したから、冬は雪のなかを搔き分けるように、自転車を押して学校に辿り着いたものだ。

そうそう、金沢の高等学校へ進んだときもそうだった。春だというのに、家の軒先まで積み上げられて、いまだに氷のように道端にへばりついている雪の塊をみて仰天した。とんでもない北国へきたものだと、気持ちまで凍りついたことを思い出す。

しかし雪国は雪国で楽しみもあつた。

火に炙つて反りをつけた割り竹をカマボコ板に釘で打ちつけ、同じように打ちつけた輪切りの古タイヤに両足をつっかけて、裏山の木々のあいだを縫うように滑り降りて遊んだ。幼い頃の楽しい思い出だ。

初めて本式のスキー板にのつたのは金沢にいつてからのことである。一夜にして真っ白な雪に覆われた兼六園の広い坂道を一気に滑り降りて、スキーの醍醐味を味わつた思い出は忘れられない。雪国はやはり雪に強い。

そんな感懷に浸りながら、ふとわれにかえると、雪は

昭和四十四年が明けたこの年は、年の暮から東京にしては珍しく寒い日が続いた。一月半ばのその日も、朝からどんよりとして雲が低く、昼すぎからは白いものがヒラヒラと舞い落ちていた。部下との話が終わつて窓越しに外を見ると、薄暮のなかにボタ雪が落ち、あたりはもうすっかり雪景色に変つてしまつていて。

慌てて若い人たちに帰宅をうながし、自分も書類を整理して帰り支度を急いだ。

東京の交通機関は雪に弱いといわれていたが、果たして、それほど間をおかないうちに、山の手線の電車が全面ストップしたと、ラジオが報じた。足を奪われては万事休す。急いでもしかたがない。しばらくは、読みかけの本でも開いて静観しようと、細い電燈の光に書物を当ててはみたが、目が文字を追うだけで、頭はどこか他所に向かつていて。久しづぶりの雪景色が気になるのだ。

修平の幼いころ、故郷の丹波の山国は、冬になるといつも雪で真っ白に覆われた。四、五十センチは積もつていた。そんな朝は、まだ夜も明けきらぬうちから起き出で、村の人たちに交じつて、子どもも大人も総出で雪かきをするのが日課だった。隣の家とのあいだは五、六十メートルも離れていたが、汗を拭きふき、ようやく人が通れるくらいの雪道を作つていった。

やや小止みになつたらしい。夜も九時をすぎてから、ようやく電車の一部がうごきはじめたという。

修平は、ズボンの裾をからげて外へ出た。街を歩く人が一人二人と増えて、真っ白に染められた雪道が忽ち泥にまみれたぬかるみになつっていく。

寒い・。思わずコートの襟をたてて、首をすくめながら、五反田の駅に足を速めた。黒ずんだ雪が足をすべり歩きにくい。雪解けの水が靴の底から滲みこんで、足の指先がしびれるようになつた。

丹波や北国の中は、サラサラして、こんなにぬかるみはしなかつたなあと、またまたさつきの思い出が頭をかすめた。

五反田駅の構内には、電車を待つ人の群れがひとたまりになつて、改札口にたむろしている。その間をくぐり抜けて、巣鴨に向かう外回りのホームへの階段に足をかけた。

濡れそぼつた階段の左端を半ばまで登つた、そのときである。

上からひとりの女が足元を気遣いながら、一段一段と確かめるように階段の反対側を降りてくる。ほかに人はいない。女の間が五、六段にせばまたとき、修平は思わず足を止めてその女に視線を向けた。

歳のころは三十台も半ばをこえたくらいであろうか。

（誰かに似ている。誰だつたるうか・・？）
（ひよつとして彼女では・・？）

（いや、そんなはずはない。こんな夜更けに・・しか
も雪の降るこんな夜に・・東京の五反田の駅で・・彼
女がいるわけがない・・）

（そのうえ、いかにもやつれて見える。細面な顔立ち
は似ているが、どことなく疲れきったような面持ちだ。
他人の空似かもしれない・・）

修平は立ち止つたまま呆然と女を見つめた。

（それでも、余りにもよく似過ぎている。二十年
近くも会つていないのでから、顔かたちが変るものあり
うことだが・・）

（やはり彼女に間違いない、たしかにそうだ、まちが
いなく彼女だ・・）

（しかし、どうして金沢にいるはずの女が、いまここ
に・・？）

一瞬のあいだ、修平は、迷いに迷つた。

そのあぐく、とっさに声をかけようとして、修平はそ
の声を呑みこんでしまつた。万が一にもありうるはずが
ない、もし人違いだつたら・・という思いが頭をよぎつ
た。

（氣のせいか、女もやや伏し目がちに修平を見つめてい
る。手すりにつかまつて一段一段足を落しながら、振り

やりと、窓の外を走る夜の雪景色に見入つた。

——暗闇の中のトンネルを走つてゐるようでもあり、
急にネオンの光に映える街の中に沈みこんでいくようでも
あった。じしまの中で長い夢をみているようでもあり、
また、突如として目の醒めるような現つ^{うつ}の世界に放り出
されるようでもあつた。

（いいや、そうではない。二つの影が重なり合つたので
はない。女の後ろに、もう一人の女の姿が二重写しにな
つてゐるのかもしれない）

（と修平は思つた。彼女には、二つ違いで、瓜二つの姉
がいるのだ。いつのまにか彼女の影に姉がひそんでいる
ように見えた。

修平の胸は息苦しく乱れた。

しかし、よくよく見るとそれが自分の姿が映つていて
るすぎないことに気がついて、ハツと吾に返つた――

（東鴨の駅から、人通りもまばらな地蔵通りの雪道をど
のように歩いたのか、覚えていない。
修平は、その夜、無言だった。妻の怪訝そうな問いか
けにも、虚ろな生返事を繰り返すだけだった。）

（誰かに似ている。誰だつたるうか・・？）
（ひよつとして彼女では・・？）
（いや、そんなはずはない。こんな夜更けに・・しか
も雪の降るこんな夜に・・東京の五反田の駅で・・彼
女がいるわけがない・・）
（そのうえ、いかにもやつれて見える。細面な顔立ち
は似ているが、どことなく疲れきったような面持ちだ。
他人の空似かもしれない・・）

（それにして、余りにもよく似過ぎている。二十年
近くも会つていないのでから、顔かたちが変るものあり
うことだが・・）

（やはり彼女に間違いない、たしかにそうだ、まちが
いなく彼女だ・・）

（金沢の女・・？）
（金沢と五反田・・？）
（どうしても結びつかない。まるで別人なのか、それとも同じ
人物の化身なのか。）

（同一人物だとすれば、永い間の空白をどう埋めたらよ
いのか。）

（金沢の頃の幼かつた彼女と、三十歳を超えたであろう
五反田での彼女・・。二十年前の清楚で愛くるしかつ
た昔の彼女と、世の中の波風に曝されて疲れきつた風情
の今しがたの彼女とが、どうしても重なり合わない――
）

（しばらく立ちすくんでいるうちに、雪の中を喘ぐよう
に、電車が金切り声のブレーキの音をたてて修平の前に
止まつた。）

（電車の中は雪どけの水に洗われていて。襟元に首をす
くめ黙りこくつた客がまばらに席を占めている。修平は、
座席に座ろうともせず、ドアにもたれかかつたままぼん
現つ^{うつ}の世界でもあつた。）

（そして、修平はその夜、雪で静まり返る一夜がうつす
らと明け初めるまで夢と現つ^{うつ}のあいだを往きつ戻りつし
ながら迷つた。雪に埋まつた故郷の丹波から、北陸路
にまでつながる遠い日の思い出であつた。まるで古い絵
巻物が、少しづつ繰り広げられていく夢のようでもあり
現つ^{うつ}の世界でもあつた。）

（――つづく）

狩谷被斎讚歌（九）

新井 宏

（二十八）古韓尺の登場

江戸後期の狩谷被斎は、現代の遺跡資料について何も知ることなく『本朝度量權衡攷』を著した。昭和の藤田元春氏は、不十分とは言え被斎の知りえなかつた情報も利用して『尺度綜考』を著して、結果において誤った。

私は、被斎はもとより、藤田元春氏よりも、更に多くの情報を参照できる環境にいる。だから藤田元春氏の誤謬を修正するだけでなく、被斎の業績を更に発展させなければならない。それは、大化前代の土地制度や古墳の尺度を解明することである。

そもそも私が、このような研究にのめり込むようになつたきっかけは、昭和三十六年に末永雅雄氏が美しい天皇陵の測量図や航空写真を『日本の古墳』に発表したことは全国の古墳の計測図面を集め続けていたが、四十歳代のサラリーマンが自分だけの時間を持ち続けることは難しく、いつのまにか情熱も醒めてしまった。それからちょうど十年近くたつた昭和五十八年のことであつた。仕事上の責任を取る形で選手交代する時期がやつて來た。そして「失意」が求めたのが、歴史や考古学への回帰であつた。そこで出会つたのが、かの有名な『法隆寺再建・非再建論争』である。

明治三十八年に始まり、大正・昭和と延々と続いたこの大論争は、結局、昭和十四年の若草伽藍の発掘によつて、再建論に決着したが、非再建論の有力な根拠が、「法隆寺が高麗尺で造られている」という点にあつた。もし再建なら唐大尺を使つてゐるはずなのに、現存する法隆寺の建物は、高麗尺の方がはるかに良く一致しているのである。

しかし、奇妙なのである。高麗尺が唐大尺よりもよく合るのは、庵は事実としても、それよりも更に正確にいうモジユールがある。それが、後に私によつて名付けられた古韓尺である。古墳の築造も、もしかしたらこの古韓尺によつてゐるのではないだろうか。それは高麗尺の積極的な否定につながる。

そして、夢中になつて、飛鳥期や白鳳期の寺院や宮殿の発掘調査を涉獵し、更には、朝鮮半島の古墳や寺院、宮殿についても調べ、中国まで手を伸ばした。確かに手

とにあつた。それによつて昭和四十年代には「古墳の尺度論」が一齊に巻き起つてゐたのである。

考古学の専門家ばかりでなくアマチュアの研究者も加わり、測量図をもとにして、あれこれと試案を発表していた。しかし、まさに百家争鳴の状況であり、議論が収斂するぎざしは全くなかつた。

統計学を知る私の方が合理的な議論ができる。その当時、コンピュータを活用できるのも、私くらいであつた。着想は良かったが、古墳の大きさが規則正しく出来ていると思ったのが、そもそも間違いであつた。無数にある古墳のどれを対象にするかも恣意的であつてはならない。

いくら試行錯誤して解析して見ても満足行く結果は得られない。結局、一日も早く自説を発表したいと思ひながらも、すっかり行き詰まつてしまつた。余暇を見つけて何とか、著名な出版社から出したい。

人生にはつきがある。いままでも随分ついていた人生であつた。しかしこの時ほどつきを感じたことはなかつた。編集者がかつて高麗尺に疑問をもつた経験のある方で、とにかく出版を検討してくれるという。吉川弘文館と言えば、専門の学者でさえそこから本を出せば勲章になる出版社である。定説にもなつていないアマチュアの研究書など余程のことがなければ引き受けるはずがなかつたのが『まぼろしの古代尺——高麗尺はなかつた』として出版されたのである。大満足であつた。

気がつき次に読者が教えてくれた。自分でこれしかないと思った論理も冷静になれば、別の見方もある。晴れがましい本を開くのが恐いと思う日もやつて来た。しかし基本的な間違いではない。何とかしてもつと自論を強化したい。世の中にはそんな資料があるはずだ。

それと、もうひとつ理由があった。もつと専門家たちが注目してくれると思ったのに、総じて反応は冷やかであつた。たしかに、著名な歴史考古学者の坂詰秀一氏や鈴木靖民氏などが賛意を表してくれたが、他は「アメリカの説などにうつかり乗つて怪我でもしたら」という雰囲気であつた。正面から反論されることはなかつたが、伝統的な方法、すなわち「無視」が続いていた。また再びデータや文献との格闘がはじまつた。突破があるはずだ。それを求めて毎朝五時には起きだして机に向う日々が続いた。段々深みにはまり、朝鮮半島の中に中国の土地制度研究史にまで手をひろげるようになつた。

その結果生まれたのが、中国・朝鮮半島・日本にまたがる壮大な土地制度史の構想であつた。主観的には個々の構想を繋ぎ合わせれば、自然に出来上がる構想であるが、他人に説明するには直接的な証拠を見付けなければならぬ。そのミッシングリンクは朝鮮半島に必ずあるはずだ。

韓国に行きたい。

そんな姿を見ていた妻が言つてくれた。……早く会社を卒業して、韓国に行つていらっしゃい……。この一言が決定的であった。

平成十二年、会社卒業と同時に始めた韓国国立慶尚大学での生活は、学生達との交流だけでもいくつかの物語になる。しかも、古韓尺の検証問題に限定しても、慶州の新羅南山新城碑や出雲風土記に文献的な証拠を見出し、慶州の新羅王京の造営が『三国史記』『三国遺事』の記録により古韓尺で行われたことを解説し、それらを相次いで韓国語の論文として発表できた。

目的の達成はここまででもほぼ十分であった。

(三十一) 代制の起源の解明

しかし、何と言つても最大の物語は、朝鮮半島の古い土地制度にあつた。「結負制」を研究している最中に、大変なことを発見したのである。

結論だけを言えば、朝鮮半島にあつた「結負制」を復元した結果、古韓尺の三歩を「量田歩」とする「結」
「束」
「把」と言う土地面積の単位が用いられていたことが判明したのである。量田歩の百歩が一里であり、里四方が「井」であるから、十把が一束、千束が一結、十結が一井という十進法の体系であった。したがつて、一束

することになった。幸いなことに、古墳に関する発掘などの実証的な研究もその間に大きく進んでいて、信頼性の高いデータが増えている。

そこで早速発見したのが群馬県下の前方後円墳に関する研究成果である。群馬県は、太田天神山古墳をはじめとして保渡田古墳群など周濠を持つ大型前方後円墳が多くある有数の古墳地域であるが、発掘によつて均整のとれた復元図が多く提出されている。尺度研究には絶好である。たまたま妻が保渡田に疎開していたことも何かの縁だったに違いない。

そればかりではなかった。この地方の古墳研究を牽引してきた梅沢重昭氏が既に次のように述べているではないか。
「ここで尋を古韓歩と読み替え、(晋尺)二十尺を量田歩と読み替えれば、朝鮮半島の結負制の基準尺を述べたの
かくして、筆者のながい彷徨は最初の古墳研究に回帰

かくして、日本の大化前代の土地制度「代制」が朝鮮半島の「結負制」と全く同一のものであつたことが判つた。その基本単位は古韓尺による歩と量田歩である。そうであるならば、その土地単位系は古墳時代まで遡り、大型前方後円墳などにも使われていたのではないか。

(三十二) 古墳尺度研究への回帰

かくして、筆者のながい彷徨は最初の古墳研究に回帰

と読み替えれば、朝鮮半島の結負制の基準尺を述べたの

とまったく同一の内容になる。

梅沢氏の数字の当てはめは、古韓尺にとつても完璧なものである。ただし、梅沢氏の見解は、同時期の中国の「晋尺」が用いられたとするもので、この点が間違つていた。

一見すると合理的な「晋尺説」ではあるが、東アジアでは上地を測るのは「歩」であり、「尺」をそのまま使ふことは決してなく、しかも晋尺の実長を二十四・〇センチとするのも誤りで、正しくは二十四・二センチである、古韓尺なら何の問題もない。

そうであるならば、奈良や河内にある巨大な前方後円墳はどうであろうか。

早速再検討した結果も、実に嬉しいものであった。古墳の墳丘長を対象にしてみると、最大長の仁徳天皇陵は四百八十メートルで量田歩の百歩すなわち古韓尺のちょうど一里である。履中陵や造山古墳は量田歩の七十五歩、箸墓古墳、景行陵、土師ニサンザイ古墳、作山古墳、仲津媛陵は量田歩の六十歩、崇神陵、仲哀陵、室宮山古墳は量田歩の五十歩である。このように、上位十位圏の超大型前方後円墳がほとんど全て量田歩によつて綺麗に説明されるのである。

そして、収集し続けてきた古墳形状図、特に発掘調査によつて復元図の得られている各地の五十基余りの古墳についても手を抜げてみたが、ほとんど例外がない。

ここでやや気張つて、成果を考古学誌としては最も権威のある『考古学雑誌』に載せたのが平成十六年である。それを読売新聞が大きく取り上げてくれた。

残った課題は、東アジア古代史における古韓尺の位置づけである。中国との関係を無視して、朝鮮半島と日本だけの視点で議論していくはもちろん不十分である。

中国の『禮記』によれば、周代には「八尺一步制」が行われていた。周尺の実長は約二十七センチ。そうすると周代の一歩は一・六〇メートルである。それは「六尺一步制」の古韓尺の一歩一・六〇メートルと完全に一致している。中国では秦の始皇帝の頃から「六尺一步制」を採用するが、その制に見かけだけ合わせたのが古韓尺の源流に違いない。

この一致は、古韓尺の研究が中国の古代土地制度にも光を与える成果でもあり、平成十七年に開かれた北京に於ける科学史国際学会で発表した。

やつと終わつた。

長い長い道程であつたが、その間、常に狩谷被斎によつて導かれていた。私が『狩谷被斎讃歌』を著したい気持ちがお判りいただけるであろう。

しかしながら、つきはそんなことでは終わらなかつた。

(三十二) 古韓尺の新たな展開

そのひとつは江田船山古墳の銀象嵌太刀から古韓尺が出てきたことである。この有名な鉄剣には「用大鉄金并四尺廷刀」と書かれているが、その太刀の復元長が百七センチと判明した。計算すれば二十六・八センチで古韓尺にぴつたりである。今年(平成二十二年)発刊の史遊会の『歴史のみち草』にそのことを紹介したばかりである。

出雲風土記からも、またまた古韓尺がでてきた。出雲風土記には、意宇郡宍道郷の石ノ宮神宮にある二つの猪像岩とひとつの犬像岩について、周長、高さ、長さが記載されているが、実測結果と対比してみると、ほぼ完全に古韓尺と一致したのである。

そもそも、出雲風土記は里程記事で埋め尽くされた書物で、そこには郡と郷の間の距離などが十三里六十四歩とか五里八十六歩とか異常に詳しく書かれている。郷の中心がどこにあるのかも判らない中で「歩」の単位まで示すのはどう考へても不自然であるが、これらを古韓尺の十五里とか六里から換算された数値と見ると完全に納得できるのである。換算比率は〇・八八一であつた。

そして、極めつけのニュースが本稿を執筆中に飛び込んだ。昨年(平成二十一年)末に、奈良県の纏向遺跡から大型建物群が発掘されたのである。

纏向は古墳時代の発祥地ともいいうべき場所であり、そこから「尺度」を議論できる建物群が見つかつたのであるから興奮した。周辺には最古の前方後円墳である纏向古墳群がある。

早速、報告書を取り寄せて検討すると、古韓尺にどんピシャリなのである。しかも、漢尺や魏尺では全く合わない。この「漢尺」が全く合わないという明白な事実がうれしかつた。古墳が漢尺で造られたとする試論が、考古学の専門家からも、雨後の筈のように後を絶たなかつたが、これでやつと根絶できる。

被斎の導きで完全試合が目前である。

小説 家康と廻狂いの右近

—遠州菊川の義人中条右近太夫物語—（3）

堀内永人

(二)
一方、三方ヶ原の戦いで大勝した武田信玄は、持病の肺病が再発して甲斐へ引き上げる途中、雄岡むなし元龜四年（一五七三）四月十一日、三州街道信濃国駒場宿（長野県下伊那郡阿智村）で死亡した。享年五十三歳であった。

信玄の死亡により、戦乱が絶えなかつた遠州、駿河の一国にも、ようやく平穏な日々がおとずれた。
引佐郡雄踏村の地侍秋家に嫁いでいた、遠州城東郡領田村（静岡県菊川市領田）生まれのよしは、夫糸重蔵との間にもうけた一子、中条右近を伴つて、その年の七月末に領田村の実家に戻つてきた。

実家に着いたよしは、早速、父田代嘉蔵と母すぎに、五年間の無沙汰を詫びた後、わが子、右近の命名についてその経緯を語つた。

よしの話を聞いた老父の嘉蔵は、

「これは大変名誉なことだな。わが孫の名前が、徳川様の思し召しにより命名されたとなれば、右近は孫であつて孫でないと同じだ。あだおろそかに育ててはなるまい」と獨り言のように言うと、老妻のすぎと顔を見合せて頷きあつた。

嘉蔵は、本来ならば、老夫婦二人のところへ、娘が男の子連れて帰つてくれば、大喜びするはずである。
ところが、「中条右近」の名が、遠州、三河両国の支配者、徳川家康が命名したと聞いて、名誉であると思う半面、もの凄いプレッシャーを感じ、その心境は、はなはだ複雑であつた。

「この子はたいした果報者であることを必ず徳川様のご期待に沿うように、立派に育てなければなるまい」と言うと、早速神棚に燈明を灯して、右近への加護を八幡大菩薩に祈願するのであつた。

「ハイ、おじじさま、よろしくお願ひします」と行儀よく、両手を膝に置いて返事した。こうして右

近は、六歳の正月を期して、指導者となるべき道を歩み出した。嘉蔵は、さらに「よいか右近、この田代家は、いまから五百年ほどの昔、源氏の総大将、源義經さまのおそばで活躍したご家来衆の一人、田代冠者がこの地にお住まいになつたのが始まりである。決しておろそかにできない立派な家柄である。お前も、神に誓つてご先祖さまの名を汚さないよう世のため、人のために尽くすような人になるのだ、よいな」と諭した。すると右近は、

「ハイ、私はおじじさまにお教えいただいて、世のためになるように、しつかり学問を積んでまいります。おじじさまでよろしくおたのみいたします」と言つて、祖父嘉蔵と約束した。嘉蔵は、「のう右近や、学問は小さな時にしつかりと学べば、やがてその学問が役立つときがくる。さらに、学んだ学問が、必ず身を守つてくれる。決して、おろそかにするでない。それから、中国に、少年老い易く学成り難い」と諭した。

そもそも嘉蔵の家は、代々嶺田村の名主を務めた有力者で、二町七反歩（一、七ヘクタール）の耕地を所有する自作農であつた。
しかし嘉蔵は、還暦（六十歳）を過ぎた三年前に、自らの跡継ぎがないことを理由に、名主の役を退き、下男の茂平夫婦と静かに晴耕雨読の日々を過ごしていた。
嘉蔵は、晴耕雨読のかたわら、近郷の農家の子弟を我が家に集めて、読み書きと、算術を教えて、次の世代の人づくりに生きがいを感じていた。
嶺田村の農民たちは、嘉蔵の手習所を「松儒堂」と呼んで敬意をはらつていた。
松儒堂の名の由来は、嘉蔵の屋敷の中に、大きな一本の松が植わっていたことから、そう名付けられた。

嘉蔵とすぎが、嶺田村の子供たちと、晴耕雨読の日々を過ごしているそんなときに、娘のよしが三歳になる孫の中条右近を連れて、浜名郡雄踏村の糸家から帰つて来たのである。

それから二年の歳月が過ぎ、天正四年（一五七六）の正月、中条右近は、六歳となつた。
祖父である嘉蔵は、右近を神棚の前に座らせ、
「右近や、お前も早や六歳となつた。これからは、このじじがありがたい学問を教えるによって、誰にも負けないようにしつかりと学び、立派な人になるのだぞ」

未だ覚めぬ地塘春草の夢

階前の梧葉既に秋声

という詩がある。これは、

いま、お前は子供だと思っているが、すぐに成長して大人になつてしまふ

ところが学問は、なかなか難しく、身に

つかないものだ

だから、少しの暇も惜しんで、学問に精を

出さなくてはならない

池のほとりの春草のような夢は、いつまでも

覚めないでいるが

外を見れば、階段の前の桐の葉は枯れて、

すでに秋風の音がしている

それなのに、いつまでも春の気分でいるのは

けしからん

という意味で、学問は、子供のときにしつかり学びなさいという教えである。学問を学ぶ者は、誰でも最初に

教えられる大事なことだ】

と言つて、朱子学の祖で、中国の南宋の学者、朱熹の詩を聞かせると、右近は、

「ハイ、おじじさま。右近は一所懸命に学びます、よろしくお願ひいたします」

と言つて、嘉蔵から渡された書物を、大事そうに手にした。才気爆発な右近は、祖父嘉蔵の教えを、子供なりに理解したのである。

右近も、祖父嘉蔵の言うことによく理解して、元氣よく儒学書『孟子』を読み始めた。

嘉蔵は、勉強方法について、右近の意思にまかせていたが、三ヶ月ほど経つた頃から、音読の分量にノルマを与えて、レベルの向上を図つた。

右近は、嘉蔵の指導に応えて勉学に一所懸命であったが、なんといっても六歳の遊び盛りである。時には近くの子供たちと、日の暮れるのを忘れて遊びに夢中になることもあつた。

そんな時は、右近の本を読む声が、深夜まで聞こえることがあつた。

ある日、嘉蔵は、松儒堂の手習所に集まつた、十五人の学童たちに、「今日は君たちに、大事な話を聴かせよう。その後で、君たちから、その話の感想を聞くことにする」と言つて、教室を見渡した。すると、三十のつぶらなひとみが、いっせいに嘉蔵の顔を見つめ、一瞬、教室に緊張した空気がただよつた。すると、「お師匠さん、なにを聞くの、難しいことでは答えられないよ」と、元氣よい返事が返ってきた。

「いや、難しいことはない……君たちは、井戸のまわりで、幼い子が遊んでいて、その子が井戸に落ちそうになつたらどうするな……」

それから、右近の本格的な修業が始まつた。

儒学に造詣が深い嘉蔵は、儒学の教科書ともいうべき四書（大學、中庸、論語、孟子）を中心におのずと

「のう右近や、お前はまだ幼いゆえに、この書物はすぐには理解できなかろう。しかしdana、書物というものは大きな声を出して何べんも読んでいるうちに、おのずと

意味が理解できるようになるのだ。始めは文章の意味がわからなくとも、読んでいるうちに、まず文字を覚える。すると、次第にその文字の意味がわかつてくる。文字の意味がわかると、知らず知らずのうちに、書物の深い意味がわかつてくるのだ」

「ハイ、おじじさま。そのようにいたします。ですがおじじさま、この書物は大変難しい字で書かれておりますので、読めないところがたくさんあります。そのときはどのようにすればよろしくうござりますか……」

そう右近がねると、「ハイ、おじじさま。そのようにいたします。ですがお

じじさま、この書物は大変難しい字で書かれておりますので、読めないところがたくさんあります。そのときはどのようにすればよろしくうござりますか……」

「そうじゃな、右近が最初からこの『孟子』の書が読めるはずはないな。それではこうしよう。初めに私が、一頁ずつ読むから、お前はその後を続いて読みなさい。そして三回おさらいをしなさい。三回おさらいしたら、次の頁に進むことにする」

と読み方を教え、さらにその文字を書くことを指導したのである。

そう詎ねた。すると、後の席に座つていた、十二歳になる亀吉少年が手を挙げて、「それはお師匠さん、井戸にその子が落ちたら死んでしまうから、すぐに井戸から離れたところに連れていくよ」と答えた。するとその答に同調するよう、「そうだ、そうだ、すぐに助けなくては危ないよ」と、学童たちは口々に言い立てた。右近も、「お師匠さん、私は小さな子が井戸に落ちないように、大人の人にお願いして、井戸の周りに、子供が入れないように、柵を作つてもらいます」と、大きな声で答えた。

嘉蔵は、右近が松儒堂で学ぶ時は、「おじじさま」と呼ばせず、他の学童と同様に「お師匠さん」と呼ぶようになっていた。これもはじめである。

嘉蔵は、学童たちの答えを聞いて、満足そうにうなづくと、

「そうだな、人は、誰でも他人の不幸を見逃せない気持ちが瞬時に起こるものだ。人には温かい血が通つているから、他人が危険にさらされたときは、すぐに救いの手をさしのべる。それが思いやりというものだ。小さな子がヨコヨコ歩いていれば、いつ井戸に落ちたり、転んで怪我をするかも知れない。それでは可哀そうだと思う心が自然のうちに起きてくるものだ。それは、その子の家と仲良くなりたいとか、お礼をもらいたいと思うてする

のではない。わかるかな……」

「小さな子に、救いの手をさしのべるのは、人には生まれながらにして、思いやりの心があるからだ。この思い

やりの心を、いつまでも忘れないでいるなくてはならない。思ひやりやあわれみの心がない者は、人ではない。悪を憎む心のない者も人ではない。目上の人を敬い、人にに対する礼儀の心のない者も人ではない。善悪を見分ける心のない者も人ではない」

と説明すると、学童たちは、真剣なまなざしで、嘉蔵の顔を見つめていた。その学童たちの表情から、嘉蔵の話の意味が、十分理解できている様子が、はつきりとわかった。

「このように、人には、仁の芽生え、義の芽生え、礼の芽生え、智の芽生えが、生まれながらしてそなわっていく。よつて、人の上に立つて指導する者は、この仁、義、礼、智の四つの徳を身につけるために修養を積まなければいけない」

と言つて話を終わつた。すると、右近が手をあげ、

「お師匠さん、四つの徳が身につくとなるのですか」と六歳の少年らしからぬ鋭い質問をした。

「それは、人が生まれながらに持つてゐる、善の心を実らせるために、徳を育てることが必要で、徳を育てるこどによつて、道徳的な人格者が完成する。これを『君子』

という。人の上に立つ者は、君子にならなければならぬ。なぜならば、人の上に立つ者の善い政治は、すべての人々を幸せにするからである。小さな泉から流れ出た清水が、やがて大河となつて、村々の田畠を潤して海にそそぐように、生まれた時の四つの徳は小さいが、これを育てるにより、ついには天下をも平和にする大きな徳になつて、村々に行き亘つていくのである」と教えた。嘉蔵は、読書き算盤を教えると同時に、德育にも力を入れるのであつた。

その頃徳川家康は、武田信玄が元龜四年（一五七三）四月に死去すると、直ちに反撃に転じて、一度武田軍に奪われた三河の長篠城を奪還した。

織田信長も勢力を拡大し、將軍足利義昭を放逐し、朝廷に働きかけて、七月に天正元年に改元させ、その勢いで家康と連合軍を結成して、朝倉義景、浅井長政連合軍を撃破し、両家を滅亡させてしまつた。

また、父信玄の後を継いだ甲斐の武田勝頼は、天正二年（一五七四）五月、二万五千人の軍團を率いて、家の臣、小笠原長忠が守る徳川方の拠点、遠州高天神城に攻撃を開始した。

この戦いが、第一次高天神城の戦いである。

つづく

陰翳の美学（その二）

外山 知

第二章 美意識に觀る陰翳

四、歌舞伎、文楽から演劇

歌舞伎、文楽は、約三七十年の歴史を持ち、江戸時代町人の演劇として發展した。その歴史は五期に分類することができる。

第一期

源流は一六〇三（慶長八）、出雲大社の巫女阿国が京都で演じた念佛踊の歌舞に始まり、十七世紀中期の若衆歌舞伎禁止までを言う。

西洋ではエリザベス朝のシェークスピアの「ハムレット」初演の頃である。我国では徳川家康が征夷大将軍として幕政を開き、將軍家の式典とした。

応仁の乱（一四六七—七七）以後、民間芸能として女猿樂、女曲舞、白拍子など、平安から中世にかけ民間に

流布、女性の諸芸能の影響が大きかつた。

仏教伝来以降、女人禁制下に庶民の底流で許されていった。その状況中、中世の戦乱から解放され女性主動で、再生された事は芸能史上意味は大きかつた。

たゞ演目にもよるが女歌舞伎は、官能本位に流れ風紀上の弊害から一六一九（寛永六）禁止。

後若衆歌舞伎、美少年が取つて變るが、社会的弊害によつて禁令された。

第二期

科白劇の確立期（元禄から享保中期まで）。若衆歌舞伎から野郎歌舞伎へと、科白（せりふと、しぐさ）の演技が熟達した。

狂言、能舞台も整備し、島原狂言の「口立て」式となつた。やがて近松門左衛門の淨瑠璃、世話物が、元禄後期から「人形淨瑠璃」へ、なお「文楽」をも吸収し、絵島生島事件のため山村座が断絶した。

享保元年河東節が、劇場出語りもあつてか淨瑠璃界と交流、後の音楽劇へのステップにもなつた。

第三期

人形淨瑠璃撰取、拡大期（享保末から寛政中期まで）

この期は人形淨瑠璃全盛の陰に光を失い、淨瑠璃の名作を吸収し、義太夫狂言（丸本物）と言う新ジャンルを確立した。

江戸世話物狂言の拡大期で、近松と竹本義太夫の功は、文学的、音樂的にも大きかつた。有名な「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「假名手本忠臣蔵」三大時代物に注目が集まり、歌舞伎の存在は陰を落した。

淨瑠璃は、波に乗り、高い文学性と義太夫によつて、三味線音樂へと歌舞伎史の変換をなした。

折しも徳川封建社会独特の近世悲劇、主君のために親子、夫婦など犠牲に供する陰影が、「実事」として演技され、注目を集めた。

十八世紀（宝曆以後）脚本の合作、立作者、一枚目、三枚目から狂言方、見習いに及ぶ作者の序列化、花道の完成、能の回り舞台の改装など観客を意識された。

手法をなした。

作品についても、「一番目狂言（時代物）と二番目狂言（世話物）を独立作とさせるなど上方、江戸共に合理的

この流れから常磐津、富本、清元と豊後系三淨瑠璃に「長唄」が加わって劇場音樂、今の邦樂、邦舞の基礎と

うになつた。

新風の起るのは、一八七二（明治五年）に新政府の干渉もあって、時代物の荒唐無稽さを排し、史実第一主義の演劇、活歴劇の創造をうながした。

その頃腹芸と言われる心理描写の系譜を樹立したのは、九世市川団十郎であった。俗に、「散切狂言物」といわれる活歴劇は、明治風の世話物として、五世尾上菊五郎などにより開拓されていった。

明治十年代から二十年代にかけては、政府の欧化改良政策によって、劇界の洋化は急上昇し、国立劇場建設、女優やリリアンズム演劇の導入、俳優の地位向上など、近代演劇史上意義は大きかった。

旧世代の師匠に变つて、文学者達、坪内逍遙、松居松翁、岡本綺堂たちによつて、近代歌舞伎の新分野が切り開かれていくた。

明治末から大正、昭和にかけ、文芸的戯曲、菊池寛・山本有三・谷崎潤一郎などの上演、河原崎長十郎、中村翫右衛門の、前進座独立、数々の劇場が統合買収され、未曾有の歌舞伎王国が築かれていくた。

さらに戦後は国際化が進み、海外公演により世界の文化財として評価も高まつて來た。能の発達過程を五期に分類して歴史的過程を展開して來たが、今総括的に陰影の美学を考察することで、テー

マに触れ得たい。

なつた。

第四期

江戸歌舞伎の大成爛熟期（寛政末から明治維新まで）

歌舞伎の大勢は江戸に移り、下町の庶民生活をリアルに描く、「生世話狂言」と「変化舞踊」が栄えた。

弘化年間（一八四四—四八）に「蛇の目」と呼ぶ、二重の回り舞台も出来、变幻奔放な狂言が続出した。

早替り、けれども濡れ場、ゆすり場、責め場、殺し場など、暗黒面の描写が特色。

文化・文政年間（一八〇四—一三〇）前後が、爛熟退廃した世相の反映でもあつた。なかでも怪談物、白浪物など七五調と下町情緒の詩的描写を感覺的に演出させた。

天保の改革による変容でもあろうか。「勧進帳」や明治の松羽目物、活歴劇につながる高尚優雅な歴史舞踊劇、なお歌舞伎十八番を制定し、江戸劇壇に団十郎宗家の権威を確定した。

たゞ天保の風俗取締りの余波を受け、黙阿弥の作風が、南北に比較して様式化していた。そして明治へと美化様式化の傾向をたどつた。

第五期

近代現代の百年（明治維新から今日まで）

この期は文明開化、欧化思潮の嵐の中で新時代順応と社会的地位向上化を目指したが、庶民から浮き上がり、新派、新劇の発生で、逆に古典的伝統演劇を待望するよ

な中世の能芸術で忘れ得難いのは新能である。

およそ能の世界にあつて能面の果たす役割は、その能

樂の演出のすべてと言つてもよい。

能面の動きによる表情の微妙な変化は、観客を幽玄の世界に誘う。面の陰影は一つの仕草に表情が変転する。

それはシテ役が面に自分を具現化するもので、その表情は千変万化する。

なお中世の能芸術で忘れ得難いのは新能である。

能面の考察。

面をやや俯かせて、難きや、決意を表わす「クモル」、ややあおむかせて喜悦の情を見せる「テラス」、左右を見まわしたり、風や虫の音を聞いたりする「面ヲツカウ」、鋭角的にはげしく動かす「面ヲ切ル」など、総合芸術の中には、かくまでその美学を感じる領域は、日本人の美意識に対する極端なまでに、きりつめられた世界と言つてよい。

私達が日本の四季の美にその風土性を、自分の中に取り入れ、それを愛し芸術の奥義にまで発展させた美的感覚は、偉大な文化遺産といつてよい。

また人形淨瑠璃・文楽に見る陰翳の美学は、舞台効果を高める黒子の存在である。

黒子が人形の呼吸と一致し、人形が心の内面を持つ。この意識的な働きは芸術を作り出す美学で、影の人、黒子を介して人形に心を吹き込み、人形が人になり変つて芸をこなすは、江戸文学の開花と言つてよい。

黒子の活躍が人形に魂を入れる。

これは、東洋的美意識で、ナチュラルを高唱する、西欧のオペラ芸術など、遠く及ばない所である。

二月堂前の「良弁杉」など親子の愛情を描く魅力も、この芸術を深く嘆賞しなくては、理解出来ない所と言える。

五、絵画、巻子本 源氏物語絵巻

絵画の平家納経は、平安朝末期を代表する巻子本仕立ての国宝である。平清盛が一門の繁榮を祈願し、巣鴨神社に奉納された。

法華経三十三巻中、第二十三巻の巻子本（一一六四）で、極彩色豊かな作品。墨色鮮やかな筆跡を拝見するにつけ、美的表現効果を感じ、陰翳の諸相をのぞき見ることが出来る。

華麗優美な極彩色の中に墨蹟を引き立てるもの、それは華麗であればあるほど、その真髓に心を引かれる。内に秘める物の美を感ずる。

対象客觀と感情主觀の一一致する所に、調和的情趣の世界を感受してやまない。

なお平安朝の美を飾るに相応しい巻子本は、源氏物語絵巻にも見える。

各巻に見る光源氏を中心とした女房達の引目、鈎鼻の絵巻にも見える。

れる。

衣服、調度、建築、いずれも精細で写真的であるのに對して、人物の面貌は抽象化しているのが、いつそう場面をより引き立たせている。

能面の「小面」、絵巻に見る中軸の美に、この様な技法を用いるのは、物語を幽玄のロマン、陰翳の美学に誘う要素と思わざるをえない。

六、陶芸に見る美学

およそ陶芸は陶土（石英を成分）を素材として形成し、加熱硬化させた造形品（陶磁器）で、我国では焼成品の意味から「やきもの」と総称されている。

西洋では古代エジプトの遺物には、BC五千年頃の土器、BC三千年前に青緑色の陶製品が現われ、BC千五百年前頃には青緑釉の彩画陶器が出来ていたようである。当時の陶製品には皿、鉢、高杯の他、人物、動物の神像やスカラベがあつて、彩画は水草やハスを描いた物が多かつた。

これも、陶芸美となつて他の周辺に広がり、ギリシャ文化圏から地中海世界へと広がり、クレタ島では製陶技術が、美術品として壺類が脚光を浴びた。土器から青銅器、鉄器へと進展する中で、模様も草柏

美人描写。三十六帖柏木三絵に見る御簾に、大和絵、緑色に流れる黒色のコントラスト。また淡黄色、黄金の色調、女房達の匂うが如き色調、豊かな表情が物語を書きだてる。

大和絵の諸様相の中で最も注目を集めるのは、やはり人物で、引目、鈎鼻の技法を生かすため、決して真正面からは描かない。

斜前か横から捉えた輪廓は瓜実形で、大方が眼から豊かな頬へと、やや下膨れで、女性はいずれも秀でた額に、長い振分髪を引いている。

肩には削いだ髪、目尻に後毛が数本、眉はほぼ直線状に長めに、細かな線を幾本も引き重ね、眉の尻は少しづかしていいる。

目は眉と間隔をとった位置に、ほぼ一直線上に、少し目尻を上げ氣味に引かれている。

鼻は鼻梁が、「く」の字状に小さく、口はその下に朱でいとも小さくチヨンと打たれた。俗にいう「おちよぼ口」で、よく見ると中心に僅かに墨を配し唇の合せ目を示したのではないか。

顎は豊頬をうけて、丸く短い。横顔の場合は眉と目の尻のみが描かれ、鼻は描かない。

特長は何れの人物も、眠るが如く、見つめるが如く、悲しむとも見え、微笑むとも見える。

無表情かと思えば、万感の想いを秘めるかとも感じられた。

この鉛釉は多くの土になじみ、緑色、褐色の鉛釉陶器となつて、ローマ文化を媒体として、紫色の釉も用いるようになつていった。

ローマの鉛釉陶は東ローマ時代の初期までシリアで多く作られたが、パルチア王国、ササン朝、ペルシア及び東洋方面にも流入するようになつた。

3世紀の初め、パルチア王国を倒した、ペルシアに伝受され、8世紀半ばアッパス朝（サラセン帝国）になって、金銀器の使用が禁止され、それに伴つて陶器は急速に発達した。

陶器はイスラム文化の影響を受けてペルシア陶器（イスラム陶器）を生み、やがてエジプトに伝わり十三世紀頃まで盛んに作られた。

それはルネッサンスの美学の中で、文芸復興と共に、イタリアのフローレンスから光彩を放つた後に、ドイツの硬質陶器に発展した。

さらに陶器はイギリスで「ストーン・ウェア」と呼ば

れ非常に発達した。そして十六世紀にマジヨリカ島を経てイタリアに移入し、スペイン陶器の技法がヨーロッパ各地に広がった。

同じ頃イギリスで、ベルギーからの陶工技術が、ロンドンで軟質陶器を作り、フランスでもイタリアから移入した陶磁技術で宮廷好みの繊細な陶器を作った。

そのフランスでは十八世紀になつて国営製陶所が開かれることに至つて、頂点に達した。一方これに先だつて十六世紀に、中国から陶器製法の研究を受入していた事も忘れることはできない。

やがてドイツのツエットリッツ、カオソンによる製法技術が成功し、王立陶器製造所が新設されると、ヨーロッパ各地で磁器が作られるようになつた。

陶器はイギリス、ドイツ、ロシアなど、オランダ、スペイン、フランスのセーブル窯、オランダのデルフト窯など有名であつた。

第二次大戦後はフランクとか、コーティングなどの陶芸家のほかコクトー、ピカソ、ブラックなど、詩人や画家の造形によつて、新分野が開かれていつた。東洋的世界（中国、印度、韓国）でも、西方文化の影響を受けて、彩陶、黒陶、白陶、灰陶等と呼ばれる土器が作られた。

古く殷代BC十四—十二世紀頃、さらに西周時代にかけて、白陶、灰陶が現われた。

立され、五釉（赤絵）、金彩も現われて、呉須赤絵と言われ、光彩をはなつに至つた。

清代（十七世紀—二十世紀）には、染付、五彩に、さらには彩粉が用いられ、精巧な磁器になり、その光と翳の投げかける美は精巧を極めつくした。しかし二十世紀末の文化大革命によつて、おしくも破壊消滅するに至つた。磁器を育んだ文明にも、陶磁器に見る奥深く秘られた陰影の美学を見る事が出来なくなり、惜しむに余りある、幻影と言えよう。

中国の影響を受けた北朝鮮、韓国でも、早くから陶磁器が盛んで、唐宋の文化を移入した。それは高麗（十二世紀）時代に飛躍的に発達し、青磁、白磁、天目など盛んに作られた。

以上、ヨーロッパ、中国の陶磁器を巡つて陰翳の美学にふれてきたが、人間は生存に必須なものから創造性をめぐらし、より美しい物への憧憬を抱き、文化の芽を身辺に育んで來たのである。

その遺産は文明の底流を支える物となり、脚光を浴びては衰悲し、また次の高次の美学をと、連鎖を歩むのであつた。

それは人智の限り無い欲求でもあつた。ある一物をヒ

灰陶は灰色の土器で、三脚のついた甕が多く、窯の中で燃料の灰をかぶつて、自然の釉となつたらしい。

後に中国独特の高温焼成の青磁釉となつて、発達したものと思われる。

漢代BC三—AD三世紀にかけて厚葬の風習と相俟つて、人物や住宅、調度・家畜など、種々のものが作られていった。

やがて西方から鉛と媒溶剤とした緑釉や褐釉が見られるようになつた。

六朝（三—六世紀）時代には陶器、隋代（六—七世紀初）には高温焼成の磁器も現われ、唐代（七—十世紀）は各地の窯で日用陶磁器が盛んに焼かれるようになつた。

なかでも越州窯の青磁と、荊州窯の白磁はことに有名で、今日でも芸術家の愛玩するところとなつてゐる。その陰影は見事で、低温釉の唐三彩と称される華麗なものも作られた。

唐文化の海外発展と共に、中国の陶器は周辺各国からヨーロッパにまで伝えられ、宋代（十一十三世紀）に入つて、南宋の官窯で焼かれた青磁は、現在も世界的に珍重されている。

元代（十三世紀—十四世紀）に入つて、彩飾、染付の技術が大いに発展した。

明代（十四世紀—十七世紀）に景德鎮に政府の窯が設

ントにして、高次の段階へ進む切っ掛けは、實に微小なものかもしれない。それを形成する過程は、實に尊く嚴かできつい物でもあつた。

それを乗り越え乗り越えて手を動かし、体験を体験している中に何かを作り得たのであろう。その積上げられた歴史は尊いものである。

歴史は芸術を生み、芸術作品には一つのロマンが秘められている。長史発展の中で、例えば、絵画に見る時代様式の流れを察知するに、ヨーロッパのロマネスク・ゴシック・ルネサンス・バロック・ロココの各様式に見られる芸術觀は、それぞれの文化圏を代表する人間觀、民族感情の發露として、思惟性の深淵から育くみ出されたものである。

それが時の文化・芸術と結びついて名作品を生んでいった。その流れが、芸術のジャンルの中にあつて陶芸にも、その風潮が生き輝いたと言つてよい。

絵画のコーヒーアートとか、ミルクアートは、自然に陶芸の中にも取り入れられた。時代と反映する格調となつて、前進もして來た。

陶芸は王室の珍重もあり、より高度な極をきわめようとした。その感覺が芸術家をして發奮させたと見てよい。現代彫塑は過去の類型を打ち破り、その上に破格な思想を導入することが、生くべき姿として具現化された。集大成されたものを超越するには、破格しかなかつた。

例えは絵画の分野でのピカソとかマチスの芸風は、それとといってよい。その集大成された美を打破する逸話に次のようなものがある。

ある時、ピカソは自分の道を何とか切開こうと苦悶し、憂うつの日々を送る中で、時たまパリーの満員電車に乗り合せた。そのとき心が憂鬱の中にあってか、ふと持っていた拳銃を取り出し、いきなり市電の天井めがけて数発、発砲させた。

同乗の来客は異様なアクシデントに、ぎょっと天井を見つめ、驚愕した。

その様子を見たピカソは、目に焼きついたこの異様な状況を、画面に表現しようと電車を下りようとした。

その時、警官がやって来て逮捕しようとする、ピカソは「自分はこの状況を絵画に表現しようと思っている。絵が完成されるまで逮捕は待ってほしい」と懇願して、画廊へと急いだのであつた。

こんな逸話はせつぱ詰まつた彼の心情を伝えるのに、よいエピソードである。

芸術家が自分を超越して、新しい感性をつかむには、かゝることもあるうかと思われる話である。

ピカソは牢獄の中で次々と新しい作品に挑戦して現代絵画の素材を、そんな所に求め得たとされている。

完成された陶磁器界にあっても、かゝる手法に似た事は大同小異あつた。

に、天平文化のきらびやかな存在を管見することが出来る。

もつとも七〇一年には、大宝令によつて、雅楽寮が設置され、中国の大樂署に触発され、国家的管理の下に雅楽の輸入がなされた。

その後の楽制改革は雅楽寮を中心に進められたようである。

最初は神楽、催馬楽、今様、朗詠の中で、神楽、東遊などの和楽と唐樂、高麗樂など、外来音樂の両方を教習、演奏していた。

弘仁年間（八一〇—八二四）には和樂は大歌所で行なわれるようになり、雅楽寮では外来音樂だけを扱う帰化人が、当つたように思われる。

九四八年（天暦二）には、雅楽寮に代り樂所が設けられ、その推移の事情は樂家の確立と関係があると思われるが、定かではない。

箏曲についても大御歌所および雅楽寮で、和樂、外来音樂を扱うことになり、主として樂曲の伴奏面に演奏されるに至つた。

箏は中國の戰国時代に秦で生まれたといわれ、当初は五弦であったらしい。

漢代には十二弦になり、統いて十三弦の箏が一般化されるようになつた。

我国には奈良朝の頃伝來し、雅樂の合奏器となつた。

今見る前衛陶芸、オブジェ焼、クレイワークなどを生み出して行き具現化された展覧会、個展を賑わせている。その歩みは見る人をして共感させ心酔させるに至るであろう。

過去の完成されたものにこだわつていては、新鮮美がなく、停滞を余儀無くさせられ、現代の感覺、感性は合わないと思われる。

華々しい芸術各界にあっても、陰翳の美学はその中に生きずいて、作品に輝きを見せていることを感じさせる。

七、雅樂、箏曲

雅樂は中国から伝來し、早いものは薬師寺東塔の水煙に見ることができる。天衣を翻して舞う飛天の姿の透し彫りの中に、笛を奏てる楽人の姿を見る事が出来る。この様に雅樂は仏教芸術と呼応して伝來したことが立証される。また東大寺大仏殿八角火袋にも、音声菩薩像の笛をもつた浮彫りがある。

なお正倉院宝物の螺鈿紫檀や五絃琵琶などは、西域の民族からの伝承とされており、天平文化の國際性を窺い知る事ができる。

ラクダに乗つて琵琶を弾いている胡人が見られる様

後に樂箏となり、發展した。

安土・桃山時代は戦乱もあつて、陶芸と共に北九州に

筑紫箏（筑紫流箏曲）が起つた。

それは江戸時代の箏曲（八橋流、生田流、山田流）の俗箏の源流となつていたようである。江戸後期から明治にかけて、京極流、生田流、住山流、継山流と広義の生田流に發展した。

その祖をなしたのは、筑紫箏の大成者賢順（一五四七—一六三三）であった。

一方、俗箏の祖は有名な「八橋検校」（一六一四—一六八五）で、全盛期を迎えた。大正期に新箏曲の出現と共に高音用の短箏、低音用の十七弦と、新箏が生れた。

音楽の種類によって、樂箏、筑紫箏、俗箏、新箏と四種に分類された。それぞれ独自の音色を響かせている。

新箏は巾広く現代調の曲調をたくみに、醸し出す事になつた。音域は多種に、現代調の組曲を現す中で、今日の陰翳を見るに至つた。

調弦、すなわち柱を立てる位置によつて、樂箏は六種また十三種に及ぶが、俗箏で最も基本的な調弦である平調子、雲井調子は、遅く確立して主流を示めた。

流派、系統によつて途中で調弦が変り、今では作曲者によつて新しい調弦も考案され、駆使されている。樂調（音楽）としては平安中期頃から、催馬樂の伴奏に箏を使用していたようである。

平安末期に、平家の落人が九州地方に移住した時に、筝の音楽も移され、これが北九州に広まつて築紫筝の源となつたようである。

格調高い高雅な音響を出すのも、筝の構造をなす材質によることは勿論である。槽には良質な桐を頭部に、尾部には唐木が使われ、竜角、竜眠近く、裏面竜背に音穴がある。

槽表面に琴柱によつて調弦された絹製の弦が張られ、端正な名器を作つてゐる。

古い年代物の上質な名器は勿論、奏者によつても名器を弾く技法に、共鳴音の差位は生ずるだろう。左手（押手）の効果、筝曲音（いろ）をつける。

また弦を弾く奏法によつても、音響に陰翳の美学を感じる高雅さを、古来から察知する所であろう。

琵琶は東洋の弦楽器の一つで、インド、西域、中国を経て奈良時代に日本へ輸入され、古代宮廷雅楽に用いられた（楽琵琶）。

後に盲僧琵琶、平家琵琶、薩摩琵琶、筑前琵琶などの種類が生まれ、平安初期の名手藤原貞敏が中興の祖と呼ばれている。

琵琶は十二弦琴と同じく雅楽の伴奏として奏され、後に琵琶の琴（よつのお）と呼ばれ、正倉院文書、十巻本和名抄六、源氏の紅葉賀にも見られる。

なお管見するところによれば枕草子も琵琶についてふ

で、庶民に親しみやすかつた。

そのため淨瑠璃本の脚色するところとなり流布した。音曲も語りに合せやすく、比較的低音の魅力も、詞章とマッチしたと見てよい。

琵琶の楽器そのものの陰翳もさる事ながら、低音の曲調で語りを引き立てる、陰翳の美学を奏でる。伴奏曲として哀調を帶びた曲調が、琵琶の特質を存分に輝かせていた。

なお和楽器で俗謡を引き立てる、弦楽器に三味線がある。

三味線は琵琶法師によつて改造され、やや丸みを帯びた方形の胴に棹をつけ、先端に海老尾を設けた。

三弦を撥で奏する簡単な和楽器で、胴には猫または犬のなめし皮を張るが、棹の太さによって、太棹、中棹、細棹に大別された。

大きさにより太棹は義太夫に、中棹は地歌や常磐津に、また清元に、細棹は長唄、小唄などに用いられた。

永禄年間（一五五八—七〇）琉球から蛇皮線が入つて来て、調弦法など琵琶法師によつて改造されていった記録もある。

当時仮名草子恨の介（一の上）、今様の浮世草子、俳諧にも管見されている。長唄、俄獅子、端唄などが、三味線を伴奏にして盛んに歌われるようになった。

公式の芸術舞台などでは、三味線を中軸に、鼓、横笛

れ、やがて琵琶法師が平家物語を平曲に合せて、辻々で語り聞かせる手法で、流布して行つた事は有名である。

類從本兼盛集源氏、明石の巻に

「入道・琵琶の法師になつて、いとをかし、うめづらしき手、一つ二つ弾きたり」

とある事から、この頃盛んに琵琶を弾ずることが、度々であつた事が推定される。

万葉集にはじまつた連歌は院政期（応徳三年・一〇八六にはじまる）頃から盛時に入るがそれとならんで、琵琶も盛んとなり琵琶合せ、琵琶を左右に分け合せ、その伝来、形状、音色、の優劣を競つた。承久二年（一二二〇）三月二日、順徳院御琵琶合せにみるよう、公式行事にも取り入れて行なわれた。

宮中で雅びな雅楽の伴奏として奏された。

後鳥羽天皇の頃、盲人生仏が先行の音曲の曲節を集大成し、語り始め、後南北朝期に明石檢校寛一が大成した。

応永、文享（一三九四—一四四二）の頃が最も盛んで、その曲節は、謡曲、淨瑠璃などにも流入していく。

江戸期の町人物の曲節は人情本、諸本にも反映して、明治以降にも尾を引くようになつた。

前述した様に、民間へも流布して行く過程で、西洋音楽との共鳴もあって、新奇な物を生むに至つた。

たゞ十三弦と違つて、平家琵琶は四弦、五柱であり、前記の如く樂琵琶より小さく、持ち歩きに適していたの

などを用い、歌舞の伴奏として奏でられた。いずれも持歩きが出来、江戸庶民に愛好された。

やがて四脣半の情趣にもしのびこみ、謡や語り、歌舞の陰翳の美を醸し出す効果は、大きなものがあつた。

音律の面で一般に長音階による楽曲に対しても、短音階による構成も、音曲構成上に大きく変化を見せ、それを聞く我々に様々な感情をいたさせた。

勿論人間を包む風土性、環境要因によつても異なるであろう。

それを表現する人間的な素養によつても違つて来るのは当然と思う。陰翳の美学は表現性にまつわる様々な因子によつて特異性を顕現するといつてよい。

世界には様々な民族、習性を持つ人間が生存している。情意の面でもまた、喜怒哀楽の感覚の差異はある。美的な表現の中に美の輝きを、より一層引き立てる陰翳の要素があつてこそ効果を放ち得る。

急速を流れ下り、岩にしぶきを打ち当てる激流の調子などは、撥を小刻みに早く打ち鳴らすことによつて、その情趣が現出し、強弱も高音となる。

その場の情景を表現するのに、奏者の勘が大きく左右することは、他楽器にない玄妙な味わいと言つてもよい。幼き頃からの芸の習いは、勘の修得にある事を思えば

むべなるかなと思われる。奏者によつて陰翳曲直は、作り作られる組立てとなろう。

八、服飾史と衣裳、被服構成

さて次に、日常茶飯事に見る陰翳の美学にも、触れてみたい。

衣食住に包まれた人間感情にも、その美学を察知し得る。先ず衣服を見る感覺を考察の対象として見よう。

上古時代は大和神話の流れをくんで、諸神々の衣装が、

そのまま、被服構成と着装法となつていったようである。

女性は衣裳と称され、裳系統であり、男性は衣紳と称され、紳は軍に直結する。こうした衣装は、大和神話にも管見される。

飛鳥、奈良朝に入ると、多岐にわたり、中国的な服装は平安時代に日本化されて、唐衣裳として発展した。

女性の衣の裾は襞がむらがり集まつて、腰の周囲を囲むように縫い合わされていた。俗に、「もすそ」を形成していく、上衣には今日の襟巻き、(ショール)を着用している。

なお天皇から下賜される礼服(女性)は唐様の紋様に、着色豊かな紫、緑、赤、黄の草紋様がほどこされ、裙も三重の重ね着などと、華麗さをともなつた。

どが武家の実用着から、華美な晴れ着となり、現在の神官の服装に引きつがれていった。

公家の地位の没落と共に、小桂のあでやかな優美さも姿を消した。

壹裝束、衣被衣、衣袴は、女性の旅装姿である。広袖の衣をかぶり、小袖の利用と相まって、実用化と広範囲な移動を可能にしていった。

男性は直垂、筒袖から、広袖へと、素材も華麗になつて、武家の正装として、大紋、素襷となつていった。室町、桃山時代になると、女性の小袖、袴が表着化して模様物が現われ、これが現在の和服の源流となつていつた。

男性の小袖、四幅袴は働き着として着流した。四幅袴が後の股引きに代つていった。武家の大紋は家紋をつけることから、現代紋付きのもとになつた。素襷はまた恵方万歳の服装に利用された。小袖、帯は庶民の小袖に模様が現れ、片身替りという新形式も出始めた。

さらには合戦の時の素襷が発達し、後袖をとり去つて肩衣袴と変化した。

長袴は、上衣は着物式に前と合わせて着用し、袴は立てて着用した。いずれも室町、桃山時代を反映した風俗模様を察知し、美意識も庶民感覚となつて現われていった。

首は玉飾りなどの、宝石類を輪にしたネックレス風の装飾で飾つた。

髪も鬢頬風から頭の上部で大きく「総角」二つに分けた飾り結びにして、気品を保つ貴族風な髪型飾であった。

なお男性の制服の一つに、白絶の袍と袴の職人姿があり、当時の三服の一つである制服の姿が、しのばれる。

庶民の女性衣裙は、後世の小袖とつながりを持つ姿となつて発展する。

同じ飛鳥、奈良朝の頃でも、朝服(文官)初期のものは菱装束であった。それが平安末期から強装束に変わった。中国風、唐様の影響もあってか、武官朝服は聖徳太子風の服装で、両腋があけてあるので菱装束と呼んだ。

女性はこの時代末期には、背子、裙といつて、菱装束の晴れ姿も、平安末期からは、造形美的優れた女房装束となつた。

平安時代になると男性は束帶、女性は唐衣(十二單)になり、華麗な王朝の雅を顕現して行つた。

もちろん同じ平安朝でも衣冠と、公家の平常着である直衣が、後世まで存続して、用いられるようになつた。

その過程の中で、单衣の袴を着用するようになった。

さらに、小袖の四幅袴、付け紐(帯の代りをする)が儀式化されて、七才の時に付け紐をとつたとされている。

鎌倉期に入ると、武家社会に即応して、狩衣、水干などとなつた。

江戸時代に入ると、打掛が、秋から春の晴れ着として武家から民間まで用いられ、民間では婚礼用として、美意識を誘つた。

腰巻姿は夏季の晴れ着として、武家の実用品であつたが、形式化した。

江戸初期の婦女は絢爛豪華な服装だつたが、明暦の大火以後消失し、幕府は衣服取締りを厳しくした。

元禄年間の女装で髪飾りが現われるのは元禄時代からで、帯幅も広く、見返り玉結びの髪型は、元禄の情緒をかもし出す美学として特質された。

見返り情趣に玉結びは、陰翳の美学の典型といつてもよい。また遊女は友禅の小袖を着用し、帯は前結びで、小袖の友禅は友禅斎にはじまる。

浴衣、浴後の着物が、明治になると、寝巻、病人の着物となり、現在では外出着にもなつてゐる。

商人の女房や、岡持ちを持った出前の女の服装も、昭和の初めまで続き、赤いたすきが甲斐甲斐しさを表現して愛らしい。

浴衣(水茶屋の女)を旅姿に着たのは、主徒つれだけた女中達で、西洋の雨具が普及するまで続いた。粹な身なりや容姿が洗練されていて、洒落た色氣を持

つた文金高島田も、情緒を説く。町家の上房の後ろ結び、紺かすり帯の下に前掛け帯は、生活の便利さからだつた。

町家の子供達は三歳髪置き、五歳袴着、七才帯解が、服装の決まりとして、出来上つていった。

男性の半袴（武士）は、俗に肩衣袴を言うが、上下そろつたものを指している。

ぶつき羽織などの服装改良は、便利重宝から工夫され身動きが活発に出来るので、幕末騒然の世には効果を發揮した。羽織の長短は時代相を表し、短いのを庄屋羽織といった。

長羽織は若衆、上方の淨瑠璃語りから流行し、これに文金風、金々先生と町人文芸がもてはやされた。

半袴（武士）江戸中期に模様が、小紋と決まつた。鮫、霞は、江戸末期に完成した。革半纏の職人、その妻、農民などの防寒用として利用された。

雨具類も桐油合羽、晴雨兼用の引回しが用いられ、羅紗合羽も、文明開化以後、鳶と代わって使用され、黒づきんは印象的であった。

それが筒袖、義絆、など、初期洋装ズボン化、洋傘（コーモリ）となる。

明治時代、フロックコート、大礼服などを政府は官吏の制服として作成、これが職場服のもとなる。夏、冬の礼服の規定、大勲位菊花章など白ズボン、礼服用の帽子が印象的である。

一、白小袖に緋の長袴を着用し、袴の紐は、右脇で結んでたらす。

二、單をその上に着る。

三、そして紅の打衣を着る。桂（五つ衣）の上に着ることもある。

四、桂と着、单より小さく、古くは十数枚も重ねた。後に五枚に定められ、五つ衣と呼ばれた。

五、表着を着る。

六、唐衣を着る。唐衣の前は袖だけと同じで、後ろはそれより短い。着用の際は、襟を外へ折り返す。腰には裳を着けるのを特徴とした。

重着の技法が佳麗豪華さを出し、こゝにも陰翳の美学が漂っている。

艶やかであればある程、表を引き立てる陰翳がこよなく極彩色を顕現させるのである。他の時代も、それぞれの時代によつて、その世の風俗に従つて美意識も異なる。美に憧れを持つ人々の意識は、世俗を背景にして、あるいは実用的に、あるいは艶やかさを競う美学となつて現われた。

各時代の服装は、やはり陰翳の美意識が輝きとなつて、その時代の文化に寄与し得たと解し得たい。

主徳の関係構造が生活様式に服飾関係にも、見える。家族制度の変遷過程によつて、権力構造が、「位階」公侯伯子男爵、庄屋制度に、また庶民生活にも及んだ。

女性の洋装は、鹿鳴館時代の到来で夫婦同伴のため女の洋装が強いられ、紫色のドレスと帽子が印象的で、新しい衣生活がおこつた。

明治、大正時代の、書生紺と縞袴という服装は、学生の間に広がり、下駄の朴菌姿が印象的である。

肩掛け東コートに代つて、肩掛けは、女性のあこがれの服装品で、現在では服飾品となつていて。

学生服、女学生は、だるま服が変化した学生服で、大正以後は小学校の生徒に用いられ一般化した。

女学生の庇髪、振袖、行灯袴の正装は袴裾を加工して、制服の役目を果たし、洋服に変わつていった。

このように服飾史を眺めると、各時代の美意識の流れと美的追及を、ひしひしと感ずる。人間がそこに生き、生活を構築して来た証を、衣装によつても、みて取ることができる。実用的な日常生活が生んだ美学は、人間の歴史の中で生き、存続したのである。

輝く世界にも、必ず陰翳を伴なつた、豪華な美が形成されていた。平安貴族の東帯、唐衣十二單は服飾構造の典型で、特徴を最もよく表している。

ちなみに現代着用しているネクタイですら、二枚重ねて着用した場合、美的感覚は重厚となる。そこには、ちらつとしか見えない陰翳の美が、表面を引き立てる効果を發揮している。

前に述べた重ね着の裳の着用順序を考察すると、

国家権政の統一が地方に、庶民生活をも統括し、第二次大戦の終戦まで続いた。

戦後は上下の差別なく主権在君から在民になり、種々の様式美がうち統いてきた。資本主義社会では、貧富の差が大きい。富の集積は、やはり従前の家族制度はないにしても、良家の家事見習いという形で、結婚前の花嫁修業が行なわれ、今日にも及んでいる。

そのような生活様式の中には、従前の家族制度がないにしても、上下の関係（例えば主人の送迎など三つ指（親指、人指し指、中指）を軽く床につけての丁寧な礼）をついて迎える習慣などは、上下の関係ではなく、古くからの美風として様式美を顕現している。

その他起居動作にしても美意識が生活習慣として残り、そこにも陰翳の美学が、権力意識とは別に、占きよき時代の美的様式を、現代社会の中で、生活の美学として取り入れ楽しむことが出来る。

それは民族意識の、美に対する衝動と言つても過言ではない、そこにも陰翳の美学が、権力意識とは別に、占きよき時代の美的様式を、現代社会の中で、生活の美学として取り入れ楽しむことが出来る。

第一次世界大戦後、欧米の婦人服はコルセットを取り去り、ショート、スカートで機能的スタイルに変化した。戦後民主主義運動が波及して、俗に、大正デモクラシ

ーの婦人解放運動から生活様式の改善も洋服化に拍車を

かけた。

働く婦人の増加と共にそれは拡大していった。社会的経済力の貧困もあって、最初は、もんぺとエプロン姿で上張りをつけ、和服の欠点を補っていたようだ。

一九二〇年（大正九年頃）東京の青バス・赤バス（市バス）の車掌服のユニークな姿は目を引いた。

大正十二年（一九二三年）九月一日の関東大震災では、活動不便な和服の婦人の犠牲者が多く、洋装化への世論が起つた。

これを転機に一気呵成に大阪商人が、安価な簡単服を売り出した。裾がパラーと広がり、夏の家庭着として愛された。震災復興後、銀座や大阪心斎橋にモダンボーリ、モダンガールが流行した。

ちよびひげのモボや、ショートスカートにハイヒール、それに断髪のモガは、大衆のファッショングラムであつた。男子服は機能的な背広が普及し、洋装にも大衆化時代が到来した。

昭和五年（一九三〇年）の世界的大恐慌では、働く婦人の洋装着用者が増加した。

一九三三年白木屋百貨店の火災で、和装女子店員の犠牲者が多かつたことから、また洋装化が加速した。変化を求めるスカートも、ショートからロングへ流行が変移した。

子供服、学生服、職業婦人服、夏の家庭着と、近代化

この間、世界のトップモードへの憧憬と、森ハナエ女史のセンスは高く、和服を洋装生活に生かしたようなデザインをも、高貴な婦人層は着こなしていた。

折から石油ショック、バブル崩壊と経済的不況に購買力低下の現状であつた。

男子服、ヤング層、レジャー服と多様化する中、既製服、サイズも量産化され、現代的感覚が喜ばれた。

和服から洋服への変換期にあつた二十世紀後半から二十一世紀にかけては、不況から脱出しきれず、経済不況が社会混乱をまねく時期に、生活様式は一大変革をなした。

勿論、洋服を見る陰翳は和服程でもないが着こなし、デザインなど、陰翳さは身近かに感ずる。

身体を包むラインで婦人服には、ワンピース、ツーピース、スカートなどにフリルがつけられ同じスカートにしても、和服の場合の細く折り畳んで付けた折り目とは異なつてゐる。

プリーツ、スカートは明暗が、はつきりと現れ陰翳をとらえるのに適していた。

また、タイト・スカートは対象的に体の線に合つたもので、前者程の陰翳差は見られないものの、曲線美が大きく、陰翳感を出す事は見逃せない。

それぞれが実用性をともなつて、装飾的に感覚美を巧みに顕現出来ることは、紛れもない。現代的感覚性を受

けとめ、日常感覚を芸術的に堪能出来ると思う。

実用性本位の衣装品が装飾美へと移行して行き、デザイナー主導の感を呈して來た。

戦後米国のプラグマチズム、プラグマタ、実用道具（衣服も着用する道具）が流入した。

衣服画もドレス調からパンタロン系へと、ビジネス实用性が、日常生活に導入されて來た。

男子のズボンの裾の広がつてゐるのも、女性らしさの変調デザインかも知れない。

一九五九年（昭和三十四年）代に入ると、パンツ姿の少女も現われ、丈が短かく、膝がしらや、長めと、活動能力範囲によつて裾の広がりは、足に密着する。

女性の服装は機能性重視が強調され、快活さが生きようになつた。更に一九六七年頃になると、脚のスマートさを見せるようになつた。勿論、見て鑑賞される視覚的意識が強く、デザイナーの領域であつた。

ミニスカートの登場となつて、原色の鮮やかな大胆な柄を使用し、脚線美の感覚意識が強く、股下僅かな線が短くなつた。それはスポーツ選手のブルマ（下にゴムのないもの）や、ショートパンツながらであつた。

前記のパンツ姿（一九五九年）と比較した場合、健康な脚線美を露顯することに、価値観を求めたと言つてよい。

の波にのつて、洋装が増加傾向をたどつた。一九三七年には和装の三分の一に達した程だつた。

第二次大戦中、ナショナリズムの中で機能的洋服として、国民服甲型、乙型、婦人標準洋服式甲型も作られた。

スカートは短かく、スリットにパットを入れて肩をいからし、軍国調モードが流行、東亜服装として着用した。

戦後日本の服装は一変し、米国文化流入と共に生活様式も洋風化して、衣服革命が行なわれた。

とくに女性は新憲法により、社会的地位の向上によつて、婦人生活着の洋装化に拍車かけた。戦後六十余年、生活の中にとけ込み、現代の服装となつた。

この間、デザインも幾変転して、パリーモードのファッションを追い、原色好みの傾向と、極端な素材も使われ、明るさもパラソル化のイメージさえ感じた。変遷と共に落着のある格調の高さも要求された。

クリスチャン・ディオールのロングスカートなど、商業資本の作り出すデザインが流行し、我国の森ハナエ、デザイナーも、パリーで注目され隆盛を極めた。

一方化学纖維の発達は衣料、既製服を発達させ、一流デザイナーは、ファッション界をリードして、高度経済成長の波に乗つた。

トルコ、ムーア、ペルシア、インド回教建築もあつた。

美術でも取り上げたが、ロマネスク建築、ピサの大聖堂の建築様式を生み、ゴシック建築、パリーのノートル・ダム大聖堂を見るに至つた。

再び日本の仏教建築に目を移すと、六二三年（飛鳥文化）、法隆寺金堂、迦三尊、七一八年薬師寺（白鳳文化）、平城京の移建（七五二年）は、唐の都長安をまねて造営した。正倉院は光明皇后正倉の収蔵品、聖武天皇の遺愛品など南中北の三倉に分け収納する校倉造であるが東大寺大仏開眼供養（七五二）の後、七五七年にはじまり、天平文化の華、唐招提寺が七五九年創建される（鑑真像（七六三年頃））。八五九年には貞觀文化の代表園城寺が再興された。

醍醐寺五重塔は一〇五三年建立、平等院鳳凰堂は九五一一年建立、いずれも平安文化を代表する建築である。

中尊寺金色堂（一一二四年）建立と一一六四年平氏一門が法華経を書き奉納した嚴島神社は平安末期の文化である。室町文化に入ると一三九七年金閣上棟、一四八二年義政が造営に着手した銀閣寺と、伝統芸術の精粹を極めている。

一方西欧ではルネッサンス建築様式が、イタリア（一四二〇—一五八〇）バビア修道院（周囲に支柱をもつ円型ドーム型）、シャンボール城（壮大な西欧の城郭建築）、カルロス五世宮などが、ルネッサンス調建築様式の謳歌が再建された。そしてロココ建築（十八世紀）ステーピー邸、マチニヨン邸、サンリースーシー離宮等、ロココ建築美学を見る。

日本では、この頃、茶室、数寄屋、町屋、民家などの民家建築は、日本独特のすぐれた感覚技術に支えられ、装飾品の名作を生んだ。鈴木春信の錦絵（一七六五）、司馬江漢の銅版画（一七八三）、谷文晁「公余探勝図」喜多川歌麿の「高名美人六家撰」（一七九五）、東洲斎宣子の作画など、建築技術を引き立て役として多彩を極めた。勿論、城郭建築、寺院仏閣など鎌倉から安土、桃山にかけて、技術の粋を集約して、伝統芸術を競い合つたことは論をまたない。また仏教建築も平安仏教を支えた。

真言の空海、天台の最澄によつて、中国の仏教文化が日本へ輸入された。真言密教は嵯峨天皇の保護によつて、高野山に金剛峰寺を建て、最澄は七八五年に比叡山に、草堂、後に延暦寺を創建し、山岳仏教を開花させた。また最澄の天台宗は法華經を中心に仏の前に於ける絶対平等を説き、円仁、円珍によつて天台教団の基礎を形成させた。その後寺門派（園城寺）と山門派（延暦寺）に分裂、後法華經の鎌倉仏教を育んだ。

一方、空海は大日經、金剛頂經によつて加持祈祷の秘法に道を拓き、即身成仏を説いた。

三教指帰は儒仏道の三教の優劣を論じ、「十位心論」を説く。加持祈祷が仏事の中心で、東寺を本山とし東密

であつた。

日本では桃山文化城郭建築、前記と重複するが慶長九年（一六〇四）大崎八幡神社（宮城）、一六〇六、彦根城、一六一〇（元和元）桂離宮を後陽成天皇の第八条宮、月波樓、松琴亭（小堀遠州作）から成る。なお書院を結ぶ雁行建築様式は光と翳の美を庭園に投げ掛け、ドイツのブルナー・タウトの絶賛を浴びている。

二条城二の丸殿舎（一六一五）（寛永三）も、桃山時代の代表的遺構である。国宝連なる大手門、唐門（伏見城からの移築、切妻造の唐破風）、遠侍（入母屋造本瓦葺、城内最大の建物）、大広間などは有名である。大広間は將軍と大名の対面所で城中最も豪華で、武家風書院造の典型である。大名の座する二の間から四の間にかけ狩野探幽などの障壁画が続いている。

黒書院（將軍の内々の対面所で書院造）や白書院（將軍の居間と寝室、水墨を主とした山水画の装飾で落ち着いた氣分を装う）も、いずれも桃山文化の粋といつよい。

西欧ではバロック建築、サンピエトロ大聖堂（豪華絢爛な建築装飾の美学を見る）、ベルサイユ宮殿、ベルリン王宮などがあり、それと対比的に日本には、寛永期の文化の代表として日光東照宮（一七〇九年、東大寺大仏殿）と呼ばれた。現世利益的傾向が貴族の支持を受け発展した。天台密教の台密と共に葬儀式に影響をおよぼした。

この頃から神仏習合（神仏混淆）思潮、すなわち、「本地垂迹説」が起つてきた。八世紀頃から明治元年の神仏分離令まで、庶民の生活の支となつた事も改めて記述しておきたい。

西欧では十八世紀中期から十九世紀中期にかけて、新古典主義建築として、サン・シユルピス教会堂、パリのパンテオン、ブランデンブルク門、その他エトワール凱旋門など多くが創建され、大英博物館も、この期に建てられた。

ピクチャーレスク及び中世主義建築といわれる（十八世紀後期）として、ミュンヘン図書館、サント・ジュヌビエーブ図書館、マキシミリアノイム、ハンブルク市庁舎など、この期の代表作であった。

なおオーリルネッサンス建築（十九世紀中期—十九世紀後期）として、ミュンヘン図書館、サント・ジュヌビエーブ図書館、マキシミリアノイム、ハンブルク市庁舎など、この期の代表作であった。

赤坂離宮（一九〇九）は一八八九年から二回、東宮御を残し得た。

赤坂離宮（一九〇九）は一八八九年から二回、東宮御

所として使用された。一九六九年から五年の歳月をかけ

一九七四年に国の迎賓施設として改修された。バッキンガム宮殿にならつた地階と、三層の石造建築で十八世紀末フランス王朝の隆盛を見た、俗にネオバロック様式の壯麗な洋風建築の風格を、備えている。

緑青の屋根、花崗岩の外壁、各種の装飾類が調和のとれた美を醸し出している。建築内容を少しくわざしく書くと、次の如くである。

一、正面玄関部は中央にバルコニー、緑青の屋根に日本の甲冑を形どった装飾が左右対象をなして、中央部には菊の紋章が飾られている。

二、玄関ホール、床は、イタリア産の白い石と国産の黒い石が互い違いに敷きつめられている。

三、中央階段ホールは、宮殿内部で最も鮮やかで見えたえのする所である。二階大ホールから見下す中央階段の床には、イタリア産の大理石が張られ、その上に赤じゅうたんが敷きつめられている。階段の左の壁には、フランス産の大理石が鏡張りされている。また欄干はイタリア産の大理石で、その上に八基の黄金色の大燭台が置かれている。

四、朝日の間の名は、天井に描かれた「朝日を背にして女神が香車を走らせている姿」に由来する。この部屋は国・公賓用のサロンとして使われ、こゝで表敬訪問等の行事が行なわれる。広さは約一〇〇坪（約八〇〇平方メートル）。

「絵画」、右側に「音楽」と題する「百号の油絵（小磯良平作）」が掲げられている。八本の大きな円柱はイタリア産の大理石が使用されている。

その他、正面外観、南面外観は、いずれもネオバロック様式で、凹凸の外壁は花崗岩で積み上げられた構築をなしている。日本最初の洋風宮殿として前述の如くバッキンガム宮殿と並んで世界に誇る建築である。延べ面積は一万五千平方米（約四六〇坪）と言われている。南庭に紅白梅の木を配し、中央に噴水池や花壇が設けられ、枝振りたくみな松が調和をたもつていて。

その他谷口吉郎の設計による「和風別館」の改修時に、南庭に紅白梅の木を配し、築山と泉水がある「遊心亭」が設けられた。

以上、世界に誇る豪華絢爛な建築美を、陰翳を包む装饰品なども併せて鑑賞した体験を、筆にまかせて取り上げて見た。

また

一八七一、東京国立博物館

一八七七、東京大学

一八八〇、国会議事堂

一八八七、東京音楽大学

一九一〇、東京国立近代美術館工芸部（ゴシック様式）

二階建、レンガ造り、国の重要文化財

（約六〇坪）といわれる。

五、羽衣の間の名は、謡曲の「羽衣」の景趣を描いた大絵画が、天井に描かれてる事に由来する。約三三〇坪（約百坪）の広さで、シャンデリアは当館で最も大きく、重さは約八百キログラムあるとか言う。ここでは在日外交団が国賓に謁見したり、晩餐会の招待客に、食前酒や食後酒が供される。その食卓、器具類も常備されている。

六、彩鸞の間の呼名は、「鸞」と呼ばれる架空の鳥をデザインした金色の浮彫りがある事に由来する。部屋は晩餐会の招待客が国、公賓に謁見したり、条約、協定の調印式や、国、公賓とのテレビインタビューなどに使用される。広さは約一六〇坪（約四八坪）程あると言う。

七、「花鳥の間」の名は天井に描かれた三六枚の油絵や、壁面に飾られた三〇枚の楕円形の七宝などに花や鳥が描かれていることに由来する。建築様式は十六世纪の重厚なアンリ一世式で、広さは約三三〇坪（約百坪）この部屋で国・公賓主催の晩餐会が催される。

八、「東の間」は二階の東の端にある事からの呼名である。各種の装飾が施され、豪華絢爛な造になつていて。九、「二階大ホール」は、正面玄関から中央階段を上つた二階の大ホールである。大ホールの正面左側に

一九二一、日本橋（ルネッサンス様式の美しい石垣式
建造物）

一九二四、東京駅

一九二一、東京都美術館

一九二二、羽田空港

一九五八、東京タワー

一九五九、国立西洋美術館

その他超高層ビルが、六十年代から七十年代初期の高度経済成長時代が終りを告げる頃までに、新宿副都心に東京都庁、新宿センタービルなど乱立した。

池袋サンシャイン、港区に霞ヶ関ビル、貿易センター

ビル、六本木ヒルズなどのほか、地方都市の名古屋も、

一九九九、JRセントラルタワーズなど現代建築の粹を

結集して、従来のイメージを塗り替える快挙を成し遂げた。

そして二十一世紀には、経済的不況下、構造改革へと、政治的大変換を求める、対応を迫られている。

以上、建築美学の流れを追つてきたが、その間、美意識が芸術表現に美的構成要素となつて、表現効果をもたらして来た。

芸術空間をもたらす美学は、それに付加する陰翳の美学もその対照となつて、超高層ビルを顕現させた。それは人類の英知の結晶で、いつの時代の建築表現を解析しても言える。人知の適応能力が、環境を巧みに変化させ

て来たのである。

その過程で庭園の造形美を取り込む事が、出来た。

建築工学のセンスは建物を立体藝術として捉えるだけではなく、人知の環境工学が、生活空間を如何に取り入れているかにある。

それによつて生活環境を如何に変え、生活に潤いを与えるかが、欲求されるようになった。

古代人は森羅万象がすべて、これ神と仰ぎ、自然世界を崇拜する生活が精神基盤を作り上げていた。それは宗教心の現れで、如何にして自然世界を生活空間の中に凝縮して行つたかが見られる。

大陸から仏教文化が導入され、平面仏画から彫塑へと、立体化現象が、住居の外に環境美を求めるようになつた。生への欲求が信仰と結びつき、蓮の池を配置、築山造山、岩、滝を取り入れ、宗教的な彼岸の淨土を現世に構築する事によつて、現世の極樂淨土を死後の往生極樂とする作庭となつた。

古くは飛鳥の法隆寺の伽藍配置と松の植込み、平城京、国分寺、地方機関の小規模ながら国衙が、深山幽谷の地形を利用して築成された。

室生寺、本格的作庭が試みられたのは、宇治平等院鳳凰堂、（藤原頼通は宇治の別荘を寺に改め一〇五三）池も極樂淨土の出現と鳳凰堂に表現した。

平安朝の代表的な寝殿造（東三条殿）の作庭には、貴

れ心字の池水を作つてゐる。苔寺の呼名の通り幾種もの苔でおおわれ、その緑の色は心字の地水に映えて、一際目に染みる。

天童寺（曹源池）は後嵯峨上皇の離宮の跡で、後醍醐天皇の冥福を祈り、足利尊氏が改め、蘭溪道隆の作庭説がある。方丈前の曹源池を中心とした回遊式庭園である。

一方東山文化の竜安寺の石庭は代表的な枯山水として有名で、方丈の前の長方形の庭に白砂を敷き、大小、一二、二、三、三、五の五組十五箇の石を配置し、一木一草もない文字通りの枯山水である。大海の島々とも、中国の五嶽とも、虎の子渡しとも呼ばれている。落ち着いた色の築地塀に囲まれた、空間に配された庭石群は、永遠の美をたゞえている。

大徳寺大仙院の枯山水の庭園は、自然を極度に圧縮・抽象化し、深山幽谷から水がほとばしり落ちる様を示している。

桃山文化の象徴として、近世城郭建築がある。天守だけの独立式である。犬山城、丸岡城、彦根城、天守と櫓を持つ複合連結式である松江城、岡山城、また天守と小天守を橋台で、連結式にした名古屋城、天守と小天守別に櫓を持つ複合連結式である松江城、天守と小天守を三層持つ連立式の広島城、姫路城と、構造上の様式に自然の川をたくみに利用し、外堀・内堀さらに庭園を配置した城郭建築は、主君の威勢を示し、実戦本位と美觀裝飾は

族社会の邸宅の豪華さを見ることが出来る。

この他、美しい自然を見事に生かしたものには巣島神社、白水（願成寺）阿弥陀堂、豪族岩城則道の未亡人徳尼（藤原秀衡の妹）、平泉、淨瑠璃寺、（阿弥陀堂前地）などがある。

平安中期から鎌倉期にかけての淨土式園池の遺構、毛越寺庭園、（大泉池）寝殿造林泉式庭園の地形や石組は、海洋風に取り扱われ、池の中の荒磯風立石は見事である。

鎌倉期には禪僧の修行堂として、大仏様、和様、折衷様、禪宗様の建築、作庭が試みられる。

室町期に入つて北山文化を代表する鹿苑寺（金閣）の庭園、西芳寺（苔寺）の庭園、天童寺の庭園、東山文化の慈照寺の庭園（善阿弥）は、のびやかな自然をそのまま、利用している。一定の経路に従つて種々の風景が展開する、廻遊式の庭園で、金閣は大八島（日本列島）を現わしているとも言われている。

また銀閣、西芳寺は自然の中にも、やゝ人工的な趣や禪宗風の閑寂な趣を出現させている。池泉回遊式庭園の一部に白砂や、石組みを作庭している。

前述した北山、東山文化を二分したのは、竜安寺庭園と、大徳寺大仙院の庭園が、互に競い合つたのに対応している。

西芳寺は夢窓国師の作庭で、鎌倉式庭園、上下二段構えで、上段は枯山水式、下段は池泉回遊式で、苔で囲まっている。

前記に先立ち一五九一（天正十九）秀吉の寺地寄進により、親鸞聖人開祖の大谷廟堂を七条堀川に移した西本願寺本堂、御影堂は桃山文化をしのばせる。国宝書院、北能舞台、飛雲閣、唐門など豪華な桃山文化の粹が集められ、大書院庭園（虎渓の庭）は枯山水で、御影堂を借景にし、中国の廬山になぞらえた。

枯滝、鶴、亀二島の石組、三つの石橋、蘇鉄の植込みなど豪快である。

飛雲閣は聚楽第を寛永年間に移築、境内東南隅にある滴翠園に建つ三層柿葺の楼閣建築は、滴翠園と共に国宝に指定されている。

東本願寺は、慶長七年（一六〇二）家康が、教如上人に、本願寺を東西両派に分派させた時に、大谷派本願寺として創建された。規模は雄大な本堂及び太師堂、鐘樓、菊之間、白書院、黒書院を回廊で結ばれ、その回廊から巨大な石組、白砂の作庭は、権力の象徴を物語る。

西、東の雄大な建築様式は庭園をも含めて、英雄の一

大勢力が往事をしのぶ。方強大な勢力を分しようとしたのは、家康の政略のつとも言われている。

建長の二大庭園を相対的に取らえ、権力構造の二分化を余す所なく、また門徒信仰の人々にも寄進する精神性の高い作庭を見ることが出来た。残念なことに京の街並の焼失で、多くの文化財を失ったことは、惜しむに余りある事と思う。

また桂離宮（一六二〇）は、書院造りに茶室様式を取り入れ、池の周囲と中島、松琴亭等、四つの茶屋を持つ特異性は、鑑識に価すると言つてよい。

また一六五六から数年かけ、徳川幕府が、万治二年造営の修学院離宮は、紫衣事件で退位した後水尾上皇が、嘗んだ山荘で、上、中、下の三つの御茶屋からなる。下の御茶屋の寿月観の建物の配色の妙と空間的な造型美はすばらしく、二層の数寄屋造りの書院がある。

また比叡山を借景に瀬戸内海をも包む雄大なスケールを作庭に生かした点、桂離宮と並び、ブルノー・タウト氏の激賞を受けた江戸時代の名園である。

仙洞御所の庭園も、宮内庁管理で今日も鑑賞出来る。

九世紀初めの平成天皇の平城宮は建築こそないが、作庭の美は、絶妙と伝えられている。

なお城南宮（鳥羽離宮）、金沢兼六園、岡山後楽園、木戸偕楽園など三大名園も鑑賞出来る。

当時の庭園の要素は、水、池泉、流れ、滝、樹木、刈

り込み、石、砂、遠景などが必要条件となつていて。

そして設計作業に組み込まれ芸術美を生んだと見てよい。すなわち、庭園の光学である。

例えば比叡山を借景にした修学院および寛文三年（一六六三）大和小泉藩主片桐貞昌が石川流茶道師範として、四代家綱の師導に当り俗にいう殿様茶道が全国大名、旗本の間に広まつた場所の「慈光院」等は、忘れぬ名園である。

また茅葺き切妻造の書院、二層台目の茶室、高林庵（江戸村）には、質素で十三層敷きの大広間から、東に青垣山の借景庭園がある。こここの南庭は白砂に大きな刈り込みが、大波小波のうねりを見せ、枯山水の庭に「わび」の心が伝わる。

寛文（一六六一—一六七三）を遙かに遡る平安期（一〇四七）義明上人が薬師如来を安置した淨瑠璃寺を再興したが、定朝様阿弥陀如来九体（九品淨土）を安置した本堂は藤原時代の九体阿弥陀堂の代表作で九体寺、九品寺と二つの寺名を表す。

この淨瑠璃寺は久安六（一一五〇）に「阿字池」を中心に、西に阿弥陀堂、（本堂）東に三重塔、池の中央に大きな石を結ぶ線に淨土の空間を作る。

四季の移ろいを演出し、三重の塔はその美を象徴した。泉の中に浮ひあがる本堂（九体阿弥陀如来）は淨土の恵みを現す。東の仏、太陽が彼岸の中日に東西の仏を結ぶ。

そこでは三重の塔の背後から太陽が上り、聖達の極楽淨土に夕日が沈む。西方淨土へ、阿弥陀如来が池を通じて結ばれるのである。自然や太陽を取り込んだ壮大な宇宙を現す作庭は、精神文化を昇華しているかに見える。

相楽地方は古くから奈良文化圏に属するが、「阿字池」の作庭美もとめ置きたい。

京・大和から離れるが、権勢を駆使した家康の遺骸を日光山に移築した絢爛豪華な陽明門。権現造の靈廟を包む作庭も美事である。十二世紀半ばの重繼の豪族屋敷（江戸）は、後の一六〇三（慶長八）家康の江戸城開設の後は、初め御三家の豪邸として利用をして再三の焼失にあうが、一六五七（明暦三）の大火以後は建物は建てず、約四二万九千平方メートルの広大な庭園を鑑賞するようになつた。

江戸城は明治になつて、大政奉還後、新政府が皇居として使用した。第二次大戦後、東御苑として一般公開されている。大手門から三の丸、二の丸庭園と庶民の鑑賞下におかれる壮大な庭園は往時を偲ぶ縁となつてゐる。現在は宮内庁が管理している。

赤坂離宮については前に詳述したので割愛するが、たゞ一九四八年（昭和三）年国会図書館、また、一九六四年、東京オリンピックの事務局として使用した。その他都内では浜離宮恩賜庭園（中央区浜離宮）潮入りの庭、松平

綱重の別邸。対岸の浴思園（松平定信の別邸）（東京都管理）。新宿御苑（信州高遠、藩主内藤家の中屋敷跡）。明治十二年様式庭園に改造などが、私達の視覚を潤して呉れる。

作庭が単なる技術的なものでなく、精神的なものに昇華し、そこに禅の思想を生んだのも、また然りである。茶の湯に於ける、「わび、さび」の境地も、かかる芸術の粹から、庭園内の茶室へと、幽玄の美を運んだ事と思われる。

たゞ環境の構成美が、それを感ずる者に奥深い陰翳の美学を蘇えさせて来たのも、確かに事と受け止めたい。

（つづく）

化粧のルーツを訪ねて（一一）

第八話 古代エジプトの化粧文化（2）

鈴木守

第三節 皮膚色と彩色化粧

前節において、古代エジプトの化粧資料を紹介した。本節以降は、古代エジプト人が行っていた化粧について、化粧種ごとに発祥と変遷の歴史を考察するが、最初に皮膚色と彩色化粧を取り上げる。

皮膚色を採り上げたのは、化粧の様相が皮膚色によつて多大な影響を受けることは、今更言うまでもないが、特にエジプトは、南方のネグロイドと北方のコーカソイドの接点に当たるので、古代エジプト人の皮膚色を知らずして、化粧、殊に彩色化粧を語ることはできないからである。例えば、第二節で示した第三王朝のジュセル王座像の体は黄色、王子ラー・ヘテプと妃ネフェルトの座像の肌

は褐色と淡黄色であり、また、体を赤褐色に塗られた労働者像もみられた。このような彩りが皮膚色か、化粧による彩色か判断しかねるので、古代エジプト人の皮膚色を検討した後に彩色化粧に触れる。

一 皮膚色

人類学者たちは「古代エジプト人の皮膚色は、第一王朝が成立した前三一〇〇年頃、全エジプトが統一されて、上下エジプトの人種的混合が始まり、徐々に上エジプト人の肌色は薄まり、下エジプトではその逆の現象が現われ、エジプト人全体としては褐色の肌が共通になった」と述べている。このことは、ノモスの時代には、ナイル川デルタ地帯に居住する地中海人種の下エジプト人は、淡色の皮膚色であり、ナイル上流の上エジプト人は、ヌ

ピア人の流れで肌色は黒褐色であったことを物語つてい

一方、人種的交配が進んだ後のエジプト人の肌色を、酒井は「第四王朝の王子ラー・ヘテプ像はオレンジ色を帶びた褐色、妃ネフェルト像は黄土色の皮膚であり、これが古王国時代の肌色とみなされる」と具体的に述べているので、前出のジュセル王とネフェルト妃の黄色、ラー・ヘテプ王子の褐色は、古王国時代の人たちの皮膚色を示している。また、中王国メントウヘテプ王立像の肌は黒く染められていたが、黒は尊厳の色とされ、王自身の皮膚色ではなかつた。結論的に言えば、古代エジプト人の皮膚色は黄色から褐色にかけての色合いであつた。

二 赤い肌への傾斜と身体体彩色

前項にて、古王国時代の皮膚色について考察したが、中王国センウセルト王の立像は肌が赤褐色であり、新王国ツタンカーメン王座の背もたれに見られる王と王妃、ならびに壁画に描かれた遊芸人の肌も赤褐色であつた。

第一八王朝以降の絵画彫刻では、赤い肌の人物像が増え、その事情をヨーロッパの美術史家たちは「当時の芸術家たちの芸術的傾向の変化あるいは趣味の変化」としている。

ところが、酒井は「人物像に赤が増えたのは、エジプト人自身が赤くなつたからであり、当時の女性たちはシ

ースルーの白い衣類を着用したので、白に包まれた肉体を美しく見せるには、赤が効果的である。そのため、赤色ナトロンを配合した処方が作られた」と説いている。

一方、コーソンは「肌色を明るく見せるために、男女とも黄土色に染め、男性はオレンジ色に染めることがあつた」と著している。

このように、絵画彫刻の人物像とエジプト人の皮膚色、および使用する化粧料の色調に食い違いがあつた。この点について、私見を述べる。

前項で述べたように、古王国時代の皮膚色は黄色から褐色の間の色調であつた。この色味をもつと明るく見せるために、コーソンが指摘する黄土色の化粧を施すようになつたのであろう。

次いで、中王国の頃から絵画彫刻では、像の肌を赤褐色で染めるようになり、新王国に至ると、人物像の肌色を赤褐色に染めるのが主流になつた。

この人物像の色調の変化を、ヨーロッパの美術史家たちは芸術的傾向の変化、酒井は当時の人たちの赤化粧による肌色の変化に原因を求めており、両者の主張に隔たりがあるが、互いに相入れない論旨かどうか検討しなければならない。

先ず、酒井説に目を向けると、彼のいう赤色ナトロンは、別の文献にも記されている。ナトロンは前節・六項で述べたように、中王国時代には使われていた。

また、赤色ナトロンは赤酸化鉄を含んだナトロンであり、これを蜂蜜と塩に混ぜて化粧料にしたと記載されているので、新王国時代のエジプト人が使用していたことは、間違いない事実である。

また、第一八王朝時の壁画に胸が黄白色で、顔と前腕が赤褐色に色分けされた三人の女性像が描かれていた。この像で注目したいのは、左上腕は黄白色で、右上腕を赤褐色に彩色していたことである。胸と顔の違いは日焼けの有無という見方も成立するが、左右上腕の色の相違は日焼けで説明できない。だが、左側は黄土色を塗ったか、肌の地色が不明にしても、右側は人為的に赤褐色に染めたがために、左右上腕の色調の相違を生じたと推定できる。

この二つの資料から推理すると、新王国以降には、赤色ナトロンで化粧したエジプト人の実態を、絵画彫刻の作者たちが強調したため、赤褐色に染められた人物像が多くなつたということであろう。

話は変わるが、前出の赤褐色像は身体彩色の可能性を示唆している。この点について、コーソンは「肌を黄土色やオレンジ色に染める」と述べている。彼のいう肌は顔だけではなく、身体全体を指しているような印象である。更に、酒井は「赤い处方を身体に塗布」と身体彩色を明言しているので、「新王国以前からエジプト人たちは身体彩色していた」ことを確定できる。

たブトレマイオス朝の頃に白化粧が始まつた可能性がある

第四節 眉目化粧

古代エジプトの化粧といえば、ツタンカーメン王の黄金のマスク、あるいは女神メイエトやセケルトに見られるような、極端に強調した眉やアイラインを思い浮かべるであろう。しかし、実態はネフェルティティ胸像に見られる程度の眉目化粧だつたようである。

古代エジプト人は、眉目化粧を施す時、容器からスプレーで顔料を掬い、パレットに移し、油脂や樹脂を加えて擂潰して化粧料を調製して筆あるいはスティックで眉とアイラインを描いていた。

以下、眉目化粧の発生と進化の過程を考察する。

一 眉目化粧の発祥

眉目化粧の発祥に関し、これまでに実用説と宗教説が提唱されている。また、眉目化粧の最も古い資料は、第二節で述べた新石器時代のパレットである。したがつて、両説の主張が新石器時代あるいは更に古い時代まで遡れるかについて検討する。

① 実用説・実用説の論拠は、「エジプトは光が強く、砂漠の砂や虫が目に入つたりして眼病に罹ることが

三 彩色化粧

「クレオパトラは白粉や頬紅、口紅を施していた」と記した書がある一方、「白いリネンと赤みを帯びた皮膚色のため、白粉を使わなかつた」とか「接吻の風習がエジプトに伝播しなかつたので、口紅で唇を強調することはなかつた」という白粉や口紅使用を否定する意見もある。

ところで、クレオパトラの時代は別として、新王国時代には、ネフェルティティの胸像に口紅が施され、第一九王朝時の絵に口紅を塗っている最中の女性が描かれていた。

更に古く、中王国時の紅用容器が発見され、着色料の赭土、代赭石、黄土、ヘンナの使用が認められた。また、頬や唇をヘンナで赤橙色に染めたり、口紅は代赭石や織物染料を脂肪に混ぜて作り、籠で塗つたと記載した文献もある。

古王国の頃になると、彩色化粧に関する資料は姿を消し、彩色された王子妃ネフェルト像の唇や頬に紅を指した跡は見られなかつた。

白化粧については、エジプト人の白粉使用に否定的な意見が多く、白化粧の記述に接した経験はない。エジプト人が使つた顔料リストに鉛白があつたが、鉛白を何に使つたか記載されていない。恐らく、彩色化粧料の色調調整に使つたのである。だが、ギリシャの影響を受け

多かつたので、それを防ぐ目的で、眉と目に化粧し始めた」というのである。

確かに、目の周囲に油を塗れば、砂埃や小虫が目に入れるのを軽減できるし、目の下に墨を塗つておけば、眼下から反射する光を防いで、目の疲労を避けることができる。実際に、現今プロ野球選手がデーゲームのとき、目の下に墨を塗つて反射光を防いでいる。

古代エジプト人は、前述したように、顔料を油に混ぜて眉目に塗り、眼病の発生を防いでいたことは容易に推測できる。したがつて、実用説に賛意を表し、これを基に眉目化粧発祥の時代を考察する。

実用説は眼病の原因として、砂、虫、光を挙げている。これらの自然環境は、ノモスや新石器時代より古くから続いてきた現象であるから、眉は兎も角、目の化粧の起源は、新石器時代まで遡ることは確実であり、更に旧石器時代まで遡る可能性さえ生じる。

死者を埋葬する墳墓は、ルクソールの王家の谷などに数多く残されているが、サッカラには、ファラオの巨大

な墳墓・ピラミッドがあり、これは古王国時代に盛んに造営された。それ以前、初期王国時代には、ピラミッドの前身であるマスター・バ・アランが作られた。だが、ノモスの頃には墳墓の足跡は途絶え、新石器時代まで遡ることはできなかつた。

宗教説に登場するホルス神に触れると、ホルスの化

身・隼（鷹とも記されている）の像が数多くあり、第一

王朝時の『蛇王の碑』の浮き彫りが最も古い証拠であつた。

ホルス神は初期王国時代には、統一エジプトの国家神として崇められていたが、ノモス時代にも上下エジプトの国家神として登場している。

また、ホルスは神話の中にも現われる。神話によると、「父神オシリスが死した時、ホルスの眼の呪術により蘇生させた」そうである。ノモス以前の人たちもホルスの靈験を信じていたと思うが、神話成立の時期は不明なので、ホルスの確かな足跡はノモス止まりとなり、新石器時代まで遡れなかつた。

古代エジプトの宗教は、太陽神を主神とする自然崇拜の多神教であつた。エジプトに限らず、自然崇拜の習俗はかなり古い時代から始まつており、宗教の芽生えは、

第二話『額の化粧』で述べたように、死者を埋葬したネアンデルタール人の時代まで遡ることができるので、ノモス以前、新石器時代のエジプトにも、宗教的な習俗があつて当然であり、その一環として魔除けの呪符を目の解説されていた。

レリーフに残されている。この史実を推察すると、第一王朝の頃は青銅器時代であり、シナイ半島は銅の产地だつため、銅の原石・孔雀石を確保する目的の侵略といふことになる。

② 美術全集に第一王朝時のパレットが掲載されており、「エジプト人は、古い時代から眼の化粧と保護を兼ねて、銅の原石・孔雀石を磨いて、これに脂を混ぜ、眼の縁に塗る習慣があり、この化粧料を作るために、質の硬い片岩やスレートで作ったパレットが必要であった」と解説されていた。

③ 「古代エジプト人は、死んだ人がパレットの上で孔雀石の結晶を溶かせば、来世で必要な時に『ウアージュ』を作ることができる」と信じ、故人の眉目を緑に彩るが、墓に孔雀石を供え、緑の隈取りに「青春の復活」を思ひ抱いた」という。ウアージュは緑や青春の意である。

④ 前述の宗教説とエジプト神話に登場するホルス神は、眼の呪力によつて父神オシリスを蘇生させ、ホルスの化身・隼の眼の縁は緑に彩られているので、呪力を持つホルスの眼もまた、緑色にイメージされていた筈である。なお、ノモスの頃のホルスは、上下エジプト両国の國家神であつた。

資料①と②は、「第一王朝の頃は勿論、エジプトでは、古くからシナイ半島由來の孔雀石をパレットで粉にして、眉目化粧を行つていた」ことを示唆している。

周りに施していたのではないかという推論に達した。

実用説と宗教説を手掛かりにして、眉目化粧発祥の時代を考按した結果、眉の周りを隈取る化粧は別として、「目の周りを隈取る化粧は、実用説を論拠にしても、宗教説で辿つても、両者とも新石器時代を越えて、旧石器時代には既に始まっていた」と、その可能性を推論した。恐らく、この時代の御先祖たちは、簡単に入手できる灰とか褚土を塗つたのであろう。

二 眉目化粧の進化

前項にて旧石器時代には、褚土あるいは灰を塗つて目の周りを隈取る化粧が始まつていたと示唆したが、その後、緑色に眉目を彩る化粧と黒色の眉目化粧を経て、クレオパトラの時代までには、「美を演出する現代風のアイメークアップ化粧」の基礎を作り上げたのであるが、この歴史の過程を緑色および黒色の眉目化粧の発祥と進化を中心にして、想像を混じえながら振り返ることにする。

(一) 緑色の眉目化粧——その発祥——

古代エジプトの眉目彩色の一つ、緑色の眉目化粧がいつ始まつたか、それを明記した文献がないので、その時期を考察する資料を羅列する。

① 第一王朝セメルケト王のシナイ半島侵攻の史実が

次の時代には成立しており、古い時代のエジプト人は、緑色に「青春の復活」や「蘇生、即ち生命の復活」を感じていた」とことを示している。

エジプト人たちが、緑色に青春や生命の復活を認識始めたのは、恐らく、「エジプトの地は、乾季が去り雨季になると、草木が芽生え始め、この芽生えの色・緑に「青春や生命の復活」を感じた」ためであろう。そのうえ、農耕民族の彼らは、「緑に豊穣を感じ、『靈力を持つ緑』という認識を抱き始めた」としても不思議ではない。

以上の事柄を前提にして、緑色の眉目化粧発祥の経緯を推測することにしよう。

まず、緑の靈力を感じ始めた当初のエジプト人たちは、未だ祖先伝来の魔除けの呪符として目の周りに褚土や灰を施し、眼病をもたらす魔物から目を保護していたであろう。

こうした彼らの前に、孔雀石がシナイ半島から持ち込まれた。「靈力を持つ緑」の石の登場である。彼らは石を潰して目の回りに塗ると、褚土や灰と同様に眼病を防ぐことを体験したはずである。

かくして、彼らは褚土や灰に変えて、孔雀石の粉を目の周りに塗つて、緑の隈取りを始めたのである。孔雀石は褚土や灰のようにそのまま塗布できないので、硬い材質の片岩などで作ったパレット上で磨碎する必要があつ

た。したがって、緑の眉目化粧の創始は、最古のパレットが発見されている新石器時代に比定できるであろう。

また、化粧文化の進化という立場から言えば、新石器時代のエジプト人は、魔除けに加えて豊穣をもたらす緑を塗ることによって、除災の呪符を除災招福の護符へ進歩させたのである。

とはいものの、新石器時代の人たち全てが、孔雀石とパレットを入手できたとは思えない。多分、上層階級の人たちだけが緑の護符を塗り、他の人々は先祖伝来の楮上あるいは灰を呪符にしていたに相違ない。

(二) 緑色の眉目化粧——その変遷

新石器時代以降になると、呪力を有する緑に隈取られた眼のホルスが登場する。ホルス神の眼は、緑の眉目化粧そのものであるから、ホルス神話は緑の化粧から派生した物語のように受け取れる。ホルス神はノモスの時代には、上下エジプト両国の国家神となり、統一エジプトにおいても、国家神の位置を維持していた。

一方、古代エジプトは、祭政一致の国であり、王はノモスの時代から「ホルス神に仕えるもの」と位置付けされていたので、ホルス神祭祀の際は、目を緑に隈取つたであろう。この風習はやがて、緑の眉目がファラオの象徴になつたように思われる。その根拠として、古王国時代の王子ラー・ヘテプ像などの眉目は黒く、王族でさえラに被せられたマスクだけであった。

カラー写真に見られる、この傾向は「新王国以降になると、黒い眉目化粧が支配し、緑色の隈取りの影が薄くなつた」と文献に著されており、更に、中王国前後の時代のコール壺が幾つか発掘されているので、中王国の頃から黒が優勢になり、新王国の時代には緑と黒の首座交替があつたのは確実である。

では、黒色の眉目化粧がどのように誕生し、いかにして台頭したかについて、想像を巡らすことにしてよう。既に述べたように、新石器時代には上流階級以外の人たちは、伝統の楮土や灰で目を保護したと思われるが、彼らの長い経験から、煤や炭の方が灰や楮土、孔雀石よりも御利益が大きいことに気付いたであろう。要するに、実用説でいう光防御効果は、光反射率最少の黒色の方が優っているからである。

第二節の資料では、黒色眉目化粧で最も古い例は、古王国第四王朝のラー・ヘテプとネフェルトの像であつ

眉目を緑に彩れなくなつたのではないか。

ところで、緑の眉と目がファラオの象徴に位置付けられたため、緑の化粧は衰勢を辿つたが、冥府の化粧、『ウアージュ化粧』として残された。例えば、ツタンカーメン王墳墓で発見された玉座に刻まれた生存時の王は黒い眉目化粧を施していたが、黄金のマスクの眉とアイラインは緑だったのに、黄金のマスクは死化粧であり、ウアージュ化粧を施していくと理解される。

ウアージュ思想成立には、「古代エジプト人が死者を厚く弔い、死後の世界を信じていた」ことが関係していると考えられる。エジプトでは、冥界をオシリス界と呼び、神話ではオシリスは冥府の支配者であり、緑の眼を持つホルスの父神であった。このような事情から、故人をファラオと同格に位置付けて、ウアージュの概念を育て上げたのであろう。理由は兎も角、緑の眉目化粧は「故人が冥界で青春を復活させるための死化粧となつた」はずである。

(三) 黒い眉目化粧

遺跡から出土する眉目用の化粧料を見ると、緑色よりもスティムと呼ばれる黒色のものの方が多い。スティムは、マスティムとも呼ばれ、「ものをいう眼にする」の意であり、方鉛鉱で造られたものと思われる。

ところで、第二節で紹介した資料では、眉目に化粧を

た。したがって、古王国の頃までには、黒化粧が始まつていたと推察される。ファラオにしても、緑の象徴は儀式化し、通常は緑よりも御利益の大きい黒化粧を施していただに違いない。例えば、ツタンカーメンの黄金のマスクは緑の眉目だつたが、生前の像は黒い眉とアイラインだつたことから推察できる。また、ツタンカーメンは我々に「生者は『スティム化粧』、死者は『ウアージュ化粧』に分けられていた」ことを教えてくれているようにも思える。このような区分成立が、黒い眉目化粧に拍車を掛けたのではなかろうか。

これとは別に、古代エジプト人は、「目は人の魅力と品位を決定する」という認識を抱いていたので、緑の眉目化粧が死化粧に位置付けられるとともに、非現実的な『ウアージュ』という来世的な呪術化粧から、「ものをいう眼・スティム」という自己表現的な黒化粧』に進化させたという推理も成立する。

黒化粧が主流になつた新王国時代に至ると、マスクで睫毛を整え、緑や青のアイシャドーを使って、自己表現するようになつた。新王国以降、アッシリアやマケドニアに支配され、更にローマの侵攻を受けたブトレマイオス朝の頃には、文化的にも地中海諸国の影響を受け、クレオパトラの時代の眉目化粧は、目の保護と同時に、自己主張の化粧・現代風の『美を演出するメークアップ化粧』の土台を築き上げたのである。

第五節 毛と爪の化粧

第二節で紹介したように、毛や爪に手を加えたミイラが発掘されていたので、この節では『毛と爪の化粧』について、『除毛と整髪』、『毛染め』、『禿げと白髪対策』、『爪の化粧』に分けて述べることにする。

一 除毛と整髪

除毛用の剃刀と毛抜が出土しており、古代エジプト人は、イチジクの果汁や鳥の骨を碎いて煮た濃縮液を使って脱毛していた。イチジクには蛋白分解酵素が含まれているので、この作用を利用したのであろう。また、鳥の骨の濃縮液は、常温ではゼラチンやコラーゲンが固化するので、これを温めて液状にし、毛髪の上にたっぷりと塗り、冷えて固まつた後に剥がすと、毛が一緒に抜け落ちたのである。

整髪料には、蜜蠍と樹脂を混ぜて使い、櫛で梳いていた。しかし、鉄とカーレ鎌の出土記録には接していない。古代エジプトの記録に、しばしば登場する香油は、髪梳きや艶出しにも使われたであろう。

ところで「古代エジプトには、虱^{ヘリ}が多かつたため、断髪したり髪や髭^{ヒゲ}を剃つて予防した」と文献に著されており、第二節の資料にスキンヘッドの男性像や短髪の女性像も見られるので、古代エジプトには、断髪・剃毛れる必要がある。

二 毛染め

髪を染めた女性のミイラが発掘されており、古代エジプト人は髪だけでなく、髭^{ヒゲ}も染めたようである。染毛剤には、ヘンナや紅花を用いていたが、白髪染めには、ガゼルの黒い角と油で作つた膏薬を使つていたという。

三 禿げと白髪対策

古代エジプト人は禿げの予防に、馬、カバ、蛇、ライオン、鰐などの臓物を混ぜた軟膏や榄油と油脂の軟膏を用い、レタスを禿げた部分に当てがつて発毛させたといふ。

白髪の予防には、黒い雄牛や子牛の血を油で煮た液剤、ガゼルの黒い角と油で作つた膏薬、ロバの肝臓を腐らせて油に混ぜたペーストを使つており、ヒマシ油で白髪の手入れをしたといわれている。但し、禿げや白髪の予防薬の効果の程は定かでない。

の風習があつたことは確実である。ところが、このよう

な風習がいつ始まつたか定かでない。ところが、断髪・剃毛の風習が「髪や頭巾などの装束を着用する風俗を生んだのではないか」と考え、第二節に絵画彫刻に見られる髪、頭巾、鳥帽子、付け髪着用の像をピックアップしたのである。したがつて、これらの資料から、毛髪を入れするようになった時代を検討してみよう。

最初に、髪着用の風習であるが、髪は絹糸と人毛を編み合わせて直毛または縮毛状に作られ、庶民層にまで普及していた。この風習は初期王国の時代まで辿ることができた。

立て烏帽子（クラウン）、角頭巾（メネス）と付け髪はファラオの象徴であった。因みに、唯一の女性ファラオだった新王国時代のハトシェプスト像に付け髪が施されていたので、付け髪がファラオの標識だったことを示す好個の例となつた。

立て烏帽子については、ノモスの時代に、上エジプトでは白、下エジプトでは赤の王冠を被つていたのが最も古い資料であり、角頭巾は古王国のカフラー王とメンカウラー王の彫像に見られ、付け髪姿は初期王国第一王朝セメルケト王のレリーフとナルメル王のパレットに彫られていた。因みに、付け髪は叡智^{えいち}を表わしているという。

以上のように第二節の装束姿から見ると、王冠着用はノモス、髪と付け髪は初期王国、角頭巾は古王国の各時

四 爪の化粧

第二節で示したラメセス二世のミイラは長く伸ばした爪が綺麗に整えられており、爪切りの風習を示唆しているが、爪の化粧に関する資料は乏しかつた。

第一八王朝ラーメス墳墓の絵画「哀悼する女たち」に、哀悼の意を表して上に掲げた彼女たちの腕の先に長く伸びた爪が認められ、爪を伸ばす風習を窺うことができた。ほかに、「古代エジプトでは、ヘンナで爪を染めた人もいたようだ」という叙述もあつた。

第六節 スキンケアと香油

古代エジプト人にとって、基礎化粧と清浄化粧はスキンケアの基本であった。パピルスに、「エジプトは強い光と乾燥の国であり、肌の艶と美を保つには、香油を塗る必要があつた。香油は当初、祭事に際して神像に塗るとともに、王と祭司が自分の体に塗ることにあつた。神々に仕える神官にとって、身を潔めることは、ゆるがせにできないことであつた。神官たちは日に何度も水浴した」と記されていた。

一 清净化粧と香油

古代エジプト婦人の美容の第一歩は、香りのよい水で水浴し、ナトロンで体を擦つた後、スアブと呼ばれる酸

性白土のペーストで体を綺麗にすることであつた。水浴後、皮膚が乾燥し、強張つたりするのを防ぐため、香油を塗つた。これらの化粧料は肌を柔軟にするだけでなく、光沢を与える芳香を発して魅力を増す効果があつた。

油脂と石灰で作つたクレンジングクリームや方解石末、ナトロン、塩、蜂蜜を成分とするクレンザーも清潔料として使われ、セロリと大麻で作った洗顔液もあつた。前述のように、王や神官によつて使用され始めた香油は、やがて特權階級の日常の化粧品として用いられるようになり、中王国時代には庶民も使用し始めた。新王国時代に至ると肌の手入れに力を注ぐようになった。

現に、ツタンカーメン玉座の背もたれに刻まれたレリーフには、王の体に王妃が香油を塗つてゐる姿がみられ、第一八王朝時の壁画にも、奴婢に香膏をつけさせている貴婦人か描かれている。

香油発祥の時期について推測すると、祭事で王や司祭が使つたとされているので、初期王国、更に古く上下エジプト両立の時代まで遡る可能性が高く、恐らく、ノモス末期の頃に香油使用の萌芽があつたと思われる。

なお、ツタンカーメン墓で発見された香膏には、動物性脂肪と芳香性樹脂が九対一の割合で配合されており、古代エジプトにおける香油・香膏は、現代の乳液・クリームに相当する芳香性の基礎化粧料であつた。

二 スキンケア化粧料の処方

エジプトは光や乾燥が強いため、肌荒れや皺、湿疹が多い、光や乾燥から皮膚を保護する化粧料のほかに、肌の滑らかさ、艶、皺、ホクロ、カサブタ、痒みなどに対する処方があつた。

例を挙げると、老人の顔を滑らかにする処方には、香料、蠅、オリーブ油、シップラスの粗粉を牛乳に混ぜたものがあり、顔の色艶を気にする女性は、去勢した雄牛の胆汁、泡立てたダチョウの卵、油、小麦粉を水で練つて使い、色艶の回復には、動物の分泌液、カバの脂肪、ガゼルの糞が用いられていた。

しみを消す処方は、アラバスターの粉やナトロン、蜂蜜、ロバの乳などを配合した香油であり、制汗には、乳香とテレピン油を水に混ぜた香油が使用された。また、体臭を消すために、イナゴマメの丸剤を肌に擦り込むか、あるいは脇の下や足の付け根などに香料と粥を混ぜた小さな丸剤を忍ばせた。

三 乳化型化粧料発祥の仮説

ところで、現在の化粧品は、基礎化粧用の乳液・クリーム始め、乳化型処方で構成された製品が多い。このようないくつかの意味で、乳化型化粧料をいつ頃から作り始めたかに興味を抱いたので、乳化型化粧料発祥について考察することにした。

一方、古代エジプトの化粧を著した書の中に、クリームの記載は、前述したクレンジングクリームと中王国時代のクリーム容器があつた。前者は石灰を練り込んだ無水油性型のクリームの可能性が高く、後者は言葉の綾のように思える。しかし、ここでは「古代エジプトには乳化型化粧料があつた」ことを前提として自説を述べる。

自説主張の基盤には、前述した「古代エジプト人は、

スキンケア用にナトロンと香油を使用していいた」とことがあり、就中、「ナトロンがアルカリ性の炭酸ナトリウムである」とことに基づいている。

先ず最初に、古代エジプト人の立場で考えてみたい。ナトロンと香油をスキンケアに使用していた彼らは、この両者を混ぜ合わせれば、もつと便利で効果のある化粧料が得られるのではないかと発想したに相違ない。そして、「ナトロン水に油脂と香料を混ぜ、加熱・攪拌して、ロバの乳のように乳濁した香油・香膏を得ることができた」はである。

現に、昭和の前半、非イオン界面活性剤が登場するまでは、油脂にアルカリを混ぜ、加熱攪拌してクリーム・乳液を製造していた。要するに、油水系にアルカリを配合して加熱攪拌すれば、比較的容易に石鹼とグリセリンが生じ、石鹼は乳化剤になり、グリセリンは保湿剤となる。ということで、ナトロン水に油脂を混ぜたエジプト人

の香油・香膏も乳濁しており、更に保湿性のグリセリンを含んでいるので、ナトロンや油脂を単独で使うよりも、肌をしつとりさせたことであろう。ましてや、乾燥地帯のエジプトであるから、彼らにとつて乳化型化粧料の登場は福音だったに相違ない。

ナトロン処方以外に、前出のテレピン油、乳香、水で作つた制汗剤は明らかに乳液である。乳香は名前の通り、水に混ぜると乳濁するので、乳化機能を有していることが分かる。したがつて、テレピン油、水、乳香の汗止め処方は乳液だったと判断できる。

序でに、乳化型化粧料発祥の時期を憶測すると、ナトロンの使用形跡が中王国の頃まで遡れるので、中王国時代には、既に乳化型の香油・香膏があつたのではないかうか。

そこで、乳化型化粧料発祥の時期を憶測すると、ナトロンの使用形跡が中王国の頃まで遡れるので、中王国時代には、既に乳化型の香油・香膏があつたのではないかうか。

まとめ

ない。

前出の身体彩色は顔にも施されていたため、頬紅の資料は乏しく、頬をヘンナで赤橙色に染めたという記載を見るのみであった。

白粉使用には否定的な意見が多く、白化粧の確かな証拠は得られなかつた。

② 眉目化粧・古代エジプトの代表的な風俗・眉目化粧の証拠は、新石器時代（前五〇〇〇前後の頃）まで遡る。推測ではあるが、当時は目の保護と呪符を兼ねて、眉目を緑色に彩り、次いでノモス（前四〇〇〇～前二〇〇〇頃）から初期王国（～前二六五〇頃）の時代には、ホルス神の眼に施された緑の隈取りを経て、緑の眉目化粧はファラオの象徴になつた。この時代には、黒色の眉目化粧が始まられ、それに伴い緑の眉目化粧は、ウアージュと呼ばれる冥府の化粧となつた。

一方、生者の施す黒い眉目化粧は、「ものをいう眼にする」という意味のステイム化粧となり、新王国の頃には主流となつた。この時代に至ると、マスカラやアイシャドーが使われ、クレオパトラ（前六九〇～前三〇）は付け睫毛も使用したとされている。

③ 毛と爪の化粧・古代エジプトの絵画彫刻には、坊主頭、断髪、チヨビ鬚、手入れした爪の図もあつた。

古代エジプト人は、剃刀や毛抜、櫛だけでなく、脱毛剤や整髪料を使用しており、彼らは虱予防のため、断髪

発していたと考えられる。

④ 付記…前一四〇〇年頃の化粧箱に眉書き用の鉛筆が残されており、当時は、油脂に顔料を混ぜ、中空の茎に流し込んで固化させたステイックも作られていた。

参考文献

- 世界美術全集第二巻、古代初期、平凡社、一九五六
同全集第四巻、古代エジプト、一九五六
パンセ、デランドル共著、青山典子訳、
美容の歴史、白水社、一九六一
今村傳、文明のあけぼの、講談社現代新書、一九七三
春山行夫、おしゃれの文化史、平凡社、一九七六
吉村作治、クレオパトラの謎、講談社、一九八三
コーンン著、石山彰監、メーケアップの歴史、
ボーラ文化研究所、一九八六
化粧文化一五号、一九八六
鈴木守、コスマトロジー入門、幸書房、一九九三
リズ・マニカ、ファラオの秘薬、八坂書房、一九九四
デュナン、リシタンベール共著、吉村作治監、
ミイラの謎、創元社、一九九四
久保敦彦（エジプト探査協会員）、私信

（つづく）

したり、髪や髭鬚を剃つたといわれている。
断髪・剃毛の歴史を、髪のような装束着用を指標にすると、剃髪はノモス、髭鬚剃りと断髪は初期王国の時代には始められていたと推定される。しかし、虱対策の除毛、整髪を考慮すると、ノモス以前の時代も視野に入れ必要がある。

時代は不詳だが、髪や髭鬚を赤橙色に染め、白髪染めを使い、禿げと白髪予防の処方もあつた。新王国の頃には、爪を伸ばして整える風習があり、爪紅を施す人もいた。

④ スキンケアと香油・スキンケアの主流は水浴と香油の塗布であつた。水浴に際して、清浄料を使用し、香油を塗つて肌を柔軟にした。ほかに、肌を滑らかにする処方、顔の色艶を回復させる処方、しみを消す処方、制汗や臭い消しの処方、いわば、現在の医薬部外品のような処方があつた。

洗浄料や医薬部外品様の処方が使われた時代は不詳だが、水浴と香油の塗布は、祭事用に王や祭司が行つていたので、初期王國あるいはノモスの時代に始められ、やがて特權階級の日常的化粧を経て、中王国時代には庶民の化粧になつたと考えられる。

また、仮説ではあるが、古代エジプト人は、テレピン

油を乳香で乳化した制汗剤を使つていたので、中王国の

頃には、ナトロンを配合した乳化型のクリーム乳液を開

スイスの山を訪ねて

吉田忠雄

私は子供のころから山を歩くのが好きであった。小学生の時は近所の子供たちと町の裏山に登つたりした。中学生の時は戦争中であり、楽しみで山を歩くことはなかつた。大学生になると、予備校時代の友人に奥多摩の山に連れて行つてもらい山歩きが好きになつた。

大学四年生の時には親友と1週間かけて尾瀬・日光を歩いた。ますます山歩きが好きになつた。

山口県の会社に就職すると、その夏には従弟と一緒に祖母山・阿蘇山に行き、九州の山の魅力を満喫した。その後、伯耆大山にしばしば行き、また四国の石鎚山、剣山に登つた。

東大に転職すると、学生たちと山登りをしたが、問題が生じた。私の体力は学生についていけないことがわかつたのである。

そこで自分が登るのではなく山を見るごとに方向を転

じた。そうなると世界の有名な山を見たいという気持ちがわいてきた。仕事で旅行するとき運がよいと乗つた飛行機が綺麗な山の上を通ることがあつた。

できれば有名な山のそばまで行つて眺めたいという希望も持つようになつた。きれいな山と言えばスイスの山である。幸いに仕事でスイスに行くチャンスがあつたので、休日を利用して何か所かのスイスの山を訪れた。

最初はツューリヒから日帰りでルツェルンに行き、ペラ橋やピラトゥス山を眺めた。次は日帰り観光バスでフィルストを行つた。次は同じく日帰り観光バスとケーブルカーである峰に上つた。南側は日当たりのよい緑の高原である。反対側は雲をかぶった峰々が続く逆光の山並みであつた。このコントラストの妙に感じ入つた。

スイスにも慣れてきた、それからは本格的なスイス岳観光である。まずは最も有名なアイガー、メンヒおよ

びユングフラウのベルナー・オーバーラント三山の観光である。ツューリヒからインターラーケンを経て、氷河が作つたU字型の谷にあるラウターブルンネンに行き、谷の上流に向つて右上のミューレンやシルトホルンを歩いてから、泊つた。

翌朝早く起きてベンゲルアルブ鉄道に乗り、クライネシャイデックに行く。ここで登山電車をユングフラウ鉄道に乗り換えて、ユングフラウヨッホに行く。この鉄道はアイガー、メンヒの地下をくりぬいたもので、途中に山腹から外の景色を見られるところがある。終点のユングフラウヨッホ駅は地下駅である。そこから氷の通路「氷の宮殿」を通り抜けると、メンヒとユングフラウの鞍部にある展望台スフィンクスにつく。ユングフラウヨッホにはその後欧洲会社の安全視察旅行の人々と再度行つた。この時はクライネシャイデックに泊り余裕ある訪問であった。

マッター・ホルンには別の機会に行つた。チューリヒからツエルマットに行き、ここから登山電車でゴルナグラート展望台に行つた。ここからは中央にマッター・ホルン、その左右にブライトン、モンテローザおよびヴァリス、ミシャベルの山々が見える。さらに左下にはゴルナー氷河が見える。残念ながら私の行つた日は半曇りで、マッター・ホルンの頂上は霧がかかって見えなかつた。幸い近

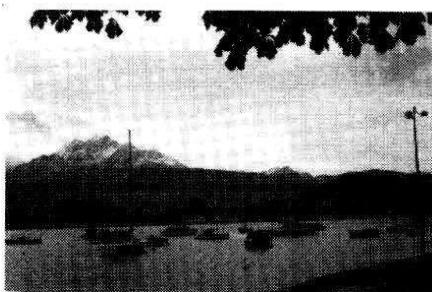


写真1 ルツェルンから見たピラトゥス山

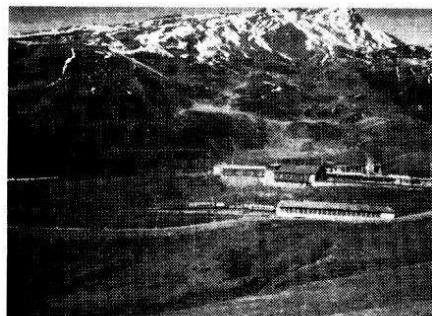


写真2 フィルスト台地

平和を願つて

勝山道子

大正末期生れの私は物心ついた頃より「戦争」と云う雰囲気が流れていた様だった。ラジオ、新聞、そして号外が刺戟していた。昭和六年、満州柳条溝にて日華両軍交戦する。満州事変おこる。昭和十一年、一二・二六事件、皇道派青年将校決起。昭和十八年、十月二十一日神宮外苑学徒壮行会。昭和十九年九月、私は東京高等栄養学校後期生の卒業予定。

所属は弁当部と云う名称であった。一日約千食の責任者と云う。食事は昼食が主体で、三階級に分かれた献立。兵隊食 約六百食 米飯一菜 尉官食 約二百食 米飯・パン 三菜 将官食 来客含二十食 米飯 五品 当直(朝夕) 二百食 給食する前に軍医に給食を前以つて検食をしてもらうのも私の職務、まさに、月月火水木五金であり休日などなかつた。

調理を担当している方達は、微用で、当時の食堂で勤務していた、須田町食堂、日本食堂と云つた一流の板前、コックと云われる方が十人余り居て、若い私には調理技術の修得や、人生の先輩として参考になつた。例へば包丁も各人が持参し、然も帰りにはきちんと晒の布で包み持帰つていた。正に職人堅気であつた。

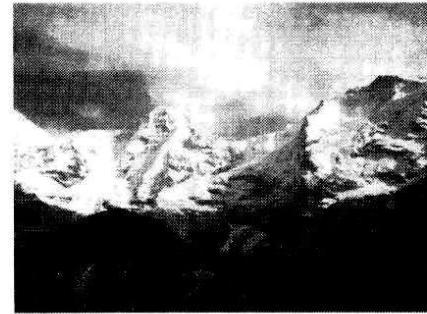


写真3 左からアイガー、メンヒおよびユングフラウ



写真4 ゴルナグラート展望台からのマッターホルン



写真5 ゴルナグラート展望台から見た氷河

兵隊食、飯と一品の煮付と決まつていた

尉官級食 飯

月二、三回パン 三品の菜

将官 来客 飯 五菜

将官級の為、兵隊がわざわざ木更津まで魚を取りに行き刺身を作つた。

一ヶ月前に献立の材料を発注しなければならない。大量を調達出来るのは海軍ならではと思つた。又隣の最大市場築地のところにあるからとも思つたりした。発注通り、食品、調味料は届けられた。但し品物は今の様に、ダンボールではなく、木箱、藁で作つた、呑、セメント袋に、鶏なぞ、中びな、成鶏と、丸ごと五〇羽、百羽と入れてあり、果物、根菜類も同様であつた。物資はすべて軍関係に調達されていたので一般家庭は物資の欠乏から「ヤミ」物資が横行した時代でもあつた。

冬鮒を注文したところ、五十キロもある鮒が届いた。調理場に入らず外廊下に、ドサッと置かれてあつた。さすが困つた私を見て、日本食堂から來た板前が、鮒の上に馬のりになり例の見事な包丁捌きで、三枚におろし、後は献立別に刺身、照り焼、ブツ切りに分けた。次に鶏が中ビナで百羽あまり呑に入つて來た。板前が突然、「栄養士どうさばく」と言う。鮒の恩返しと思ひ、先ず、調理師全員に一羽づつ渡し、私の号令通りに包丁を入れさせた。

「鶏の肩に包丁を入れ両手で引張ると手羽、二つ、次に脚

町を襲い、飛行機からの焼夷弾投下一万一千個と云われ、まさに包圍爆撃であつた。

死者十万人負傷者十一万人と云う。

明け方炎は納まり、かすかな煙丈見えた。自宅前をすすぐ姿で男の人がバケツを持って通りすぎた。私は七時頃自転車を引きずり出し築地まで行く事にした。夢中で自転車で走つたが、記憶にあるのは歌舞伎座が中から燃へ、外の扉が火を吹いている。私はそばをかがむ様にして走り去る。人も居らず消す人も勿論いない。まわりは焼野が原、はるか右手の新橋演舞場は焼け落ちくすぶつていた。

八時すぎ水路部に着いた。守衛所のまわりは、建物が残り、倉庫、売店が焼夷弾の直撃を受けたが海にも近く町の消化活動をし他に火は移らなかつたのだ。私は急速食料の事が気になつた。屋根、外壁がこわれていた。酒樽、醤油、砂糖、塩、米はすつかり焼け、形も何もなく、残っているのは味噌四斗樽二個の芯三十匁位で、くすぶつていた。味噌も燃えるのだ。売店は小さい建物だけだったので、中の物同様「みじん」もなく姿を消していた。幸い調理場は残っていたので、前日仕込んだ、米で、米飯を炊き、予定通り調理出来、幸い働く人にも異常なく仕合せな事だつた。

翌日から焼失された調味料その他は調達され仕事は進んでいた。月一、二回私は海軍省へ報告、指示を受けて

の部分は反対に持つて包丁を入れると、もも肉二つ、次、胸、首、内臓、ささ身、肝とに分ける」

幸い、私は疎開先で鶏を飼つていて、自家でさばくのを父に教わった事が功を奏した。

こうして、私も仕事に馴れて来たが、当時の戦況は榮観出来ず、大阪も大半が空襲で、破壊され焼けてしまつたと報じられた。この年から学生も学徒動員で軍需工場で働かされた。

又小学校も学童疎開と云ひ都會から離れ田舎に行かせられた。

そしてアツ島玉砕、サイパン島始め次々と占領されていった、而し国内では「欲しがりません、勝つまでは」と厳しい食料統制の中で暮していた。我が家も東京空襲が始まると前に疎開命令に従ひ荷物を千葉の山の中へ運び出した。

昭和二十年三月十日午前〇時空襲警報発令、小石川の自宅では母と二人だつた。父は出張中、第二人は学徒動員で名古屋、福井の軍需工場に、中学生の末弟は少年航空隊で浜松に居た。

何時もと違う、けたたましい空襲警報、米軍のB29爆撃機が、防空壕から顔を出すと直ぐ頭上を飛び、バラバラと焼夷弾を落す。やがて東の空が真赤に燃え上り、傳通院の近くまで燃えている。

後からの情報でB29三〇〇機が浅草や深川など東京の下

いた。緊迫した空氣は、広島、長崎の、ピカドンと云われた爆撃によつて焼土と化し失つた尊い命が数十万人とも云われたことからであつた。そしてこれが降伏への引き金となつた。日本はボツダム宣言を受け入れ無条件降伏した。

八月十五日正午、天皇陛下の重大発表があると云うので、水路部でも講堂に集まる様にとの放送があつた

弁当部は昼食の準備があるので私が代表して聞きに行く事にした。講堂では丁度始まつた様だつた。ガアガアと雑音の中で始めて聞く天皇の声、よく聞きとれなかつたが「要是終戦の宣言」だと外人のつぶやき、そして負けた！力が抜け調理場へ戻つた。「負けたと云う事」然し調理配食はとめられず、私は海軍省へ行く様にと云われ、外出許可を取りに総務課へ行き異様さを感じた。海軍尉官の短剣と肩章がはずされ、俗に云う丸腰となつた。これで敗戦による姿を日のあたり見た。本省へ行く道中、暑い暑い日だつた。地べたにぺたんと坐つてゐる人の多い事、全く放心した顔付、ただ電車、バスだけが確実に動いていた。日本中が虚脱感と云うか、無氣力さに、街を覆われていた

海軍省もまるで空氣は変り担当の尉官も早口で水路部と他の部署には連絡します。弁当部は人員も減るので業務整理の積りで十二月までやつて下さいといつた。私の家も丁度千葉へ荷物を運んでいる最中五月二十五回の空

襲で小石川一帯と共に焼けてしまったので、千葉から築地まで遠距離で通っていたので何か肩の荷が下りた様な気がした。調理場でも微用の方々は本業に戻ると半数がやめて行き、送別もなく別れて行つた。海軍も尉官、将官は早々に引き上げられた。私も食品を残さぬ様に心がけ十二月末に退職した。

これを書きながら今年は何と終戦から実に六十五年経つていると思った。然し私は忘れない。

焼け跡を走った私は、川を流れる焼けぼつくりの間に明らかに人の形が浮かぶが、麻痺した神経は、それが素通り出来たのだ。

戦争とは、無駄な殺害、破壊がある。今平和と云ひ乍らも、多くの戦死者の遺骨が激戦のあつた海、山中に散らばっている。

わざかな年月とは云へ、私の胸には戦争に加担した罪がある。平和への悟りとして後世に語り伝へる義務がある。反戦を訴え、憲法擁護の立場から核兵器廃絶を訴え続けた故、加藤周一氏の「九条の会」を支えるのです。「第九条〔戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認〕日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」

②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、

これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

「雑感」

平 山 恵 敏

要は個人の自由行動に委ね、平等に与えられた天然を

如何に使用するかは、自由が自然といえる。

会社勤めをしていた時にも無かつた五時起きを、いざ、

実行するとなれば、それなりに覚悟と精神力がいる。

早朝ウォークを始め出して数日、頭がぼんやりしていたが、慣れてくるに従い体内時計も順応するようになってくる。朝の空氣に身体が馴染んでくるに従い、過去に経験しなかつた夜明け時間帯の神秘さや新鮮なエネルギーを体現するようになる。

夏、暑さに嫌気をしていた直射日光に曝される事も無く、疲労が残らなくなり夏バテが解消する。

秋、日照が短くなり暗闇を歩き出す。漆黒の満天に星は輝き、月の満ち欠けが日々変わるさまに出逢う。たまに日の出とともに東の空に朝焼け雲が出迎えてくれる。

冬、手袋をしても指が痛くなるほど冷えるが、地面に活動を早めろ、というのも押し付けがましい気がする。

定年後ウォーキングを日課にしていたが、昼間に限つていて。夏に至つては健康増進どころか無理して続けていたので反つて疲れ、身体を害することもあつた。

そこで思いついたのが、昨年六月から始めた早朝ウォークである。

サマー・タイムというものは、夏の間日照の長い期間に時計を一時間進めて昼の時間を長くする制度である。

日本でも議論を重ねてきたものの、社会インフラ・会社システムを手直しするのにコストが膨大なだけではなく、一般家庭でも、全ての時計や計時機類製品の時間調整が煩雑なため、「益少なく勞莫大」で実施に至つていな。

個々の生活パターンが違い、時間の使い方、過ごし方がまちまちなのに、日照時間が長いからといって一方的に活動を早めろ、というのも押し付けがましい気がする。

霜が降りて草や芝生上に宝石をちりばめたようにきらきらした輝きが見られる。極寒は人がまばらで、仕事に出かける人、中高年の夫婦や人連れの人など常連顔には挨拶を交わす。

春、日の出が早まり、木々に新芽が息吹く匂いや色とりどりの花に目をやれば、気分がチョッピリ華やいでおのずから気分が落ち着いてくる。

誰にも迷惑掛けず、邪魔されず、自然の中に身を浸す

早朝ウオークは、まもなく一年が経とうとしている。

サマータイムを思いついたのが動機で、季節ごとに感触する夜明けを知り「人生にとつて健康は目的ではない。

しかし、最初の条件である」と、武者小路実篤の言つた言葉が身に沁みる。

一、

来年は古希を迎えるに際し、このごろ余生に想いを巡らすことがある。会社勤め一途に忙しく余裕のない人生を送つてきた男にとって、その反動で安穏な暮らしに我を見失い、惰性に流れる余生だけにはしたくない。

好きな本を読みたい、話題の映画・観劇を鑑賞したい、タイガースを観戦し一喜一憂したい、仲間と定期にゴルフをしたい、年何回かは国内・国外に旅行したい。

(何だ、その程度のことか)一笑に付される程度のこと

なのである。

定年後は郊外に出る機会が多くなった。毎朝公園での太極拳は、留学生の世話をしに来ていた上海在住ご夫人との偶然の出逢いから五年前に始まった。

教わったのは当初数人であったが、健康志向の輪が広がり、今では常時十五名前後が毎朝参加するようになつた。

「師匠の王さんと五年振りに上海で会おう」という話が昨年十月の親睦会でとんとん拍子に展開し、世話役を買って出る。

各国が注目する経済成長著しい勢いのある中国に、とりわけ五月から始まる上海万博は関心の的。

混雑を避けて二月に出発、二泊三日十四名の上海ツアーライド現地ガイドの案内の同行を伴つて開始する。

二、

一日目は広い大地の空港に降り立つてからバスで一時間余、都心の彼方此方には高層ビルが林立し、周辺の高速道路と超高速リニア鉄道インフラ整備が急ピッチに実現していた。人民広場前のホテルを拠点に連泊する。

メイン街路の南京東路から租界建築群が並ぶ外灘まで歩いたが、引つ切り無しに溢れんばかりの観光客が行き来して活気に満ち溢れていた。

昼間は天気が良くて空はどんどんより灰色に垂れ込めているが、夜の上海は、近代的な高層ビルにレトロとモダニズムが混在する。

な建造物が渾然一体になり、ハイカラに整然とマッチングしている。外灘・浦東間を流れる黄浦江を遊覧船が行き通い、街全体を煌びやかな電光色で変貌させて観光客をもてなす。到着した夜、王さんを夜景の美しい浦東の料理店に招いて再会を喜び合う。

二日目は世界遺産「蘇州古典園林」で知られる二千五百年の古都、蘇州を散策し、夜は国営の上海曲芸團を観劇する。自然景観配置の妙、留園、中国人が大好きな太湖石の獅子林、ピザの斜塔と呼ばれる虎丘などを観て回る。

三日目の朝、本家の舞う人民公園で王さんと一緒に太极拳を舞い、本望が適ったところで別れたが、ささやかながらも日中友好の気分を味わう。その後、半日間マイクロバスを借り切り、明代の名園・豫園に行く。

界隈は中國らしい雰囲気が漂い、老舗が軒を連ねる。租界時代の名残があり外国人が集まっている新天地、レンガ造りの庶民的民家や多種多様な雑貨ショップのある田子坊を矢継ぎ早に散策して廻る。

東洋一賑やかといわれる国際都市上海もバブル真っ只中、ガイドの言では、マンションの値段が十年前と比べて五倍以上に上り上がり、急増する車社会に突入した上海でマイカーを保有するのに規制が厳しく、裕福層しか乗れないと言う。

奥地から若者を安い賃金で駆り出し、経済発展の一翼を担っているものの、格差社会は日本の比ではなく、鬱積している者も少なくないようだ。

勢いのある中国を駆け足で眼に触れる表面を窺がつたのみであり、一党独裁の強権支配政治の裏側までを知る由も無いが、この国の陽と陰が垣間見られる。

世界の人口を有し、バイタリティに溢れ、まだまだ勃興するであろう中国の凄みの一端を知った旅であつた。

何かいい事

亜木陽一

次男の孫娘は小さい頃から野球やサッカー、相撲が大好きで、いつも次男やお兄ちゃんとキャッチボールをしていました。

プロ野球にも詳しく、父（次男）や兄からいろいろ教わり、中学生になつたらソフトボールを本格的にやるつもり。

好みの野球選手は格好いい選手よりも地味で目立たない働きをする質実剛健なシブイ人だ。

来年入学することになっている家の近くの公立中学のグランドで、軟式野球部の練習中、何気なく見学していた孫娘の方に流れ球が飛んで来た。

孫娘は思わず両手でキャッチ。

球を拾いに走って来る子の方を目がけて思い切り投げ返した。

野球部の子は走りながらグラブを出したが、球のスピードが速くて取りそこねた。
「悪い！ 悪い！ ゴメンな。どうもありがとう」

背が高く映画の主人公のように超格好いい二年生のイケメン。

孫娘は日頃から格好いい人なんてミーハーよと豪語していたが……。

豊富な人脈を持つ孫娘は、女友達にケータイを掛けて、中学校の情報を集めた。

先輩は来年三年生になつたら、キャブテンになるはずだと知った。

あれから、野球部のマネージャーをしようか、チアリーダー部に入ろうか？

毎日考えている。

社 生口(内規)

☆ 同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として

維持会員になつていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の單行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

* 同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座 ○○二七〇一〇一六四五九二一

加入者名 まんじ

透明な時間（一）

宅見勝弘

一

竹森が失神から目覚めたとき、目の前に死体が横たわっていた。竹森は死体と同じ様に、うつ伏せに氣絶していた。死体の左側に並んで顔を右に向けていたので、死体の飛び出しそうな眼球と視線が合った。

死体の頭部は酷く殴られて、原形を留めないほど陥没していた。頭部から流れ出した液体が、竹森の顔面と腹部を濡らしていた。竹森は慌てて立ち上がった。

その時、竹森は右耳の後ろに激痛を感じた。自分自身も凶器で殴られたようであった。後頭部に右手を当てると、半分ほど乾いた血糊がこびり付いた。竹森は傷口を押さえながら、呻いた。

汚れたスーツの上着とネクタイが気持ち悪く、乱暴に脱ぎ捨てた。ハンカチで何度も顔を拭つた。

目覚めた時には自分の身に何が起きたのか、全く理解

できなかつた。しかし、痛みが和らいでくると、少しずつ記憶が蘇つてきた。

竹森和久は東西銀行赤坂支店に勤務する銀行員である。現在は二十八歳で、銀行に就職して六年目であった。赤坂支店には三年ほど在籍している。

竹森は四方を見回して、天井と床を見つめた。自分の居る場所は、銀行の地下にある金庫室であった。耐火扉と格子扉の両方ともが閉められていた。

竹森は怖れながら、死体に近づいた。医者でもないのに死亡していると分つたのは、素人目にも明らかなほど頭部の損傷が激しかつたからである。

死体は赤坂支店の熊本猛支店長であった。支店長も腕時計を見ると、時計は午前十一時を示していた。この日は八月最後の土曜日で、銀行休業日である。担当先の企業が倒産したので、休日に出勤したのであつた。

死体は赤坂支店の熊本猛支店長であった。支店長も休

目出勤していた。

竹森は金庫室から抜け出そうとして、格子扉に近付いた。支店長の死体が扉の前にあるので、迂回した。

格子扉は、直径二センチの円柱の格子が、横方向に中央に一本、縦方向に七センチ間隔で十二本が並んだ構造である。両手で格子を掴んで搖すつたが、乾いた音がするだけだった。格子扉は外側から鍵が掛かっていた。

格子扉の隙間から両手を入れて、耐火扉を押してみた、しかし、耐火扉も外から施錠されて、全く動く気配は無かつた。耐火扉は鉄製で、厚さが三十センチもある。両手で激しく耐火扉を叩き続けたが、厚みのある耐火扉は空しく音を返すだけであつた。

厚い耐火扉を何度も叩いても、金庫室の外に届きそうになかった。金庫室の外に届いても、地上階まで届く筈もない。地上階に届いても、この日は休目出勤しているのは、竹森と熊本支店長だけで、誰も居ない。誰か居るとすれば、犯人であるに違ひなかつた。

暫く叩き続けたが、途中で悟つて諦めてしまった。再び支店長の死体に目を向けた。

支店長の頭部にめり込むように凶器が乗つていた。竹

森が目覚めたときに、動搖して何か分らなかつた。凶器は金庫室内に備え置かれている鉄製の踏み台であった。支店踏み台は三段の踏み板が有り、五キロ位の重さがある。

十年以上も使われて、台の滑り止めのゴムが削れて金属

が剥き出しになつてゐる。

その凶器で何度も頭部を殴打した様子であった。金属バットやバールのように殺傷力の有る危険な凶器に竹森は思えた。

自分も凶器で殴られたと思うと、生きた心地がしなかつた。しかし、自分の傷は深くないので、踏み台以外の凶器で殴られたかもしれないが、死体の頭蓋骨に乗つた状態であるのが、痛ましく感じた。踏み台を両手で引き抜くようにして死体の横に移した。この時に付いた指紋が後に問題になると思ひもしなかつた。

踏み台が死体の頭蓋骨に乗つた状態であるのが、痛ましく感じた。踏み台を両手で引き抜くようにして死体の横に移した。この時に付いた指紋が後に問題になると思ひもしなかつた。

「誰が支店長を殺したのだろう？」

竹森は疑問を口にした。犯人が支店長を殺し、竹森も金庫室内に閉じ込めた理由も全く検討がつかなかつた。

自分自身が襲われる理由は思い浮かばなかつた。支店長殺しに自分が巻き込まれたに違ひないと考えた。

「いつ、助け出されるのだろうか？」

上曜日なので、救出は月曜日の朝になるかもしれない、と不安になつた。一日間を死体と一緒に過ごすことになる。

その間は食べることも飲むこともできない。竹森は既に喉の渇きを感じていた。飲食だけでなく、排泄の問題も有る。

激しく息をしていたので、息苦しさを感じた。耐火金

庫室は完全な気密性・水密性の構造となっている。通常の営業時間中は耐火扉を開け、格子扉だけ閉めているが、今は完全に密閉されている。

金庫室は奥行きと幅が四メートル程、高さ三メートルの直方体の空間である。印鑑届や手形類を格納したキャビネットが金庫室の奥半分を埋めていた。営業室に出しているキャビネットを毎日業務終了後に金庫室に格納するのである。

空気が淀んで、既に酸素が少ないような気がした。二日分の酸素が足りないと竹森は不安を感じた。

金庫室内は異常に蒸し暑く、暑さで全身が汗で濡れていった。この暑さでは死体の腐乱も進んでいくようであった。

支店長の死体を竹森は恐れながら見つめた。死体の右手が脇腹につくようにして、甲を下に固く握られていた。拳の中に鍵束が包まれているのに竹森は気付いた。三つの鍵がキー・ホルダーで繋がっており、耐火扉と格子扉と支店通用口の鍵であった。休日出勤することになった支店長が、鍵を借りた際に三つの鍵と一緒にしたようであつた。

三つの鍵は全て、一般に使用されているシリンドラー鍵の鍵である。ただし、造りは精巧で複製が難しいというものであつた。

竹森は死体の右手から鍵を抜こうとした。しかし、死

ことが不思議に思えた。

竹森は改めて金庫室の耐火扉と格子扉の鍵を見つめた。

格子扉のシリンドラー鍵は二つ有り、普段は融資課長と預金主任が管理している。休日出勤のため、預金主任の鍵を支店長が借りていた。残り一つの鍵を持つ融資課長は休日出勤していない。

耐火扉のシリンドラー鍵も二つ有り、副支店長と預金課長が一つずつ持っている。預金課長の鍵を借りていたので、残りの一つは副支店長が持っている。

金庫室の耐火扉は、シリンドラー鍵の他にダイアル鍵が外面に付いている。ダイアルを時計方向、反時計方向に何度もか回し、目盛りに合わせて開錠する。

ダイアルの回数と目盛りを知っているのは、役職者である。回数と目盛りを知らないても、ダイアルを回すだけで閉めることができる。鍵が金庫室内にある以上は、ダイアル鍵だけで耐火扉が閉まっていると考えられる。

通用口のシリンドラー鍵はオートロックではなく、内側から施錠するには、サムターン（つまみ）を六十度回す仕組みになっている。竹森は支店長と一緒に通用口から入ったとき、サムターンを回して施錠した。施錠した記憶は失つていなかつた。

犯人が支店から出ると鍵を持っていないので、通用口のシリンドラー鍵は開錠されたまま状態になる。通用口はシリンドラー鍵だけでなく、数字鍵（テンキー）

体の指は固く握られていた。支店長が犯人に渡さないよう強く抵抗したようと思えた。

何とか小指から順番に広げて、無理やりに鍵束を引き抜くことができた。

格子扉の鍵の位置は内側から見ると右端になる。外側の鍵穴に鍵を差し込むには、左手を使って開錠しなければならなかつた。竹森は左利きだったので、都合が良かつた。

鍵を持った左手で、格子の隙間に差し込んだ。隙間が狭く、手首と肘の真ん中までしか入らなかつた。

耐火扉と格子扉との間隔は八センチ位である。鍵が六センチほどの大きさなので、鍵穴に入れるのにかなり手間取つた。何とか鍵穴に差し込み、開錠することに成功した。

格子扉を内側に引き開けた。格子扉を開く途中で死体の右肘に引っ掛けた。竹森は格子扉の反対側に回り込んで、扉で死体を押して移動させた。格子扉は死体の右肘の支えが外れて、一八〇度に開くことができた。

耐火扉に体全体を付けるようにして押したが、全く動かなかつた。格子扉が開いても、耐火扉が開かなければ、脱出は不可能であった。竹森が脱出を諦めると同時に、疑問が湧いてきた。

「どうして犯人は金庫室から抜け出したのだろうか」
支店長が鍵を握っているのに、犯人が外から施錠した

鍵が外壁に付いており、二重に施錠している。

数字鍵は電卓のように数字と文字のキーが並んだパネルである。四ケタの暗証番号の数字と開ボタンを押せば、二十秒間だけ開錠する。それ以外は常に施錠の状態である。外からの操作のみで、内から外へは、数字鍵に関係が無く出ることができる。暗証番号は一ヶ月ごとに変更するが、行員全員が知っている。

平日の就業時間中は、シリンドラー鍵は開錠したままで、

数字鍵だけ外から開錠操作を行つて入れることができる。同じ状態に現在もなつていると思つた。

施錠の状態でシリンドラー鍵の鍵が無ければ、外からイントーフォンで呼び、支店内の人を開けてもらうしかない。扉の内側から手でサムターンを回すか、モニターの開錠ボタンを押すことで遠隔操作でサムターンが回る。

休日なので、通用口以外に支店を出入りする方法は無い。店舗正面はシャッターが降ろされており、少しでも動かすと警備会社に連絡が入る。大通りに面しており、不審な行動はできない。ATMコーナーはシャッターの外側にあり、出入口は無い。

通用口のシリンドラー鍵のもう一つの鍵は、取引先係長が持つている。

犯人の姿については全く記憶が無かつた。しかし、犯人が支店の中に入るためには、竹森か支店長が内側から開錠しなければならない。その時に竹森は犯人の顔を見

てることになる。

犯人の方も姿を見られていることを知っていることになる。竹森が記憶を失つたことを犯人が知る訳がない。それとも、犯人は自分達に知られずに通用口を入れつていたのだろうか、と考えた。

記憶を呼び戻そうとしても、地下の金庫室に通じる階段を一步踏み出した瞬間から完全に記憶が抜け落ちていった。金庫室内で襲われたと思うが、階段で襲われて金庫室に運び込まれたかもしれない。

何も考えずに救出を待つているだけでは、精神が異常になりそうになった。謎を解くことに集中して、気持ちを落着かせようとした。

脱ぎ捨てた背広の内ポケットを搔き出して、手帳とペンを取つた。鍵束を見つめて、考えを整理した。竹森は融資案件を検討する時など、表を作つて考えることが多かった。

金庫室の格子扉・耐火扉、支店通用口の鍵がそれぞれ施錠か開錠かで分けて一覧表を作成した。【表1】

格子扉は犯行時に開いていたが、犯行後に外から施錠されていた。

耐火扉も開いていたが、外から施錠されている。シリンドラー錠かダイアル錠のどちら一方、または両方で施錠されている。ダイアル錠だけで施錠されている可能性が高いが、内側からは分らない。

一錠を閉めるのは、不可能である。同様に、通用口のシリンドラー錠を閉めるのも不可能である。

三つのシリンドラー錠が掛かっていることは有り得ない筈であった。しかし、後で耐火扉と通用口のシリンドラー錠が施錠されていたと証言され、竹森の不安は的中するのである。

犯人が事前に合鍵を複製している可能性を考えた。三つ全て複製が困難な鍵と言われているが、製造元に依頼すれば、複製が可能かもしれないと思つた。

格子扉の鍵は一週間前に取り替えられていた。以前から鍵と鍵穴との不具合があり、錠全体を取り替えたのである。

この一週間の間に合鍵を作れば、そこから犯人が判るかもしれない。犯人にとって合鍵を作るのは危険な行為である。合鍵の可能性は低いだろうと考えた。

「金庫室と支店が全て施錠されていたら、支店長殺しの犯人に自分がされるかもしれない」

金庫室に二人を閉じ込めた第三者がいても、その第三者が犯行は不可能になる。この状況で支店長を殺すことである。救出されても、殺人犯として逮捕されるのでないかといふ不安が生じたのであった。

推理をする内に不安が膨らんでいった。東西銀行で働いていることが、不幸の原因のように思えてきた。

支店の通用口のシリンドラー錠は、竹森が内側からサムターンで施錠した。犯人が鍵を持たずに外に出たのだから、開錠の筈だが、現状は分らない。

数字錠については、仕組みから、外から内へは常に施錠した状態で、内から外へは常に開錠した状態である。

開錠か施錠という状態よりも、入出が可能か、または出た後に施錠が可能かという観点で考え直した。同様に二つ目の一覧表を作つた。【表2】

格子扉は出ることができるでも、鍵が無ければ施錠することは不可能である。

耐火扉は出でからダイアル錠だけ掛けば良い。シリンドラー錠が掛かっていないのが前提であるが、室内に居る竹森には不明である。

通用口は、シリンドラー錠を竹森が施錠していたが、自らが内側から開錠すれば、外から入室できる。数字錠は、行員全員が暗証番号を知っている。外に出るのは、鍵が不要である。耐火扉と同様にシリンドラー錠が掛かっていないという前提で、鍵の状況は不明である。

竹森は一覧表を書きながら耐火扉と通用口のシリンドラー錠も外から施錠されている不安を感じていた。格子扉のシリンドラー錠が外から施錠されており、三つの鍵が一緒に支店長の手に握られていることから、連想した。

最悪の場合を想定し、竹森は一覧表を書いた。【表3】金庫室内に鍵が有る以上は、外から耐火扉のシリンドラ

二 東西銀行

東西銀行は、四年前に東城銀行と西都銀行が合併して誕生した銀行である。合併比率は一対一の対等合併であった。

東城銀行は東京に本店を持ち、主として東京・神奈川・千葉など首都圏を中心に店舗網を持つ銀行であった。

西都銀行は大阪に本店を持ち、北海道から九州まで全国の主要都市に広く展開している銀行であった。

合併時点では東城銀行の方が西都銀行より預金や融資の資産残高や店舗数などで上回っていた。また、東城銀行が西都銀行よりも歴史が古く、メイン銀行となつてゐる取引先数も多かつた。

東城銀行は年ごとに資産量を減らしてきているのに対し、西都銀行は資産量を急速に拡大してきた。合併が無ければ、両行の順位は逆転するところであった。

両行が合併を発表したときには、銀行業界再編の流れであり、合併が相乗効果を發揮するとして、好意的に評価する意見もあった。

しかし、ある経済評論家が、二つ銀行の体質が極めて異なり、行内融和は困難で合併は失敗すると批判をした。銀行の体質や行員の性格から、東城銀行は草食動物で、西都銀行は肉食動物であると評論家は論じた。一つの檻に肉食動物と草食動物を一緒にすると、草食動物は全て食い殺されるだろうという痛烈な批判をしたのである。

三百片を越す破片がメッシュで篩かけ検出された事は聞いていたが、大半は細片であり、当然同一鏡の破片である場合も有り得るし、また同じ種類の別の鏡の場合もあるのだから、古代鏡約七〇〇面をレーザー光線で細密に3次元計測して構築したデータベースと照合したり、厚みや铸造状態を分析したとはいうものの、成分分析も鉛同位体比の測定も行わずに、どのようにして八一面といふ数を出したのかという詳細なデータの公表も無く、

平成二十二年一月八日の朝刊各紙は、奈良・茶臼山古墳から出土した鏡片について一斉に報道した。
曰く「卑弥呼の銅鏡？最多八一面出土」「国内最多、八一面分の銅鏡片・卑弥呼と同年代示す」「銅鏡国内最多八一面出土・卑弥呼の遣使、帰國年、紀年銘の鏡も」といった調子である。

まえおき

更にこの一月八日の記事での一番の問題点は、二六面

あつたとされている三角縁神獸鏡の一面に「是」の字が

刻んであり3次元データベースで照合したところ、蟹沢

古墳（群馬県）出土の「正始元年」銘鏡と字体や凹凸が

一致、同じ鑄型の兄弟鏡と分かった。としていること

ある。

還暦からの考古学（二十）

桜井茶臼山・壹与・磐余王朝（その1）

中山喬
たか
ひろ

鵜呑みにするにはあまりにも問題が大きいと考えた。

この小区画のなかの字と文様が一致しただけで「桜井茶臼山古墳から出土した三角縁神獸鏡の一部。「是」という字が記されている」と太字で紹介されている。

この鏡片は僅か縦17mm幅14mmの三角形小片である。この小区画のなかの字と文様が一致しただけで「桜井茶臼山古墳から出土した三角縁神獸鏡の一部。「是」という字が記されている」と太字で紹介されている。

この鏡以外でも良く見られるところであり、其の上「是」の銘文を持つ鏡は三角縁神獸鏡だけでも該当する正始元年陳是作同向式神獸鏡の他に、景初三年陳是作同向式神獸

表1 ○=可能 ×=不可能 □=不明

		入	出	
金庫室	格子扉	シリンダー鍵	○	×【入】扉を開けたときに【出】外から施錠されている
	耐火扉	シリンダー鍵	○	×【入】扉を開けている
	ダイアル鍵		○	×【出】シリンダー鍵+ダイアル鍵のどちらか一方または両方で外から施錠されている
支店	通用口	シリンダー鍵	○	×【入】内から自由に施錠した【出】鍵状態は不明
	数字鍵		○	×【入】外から自由に施錠した【出】鍵状態は不明

表2 ○=可能 ×=不可能 □=不明

		入	出	
金庫室	格子扉	シリンダー鍵	○	×【入】同【出】施錠は不可能
	耐火扉	シリンダー鍵	○	○?×【入】同【出】鍵状態は不明(開錠状態なら自由に退室)
	ダイアル鍵		○	○【入】同【出】退室後に施錠は可能
支店	通用口	シリンダー鍵	○	○?×【入】内から開錠すれば良い【出】鍵状態は不明(開錠状態なら自由に退室)
	数字鍵		○	○【入】暗証番号で開錠は可能【出】同

(同=上の表と条件が変わらない)

3つのシリンダー鍵か外から施錠されていた場合

表3 ○=可能 ×=不可能

		入	出	
金庫室	格子扉	シリンダー鍵	○	×【入】同【出】同
	耐火扉	シリンダー鍵	○	○×【入】同【出】施錠は不可能
	ダイアル鍵		○	○【入】同【出】同
支店	通用口	シリンダー鍵	○	○?×【入】同【出】施錠は不可能
	数字鍵		○	○【入】同【出】同

(同=上の表と条件が変わらない)

鏡、及び紀年鏡ではない陳是作四神二獸鏡、陳是作・竟・四神四獸鏡、陳是作四神四獸鏡、張是作四神四獸鏡、陳是作五神四獸鏡、張是作六神四獸鏡と多数存在するのである。

このように日中両国で何千点かに達すると思われる鏡の銘文のなかの「是」の研究発表も行われないまま、五百面を超える三角縁神獸鏡の中で僅か三面しか管見されていない正始元年紀年鏡と断定したと思わせるような大きな見出しの新聞発表とは一体何なのだ。一九七二年に河北省易県で採集された方格規矩鳥文鏡と静岡県松林山古墳出土の三角縁二神二獸鏡とは、銘文「吾作明鏡甚獨奇保子宜孫富無訾」が一致し、書体も似通つたものが多いのではないかと、記事内容が持つ整合性欠如に苦しんだ。

別の角度から検討すると、三角縁神獸鏡にしても銅鐸にしても、其の他の青銅製品にしても高度な文様を鋳出し優れた作品といわれているものは、同じ鋳型で同じ坩埚で同范だ同型だと言われているようなものから作る事は出来ないものなのだと考えている。それが何より証拠には、同范だ同型だといわれているものの鉛同位体比が一致した例が殆ど見当らないのである。

精緻な文様の高度な青銅製品は、丁度陶器の名工が名品を創り出すように、数多くの失敗作を出しながら其の都度鋳型を作り直し、鋳直す中から生れてくる手造りの

貴重な作品であり、大量生産とは程遠いものだと考えている。

これも最近はやりの「マスコミ考古学」かと苦々しく思つていたところ、先ず鯨さんから次いで三戸岡さんからは二度にわたり、新聞記事についてのコメントを求められ、つい本音を話したところ、それなら本件に関するお前の考え方を『まんじ』に書けといわれて筆をとつた次第である。

結論

桜井茶臼山古墳の被葬者は壱与であり、彼女は磐余王朝の創始者で、それを支えたのは彼女の流れを汲む阿部一族である。

理由

- ① 桜井茶臼山古墳の年代は二期に入る。
- ② 桜井茶臼山古墳出土の水銀朱、副葬品、関連遺物・遺構内容は抜群であり、その古墳年代と合わせて壱与を埋葬者とするのが最も妥当である。
- ③ 壱与は卑弥呼の宗女であり、日本書紀からも卑弥呼及び阿部一族との関係を追うことができる。
- ④ 磐余とは桜井茶臼山古墳の西南から天の香具山の東側一帯にかけての地域を指し、神武天皇は神日本磐余彦

天皇と諡号された。

其の他の日本書紀上では神功皇后、17代履中天皇、22代清寧天皇、26代繼体天皇、31代用明天皇が皇居を設けたと記載されている。

説明

① 桜井茶臼山古墳を含む畿内と磐余の古墳年代

古墳の型式編年

古墳の時期は墳丘の形態や内部主体の様式、副葬品の種類や特徴など様々な要素の解釈によつて判断されきたが、最近は形態よりも、埴輪と須恵器の型式編年が重要視されるようになつた。

それは埴輪と須恵器の編年が確立したと判断されたことと、形態には例えば宮崎県地方では柄鏡式といわれるような前方部の細く長いものが発達する等、地方差があつた為である。しかし依然として形態は時期を判断する上での重要な要素であると考えている。

年代は三世紀の中葉から六世紀末までが古墳時代といわれている時代で、その後六世紀末から八世紀初頭の藤原京の時代までを終末期古墳としている。

先ず前方後円墳を中心とした古墳時代の二五〇年間を十期に分類したものについて考察する。

第一期
大型仿製鏡や車輪石・石鉤などの碧玉製腕飾類、紡錘車・玉杖などの碧玉製品、筒形銅器などが現れる。
奈良県桜井茶臼山古墳・京都府寺戸大塚古墳平尾城山古墳・兵庫県権現山51号墳・岡山県浦間茶臼山古墳などで竪穴古墳が該当する。

第二期 円筒埴輪Ⅰ式

容器（合子・冉など）・椅子・鍼などの石製品（滑石製品を含む）や巴形銅器が現れる。新しい埋葬施設として粘土櫻や割竹形石棺・舟形石棺または長持形石棺のような本格的組合式石棺が登場する。

奈良県メスリ山古墳・東大寺山古墳・マエ塚古墳、京都府園部境内古墳・南原古墳・大阪府松岳山古墳・弁天山C1号墳がある。

第四期

円筒埴輪II式。

農耕具・玉類・琴柱形石製品の滑石製模造品、長方板革綴短甲・三角板革綴短甲・革綴衝角付冑などが現れる。鉄鏃のなかで、長柳葉・一段逆刺・短頸広身鏃が多くなる。鏡には小形仿製鏡である珠文鏡・乳文鏡・重圓文鏡が加わる。墳丘には造出・周濠には楯形・馬蹄形のものも現れ、石棺は長持形が定形化する。
奈良県東山古墳・佐紀陵山古墳・佐味田宝塚古墳・檍山古墳・富雄丸山古墳・大阪府津堂城山古墳・和泉黃金塚古墳・北玉山古墳・京都府鳥居前古墳などがある。

第五期

円筒埴輪III式。

大量的滑石製農工具が見られる。鉄鏃は第四期に現れたものが主体を占める。短甲は三角板革綴と長方板革綴型式が主流となる。一方、銅鏡、筒形銅器、巴形銅器、石製腕飾類は消滅する。

奈良県室大墓古墳・京都府久津川車塚古墳・大阪府豊中大塚古墳がある。

第六期

円筒埴輪IV式・須恵器TK73型式。

武具の新しい型式が出現する。三角板鋤留短甲・鋤留

第七期

円筒埴輪IV式・須恵器TK216・208型式。

長頸鏡や画文帶神獸鏡・画像鏡、鈴鏡が現れかつ多く見られる。武具では横矧板鋤留短甲や挂甲が普及する。第六期に現れた馬具が増加し剣菱形杏葉、「字形鏡板」などが定式化する。其他U字形鉄鋤先・金銀垂飾付耳飾り・金銅製三輪玉・家形石棺などが現れる。

大阪府黒姫山古墳・大山古墳(仁德天皇陵)・カトンボ山古墳・長持山古墳・野中古墳・兵庫県宮山古墳・福岡県月山古墳などがある。

第八期

円筒埴輪V式・須恵器TK23・47型式。

馬具に杓子形壺鏡、花弁形杏葉、鈴杏葉が現れる。
奈良県石光山8号墳・京都府穀塚古墳・大阪府経塚古墳・大賀世2号墳・和歌山県大谷古墳・埼玉県稻荷山古墳などである。

第九期

円筒埴輪V式・須恵器MT15・TK10型式。

馬具として鉄製輪鏡、心葉形杏葉、橢円形杏葉、鐘形杏葉、半球形雲珠が現れ、其の他竜鳳環頭大刀も出現する。又横穴式石室が一般化する。

奈良県市尾墓山古墳・大阪府芝山古墳・南塚古墳・京都府物集女車塚古墳・冴山古墳・坊主山1号墳・兵庫県園田大塚山古墳・滋賀県鴨稻荷山古墳などがある。

第十期

須恵器TK43・209型式・円筒埴輪はごく一部となる。

馬具には棘葉形杏葉・花形杏葉が現れ、大刀には円頭・頭椎・圭頭の各大刀が出現する。

奈良県烏土塚古墳・平群二里古墳・大和二塚古墳・岡山県こうもり塚古墳などが該当する。

今度は磐余周辺の古墳を中心とした遺跡・遺構造営年代を考える。

第一期から第十期までを古墳時代の前期・中期・後期に当てはめると、第一期～第三期が前期、第四期～第七期が中期、第八期～第十期が後期となる。

磐余は阿部・池ノ内・谷・上吉之宮・高田・山田・高家・外山・桜井・河西・浅古・倉橋の各地区に分かれる。

地区別・時期別の動きは次の通りである。

阿部

(一)は阿部氏の本貫地であるが、阿部六ノ坪遺跡は古墳時代中期（第六期）のものと思われる土坑が検出され、土師器、須恵器の他、滑石製子持勾玉、小玉、責金具、鹿角製杓頭が出土している。第七期阿部雨ダレ遺跡からは土師器、須恵器、石鍬、同じく第七期と思われる阿部中山古墳三基からは鎧座金具、鉄釘、須恵器などが出土している。又第八期コロコロ山古墳からは、金環、鍔の他、追葬された遺物として和同開珎が出土している。

この他古墳で特筆大書すべきものは、安倍文殊院境内にある安倍文殊院西古墳である。この古墳は七世紀半ば頃の築造と考えられているが、大化の革新に関係し孝徳天皇の時代左大臣をつとめた阿部倉梯麻呂が被葬者ではないかと考えられており、我国で最も精巧な造りの横穴式石室を持っている。

それは径13.6m、高さ6.6m位の円墳で、石室は南に開口する切石造りの両袖式で、玄室の長さは5.1m、幅2.9m、高さは約2.7mである。石材は良質の花崗岩で、高さ80cm、幅70cmほどの長方形の切石を、伍の目に五段に積み上げ、内部をわずかに穹窿状にほりくぼめた一枚の天井石で覆っている。

羨道は左右各四枚の巨石を一段に並列し、天井石は三

八期と考えられている横穴式石室の円墳二基が存在した。

更に第九期の風呂坊古墳群1・2・3号墳があり何れも横穴式石室を持つ1・2号墳からは鉄釘、3号墳では須恵器が出土している。

上之宮

聖徳太子ゆかりの上之宮遺跡がある。時代は飛鳥～奈良と続く。出土遺物は横櫛・須恵器・獸骨と和銅開珎、遺構は飛鳥時代の掘立柱建物跡と素堀溝、石組溝、土坑その他奈良時代の石敷溝がある。

高田

第三期の代表的前方後円墳メスリ山古墳が存在する。(一)からは玉杖の他、我が古墳から唯一の出土品である長さ18mの鉄弓と、鏃だけでなく籠や矢羽も全て鉄で作られた長さ80cmの矢五本が検出されている。

その他第九期と思われるフジヤマ1号墳は、東西17m、南北14.5m、横穴式石室を持つ円墳であるが、土師器、須恵器、金環、鉄釘が出土している。また同時期と思われる円墳・横穴式石室、石棺の徳利塚古墳も存在する。

山田

蘇我石川麻呂が創建(643年金堂創立、685年丈六仏開眼)した山田寺址がある。(一)は明日香への入口とな

枚で、長さ7.3m、幅2.3m、高さ1.8mである。

尚文殊院境内のすぐ東側にも横穴式石室を持つ径15mの円墳、文殊院東古墳があり、羨道中程に昔から泉が湧き出でおり「智恵の水」と呼ばれ、この水を使うと書道が上達し、智恵を授かると伝えられている。時期は西古墳より古いと考えられている。

池ノ内

(一)は日本書紀の履中天皇二年十一月条にある「磐余池」の所在地である。

その伝承地の南東にある丘陵が北に伸びる尾根上に、尾根頂部の自然地形を利用した八基の円墳が確認された。古墳群は埋葬構造・副葬品から四世紀後半の1・2号墳の築造に始まり五世紀初頭の5号墳で終了したと考えられている(第二期～第四期)。

谷

(一)の代表的な古墳は艸墓古墳で、安倍文殊院のある阿部丘陵の南斜面に築かれた東西約22m、南北約28mの横長方墳である。この石棺は唐櫃に似ており、隣の明日香村にある岩屋山古墳の石室と共通点があるので七世紀前半終頃の築造と考えられている。

その他第三期に入ると考えられる琥珀玉、刀、釘、土製馬、土師器、綠袖瓶の遺物出土地があり、第七期～第

る。

高家

(一)では第九期と思われる馬具、金環2、須恵器、土師器が出土した横穴式石室のヒラノ古墳の他、恐らく同時期頃と思われる横穴式石室の14mの方墳(1号墳)と、20数基の円墳中、横穴式石室を持つ物が多い、長瀬藪古墳群がある。

外山

第一期の茶臼山古墳が代表的前方後円墳である。

その他第六期と思われる切妻造家形埴輪が出土した円墳のメグリ塚古墳がある。更に第三期～第六期と考えられる森谷山2～4号墳があり、2号墳は粘土桶・組合式木棺径1mの円墳(第三期)、3号墳・4号墳は組合式木棺直葬の円墳で、4号墳は須恵器が出土しているので第六期に下がると考えられる。又鳥見山山麓古墳群のうち玉類・刀・釘・土師器・須恵器が見つかった桜井280号墳と、銀環・ガラス小玉・馬具・刀・釘・土師器・須恵器が検出された桜井288号墳が何れも第八期に入ると考えられる。

桜井

管玉が出土した横穴式石室を持つ15mの円墳、鳥見山

山麓古墳群桜井287号墳が該当し、前述の280号、288号墳同様第八期と考えられる。

河西

縄文時代後期から奈良時代までの遺物が出上する等弥神社南遺跡と、形象・円筒両タイプの埴輪を製作したと考えられる、能登埴輪製作地が存在する。

浅古

五世紀末から六世紀初頭すなわち第八期の、全長45m前方後円墳の兜塚古墳があり、メスリ山古墳の直ぐ東側に立地する。

また石室の構成がいわゆる岩屋式石室にやや先行すると考えられることから七世紀初頭の築造と考えられている一辺約24m高さ約5mの方墳、秋殿古墳も存在する。更に磚槅式横穴石槻3をそれぞれ所有する3号墳4号墳が存在し、七世紀前半から中頃の築造と考えられている、舞谷古墳群1～5号墳が検出されている。

倉橋

赤坂天王山古墳が代表的古墳である。南北42.2m、東西45.5m、高さ9.1m、三段築成の大型方墳で、墳頂部は一辺12mの平坦面を持つている。

内部主体は南斜面に開口する横穴式石室で、玄室は墳

「」の項の結び

各地区にとぎれることなく動きが見られるが、大別すれば、前期古墳と終末期古墳に見るべきものがあり、これは阿部氏の盛衰を物語つているものと判断される。

② 桜井茶臼山古墳の出土遺物

水銀朱

筆者が今回的新聞記事で最も注目したのは200kgを越えるとする水銀朱の出土であった。

その理由は、当時水銀は薬品として又顔料として極めて貴重で高価な品物であり、最高の交易品の一つであると思料しているからである。

水銀とは辰砂を焼いてつくる常温で液体である唯一の金属で、硝酸に溶けやすく、金属との合金も作りやすい。

蒸氣は有毒で金の精練、温度計、各種の水銀塩（昇汞、甘汞など）・火薬（雷汞）・硫化水銀（赤色顔料）などの製造に用いるものである。

『続日本紀』光仁天皇宝龜八年（七七七）五月二十三日条には次のような記事が記載されている。

丘のほぼ中央に位置する。石室は巨大な花崗岩の自然石を使用する巨岩古墳である。

玄室の中央やや北寄りに凝灰岩の長さ約24m、幅約1.7mの剝抜式家形石棺が安置されており、棺蓋の前後左右には計六個の繩掛突起が水平についている。この石棺は羨道に面した側の上辺のほぼ中央に小さな穴が穿たれ、穴の周囲に三辺の方形縁取切込みがある。またこれに対応する蓋の部分にも彫り込みがあるので、四角な覆いの石を嵌めこむ設備があったようである。他に類例を見ないものである。

古墳は江戸時代には赤坂陵と呼ばれ崇峻天皇の倉梯岡陵に擬定されたこともある。

この古墳の周辺には数基の古墳が存在し、天王山2号墳はすぐ西側に位置し横穴式石室を持つ方墳、北側には横穴式石室を持つ円墳の天王山3号墳が存在、時期は天王山古墳と共に、何れも六世紀末～七世紀初頭と考えられている。

又赤坂天王山古墳の東約1kmには石室の型式から六世紀末頃の築造と考えられている径40余mの二段築成円墳と思われる巨岩古墳、越塚古墳がある。

更に当地区には径10mの円墳で横穴式石室を持つエンドウ山1号墳2号墳も存在するが、詳細な時期は不明である。

この記事は、当時黄金や漆と並んで水銀が日本列島を代表する高価で貴重な特産物であつたことを示すと共に、朝鮮半島・中国大陸東北地方では水銀入手するのが困難であった事を我々に示している。

ここで中国大陸・日本列島の水銀産出鉱山について検証する。

中國大陸

中国大陸における水銀鉱は主として貴州及び雲南に存在する。水銀鉱の母岩は石灰岩または硬頁岩で、地質上の年代はまだ確定されていないが上部古生界に属するものが大部分である。火成岩との関係はあまり明瞭ではない。鉱石は辰砂が大部分であるが、天然水銀が混じることがある。鉱脈内の伴生鉱物としては、少量の石英とか、方解石、輝安鉱、アスファルト等で、水銀含有率は低く3%以上のものは稀である。中国における水銀生産量はかつて毎年約1000トンに達し、そのうち400トンを貴州の白馬洞から産出、国内の需要を充たした後、広州から輸出されたものも少なくなかった。このように貴

州は州内各地で産出され中国水銀産出量の中心的地位を占めるが、それ以外湖南、湖北、四川、廣西、廣東、雲南の各省でも水銀を産出している。

湖南省の水銀鉱は鳳凰県城の北約四里の獅子坪にある。

辰砂は石灰岩層の中に生じ、厚さ約2mの鉱床である。

鉱床は網脈形をなし、辰砂及び石英、方解石がその中に充填されている。充填の空隙にある辰砂は概ねその結晶状態が非常に美しい。鉱石は平均2%から4%の水銀を含み、往々アスファルトが混在する。

四川省の水銀鉱は、省の東南隅にあたる西陽県にある。

広西省（コワンシー壮族自治区）の水銀鉱は桂林及び宜

山県、雲南省の水銀鉱は蒙自、晋耳、騰衝の各県下、廣

東省は番禹、連県、湖北省の成豐など、相当量の水銀埋

藏があると見られている。

このように中国大陸での水銀産地は中原地域から離れた南西部に主要鉱山が偏在している。

日本列島

自然汞（天然水銀）

安房国安房郡鷹ノ島及び沖ノ島

館山湾の土中より発見。

伊勢国三重郡水澤村字中谷

辰砂と共に産。

伊予国北宇和郡日吉村父ノ川

又金鉱の共生鉱物として産出する例として、肥前・波佐見金山、薩摩・牛尾、大口の一金山あり。

更に北海道・枝幸ウツタシナイにおいては河礫中に交われるあり。これは砂金採取の際辰砂が砂として共存したものと考えられる。また野尻金山の所在地、陸前世田米村でも辰砂の砂が出品されたことがあり。豊後下毛郡草木金山でも辰砂の砂を産す。

其他第三紀層に属する大和宇陀郡曾爾村長野屏風ヶ谷の半腹において存在する褐炭の表面に辰砂の薄皮を成すものあり。

以上述べたように、磐余地区の周辺には良質な水銀鉱山が存在しているのである。

ここで日本列島の古墳出土水銀朱の実例について考え、今回の桜井茶臼山古墳の200kgを超える出土量がいかに特別なものであつたか考える。

従来水銀朱出土量において突出した古墳としては、岡山県・橋築墳丘墓の32kgと、奈良県・天神山古墳の41kgであった。これが一気に桜井茶臼山古墳において、従来最高の五倍の量が検出されたと云う事は、間違いない。地元の水銀鉱山が開発され、貴重な水銀の採掘と水銀朱への加工が開始されたことを意味するものである。

黝色の頁岩中に小粒にて夾雜し辰砂と共に産する。

肥前国東松浦郡平戸
かつて砂岩中より産出したることあり。

肥前国北松浦郡山口村相ノ浦
第三紀砂岩中に存在。

日向国南那賀郡湊村
褐鉄鉱に依て暗黄色となれる土塊中に自然汞の粒状をなして混合するものにして分離しやすし。

肥前国北松浦郡平戸
第三紀砂岩中に存在。

阿波那賀郡加茂谷村
軟弱なる岩石の表部に薄皮をなすものにして往々微細なる柱状の結晶を見ることあるも晶面明白ならず。

辰砂（水銀と硫黄との化合物）

大和宇陀郡駒帰村

石英脈中に染鉱し、其の空隙においては微細なる結晶の点在するものあり。透明にして美麗なり。

大和多武峰

軟弱なる岩石の表部に薄皮をなすものにして往々微細なる柱状の結晶を見ることあるも晶面明白ならず。

阿波那賀郡加茂谷村

伊予北宇和郡日吉村大字父の川
共に粘板岩中の石灰岩に夾雜するものにして現在この鉱の主産地なり。往々その空隙に結晶を見るも微細にして判別し難し。要するに辰砂結晶のやや完全なるものは大和駒帰村産のみ。

伊勢三重郡水江村、肥前松浦郡平戸、もかつては産出した。

伊予北宇和郡日吉村大字父の川

この磐余の地は上ツ道と横大路が交差する地点であり、特に桜井茶臼山古墳は眼下に其の交差点を見下ろす場所に立地している。更に後円部に登れば指呼の間に三輪山と箸墓古墳を展望することができる。

ここで想起されるのは『日本書紀』孝元天皇七年春二月条で、そこには次の様に記されている。

「内貢の朔丁卯に、鬱色謎命を立てて皇后とす。后、一の男、一の女を生れます。第一おば大彦命と曰す。第二をば椎日本根子彦彦天皇と曰す。第三をば倭迹迹姫命と曰す。兄大彦命は是阿部臣一凡て七族の始祖なり。」

ここで述べられている倭迹迹姫命は箸墓古墳の被葬者で魏志倭人伝の卑弥呼に最も合致すると考えられている人物であり、その魏志倭人伝で卑弥呼の宗女と考えられている壹与及びその末裔と考えている阿部氏と結びつくのである。

このように壹与の流れを汲む由緒正しき阿部氏は、水銀鉱山の開発を成功させ更に交通の要衝に立地する経力をパックに、葛城・物部・蘇我から中臣の藤原へと権力が推移する中で、榮枯盛衰はあるものの、一定の地位を保ち、天皇家とは、桓武天皇の皇后（藤原乙牟漏）と

して平城天皇と嵯峨天皇を産んだ実母の母が阿部朝臣古美奈であり、つながりを保っている。この間軍事面では

斎明天皇時代の阿部比羅夫、文人としては奈良時代唐の玄宗皇帝に寵遇された阿部仲麻呂、陰陽家としては平安時代中期の安部晴明等、各分野に人材を輩出するのである。

これらのことを見頭に置きながら次回は、これも隔絶した出土数を示した鏡とか、極めて珍しい出土品である玉杖・玉葉の問題に触れてみたい。

参考文献

- 上田宏範・中村春壽『桜井茶臼山古墳』奈良県教育委員会 一九六一年。
宇治谷孟『続日本紀』(下) 講談社、一〇〇七年。
大塚初重・桜井清彦・鈴木公雄『日本古代遺跡事典』吉川弘文館、一九九五年。
木村芳一・小泉俊夫『奈良原史』第三巻考古、名著出版 一九八八年。
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋『日本書紀』(二) 岩波書店、一九九四年。
廣瀬和雄『前方後円墳の幾内編年』『前方後円墳集成』山川出版社、一九九三年。

鏡（その12）

アルキメデスの鏡

中 山喬 央

聖火

太陽に向けられた凹面鏡の放つ熱は物に火を点けます。紀元前四〇〇年頃生存したと伝えられている争論術の研究で有名なメガラ派を創立した、ギリシャの哲学者でソクラテスの弟子だったエウクレイデスは『反射光学』という本を著しますが、そのなかで球面に反射した太陽光線が同一点に収斂する二つの図形を示し、

したがって、これらの熱線が中心に集中し、そのためこの場所に置かれた麻屑が燃え上がる。

と説明しています。

これが今のところ太陽光線が、鏡を集光装置とすることによって、熱源とし得る事について証明した最古のものです。

福永伸哉『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会二〇〇五年。
和田維四郎『日本鉱物誌』明治参拾七年六月二十二日。

ローマ伝説上の第二代王、スマ・ポンピリウスの時代（前714年～前671年）、デルポイとアテナイの聖火はメディア人やアリストテオノの支配によって消された

オリンピックの聖火は太陽光線によって点されます。クーベルタンのいうところに寄れば、オリンピック競技の期間中燃え続けた聖火は、その起源が紀元前七七六年まで遡りますが、それはポイボスの光に差し出された金の盃によって点火されたものだと、M・ペローが一九六三年パリで刊行した『黄金の石炭・太陽熱エネルギー』の8頁で述べています。

また古代ギリシャの哲学者・著述家で、ローマ・アレクサンドリア・ギリシャなどを巡歴したプルタルコス（46年頃～125年頃）は次の様に記述しています。

が、多面体によつて再点火された。

祭壇が壊されると同時に消えた火を、他の火を移して再点火することは許されなかつたので、まつたく新しく太陽から純粹で汚れない焰を取つて火を点けなければならなかつた。そのために球体ではなく逆ピラミッドの一等辺三角形の辺から窪みをつけて、其の表面から光線が一点に集中するように拵えた凹面鏡が用いられた。

恋心を表す鏡

イタリアの人文主義者でキリスト教神学とプラトン哲学の融合を試みたマルシリオ・フィチーノ（1433～1499）は、一四八九年フイレンツェで『生について』を刊行し、集光鏡をその宇宙論的な文脈のなかに位置付けています。凹型のその姿は天の姿に似ており、それは縮約された天蓋で、その光を原初の熱と火に凝集するとするものです。

パリの最初の歴史家コロゼは一五三九年に刊行した『鏡の紋章』『家庭譜』のなかで

明るく輝く鏡
喜ばせ樂しませてくれる鏡

ない

武器に使用された架空の集光鏡物語

ところがヨーロッパの学者達はこれで満足しませんでした。二世紀の後半に生じた実際に使用されなかつた架空の反射光学的武器に関する創作物語が相次ぐのです。シュラクサイ防衛に関するアルキメデスの貢献については先ず次の様に伝えられました。

シュラクサイ防衛の為にアルキメデスの考案した装置はボリュビオス（前205年～前120年）、ティトウス・リウイウス（前59年～17年）やプルタルコス（45年頃～125年頃）の記述によれば、弾道機や着発弾装置や幻想的巻揚機しかなかつた。すなわち城壁のあちこちにローマ艦隊に向けて飛道具が置かれ、岩塊や軽砲弾が遠く離れた船や、丁度良い距離のところにいた船の上に雨霰と降り、船が城壁に近づくと、起重機の鉄の手や口がそれを空中に持ち上げ、振り回し暗礁の上でつぶされた。巨大なハンマーも甲板を襲つた。

町はこうして三年間もちこたえたが、前二一二年マルケルスは策略で攻め落とし、計算中のアルキメデスは一兵卒によつて、陥落に気づかないまま殺されてしまつたのである。

燐然たる集光鏡 とてつもなく大きい鏡

と述べています。

一方チエーザレ・リーパが、ローマで一五九三年に刊行した『イコノロギア』（図像論）において、集光鏡は次のように「恋の起源」を図解するものとなります。

この情念の誕生は、片手に円い鏡をもち、それを太陽の光に向けて、その反射光によりもう一方の手に持つた松明に火をつけている若い美女によつて表されるが、鏡の下には巻物があり、次のような言葉が書かれているのが見える。

かくして線上に恋は火を生ず

更に悲劇詩人アガトンの祝宴で、出席者が順次エロス贊美の演説をしたことを記載しているプラトンの『饗宴』第十一講において、フィチーノは、恋の病が眼と眼が出会うことによつて惹き起こされると主張しています。そして次の様に説明しています。

ところで、恋を生じさせるこの出会いを例えるのに、向かい合つた太陽と鏡との出会いによる以上のものは

これらの記述のなかには集光鏡が武器に使用されたことは全く述べられておりませんでした。

ところが二世紀の後半に先ずギリシャの諷刺作家、サモサテの医者ルキアノス（125年頃～190年）が、彼の著書『ヒッピウス』のなかで「アルキメデスは独特的の工夫によつてローマ艦隊を焼き尽くした」と発表します。

「集光鏡を用いれば、羊毛、麻屑、灯心、澱粉、そして乾いて軽いものなら何でもたやすく火を点ける事ができる。」少なくとも私の思うところでは、こういうやり方でアルキメデスは敵の船団を燃やしたのである。

と、この不確かな一節がシュラクサイの反射光学的武器に言及する歴史家達の知る唯一の古代の証言となります。

更にこの伝説の根拠となつた最初のテクストが十二世纪～十三世纪に誕生します。

一一一八年頃に終焉するコムネノス朝のアレクシス一世の高官・修史官だつたビザンティンの碩学、ゾナラスは彼の『年代記』のなかで、アルキメデスが艦隊を粉碎し、空中に巻き上げ、そして水中に投げ出したあと、艦隊を焼き尽くしたと次の様に述べています。

それからアルキメデスは驚くべき手段によつて全ローマ艦隊を焼いた。ある種の鏡を輝く太陽に向かつて掲げ、太陽光線を受け取るのだが、その鏡がとても滑らかですべすべしているために空氣に火がついて、艦隊に真直ぐに向けられた大いなる炎はそれらを焼き尽くした。それゆえマルケルスは望みを絶たれた。

話はそこで終りませんでした。同じ『年代記』は、コントスタンティノポリス防衛の為の武器についてもふれています。

コンスタンティノポリスも七世紀後シュラクサイと同じように、アナスタシオス帝の514年に、ウイタリアヌスに包囲されました。ここでも防衛の為の武器として先ず投石機、起重機、銛打機が、最後の仕上げとして集光鏡が作られたとされています。

ゾナラスはそれら防衛用兵器の製作者を、五世紀の新プラトン主義学者でエウクレイデスの注釈者プロクロスだと考え、彼が一つ若しくは複数の金属製鏡を造り、包囲された町の城壁に太陽と海とに向かつて、それが吊るされたのだと次の様に述べます。

プロクロスは集光鏡を錫でつくつて、それを敵艦隊に向け真直ぐに吊るし、太陽光線が集光鏡に当ると、そこから畠妻のように発した火が、艦隊と船員達に激しく燃えました。

書かれています。

ホーランド生れの数学者ヴィテロの『光学』(1270年頃)の第五巻の命題65は

とし、更に彼はビザンティンの偉大な建築家、聖ソフィア寺院の二人の建設者の一人であつたトラレスのアンテミオスの発言を採用します。

アンテミオスは、なにやら定かならぬ実験に基いて、二十四個の鏡の反射が、可燃性物質の同一点に集中すれば、それだけで火をつけることが出来ると主張している。

その一方で驚異博士ロジャード・ペイコン(一二六四年頃)は

実験科学は、球体から鏡の凹面へと向かうあらゆる形象が、そこで等しい入射角をなすように、卵形ないしは環状の、あるいはそうした形に近い放物面状の鏡の形状を描く事を幾何学に命じる。

こうした仕掛けの更に詳細にわたる記述が、もう一人のビザンティン人、ツェツエースの韻文形式の物語集『千物語』(一一八五年著)のなかにあります。

マルケルスの艦隊が弓の射程に入つたとき老人(アルキメデス)は六角形の鏡をつくらせた。この鏡の周りに一定の距離を置いて彼は別のもつと小さな正方形の鏡をいくつか取り付けた。それは蝶番と薄板の上で動くことができた。

夏冬変わらぬ南国の陽光のただなかに彼は鏡を据えた。太陽光線が反射すると恐るべき火が船につき船は弓の距離のところで灰燼に帰した。

ここでは冒頭に述べたエウクレイデスのたんなる球面鏡ではなく、多数の部品から構成される複雑な装置が考えられています。

十二世紀の概説書も架空の事実に基く伝承を考慮して

実験者は、この鏡によつて、可燃性の物体を燃やし、あらゆる金属を溶かし、あらゆる石を焼く事ができる。彼は破壊しようと思うなら、近くからだけでなく、望むがままの距離から、いかなる軍隊でもいかなる要塞でも破壊することができる。

この種の鏡を十二枚使えば、流血なしにサラセン人や韃靼人を追い払うことができる。

と述べ、ローマ人やスキタイ人の襲来に立ち向かつた武器は、アラビヤ人や蒙古人に對しても力を發揮するはずだとしています。

中世には実際にこのような道具が作られました。「鉄製集光鏡」が一四七四年のモンパンシエ伯爵夫人財産目録に姿を見せております。

コルネリウス・アグリッパもベルギー・ブリュッセルの北、アントウェルペンで一五二七年刊行された『学問の不確かさと虚しさについて』のなかで次のように述べこれを立証しています。

太陽光線を集め、そしてそれを燃えやすい物質に激しく反射して、きわめて遠くからでも火をつける集光鏡がつくられた。

以上述べましたように、依然として空想物語に取り扱

また集光鏡の起源は、恐らく太古の昔まで遡ると思われます。古代ギリシャにとつてもそれは問題でした。それに関するテクストは紀元前三〇紀元二世紀の間に散在しており、其の一方で、シュラクサイとコンスタンティノポリスの防衛に寄与した絶対兵器伝説の詳細な最初の文章は、六世紀ビザンティンへの言及と共に、十二、三世紀になって初めて書かれたものでした。

古代及び中世の物語は、その神話的・詩的内容を更新しながら、中世末期以降華々しく蘇り、解決不能の問題を追い求めました。

これは科学的伝説と伝説的科学が、不可避的に結びついたものです。

アルキメデス鏡伝説の解消
メルセンヌ宛の手紙のなかでデカルトは一六二〇年、次のように記します。

アルキメデスについてなにが書かれているとも、極端に大きいものでなければ、遠くにあるものを燃やす鏡をつくることは不可能です。なぜなら太陽光線は人が思っているほど全て平行であるわけではないからです。そして天使が物を燃やすための鏡を造ったとしても、それが直径六トワーズ（一トワーズは1.949m）以上なければ、一里の距離のところに置いた何等かの記載しています。

て来た敵の軍船を燃やす火の鏡によつて、彼が手に入れた栄光については万人の知るところである。

とラファエル・ミラーミは一五八二年イタリアボローニヤの北東に位置するフェラーラで刊行された『鏡の学第一部への序論』6頁で述べていますが、そのなかでミラーミは、アルキメデスについて更に次のように記載しています。

そしてこの発明（集光鏡）と同様に、アルキメデスは剣と柄で敵と闘つている間に、別の集光鏡を作つたということである。

アルキメデスは橋を製作し、それによつて太陽の反射光線を敵の眼の一点に集中させ、敵が攻撃する事も防御する事も出来ず、呪縛された蛇みたいになるようになつた。

これは日本書紀の神武天皇即位前紀十二月条の「乃ち金色の靈しき鷦有りて、飛び来たりて^{皇弓}の弭に止まりて、其の鴉光り^暁きて、^状流電^の如し。是に由りて、長髓彦^{ながねひこ}が軍卒、皆迷ひ眩^{まき}えて、復力め戦はず。」と同様な記述です。

物体を燃やす為の十分な力を、それが持つとは思えません。

ここでメルセンヌは神話の解説にとりかかります。

鏡を用いて何艘かの船に火をつけたとされるアルキメデスについていわれることに關して、歴史家達は確信が持てずに根拠の薄弱な推論を行つてゐる。町の城壁に近づくことができたのは小舟だったのであり、人々は城壁の上から舟に松明を投げて焼き払つたのだ。

これによつて歴史家達はこの結果を鏡に帰し、そして何時もながらに、彼等自身も一般大衆もその可能性を考えてもみないような間違つた事などを、その話に付け加えながら、其の話を一層素晴らしいものにする機会が与えられたということなのである。

神武天皇とアルキメデスのつながり

二個の火打石によつてではなく、一枚の鏡によつてギリシャ神話チタン族の英雄プロメテウスは、火を手に入れた！

シュラクサイの聰明なるアルキメデスに対しても^{ばならぬ}大いなる敬意と、またこの地を破壊しにやつた

人類の将来を左右する集光鏡

一九五二年に東部ビレネー地方モンリルイに設置された太陽炉は3500枚のパラボラ鏡で構成されていますが、得られる温度は太陽表面温度の半分300度です。

たんなる四面鏡のステライト青銅製の装置では一九五五年、ニューヨークで3500度の温度を獲得しています。

始めは現実に接木された作り話でした。それらが一方は想像的で他方は厳密な立場を貫き、それが接合し不断の検証を重ねた結果、目覚しい技術的進歩が遂げられたのです。

現代のエネルギー危機、地球温暖化対策等において、技術者や学者達はますます集光鏡を利用した太陽熱の活用と、太陽神話の実現化を図らなければならなくなつたと考えます。

参考文献
ユルギス・バルトルシャイテス著・谷川渥訳『鏡』国書刊行会、一九九四年。

れんししゅう（恋詩集）しさくのかなしみより その十

松 下 壽 男

えにつき

「妹の子供を連れてプールに行くの
四つと二つの男の子
目を離すことができなくて
わたし水着に着替えるの」

うちにも姉の子供が来てね
上のがちょうど二年生
絵日記を書かせるために
毎日苦労させられて

おじさんとわたしとおとうとで
とおくのぶうるにいきました
こどもやおとながおおぜいました

きよろきよろしながら日が暮れて
でも絵日記にはこう書こう
とても楽しかった

日本近代文学点描 その一

松 下 壽 男

はじめに

私は、「小笠学び方研究会」という会という小さな会の事務局を担当しています。

その会は、「日本学び方研究会」という、我が国で最も権威のある教育研究会の支部なのですが、活動といえば、私のような窓際教員が事務局を担当しているわけですから、冊子や会報を青年教師に無料配布するのが精一杯です。

ですから、二か月に一度、本部から送られてくる冊子に挟み込む会報の作成が、私の悩みの種でした。それは記事の冒頭に心に残っている俳句を置いてみました。そしてその句を巡つて思い当たることを綴つてみました。

すると、水中の可憐な花を掬い上げようとして湖底の藻草全体が手繰り寄つて来るような奇妙な興奮に駆られ

たのでした。
点のような言葉や文であつても、それだけに留まらない固有の文化を体現しているからに違いない、それこそ文学だと私は考えました。そして点のように心に残る断片を手がかりにして文学を読み解く愉しみを覚えました。

それ以来会報に描き貯めてきたものを、私は、より彩度を高めて紹介していくことを考えていました。
うまくいけば、点描を通して、ひとつの日本近代文学史が浮かび上がるかも知れません。

ぬべしの術

♡ 鶏頭の十四五本もありぬべし

のつけから正岡子規の俳句で、ごめんなさい。

初秋、残暑の風を一層熱くする赤・黄・緋色の燃えるような鶴頭の花々。鮮烈な写生は、しかし子規の目に映つた景色ではありません。そのとき子規は不治の病の床に臥せついたのです。ですから彼は、じつと目を閉じて、心に映る景色を率直に言葉にしたのでしょう。その心の目は「ぬべし」という言い回しを選び、図らずも、不自由な自らの姿までも写し取るのです。

私も、このごろ、「ぬべし」の術を使います。夏の東奔西走がたたつて、久しうりに腰が痛み出したこの頃、私は、足が痺れ始めたらどこでも大の字になつて横になることに決めました。(どこでも横になれることを、私は教え子たちから教わりました)

痛みを癒すつもりで床に横たわり、静かに目を閉じると、傍らの子供らの会話が天の方から聞こえてくるのです。いつになく生々と、一言一言がすぐくち打ちがあるように感じます。(おつ今振り向いたな。何か手渡したぞ。ちゃんとお礼が言えるじゃないか。きっとここにこしていいるぞ……)などと、「ぬべし」の世界を思い描いているうちに、彼らと関わりたくて堪らなくなつて起き上ります。その時には、私の腰の痛みは消えているのです。みなさんも、時には床に大の字に寝て、「ぬべし」の世界に浸つてみませんか。

○でも、僕の方からはさう手軽には、君がやつたやうに思い切っては君のところへ出かけられない。だから君から一度来てもらひ度いと思ふ夢にでも現にでも。忘れてしまつて。

芥川龍之介の遺著となつた「三つの寶」の序文に、敢えて「他界へのハガキ」と題して、佐藤春夫は思いを語っています。その本が子供向けの豪華な絵本であること

漱石が住み難さが高じる個人を描き続けることができたのは、自らの文学を、生成に任せたからでしょう。「則天去私」という彼の理想は、まず小説作法として実現していたのです。そして彼の小説は、純粹な虚構に向かい、象徴性を高めていくのでした。

そんな漱石に才能を認められた龍之介は、初めての單行本「羅生門」を「夏目漱石先生の靈前に獻」じています。その書物は、日本書紀の時代から明治までの様々な時代の一個人を主人公にして、日本の文化の自覚を成し遂げています。どれも見事に完結した珠玉のような短編は、いずれは天空の星座のようにして大宇宙を作つたのかもしません。

○智に動けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。
住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。
どこへ越しても住みにくないと悟った時、詩が生まれて、
画が出来る。

正岡子規の主宰する「ほととぎす」の同人であり親友であつた夏目漱石は、官費留学先ロンドンで子規の訃報に接しました。帰国を間近に控えて、文学論を究めるために資料の筆記に追われる漱石でした。

帰国後、東京帝國大学で西洋文学を講じながらも、心の晴れない彼は、子規の門弟高浜虚子が跡を引き継いだ「ホトトギス」に、再び創作を寄せるようになりました。

そして、「草枕」の、冒頭の一節が生まれたのです。

「智・情・意」とは、人の心に対する西洋哲学流の分析です。西洋流の文明開化が進んだ、明治四〇年には、日本、少なくとも東京の世の中は、住みにくく感じられていたのでしょうか。しかも、最早どこへ越しても住みにくくと悟つてしまつた漱石なのです。

しかし悟りは、諦めではありません。正岡子規らと、俳句や漢詩を詠みつゝ親しんだ東洋の叡知が漱石の心を癒し、やがて創作へと駆り立てていくのです。その悟りは、文明よりもさらに広く深く、文化の深層へと彼の思索を導き、文学の生成を促すものでした。

しかし時空を超えるばかりか、文化が体現する一刹那の個人になりきつた文化化という自覺行為は、どんなにか負担が大きいことでしょう。

かつて子規が「ぬべし」と句に詠んだ言葉が、龍之介の方法になつてゐるのです。しかしながら、彼はあくまで近代人芥川龍之介として(禅智内供の心情かくありぬべし)と物語つたのでした。それは、師の則天去私の対極の立場に立つものでしよう。

龍之介が、その時代に文化人類学の視点を持ちえたかどうかは疑問です。とはいえ、彼が自ら他界することになかつたら、則天去私の理想と自らの作風を追究することを通して、他者の文化に立つた、眞の「ぬべしの文学」が誕生したのではないかと夢想することは許されることでしよう。

その文学は、星座の輝きのようにして、日本の文化を見事に象徴しえたかもしません。

ところで、冒頭の他界へのハガキを書いた佐藤春夫で見ていたのではないかと思えてきます。

異文化すなわち異界を異界の目で描くような、読者にとつて居心地の悪い表現が彼の小説の持ち味です。そんな彼は、平氣で他界と交信することもできたことでしょう。

編集後記

最近「歴史」という言葉に興味を持つ機会があつて改めて考
えてみた。

- 先ず広辞苑を引いてみると
① 人類社会の過去における変遷・興亡のあります。また、
その記録。「一に名を残す」「一上の人物」
② 物事の現在に至る来歴。「一と伝統を誇る」とある。

この言葉から我々の祖先が何を考え、いかにして今日の
ような社会を築いてきたのかを知ることは、現在の自分自
身を知ることに繋がる。何故ならば自分達は過去と断絶し
て生きているのではないから、過去におこつた多様な出来
事の背景にある根本的な考え方とか、底辺を形成している
思想、哲学を知ることによつてのみ、歴史観、世界観を養
う事が可能となり、そこから確固たる自己認識が生まれ自
分自身の理念形成に繋げることができると考へた。

言葉を変えていうと、一つの分野で地下の鉱脈を掘り当
てれば、他の分野との交流が生まれる。そういうネットワー
ークが存在する集団にいれば、専門バカではなく様々な考
え方が理解できて、自分の生きて行く上での貴重な財産に
なると云う事である。
(TN)

「MITではこれまで取り組んできた研究の事は忘れて
全く新しいことをやれ。人生は短い。新しいことに挑戦す
るのは人生最高の贅沢だ」といわれたと石井裕氏が2月18日付日本経済新聞「人間発見」で述べている。最近は本誌でも新分野への挑戦記事が目立つようになってきている。これは本誌永続上必須となる各自の執筆能力向上に寄与する極めて重要な要素の一つであると思料する。

まんじ第116号

平成22年5月1日発行（非売）

発行人 三戸岡 道夫（みとおか みちお）

編集長 中山喬央（なかやま たかひろ）

事務局長 鍋屋次郎（なべや じろう）

（事務局）〒223-0056 横浜市港北区新吉田東五丁目76-35 太田善朗方
TEL・FAX 045(544)5947

（郵便振替口座）No.00270-0-64592 加入者名 まんじ

（印刷製本）日東印刷株式会社

〒142-0054 東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について

「夢おいかけで千里を走る」

田寺 やす 画

まんじ

No.117

2010.8.1

まんじ第百十七号 目 次

- 司馬雑感二十四「佐渡のみち」を歩く
 狩谷祓斎讃歌（十）
 今川風雲録（最終回）
 走る不動産（その三）
 誠忠の茶園（五）
 小説 家康と廻狂いの右近
 —遠州菊川の義人 中条右近太夫物語り—（4）
 俳句 紅葉
 短歌 三十首 未だ総括し得ず
 わが愛誦歌（十一）—昭和から平成へ—
 短歌 行雲流水（二十八）
 王朝和歌集とその周辺（三）—西行法師を考える—
 短歌 はじめまして
 漢詩 潮騒錄（六二）《漢詩の流れ51》

- 山田新井
 堀太田坂千井
 鯨金石曾勝
 澤黒根山
 游智修竣道
 海佐美身作子
 95 89 81 75 70 66 64
 57 46 31 20 11 4

- 目耕録（その一）
 徳富健次郎著『みみずのたはこと』を読む
 河童の初恋（一）
 二八に帰るすべもなし（二）
 —愛する北国のひとに寄せて—
 古い物・遠い夢 古陶閑話
 月例会
 化粧のルーツを訪ねて（一三）
 隠翳の美学（その三）
 透明な時間（二）
 還暦からの考古学（二十一）
 鏡（その13）アレクサンドレイア燈台の鏡
 追伸 サウダージーよりその一
 日本近代文学点描 その一
 文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生（十六）
 編集後記
 表紙

198 195 190 189 181 170 165 140 134 131 124 119 105 99

「佐渡のみち」を歩く

山田嘉久

司馬遼太郎が始めて、佐渡を訪れたのは昭和五十一年秋だった。それまで彼は佐渡は極寒の地で、夏以外は訪れる土地ではないとの錯覚を持っていたようだ。

それは佐渡に対する「原風景」がそうさせていた。

終戦数ヶ月前、関東軍（旧満州）の司馬の属する戦車隊は突如、転進を命じられる。本土決戦を控えての本土帰還だが、このことは、後からわかつたことで当時は転進先は南か北かさっぱり見当がつかなかつた。幾晩か寝た後、船窓から雪に覆われた佐渡の島を見たとき、てつきりアリューシャンに連れてこられたと勘違いしたといふのである。

それと同じように、作家の太宰治が始めて佐渡を訪れたときには、小佐渡山脈の北側にもう一つの大きな山波（大佐渡山脈）を見て「満州」がそこにあると錯覚したと司馬は紹介している。

最初から全島が天領（幕府領）であった。

禄高だけで言えば越後最強の長岡藩七万四千石よりずっと上なのである。

一 伊之助のこと

司馬が佐渡を訪れた目的の一つが、幕末の佐渡が生んだ洋学者司馬凌海（一八三九—七九）の生家を訪れることだつたと、この本の冒頭に書いてあるが、不思議なことにその後、その詳細については全く記していない。

司馬凌海は司馬がこの頃、書いた長編小説「胡蝶の夢」の主人公の一人だが、他の主人公については「街道をゆく」シリーズでも詳細に書いているにもかかわらずだ。

他の主人公松本良順については「神田界隈」で、関寛斎にいたつては「北海道の諸道」と「阿波紀行」で詳しく紹介されているのに、司馬凌海については「佐渡のみち」では全く書かれていない。

長年、このことを不思議に思つていて小説「胡蝶の夢」の最終章に「伊之助の町でーあとがきのかわりにー」なる一文があることに気がついた。伊之助とは凌海の通称で、この章で凌海の生家を訪れたことが記されている。

あるいは「胡蝶の夢」の最後の章が「街道をゆく（佐渡のみち）」の続編かもしれない。たしかに司馬がこの時期（昭和五十一年秋）佐渡を訪れた目的は「胡蝶の夢」と「佐渡のみち」両方の取材旅行だったことが容易に想

司馬は新潟空港から日本近距離航空のプロペラ機で二〇分、佐渡空港に着いたと記されているが、私は人気のジェットホイルで新潟港から佐渡の玄関口両津港に渡つた。所要時間一時間。カーフエリーだと二時間二十分かかる。

司馬は大佐渡と小佐渡を繋ぐ島中央部の国中平野を横切つて、西海岸の真野湾に面したホテルに旅装を解いたところが、この辺にホテルはそう多くはないので、或いはあるが、この辺にホテルはそう多くはないので、或いは私の泊まつた宿と同じかもしないと思つた。

国中平野は見渡す限りの田園風景だったが、司馬も佐渡が対馬や沖縄と違うのは自前の稻作を持っていること渡が対馬や沖縄と違うのは自前の稻作を持っていることで、その上それを国外まで移出していることだと書いている。

（佐渡は、江戸期は草高が十三万一千五百石といわれた。もしここが大名領なら、中以上の堂々たる藩が成立しているはずだが、金山があるために幕府がひらかれた

像できる。

佐渡旅行から帰つた司馬は、その直後、昭和五十一年十二月から翌五十二年四月まで「街道をゆく」（佐渡のみち）を「週刊朝日」に連載したが、ほぼ同時期に長編「胡蝶の夢」を「朝日新聞」に書き出している。この小説は五十四年一月まで続いた。

「胡蝶の夢」の冒頭の文章。「佐渡は越後からみれば波の上である。「佐渡は波の上だ」と、伊之助は幼い頃から聞かされてきたが、波の上なら舟のように揺れるはずなのになどうして揺れないのかとふしきに思つた

この小説は、伊之助のことから始つてゐる。

司馬は「胡蝶の夢」連載を始めるに当つて「奇才の生涯を描きたい」と朝日新聞に構想を語つてゐる。

江戸時代、佐渡における唯一の官道であつた小木街道沿いの新町で生まれた伊之助は語学の「奇才」だった。一度も海外に行つたことがないにもかかわらず、彼はオランダ語、英語、フランス語、ドイツ語すべてに通じていた。長崎においてオランダ人医師ポンペの講義を翻訳したのはすべて彼だつた。

「胡蝶の夢」で最初に伊之助の「奇才」ぶりに興味を持つた司馬だつたが、物語が展開してゆくにつれて、伊之助の主人松本良順（一八三二—一九〇七）の存在が大きくなつていく。したがつてこの小説は伊之助と良順の物語だが、更にラストに近づくにつれ、今まで脇役だ

つた関寛斎（一八三〇—一九一—）の存在感がずつしりと重くなつてくる。

〔「関寛斎」については拙稿「まんじ」九四号参照〕

結局、この長編は幕末に、共に佐倉順天堂で学び、共に長崎に留学してポンペの教えを受けた三人蘭方医を通じて近代日本の医学の変遷を語りながら、江戸封建制の矛盾を指摘し、それが内部から崩壊する様を描いていく物語ともなっている。

二 流人の島

佐渡は「流人の島」として知られている。

真野にある「佐渡歴史伝説館」ではこの島に流された順徳天皇や日蓮、世阿弥が主人公となつていて、いずれも精巧なロボットで出来ていて、さながら生きた人間のように動いている。しかし肝心の順徳天皇とはどういう天皇か、またなぜ配流されたのかいささか説明不足。せめて配流の原因となつた「承久の乱」（承久三年（一二二二）、北条義時追討の院宣を下した後鳥羽上皇が幕府軍に敗れた結果、後鳥羽上皇は隠岐に、順徳上皇は佐渡に、土御門上皇は土佐に配流された）の説明ぐらいは必要だろう。

まして展示されている順徳天皇の皇后に至つては全くの知識もない。司馬も「順徳院についての知識も乏しいし、まして島に生まれてここで生を終えたという忠子内

で、佐渡とは「ロボットの島」であるとの感を強くした。
鉱石を掘る人、それを選り分ける人、運搬する人、精錬する人、すべてロボットが動いている。

江戸初期、日本最大の金山として開山したころ、送り込まれた労働者は殆どが「流人」かと思つていたが、主流は「流人」ならぬ「無宿人」であつたと司馬は書いている。

佐渡の流人は前述のとおり元禄時代には廃止されているので通算でも二百人に過ぎない。これだけでは到底、不足なので江戸幕府は本所深川近辺にたむろしている無宿人を強制的に佐渡金山に送り込んだ。

無宿人とは人別帳（戸籍簿）に載つていらない人種を指すが、山間僻地に至るまで調査機関の発達した江戸体制では原則的には無宿はありえない。しかし江戸期の刑は連帶性であるため息子が犯罪を犯したとなると誅は親兄弟にまで及ぶ。

そのためその危険のあるような息子を持つた親兄弟は事前に率先して、その息子を人別帳からはずしてしまつわけである。今のヤクザでも戸籍はあるのとは対照的である。

それを「一人の人間を無宿にしてしまう」という行為が親兄弟によつてなされたということに、江戸時代の法の凄さがある」と司馬も書いている。

無宿となつた息子は当然、地方では暮らせないので江

親王という女性にはなんの知識もない」と書いている。

司馬にして、こうだと内心安心した。

佐渡はまた二、「二六事件で有名な北一輝の生まれ故郷である。しかし「佐渡のみち」では北については、全く触れていない。

このことについて大作「評伝 北一輝」を書いた歴史家松本健一（司馬遼太郎賞受賞者）は「司馬遼太郎は、じぶんが嫌いなものは出来るだけ扱わない」という流儀を生涯にわたつて貫いた」とし「司馬の北一輝嫌いは徹底していた」と書いている。（「島由紀夫と司馬遼太郎」）

このことは佐渡に流された日蓮についての司馬の態度も全く同じである。日蓮は、完全に無視されている。

しかし流人の歴史となるとさすがに司馬は詳しい。

「流」というのは律令の刑罰の一つで死罪に次ぐ重刑だが、江戸幕府ではあまり「流」という言葉は使わず公用語は「遠島」であった。しかし佐渡を遠島の島としたのは、せいぜい江戸初期までで、元禄時代には廃止されてしまったという。

理由は同じ遠島の島である八丈島、三宅島に比べると佐渡は流罪人にとっては、十分に食つてゆける島なので遠島の意味が薄れてしまつたからである。

「佐渡金山」にも司馬は訪れている。

私が見学したときにはここもすべてロボット仕掛け

戸に集まつてくる。

そこに目をつけたのが当時の勘定奉行で、「無宿狩り」によって集められた彼らは一人ずつ唐丸籠に入れられ五十人、百人と佐渡に送られたというわけである。

「寛政の改革」で有名な松平定信が、火付盗賊改長谷川平蔵の意見によつて江戸石川島に入足寄場を置いたのも、この頃である。

しかし犯罪を犯した無宿人は「佐渡行き」からは除かれた。犯罪者では手薄の佐渡奉行では手に負えない。

そこでいわば「おとなしい無宿人」（入墨、敲などの軽犯罪者）のみが対象となつた。

通常、金山で労働させられた彼らの寿命はせいぜい三年だつたという。劣悪な労働環境の下、ほとんどが珪肺にかかり死んだ。哀れというほかない。

金山発見の糸口となつた史跡「道遊の割戸」の案内板を見たとき、私も室内もどんな場所か察しかねたが、司馬は自分が無宿になつたような異様な錯覚に襲われたと書いてている。

（路傍の岩肌にまで人間の脂がこびりついてついている）とまで表現している。

この辺の記述は見事な「哀史」となつていて、

哀れといえば佐渡の代表的民謡「佐渡おけさ」はどことなく哀調を帶びている。どの旅館でも夕食後に佐渡お

けさショーがあつたが、悪くいえば陰気なリズムで、とても盆踊りには向かないと思えたものだ。

このショーには必ず佐渡特有の鬼太鼓が加わったが、司馬も知人が作った「おんでこ座」に触れている。その知人は

（浜辺で大太鼓を打つときなど無宿人の靈が聴いてく

れでいるような気がする）と語つたそうだ。

ところでその「佐渡おけさ」の文句にもある「佐渡は四十九里、波の上」は本来は新潟からではなく、能登半島からの海上距離であるとは初めて知った。佐渡の文化は昔から京都文化圏に属しており、言葉も上方ことば、味付けも関西風だった。

それを強引に江戸文化圏に組み入れてしまつたのが徳川幕府で、ここにも佐渡金山の重要性を汲み取ることが出来ると司馬は書いている。

（佐渡は、波の上有る。地の文化は全くといつていほどの上方文化であるが、支配層は江戸に属し、ほとんど江戸の郊外といえるほどであつた）（司馬の隨筆「勁さを持つ風土圖」）

その佐渡金山の最大の功労者は初代の金山奉行大久保長安（一五四五—一六一三）であろう。長安は甲斐の生まれ、武田氏の滅亡後徳川家に仕えたが、希代の鉱山師としての才能を見出した家康は石見、伊豆両銀山の開発に

端の館山あたりに治所を置くようなものである。これは長崎市が不便な場所にもかかわらず県庁所在地として選ばれたに似ており、此処に長崎奉行所が置かれていたからに相違ないとも書いている。

今でも相川は佐渡の行政の中心地で佐渡支庁、税務署、保健所が集中している。そのため民家の密集度も高く、各家とも隣家と軒がくつついで、さながら長屋が連なつたような町並みだつた。

（どの家の瓦も板壁も格子戸も古びていて、江戸期とまでいかなが、明治、大正の色調を帶びている）

金山最盛期にはここだけで人口十万を数えたという。（現在、佐渡全島で人口七万）

その奉行所跡にも司馬は訪れているが、（建物はなに一つ残つておらず、学校の運動場によくそつけない）と記しているが、私がバスで前を通つたときには建物の復元間近で数年後には観光の名所になるだろうとガイドは説明していた。

司馬によると奉行所の絵図が残つてるので構内にどんな建物や設備があつたのか、すべて見当がつくという。

小判の吹分所、御金蔵などの冶金設備をはじめ奉行の官邸や事務所はもちろん、はては隣地には孔子廟や学問所、医学所、稽古場までの文化施設までを備えていたようだ。

当時の奉行所の威容が想像できるが、その長である佐

当たらせた。慶長八年（一六〇三）以降、長安は佐渡金山の開発に着手するが、彼の背景となつたものは武田信玄以来の鉱山師や金堀り人足などの甲州人脈、さらに南蛮渡来の最新技術、水銀アマルガム法（金や銀が水銀に溶けることを利用した精錬法で、一五五七年、メキシコで発明された）であった。

長安の功績により佐渡の金銀産出量は飛躍的に増え、最盛期には年間、金百貫、銀一万五千貫にも達した。そして当時の世界産出量の十五%を占めたといわれる。

このように佐渡金山の隆盛に寄与した長安だが、彼の死後にたいする家康の態度はどう理解したらよいであろうか。

長安は慶長十八年（一六〇三）、六十九歳で没するが、家康はにわかに（家財のすべてを没収し、遺児七人を切腹させ、その家の根まで断つてしまつた。）

そして佐渡金山の精錬法も長安の採用したアマルガム法から旧来の鉛灰吹法に改めてしまうのである。

三 佐渡奉行所

その佐渡金山を統括したのが、金山に近い相川に置かれた佐渡奉行所だつた。

相川は真野湾を北から抱いている山脈を越えたむこう側にあって波の荒い外海に面している。司馬によれば

（江戸湾でいえば江戸に治所を置かず、房総半島の先

渡奉行は長崎、大阪、京都奉行とともに勘定奉行直属のエリートコースだつた。

司馬はその歴代の奉行についても触れているが、特に幕末官僚の偉材だつた川路聖謨について多くのページを割いている。彼の前任者は鳥居正房だつたが、両者の引き継ぎの際には、お互いに涙を流して再会を祝したという。江戸期の武士は人前で涙をみせないものだが、（この時代には珍しい友愛ともいうべき情誼をたがいに持つていた）

川路の人となりを窺える場面だろう。

また別の隨筆「左衛門尉の手紙日記」（注）左衛門尉とは川路の通称）では川路は佐渡在任中、毎日欠かさず江戸に置いてきた母親宛に手紙を書いたそうだが、現在ではその手紙がそのまま十九世紀の佐渡の民情を知るうえでの貴重な宝典になっているという。

川路は佐渡奉行の任を終えたのち、勘定奉行や外国奉行に昇進するが、江戸開城の日にピストル自殺によつて生涯を終える。その自殺の仔細を司馬はこう書く。

（拳銃を用いる前に、古式とおり薄っすらとではあるが、腹を切つて、その後白布を巻いて止めをし、自ら介錯するために拳銃を用いるという方法をとつた。型に従いつつも合理的に処理しているあたり、死の儀式までが川路聖漠らしい）

江戸幕府は川路の死をもつて事実上終焉したと司馬は

考えたようだ。

私は佐渡旅行の最終日。台風十八号に遭遇した。

この日、早朝から「台風が佐渡沖を通過中」とのニュースを聞きながら、私は旅館の露天風呂に浸かっていた。台風の目に入ったのか、うそのように風雨は静かだった。台風下の露天風呂もオツなもの。

当然、本土へのフェリーは欠航なので旅館にカンヅメとなつたが、その間、高台にあるオーシャンフロントの部屋の窓越しに刻々と変わる海の表情を数時間にわたって観察できた。

波静かな佐渡の海が次第に白波が目立つようになる。そのうち高波となつて浜辺に打ち寄せる。ついには猛烈な音を立てて岸壁に碎ける荒波と化する。

そんな風景をわたしは飽かず眺めていた。貴重な体験だった。

狩谷祓斎讃歌（十）

新井 宏

（三十二）永眠

本稿「狩谷祓斎讃歌」は、異例ではあろうが、祓斎の永眠のことから書きはじめた。稿を締めるにあたり再掲する。

狩谷祓斎は天保六年（一八三五）閏七月四日、浅草伝法院前の津軽屋新宅で永眠した。

前月の十日以来、食事が採れなかつた。死の前日に祓斎を見舞つた松崎慊堂は、「万無一生、而精神如平日、言石経校文・淳化帖事數語、亦如平日、向晚握手而別、暗泣三声、余亦腸断」と「慊堂日曆」に記す。簡潔な漢文は、男の悲悼を適く表現する。六十一歳であつた。

若干補足する。

若干補足する。

などが数多く納められている。

被斎は死の前月「今や余病めり、その就るを見るに及ばざらん。聊か為に其の顛末を發す」と、その跋を書いている。これが被斎の絶筆となつた。その跋は被斎の弟子の小島成斎が清書して五年後の刊行に際して巻頭に載せられる。小島成斎は後に福山藩の祐筆を勤め、老中阿部正弘のもとで、ロシアや米国への外交答書を書いたことを知られている名書家である。

被斎の法名は常閑院実事求是居士である。「実事求是」の名は被斎が生前に定めておいたものという。まさに実事求是の一生であつた。

被斎の死は数えで六十一歳。私は既に七十一歳である。江戸期最大の実証学者被斎を追いかけながら、そこに自らを重ねてはヒントを得て学んできた。もちろん、被斎の広範な分野にわたる実績に較べようもないが、特定な部分のみに注目すれば、その比較を通して語りたいことが多いある。

被斎は職業的な学者でも教育者でもなかつた。先学や親友達から多くを学んだが、特定の師を持たなかつた。それと同時に、職業的な形で弟子を持つこともなかつた。それにもかかわらず、被斎には良い弟子が群がつていた。松崎慊堂にも優れた弟子が集まり、その後の新しい日

本を背負う人材を輩出したが、慊堂は昌平饗の重鎮であり、掛川藩の教授であったことから、後の羽村山荘も教育所としての性格を持っていた。

私のように独歩の研究をしている者にとって、職業的な研究者、すなわち大学の先生達に羨ましさを感じることがある。それは卒論などで学生達に研究を分担させて指導する過程で、研究面での後継者を自動的に養成できることである。その結果として、研究がますます細分化され矮小化される欠点もあるが、なによりも一度高めた水準を維持できる利点が大きい。

現代の歴史学界で計量史のバイブルとみなされている藤田元春の『尺度総考』は、被斎の『本朝度量權衡考』から多くの資料を引きながら、実証という基本面では被斎からはるかに後退してしまつた。不幸だつたのは、被斎のものに多くの人材が集まりながら、計量史の分野での後継者が居なかつたことである。

それでも幸いだつたのは弟子達が未刊の著書を後に刊行したことである。藤田元春はそこから資料を引いたのみで、学問的な姿勢を学ばなかつた。しかし私は、被斎からその学問に対する姿勢を含めて計量史を学んだ。

私淑とは、孟子の言葉で、直接に教えは受けないが、私

かにその人を師と考へて尊敬し、模範として淑とするこ

とだと言う。私は間違いなく被斎に私淑していた。もちろん今日では私のように被斎に私淑している研究者も多いに違ひない。日記を残さなかつた被斎について、九百字詰めで九百ページにも及ぶ詳細極まる『狩谷被斎年譜』を出版した梅谷文夫などは、その最たる者であり、ある意味で現代の奇蹟でもある。被斎の評伝を志し果たせなかつた森鷗外も、史伝三部作『渋江抽斎』『伊澤蘭軒』『北条霞亭』を通して、被斎について詳細に書いている。『古京遺文』を絶賛した薮田嘉一郎も私淑者のひとりであろう。

このように、現代に至るまで、私淑する者の絶えない被斎であれば、その当時の著名な学者、市野迷庵、山梨稻川、松崎慊堂、伊澤蘭軒、近藤正斎、管茶山、太田南畠などとの親交によって、彼らに与えた影響も極めて大きかつたのは当然のことであろう。友を見ればそれだけでも人柄がわかる。本稿でも不十分ではあるが、「讃歌」のつもりで交友関係について紹介してきた。

しかし、被斎の人柄を彷彿させる話は、他にも多くある。本稿を締めるにあたつて、いくつか書き留めておきたい。

の人物評で知られた被斎の弟子岡本況斎でさえ「たか子といふは、被翁のいつきむすめにして、ざえかしこく、なまなまのはかせは爪くはる」とその学識を高く評価している。森鷗外によれば、多加は今清少納言と云われ、その仮名文字の美しさは歎賞すべきだつたという。

被斎がその多加に宛てた書簡が残つている。三村竹清の「被斎華牋」に納められているものであるが、管見ながら研究者に引用されている例を知らない。したがつて専門家の解説もなく、心もどないのであるが、鷗外によれば、多加は黒田家の奥に三年ほど仕えていたので、おそらくその時期のものであろう。

内容は、多加が着物の着様や髪の結様が上手く行かないうつたえる手紙に対し、被斎はいろいろな「帶地さん留」を挙げて、その手配を承知したと伝えるものであるが、私が感心したのは、対等な目線で綴る被斎の文章である。

「御ふみ拝見いたし候」で始まり、「……御めもじいさい申上まいらすべく候、御返事まで、早々かしこ……おたかどの御もとへ、被さい」と結んでいる文章は、とても親から子に宛てた様式とは思えない。

もつとも、江戸期の親子間の書簡形式に疎いので、それは単なるフォーマット文に過ぎないのかも知れないが、「其方夜分御酒の節さびしく御座候よし、此方は酒なしに御座候……」などとあると、これは全く対等の目線で

ある。

以下も鷗外によるが、多加は被斎のもとに集まる書生たちにまじり、常に酒を飲んで快談をしていたという。また「盤安さんがわたくしを女房を持つてくれないから」と言つて伊澤蘭軒の次男、一書生の柏軒に嫁するが、四十九歳で亡くなった時、柏軒は「己がお目見をしたお蔭で、酒を飲みすぎて死期を早めた」と言つたという。

多加の死の一ヶ月前に、柏軒は秩禄と役料を合わせて四百俵に出世し、将軍家定にお目見している。「客に酒を供する毎に、献酬の間善く飲み善く談じた」からだと言う。

そのことを知つて、多加への書簡を読むと、ますます被斎の多加に対する愛情を感じる。

多加は間違いなく時代を先取りした女性であつた。しかしそれは被斎が愛娘を対等な人格として育てたからである。早死にした妻善への想いであつたのかも知れない。なお前に、鷗外の『伊澤蘭軒』に基づいて、多加が伊澤柏軒と結婚したのは天保六年の春としたが、「廉堂日曆」を読むと、天保七年二月の頃に「被斎の季女は対を求むこと甚だ急なり」とあるので、多加二十八歳の時の誤りのようである。結婚の背景には津軽屋の困窮があつたのも確かであろう。

さて、多加について触れたので、長男の懷之について

七月、薩摩藩の島津斉興は調所広郷を起用し、鴻池などに対して巨額の借金の踏み倒しに成功している。その内容は、「五百万両の借金返済は元金だけの「一百五十年分割払い」という凄まじいものであつた。この頃、薩摩藩では全収入を充てても金利支払いに不足していた。完済できるわけがないのは、借り手よりも貸し手の方がむしろ良く承知していたので、このような無法が通つてしまつたのである。

米代金の過半が米問屋などへの利払いに消えてしまう事情は諸藩とも大同小異であった。こうなると、借金をしている側が強い。津軽屋は藩に対する最大の債権者であると同時に、藩の庇護なしには立ち行かない立場にあつた。全ての債権を放棄して藩財政を再建する必要があつたのは、藩ばかりでなく津軽屋の立場でもあつた。

おそらく薩摩藩の借金の踏み倒し事件を米問屋仲間から聞いて、懷之は決断したのだと思う。これは身上大事の凡庸の者に成し得る話ではない。

しかし、その後の展開は藩にとつても津軽屋にとってもまことに不幸であった。翌天保七年（一八三六）は、「天保の大飢饉」であり、寒冷地の津軽藩は致命的な被害をうけ、さらに冷害の余波は天保十年まで続いた。津軽屋は藩に代つて借り受けた借金の返済に追われ、飯料にも少くほど困窮した。しかしついに暖簾を守り通し、家業の再建に成功したのである。

も書いておきたい。

松崎慊堂は被斎の墓碣銘の中で懷之について「風度氣象能肖父」としている。父に似ているというのであるから、通常ならほめ言葉であるが、その他の記述がないところから、懷之が学問の人ではなかつたとする見解が一般的である。すなわち、被斎の学識は多加に伝わり、懷之は凡庸だったと云う評価なのである。

鷗外も懷之について「たとえ多少書を読んでいたとしても、必ずしも大商店を経営する力をば有うせなかつたものと推する」と厳しい。

その評価は、被斎の死後、津軽屋が破産の危機を招き、

被斎所蔵の貴重な古典籍を手放してしまつたことにもよつているであろう。しかし事実は異なつていたというのが梅谷文夫の見解である。

本稿の冒頭で述べたように、津軽屋は被斎の死の一ヶ月後の八月七日に、津軽藩に対して金十二万七五六九両の巨額債権を放棄している。これは、被斎の死の直後に、藩財政の窮迫を理由に五カ年間返済を中止するとの通告を受けたことがきっかけとなり、懷之みずから決断して申し出たことである。その頃、津軽藩は江戸藩邸焼失や將軍家位牌所の普請など、不時の出費に加え、天保の恒常的な冷害に悩んでいた。もはや一時しのぎの借り換えで問題を先送りできる状況ではなかつた。

ちょうど被斎の亡くなつた月、天保六年（一八三五）閏

その中で行われた古典籍の処分であつてみれば、懷之を責めるのは酷であろう。淡淡と述べる梅谷文夫でさえ「心に不孝を詫びながら、父の遺愛の古典籍の売却に踏み切つた事情を察すべきである」と述べている。

（三十四）国学者との交流

被斎は儒学を泉州豊州に学んだ後に、国学を村田春海や屋代弘賢から学んだ。その後の研究対象も国学は主要なフィールドであった。したがつて、歴史人名辞典では「国学者」と紹介している場合もある。しかし、被斎は優れた漢学者、儒学者であり、それにも増して考証学者であり、それはむしろ国学者の対極に位置する学問分野でもあつた。

国学の中でも、思想的に最右翼に立つたのが本居宣長であり、宣長没後の門人を自称した平田篤胤であつた。宣長には優れて実証的な側面もあつたが、その本質は紛れもなく観念的な世界であり、それは平田篤胤を経て、明治維新以降の天皇制理念の「バックボーンとなつた。大和魂」という日本人にとって「心地よい理論」に合わせて、全てを体系化して行く作業は、一見、学問的なように見えて、実は最も反学問的な過程であつた。科学の本質は、実証データに基づき、「美しい理論」を乗り越えて、その上にまた新しい「美しい理論」を作るところに

ある。

先に観念的な「美しい理論」を導いておいて、そこに後から事実をちりばめて行く手法は、自己陶酔的で壮大な理論体系を形成しやすいが、それゆえにこそ自戒しなければならない。

考古学の世界がそうである。全国各地の大型前方後円墳の三角縁神獸鏡分有関係を基にして、小林行雄が纏め上げた壮大な古代国家体制論は魅力的であればあるほど、新たな事実を素直に受け容れることを困難にしてしまい、その後の恣意的な解釈を横行させる温床となつている。職業的な研究者は、定説に依存して論文を書いているので、それに縛られて、簡単に説を変えることができないのである。

また、少しムキになってしまった。

ここで紹介したいのは被斎が平田篤胤との間で、八咫鏡をめぐつて論争したことである。

今、手元に被斎手稿の『本朝度考八咫鏡說平田氏批攷辨』というコピーがある。大分前に畏友岩田重雄氏(前の計量史学会会長)から、「尺座をめぐる人たち」と云う論考の付属資料として頂いたものであるが、そこには平田篤胤が「ものさし」の国家管理のために「尺座」を作ろうとしていたことが詳細に述べられていて、それはそれで興味深いのであるが、わたくしにとつては、何と言つ

このようなどころに被斎の矜持の一端を見ると梅谷文夫も述べている。

ついでに「八咫鏡」について今日の話題を紹介しておこう。被斎も『本朝度量權衡攷』の中で述べているように伊勢神宮の御神体「八咫鏡」を納める器は御櫃代と云われ、延喜式などの記録によれば、その内径は一尺六寸三分(四十九センチメートル)である。ところで、福岡県の平原弥生古墳からは直径四十六・八センチメートルの同型の内行花文鏡が五面出土している。中国には全く見られない超大型鏡であり国産鏡というのが定説であるが、「八咫鏡」もこれと同型かも知れないのである。それは大きさと文様の類似性である。

残念ながら、いま現在、八咫鏡を見るることはできないが、神道五部書の一つである『御鎮座伝記』によると「八頭花崎八葉形也」とあり、八葉の内区を持つ平原の内行花文鏡と文様は矛盾しないのである。

このことが確かであれば、日本の古代史の理解に大きな影響を及ぼすのは間違いないであろう。しかし、私の生きている内には、天皇陵の発掘と同じく、その答えを期待できないであろう。

しかし、ひとつの方程式がある。それは旧満州国皇帝の溥儀に日本の皇室が贈った「三種の神器」のレプリカが存在しているとのニュースが一度流れたことがあるからである。虚報であったのか、あるいは報道を規制さ

ても被斎と篤胤の間に交わされた論争が面白い。

それは八咫鏡の解釈をめぐる論争である。被斎はある時『本朝度量權衡攷』の稿を平田篤胤に見せたようで、それに対して平田篤胤が異論を唱えたりしい。それに対する再び被斎が『平田氏批攷辨』を書いて反論しているのであるが、『本朝度量權衡攷』の冒頭にもほぼ同じ内容がかなりのスペースをとつて載せられている。

要は、被斎が西土の制を受けて日本の度量衡が始まりたとするのに対し、篤胤は天皇の祖神の御丈がその背景にある。したがって、多くを紹介しても意味がないが、本居宣長が『古事記伝』において八股蛇を八頭蛇、八咫鳥を八頭鳥、八咫鏡を八頭鏡で八稜鏡のこととしたのに対して、被斎が「八」は単に「多い」の意味、「アタ」は大指と中指をひろげた長さの意味であり、「八咫の鏡」は大きな鏡の意味するとして反論したこととに、篤胤が再反論したのである。

感心するのは被斎の再々反論の論証部分である。そこには逐一実に膨大な反証をつけているのである。そして「かく弁ずるは、本より事を実にして是を求めると思えのみ……」と結ぶのである。要は、「实事求是」のためであり、篤胤の人格を否定するような攻撃的な批判から自分の体面をまもるために明記しているのである。

されたのか、その後の消息を見出せずにいる。

大分、寄り道をしてしまった。国学者との交際に戻る。被斎から多大な影響を受けたのは彼の親友や弟子達ばかりではなかつた。伊勢外宮の権柄宜で国学者の足代弘訓もそのひとりであつた。

被斎の三度目の西遊時に会つただけであるが、その頃三十六歳で「天狗」になつていた足代弘訓に、その固陋を悟らせたのが被斎だというのである。弘訓は大塩平八郎とも親交があり、天保五年の冷害に際しては、山田の窮民を救うため津藩に掛け合い米千俵を得てゐる。その際に、被斎から贈られた『貞觀政要』の写本をお礼として津藩に納めている。

被斎は、先輩格にあたる市野迷庵にしろ松崎慊堂にしろ、学問上、学風を変えてしまうほど多大な影響を与えていた。足代弘訓がたつた一度のふれ合いで、大きく悟つたのは、被斎の学識によつてであろうか、それとも人柄であつたろうか。

もはや学問的には、相手にしなくとも良さそうな平田篤胤に向つてさえ、丁寧に丁寧に、例証を挙げて説明する被斎の姿を見ると、そこには人柄を伴う被斎の学識を見る想いがある。

被斎が有名になつたのは、むしろ明治以降のことである。市井の学者であり、しかも「実事求是」の学風は、国学・朱子学の盛行した江戸期にあつては時代に先行しがちであった。この点で、伊藤仁^じ斎、荻生徂徠、賀茂真淵、本居宣長などの思想家とは大きく異なつていた。主要な著作も生前に刊行されたのはごく僅かであり、職業的な教育者のように多くの弟子を抱えることもなく、派をなし閥を作ることとも縁遠かつた。

しかし、被斎の学識と人柄に魅せられた周辺の人たちは、被斎の遺作を暖め、明治になつてから刊行し被斎の名を高める。その背景には、被斎らの開いた考証学がその後の国学や蘭学に影響をおよぼし、幕末における西洋の科学技術の到来を容易ならしめたことがあつたと思う。

まず、未刊行であった『和名類聚抄箋注』が、被斎の薰陶を受けた最後の弟子、森立之（枳園）によって明治十六年（一八八三）に出版される。その際には、渋江抽斎が被斎の三稿を淨書したものが用いられた。森立之は『傷寒論』を書いた明治の考証医家の第一人者であり、今でも森立之研究会という団体が活動していると聞く。また渋江抽斎は森鷗外の名作史伝小説で世に残つた。

次に活字となつたのが明治二十六年（一八九三）の『古京遺文』と明治四十三年（一九一〇）の『上宮聖德法王帝說』である。

てや、多くの資料を引用させて頂いた梅谷文夫が読まれたらどう感じるであろうか。それを思うと、密かに書き溜めたラブレターを読まれてしまうような恥ずかしさを感じる。

いずれにしても、「まんじ」という「私的な世界」に甘えながら、その恥ずかしさをかなぐり捨てて書き続けてきて良かったと思う。お蔭でやつと二十年來の思いを遂げることができた。

この間に、いろいろとお教えいただいたことも多くある。その中には、貴重な資料もあるが、それらをどこかに挿入しようとすると構成がますます乱れてしまふので割愛してしまった場合もある。いずれ機会を見て、再稿を志すこともあるかも知れない。その際には、ぜひとも活用させていただくなつもりである。

なお、参考文献については、既に手元に一覧表を持っている。しかし、リファレンスつきで引用文献として載せたいと思い惑う場合もあり、今回は「讃歌」ということで冗長さを避けて全て割愛する。

（完）

しかし『本朝度量權衡攷』は、その学を継ぐ学者に恵まれなかつたためか、大正五年（一九一六）の滝本誠一編『日本經濟叢書』まで待たなければならなかつた。もつとも、その他の著作の多くが『日本古典全集』に集録されたのはやつと昭和三年（一九二八）になつてからであり、『度量權衡考』だけが遅れたわけではない。

被斎に繋がる人脈には、伊澤柏軒、森立之、渋江抽斎などの他に、既に紹介した岡本況斎と小島成斎がいる。小島成斎は老中阿部正弘の祐筆で名書家として知られるが、被斎も名書家であった。

梅谷文夫は『狩谷被斎』の終りに、解説なしで年代不詳の書家番付表をそつと載せているが、それによれば被斎は西の大関の巻菱湖（弘斎）に次いで関脇にランクされている。

（三十六）結

今回を以つて連載を終える。

被斎の伝記でもない。被斎の研究書でもない。被斎讃歌とは、私にとっては書き易いタイトルであつたと思う。当初は四回ほどの連載をイメージして書き始めた。書くにしたがつて、被斎讃歌のはずなのに、自己主張や自己讃歌がどんどん入り込み、三倍ほどのボリュームになつてしまつた。被斎も苦笑していることであろう。まし

今川風雲録（最終回）

千坂精一

尾張攻めを決断

伊豆・駿河・遠江三国を併合した現在の静岡県は東西一五三キロ、総面積七、三三四平方キロの大きな区域で、背後は山地だが南に開けた平坦地は黒潮の太平洋に面している気候温暖の地であることはすでに述べた。

蜜柑などの果実や茶の生産地として知られているからおそらく米作にも恵まれた地であろうと思つていた。

今川氏統治時代の石高は定かでないが、のちに天下を取りつた豊臣秀吉が石高制を確立するため天正十年（一五八二）から慶長三年（一五九八）にかけて全国各地を検地した「太閤検地目録」によると、駿河十五万石、遠江二十五・五万石と以外にすぐないことにおどろいた。

三河の二十九万石を加えても今川領の石高は七十万石

足らずであり、隣国尾張の約六十万石、寒冷地越後の四十五万石などと較べて満足の石高とは思えないから、義元もさらなる領知の拡大を自論んでいたことであろう。

しかし他領を奪取するといつても東は北條氏康の領国、北は武田晴信の領国でいずれも同盟者であるから裏切るわけにはいかず、となれば西の尾張、美濃しかない。

三河と尾張の国境をめぐっての攻防ははじめ松平と織田の争いであったが、松平が今川に従属したことによって義元と信長との対立構図に塗り替えられてきた。

その後、今川は徐々に尾張を侵蝕していくその影響力は織田の支配権八郡のうち二郡にも及んでいた。

義元は、本家足利將軍家の衰退が心配であつたが、上

洛するにしても行く手を遮る信長打倒が先決であつた。

義元は、いつきに信長を押し潰そうと決意を固めた。

いざ、出陣

義元は、尾張攻めに一万から二万五千の兵力を動員した。当時としてはおそらく最大規模の大軍であろう。

永禄三年（一五六〇）五月十日、先鋒の井伊直盛軍に松平元康（家康）軍が従つて駿府を出陣していった。

これまで今川軍のなかにあつて捨て石同然に扱われてきた松平軍は、このときもまた当然先鋒を命ぜられた。

十二日に義元の本隊は駿府を発つて藤枝に着陣した。

このとき先鋒隊は懸川（掛川市）まですんでいた。

十三日、本隊が懸川に着陣すると、先鋒隊は天龍川東岸の池田（磐田市豊田）まですんでいた。

十四日、本隊曳馬城（浜松城）着。先鋒隊は一手に分かれてすすみ赤坂（宝飯郡音羽町赤坂）で合流した。

十五日、本隊吉田城着。先鋒隊は御油（豊川市御油町）と赤坂に陣を張つた。

十六日、本隊は松平元康の岡崎城に着陣した。ここまでは大軍にしては順調な移動であった。このとき先鋒隊は国境に近い池鯉鮒（知立市）まですんでいた。

十七日、本隊が池鯉鮒に着陣したとき、先鋒隊は国境の境川を越えて尾張（豊明市）に侵入していた。

だが織田方のほうは、清洲城（清須市清洲）で再三評定を繰り返しながらも迎え撃つ態勢が整わずもたらもしているあいだに今川軍の侵攻をゆるしてしまったのだ。



その作戦は、まず大高城へ兵糧を補給しておいて本隊は織田方の丸根・鷲津砦（名古屋市緑区大高町）攻撃の別働隊を派遣せんにまず最前線の大高・鳴海の両城をひとつずつ後詰めして、役目がわり次第万全の態勢を整えて織田軍の主力をいつきに屠ろうとするものであつた。

後方については岡崎、池鯉鮒、今岡（刈谷市今岡町）に数千、沓掛に千五百を残して万全を期してあつた。

夕刻、大高城封鎖のため八〇〇メートル先に築いた鷲津砦の織田秀敏、丸根砦の佐久間盛重の両将から、

「今川軍は十八日夜大高城に兵糧を入れておいて、十九日早朝の満潮時を狙つて攻撃を仕掛けてくる模様」

であることを報られた清洲城の信長は、すぐさま善後策を練るどころか合戦話には一切触れず、しまいには、「夜も更けたから解散じや」

そう言つて、集まつていた宿将を帰してしまつた。宿将たちは、砦の危機を顧みぬ信長の態度に呆れて、

「運の末には智慧の鏡も雲る、とはこのことなり」

そう囁き合つたといふ。

だが、これは軍團の部将にあるまじき発言である。

義元の本隊は大高・鳴海の後詰めのように見えるが、大軍であるから鷲津・丸根砦は大高・鳴海の兵に任せておいて、いづきに清洲城へ攻めてくることもあり得る。

信長はそう考えて、迂闊に動けなかつたのである。

間信盛の善照寺砦に移つて軍勢を整え戦況を見守つた。巳刻（午前十時）ごろ織田秀敏、佐久間盛重、飯尾父子らがつぎつぎに討ち死にして鷲津・丸根両砦は陥ぢた。丸根砦を陥とした松平元康勢は、兵を温存していた大高城守将の義元の妹婿鶴殿長照勢と交代を命ぜられた。この義元の計らいが松平元康に幸運を齎すことになる。

義元、桶狭間山で敗死

五月十九日朝沓掛城を進発した義元の本隊は午刻（十一時）桶狭間山（名古屋市緑区桶狭間北）に到着した。

桶狭間山は、東海道と大高道の分岐点にある鳴海丘陵のなかの標高六十五メートルほどの里山である。沓掛城と大高城のほぼ中間点に位置していて、東海道をすすめば三百メートルほどで中島砦にいたる。

義元は、鷲津・丸根両砦を陥とした報告を聞くと、「今川の旗の向かうところ、鬼神もこれを避くじや」と、五百の本隊は見通しのきく山頂を選んで散在した。

そう言つてよろこび、休息させて話を三番うたわせた。緒戦の勝利で士気の弛緩した様子が看取れる。

そのころ、今川方の鳴海城とそれを包囲する位置にある織田方の丹下・善照寺・中島砦のあいだでは仕掛ける機会をうかがいながらの膠着状態がつづいていた。

十八日夜陰に乗じて大高城への兵糧入れに成功した松平元康は、十九日未明一千の兵で丸根砦に攻めかかつた。このとき、朝比奈泰朝、井伊直盛の両将も一千の兵で守将佐久間盛重も一千を率いて砦から打つて出た。

織田秀敏、飯尾近江守父子の守る鷲津砦を攻撃した。

明け方、今川軍に鷲津・丸根両砦を攻撃されたことを報らせる早馬が清洲城に到着して事態を知つた信長は、

「人間五十年、下天のうちをくらぶれば夢まぼろしの如くなり。ひとたび生を得て滅せぬもののあるべきか」

で有名な幸若舞の「敦盛」を舞い、立つたまま湯漬けを搔き込むと、岩室長門守、長谷川橋介、佐脇藤八、山

門守、賀藤彌二郎（小姓衆と僅か六騎で出陣した。辰刻（午前八時）に熱田神宮の摂社上知我麻神社（名古屋市熱田区）の前で信長は南南東の鷲津・丸根両方向に煙を確認している。

このとき信長の許には馬上六騎、雑兵二百ばかりとあるからまだ軍勢は集結していない。

しかし両砦は激戦が展開されていて陥落寸前であった。

このとき信長が熱田神宮に参拝したという記録はないから、ここは單なる通過地點にしただけのようである。

不遜で神仏不信の信長が神頼みするはずはなかつた。

信長は、満潮時刻には馬が通れない海沿いを避けて熱田から上手沿いに水野帶刀の丹下砦に入り、次いで佐久

山頂で休息中の義元は、度重なる捷報に氣をよくして、「わしの鉢先には天魔鬼神といえども耐えられまい」

そう豪語するとふたび謔をうたわせて寛ぎ、織田軍をいづきに殲滅しようとする気はまったくなかつた。この義元の態度は連戦連勝の驕りであつて敵中にありながら油断という魔物の虜になつてしまつたのである。そのころ信長は、宿老たちの制止を振り切り、一千に満たぬ軍勢で善照寺砦から中島砦へ移動していた。

中島砦は丹下・善照寺砦と連携して鳴海城を封鎖するとともに、大高城を囲む鷲津・丸根砦の繋ぎの役目を果たす位置にあつたが、鷲津・丸根両砦が陥ぢたことで後に敵を受ける最前線になつてしまい、しかも周囲一面が湿地帯なので深田に足を取られる危険があり、しかも低地で今川軍から丸見えなどの理由で宿老たちは制止したのだが、信長は進言を無視して前進したのである。

宿老たちは呆れて、信長の無謀な計画を制止したが、

信長は頑として諾かず、

「敵は昨夜大高城へ兵糧を運び入れ、今日は鷺津、丸根攻めとつづいて疲労しているに違いない。わが方は數こそ寡いが新手であるから恐れることはない。運を大に任せて押さば引き退かば押して分捕らずに切り捨てよ」

そう言つて、果敢に攻撃命令を下した。
このときの信長の考えは、機先を制する成算があつてのことか、はたまた一か八かの勝負を賭ける自棄莫だつたのかは定かでないが、宿老たちの眼にはおそらく自棄に映つたのではないだろうか。

なにはともあれ、織田軍は動いた。

このとき、丸根砦の鶴殿長照、鷺津砦の朝比奈泰朝、鳴海城の岡部元信らの先鋒隊は、その織田軍の行動を促えていたはずなのに、なぜ桶狭間山に向かう信長の本隊を背後から攻撃しなかつたのか、理解に苦しむ。

こうして信長の本隊一千は、今川軍の前線部隊が配置されている正面の山際まですむことに成功した。

そこへ偵察に出した梁田出羽守が桶狭間山の義元の本陣を捕捉して潜り込み、詳細に探索して帰ってきた。

適確な情報を得た信長が攻撃を掛けようとしたそのとき、一天俄かに搔き曇り桶狭間一帯を風雨が襲つた。

それは強風と簇突如豪雨で、今川軍本隊は混乱した。

風雨が止んだのは未刻（午後二時）ころであった。

雨上がりを待つて、信長が直ちに檄を飛ばすと、織田軍は桶狭間山頂の今川軍本隊を目掛けて突進した。

雨宿りをして、旗指物を手にすることもできず、総崩れになり、義元の塗輿をも置き去りにしたまま算を乱して山を駆けおりた。桶狭間山付近はその名のとおり狭間が入り組んでいて、平生でも深田に足を取られる難所であるのに、豪雨でどろどろに泥濘つているのだから堪つたものではない。

これでは撤退する今川軍にとつて不利であるばかりか、本隊の集結も難しく、先鋒隊のいる鷺津、丸根砦や鳴海城あたりから東西に延びた陣形をとつて、各部隊は丘陵と湿地帯をいくつも越えてこなければ旗本隊に合流できないのだから、掩護は絶望的といわざるを得ない。

もしこの日が雨天か曇天であつたならば今川軍は布陣を変えたであろうが、連日の日照りで眼も眩むような暑さだったというから、義元はなんとも不運であった。

三百騎ほどで義元を護る旗本隊は織田軍の執拗な攻撃を受けて次第に数が減つてゆき、ついに五十騎になった。

信長も先頭に立つて大将同士の雌雄決戦を挑んだ。

信長の馬廻りや小姓衆も手負い戦死者数知らずの状況のなかで、服部小平太が鎧で義元の膝頭を突いたが横に払つた義元の太刀で膝口を割られてその場に倒れた。

小平太を庇つた毛利新介が手創を負いながらも義元を

追い詰めてついに突き伏せ、ようやく首級を挙げた。

これで形勢は逆転し、松井宗信ら名のある部将を数多く喪つて本隊潰滅した今川軍は、敗走を余儀なくされた。

満身創痍の織田軍の辛うじての勝利であつた。

狭間というのは谷間のこと、地表の隆起部のあいだの細長い地形をいうのだが、義元はそんな入り組んだ狭隘地に入つてしまつた大軍を活用し切れなかつたのだ。

初めて動員した二万五千はあまりにも多く、義元も扱いかねて小回りがきかなかつたのが敗因であつた。

いかに大軍を擁していても兵力の逐次投入は戦力減少で全滅する。動けないのもまたないと同様である。

義元の遺骸は家臣が背負つて脱出し、三河國の大聖寺（豊川市牛久保町）に埋葬、石の手水鉢を載せて標にしておいたのを三年後に嫡男氏眞が墓石を建てたという。義元が非業の最期を遂げたあとも鳴海城の岡部元信は城を捨てずに織田軍を迎え撃ちつづけていた。

信長から再三開城勧告の使者がきて情勢判断した元信は、開場と引き替えに主君義元の首級返還を要求した。義元の首級を駿府へ持ち帰つた元信は、賤機山麓の今川家菩提寺臨濟寺（静岡市大岩）に手厚く葬つた。

このとき、義元四十二歳、信長は二十七歳であった。
ついでながら信長は、この戦いの冥加の侍として褒賞

されるはずの服部小平太と毛利新介を一番手柄とした。

では、一番手柄は誰だつたのだろう。

信長が冥加侍としたのは、今川本陣に忍び入つて動静を適確に捉え逐一を注進した梁田出羽守正綱であつた。

正綱は、沓掛城と知行三千貫を与えられたという。

氏眞、三河國を喪う

義元が戦死したとき、嫡男氏眞は二十三歳であつた。天文七年（一五三八）の生まれで、母は正室武田信虎の女であるから晴信（信玄）は母方の叔父であつた。

氏眞は父義元が好む風雅な環境につつまれ乳母日傘で育てられたので、文武より遊興にのめり込んでいた。

義元はあるとき、いつこうに自覚しない氏眞に対して、「そなたは、すでに元服をすませていてのに相変わらず鶴を聞わせたり、狗を競わせたりしていく童心にまだ失せぬ。武将の子はすんて文武を修得せねばならぬにいつまで経つても励もうといったさぬは阿呆と言われても仕方あるまい。いまその心をあらためねば、やがては領国

を失い、由緒ある今川の家を滅ぼしてしまうことになる」

そう言つて諭したが、脆弱に育つた氏眞には一念発起して逞しい武将に変身する気力も弁えもなかつた。

そんな氏眞であつたから、桶狭間の敗報を聽いて真逆と耳を疑い信じられぬ思いであつたところへさらに父義

元討ち死にの報らせが届いたのですつかり気が動転してしまい、右往左往するばかりで爲す術を知らなかつた。

今川軍の先鋒となつて前線基地大高城への兵糧補給に成功したあと、織田軍の丸根砦を陥とす活躍をして大高城の鶴殿正照と交替し休息していたために敗軍に巻き込まれなかつた松平元康は遅く撤退して三河國岡崎の菩提寺大樹寺に引き揚げ、駐留していた今川軍の退去を待つて岡崎城に戻ると、駿府の氏眞に急使を送り、

「いま信長は大勝利に酔い、部将たちも驕り昂つて備えを怠りおりりますれば、この間隙を衝いて急襲いたさば味方の勝利は疑いなし。一刻も早くご出馬なされよ。それがしも手勢を率いてご恩に報いたいと存じます」

そう進言して弔い合戦を勧めると、元康自身西三河方面に出陣して舉母、梅坪、廣瀬、沓掛、中島、刈谷、寺部、山中などの織田方の諸城を襲撃して陥としていったが、再三督促したにも拘らず氏眞は僕臣の甘言に乗せられて再挙を図ろうとする老臣たちの忠言を退け、いつこうに拳兵しようとはしなかつた。

ついに業を煮やした元康は、

（弔い合戦もいたさぬ暗愚の將に再起は覚束ない）

そう判断して氏眞を見限ると、今川方の三河國長澤城（豊川市長沢町）将糟谷善兵衛を攻略しておいて、永祿五年（一五六二）一月尾張國清洲城に出向いて織田信長に謁見し、盟約を交わした。

られて、三年ほどは平穏のうちに過ごすことができた。

氏眞は武将としては凡将愚将であつたかも知れないが、文政についてはかならずしも暗君ではなかつた。

例をあげると富士大宮の市を樂市にしたり、今宿の商人法度や富士山道者の条理を定めるなど積極的であった。

だが、祖母壽桂尼が歿した永祿十一年に異変が起つた。頼りにしていた三國同盟の一角が崩れたのである。裏切つたのは武田信玄であった。

信玄は信長に刺激されて上洛をこころざし衰退した足利將軍家に替わつて天下を掌握しようとした決意したのだ。

將軍足利義輝を弑逆した松永久秀が義輝の従弟義榮を担いで傀儡將軍に据えたが、信長が義輝の弟義秋（後の十五代將軍義昭）を擁立して久秀を斃そうとしていた。信玄にとつて絶好の機会が到来したのである。

だが、信玄が甲斐國から上洛するには駿河、遠江、三

河、尾張の諸国を攻め上つていかなければならなかつた。信玄は甥の氏眞が軟弱で家臣団のあいだに動搖が起つてゐることを知ると、駿河國侵攻を目論んだが、嫡男義信に三国不可侵誓約と重縁を楯に諫められていつとき思ひ留まつたものの、その義信が鬱病に疲れて自害すると、すぐさま末亡人になつた嫁を駿河館へ送り帰した。

それは、三国同盟の一方的破棄を意味していた。妹から義弟義信幽閉の事情を眞に聴いた氏眞は、信玄

境を接する織田との緊張状態を解消した元康は、三河國から今川の勢力を駆逐して独立するために東條城（愛知県幡豆郡吉良町）などをつぎつぎに攻略していく。

この元康の勢いにこれまで今川氏に臣従していた三河の国人たちは続々と元康に帰属していく。

上ノ郷城（蒲郡市神ノ郷町）を陥とした元康は今川の

部将鶴殿長照を追放してその子三郎氏長と藤四郎を捕えると、氏眞に人質として駿府城に留めおかれている正室關口夫人（後の築山殿）と嫡男竹千代（後の信康）との交換を申し入れて妻子の救出に成功した。

そして元康は、永祿六年七月六日に氏眞と絶つと、義元の一字を戴いた元康の名を捨てて家康とあらためた。

父義元亡きあととの氏眞にとつてともに育つた元康が頼りであったが、見限られたことは大きな衝撃であった。

家康と改名した元康は息も継がず東三河の今川方属城吉田城や田原城（田原市）などをつぎつぎに攻め陥として、永祿七年（一五六四）ついに三河國を奪取した。

二国同盟破綻

家康は三河國だけで遠江國へは侵攻してこなかつた。

いかに氏眞が見縊られても、今川氏は武田信玄、北條氏康と同盟していたので迂闊に手出しはできなかつた。

氏眞はその安全保障条約ともいふべき二国同盟にまつて、

永祿七年（一五六四）ついに三河國を奪取した。

の非情な仕打ちに憤慨して伯父であり舅でもあるもう一人の同盟者北條氏康にことの次第を訴えた。

怒つた氏康は、相模、駿河両國から甲斐や信濃國に供給している塩の販売を止めるという報復手段を考えた。

だが、それが信玄に今川討伐の口実を与えてしまつた。

信玄は、はやく駿河を奪取してしまわなければ、いずれは北條の属国になるか、または家康に三河國同様に略取されてしまふと察して氣を揉んでいたに違ひなかつた。

信玄は、庶子四郎勝頼に姪を押しつけて親交をつづけてきている信長の諒解を得て家康に使者を送り、信玄が駿河國を家康が遠江國を略取して分割領有を條件に連合を誘い、家康が承諾すると今川攻めの準備をはじめた。

氏眞、北條氏康を頼る

永祿十一年（一五六八）十二月六日、信玄は大軍を率いて府中（甲府市）を出陣すると御坂峠（笛吹市御坂町）、籠坂峠（南都留市山中湖村）を越え富士川沿いに南下して芝川（富士宮市芝川町）に布陣した。

報らせを受けた駿府館の氏眞は、庵原安房守に一万五千の兵を預けて薩埵峠（静岡市清水区由比）に出陣させ、小倉内蔵助と岡部忠兵衛に七千の兵を預けて八幡平に向わせると、氏眞自身も峠の手前の清見寺（静岡市清水区

興津清見寺町）に出陣して背水の陣を布いた。

そして十二日、両軍のあいだで雌雄を決する激戦が展開されたといきたいところだが、実はそうならなかつた。

両軍の激突で今川の先鋒隊が脆くも崩れると主力軍も戦意を喪失し、たちまち敗走してしまつたのである。

背水の陣を布いたにしては呆氣ない結果であるが、これは信玄が得意とする内応誘致計略に今川の部将朝比奈信置らがまんまと乗せられてしまつたためであつた。

「勇将のもとに弱卒なし」とは、勇猛な武将の率いる軍団は強兵集団に育つということであつて、統領の個性や能力の差が軍団の戦力を大きく左右してしまうのである。

桶狭間の敗戦が軍団の自信を喪失させたこともあるが、器量に欠ける氏真のもとでは部将たちが結束を欠き、己れの利害得失で去就する勝手な行動が多かつたのだ。

こんなことでは戦国乱世に生き残れるはずがない。

大原崇孚雪齋がいた軍団は強かつた。僧侶とはいえ庵原城主庵原氏の血を引く雪齋は有能な軍師だったのだ。薩埵峠で今川軍を打ち破った武田軍は、余勢を駆つていつきに駿府（静岡市）へ雪崩込んで城下に放火した。氏真は這々の態で駿府館に逃げ帰ると、背後の賤機山城に立て籠もつて北條氏康の救援を待つつもりだつた。

駿府館は幕府から〈海道一の弓取り〉と謳われた四代範政が建てた館であつて、城郭の備えはなかつた。

いて天龍川を南下し遠江國見付に侵入すると、そこに布陣していた徳川方の奥平貞勝、菅沼貞直らの軍勢と交戦して岡崎と懸川のあいだの補給路を遮断してしまつた。これは明らかに両国分割領有の違背行為であつた。

怒つた家康は信玄に嚴重抗議したが、信玄は惚けた。

家康は信玄の心底を見抜き、これ以上攻城を長引かせては遠江國を略取されてしまうと判断して、氏真夫妻と城兵全員の生命を保証する条件で和議を申し入れた。

氏真も戦力の低下が心細く、北條氏康の救援も覚束ないと諦めの境地だったので家康の申し出に飛びいった。五月十七日氏真は懸川城を開城すると、朝比奈泰朝の案内で見付へ行き、天龍川河口の掛塚湊（磐田市竜洋）から漁船を仕立て、海路伊豆國へ落ち延びて戸倉城（駿東郡清水町下徳倉）に入り、義兄北條氏政の庇護を受けた。

このころ北條氏は氏康から氏政に代替わりしていた。

氏政は氏政の嫡男で甥の氏直を養子にして駿河國を譲つたが、亡命した國主の空手形にすぎなかつた。翌年正月、武田軍の攻撃に敗れた花澤城（焼津市高崎）の大原資良は、城を脱出するごとに家康に帰順していく遠江國高天神城（掛川市）の小笠原長忠を頼つた。

その年五月十四日、氏真は北條氏政の助勢を得て駿河國吉原（富士市）で武田軍と戦つたが撃退できなかつた。六月、家康は遠江國曳馬城を大改修して濱松城と改め

だが賤機山城は早く武田軍に占拠されてしまつた。

やむなく駿府館に立て籠らせたが、武田軍の総攻撃を受けて館は混亂し、迎え撃つすべもなく浮き足立つてたちまち総崩れになつたので、氏真は重臣朝比奈泰朝に預けた遠江國懸川城（掛川市）を目指して落ちていつた。

このとき北條夫人は輿の用意が間に合わず裸足のまま徒歩で逃げたというから、周章狼狽ぶりが窺える。

いっぽう信玄に呼応して岡崎を出陣した家康は遠江國に侵攻すると浜名湖の北方をまわつて井伊谷（浜松市北区引佐町）にすすみ、井伊谷城や刑部城（浜松市北区細江町）を陥として浜松に入ると頭陀寺に着陣した。

そして今川属将たちの帰順を確認し十八日に曳馬城に移つて軍容を整えると、二十七日に懸川城を包囲して城下に放火したが、翌日見付（磐田市）に退いて越年した。

正月早々家康は懸川城で正念場を迎えた。挾撃された氏真は、最後の砦懸川城で正念場を迎えた。

奈泰朝は手兵二千でよく防戦し容易に陥ちなかつた。

業を煮やした家康は、自身で出馬して城の諸口を攻め、城下の西宿や天王山下で激戦を繰り返したが、朝比奈泰朝の守りは固く、ずるずると長期戦に入つていつた。

家康が懸川城を攻め倦んでいるあいだに、駿河國を奪取した信玄の魔手がなんと遠江國にまで伸びてきただ。

例によつて遠江の国人たちに内応誘致計略がなされるいっぽう、信濃國高遠城将秋山伯耆守信友が伊那衆を率

ると、岡崎城を嫡男信康に任せてここを本拠にした。翌元亀二年（一五七二）十月三日、早雲から三代かけで関東を手中に収めた北條氏康が五十七歳で歿した。

嫡男氏政は、父氏康から、

「上杉謙信は頼りになるが、信玄は信用できない」

そう訓えられていたのに当面の敵信玄と和睦したのだが、その信玄が一年後に五十三歳で病歿してしまつた。

武田家の将来を憂えた老臣高坂彈正昌信は、小田原の北條氏と和睦をしようと奔走して一年後に北條氏政の十四歳の妹を勝頼の継室に迎えることで同盟を結んだ。氏政が勝頼と手を結んだことで小田原に居辛くなつた氏真は、駿府館でともに育つた家康を頼ることにした。濱松城で迎えた家康は、父を喪つて流浪したおのれと重ね合わせて身の置きどころのない氏真に同情した。

四歳年下の家康から援助を受けて氏真は京へ上り、入道して宗闇と号して安穩な余生を送つてゐたが、慶長十九年（一六一四）大坂冬の陣が起つた直後の十二月二十八日に七十七歳で老衰死した。大往生であつた。

その後の今川氏は、氏眞の孫直房が寛永十三年（一六三六）、分家の品川氏が正保元年（一六四四）にそれぞれ高家に任じられ、今川本家は十一代つづき、範寂の嫡男淑人が父に先立ち明治五年（一八七二）十九歳で病歿して断絶するまで、氏眞のあと二百數十年つづいた。

氏眞の墓は東京都杉並区今川の曹洞宗寶珠山觀泉寺にある。今川町というのは戦前からある古い地名だから、觀泉寺が建立されたことと関連があるかも知れない。

觀泉寺は氏眞（宗闇）の開基で、はじめ同区の井草に建立されたのだが、三代将軍家光の代に高家に取り立てられた孫の直房（範英）が祖父氏眞の墓を牛込築土八幡宮の前にあつた曹洞宗久寶山萬昌院（現在中野区上高田）から改葬して堂宇を現在地に移したのだという。

觀泉寺の墓地には今川氏累代の墓があつて東京都の旧蹟に指定されているが、今川氏の菩提寺は静岡市大岩にある臨濟宗妙心寺派の臨濟寺であり、境内に義元を祀った今川廟もあるから、觀泉寺のそれは供養墓であろう。墓所に詣で、駿河、遠江、三河を統治し海道一の弓取りと謳われた今川氏の往時を偲んでこの稿の筆を擱く。

(丁)

走る不動産（その三）

三戸 岡 道 夫

第七章 チャンス

たるかもしれない)

という期待感である。

そして、ある日、神川は本当に棒にあたつたのである。

いつも神川が顔を出している梅本薬局を訪れると、奥さんが、

「今度はすこし神川さんの銀行へ預金をしてあげられそうよ」

と言つたのである。

「えっ…、本当ですか。それはありがとうございます。
なにかいい事があつたのですか？」

神川は思わず聞き返した。

「今度、ビルを売ることにしたのよ」

「えーっ…、ビルをですか？」

神川は、はじけるようにとび上つた。

「本当にビルを売るんですか」

神川は『俺にも運が向いてきたな』と思つた。ビルを

神川昇は渉外係であるから、毎日外を歩くのが仕事である。しかしここれまでの神川は、朝、銀行から出掛けるとき、なんとなく憂鬱でファイトが湧いてこなかつた。一生懸命に取引先を訪問しても神川の眼の前に、渉外係長から要求されているような大きな仕事が現われてくるとは、とても期待できないからだつた。いつも銀行の通用口から出掛けしていく足も重かつたし、手に持つ鞄も重かつた。

しかし、先日国友信彦から不動産を使つた大口預金獲得のノウハウを教わつてからは、神川の気分は一新した。朝鞄を持って外に出ると、

（今日はいい仕事がありそうだぞ）

（希望で胸がふくらんでくるのだつた。）

（犬も歩けば棒にあたる。神川昇も歩けば不動産にあ

売れば、少くとも億単位の金が動くはずである。奥さんは、

「ええ、四谷の貸しビルを売ろうと思いましてね。あのビルの毎月のお家賃、天山銀行さんの口座へ振り込まれているでしよう」

「ええ、頂いております。ありがとうございます」

「ビルは父の名義になつておりますが、父ももう八十歳です。いまのところはピンピンしていますが、なにぶん年令が年令ですから、いつどうなるかわかりません。もしものことがあれば、相続税を払うのに四谷のビルを売らなければなりません」

「仕方がないですね」

「でも、父はビルは売りたくない、子孫へビルを残してやりたいと言っています。そこで考えたのが、ビルの買い替えです」

「買い替え?」

「そうです。四谷のビルは、ちょっと見積もつても、十億円程度にはなります。それで、いまのうちに四谷のビルを売つて、そのお金で、別に二つぐらい小さいビルを買うのです。そして相続税を払うとき、その中の一つのビルを売れば、あとの一つは残ります。いまの不動産ブームのときに、それをやつておきたいと、父は言うのです」

（なるほど、不動産を持っている人は、そんな先のこと

今まで考えるのか）

神川は妙に感心した。それと同時に、

（この四谷のビルは、俺への神様からの賜り物だ。ぜつたい商売のチャンスにするぞ）

そう思うと、神川は反射的に、

「奥さん、その四谷のビル、僕に売らせてください」

と叫ぶように言つた。しかし神川にはビルを売る当てがあつたわけでもなく、また買主を見つける自信があつたわけでもない。だが、心の底にうごめく情熱のようなもののが、口をついてほとばしり出たのである。

「あら、神川さんが……、本当？ 銀行さんでも不動産を売買するのですか」

「ええ、売つたり、買つたりします。今の銀行は、昔どちがつて、なんでもやりますよ。天山銀行はたくさんのお客さまと取引をしています。その中には、ビルを買いたがつているお客さまもたくさんいると思いますから、ビルは必ず売れます」

「そう言えば、たしかにそうだわね」

「もう、どこかの不動産会社へ話したんですか」

「いいえ、まだそこまでは。まだ父が検討している段階ですから……」

「ぜひ、僕にやらせてください。きっといい買主を探します。それまでは他の不動産会社へは話さないでくださいよ」

「いいわよ。よく父に言つておきましょう。天山銀行さんにはいつもお世話になつていますから……」

「お願ひします」

そう頭を下げる神川の頭の中に、ビル倍増計画の大願

不動産の八溝社長の顔が浮かんでいたのは、当然だった。

梅本薬局を出ると、神川は氣もそぞろに、すぐ大願不動産へ向つた。

八溝社長とはカラオケスナックで会つたり、豪華絢爛な自宅へ行つたりはしているが、会社を訪れるのは今日が初めてである。先日もらった名刺の住所を頼りに、日比谷へ行つた。すると大願不動産の入つているニューユニットビルディングは、有名なのですぐわかつた。

比谷ビルデイঁグは、エレベーターで六階へ上がる。

営業の折原一夫がすぐ会つてくれて、

「やあ、神川さん、よく来てくれました。神川さんが会社まで来てくれるとは、思いませんでした」

神川を見る折原一夫の眼に、一瞬、畏にかかった動物を見るような色が浮かんだが、そんな感じを折原は少しも神川に見せずに、

「さあ、どうぞお掛けください」と応接室へ案内した。神川は、

「折原さん、ちょっといいビルの話がありましたが、まず大願不動産へと思つて、お伺いしたのです」

（やはり天山銀行のようないい銀行と取引していると、いい情報が入つてくるんだな）

と思った。そして八溝社長が、

（國友と神川という渉外係は、天山銀行の目玉商品だから、大事に扱え）

と言つた眼力に、今更ながら感心し、

「ちょうど今、社長もおりますので、会って話していい下さい」

(神川と八溝社長となるべく多く会わせた方がいい。

それに四谷のビルはよさそうな話なので、直接八溝社長に話してもらつて、そこで直ちに決めてしまつた方がいい)

と、折原は考えたのである。

神川は折原の後について社長室へ入り、

「天山銀行の神川でございます。先日は大変ごちそうになりました、ありがとうございました」と深々と頭を下げた。

八溝社長はデスクから気軽に立ち上つて、

「やあ、これは神川さん、よく来てくれました。さあ、どうぞお掛けください」

八溝社長の広い社長室も、代々木の自宅の応接室に負けない豪華さで、ヨーロッパから特別輸入したという応接セットが並べられていた。折原一夫が、

「四谷にいいビルの売り物があると、神川さんがまつ先に知らせに来てくれたのです」

と口火を切ると、八溝社長の顔はにわかにこやかになり、

「それは、それは、ありがたいですな」

折原がビルの概略を説明し、それについて神川がくわしくいきさつを話した。

くれた人は、一人もいなかつた。

(この八溝社長のためなら、どんなことだつてやるぞ)

神川は次第にそんな気持になつていった。

折原一夫は、そんな二人の姿を横から眺めながら、

(相変らず、八溝社長は人扱いがうまいなあ)

と、そのあざやかさに見惚れていた。

(よくぞ、ほめてくれました)

といわんばかりの調子で、

「そうでしょう。これも、わたしのビル倍増計画の一環ですよ」

「百のビルを二百にふやすというビル倍増計画は、大願不動産を一流不動産会社にするための計画です。私は

ご存知のように裸一貫、自分の腕ひとつで、ここまで這い上ってきた、たたき上げの人間です。だから自分の会社を、一流の会社にしたいのです。どこまで自分の会社

を大きくできるか、自分の力を試してみたいのです」

八溝社長の顔には、若々しい青春の血潮がたぎつているように見えた。

「一流の不動産会社になるためには、それなりの準備が必要です。いわゆるイメージ・アップという奴ですね。そのために二年前に本社を日比谷へ移したのです。それまでは上野の昭和通りに面した小さなビルが本社だったのですが、そのビルではどう見ても三流、四流の不動産会社にしか見えません。そこで思いきつて、このニューハーフビルへ引っ越してきたのです。このビルはミラーガラスという斬新な手法で作られていて、内側からは外が見えるが、外からは内側が見えない、すなわち、外から見るとビル全体が鏡で覆われているという独特のデザインです。これならば、一流の不動産会社といつても

話を聞きながら、八溝社長はニコニコ顔を崩さず、ときどき、「ああ」とか、「よさそうですね」などと相槌を打つて、

「そのビル、買うことに決めました」

「すばりと決断した。さすがの折原一夫も驚いて、でも社長、まだ、ビルの実物も見ておりません。一度ビルを見て、それから判断されでは……」

と言うと、八溝社長は鷹揚に、「いや、いや、天山銀行の神川さんが持つてこられたお話だ。まちがいなどあろうはずがない。すべてを神川さんにお任せすればいいんだよ。ねえ、神川さん……」

そう言つて八溝社長は、神川の顔をのぞきこむようにした。「すべてを任す」という中には、値段の交渉から、購入する資金を天山銀行から借りることまで、含まれているのは勿論であった。

そんなふうに言われると、神川は、

(八溝社長は俺のことを、こんなに信用してくれている)と、全身が熱くなるような感激をおぼえた。これまでの神川の渉外活動の中で、八溝社長のような対応をして

第八章 経営哲学

(すべて神川さんにお任せすればいい)

とおだてられたりして、すっかりいい気分になつてしまつた。それで神川の方も口が軽くなり、

「社長さんの本店のこのビルは、本当にいいビルですね」

と、神川にしては珍らしいそんなお世辞を言うまでになつた。

社長室の広いガラス窓から外を見ると、日比谷公園、皇居のみどりが拡がり、そのまわりを、丸の内、大手町、日比谷と、一流の高層ビル群が擴る、抜群の環境だった。八溝社長の顔には満面の笑みが浮かび、

おかしくないでしよう。まあ、馬子にも衣装ですよ。神川さん、不動産業というところは、この衣装が馬鹿にならないのですよ、ワツ、ハツ、ハツ……」

八溝社長は満足そうに笑った。

「これでイメージ作りは一応できたから、つぎはいかにして貸ビルの数を増やすかですよ。神川さん、わたしは、ただやたらとビルを増やしているのではありません。わたしには、わたしなりの考え方があるのです。ちょっとキザな言葉かもしれないが、経営哲学とでもいいましょうか……」

「その経営哲学をぜひ聞かせてください」

「神川さん、いまNHKの大河ドラマで『翔ぶが如く』というのをやっていますね」

「ええ、毎週見ています」

「あの大河ドラマの逆をやる、それがわたしの経営哲学ですよ」

「えっ、大河ドラマの逆ですか？」

翔ぶが如くの主人公は、西郷隆盛です。西郷隆盛の人生哲学は『子孫のために美田を残さず』ですね。ところが、わたしは不動産屋ですからそうはいきません。わたしはその逆で『子孫のためにビルを残す』、これがわたしの経営哲学なんですね

「ああ、なるほど」

「不動産会社を経営するには、いろいろなやり方があ

晢学がひそんでいたのだった。
「だから、わたしは貸しビルしか買いません。わたしの経営の基本は貸しビル業なのです」
「なんといっても、貸しビル業がいちばん堅実で安定していますからね」
そのあたりのことは、素人の神川にも最近わかりはじめてきた。

「ですから、土地を地揚げして、ビルを建てるようなことはしません。土地を地揚げするのは時間がかかり、その間資金が寝てしまいます。それに完全に地揚げができなければ、ビルが建たないというリスクを背負うことになります。ですから、出来上ったビルを買うか、もしくビルを建てる場合でも、地揚げの完了した完全な土地でなければ買いません」

「なるほど。でも、完全な土地となると、かえって高くなつくのではありますか」
「いい土地は高値なのです。高い土地でないとダメだというのがわたしの主義なのです」

「……と、言いますと？」

「高い土地とは、一流の物件だということです。わたしはね、不動産は宝石と同じだと思うのです。友人に宝石商がいて、いつか五千万円のダイヤの指輪を見せてくれたことがあります。それは大粒で、みごとなダイヤでした。宝石には相場の変動があり、高くなったり安く

ります。デベロッパーや、ニュータウン造成、リゾート開発など、見た目は華やかですが、安定性がありません。不動産会社の王道は、堅実で永続性のあるものでなくてはならないと、わたしは思っています。それには賃貸ビルをたくさん持つて、安定的に経営していくことです」

神川は、

（見かけによらず八溝社長は堅実な思想を持っているのだな）

と感心した。

「まあ、大手不動産会社でいうならば、丸の内を中心におく群を所有している菱三不動産のような会社になります。菱三不動産には、長い歴史と菱三財閥の支援があります。大願不動産には歴史もなく、財閥の支援もありません。しかし菱三不動産だって、最初は歴史も財閥もなかったのです。それを長い年月をかけて築いてきました。大願不動産もいまからそれをやろうというわけではありません。だから大願不動産は、わたし一代限りの会社ではありません。二代、三代、四代と、これから五十年、百年かけて完成させていくのです」

「長期プロジェクトですね」

神川は、八溝社長の自宅の応接室の壁に貼られていた、大願不動産所有のビル群の写真を思い出した。あのときは、八溝社長の単なるデモンストレーション、見せびらかしにすぎないとと思っていたが、その奥には、こうした

なつたりします。しかし、そのような一流のダイヤモンドだと、相場が下つても、値段は下がらないといいます。その話を聞いたとき、わたしは『土地もダイヤモンドと同じだな』と思つたのです。土地も値段が上つたり下つたりします。しかし一流の不動産は値段の変動に強いのです。いくら不景気になつても、銀座は銀座、丸の内は丸の内なのです」

そう一気に喋ると、八溝社長は一息ついて、

「まあ、わたしのような会社では、丸の内にビルを持つようなことはできませんが、できるだけ一等地の一流ビルを買うように心掛けています。高くとも、良いビルを買っておかないと、子孫のためにビルを残せませんからね」

そこまで話すと、八溝社長はじつと神川の顔を見て、

「ところで神川さん、高いビルを買うにはお金が必要ます。そのためには天山銀行さんの力を借りしなければなりません。神川さん、よろしくお願ひします」

と、如才なく話をそこへ持つていくのを忘れなかつた。

「あっ、ええ……、こちらこそ」

神川は少しへどもどして、そう答えた。が、大願不動産へどんどん金を貸して、自分の成績がみるみるうちに達成されていくのを想像すると、神川は期待で胸が躍るのだった。

「すると社長さん、外国のビルなんかはどうなんですか

か。最近は、ニューヨークやロサンゼルスのビルとか、ハワイのリゾートマンションとかを買う会社がありますが……」

と神川は聞いてみた。すると、

「わたしは海外の不動産は買いません」

八溝社長の答えは明確だった。

「海外の物件は調査が十分できませんし、ビルの素性をつかむのも大変です。うつかりすると、巨大なババをつかむ危険があります。それに海外の物件となりますと、その管理がうちの会社ではとてもできません。結局、現地の会社に頼むしかありませんが、そうなると、任せっきりになってしまって、目が届きません。うちの会社は、まだ海外のビルに手を伸ばすのは早すぎます。いまほどこでもバブルに浮かれて、それだけ、やれ行けど、海外で買いあさっていますが、そのうち失敗して、泣きべそをかく会社が出てくるのではありませんかな」

そうした芯の通った話を聞くと、「子孫のためにビルを残す」哲学も、単なるアイロニーでないことがわかつてきた。

「神川さん、ニューヨークまで行かなくとも、日本にはまだいっぱい買うビルはありますよ。それにわたしは、たとえ日本でも、リゾート開発やゴルフ場開発などには手を出しません。そうした話も山ほど持ちこまますがね。カッコはいいが、金と時間がかかる上に、リスクが

大きいからです。ゴルフ場を作る金があつたら、ビルを買います。神川さん、これからもいいビルの話があつたら、どんどん持ってきてください」

八溝社長の話に引きこまれて、神川は前途が洋々と開けてくるように感じた。

「では、帰つて支店長と国友にすぐ報告いたします」

最敬礼をして神川は帰つていった。

八溝社長は神川の前では、

（神川さんが持ってきた話は絶対まちがいないから、すべてお任せします）
などとカッコのいいことを言つていたが、神川が帰ると、すぐ折原一夫をつれて、四谷のビルの確認に走つていったのはもちろんであった。

第九章 担保主義

こうして四谷にある梅本薬局のビルを、大願不動産が買う契約がまとまり、その購入資金を天山銀行が貸すことになった。

前回の六本木ビル購入資金について、天山銀行の大願不動産にたいする二度目の貸出であり、その十億円の貸出の申請書を、渉外係の神川が書くことになった。

「神川さん、ついにやりましたね」

貸付係の国友信彦がやつてきて、神川の肩をたたいた。

「国友さんが助けてくれたおかげです。ありがとうございます。でも、僕は渉外係ですから、これまであまり貸出の申請書なんて書いたことがありません。おまけに十億なんて大きな金額はじめてです。なんだかそら恐ろしくて、手足がふるえます。どうか国友さん、申請書の書き方も教えてください」

以前は、貸出の事務にもはつきりしたルールがあった。渉外係は外に出かけて貸出案件をまとめたら、その貸出事務は貸付係にバトンタッチし、貸出申請書は貸付係が書くことになっていた。

ところが最近は事情が変つて、渉外係も貸出申請書を書くようになってきた。

理由は金融自由化である。金融自由化で銀行は貸出競争に入り、貸付係だけがやつていたのでは間に合はず、

渉外係も貸出の分野に積極的に手を伸ばすようになったからである。その結果、渉外係が取り決めた貸出は、渉外係が貸出申請書を書くようになつたのである。神川は、

「僕が貸出申請書を書くなんて、夢のようです。僕のように貸付係の経験がない人間でも、申請書が書けますかねえ。申請書つて、書くのが難しいのでしょうか？」

「大丈夫、書けますよ。最近の申請書は簡単になつていますからね」

「国友さんには簡単でも、僕には難かしいですよ。それで、この前国友さんが大願不動産へ貸出した、六本木ビルの購入資金の申請書を、参考にさせてもらっています」

「その程度に書けばいいのですよ。要は、不動産の担保をしつかり取つてあればいいのですから」

「そうですか。それなら安心しました」

「それに担保の取り方が、うちの銀行も少し緩和されましたよ。これまでには担保不動産の掛目は八十パーセントと、堅いことを言つていましたが、すでに他の銀行では百パーセント、いや、それ以上でも平気で貸しているところもありますからね。それで、うちの銀行でも今度、予定担保掛け目というやり方が認められたのです」

「予定担保掛け目…？」聞いたことがありませんね。なんですか、それは？」

「八十パーセントという掛け目の数字は崩していないが、不動産の値段を『今後値上がりが期待される値段の八十パーセント』でいいということになつたのです。たとえば、現在坪当たり五百万円の土地でも、来年は六百万円に値上がりしそうなら、その八十パーセント、すなわち四百八十万円まではいいというわけです。六百五十万円に見込まれれば、その八十パーセントの五百二十万円となり、すなわち時価の百パーセント越すということにもなりますね」

「それは画期的なことですね。実質的には担保掛目をなくしたのと同じですね」

「そうですよ。前回の大顧不動産の貸出のときには、この予定担保掛目がなかったので、鑑定評価額を水増してもらつて急場をしのいだのですが、今度の神川さんの場合には、非常にやりやすくなつたわけです。もつとも、予定担保掛目が認められるのは優良物件に限る、と条件がついていますね」

「大丈夫です。梅本薬局のビルは優良物件ですから」

そう答えながら、ちょっとと神川はなにかを考えているふうであつたが、ややあつて、「でも考えてみると、昔にくらべていまの貸出のやり方は、ずいぶん変わりましたね」

国友もまったく同感で、

「本当に変わりました。昔の貸出には、厳密な調査、審査が必要でした。まず、その会社が、貸出をしていい会社かどうかの信用調査をした。それから会社のバランスシートの検討、損益計算書の分析、資金繰表の検討、借入金の資金使途は正当かどうか、担保や保証人は適正か……、こうした項目がすべて検討され、よし、となつた時点で、貸出が行われたのです。でも、今はそんなことはやりません。やろうと思つても出来ません。とくに不動産関係の貸出をする場合には、担保不動産が適正であれば、それでいいというようになりました。もし焦げ

ついても、担保の不動産を処分すれば、ラクラク回収できるからです」

「いわゆる担保主義ですね」

「そうです」

「なぜ、そうなつたのでしょうか」

「理由は二つありますね」

「なんですか?」

「その一つは、金融自由化のため、効率化、合理化で、貸付係の人間が減り、信用調査やバランスシートの検討、やら、手間のかかる仕事をやつていられないからです。この日比谷支店の貸付係だって、人は減るうえに、一日のうち半分は渉外をやらなきやならない。それなのに貸出は増えるばかりで、仕事は二倍、三倍にふくれ上つて、いる。毎晩十時、十一時まで残業しているのは、神川さんも知つていてるでしょう」

「ええ、いまの貸付係は地獄ですね。誰も貸付係はやりたくないと言つています」

「だから、担保の不動産があればいいというように割り切つて、簡単に済ませる以外にないですね。そうやっていても、残業、残業の連続ですから」

「たしかに、そうですね」

「それから第二の理由は、会社の信用調査を厳密にやつていたら、どの会社も金など借りてくれません。クイック・レスポンスの時代です。信用調査なんてまわりく

どいことをやつていたら、「お前のところだけが銀行じゃない」って、追つ払われてしまりますよ。いまは借りる会社の方が強い時代ですから」

「でも、そう強いことが言えるのは、一部のいい会社だけでしょう」

「とんでもない。いったんそうした風潮が広まると、悪貨は良貨を駆逐するのだとえどおり、今はどんな会社へ貸す場合でも、担保主義が一般化してしまいましたね」「しかし、果してそれでいいのでしょうか。このあいだ、ある新聞に、『貸行の貸出は企業の信用の上に貸すべきであつて、担保のみを頼りにした貸出をすべきではない』と書いてありましたが……」

すると国友は、やや憤然と、「そんなのは現実を知らない評論家や大学教授などの、世迷いことですよ。信用、信用と言つたつて、相手が信用調査に応じないのに、どうやつて調査するのですか。それに、貸付係の人数も減つて忙しく、そんなことをやつっている暇はありませんよ。できるのなら、自分でやつてみろと言いたいですね。そんなことを言う暇があるのなら、銀行の貸付係の人員をもっと増やすべきだということでも、言つてほしいですね。そういう評論家にかぎつて『効率化のためにさらに入員を減らすべきだ』なん

てことを平氣で言つうんですね。大矛盾ですね」

「そう言われば、たしかに彼等の言うことは、その

場かぎりのご都合主義で、本当のことがわかつていませんね。でも、なんとなく割り切れない氣もするなあ」

「神川さん、金融自由化のなかで勝ち抜いていくには、それぐらい割り切らなくちやだめなのです。金融自由化は政府が旗を振つているのだし、マスコミ、世論も「自由化」「自由化」のオンパレード。銀行でもトップからその指示が出ているのだから、それでいいじやないですか。われわれは大蔵大臣でもないし、銀行の頭取でもないのだから、そこまで心配する必要はありませんよ。われわれの考えることは、いかにして自分のノルマを達成するかじやありませんか」

「あつ、そうでした。僕こそ現実を忘れていました。余計なことを考えないで、はやく貸出の申請書を書いてしまわなければ……」

と神川は現実に返り顔を赤らめた。

「この貸出が実現すれば、神川さんのノルマはすぐ達成されるんでしよう?」

「達成も達成、大達成です。達成しておつりが出ます。国友さんのお陰で、今期は僕も表彰されます」

「もう、涉外係長から叱られなくてすみますね」

「ええ、この頃、係長は態度を豹変させて、『神川、よくやつてるなあ』なんて、ほめてくれます」

「さらに、いいことがあるのです。梅本薬局が四谷の

ビルを売った金で、小さいビルを二つほど買いたいと言つています。ですから、もう一度ビルの商売ができるのです。どこか、いいビルはありますかね」

「ビルを二つですか。すると五億円前後のビルを二つですね。そうですねえ……」

と国友はちょっと考えていたが、

「それなら赤玉建物がいいですよ。あそこなら、いいビルをたくさん持っています。神川さんに紹介しましょう。赤玉建物なら、ビルを売れば、その代金を全額定期預金にしてくれますしね。一挙両得です」

神川は眼の前に、不動産取引の夢がますます拡つていのを感じた。

第十章 余裕

今日の神川昇は、車で不動産の案内をして走りまわっていた。

車は赤玉建物の社長の赤山太郎がみずから運転し、助手席には営業担当の小野川忠が座っていた。神川昇は後の座席に、客と並んで腰掛けていた。

見てまわっている不動産は、すべて赤玉建物所有の物件で、いわば赤玉建物と天山銀行とが共同して、赤玉建

赤玉建物なら売った代金を、

(そつくり定期預金にしてくれる)

と同僚の国友信彦から聞いている。だからこの話を逃がすわけにはいかなかつた。

車が停まつた。

渋谷の繁華街からそう遠くないその辺りには、中規模のビルが建ち並んでいた。

「どうですか、この土地は」

赤山社長が車から降りて指さしたのは、ビルとビルの間にはさまれた青空駐車場だつた。

「空き地ですか……」

梅本老人がそう言うと、

「空き地ではありません。更地と言つてくださいよ。なにも建つていない、まっさらな土地です。形も真四角でいいでしょ。ちょうど百坪あります」

赤山社長は自信たっぷりに説明した。

しかし梅本老人はちょっと解せぬといった顔で、その四角な土地を眺めていた。これまでに四つのビルを案内

されて、最後はどんなビルかと期待していたのに、がらりと変つて、ビルの谷間の空き地である。どういつもりなのかと、梅本老人がとまどつていると、赤山社長は、

「梅本さん、こういう更地がいちばん値打ちがあるのですよ。土地というものは、上にいい加減な建物ができると始末に負えません。使うにも自分の思うように利用

物の不動産を客に売りこんでいる図といえよかつた。

神川の横に座っている客は、梅本薬局のおじいちゃんであつた。八十歳だというのに、遺産相続に備えて自分の手で不動産の買い替えをやっておこうというぐらいであるから、矍鑠としていて元気がいい。耳も達者なら、眼も達者、足腰もピンシャンとしていて、朝からの車の遠出にもびくともしていなかつた。

「どうですか。お気に召したものがありましたか。どれもいい物件ばかりでしよう」

神川が梅本老人の決断を促すように、横から声をかけると、

「うむ、む……」

と梅本老人は頭の中で、これまでに見てきた四つのビルの品定めをしていた。

神川の斡旋で、梅本老人の四谷のビルを大願不動産が買い、その購入資金を天山銀行が貸出した。その売買契約は先日無事に終了し、代金十億円は支払われて、天山銀行日比谷支店の梅本老人の通知預金になつてゐる。梅本老人はその金で、二つの不動産を買おうとしているのである。遺産相続に備えて、一つのビルを二つのビルに分割するわけである。

(その二つのビルも僕が探ししますよ)

と、急に不動産ブームの上げ潮に乗ることができた神川は胸を張り、その話を赤玉建物へ持ちこんだのである。

「なるほど」

「だが、ただ更地で遊ばせておいたのでは勿体ないので、駐車場にしているのです。駐車場は青空駐車場が一番いいのです。設備費もかかりませんし、必要なときはすぐ更地に戻せますからね」

「なるほど」

「四谷のビルをお売りになつて、二つのビルを買い、一つは従来通りテナントビルとして貸すが、一つは相続税のために売るのでしょうか。売るとなると、ビルよりも更地の方が売りやすいと思って、わざわざ更地をお見せしたのです」

「なるほど」

梅本老人は「なるほど」の連発で、そんな赤山社長の配慮が気に入つたようだつたが、「でも、高く売れるということは、私が買う値段も高いということでしょう」

と次第に話の核心に近づいてきた。

「いや、必ずしもそういうことではありません。天山

銀行さんから紹介を受けた梅本さんですから、特別お安くいたします。それに、もともとこの土地は昭和四十年代の安いときに仕入れたのですから、いまの相場よりも安くても十分儲けさせていただけますから結構なのです

す

「それは相すまぬことですな」

「坪五百万円でどうでしようか」

「五百万円ねえ、む、む、む……」

「すぐここを出した表通りでは、一千万円は堅いですよ。この土地だって、相場では七百万円や八百万円の値段はつきますからね。お買い得だと思いますよ」

「む、む、む……」

またもや梅本老人はうめきながら、一生懸命に頭の中でソロバンをはじいていた。

「五百万円で百坪、ちょうど五億円です。さつき見ていただいたビルの方にも、五億のものがあります。合せて十億円、ご予算にぴったりではありますか」

赤山社長の商談のうまさは抜群であった。

神川は商談の成り行きを、息をつめて眺めていた。十億円の定期預金となるか、否か、神川の成績はこの商談の成否にかかっているのである。

神川はハラハラしながら、梅本老人と赤山社長の横を交互に見ていたが、赤山社長の商談には、長年の不動産業界で鍛えられた辣腕ぶりに加えて、なにか『余裕』と

いうものが感じられるのだった。交渉力には迫力があるが、とこどん相手を追いつめるようなことはしないのである。時には、(この土地を買つても、買わなくても、どちらでもいいのですよ)

といふような態度も見せるのである。

すると逆に梅本老人のほうは、

(この土地を買つた方が得だ)

という思いの測に引きずりこまれていくのである。梅本老人はまるで蜘蛛の糸にかかったように、赤山社長の商談にからみ捕れていくのが、神川にもはつきりわかった。神川は、

(大願不動産の八溝社長と、この赤山社長とは正反対だな)

と思つた。八溝社長はビルを買いたい、買おうとガツガツしている。そのバイタリティが、ギラギラとむき出しへなつていて。

それに対し赤山社長は、ビルを売ろうと、あせらないう。だが、それは「あせらない方がよく売れる」という駆け引きではない。もつと別になにか、すなわち余裕のようなものが赤山社長には感ぜられるのだった。

その赤山社長の持つている不思議な余裕とは、何なのだろうか。だが、そこまでは神川にはわからなかつた。梅本老人はさかんに首を振つて考えをまとめていた

が、ついに、

「この空地を買うことに決めました」

と宣言するように言つた。赤山社長は、

「ありがとうございます」

と口では言つたものの、

(当然そうでしょう)

と言わんばかりの態度で、ゆっくり頭を下げた。しか

しその二倍も三倍も、

(ありがとうございます)

と頭を下げるたのは、神川の方だった。

梅本老人がこの空地を買えば、天山銀行に預けてある十億円の金で、赤玉建物へ支払う。すると赤山社長はその十億円の金を、全額定期預金にしてくれるのである。金を遊ばせておかないので、なぜ、その金でもつと別の不動産を買わないのかと思うのだが、赤山社長はそれをしないのである。欲がないのか、営業の小野川に聞いてみても、

「赤山社長の方針です」

と言うだけで、くわしいことはわからなかつた。不動産売買の商談に余裕があるように、金に對しても余裕があるのはなぜなのか。神川にはちょっと理解できなかつた。

しかし神川にとつては十億円の定期預金さえ入れば、そんなことはどうでもいいことだった。十億円入れば、

「なんなりと、どうぞ。私に出来ることでしたら……」
と赤山社長は余裕のあるところを見せた。

(つづく)

誠忠の茶園（五）

太田精一

九、旧彰義隊士の牧之原移住

(一) 金谷開墾方助勤

彰義隊内の殺害事件は、隊長の大谷内龍五郎の心を深く傷つけた。

龍五郎には、血盟の誓いを破つてまで、沼津勤番組に職を得ようとした斎藤、上野両氏の心情が痛いほど分かった。だから、脱隊を許したのである。

そのことを、隊士全員に伝える間もなく、この不幸な事件が起つた。（隊長である拙者の責任は重い。何故もつと早く一人の苦渋を聞き、全隊士納得の上で、隊を抜けられるようしなかつたのか）

龍五郎は、自分の統率力のなきを悔やんだ。

苦しみ抜いた末、二人を手厚く葬り、墓を立てることにした。

斎藤は、沼津市住吉町の光明院。上野は、清水町堂庭蓮華寺にそれぞれ墓を立て、菩提を弔つた。墓石には、「義施大谷内龍五郎幸重建之」と刻んでいる。

彰義隊の牧之原移住を決めた静岡藩は、その説得役に中條景昭、大草高重を当てるにした。そのことを頼みに山岡鉄舟が、牧之原にやってきた。

景昭も高重も鉄舟の頼みとあれば、応じないわけには行かない。ことに高重は、旗本當時から龍五郎とは昵懇の間柄であつたので、その説得には、適役であつた。

高重は、大谷内龍五郎と清水の宿屋で対面した。三年ぶりで会う一人には、再開を喜ぶ余裕さえなかつた。お互いに厳しい表情で、しばし無言のまま、見詰め合つている。

先に口を開いたのは、高重であつた。彼は、強い口調で藩の意向を伝えた。

「静岡藩としては、この度の殺害事件を重く受け止めて

いる。彰義隊士の徳川家への忠誠心は、多とするところであるが、それが昂じて藩内の秩序が乱れ、治安が悪化することを、藩庁では心配している。とはいえ、貴公たちの窮状を見過すことはできない。そこで、藩は、彰義隊の諸士たちに、扶持米を支給し、開墾方の助勤として、牧之原への移住を勧告することになった。今日は、そのことを伝えにこうして、出向いて来たのだ」

これを聞いて、龍五郎は、語氣荒げて高重に詰め寄つた。

「開墾方の助勤とはどういうことか。貴公たちの下について百姓をしろということか」

「そうだ。われわれに見習つて牧之原の土地開墾に当たるということだ」

高重の言葉に龍五郎は、時代の流れに取り残されて行く、悲哀を感じた。

「開墾方となつてゐる新番組の連中は、将軍警護のため

と称して戦いを避けってきた。にもかかわらず、先に駿府に來たお陰で、広大な土地を下賜されている。しかるに、われわれは、敗れはしたが、武士の意地を貢いた。そのわれわれが、何も戦わなかつた新番組の連中の下風に立ち、百姓をしろというのか」

龍五郎は、彰義隊の『義』が世間に受け入れられず、迷惑でしかない存在であることを思い知つたのである。

高重は、龍五郎の逡巡する心の動きを読み取つた。敗者に鞭打つような態度を心中詫びながら、断腸の思いで藩の方針を切り出した。

「貴公たち彰義隊が、あくまで移住を拒むのであれば、藩は、追放令を出し、解散に追い込むと言つているのだ。そうなれば貴公たちは、散り散りにこの地を去るほかあるまい」

龍五郎は、しばらくじっと、腕を組んで考え込んだ後、

重い口を開いた。

「やむを得まい。不本意であるが致し方ない。移住することにしよう。ただ、拙者は、このように不自由な体だ。片腕では、百姓はできぬ。また、隊士の中には百姓をしたくない、という者もおろう。そういう連中のわがままを許して頂きたい。そうした連中も含めて一つ処に住むことのできるように、配慮下さるというのなら、牧之原に移り住もう」

「相分かった。新番組の牧之原開墾方の仲間は、貴公たちを決して拒むものではない。むしろ旧幕臣の誼で仲良く暮らしたいのだ。それぞれに意見が分かれ、別の道を歩んだが、これからはまた心を合わせ、徳川のために尽くそではないか」

高重は、龍五郎の心を固く閉ざしていた扉が、次第に開かれつつあることを感じていた。

龍五郎も胸襟を開いて語り合つたことで、わだかまり

が溶け、すべてを高重に託す気持ちになっていたのである。

「大草さん。貴公に身柄を預けることにしよう。よしなにも頼み申す」

翌日、下戸倉村の龍仙寺に彰義隊の面々が集まつた。

当初九十五人いた隊士のうち本堂に集まつたのは、五十人にも満たない。

龍五郎は、集まつた五十人の前で彰義隊の解散宣言をした。その上で、血盟連判状を全員の前で焼却し、改めて静岡藩から牧之原開墾方助勤を拝命したのである。

明治三年七月の蟬しぐれの激しい暑い日であった。

(二) 新旧移住者の対立

龍五郎は沢水加の村役人をしている山田万吉の離れを借りて妻のりゆうと二人で暮らすことになった。

沢水加は、牧之原の西のはずれに位置し、万吉の家からは、富士山がよく見える。裏手には、小川が流れ、閑静な土地柄である。

龍五郎は、剣術を日課とし、ときどき山や森に出掛け、鉄砲で鳥を撃つたりしていた。

百姓仕事は一切しない。こうした龍五郎の生活態度が、新番組(開墾方)武士たちの反感を買った。

彰義隊士の入植は、牧之原に紛争の火種を植え付けることになった。高重の思惑とは裏腹に新たな緊張と対立双方に生じたのである。

それでも武士の誇りだけは捨てなかつた。刀は、その象徴である。それ故、耕作をする時も刀は差したままであつた。その姿を揶揄されることは、彼等にとって耐え難かつたのである。

真面目に働きもしないで過去の栄光にすがり、武士の誇りを、ことさら口にする新移住組の彰義隊の連中は、岡田原の入植者からすれば、時代の流れに逆つてただ、虚勢を張つているようにしか見えなかつたのである。

それだけではない。土地を巡つての疑心暗鬼と不満が双方に生じたのである。

開墾方として入植した中條、大草の新番組には、千四百町歩を超える広大な土地が払い下げられた。一家族当たり平均して、四町歩の土地が与えられたことになる。その多くの土地が、まだ未開墾であつた。この未開墾の土地を取り上げ、新移住者である旧彰義隊士に分与するのではないかと危惧する声が開墾方の新番組から出始めた。

一方、彰義隊士の中には、新番組の武士としての働きを非難する者も少なくなかつた。

「われわれが血を流して官軍と戦つてゐる間、精銳隊(新番組)は、久能山にいて何もしなかつた。それなのに新番組への土地の配分が厚すぎる」

これに對して新番組では、次のように反論してゐた。

「恭順を押し通す慶喜公を守ることが、徳川家を存続させたのである。

中條景昭や大草高重ら幹部は、彰義隊士たちを快く迎えるつもりであつた。だが、五十人を超える隊士とその家族が移住して来るに従い、さまざまな問題が生じてきただのである。

最大の問題は、彼らの多くが、百姓仕事を嫌つたことである。武士の魂と称して刀を肌身離さず、仮住いしている農家の庭先で、剣術の稽古をしたり、近郷近在の若者を集めて剣術を教えたりした。そのため、村人の百姓仕事が滞りがちとなつたのだ。

また、野良着の上に刀を差して畠に出る開墾方の武士をからかう彰義隊士もいた。

開墾方のうち、岡田原へ入植した高重の縁者たちは、開墾した土地に茶を植え、その脇に大豆、小豆、青物野菜などを作った。

この岡田原の入植組は、農作業を通じて、濃密な人間関係が形成され、新しい村ができる。神社の改修、道路工事、井戸掘りなどの共同作業はもとより、冠婚葬祭、病人見舞い、村費の負担割合など、話し合いで決め、場合によつては、味噌、醤油、付け木などの生活必需品の貸し借りまで行つた。

岡田原の入植者たちは、華やかな江戸の消費社会を自ら放棄し、生産を中心とする農村社会に適応して行つたのである。

せる唯一の道であると考えて、あえて戦わなかつたのである。むしろ、慶喜公の意向に反して、無謀にも薩長に戦いを挑んだ彰義隊こそ徳川家を危うくするものである。それこそが不忠の極みである。駿府に来て、徳川家の窮状を見かねて帰農を誓い、与えられた土地を緑野に変えてこそ忠義が貫かれるのだ」と。

こうした相互不信の矛先が、隊長の大谷内龍五郎に向けられた。それが、隊士の殺害事件と結びついて、牧之原を揺るがす大事件へと発展することになるのである。

牧之原にも木枯しが吹き、明治三年の暮れを迎えた。富士山は、雪に覆われ、陽の光を浴びて輝いている。収穫にはまだ一、三年を要するが、茶の木は、順調に育つてゐる。茶の木の脇に植えたソバ、大豆、などが実り、開墾方の食糧不足を救つてくれた。

十二月十九日夜刻、開墾方取締役福井金次郎の家に、六本松の服部一徳、岡田原の人江兼明などの面々が集まつた。斎藤金左衛門、上野岩太郎の遺児たちの仇討ちを前に控えての相談を行つたのである。話し合いの結果、福井金次郎が遺児たちの後見人になると決まった。

沼津で討たれた斎藤金左衛門には妻の他に二男、二女がいる。長男の源八郎は、養子である。

また、上野岩太郎には、母と妻の他に弟秀三郎と娘がいた。

斎藤金左衛門の長男源八郎と上野岩太郎の弟秀二郎は、藩庁に対して「仇討ちの願い」を出した。だが、明治となつたこの時代に仇討ちはふさわしくないとされ、願いは却下された。

斎藤氏の殺害は、藤田寛三の単独犯行で、上野氏は、藤田、吉沢の両名によつて殺害されたことは明白であつた。

ところが、そこに隊長である大谷内龍五郎の関与があつたかどうかが問題になつた。殺害は、龍五郎の示唆によるものか、そうではなく両名がまったく独断で凶行に及んだものかが争点になつて、憶測が乱れ飛んでいたのである。

折悪しく、その頃の龍五郎の評判は、悪かつた。

龍五郎を誹謗、中傷する声は、牧之原の新旧移住者の中に広がり、直接の下手人である藤田、吉沢を超えて隊長の龍五郎を仇に仕立てようとする動きが強まつていたのだ。

その扇動者の急先鋒は、彰義隊で、五番隊長を務めた朽原鼎である。

朽原は、江戸牛込赤城下で道場を持つ剣術師範で、源八郎の師匠である。

源八郎は、若干十七歳で、周りから唆されて養父の仇討ちをする羽目になつた。だが、気乗りはしない。また、腕にも自信はなかった。

(三) いわれなき仇呼ばわり

後見人となつた福井金次郎宅に大谷内龍五郎を召喚し、その途中の一本松で待ち伏せ、討ち取ろうとする計画が立てられた。一本松には、開墾方及び助太刀の武士たちが矢来を組み、待ち構えている。

龍五郎を仇と狙つているとの情報は、内藤種光よりすでに龍五郎にもたらされていた。内藤は、龍五郎の江戸以来の友人で、中條景昭と共に谷口原に移住してきた開墾方の武士である。

龍五郎は、自分が仇とつけ狙われるとは、筋違いであることは分かつていて。ところが、彰義隊の残党を率いて牧之原に入植以来、百姓仕事を拒み、武士の面目に固執する自分の生き方に非難の声が高まり、彼を排除しようとすることにした。

うとする動きのあることも承知していたのである。

明治三年十二月二十日早朝、上野、斎藤両人からの果たし状が大谷内の家に届けられた。大谷内は、その果たし状を読み、即刻承知の返事をしたため、妻のりゆうに支度を命じた。

「あなたが斎藤様、上野様を切るようにお命じになつたわけでもないのに、何故あなたが討たれなければならぬのです。お二人のお墓まで立ててあげたというのに、理不尽ではありますか」

「隊士の不祥事の責任は、隊長が取らねばならぬ。それが武士というものである。拙者は、あくまでも武士として生きたいのだ。その思いを貫くことができないのであれば、いつ死んでも悔いはない」

彼は、明治新政府になつて激変する世の中の動きについて行くことができなかつた。もはや千五百石取りの旗本としての矜持を保つことはできない。地位を失い、有り金も底をついてきた。誇りまでも失い、そうになる自分に嫌気がさしていたのである。

（剣を交えれば勝つ自信はある。だが、助太刀をする者がいる以上、多くの死傷者が出ることは間違いない。もし、彰義隊の連中が拙者に加勢すれば、牧之原全体を巻き込む大乱闘に発展しかねない。それだけは避けねばならない。ここはやはり開墾方幹部の中條さん、大草さんに

それに比べ、龍五郎は、神道無念流の達人で、彰義隊九番隊長として活躍した歴戦の勇士である。上野戦争で傷を負い、右手が不自由であるとはいえ、豪剣で鳴らしていた。

（義父を切つたのは、藤田寛三と吉沢力松で、大谷内ではないのに、何故大谷内を仇として付け狙わなければならぬのだ）

源八郎は、自分の閑知しないところで話が、どんどん進められていく仇討ちの計画に違和感を覚え、空恐ろしさを感じるのであつた。

（二）中條、大草との会談を切望

果たし状には福井金次郎宅に来られたしとある。大谷内龍五郎が、支度を整え、家を出ようとした。その時、彰義隊の隊士たちが、駆けつけ、不穏な動きのあることを知らせた。

「福井家の途中にある一本松付近で、開墾方の入江兼明、服部一徳等と彰義隊の朽原鼎が、斎藤、上野両名と共に、竹矢来を組み待ち受けている」

「相分かつた。この果たし状には、福井家に来られたしとある。承知したと返事した以上、まずは福井氏宅に行かねばなるまい。少し遠回りになるが、一本松を避け、迂回して行くことにしよう」

龍五郎は、後見人の福井氏と言葉も交わさず、いきなり乱闘となることを避けたかった。

「藤田と吉沢の取つた行動は、隊規にもとづく正当な行為である。仇呼ばわりされる筋合いはない。まして、大谷内さんを仇と狙うのは、筋違いもはなはだしい。あえ

て大谷内さんを討とうというのならば、加勢しようではないか」

彰義隊士の血氣盛んな連中の中には、助太刀を買って出る者も少なくなかった。

「これは、仇討ちに名を借り、彰義隊をこの牧之原から追い出す策謀だ。開墾方の連中にとっては、後から牧之原に移住したわれわれが邪魔なのであろう」

「まずは落ち着き召され。福井家に来いということなのでそこへ出向くことにする。後見人の福井さんの話を聞いた上で、その足で中條さんを訪ね、そこで大草さんを交えてじっくりと本件について話し合いたいと思っている」

龍五郎は、彰義隊士の随行を固辞し、腹心の横山伊三郎だけを伴って家を出た。門先で、りゅうが、悲痛な面持ちで見送った。

「心配するな、りゅう。中條さん、大草さんと話をすれば分かつてもらえるはずだ」

りゅうは、ことさら平静を装う夫の目に、悲壯な思いが込められていることを感じ取つた。不吉な予感がして、思い止まるよう言ひたかった。

だが、旗本の娘として育つた矜持がそれを許さない。仇討状を受け取つた以上、指定された場所に行くしかない。夫には、最後まで堂々たる武士でいて欲しかつたのである。

と切れ、空虚な思いが胸をよぎつた。運命のいたずらに翻弄されている自分を惨めに感じた。

（拙者は、今後もこれまでの生き方を変えられない。そうであれば、このあたりで人生の幕引きを考えてもよいのではないか。自分の命と引き換えに、多くの人が救われるのであれば、武士らしく最期を飾るのも悪くない）

龍五郎は決断した。

「内藤さん。中條さんに会えないのは残念だが仕方がない。拙者は、腹を切ることに決めた。この首を、斎藤、上野の遺児たちにくれてやることにする。ただ、拙者は、彼等の義父と兄を殺害したわけでもなく、ましてや命令したわけでもない。それだけは、彼等に伝えたい。また、この首に免じて、藤田、吉沢を許し、今後彼等を仇として付け狙わないと二人に誓つて貰いたいのだ。今、拙者が、刀を抜いて斎藤、上野に助太刀する者と争えば彰義隊の連中も黙つていないのである。それだけは、彼等に伝えたい。また、抜き合わすことになるだろう」

そう言つて、龍五郎は、内藤に斎藤と上野を同家に呼び寄せるよう頼んだ。

斎藤源八郎、上野秀三郎が内藤家に到着すると、龍五郎は、後見役の福井金次郎と共に彼等を部屋に呼んだ。

「源八郎、秀三郎、そもそもどたちの義父や兄を殺害したのは、拙者でないことは、承知しておろう」

二人は、頷いた。

「直參旗本らしく、お振る舞い下されませ」

部屋に戻つたりゅうは、仏壇の前に端座したまま、両手を合わせ、長い間動かなかつた。

沢水加から仁王辻の福井家までは、二里の道程である。龍五郎は、一本松の道筋を避け、間道を通つて福井の家の前に現れた。

「中條さんの家に赴いて、とくと話し合いたい。拙者は、斎藤、上野両氏の殺害を藤田、吉沢に指示したわけではない。だが、彰義隊の頭としての責任はある。その責任の取り方について中條さんのお考えを伺いたいのだ。それによつて、拙者も武士として恥ずるところのない身の処し方を考えている」

龍五郎の話を聞いた福井は、しぶしぶ同意した。

(二) 切腹を決断

中條家を訪問する途中、龍五郎は、古くからの友人である開墾方の内藤種光の家に立ち寄つた。

内藤の家は、建築したばかりで、木の香りが漂つている。庭には、冬の日差しが差し込んでいる。その陽を受けた菊が秋の名残をとどめていた。

内藤は、龍五郎の訪問を受け、座敷に招き入れた。彼の話を聞いて、茶を出しながら内藤が言つた。

「中條さんはいませんよ。今静岡に行つています」

龍五郎は、内藤の顔をじっと見た。頬みの綱がぶつん

「そこともたちは、この大谷内が殺害を命じたとして拙者を仇と狙つてゐるようであるがそれは違う。断じて命令などしてはいない。だが、彰義隊の統率力を欠いた責任は拙者にもある。仮に、拙者が藤田、吉沢に代り、死を選べば、今後両名を仇として付け狙うことはしないかどうか、はつきり聞きたい」

「今後、仇として一人の命を狙うことはありません」「それで安心した。ならばこの首をそちたちにくれてやろう」

龍五郎は、外にも聞こえるように、わざと大きな声で言つた。外では、助太刀を買って出た朽原他大勢の開墾方や旧彰義隊の武士たちが事の成り行きを見守つていたのである。

「拙者は、医王寺で切腹し、武士の誇りを全うしたい」医王寺は、岡田原にあり、曹洞宗の名刹である。三代將軍家光から寺領、境内、山林などを与えられた。龍五郎は、再びこの寺を訪れている。

彼は、内藤に筆と墨を所望し、妻りゅうへの辞世の歌をしたためた。

（昨日まで 曇りし空の今日晴れて つるぎの舟にのるぞ うれしき）

また、中條景昭にも辞世の歌を書いている。
(彰義隊 隊は崩れて この二文字を 生は捨ててもけがざるまし)

陽は傾きかけている。横山伊三郎に妻死ての歌を届けるように頼んだ。

歌を受け取つたりゆうは、嗚咽をこらえ、目頭を押さえて、かねて用意の白装束を取り出した。それに餅を一切れ紙に包み、横山に渡した。

「これは、家主の山田様から頂いた搗き立ての餅です。お正月も近い。この世の名残にせめて一団なりと召し上がるようお伝えください」

「しかと伝えます」

横山は、濡れ縁に手を突いて肩を震わせ涙を流した。

「それからもうひとつ。この白装束の襟には、私の髪が縫い込んでござります。そのことも、そつとお伝えくださいまし」

そう言つてりゆうは、庭に目をやつた。庭の向こうの竹林が、風に揺れている。雀が、揺れる竹の枝に止まって、羽を休めようとしている。

強風が吹いた。風に煽られた雀は、羽をばたつかせ、地上に舞い落ちた。

りゆうは、新時代の強風に敢然と立ち向かって散つて行く夫の姿と重ね合わせて、その風景を見つめていた。

辞世の歌を詠み終えた大谷内は、座禅を組み、静かに目を閉じて、無の境地に没入しようとしている。

撫でた。

伊三郎は、りゆうから託されたもう一つの包みを開けた。

「今日山田さんが搗いた餅です。正月を迎えることなく散つていくのは忍びないと申し、一口なりと召し上がつていただきたいと奥様から託されました」

「りゆうの肌のようなすべすべした白い餅じや」

龍五郎は、餅を手で包んで、その感触を確かめながら口にした。

やがて、支度を整えた龍五郎は、本堂の脇に控えていた。医王寺住職の前で居住まいを正し、最期の別れを告げた。

「ご住職。本堂を汚して誠に申し訳ない。お詫びの言葉もござらん。数々のお心遣い悉けなく存じます」

住職は、目礼し合掌した後、無言でその場を立去った。白菊が一輪、三方に添えられていた。

夕闇が濃くなつた。境内の木立も黒い影にしか見えない。小坊主が、二本の蠟燭を運んで来た。後見人の福井金次郎と服部一徳、入江兼明が蠟燭の光にぼんやりと写し出され、並んで座っている。

斎藤源八郎と上野秀三郎が、その前に控え、龍五郎の着座を待つていて。

切腹の座についた龍五郎は、最期にあたつて、胸中を

内藤家の妻女が、懊を開けるかすかな音がした。龍五郎には、まるで遠い世界の物音を聞くように思えた。酒と膳が運ばれた。

「何もございませんが、どうぞお召し上がりください」

「折角お支度頂いて誠に申し訳ありませんが、食のほうは遠慮させて頂きます。腹を切るのに不都合があつてはいけませんから。その代わり酒は、遠慮なく頂戴します。

ご交誼を頂いた内藤さんと、別れの盃を酌み交わしたく存じますので」

内藤としばらく盃をかわした後、龍五郎は、医王寺に向かつた。

(二) 壮烈な死

日は、すでに暮れかけている。山門をくぐると、なだらかな石段が続く。両側を覆う松の枝が風に揺れていた。境内の右側の鐘楼に枯葉が舞い、本堂の正面の医王寺と書かれた朱額にまで達している。

龍五郎は、ゆっくりと本堂の控えの間に入つた。横山伊三郎はすでに、到着していた。外には、すでに加勢人が二十人以上、寒さに震えながらたむろしている。

伊三郎は、りゆうから頼まれた白装束を風呂敷から取り出し、龍五郎に着せかけ、そつと耳打ちした。

「その襟には、奥様の髪が縫い込んであります」

龍五郎は、額くと、その襟をいとおしむように優しく

語つた。

「拙者、大谷内龍五郎は、彰義隊九番隊長としての責任を背負つて武士らしく腹を切る。斎藤、上野両名の殺害事件は、これにて落着としたい。よいか源八郎、秀三郎そなたちは、今後直接の下手人である藤田、吉沢に対して、遺恨を持つな。兩人とも落ち着いてこの首を刎ねよ」

龍五郎は、正面に座つた検視役の福井金次郎に目礼し、三方を臀部と足の脛裏にあてがつた。

斎藤、上野の両名は龍五郎の後に立つ。鉢巻に襷掛け、袴の股立ちを半ばに取つた源八郎は、一見勇ましそうに見える。だが、足は、がくがく震えている。上野も蒼白な顔をして、歯をがちがちさせていた。

無理もない。源八郎は、十七歳、秀三郎は二十六歳、いずれも人を切つたことはないのだ。

龍五郎は、作法通り落着いて、左手で三方の短刀を取り、右手を添え、押し戴いた。鞘を払つて、左手で腹を探つた後、右手に持つた短刀で、膳の左上を突き立て、きりきりと右へ引き回した。

「ムー」

呻き声とともに介錯を促す声が龍五郎の喉の奥から發せられた。

源八郎が刀を振り下ろした。だが、手元が狂つた。龍五郎が刀を振り下ろした。だが、手元が狂つた。龍五郎

五郎の右膝に切りつけ、その場に座り込んでしまった。

「源八。しつかり斬れ」

源八郎は、立てない。前髪が乱れ、額から汗が吹き出で、喘いでいる。

立会っていた朽原が、秀二郎に代るよう命じた。

秀三郎は、龍五郎が、首を差し伸べるのを待つて刀を振り下ろした。首は、前に落ち、体がうつ伏せとなつた。鮮血が飛び散り、凄惨な光景が蠟燭の光の中に写し出されている。

遺骸は棺に納められ、彰義隊士の手によって医王寺で通夜が行われた。

翌朝、棺は、村人に担がれ、首桶は横山伊三郎が抱いて沢水加のりゆうの元に届けられた。

りゆうは、涙も見せず、首桶のふたを外し、物言わぬ夫の顔をじっと見詰め、ぼつりと呟いた。

「立派でしたね、あなた。よく大谷内家の名譽を守つてくれました。武士としての誇りに満ちたあなたの顔は、

とても満足そうに見えますよ。あなたが大谷内家の婿となつて、短い間でしたけれど、とても幸せでした」

りゆうは、夫が家を出る時に、永の別れになることを察知して、取り乱さないよう心の準備をしていたのである。

旧彰義隊士や村人たちに囲まれ、りゆうは、首桶を近くの宗源寺まで運び、棺と共に埋葬した。

小説 家康と廻狂いの右近

—遠州菊川の義人 中条右近太夫物語—（4）

堀 内 永 人

（四）
武田信玄没後の天正二年（一五七四）五月、甲斐の国

主になつた武田勝頼は、二万五千人の軍團を率いて、猛将小笠原長忠が守る徳川家康の東の拠点、遠州高天神城に攻撃を開始した。

この戦いが、第一次高天神城の戦いである。

高天神城は、中条右近が住む領田村の西方約四糠、城東郡土方村（現静岡県掛川市土方）にあり、標高百三十メートル、

「高天神城を制する者は、遠州を制する」

と言われた要衝の地で、標高二六五メートルの小笠山山塊の東南に延びた高天神山の険しい地形を、上手に利用して築城された山城である。

この城は、山の東の峰に本丸を築き、西の峰に西の丸を配置した二つの城により成り立ち、周囲を土塁、堀切、空堀で囲まれて、かつて信玄が、大軍をもってしても落

とせなかつた、難攻不落の要害であつた。

（高天神城は、昭和五〇年（一九七五）に国

の史跡に指定されている）

さしもの高天神城も、今度は武田軍の精銳による猛攻撃を受け、ピンチとなつた。

城主の小笠原長忠は、城下にひしめく武田軍の幟旗を見て、家康の援軍を一日千秋の想いで待ち望んだ。

しかし家康は、単独では援軍を送るだけの戦力はなかつた。小笠原長忠から再三使いを受けた家康は、手勢五千を高天神城に送ると同時に、織田信長に救援を要請した。

家康から救援の要請を受けた織田信長は、三万の兵を救援に差し向かたが、織田軍の精銳が遠州に到着する前の天正二年（一五七四）六月三日に、武田軍の猛攻撃が始まつた。

武田軍は、まず始めに西の丸を取り囲み、鉢や太鼓、

静岡から帰つた中條景昭は、この仇討ち事件を聞いて激怒した。関係した開墾方隊士を閉門に処し、一カ年の外出禁止令を出した。

上野、斎藤は、士族の資格を取り上げられ、牧之原から追放された。

景昭、高重の計らいで、藤枝の旧田中藩勤番士川島仙五郎の十七歳の息子を迎え、大谷内家の家名は、存続されだ。りゆうは、五扶持を与えられたが、明治四年二月牧之原を去つた。その後の消息は、杳として知れない。

昭和二十六年、切腹から八〇年目、初倉村が島田市に合併された時、最後の村長萬科直次郎氏を中心とする有志が、宗源寺の了承を得て、大谷内龍五郎の遺骨を医王寺に分骨し、墓標を立てた。

その際運んだ舍利塔の中には、変色はしていたが、龜がそのまま残つていたという。

さらにその二十年後、昭和四十九年の秋、「牧之原開拓幕臣子孫の会」発足を記念して、医王寺に大きな石造りの墓碑が建立された。今も香華が手向けられている。

（つづく）

法螺貝を打ち鳴らし、百雷が一度に落ちたような、地鳴りにも似た闇の声を上げて徳川軍に躍りかかつた。

一方、城を守る小笠原長忠以下の城兵は、鮫波のようないひるむことなく、天然の要害を利用して設けた、搦め手門や切割を、巧みに使つて次々にこれを撃退した。

しかし、いかに徳川軍が精銳で、地の利を得ているとはいえ、二千余の城兵では、十倍の武田軍の猛攻撃を支えきれる訳がなかつた。

まず初めに、高天神城の西の丸が落城、ついで六月十七日、城中から、城主の一族小笠原氏助なる武将が武田軍へ寝返り、ついに本丸が孤立した。そしてその翌日の六月十八日、守りに易く、攻めるに難い天然の要害高天神城も、城内の反乱により落城してしまつた。

このとき、城主小笠原長忠以下の城兵は、すべて武田の軍門に下つたが、軍監（副城主）の大河内源二郎は、ただ一人降伏しなかつた。それを聞いた勝頼は、「なに、大河内が降伏しないと……」小癪な、それなら殺してしまえ。いやまたまで、大河内を身動きできないような狭い石牢に閉じ込めて、死に勝る苦痛を与えてやれ……

と言つて、腰を屈めなければ立つていられないほど天井の低い、狭い石牢に幽閉したのである。

幸いにも、嶺田村は、高天神城から少し離れていたので、直ぐには武田の雑兵は襲つてこなかつた。だが、嶺田村が武田の兵に襲われるのは、時間の問題と思われた。

中条右近の祖父、田代嘉蔵は、武田軍の悪事が、日々エスカレートしていく状況を心配し、高天神城の責任者に直訴して、ゆるんだ武田軍の軍律を厳しくしてもらうように陳情したいと思い、その機会を待つていた。

そんなある日、嘉蔵は、娘のよしと孫の右近に、手中に収めて、士気が盛んであるが、この勢いがいつまで続くか分からぬ。通常、戦争をするには、三つの条件が備わらなければ駄目だといわれている。

三つの条件とは、天の時、地の利、人の和である。仮に天の時、地の利が備わつても、人の和がととのわなければ駄目だといわれている。

「二人とも聞くがよい……」武田勝頼様は、高天神城を手中に收めて、士気が盛んであるが、この勢いがいつまでも続くか分からぬ。通常、戦争をするには、三つの条件が備わらなければ駄目だといわれている。

「いか、人の和は、平和の礎である。人の和がととのわなければ駄目だといわれている。

それから七年間の間、大河内はこの石牢に閉じこめられたが、最後まで降伏せず、節を全うした。

それからすこと後のことになるが、大河内は、家康が高天神城を奪回して救出されるが、丸七年間も劣悪な石牢に幽閉されたため、足が不自由となり、満足に歩行できなくなってしまった。家康は、大河内救出後にその功を賞して過分の恩賞を与え、かつ、美濃国津島の温泉にて療養させるなどして労をねぎらつた。

その後大河内は、家康の恩情に報いるため、天正十二年（一五八四）三月、家康が秀吉と争つた小牧、長久手の戦いで大いに活躍し、討死した。

（この大河内の忠節は、第一次高天神城の戦いから四年後の天正六年（一五七八）六月、織田信長に反抗した荒木宗重を説得に赴いた羽柴（豊臣）秀吉の軍師、黒田官兵衛が、反対に荒木に捕えられ、狭い牢に閉じ込められ、一年後に救出されたときには、片方の膝が曲がつたまま、伸びなくなつてしまつた史実と同じである）

この時、二十九歳の武田勝頼は、第一次高天神城の戦いに勝つて有頂天になつた。勝頼は、父の信玄が落とせなかつた高天神城を、短期間で落城させたので、家臣たちを前に、「父上が攻めあぐんだ高天神城を、オレは二ヶ月足らずで攻め落とした。これで、織田も北条もオレの力を見直すだろう……」

れば勝機はなかなか生まれない。武田の兵どもの行いをよく見なさい。城の周りの村々を襲つては、穀物を略奪したり暴行を働いている。

武田軍の兵どもが、こんな悪事をやつていれば、住民は誰一人として、武田勝頼様に心から従おうとはしない。やがて住民から奪うものがなくなると、次は味方同士が手柄を競つて奪い合うようになる。そうなれば士気は衰え、人の和が乱れ、武田軍は内部から城の守りが崩れて自滅する。この人の和が保てるかどうかが、戦争には大切である。わかるかな

「ハイ、悪事を重ねて人の和が乱れると、お城は自然に滅びるということですね」

よしと右近は、かわるがわる答えた。

「そうだ、天が武田軍を見放す時が必ずやつてくる。高天神城は、現在、城を拡張し、武器を集めて守りを堅固している。だがな……、城下周辺の住民が、武田軍の悪事に愛想が尽き、ひそかに徳川様にお味方するようになれば、城はたちまち孤立し、やがて落城するだろう。天の時、地の利が、人の和にかなわない証拠である」

嘉蔵は、そこまで話すと白湯をすりながら、右近の澄んだ瞳をジッと見た。

（どうやら右近も、わたしの話が理解できたようだな）

嘉蔵は、満足気に頷くと、さらに言葉を続けた。

「よいか、人の和は、平和の礎である。人の和がととのわなければ駄目だといわれている」

えは、社会の秩序が保たれ、平和が守られる。人の和には、思いやり、愛情が必要なのじや。思いやりは、人のためになることをするという心掛けのことで、仁徳（道徳）の柱となる行いである。

愛情とは、自分や家族のことを考えることだけではなく、村の人を始め、国全体の人のためになることを考えることじや。右近よ、難しかろうが、よく学んで、人の和、すなわち、世間の人たちとの和を第一とし、世のため、人のために尽くすのだ。よいな……

「ハイ……」

「それから、領主を始め、政治を執る者は、領民を慈しむために、どのような戦争であつても、田植えや稻刈りなど、農事が忙しい時期（農繁期）は避けなければならぬ。」

魚でも鳥でも繁殖期に獲ってしまえば、絶滅するが、繁殖期を避けて漁をしていれば、海や川には魚貝類が、野や山には鳥や獸が満ち溢れるようになる。そうなれば人びとは食べるものに不自由することはない。

戦争のために、農繁期に兵を狩り出せば、耕作する人手がなくなり、米や麦が作れなくなる。それでは折角、

戦争に勝つても、自分たちの領国が不作となり、生活ができなくなる。それでは戦争をする意味がない。

武田軍は、農繁期であつてもかまわずに戦争をしてい

るが、領国では米を作る人がなくて、やがて行き詰まる

時がくるだろう

「お米を作れなくなれば、どうなりますか……」

右近も、子供心に荒れはてた田畠のことが、気になるのであった。

「お前は幼いから、じじの話は難しかろうが、

もう少し聞くがよい。昔から、國を護るのは、城を堅固

たり、武器を整えたりすることよりも、領民を慈しむ政

治の方が大切だといわれている。

領民を慈しむ政治とは、領民の幸せを考えくださる情け深いご領主さまのなさる政治で、ご領主さまが、この仁徳を第一とすれば、領民は安心して暮らせるようになる。そして月日が経てば、この仁徳にもとづく政治が、旅人の口から口に伝わり、やがて天下に知られるようになるだろう。そうなれば、他国の住民が、仁徳の政治を慕つてこちらに移り住み、国は自然に栄えてくるものだ」と、仁徳の政治の大切さを教えた。すると右近は、

「おじじさま、領民のことを考えない乱暴な武田軍に、お味方する農民はおりませんね。……」

とやや興奮気味に、嘉蔵に問うた。

「そうだ、右近の言うように、嶺田村はもちろん、どの村でもそうだが、表向きは武田の兵の言うことを聞いていても、心の底から武田に味方する者などいないであろう。武田の兵が、正義の道を踏みにじり、理不尽を行ひを続けていれば、やがてそのことが世間に知れ渡り、世

の人びとは食べるものに不自由することはない」

と答えた。すると右近は、

「おじじさま、乱暴な武田軍は、やがて徳川さまに負けてしまうのですね……」

と子供ながらも、いつの日か、武田軍の悪行に天罰が下るであろうことを願うのであつた。

「滅多なことは言えないが、そななるだろうな。武田軍が、高天神城の周辺の農村を、自分たちの欲望を満たすために乱暴ばかりしていれば、やがてそのことが、自國の甲斐国に伝わり、領民の心が武田のご領主勝頼様から離れて、武田家は自然に滅亡の道をたどるだろうよ。

善い政治とは、領民を慈しむことである。このように領民を慈しみ、思いやる心が人の道であり、人間ならば誰でも、常に身につけていなければならない人の徳である。忘れるなよ……」

「ハイ、おじじさま。右近は、他人と争つたり、弱い者いじめや、困っている人を苦しめたりいたしません。思いやりの心も忘れません」

と誓うのであつた。

やがて高天神城を我がものとした武田軍は略奪暴行の範囲を次第に広げ、嶺田村にも武田の雑兵が、姿を見せ始めた。

嘉蔵は、武田の兵の姿を見かけると、家康にゆかりのあるよしと右近に、危害が加えられることを心配して、

時がくるだろう

「お前は幼いから、じじの話は難しかろうが、

もう少し聞くがよい。昔から、國を護るのは、城を堅固

たり、武器を整えたりすることよりも、領民を慈しむ政

治の方が大切だといわれている。

嘉蔵は、武田軍の槍奉行山崎越後を、年は若いが教養人で、ひとかどの武士であると見抜いていた。越後も、嘉蔵を学識豊かな地域の指導者であると見ていた。

越後は、嘉蔵に向かつて、

「これはお武家さま、私めのことをよくぞ存じてござりますな……、でもそのことは大昔のこと、今はただの百姓でございます。ただ少しばかり書物を読みますので、子供たちの手習いを手伝つてはいるだけでして……」

と、山崎越後の礼儀正しい挨拶を受けて、嘉蔵は戸惑いながら、謙虚に答えた。

嘉蔵は、武田軍の槍奉行山崎越後を、年は若いが教養人で、ひとかどの武士であると見抜いていた。越後も、嘉蔵を学識豊かな地域の指導者であると見ていた。

「田代殿、貴殿はなかなかの人物とお見受けした。ぜひ私にも仁政のなんたるかを、ご教授願いたい」と申し出たのである。

そう言われても、嘉蔵から見れば、山崎越後は武田軍の武将である。徳川にゆかりのある嘉蔵としては、山崎越後と付き合うにも限界がある。若い越後が、嘉蔵に礼を尽くして教えを頼んでも、支配者と被支配者の関係はなくなるものではない。嘉蔵は、その点をわきまえて、あえて越後と親しい関係をつくらなかつた。しかし嘉蔵は、越後の心が清くて私欲のない人柄に接して、もいる。山崎様は、お若いが、物静かで澄んだきれいな瞳をしていなさる。

人物の善し悪しを見分けるには、瞳を見るのがよい。瞳は心の鏡といわれるよう、その人の心がそのまま瞳に現れる。心の正しい人の瞳は、澄んで美しい。心の悪い人の瞳は、曇つていて輝きがない。だから話をするとときは、その人の瞳をよく見れば、自然にその人柄の善し悪しがわかつてくる

そう言うと、かしこい右近は、

「それではおじさま、山崎さまは、善い人だから、きれいな瞳をしているのですね」と、子供ながらも山崎越後の人事に、好意を抱くので

あつた。

「そうだ、そのとおりだ。右近よ、お前も山崎様のように、成人のあかつには、人を思いやる仁の心、人を敬う礼の心をもち、義の大道を守り、いかなる富を見ても心がゆらぐことなく、いかに貧しくとも悪の道に迷い入ることなく、いかなる威力にも屈せず、立てた志を柱げることのない丈夫になり、善惡を見分ける是非の心を磨くのだ。そして、人のため、お国のために尽くすのだ」と論し、右近の将来に期待を寄せるのであつた。

しかし、人は食べ物や、それを買うお金がなければ生活ができない。だから人は、善の心を持つと同時に、利を求める心も併せ持つものである。

普通の人は、きまつた職業や収入がなければ、いつも道徳心をもち続けられない。もしこの道義心がなくなると、わがまま、ぜいたくで、邪悪な人間になってしまふ。だから、しつかり働いて、困っている人に、恵むように心がけることも大事である」と諭し、さらに嘉蔵は、

「いかなるときであつても、人の上に立つ者は、第一に他人のためを思ひ、それから自分のことを考えるようになければ駄目だ。右近も、自分を犠牲にしても、他人の利益になることを考えなさい」と、自他両全の道を教えるのであつた。

（うん、そうか……、自分のことより、他人のことを先

にするのか……、でも難しいことだな。自分は食べないで、他人に食べさせることなんてできるのかな？ おなかが空いて困るな……）

「他人のために尽くせば、必ずその徳が自分にも返ってくる。多くの人と同じような付き合いは、お互いの利益を、相手と交わし合うことにより実現できるのである。心配せずともよい……」

「ふーん……」

かしこい右近も、ちょっと理解が難しかつた。

「よいよい。あせらずともよい、そのうちに解つてくる。誠を貫いていれば、天下に感動させられないものはない。その反対で、嘘いつわりでは、人を感動させることはできないものだ」

と諭した。

「ハイ、おじじさまのお話が解るように、よく勉強いたします」

右近は、真剣なまなざしで答えるのであつた。

こうして、右近の英才教育が行われていた。この頃、中条右近少年が住む嶺田村を始め、高天神城周辺の村々は、気まぐれな武田軍の雑兵による掠奪暴行によつて、大きな被害を受けて苦しんでいた。そのため、住民たちは、数年前まで善政を施していた徳川家康の治世を望んで、その反撃を期待していた。

これまでの徳川家康は、三方ヶ原の戦いに続いて、第一次高天神城の戦いでも武田軍に敗れ、勝利の女神に見放されたかたちであつたが、居城浜松城において戦力を養いながら、高天神城の奪回の機会を狙つていた。

第一次高天神城の戦いがあつた翌年の天正三年（一五七五）五月、武田勝頼は、高天神城を攻略した勢いに乗つて、織田徳川連合軍に奪われた三河の長篠城を、再度奪回するため三河に軍を進め、長篠城の攻撃を開始したのである。

一方、武田軍を迎え撃つ徳川家康の軍勢は、勝頼の予想と違つて、三年前の三方ヶ原の戦いの時より一段と戦力が増強されており、さらに鉄砲組で武装された信長軍と組んだ織田徳川連合軍の反撃により、武田軍はあつくな敗退してしまつた。

この長篠城の戦いを境に、武田軍は、三河から後退せざるを得なかつた。だが、信玄が鍛えた当代最強と言われた武田の騎馬軍団の戦闘力は、勝頼の時代になつてもなかなか侮れず、家康の高天神城の奪還は、容易に実現しなかつた。

家康にしてみれば、高天神城を奪い返さなければ、遠州を完全に支配したとは言い難く、高天神城に居座る武田軍は、丁度、喉に銳く突き刺さつた鯛の骨のように、手ごわく、かつ、邪魔な存在であつた。 つづく

俳句 紅葉

勝山道子

初曆めくりて一瞬夢さえぬ

新雪に野梅の花辨抱かれて

咲く桜またずに友は絶えたりと

散る桜役を終えたる君の肩

卒業の孫は袴でブーツなり

盆めぐり夫を想ひて香の中

老いて知るつめたき風や夏木立

田植するジャワには秋は来ぬと云う

若鮎の化粧塩濃き山の宿

燈りつけ家族揃ひの終戦日

敗戦忌焼野原に夕日落つ

裸取るたゞそれ丈の夏座敷

わら灰がそのまゝなりや瀬戸火鉢

桐火鉢祖父が撫でたる想ひあり

入湯を済ませば空は寒の月

水墨は光と影で冬景色

病みし手で硯洗いて氣を納め

ぬれぬれの重たき昆布宗谷船

わが父と語りそれは漱石忌(十一月九日)

あわき灯が木の葉にかくれし螢かな

環境は螢とびかう里の田に

そばの花山ひだ白く染め分けて

まい茸は一つ根かごをもり上げる

寫経すみ語ること多し木の葉髪

主不在秩父の寺に紅葉散る

紅葉も色とりどりに山下る

藤村の懷古園道草紅葉

秋桜ローカル駅の先々に

短歌 三十首

曾根竣作

未だ総括し得ず

夕かげる径の傍への路面鏡に黒き人群れそそくさと往く

岨道をさまよふ春の黄蝶追ふななかまど彩づくきりぎしの上

闇に近く突然大き声聞けり噂さにならぬていどを保ち

立ち迷ふ身ばしづめん真白なる牡丹かめに夜をくだちたり

機智あらば笑ふことさへ出来るのに黙つて頬を引き吊らせをり

割り切れぬ パイを思へり終戦まぎは特攻死せし学友Y君

知覧とふ地名寂しもここを発ちし千数百の還らざる魂

何冊か本に当れど特攻を総括したるは一冊もなし

池塘なる山茱萸の花いろづきて黄にふくらめり夏先がけて

水面に山茱萸の芽をうつしつつ早や麦秋のたそがれせまる

花影

徘徊する桜の樹下に吹かれゐて疾みつつ春をくわもなくに過ぎん

遅咲きのさくら大樹は昨年と似て枝にびつしり綿密なりき

いまひとつ手に取る如きさくらばな繚乱として目前にあり

うす紅にいろづきここに万朶なる桜咲く日をこころ待ちする

七日まり早く開きしこの花を余情となして散りゆくを待つ

十年に一度と言はん花冷えの夕べひとりの花見するかな

思はざりき桜充つる日わが乗りし機影にらんるの旗をかかげん
化野の白くかすみて対話なきかの夜ざくらの戦ぎやまざり

靖国の花つのぐみて戎衣なる有爲かなしむ平成の世に

様々にさきやきかはすさくら樹の年々歳々人同じからず

大 団 円

切れ味のなくなりたるを肯ひて日詠みを誌す夏の日記に
久に逢ひし歌友の作品うべなへず雨滴流るる窓を見てをり
曼珠沙華燃え立つかたへ波しぶくかつて栄えし艇庫のあと地
得体の知れぬジュース売りつつ雜踏にトルコの男鬚をふるはす

たたかひの日々に「祖国」はありましたいま形なき白きマシユマロ

猫の餌ゑの小鉢に夕日片かげり強弱二匹の野良が寄り来る

棲みつきて雌雄を分かぬ野良ふたつバンパーの上けふも昼寝す

長雨にこもれば厨にボルシチの匂ひてわれら平均値の倍

崖上ゆ自己陶酔を投げうたん夏の灯下に青蛾はばたく

意外にも大団円の呆氣あつけなし夜長にふけるスパイ小説

わが愛誦歌（十一）

——昭和から平成へ——

曾根竣作

○澄む音に一石置けばゆらゆらとゆらぎ定まる樞の基盤に

来嶋 靖生

『葉』(平・16) 所收。囲碁の対局シーンの緊張感を現した一首である。囲碁や将棋を題材にした歌は、数える程少いが、これは初句の出はじめから結句まで、見事に詠い止めていると言つても過言ではない。

来嶋靖生は、文語定型を遵守し、意匠をきらい調べを重視する正統派である。短歌史・歌壇史の該博な知識は、多くの著作によつて知られているが、しかしそのことが作品になまに反映することもない。やわらかな姿勢にもかかわらず、右顧左眄しない精神が貫かれていることは注目すべきところであろう。

登山を好み、その体験を生かした作品も話題になつた。山頂近くで心筋梗塞の発作をおこし、ヘリコプターによ

つて救出され、あやうく一命をとりとめたことがある。
その時の歌、「下山は無理よ。動かないで。こんなところで死なないで」と妻とあり、今までの作者にはほとんどない会話を挟んだ作品からリアルな緊迫感が伝わってくる。その折の歌に「山頂に残れるはわれら一人のみ冷え冷え迫る夕ベ西風」「いまははや暮るのみなる山頂に横たはり聞くわれとわが息」などがある。

また、平成十五年に上梓した歌集『暁』に「事故ありてニューヨークに原爆炸裂す不機嫌なる日のわが白昼夢」があるが、これはニューヨークのツインタワー・ビルにつつ込んだ九・一一事件より以前に作られて居り、何か作者に予言めいたものさえ感ずるのである。来嶋靖生にどこか吹っ切れたところが生れてきているのかも知れない。

○他の佳詠としては、〈聴きをれば時にひらめく象ありソナタの中に一身ひたす〉(たとふれば葉裏の闇にひそみゐるわがつつしみて覚るべき真)〈行き暮れてなほわが越えむ峠あり風吹きあげてこの身は竦む〉(石走る激ちならねど滴々の真清水をわが韻律とせむ)等がある。

○ゆふぐれは肩の辺に来て、水打てば水の重さに萩しなひたり

藤井 常世

『夜半樂』(平・18) 所收。綺麗な歌だ。古典のなかの光景のようにも見える。まず「肩の辺」にゆふぐれが来る(ゆふぐれがひらがな表記であることも注意)。水の重さに萩がしなう。大和絵のような雰囲気がそこで生れて、このやわらかなタッチは和歌といつても通用すると思われる。

藤井常世は、幼い頃から環境に恵まれて育つてゐる。折口信夫門下の国史学者、藤井貞文の子として生まれ、折口に「常世」名を与えられるという恵まれた出自である。

古都奈良を據点とし、国学院大学出身、若い頃より短歌研究会に所属し、先輩に岸上大作、西村尚、高瀬隆利、沢口英美などがいる。また学生時代から能に親しみ、日本舞にも造詣が深いがとりわけ日舞の方はかなりのレベルだと聞いてゐる。

このような経歴を見ていると、古典を身体ごと享受できた身回りだったことがよくわかる。日常性に身をおく作品よりも、四季の移り変わり、草木や折々の花々に添つた作品が多いのも当然であろう。

〈たましひに量測られてゆふぐれの町のいづこも木犀にほふ〉〈冬晴れのこころ研ぐべし歌びとは群れざるべし野の大櫻〉(嘆くことありてこの世に離れたきその直面を雨濡らしをり)。直面は、能で面を用いず、素顔のままのことを言ふ。

作者は、俗事はほとんど歌わない。社会の変容や、家族もあり対象にならない。純粹へ、より鮮やかな短歌へ、意味や主張よりも韻律や風景が選ばれる。従つて、現代短歌の雑然たる動向には極めて懷疑的とも思れる。もしかして古典和歌に近いのかも知れない。へいましづかに夕日がしづむ鳥よりも風よりもとほき旅をしてきて(潜水艦浮上おそるしづけさに苔むすやうな真鯉浮き来る)。作歌の周辺は、常静かであるところに藤井常世の美学があるのであろう。

○溪流にビール冷やせばレッテルの剥げて青春無聊の日々よ

福島 泰樹

『朔太郎、感傷』(平・12) 所收。痛快な作品である。情景はよく見える。このビールはいうまでもなく瓶であり、ラベルが張つてある。それがふやけてはがれそうに

なっている。それと過ぎ去った青春が重なつてくると詠む。「無聊の日々」とするところが福島調なのであろう。

福島泰樹の作品の特色のひとつとして、間投助詞の「よ」が実際に多いことであろう。もちろん、終助詞の命令・禁止・願望などのニュアンスもないわけではないが、多くは嘆の意と、呼びかけの意と、相手に念押しし、確かめる意味がこめられている。

また「よ」が頻出することは、おそらく彼が長年続けている絶叫コンサートとも関係するのであろう。筆者は、絶叫コンサートなるものを見聞いたことはないが、つまり「よ」は音楽にのりやすいし、絶叫の終り方として響きがいいし聴衆に分りやすくなるのだろう。

（相次いで逝きたる友の名を呼ぶにミラノは霧よ泣きながらゆく）敗北の涙ちぎれて然れども凜々しき旗をはためかさんよ（へしろがねの夢よ、乳房よ、白桃よ、わが渺茫の山河をゆくに）などがあるが、絶叫コンサートの短歌朗誦は、のちにピアノ、ドラム・パークッシュショソ、尺八の奏者と組んで全国的なステージ活動へ広がる。中々歯切れの良い作品が見られるが、どつちかと言うとデカダンスの匂いがしないでもないが、またそこが魅力でもある。

（太陽に酔いしばかりにアルチュール・ランボー日傘おれの不条理）（フレデリック・ショパンよ俺のボーランドよ旗は汚れて水びたしなる）切なさや、漣のよう

に襞をなし押し寄せてくる憶い出なるよ）。

福島泰樹の本業は僧侶である。いわば彼岸此岸の架け橋の役目も果たさねばならない。（中也死に京都寺町今出川　スペイン式の窓に風吹く）。思い入れの深い文学者や詩人の死を悼む数首がある。

○ゆふまぐれ二階へ上る文色なきところを若しかして雁わたる

【珊瑚数珠】（昭・32）所收。「文色」は模様のことである。森岡貞香の歌の特徴がよく出た一首である。まず、

夕ぐれに自宅の一階へ上つてゆく、その階段の途中と見てもよいだろう。二階へ上るという行為が大事なのであって、それから何をするかということとか、二階へゆく目的とか、それはどうでもよい。その途中で、空の一隅を雁が渡つて行くのを聴いた。しかも昼とも夜ともつかないほんやりとした境を渡るのである。

歌意をたどれば以上の様であるが、そんな解釈よりも、「二階」「文色なきところ」「若しかして」と来て、突如「雁」と言はれる意外性を楽しみたい。

一般に飛躍のある表現は、難解の部類に分類されることが多いが、その意外なものとの配合を楽しむつもりなら、少しも難解ではない。この一首も、著名歌として通つてている。外に、（みちのくに雲集るひと夜泊てしまわれ口中に鯉のにはひす）のごとく、「雲集る」という

天空のありさまと、口中の嗅覚的存在としての鯉はかけ離れているが、それを見事に結びつけている作品もある。

森岡貞香は、昭和二十六年、前年に復員した夫が急逝し、幼い息子との戦後の生活、自らの手術など、せつぱつまつた状況の中で第一歌集「白蛾」が出版され、注目された。

すでに境涯詠にとどまらない実存的な感覚、独自の文體が見られるが、身辺のささやかなことを歌いつつ、時に破調も交へながらも不思議な奥行きを見せる。

（行間にすきまもあらず赤えんぴつに書きこみてありき作戦要務令）（蒼白き馬を見し者居りしならん濠をうづめし街ゆきながら）（昼ふけて人さまざまにある車中われは珊瑚の数珠をたづさふ）へをみな古りて自在の感は夜のそらの藍青に手のびて嗟くかな）。

作者は、あく迄戦中派、夫は陸軍の将校であり、死別後生涯ひとり身を通して、平成二十年没す。

○科学者も科学もひとをほろぼさぬ十九世紀をわが嘲笑す

坂井 修一

【ラビュリントスの日々】（昭・61）所收。坂井修一の風貌にふさわしい堂々たる一首である。東大を卒業し、マサチュー・セツツ工科大学留学を経て、現在東大教授を勤める。

「科学者も科学も人をほろぼさぬ世紀」とはつまり、

「科学者が科学が人をほろぼす（だろう）二十世紀」と同義であろう。そして人類を滅すこともできぬ十九世を嘲笑すると、作者は言う。いかにも不遜な物言いであるが、この壮大な逆説こそ、先端的な科学者である作者の逃れがたい傷みが込められていると思われる。

情報科学にかかるサイエンティストとして、東大教授の任にあるという坂井修一の認識はその地点から発せられている。

三十一音といううちまちました世界に住む歌人には、考えられない領域であるが、地球規模のスケールの大きな作品や、世界対日本といった問題意識のうえでの作品が、すくなくないのはその背景があるのであろう。

また、（神いくつ和せずながらふアメリカよわれはうやまふ悲しみながら）と詠む。留学経験より見たアメリカ、多くの人々が混在している移民国家アメリカ、そのなかでの争いも少なくない。しかも、その結果としての戦争、そういうもろもろの問題をもつ国アメリカを「悲しみながら」敬うというのである。そこには坂井修一の専門領域からくるモチーフがある。

然しながら、歌はむつかしく難解の領域を出ず、フィーリングで受取る外ないような場合も少くない。（摩天樓ひかりの脚があらはれてわれはソドムの大路をわたる）（うちで鶴鶴あをし草深野一万人の博士散歩す）（二つ三つかみそりの傷ほの紅きわれはしづかな破戒憎

なりく人類の加速度を空は肩はずさらさらと蜻蛉浮べ
て暮れぬ〈関八州悪党となり駆けめぐる 科学とはい
はばさういふこと〉。

○生みたがらぬ若者ら群れ死にたがらぬ老い人の殖ゆ虛
空みつ大和

『はらりさん』(平・15)所收。現代社会を皮肉なタ
ッチでえぐた一首。大和にかかる「そらみつ」といふ
枕詞を結句に据えているが、空を「虚空」と表記する。
山埜井喜美枝は、どちらかと言うと遅咲きの歌人であ
る。洒脱な雰囲気、軽々と紡ぎだすことばのあっせんの
巧さに加えて、都会的なセンスとリズムが感じられる。

万葉集などの古典から、西欧文学までの豊かなバック
グランドがその背景にあるのであらう。しかし歌集『は
らりさん』で、詩歌文学館賞を受けたのは、平成十五年
でだい分遅咲きのきらいがあるが、はじめて山埜井喜美
枝が全国区になったのである。

経歴をみると近藤芳美に師事とあるが、その詠風から
見てだれしもが、かなりのミスマッチを感じるのである。
第一歌集『やぶれがさ』の序文で、近藤芳美は「この作
者もまた大陸からの引揚者だという」(山埜井喜美枝は
中国の旅順生れ、敗戦後に母親の故郷である大分県に帰
る)と書いている。近藤自身も朝鮮半島の引揚者なので、
現代ではなかなか分からぬ氣分がどこかで通底してい

たのかも知れない。
歯切れが良く、口調のやわらかさによって、内側にあ
る批評性はうすめられているが、じつは辛らつな思いが
秘められている。

〈海の辺の此處も仮棲み還るべき海彼の陸はいま花の
季〉〈われありし日も忘れ果てうらうらと老いゆく夫か
想ひはかなむ〉〈女ををしくをとこ女女しくありていま
天下太平天下騒乱〉〈うべなうべな男のごとくからがろ
と口割るまいぞ熟るる郁子の実〉〈鳩鳥の青江三奈死
す池袋伊勢佐木町 昭和のわるも老いたり〉。鳩鳥はか
わせみの古称。

参考文献

- 現代歌人二五〇人(牧羊社)
- 現代名歌観賞事典(桜楓社)
- 現代百人一首(朝日文芸文庫)
- 現代短歌の観賞事典(東京堂出版)
- 現代の歌人140(新書館)

短 歌

行 雲 流 水 (二十八)

石 黒 修 身

海外近詠(一〇一〇年三月)

コート・ダジュール

憧れしコート・ダジュール紺碧の美しき海岸果てなく続く

ひとたびは訪ねたらんと憧れしモナコの地を踏み心昂ぶる

モナコでの日の出を見たり光芒はコバルトブルーに海を照せり

グランプリFワン走るヘアピンのカーブはホテルの真下にありき 美しき「グレイスケリー」の王妃たりしモニュメントいくつモナコで見たり

欲望と失望渦巻くカジノでは熱氣の裡に虚無が漂う

本マグロ捕獲禁止は否決とのニュースを聞けりモナコの宿で

モナコでの名物と謂う王室の御用達なるチョコレート買う

大公のおわす宮殿壯麗で衛兵交代儀式恭し

Fワンとカジノに頼り安泰なこの王国を羨^{ども}しと思う

ニースではシャガールの美術館見き“聖書の世界”に吾は感えり

ルノアール晩年過せし館^{やかた}ではその安穩な生活偲ばる

ヴァンスではマチス造れるロザリオの教会に懸かる壁画に魅入る

リビエラ海岸

そのかみは小さき漁村の「ポルトフィーノ」いま景勝でリゾート榮ゆ

巡りたるリビエラ海岸美しき小さき邑は珠玉の如し

ヴェネツィア

海洋の都市国家たる盛衰を語る史跡をヴェネツィアで見き

交易と海賊の名残いまいづこヴェネツィアの海は穏やかに凧ぐ

サラセントアドリア海で戦ってこの国守りし海の民はも

海面に浮ぶが如きこの都市は陸なく樹なく運河が巡る

海中に木材埋める工法でこの都市造りし巧みを称えん

「ダニエリ」とう由緒あるらしホテルにてサンマルコ広場に繁く通えり
「サンマルコ」カフェテラスで樂を聴く「旅情」のシーンが彷彿として

ゴントラは狭き運河を揺られ行き舳先で樂士カンツオーネ唄う

ヴェネツィアに美しき島あまたありそれぞれ旧き歴史をもてり

ヴェネツィアの沖遙かなる「ブラノ島」伝統つたえの刺繡いま人気なり

実朝・西行

実朝の悲業の最期秘めしまま大銀杏倒る八世紀経て

実朝の最期を知れる大銀杏そを秘めしまま朽ちて倒れり

桜花盛る季節になれば西行のちなみし歌をしみじみ唱うとな

西行が歌に願いしその最期釈迦入滅の桜咲く頃にゆうめつ

「春死なん」桜の頃は西行の言靈胸に旅に出でたし

日常

桜散り櫻の若葉萌ゆる頃楚楚と咲き初む花水木愛ず

日足伸び薄暮せまるるこの刻を春宵と言うか狭庭に佇ちて

神いますアクロポリスを仰ぎみるアテネは日下争乱の渦

美しき神話の国を襲いたる財政破綻に驚ろかされぬ

喜寿を言い金婚を称え祝^はぎたれど残生いくばく計りがたくて

怒れども安穩の^(のぞみ)希求先立ちて心の滾り萎えゆくは老いか

攻めはせず受身にあれど留らず七十七才まだ迷いあり

ひたひたと侵しくる波中国の東シナ海ゲオボリティク

「はやぶさ」はJAXAの子にて七年の旅から還る使命果して

良きことがふたつ続きぬ「はやぶさ」と「サッカー一勝」話題は弾む

王朝和歌集とその周辺（二）

—西行法師を考える—

石 黒 修 身

（一）はじめに

筆者は、本誌一一六号において、「王朝和歌集とその周辺（二）」で源実朝について述べ、その中で西行に敷衍し、次の機会での論述を告げた。

西行については、その家集等の他に解説書が多数あり、また関連する評論、歌論は枚挙にいとまがない。筆者は、王朝和歌の周辺に居た歌人として西行の人物像や作品の背景につき、かねてから興味と関心を抱いていた。そして、昨今世間で西行に関心を持つ人々が増えていると聞く。「今なぜ西行か」を自からに問い合わせ乍ら筆者なりの西行観をこの小論にまとめてみた。

詠歌は出家以前から嗜んでいたが、出家して以降益々没入するようになり、次第に歌人として著名になつた。そして在俗時に形成された人間関係を中心とした、また次に記述するように王朝歌人達とも密接な交流があつた。

（二）西行の生涯

(三) 王朝歌壇との関係（時代的位置付け）

当時の王朝歌人の代表とされる藤原定家は、一一六一年生まれで、西行との年令差は二十八才若い。定家により新古今和歌集が選進されたのは、西行の没後十五年であり、彼の入集歌は九十四首で第一位であった。

西行は、最晩年に自からの生涯の詠草から撰んだ歌を結番し、一部の自歌合を編み、伊勢の内宮と外宮に奉御しようとした。「御裳灌河歌合」と「宮河歌合」である。前者の判を藤原俊成に、後者の判をその子定家に依頼した。文治三年（一一八七）俊成七十四才、定家二十六才の時であった。

俊成はほどなく序文を書き、判詞を付して西行に戻したが、定家は経験の浅さからすぐには返せなかつた。西行は定家を急がせるよう俊成に督促状を出し、定家にも定稿を早く送れという依頼状も送つた。それは死の前年の文治五年（一一八九）のことである。

定家はほどなく判詞を返し西行は礼状を出している。

この一連の経緯から、西行の王朝歌人らとの接点の時代背景が理解出来る。

他にも慈円（一一五五—一二三五、平安末期から鎌倉初期の僧、家集「拾玉集」史論「患管抄」との密接な交流も伝えられている。

また西行が忠節をもつて歌を献じた後鳥羽院が、西行を賞賛した記録も残されている。

これらの著名的な歌人達との交流とは別に、見逃すことの出来ないのが同時代の宫廷歌人たちとの歌の交換である。

西行が、かつて鳥羽院北面の武士として勤士していたことにより、鳥羽天皇の皇后であった待賢門院璋子と、則近の女房たちと和歌と信仰を通しての情感のこもつた交わりがあつた。

これらの事柄については後述する。

(四) 西行の歌集

「山家集」、西行の歌集で、三巻（五五二首）、上巻は四季、中巻は恋と雜、下巻は雜と百首歌などから成り立つ。中世の代表的な「六家集」の一つで、藤原俊成のもとに送つた自撰の撰集資料に幾度かの増補を加えて成立した。

「山家集」の続編に「聞書集」と「殘集」がある。合せて三百首に満たない小規模のもので、「山家集」成立後に編まれたことは確実だが、その成立過程や編纂動機には不明な点がある。

もともとこの名称自体が、弟子による編纂代行であることを物語ついている。

「西行上人集」、約六百首、中世には自筆本の伝承があつたが現存しない。鎌倉末期の古字本などがある。他に、「山家心中集」、三七四首と、歌合として「御裳灌河歌合」と「宮河歌合」がある。この歌合二篇の成立過程については後に（六）の（2）において触れる。

なお、筆者が本誌一一五号に載せた「王朝和歌集」とその周辺—冷泉家を中心として—において触れた「冷泉家—王朝の和歌守展」（平成二十一年十一月上野、東京都美術館）では、「殘集」巻頭西行書状と「御物西行仮名消息」が展示されており、筆者がこれを見ることが出来たのは幸いであった。

もつとも、筆者には判読出来ない仮名文字が綴られており、これが西行の筆と信じて、歌を詠む西行像とは別の歌を字書する西行像を想像してみたところであった。

(五) 「西行物語」と西行伝説

「西行物語」は、西行に関する諸説や歌集を踏まえて、没後間もない鎌倉中期、およそ十三世紀半ばに成立したもののがその原型と言われている。

西行を主人公にして、その出家から死に到るまでの生涯を実録風に書いた物語である。その内容は單に読み本として普及しただけでなく、早い段階から絵巻物とされていた。

それは女性や子供で文字を知らない者にも読み聞かせるなどして、広い範囲で楽しまれたものと推察される。この物語には数多くの異本があり、大別して「広本系」、「略本系」、「采女本系」に分けられる。何れもストーリー自体に大きな異同が見られ、収録されている和歌の種類や数にも甚しい相違がある。

また近年の研究で、史実と異なる点があつたり、作歌の年代が前後したりで、およそ時代考証的な観点からは離れた書物であろう。

これは西行の歌集の詞書などに、他の西行説話を継ぎ足して、後世の物語作家が構成したためである。異本の多いことも、それぞれの時代に無名の作者たちが、自分なりの西行像を描こうとしたためと解釈すべきである。

「西行物語」と併せて、西行が庶民文化の中に深く浸透していたことを示すのが西行伝説である。

西行伝説は全国各地にあるが、それは史実の延長であるとしても、史実そのものではない。たとえば、伝説に昔話、歌謡等を含んだものを伝承とするならば、西行は日本の歌人伝説の中では柿本人麻呂に勝るとも劣らず伝承の多い歌人とされている。

それは、西行の歌やその行動力の魅力からくる西行人気とも言えるが、そればかりではない。西行伝説の内容を口承文芸のジャンルに基いて分類すると次のようにな

るだろう。

①西行がこの地に来て詠んだとされる歌、地誌、伝説集、歌碑など。

②西行の事蹟にかかる伝説—社寺、西行堂（庵）、像、腰掛石、衣掛松。

③西行と村の娘（子供）との問答集、伝説や昔話。

④西行の名が登場する民謡—木遣り唄、地搗き唄。

⑤その他サイギョウと呼ばれる職人や、乞食僧、土人形など。

（六）西行の和歌の特色と人物像

（1）和歌の特色

西行は、「新古今」の歌人であり乍ら、その領域を飛び出した歌人と言われている。その詠みぶりも、新古今を編んだ定家とは全く異なる。定家は、和歌の世界を広く見渡して批評し、歌の優劣を選別する權威的存在だった。

これに対し西行は、いつも歌を詠む者の側に居た。旅に出て山中で修行に励み、時には桜の花に打ち興じ、作歌の傍ら伊勢では神官たちに和歌の道を教え、役目を与えられれば七十才近くなつても奥州平泉に東大寺再建の勧進（資金調達）の仕事にも行っている。若くして出家してから、晩年入滅まで巾広く行動し、

各所において、風物と人間に密接に接し歌を詠んだ。そこには修行に裏付けられた信仰と人間くさい情感がこめられている。

（2）人物像

人物像については、西行の出家を入口とし、晩年入滅（死亡）を終点とする一連の事柄を述べることで、その特徴がある程度浮き彫りになると思う。

①出家の動機としては、当時鳥羽院下北面の武士であつた彼が、保元の乱を控えた政治状況に嫌気がさした。親友の頼死に世の無情を悟つた。などの他に、ある高貴な女人への思慕とか、和歌の道に専念するため、などの各説があり、何れも後世の評者が語つたものでその正否は定かではない。

西行のその後の歩みを辿つてみれば、彼は組織に属さず、官位からも自由で、束縛されない一人の人間として行ききる道を選んだのではなかろうかと想像出来る。

②晩年と入滅

西行の晩年は、伊勢移住とともに始まる。治承四年（一一八〇）六十三才で、平清盛による福原遷都の直前である。

出家以降、京都近辺の東山寺寄住、鞍馬、嵯峨、吉野山に庵を結んだが、久永五年三十二才の折に高野山に入山し、以後三十年ほどこゝを拠点として活動する。

先述のとおり治承四年六十三才近辺で高野山を離れ、熊野を経て伊勢に移住した。西行の晩年はこの頃から始まつたと言えよう。時代的にはこの頃から源平争乱期に入ることになる。

西行が長年住み馴れた高野山を去り、伊勢（三重県渡会郡）に移った理由は、彼自身は「住みうかれて」（住むのがいやになつて）と簡単な表現しか記していない。

一部の研究者によれば、源平争乱期に入った社会的事情によるものと言う。要は伊勢移住は戦乱からの避難であつたと言つてあろう。

従つて、この時期の西行の行動は、自からの晩年を意識し人生の仕上げを怠いだかのような目立つたものがある。象徴的な二つの事例を挙げよう。

一つは、文治二年六十九才の折二度目の奥州行きを決行している。治承四年（一一八〇）平氏の南都焼打ちで焼失した東大寺大仏の復興資金勧進のためである。これは事業の元締めである高野聖、重源の依頼によるものだが、老令には厳しいこの仕事を引き受け、父祖の縁につながる藤原秀衡を訪ね砂金の勧進を依頼した。

この往路鎌倉で頼朝と会い事業への協力を依頼し一夜を語り過したとのことである。文治二年（一一八〇）八月である。

勧進は成功したが、当時冷戦状態にあつた秀衡と頼朝

の間に立ち交渉をまとめたのは、西行ならではのことであつたとされる。なお頼朝との出会いについては後述する。

もう一つの事例について述べよう。

奥州から帰つた西行は、自からの生涯の詠草を結番して伊勢の内、外宮に奉納すべく、「御裳灌河歌合」と「宮河歌合」の判を藤原俊成とその子定家に依頼するなど、自から的人生のまとめとも言える行動をしている。（この辺は（四）西行の歌集、と記述が重なる）。

ちなみに定家から「宮河歌合」の判を受けとつたのは文治五年西行七十二才の十月河内国弘川寺の病床においてであった。まさに最晩年のことである。

建久元年（一一九〇）二月十六日（旧暦）西行は河内國の弘川寺で息を引き取つた。以前に詠んだ「願はくは花の下にて春死なんそ二月の望月のころ」（山家集十七）の歌のとおり月は満月、桜は萬開の日、釈迦涅槃の一日後のことである。

③終焉に際しての歌人達の追慕

西行が極楽往生を遂げたあと、都にいた歌人たちの跡を恋い慕い涙を流さぬ者はなかつた。中でも左近中将定家は、菩提院の三位中将公衡のもとへ西行の死を告げた手紙の奥に、「望月の頃はたがわぬ空なれど消えむ雲の行方悲しも」と詠歌を付した。訳すると「釈迦と同じ二月十五日頃死にたいという願いのとおり、あの方

は空のかなたに旅立たれましたが、現世に残された私は消え去った魂のゆくえを悲しく思っています」となろう。

これに対し、三位中将公衡の返事は、「紫の色と聞くにぞ慰むる消えむ雲は悲しけれども」、訳すると「紫雲がたなびいて極楽往生まちがいなしと聞いて、わずかに私の心は慰められました。あの方の死はこのうえなく悲しいことですが」となろう。

この定家と公衡の贈答歌は、西行の極楽往生は間違いなしとの志向を持つており、そのことは西行の生涯を歌人であると共に宗教者として捉えていると見ても良いだろ。

④女人との交流

西行が、鳥羽天皇の中宮であつた侍賢門院に仕える女官たちと親しく交流出来たのは、彼が鳥羽院北面の武士として勤仕していたことによるが、それは交流の切っ掛けに過ぎず、「山家集」等の歌で知られる女人们たちとの交流は、彼との間に共有された和歌と信仰を介して、情感のこもった交わりのあつたことの証左であろう。そして核心となるのは、侍賢門院璋子（たまさ、しようし）への思慕であつたとされる。

このことは、西行出家の動機のひとつとされる恋愛説と付合する。侍賢門院璋子に関する古今の著作は多く、その中の逸話はフィクションと見られるものもあるが、彼女が非常に魅力ある女性であつたことと西行が

⑥頼朝との出会い

西行は、最晩年に近い文治二年（一一八六）八月十五日鎌倉に着いた。東大寺復興資金の勧進に頼朝の援助を請うためであつた。この辺の事情については先述した。

頼朝は、和歌にも通じており、鎌倉開府以前の作品であるが、「新古今集」に十首入撰されているほか、慈円

入撰の「拾玉集」にも多数収められている。

西行は頼朝から求められた和歌についてよりも弓馬の話をしたいと述べ、かつて北面の武士であつた頃に身につけた「流鏑流」はじめ武士として文化を嗜む道について語つたと言う。頼朝のもとに一泊し、翌朝辞去に際し頼朝は礼として銀造りの猫を西行に贈つたが、彼はこれを門外に遊んでいた童子に与えたと挿話が残されている。

筆者の関心は、頼朝の次男である三代將軍実朝が、この辺の事情を知るにつけ西行の生き様や詠み振りに影響を受けたのではないかと言うことである。

（七）鴨長明との比較

鴨長明（一一五五？—一二一六）は、西行より遅く生れ歿年も二十六年後であるが、ほゞ兩者が共存するこの時代は、一般庶民は文筆の能を持たず、文芸を支えるものは多く貴族、没落貴族、僧侶や隠者たちであった。

「永遠の女性」として思慕し、崇拜したことは疑いをはさむ余地はなさそうである。

西行は彼女より一七才年少であり、彼女が四十五才で崩御したときも西行は二十八才であった。西行がこれら女人との交流を詠んだ歌は山家集中巻（恋と雑）に收められているものを主として三百余首に及び、花をテーマにしたものに次ぎ圧倒的に多い。

なお、侍賢門院璋子に関する最近の著作で比較的ハンディなものとして、「愛欲の精神史③王朝のエロス」山折哲雄、角川ソフィア文庫と、もうひとつ「西行」白洲正子、新潮文庫を挙げておく。他に月刊誌文芸春秋に渡辺淳一が「天上紅蓮」の題名で、璋子を主人公にしたドラマを下連載中である。

⑤西行の妻子のこと

西行物語等の説話類が伝えるには、出家する以前の西行には妻と娘がいたとされ、その存在は世に知られてきた。また西行が残した膨大な歌の中には、妻子の存在を感じさせるものは一首もないことから、西行は独身であったとする説も過去に唱えられた。

しかし、この説に対して、西行は妻子に限らず他の肉親についても詠歌の対象としていない点から、別途に鴨長明著の「発心集」第六の「西行女子出家事」に伝える娘の伝承は信憑性が高く、上記説話類が伝える妻子の存在が裏付けられ今ではほゞ定説化していると言つ。

彼らは多く現実生活の不安や動搖を深刻に経験しつつも、その渦中に入らずに時局の外に立つて眺めていた。

その代表的な人物が長明であり、作品が「方丈記」である。長明が自からの境涯を述べた「方丈記」を貫くものは、無常観であり、時世に対する否定的な諦感を持つて立ち向い、現実を批判しながら、自己の諦念とのギヤップに悩んでいる。逃避者であるが、その想念には積極的な意味を見い出すことが出来る。

それに対比し西行は歌人としての生き方にすべてを打ち込み、浮世の榮枯をよそに、自然のなかを放浪し、隠者としては徹底したものがあつた。自然と直結した彼の歌は、当時の他の歌人には見られない非技巧的直感的な見方が光っている。

鴨長明については、このような論点を踏え別の機会に小文にまとめて見たい。

（八）現代社会への影響

筆者は、西行の最高の追随者として、芭蕉（一六四四—一六九四）を挙げたい。史上で兩者の足跡が重なる場所は多い。

「草庵に暫く居ては打ち破り」芭蕉は西行が貰いた生き方を見つめていた。「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」死の形は違つても兩者の生死觀は共通のものであつたか

も知らない。そして、西行や芭蕉に憧れ旅をする現代の日本人も夫々に自からの生と死を見つめているのだろう。

階級社会に收まらず、和歌と信仰に情念を結晶させ、源平争乱の世を駆け抜け、最期は念願どおり極楽往生を遂げた西行の生き方は、現代の人々に生きる勇気と死への諦観を知らしめてくれるのかも知れない。

要すれば、不況、リストラ、政治不信などで苦悩する現代人の心に西行の歌のもつ神韻があたかも言霊のように響くのであろうか。

(九) 西行研究の展望

現代において西行の研究者は多く、その著作論考もまた多数ある。最近これらの研究者の間にも新たな動きがあるようだ。

国文学を中心とし、民俗学、美術史学と多くのジャンルの研究者が、作春「西行学会」を結成、その成果を世に問うべく、研究雑誌「西行学」をこの夏笠問書院から刊行する予定と聞く。

後世の日本文化に多大の影響を及ぼした巨人、自由人と捉え研究の場を開くとの趣旨と言う。この稿が本誌に載る頃には、この学会の創刊号が世に出ることになるだろう。恐らくは可成り多角的、専門的

西行については、書きたい人が読みたい人よりも多いと言ふ。西行を読み、深く知るにつれ人は自からの感懷を何らかの形で外部に伝えたくなるのであろう。筆者もその例に洩れない。
不十分な知識の上に立つ見解とはいはあるが、何らかの形で表明したく、まとめたのがこの小文である。世にあまたある西行論とは比肩すべくもないことは承知の上で、敢えて自己主張をする心情を汲みとつて頂き、御批判、御意見を頂くことが出来れば幸いである。

参考とした図書

- 「山家集、閨集、殘集」和歌文学大系21 明治書院
- 「西行」有吉保 集英社
- 「西行」饗庭孝男 小沢書店
- 「西行 捨てて生きる」別冊太陽 平凡社
- 「西行物語」宮下隆一 PHP
- 「西行物語」全訳注 桑原博史 講談社学術文庫
- 「西行」白洲正子 新潮文庫
- 「愛欲の精神史③王朝のエロス」山折哲雄 角川ソフィア文庫

な内容であろうと筆者も期待している。

(十) おわりに

短歌

金澤 智佐美

はじめまして

縁ありて はじめましてと 伝えたし

どうぞよろしく 未熟なれども

回 想

内氣なる 十二の夏に 師は言えり

みにくいあひるの 子に似た娘よと

弾くをやめ わが歌とめて 師は言えり

恋知らずやと 二十才のわれに

恋の歌 友とハモリし 田んぼ道

お客様はホタル 若かりし日なり

ふる里

百三で 召されし母の 七年目

姉妹の絆 ふる里にあり

汐風は やさしく髪を ふくらませ

せんたく岩に 姉と見とれり

ふる里の 星のまばたき 澄み渡り

見上ぐるわれも 星の一部なり

殺さるる ふる里の牛 ドナドナの

歌と重なり 涙あふれり

心満たされ

バラの香を ひとつひとつと 追いかけて

心満たされ ため息つけり

とりどりの 色と香りと 蜜蜂と

バラの世界の アリスとなりたし

赤きバラ 花瓶にさして ハバネラを

カルメン氣どり ハミングに酔う

花水木 藤クレマチス 目に映し

夕げの支度 ペダル軽やか

友よ

かみ合わず 距離をおきたる 友なれど

入院と聞き 急ぎ見舞えり

生をうけ 四十三年 病みし子に

力尽きはて 友はベッドに

点滴の 跡くろぐろと 両腕に

哀しき友の 苦惱にじめり

才あらば 小説にしたき 生き方に

これも試練やと つぶやく友よ

漢詩

潮騷錄（六一）

鯨

游

海

樂聖船村徹先生讚歌・連作17春宵一會

平成廿一年四月

戰友稻垣還不還

櫻花靖國與兄眠

春宵邂逅亦如夢

和氣一團遺族綠

押韻・還眠綠

痛恨事に違いない。

或る時、稻垣某なる未亡人が訪ねて来られ、稻垣と兄が戰友一肝胆相照らす上官と部下で、共に戦い共に戦死した仲であることが判つた。奇縁といわづ何といおう。このことが契機となり、亡兄を中心とする遺族らの慰靈の集まりが年一回定期的に開かれることとなつた。

勿論主宰されたのは先生である。優しく又厳しく弟を訓育した兄への念いは今も忘れる事はない。

和氣一團||親しげな雰囲気。小学・善行「明道先生坐如泥塑人及接人渾是一團和氣……」

如泥塑人及接人渾是一團和氣……

〔注解〕

☆靖国に兄を弔う人ありき
遺族のえにし春の夜の夢

先生には畏敬すべき文武両道に秀でた兄が居られた。

若くして陸軍士官として出征し散華され靖国神社の英靈として祭られる結果となつた。先生にとつては生涯の

連作18亂髮

四海君臨五十年

平成廿一年四月

獨聽亂髮想綿綿
歌非聲以心可唄
雲雀舞空消蒼天

押韻・年綿天

〔連作18亂髮〕

四海に君臨して 五十年

独り「乱髮」を聴けば 想ひ綿々たり
歌は声に非ずして 心を以つて唄ふべし
雲雀空に舞つて 蒼天に消ゆ

〔注解〕

美空ひばり終生の名曲は、長い闘病生活を経ての復活を江湖に宣言する歌でもあった。先生は周囲の人達とも縊密に打ち合せた上、慎重に曲想を練つた。
ひばりの再登場を希求する声は強く、空前の大ヒットとなりその心の籠つた歌いぶりは聴く人を魅了し尽した。然し、これが最後の歌になろうとは……。
ひばりはゆっくりと旋回し蒼い蒼い天空に消えていった。昭和という一つの時代の終わりでもあった。

☆みだれ髪綿々とまた切々と

響き残しつ蒼天に消ゆ

連作20文化功勞賞

平成廿一年五月

幾千傑作恣榮光
授賞粲然文化章
邁進煌煌歌謡道
猶期樂界更飛翔

押韻・光章翔

〔連作20文化功勞賞〕

幾千の傑作ぞ 栄光を恣にし
授賞さる 粲然たる文化章

煌々たる歌謡道に 邁進し
なほ期す樂界の 更なる飛翔を

〔注解〕

煌煌!!光り輝くさま。きらめくさま。

永年の作曲活動は元より、囚人慰問、戦没者への惜しみのない愛惜と遺族らへの同情、音楽著作権協会々長等の音楽界への貢献、北島二郎、美空ひばり、島倉千代子、鳥羽一郎、大金吾らを育てた門弟への献身、更に二宮金次郎の報徳思想への共鳴等が公に認められたのだ。(完)

☆はるばると来つるものかな歌の道

剛鉄の如きベンダコを撫す

連作19二宮金次郎

忽聞新曲妙音符

平成廿一年五月

農聖尊翁艱難途
切切嘈嘈無不醉
美聲正是大金吾

押韻・符途吾

〔連作19二宮金次郎〕

たちまち聞く新曲 妙なる音符

農聖尊翁 艱難の途
切切嘈嘈 醉はざるは無し
美声正に是れ 大金吾

〔注解〕

切切嘈嘈!!切切は切なくか細く低い声、嘈嘈は大きく強く高い声。白樂天・琵琶行「小絃切切如私語」大絃嘈嘈如急雨……。作詞家木下竜太郎の遺作となつた新曲。

先生のレパートリーは歌謡のみならず市町村歌、校歌、社歌等にも向けられ、広く愛唱される所である。恐らくは演歌の作曲家という枠に捉われない高邁な識見と、その人脈の広さでもある。その一端がこの「二宮金次郎」である。歌手には門下生の俊英大金吾氏を指名された。

☆勤労の汗かきし後唱和せば

金吾の調べ吾を慰やすも

悼富嶽飛魚古橋廣之進翁

平成廿一年八月

泳心一路賭青春
豈唯功名四海新
磨劍十年挑勝者
蘇生祖國敗殘民

押韻・春新民

〔注解〕

「泳心一路」の古橋広之進が欧州で客死した。富士山

飛魚と云つても今の若い人には判るまい。敗戦により日本人が自信を失ない茫然と立ち竦んでいた時、彼は水泳の長距離で世界新記録を次々と樹立し敗残の民を狂喜させた。為に特に日米対抗の大会が開かれたが、橋爪選手ともども米国選手を圧倒した。湯川秀樹のノーベル賞と併せ日本人の復活のシンボルとなつた。四海は世界。

磨劍十年は中唐の詩人賈島の詩「十年磨一劍」より。

☆ふじやまの飛び魚あれば敗殘の
日の本の民立ちてあゆめり

〔漢詩の流れ 51・明その⑤袁宏道〕

袁宏道（一五六八—一六一〇）字は中郎、号は石公。

王世貞、李攀龍らの擬古文に反対し、詩作には格式に捉らわれず自己の靈性を發揮すべしと主張。明末の文壇に「公安派」と呼ばれて大きな影響を及ぼした。

若い頃、役人の権力に憧がれるが、その下らなさを悟つて客（自由人）が最高とする戯れの詩。

過呉戲柬江進之（呉を過つて戯れに江進之に鍊す）

少年作客時 少年客と作りし時、（旅に出た時）、

漫漫慕君長 浸々として君長（偉い役人）を慕う。

千旄絡長衢 千旄（旗指物）長衢（大通り）に絡き、

一呵已神往 一呵（叱声）已に神往（見惚れる）す。

前者爲呉令 前者（先年）には呉令（呉の知事）と為り、

始復羨游客 始めて復た游客（自由人）を羨む。

彼の白衣 覚彼白衣（白い上衣）の寛ぎを覚え、

恨我腰帶窄 我が腰帶（官服の帶）の窄きを恨む。

今日過呉下 客來官已了（かく）（自由人）として来たり官は已に了る。

從頭細忖量 頭より細かに忖量（よく考える）するに、

欲得客兼勢 客にして兼ねて勢（権勢）を得んと欲せば、

同年作主人 同年（科挙の同期生）は主人（大将）たり。

日耕録（その一）

—徳富健次郎著『みみずのたはこと』を読む—（岩波文庫、一九三八年）

目耕・目で紙田を耕す。読書することをたとえていう「世説新語」。

山本鎮雄

に一反五畝余りの土地と十五坪の茅葺きのあばら家を買取り、東京市赤坂区青山から引っ越した。千歳村柏谷は赤坂から直線で西へ十二キロの距離にある。当時、柏谷は多摩の武藏野からすると、はるかに「武藏野の場末」だった。

蘆花一行二人は電車で新宿まで来て、調布行きの乗合馬車に乗り、甲州街道を一時間ほどがたごと走り、上高井戸の山谷で降り、二キロほど歩いて柏谷の「あばら家」に到着した。日暮れになつて、書物や植木を満載した四台の荷車も到着した。その夜、粗末な「あばら家」の主になつた蘆花は「正に帝王の氣もちで、樂々と足踏み伸ばして寝た」（「都落ち」）。

一九〇七（明治四〇）年二月、蘆花は純農村の東京府北多摩郡千歳村柏谷（現、東京都世田谷区柏谷一丁目）

都落ちと村入り

徳富蘆花（本名・健次郎、一八六九—一九二七）は、聖

地パレスチナへ「順礼の旅」に出かけ、文豪トルストイが住むヤスナヤ・ボリヤーナの広大な莊園に立ち寄り、別れ際にトルストイから「君は農業で生活してみないか」と言われた。トルストイの平和主義と農本主義に共鳴する数え年四十歳、不惑の歳を迎えた蘆花は「家を有つなら草葺の家、而して一反でも可、己が自由になる土を有ちたい」と熱望し、玉川上水に近い千歳村へ家と土地を探しに出了かけた。

一九〇七（明治四〇）年二月、蘆花は純農村の東京府北多摩郡千歳村柏谷（現、東京都世田谷区柏谷一丁目）

引越の翌日、蘆花は半紙と干物を持って近所に挨拶に廻った。村の年中行事の稻荷講の当日（三月一日）、蘆花は紋付き羽織に着替えて、正式に村（柏谷二十六軒の部落）に仲間入りをした。蘆花は柏谷部落に同化するため、あらゆる集会に出席し、葬式では率先して「諸行無常」の旗持ちをする一方、キリスト教会の日曜礼拝にも出て、牧師の説教を拝聴した。その間、蘆花は原籍地の肥後から戸籍を移し、天下晴れて「千歳村字柏谷の忠良なる平民某となつた」（村入）。

空騒ぎの一年

早速、蘆花は種々の農機具、大量の種子と苗と苗木を買い込み、施肥用の糞尿の入った肥樽を担ぎ、井戸を掘つて飲料水や風呂水を確保し、畑の草取りに熱心に励んで、得意気になつて晴耕雨読の生活を開始した。さらに「あばら家」を改築し、物置、女中部屋、薪小屋、浴室などを増築した。千歳村に移住して一年間は、馬車馬が走るように過ぎ、「生年四十にして初めて大地に脚を立てて人間の生活をなし始めた」のである（憶出のかずかず）。

流行作家の蘆花は、一大ベストセラーの『不如帰』を始め、「自然と人生」、「順礼紀行」、「宿世木」などの印税収入をもとに「あばら家」を改築した他、梅花書屋（表書院）、秋水書院（奥書院）を建築し、村人からは「柏谷御殿」とはやされた。蘆花はのちに台湾南端の恒

笑に満てる物語、平淡の中戰慄す可き恐ろしき説話、詩化せられたる教訓、有象より無象に通う神秘の暗示、巻中に充満す」と、同書の内容を紹介している。蘆花は柏谷に移住した当初は、自ら肥樽を担ぎ、土作りと草むしりに励んだが、のちに生活のための百姓ではなく、あくまでも趣味の百姓、趣味に生活する百姓、百姓の物真似の生活だと自覚し、「美的百姓」と自嘲したり、三升の蕎麦を蒔いて、二升の蕎麦を収穫したり、収穫した大根は二股三股はまだしも、正月の注連飾の様に螺旋状にひねくれている（「美的百姓」）。

村人総出で賑やかな初夏の麦秋期、「美的百姓」の蘆花は村人には肩身が狭く、煩悶やるかたなく「麦愁」という思いを深め、「さつぱりと身を捨てて眞実の農にはなれず。さりとて思うように書けもせず。……中途半端な我儘生活をする罰だ」と、一層の寂寥感を抱くようになった（「麦愁」）。

東京が攻め寄せる

蘆花はしばらく農作業に励んだが、真正の百姓生活に徹しきれず、また移住して六年になつても「村の者になり切れぬ」が、ますます田園生活に愛着を感じるようになつた。この六年間、純農村の千歳村は都市近郊農村として白菜、甘藷、園芸物などを供給する都会付属の「蔬菜村」に急速に変化した。

さらに京王電鉄の笹塚—調布間の開業を見越して、沿

春の地名に因み、「恒に若い」という意味を込めて、耕地二千坪、最終的には四千坪まで買い増し、自らの屋敷と土地を「恒春園」と命名した。

美的百姓

蘆花は千歳村に移住した当初は、「農に生きる」、「土に執着」し、「土の上に生れ、土の生むものを食うて生き、而して死んで土になる」と決意した（「農」）。蘆花は「土に働く」と同時に、田園生活を観察し、記録に残した。千歳村に移住して二年目に馴染みの出版社から田園生活についての原稿を依頼された。その四年後、蘆花は「見たこと、聞いたこと、感じたこと」を軽妙洒脱に描いた短文集『みみずのたはこと』（初版、一九一三年）を出版した。はからずも、本書は江戸期に開墾された武藏野の風俗と田園の「原風景」が記述されている。

蘆花自身の新刊予告の宣伝文によれば、「みみずのたはこと」は「過る六年間田舎に引込み、みづの眞似をして、土ほじくりする間に、折にふれて吐き出したたわ言共を書き集めたものなり。其内容には村落生活の即興写生あり、鍵をとるひまの偶感偶想あり、短編小説見たようなものもあり、日記の断片あり、長短の手紙あり、稀に村より這い出してのろのろと旅しまわりたる紀行あり」と言う。「新刊」の「まえがき」か、あるいは「あとがき」であろうか、「清新なる田園の小景、涙を含む

線の千歳村にも洋服、白足袋の土地ブローカーが徘徊するようになつて、六年間に周辺の地価は五倍に高騰した。蘆花はこの千歳村にも「東京が日々攻め寄せる」と嘆いた。この農村にも都市化の波が押し寄せ、村人の生活はかえつて多忙になつた（故人に）。

蘆花の『みみずのたはこと』は百〇七版を出版されたほど、一大ロングセラーとなつた。ところが、一九二三年（大正十二）年九月、関東大震災の大炎で同書の紙型が焼失した。そこで蘆花は出版社の勧めで、「讀者に」の一文を新たに加え、復活改版を出版した。のちに定本『みみずのたはこと』は岩波文庫の一書として出版された（一九三八年）。

蘆花が移住して十七年間、千歳村は大いに変化した。京王電鉄は新宿から府中まで開通し、沿線の千歳村にも「東京が文化が大股に歩いて来た」。巣鴨の精神病院が近くの松沢に移転し、近くの鳥山には簡便な新形式の文化住宅が新築された（「讀者に」）。

蘆花は『みみずのたはこと』初版を出版後、一年ほど夫妻で世界周遊旅行に出たため、広大な農地は野兔の巣になるほどの耕作放棄地になつた。ところが、帰国した蘆花は柏谷に移住した當時とは異なり、ペンに多忙で、滅多に鍵を取らなくなつた。「農に生きる」という当初の熱意は完全に消え去つた。

千歳村で関東大震災に遭遇した蘆花は、その惨状と心

情を、「九月一日、二日、三日と三宵に涉り、庭の大椎を黒く染めぬいて、東に東京、南に横浜、真赤に天を焦す猛火の焰は私共の心魂を憚かせました。頻繁な余震も頭を狂わせます。来る人、来る人の伝うる東京横浜の惨状も累進的に私共の心を傷めます」と記録している（「読者に」）。

蘆花は関東大震災で「朝鮮人暴動」の流言が広まり、千歳村でも自警団が組織され、騒々しく警鐘が打ち鳴らされ、近村では「労働に行く途中の鮮人を二名殺されました。済まぬ事恥かしい事です」と悔やんでいました。

蘆花は、焼け出されて甲州街道を繞々と「都落ち」する数多くの避難民を見て、「田舎が勝ち誇る時が来ました。何と云うても人間は食うて生きる動物です。生きものに食物程大切なものはありません。食物をつくる人は、まさかの時にびくともしない強味があります。」と断言している。とはい、蘆花は壮大な耕地の所有者だが、耕作を放棄し、ベンの仕事に没頭した。だから、蘆花は震災被災者と同じく、急増した家族・同居人五人の日々の糧食、とくに米麦の確保にしばらく苦労した。

中途半端な晴耕雨読の生活から

私は退職を契機に、山梨の妻の実家の二百坪の畠で野菜作りを始めた。東京の自宅では「雨読」ではないが、本読みと物書きの生活を続けている。「晴れ」の日を選んで、徹底出来ないでいる（草とり）。

野菜作りを趣味と健康のために始めたが、ジョギングやゴルフと異なり、収穫という実益がある。収量は自家消費量をはるかに超える。そこで、時候の挨拶代わりに収穫した旬の野菜を親戚・知人に郵送し、近隣には近所迷惑を承知して配った。「うまかった」という感想を聞くと、ますます野菜作りに挑戦する勇気が湧いてくる。近くの年金暮らしの村人は出荷のためではなく、自家消費のために野菜を作る。だから、短時間に土作りと草取りを終え、季節と時期を見て、種子を蒔き、苗を植える。なかには道楽として夏は川で鮎釣り、冬は山で鉄砲打ち、猪や鹿を追い回す。彼らの余裕綽綽の「おいしい生活」はうらやましい。それに引き替え、私は週一回の野良仕事のため、太陽が沈み、夕闇が迫るころまで畠にいる。野菜を入れた重い竹籠を背負って帰路に就く。疲労困憊して、腰と足に痛みを感じながら、暗闇の農道をとぼとぼと歩く己が姿は、老いた私の現在を象徴していると思われてならない。

最後に、短文集『みみずのたはこと』の冒頭に収録さ

んで、週一回、農繁期は一泊二日、農閑期は日帰りの中途半端な生活である。「だめもと」で始めた野菜作りは失敗の連続だったが、畠に野菜作りのテキストを持ち込み、丸椅子に座つてテキストを見ている姿は、村人にはさぞや奇妙な光景と映つたであろう。

私が蘆花の『みみずのたはこと』で最も興味を覚えたのは、「村の一年」と題する一編である。千歳村に移住して六年、村人とその生活、正月から始まる種々の年中行事、とくに一年間の歳時記は私の野菜の作付けなどの作業計画の作成と実施に大いに参考になつただけではなく、蘆花の四季おりおりの大自然の観察、蚕や害虫さらには花卉・雑草などの動植物の描写に甚く感銘した。

野良仕事は土作りと草取りだと体験的に理解した。蘆花は農夫が空の肥桶を荷車に載せ、数百台の荷車が甲州街道を通つて、四谷、赤坂あたりまで「不淨取り」に出掛けると書いている。持ち帰つた糞尿に薬・落葉などの堆肥と混ぜて、肥溜めで腐熟させた下肥を肥料として使用した。土作りには下肥は不可欠な肥料であった。

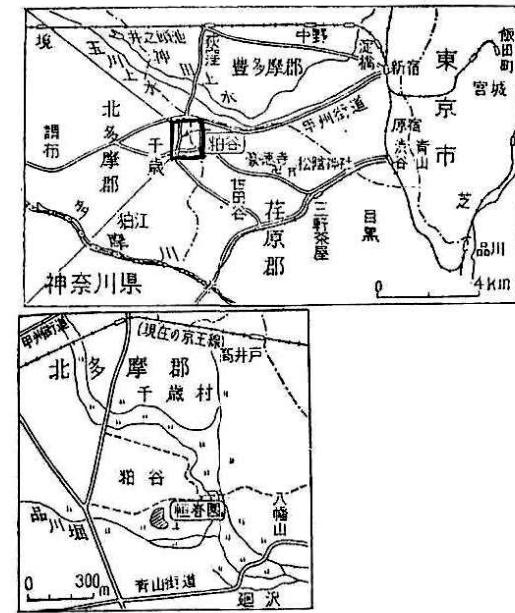
「不淨取り」は、蘆花が心配したように、「東京界隈の農家が申し合せて一切下肥を汲まぬとなつたら、東京は如何様に困るだろう」（「不淨」）。

草取りも苦労の連続である。蘆花は「美的百姓でも、夏秋は烈しく草に攻められる……やつと奇麗になつた」と書いている。蘆花が千歳村に「都落ち」した後、遠路はるばる蘆花の「あばら家」を訪問した来客は少なくなかつたが、そのなかで「故人」となつた一人が詩人・小説家の国木田独歩その人である。

私はあらためて独歩の代表作「武藏野」（一八九七年）を読んでみた。独歩はツルゲーネフの「あいびき」とくにその樺の森の描写に感銘した。当時、渋谷村在住の独歩は、郊外の武藏野を散策して樺の落葉林や田畠、その周囲の小径、小川を絶賛した。独歩が描写した長閑な武藏野は、都心に住む青年達の自然への憧憬と郷愁の念を喚起し、「武藏野趣味」を満喫させたことであろう。

武藏野に限らず、雜木林は農村生活では必要不可欠だった。枯木や材木は日用の煮炊きや風呂炊き、冬期の暖房用の薪に使用され、落ち葉は発酵・腐熟させて、蔬菜栽培の肥料として使用する。

たしかに、私は独歩の優れた自然描写に感銘したが、武藏野の散策者である独歩のソノビスマとも言える觀察態度にたいして、生活者の視点が決定的に欠落していると思う。それは「美的百姓」と自称する蘆花の生活・觀察態度とも全く異なり、この上なく違和感を覚えた。



□徳富健次郎作『みみずのはこと』上・下二巻(岩波文庫)

□蘆花の評伝は中野好夫著『蘆花徳富健次郎』(中野好夫集九・十・十一巻、筑摩書房)に詳しい。

□国木田独歩著『武藏野』(新潮文庫)

河童の初恋（一）

鍋屋 次郎

山深い北遠の渓谷、北には赤石山系が連なり、文字通りの深山幽谷。渓谷の水量は豊で、流れる水が勢いよく岩に碎けて飛沫が高く広くあたり一面に飛び散つている。

伸一は昨夕からの自分のことが全く分からぬ。どうしてここにいるのか、ここはどこなのか、なぜシャツとズボン姿だった自分がパンツしか身に纏つていなければ。

昨日の午後、北森村村長の北森優作から貸して貰った新しいノートパソコンと部品一式、付属の説明書は、購入した浜松市内大手販売店のショッピングバックに入つたまま伸一の横にある。その他のものは全くない。腕時計も携帯電話もない。

昨日、午後四時頃、北森優作からノートパソコンを借りて北森家の裏口から出てきた。裏口木戸まで出戻りの

女中オタネが見送るようについてきて、伸一の肩に手を当てて、別れを惜しむように「さようなら」と言つた。暫く歩くと太田川の支流の都田川の橋にさしかかったとき、対岸の茂みに光るもののが日に入つたので、川に降りて水際まで行き、四~五メートル離れている対岸の茂みに目を凝らした。光る物は得体の知れない動物の目? と思ったところから後は全く分からぬ。記憶がないのではなく全く空白であつた。

太陽の位置から、時刻は正午頃と思われる。後ろに何かいる気配を感じて振り向くと、河童が二匹こちらを見ている。伸一が村の古老から聞いたとおりの姿で顔と腹部が白く、他の部分は薄い緑色。岩に腰掛けて足を清流に浸している。頭のお皿部分も白かつた。よく見ると二匹ともまだ子どもの様子。暫くすると河

童は立ち上がって伸一に手招きする。ついて来るよう手招きしていると思った。手のひらも白かった。

伸一はノートパソコンの入っているショッピングバックを持ってついていた。二匹の河童は川岸を上流に向かって岩の上を飛ぶように進んでゆく。素足の伸一は岩を踏む足が痛くて河童のように早く進めない。遅れると立ち止まって待っている。

やがて右に曲がり、草を踏み分けて山に向かって少し歩くと、いつ頃建てたかも分からぬ古く傾いた樵小屋と思われる小屋があつて、その中に伸一を案内した。中は乾燥した藁が積んであるだけ。後は何もない。

一匹の河童が「その藁を敷いて寝る」と思われる仕草をしたので、彼をここに案内してきた意図が理解できた。

「二匹の河童はどうも女の子の子の様子で、お互いをチー、マーと呼んでいたが伸一にはどちらがチーでどちらがマーか見分けがつかない。伸一は彼女たちに

「どうして僕をここに連れてきたのか」と聞きたいのだが、河童の言葉が分かるわけではないので、河童達の動作から想像するしかないが、それもできる状態ではない。

二匹は再び彼に

「自分たちについて来るよう」

と小屋の外から手招きした。

茂みの中を川の上流方向に歩いている。やがて正面に直径五十cmくらいの数本の木が二十cm程度の間隔で生えていて、木と木の間は蔓草で覆われている所に来た。これではとても前には進めないと思って立ち止まつた伸一を河童が手招きしている。蔓草をかき分けると、目の前に大きな空洞がある。人間の大人が三人並んで、立ったまま入れるくらい大きい。二匹の河童について行くと、空洞の中は少し登り坂になつていて、その先には横幅も広いホールのような空洞があつた。入つてきた所からの光は殆ど届かず、空洞の前方から淡い光が差し込んでくる。しかし内部は薄暗く伸一は目が馴れるまでは何も見えなかつた。

空洞の左右に部屋の様な空間が幾つかある。その一つから一匹の河童がやつてきて伸一を眺め回した。薄暗さにも馴れた眼で伸一がよく見ると、河童の老女で、若い河童のうす緑色の部分はこげ茶色、白い部分は鼠色になつていいかも老河童に見える。先ほどの二匹の幼女に見える河童は老河童の後ろに控えるように立つている。

やがてその老河童は口を開き

「私はオンバ。河童の神様の預言者。ここにいる河童たちは私をオンバ様と呼んでくれる。宮川伸一さん、貴方には恵と力を借りたくて河童の世界に来て頂きま

した。このチーとマーが貴方のお世話をします。今日はあの小屋でゆっくりお休み下さい。明日お迎えに行きます。食べ物は貴方を小屋に案内しながらチーに持つて行かせます」

と人間の言葉を話したので、伸一は驚いていた。するとオンバは

「勝手に連れてきて何を言うか。着ていた衣類など返してくれ。帰り道を教えてくれ、と言いたいことは良く分かります。明日お話しをしましよう」

と言つて、さつさと壁面にある部屋に向かって歩き出した。

チーの先導で小屋へ着くと、チーは白米のお握り四つと沢庵、味噌汁の入った籠を置いて帰つた。

食事を終え、積んである藁を土間に敷いて横になつた。ここはどこで、北森村とどの位距離があつて、逃げ帰ることが出来るのだろうか。河童の老女はなぜ人間の会話が出来るのか、等思いめぐらしているうちにいつの間にか眠つてしまつた。

その頃、北森村では伸一が戻つてこないので大騒ぎになつっていた。村長の家を出たのは八月五日午後四時、村長が伸一のために用意した新しいノートパソコンにメー

ルとインターネットをセットして、プロバイダー等の必要経費は全て北森優作宛に請求が来るようにして持たせたことは、北森優作が警察に報告していた。

六日朝から、消防団総出の山狩り、警察による主要道路での検問、都田川下流の調査など村中で行方を探していた。

宮川伸一は北森家の小作の息子で、北森中学三年のとき、たつた十名の野球部員を引き連れて静岡県中学野球大会で決勝戦まで進んだ。だが惜しくも破れたが、身長百八十cmから投げ下ろす球の威力は抜群で投手としての評価は高く、県内有名私立高校野球部から誘いの声が掛かつていた。

七月は甲子園を目指した高校野球静岡県大会に、北遠高校北森分校として本校とともに参加。本校は二回戦で敗退したが、たつた十名の部員しかいない分校が準決勝にまで進み、まだ高校一年生の宮川伸一の名は県下にとどいた。そのとき、北森優作は、北森分校が甲子園出場のときは、一切の経費を負担するから安心して優勝せよ、と分校と野球部員を激励していた。

また、学業面でも、中学三年の秋、全国の優秀な中学生を対象とした名門塾「道真進学通信塾」での成績は全国トップで、関係する新聞には写真入りで報道され、多くの私立高校から特待生の誘いがあつた。

伸一が目覚めると外は既に明るいが日の出前の時刻と思われる。

伸一は布団代わりの藁から藁草履を作り始めた。小学生の頃から父母の夜鍋仕事を手伝っていたので作り方は知っていた。

自分がパンツしか身につけていないのは気になつたが、ここから抜け出すことが先決、とばかりに作ったばかりの藁草履を履き、パソコンが入つて袋を手にして渓谷の岸に出た。流れに沿つてどこまでも下つて行けば必ず人里に出るものと思い、急流を見ながら岩の上を飛び歩き、あるところは浅瀬を渡り、喉が渴くと清流の水を飲んで歩き続けた。腹も減り、太陽の位置から正午頃かと思ったとき、前方の平らな岩の上に一匹の河童がいた。近づくとなんとチーが彼を待っていた。

チーは黙つて両手で籠を差し出した。中を見るとお握りが四つ、きゅうり、たくわん、川魚の藁製が入つている。

「誰がチーに持たせたのか」と尋ねたが、言葉の意味がチーには分かる筈がない。再度質問しながらの伸一の身振り手真似で質問の意味が分かつたのか、一言

「オンバ」と言つた。

チーはオンバが伸一の行動を見越して、ここで待つてゐるよ

と尋ねたが、チーには分かる筈がない。再度質問しながらの伸一の身振り手真似で質問の意味が分かつたのか、一言

「オンバ」と言つた。

チーは伸一が食事を終わるまで傍らに腰を下ろしてい

た。オンバはどの様な見通す力があつて、チーにこの時間にここで伸一を待つように指示したこと、それと榊の枝でお払いをして呪文を唱えたことからチーが人間の言葉で会話が出来るようになつたこと、この二つの現実に恐怖を感じた。

チーは伸一が食事が終るとチーは「伸一さん、行きましょう。ついて来てください」と立ち上がりつて伸一を促した。伸一は「僕は帰るのだよ。北森村へ」

「今夜どこで寝るのですか、朝まで歩き続けるのですか。今夜寝るところへ案内しましよう。だから着いてきてください」

チーはそこまで言うと、伸一を促して、ノートパソコンの入ったショッピングバッグを持ってさっさと川下に

うに指示をしたものと思う。

チーは伸一が食べ終わつて、再び川下に向かつて歩き出すのを見送るように眺めてから、籠を持って帰つて進んだ。ゆくと、小さな篝火が目に入つた。

「人里だ！ 人間がいた！」

と思って小走りに近づいて行くと、なんとチーだつた。そこにいたのが人間ではないことにがつかりするよりも、どうしてここにチーがいるのか、そのことの驚きが大きかった。

「チー」

と思わず声を掛けると

「夕ご飯だよ。オンバが持つて行きなさいって」と言いながら籠を差し出した。伸一はチーが人間の言葉を話すのに驚いて、籠を受け取るのも忘れてチーを見つめた。月のない夜で、チーが持つてきた篝火の所だけが明るく辺りは真っ暗。

チーは

「さつき帰つたときに、オンバが伸一と会話が出来ないのではお手伝いも出来ない。人間の姿に化けさせないで言葉だけが話せるようしよう、と言つて、頭のお皿を榊の小枝でお払いをして、呪文を唱えてくれたの」

チーは

向かつて歩き出した。篝火に使つていた松明を片手で持つて足下だけ明るくして歩く方向が川下なので伸一は後に従つた。

七、八分歩いてからチーは山の中に入つて行く。
「寝るところだから、川からは少し離れるのだな」と思いながらチーのあとをついて行くと、チーは急に立ち止まり

「今晚泊まる小屋はこれです」

と言つて伸一を中心に招じ入れた。チーの持つ松明の灯りに照らし出された小屋の中の光景は、朝出ていった状態のまま。布団代わりに使つた藁は散乱し、藁草履を作つた切れ端もそのまま。

「・・・・・？」

伸一は驚きに声も出なかつた。チーが松明を持って帰つてしまつたので、星明かりで辛うじて見える程度の申で伸一は座り込んでしまつた。今日一日の歩きは何だつたのだろうか。どこを歩いたのだろうか。自分は確かに溪流に沿つて下流に向かつて一日中歩き続けた。全く分からない。理解できない。眠れないまま朝になつた。溪流で顔を洗い小屋に戻ると、チーが来ていた。

「お早うございます。オンバ様が呼んでいます。お迎えにきました」

洞窟の内部は昼でも薄暗い。オンバは伸一を渓流に面した明るい部屋に連れて行き、「将棋を作つて河童全員に教えて欲しい。材料と道具は全て用意してある」と話を切りだした。伸一にとつては帰ることが先決で

「僕は北森村に帰りたい。勝手に連れて来て、勝手に要件を命令される筋合いはない。これでは監禁ではないか」ここまで言つて、更に

「僕は帰る」

と立ち上がつた。オンバは

「昨日は川下に十時間以上歩き続けたね。ここは河童次元の世界。人間には理解できない世界だよ」

と言い終わつたとき、チーが伸一の朝食を持つてきた。見ると、パンと果実ジュース、キュウリ、ゆで卵がお盆に見立てた木の上に乗つてゐる。

オンバは

「食べなさい。お腹が空いている筈」と言つて部屋を出ていった。

食べ終わつたとき、再びオンバはやつてきて

「河童の世界のことを説明しよう」

一呼吸おいてから

「ここにいる河童は雄十五匹、雌が十六匹いる。私を入れて三十二匹いる。年齢は雄雌とも一歳置き。ただマ一

やや長めの紐を取り出して

「この紐をタオルの端に縫いつけて禪を作り、いつも着けているようだ」

伸一はそのようなことはどうでも良く、元の人間社会に戻りたいだけなので、一応タオルと紐の入つた袋を受け取り、小屋に戻ろうとした。

そのときオンバがチーに
「用意は出来たのか」と質問すると、チーは

「はい。コーザさんとカヤさんがやつてくれました」と返事をしたが、伸一には何のことか分からぬ。

「伸一、ここは河童次元であつて、人間社会の次元と異なることを理解して欲しい。納得できるまでに失敗の繰り返しで時間が掛かるとは思つが」と、恰も伸一の逃亡を預言するようなことを言つてから、チーに

「一緒に行つて昨夜教えたとおり、紐を縫いつけて禪を作りなさい」と命じた。

とチーは双子で例外。河童の成人は人間年齢で五歳。雌は五歳で結婚する。マーとチーは四歳なので、もうすぐ立派な雌になるだろう

黙つて聞いている伸一の表情を見ながら

「チーが突然言葉を話し出したことに驚いたと思う。人間世界にも聖靈というのがあってそれが万物の創造主であり、全てを支配していると聞いている。河童の世界にも全てを支配している靈があつて、その靈にお願いすれば出来ないことはない。河童を人間に化けさせることも出来る」

伸一の顔を覗きながら

「そこで伸一に守つて貰いたいことがある」

ここまで言つて、オンバの横に座つてゐるチーに席を外すように命令し、チーの姿が見えなくなつてから

「守つて貰いたいことは、雌河童の前で素っ裸になつたり、例え雌河童から誘惑があつても、絶対に交わらないことを守つて欲しい。というのは、河童の雌は人間の男を見ると、一匹または数匹の集団で交わり続けて人間から精力を抜き取り、その男を腑抜けにしてしまう。二十年ほど前にそのようなことがあつて、その男を人間世界に戻したが、精力は回復しないまま死んでしまつた。伸一さんをそのような目に遭わせたくないから」

と言つてから、いつの間に持つてきただの荷物袋を引き寄せて、中から人間が使つてゐるタオル一本と一緒に水かきのついた指を器用に動かしてゐる。

チーが帰つた後、寝転がつて

「明日朝、再び黙つて脱走しよう。今日は昼食も夕食も大人しく戴いて、脱走の素振りを見せないようにしよう」と考へてゐるうちに、オンバから聞いた河童の雌の話から北森家女中のオタネさんを思い出した。

中学三年の夏休み、北森の奥様から頼まれて北森家の中学一年の長女珠美の勉強を教えに行つたときのこと。夜十時頃になつてお夜食を戴き、帰ろうとする、奥様から

「お風呂に入つて行きなさい」

と奨められ、台所から離れた裏庭に面した湯殿に行つた。体を洗つてゐるところにオタネさんが入つてきた。オタネさんは伸一が入浴してゐるのは知らなかつた。しかし、がつしりとした伸一の背中を見てさつさと裸になつて

「伸一さん、お背中を流しましょう」

と言つて、伸一の後ろで腰を落とし、自分と伸一に湯を掛けたあと背中から洗い出した。石けんのついたタオルとオタネさんの手が腹部にまわってくると、柔らかな乳房が伸一の背中をくすぐつた。後ろから手を伸ばして股間を洗い始めると伸一は恥ずかしくて顔が火照つた。その後のことは覚えていないが脱衣場のマットの上で、オタネさんの中に一回果てたことを思い出した。生まれて始めての経験で、その夜は帰宅しても勉強が手につかなかつた。帰り際にオタネさんはやさしく

「誰にも黙つていましようね。内緒よ」

と言つた。

先日、裏の出口まで送つてきて、伸一の肩にやさしく置いたオタネさんの手の感触がよみがえつてきた。

伸一は翌朝早く小屋を出た。パソコンの入った袋だけ持つて。今日は川を下るのをやめて、南側に眺望の開けた山上を目指して、逃げる方向を見定めようとした。正午頃、山の中腹ではあるが南側を一望できる場所に着いた。そこには腰掛けるのに手頃の岩があり、腰を下ろして一休みと思って近づいて行くと、岩陰からチーが現れた。

伸一は
「また現れたか」

とがつかりして岩に腰を下ろすと、チーの差し出した弁当を黙つて食べ始めた。今日はお茶も持つてきている。
そこからは見渡す限り山また山で、南面のどこにも人里はなく、道路も見えなかつた。

伸一は今朝から約五時間歩き通してきたが、全てはオンバの管理内にある自分を感じ、逃げ出す方角さえ分からず、逃げることは改めて考え直すこととし、チーについて下山した。彼が登つて来た道とは異なつていて、三十分程度で小屋についた。四時間以上歩いたルートはどうだつたのだろうか。自信がなくなつた。逃げるのを諦めさせられたせいか疲れが出て夕方まで眠つた。チーが夕食を運んできたのも気がつかなかつた。

その夜、パソコンで進学名門塾の「道真進学通信塾」のホームページを開くと、「夏休み高一模擬試験」問題が掲示され、五科目選択制で回答送信期限は八月十六日中のメール添付送信と書かれていた。後四日しかない参考書は持つてきていらない。あるのはオンバが用意してくれた学校のテキスト類だけ。

伸一は問題をプリント・アウトして模擬試験に取り組んだ。一日三回、チーが食事とお茶を運んでくれたが、会話らしい会話はなかつた。チーは何か恐ろしい伸一を見るように離れて見つめていた。

期限まで後一日残した八月十五日、深夜に全ての回答をメール添付で送信した。学籍番号等は記憶していた。担任の木口先生が昼食時に学校のパソコンで「道真通信進学塾」のホームページを開くと、八月の全国一斉高一模擬試験結果が掲載されており、応募全科目満点五名のトップに「宮川伸一」の名前があつた。学校名は北遠高校北森分校とはつきり書いてある。

直ちに北森家、伸一の自宅、警察に連絡し、関係者が全員学校に集まつた。

通信している事実から生きていることだけははつきりしている。しかし、探す術がない。

北森優作の意見で、木口先生が「道真通信進学塾」へ行き、理由を話してパソコンの受信履歴や送信された回答のコピーを貰いに行くこととなつた。

翌々日、帰つてきた木口先生は、塾の受信履歴から分かつた伸一のメール・アドレスに

「どこにいるのか連絡せよ。皆心配している」

とメールを発信した。伸一の所に着信した筈であるが三日待つても返信がない。

逃げだすのを諦めた、というか暫く様子を見るにした伸一は、オンバの命令通り将棋の駒作りに専念していく。適当な板がないので、直径四cmから二cmの小枝を輪切りにして、その周りをノミで叩き切るようにしながら、将棋の駒の形を作つて行つた。一組四十枚の駒を作るのは根気が要つた。将棋勉強のために全河童に一組ずつ持たせるように命令されていた。

この間、チーは伸一の傍にいて、形が出来た駒を紙ヤスリで磨いたり、切り屑を片付けていた。伸一は、気のせいいかチーの胸がふくらみかけ、腰もふくよかになつたよう感じていた。

伸一は疲れたのでチーを連れて上流めがけて早足で歩いていった。チーは途中まで追つかけてきたが立ち止まつてしまつた。伸一が戻つて理由を聞くと「この先には湯が流れている。神様の湯だから河童は浸かつてはいけない」と命令されているとのこと。

伸一は行つてみた。大きな岩が川の中央に突き出いでて、流れはそれに遮られて狭く急流になつていて、遮つている岩の手前は水が静かによどみ、よく見ると湯気が出ている。温泉が湧いていた。チーを怖じ気つけてもいけないので、足で湯温を確かめて戻つてきた。

北森村では、伸一のメール発信電波の位置が分からなかつた。自衛隊の調査研究所に調査を依頼した。

一定エリアからの電波発信の有無はつかめるが、それがどこかと特定は不可能という。把握したエリアは山中で電線や電信設備がまったくない所で、人が住めるような所ではない場所から発信されていて、発信電波は通常の送信電力から発する電波よりもやや強い電波であることから異常性が高く、不審電波としての解明が必要にならぬかも知れない、と説明していた。

学校からのメールに伸一からの返事があつた。それは「ここがどこなのか分からぬ。河童と生活をしていれる。脱出を試みたができなかつた。ここはどこかの山奥で溪流が流れている。どこなのか説明の仕様がない。勉強と健康は大丈夫。勉強は続ける」とだけ記載されていて、手がかりはない。木口先生は昔河童を見た、という古老を訪ねて聞いてみたが分からぬ。

伸一は漸く将棋の駒三十二組と将棋盤十七枚を作り上げた。駒には楷書で分かりやすく正確に書いた。先ずチーに駒毎の動きのルールを教えた。桂馬飛びなど将棋盤上でなければ教えられない。チーは小屋で伸一とも言えない感触だつた。

チーは「行きたい。試してみたい」

と、駒々をこねるよう言い張つた。既に成人河童並みの胸と腰を持つたチーが、伸一の胡座の中で腰を揺らして駒々をこねるときに伝わってくる感触は、伸一には何とも言えない感触だつた。

チーは早速オンバに行かして欲しいとねだつた。オンバは

「河童が人間に化けることが出来るのは五回まで。六回目に化けたら、もう河童の世界に戻れない。これが河童の神様との約束だ。それと人間社会に行くときは必ず人間の保護者がついていることが条件だ。それでないと人間社会のルールが守れなければ河童と言つことが直ぐばれてしまう」

と言つたところ

「伸一さんと一緒に行つて貰う。五回の中の一回を使つてもいい。だから行かしてください」

と真剣に頼んだ。だが、オンバは首を縦に振らない。というのは伸一を一旦人間社会に戻したらどうなるか。オンバがそのように考へてゐることは知らずチーは「河童の将棋の実力を試してみたい。人間に負けない能力もあるのではないかと思う。伸一さんと行かせて」と繰り返し頼んだ。

から教えて貰うとき、いつの間にか伸一の胡座の中にお尻をスッポリと入れて、将棋盤に向かい、伸一は後ろから相手側に並んでいる自分の駒を動かしている。その方がチーに駒の動きを正確に教えることが出来る。オンバや他の河童の目があるところではチーは絶対に胡座の中には入らなかつた。

駒の動く決まりを覚えたチーは戦い方の飲み込みも早かつた。

オンバから河童全員を集めて将棋教室をやるようになれたので、壁に立て掛けの大きな将棋盤を用意して、伸一のアドバイスを受けながら、駒毎にチーが河童の言葉で説明した。そして伸一とチーが将棋を指して実戦の説明をした。相手から取つた駒を使うことが面白そうだとつた。

それから二ヶ月が過ぎ、河童同士での将棋も活発になり、中でもチーの進歩は抜群で、パソコンで東大将棋にチャレンジするほどになり、アマチュア四～五段の実力がついていた。東大将棋で戦つた自分の指し手を自分で盤上に並べて工夫しているほどで、既にその力量は伸一を遙かに上回つていた。

パソコンで横浜の開港記念堂を会場としてジュニア将棋育成会主催将棋大会の広告があり、伸一が説明すると

「チー、伸一さんを連れてらっしゃい」

のオンバの声にチーは喜んで小屋にいる伸一を呼びに行つた。伸一が来ると

「伸一さん、ジュニア将棋大会はどこで、いつ開かれるのですか」

と聞いた。傍らでチーは緊張して交互にオンバと伸一を見つめている。

「はい。十一月の三日と四日です。本戦は四日ですが、チーは全国将棋愛好連盟の級または段位を持つていないので、三日に行われるテスト戦で認められれば本戦に出ることができます。それは午後一時からです」

「四日の終了時間は」

「順調に行けば午後六時には終わるでしょう」

「伸一さん、チーは人間社会のルールは何も知りません。貴方は全責任が持りますか」

「分かりました。キチンと大会に参加させて連れ戻ります」

この答えにチーは伸一に縋りついた。オンバが

「チー、まだ許してはいませんよ。ところで伸一さん、行きは静岡駅から新幹線の「こだま」にしなさい。後で時間を調べて連絡してください。それに間に合つよう、貴方とチーを静岡駅に行かせます。行き方は任せてください」

チーに向かつて

「誰かに、どこから来たか、と聞かれたときの為に新幹線に乗せるのだから、そのつもりで」と言つて戻つてしまつた。

十一月三日。二人とも気がつくと新幹線静岡駅の待合室に並んで腰掛けていた。伸一はセーターとズボン、チーも女の子らしいセーターと紺のスラックス。見事に小学校四年生の少女に変化している。将棋では手首と指先が人目につくので、伸一がチーの両手を見ると、完全に少女の手であつた。

横浜開港記念堂のジュニア将棋育成会将棋大会会場には、緊張した面もちの親子が不安そうに開場を待つている。やがて、大会出場資格審査が始まった。

「北森小学校四年宮川ちず子さん、十二号室にお入り下さい」

とアナウンスされたので、伸一と二人、十二号室に入つた。

職員が

「これから松浦五段が宮川ちず子さんと対局します。ルールは一手十秒以内、時間は三十分とします。付添の方はこちらに」

と言つて部屋の片隅の椅子を示された。

決勝にシードされている。

午後五時、一人はオンバの前にいた。オンバはチーに「貴女の人間変化は、今日と明日で一回にするからね。明日は会場に朝八時にいれば間に合うね」と言つて戻つていった。

いよいよジュニア将棋大会の本番。全くの無名新人の小学女子四年生が準々決勝にシードされたことが評判になり、新聞社が写真を撮りながらインタビューに来たが、「落ち着かない」ことを理由に職員がことわってくれた。準々決勝、相手は小学校五年の男子であつたが二十分で投了。準決勝になると、別室の大きなテレビにチーの指し手が放映され、その部屋には大会関係者や報道人が詰め、一手毎に溜息が洩れていた。始まって四十分で相手が投了。

午後三時からいよいよA組決勝戦。ドアをノックする報道陣を、控え室に一切入れないように伸一は職員に依頼した。

A組決勝戦、チーは相変わらず中飛車戦法を見せかけて8筋攻撃にかかる。相手は決勝戦前の短い時間にチーの戦法を知った様子であつたが、対応までは考える時間がなかった。相手は8筋の守りに7四に銀を置いていたので、8筋を破るのに多少時間は掛かつたが、五十分で相

対局が始まった。チーは玉を2八に置いて金銀で囲い、中飛車戦法で4～6筋から攻撃すると見せかけて、相手の守備陣形が固まって駒の動きの柔軟さを失つた段階で、守備が弱い8～9筋を攻め始めた。始めてから二十分、松浦五段は

「勝負はここまで。大会出場資格を認めます。あと一局、女流棋士の柴田六段と対局してください」と言つて立ち上がり、柴田六段が対局した。

柴田六段は同じ戦法のチーに8筋を破られ、防戦にまわつた。勝負の決着前に柴田六段は

「貴女は何歳？今まで誰に教えて貰つたの？何歳から将棋を始めたの？」と矢継ぎ早に質問をしてきた。新幹線の中で伸一から教えられた通り

「はい、十歳です。教えてくれたのはあそこにいる兄です。始めたのは九歳からです」

と答えると

「ホント！」

と驚きの声をあげた。

午後二時、明日の組み合わせが発表になつた。

A・B各組百名、明日朝九時開始、持ち時間各一時間、一手二十秒以内、と注書きがあり、名前を見ると第一回戦にも二回線にもチーの名前がない。よく見るとA組準々決勝戦も同様一手二十秒以内、持ち時間は一時間。先手は相手側。チーは中飛車戦法で押ししまくり、金銀桂香を手にしてから、二十八手の王手の連続で勝つた。これはいわば二十八手詰めの詰将棋と同じ。会場内ではあちこちで「凄いな。十三手詰めの詰将棋でも挺摶るのに、二十八手詰めとは」と囁かれていた。

閉会式で、賞状、トロフィー、副賞（漆塗りの将棋盤と天童特性将棋駒）、全国将棋愛好連盟アマチュア六段段位証、プロ棋士育成登録会入会許可証を貰つた。その後新聞社のインタビュー。まだ十歳と言うことでそれには伸一が付添対応した。

終わって会場の出口をでたところで、伸一とチーの耳に金属性の微かな音が聞こえた。周りを見回して誰もないことを確認して耳を二度叩くと、その瞬間に伸一とチーは賞品などを持つて洞窟のオンバの前にいた。

驚いたのは北森村。翌日の新聞に宮川伸一の写真と、北森小学校には在籍していないが、北森小学校四年と紹介された宮川ちず子のインタビュー写真と決勝戦の写真が掲載され、「将棋界に天才美少女現わる」「指し手にプロ高段者も驚愕」「決勝戦！見事な二十八手詰め」などと昨日の優勝と、チーの指し手が将棋界始めての指し手で2筋の玉を守りながらの中飛車戦法がいつの間にか8筋攻撃に変化していることを高く評価していた。全国将棋愛好連盟では高段者が集まり、その指し手に対応する手を考慮中、などと大きく報道され、村中大騒ぎになった。伸一には小学校六年生の妹はいるが、名前も違い、将棋とは関係なかつた。

(続く)

祝出版

遙かなるカメリーン

太田精一著

彩流社 1,900円

アメリカ西海岸での異文化体験

一一八に帰るすべもなし（二）

——愛する北国のひとに寄せて——

伊治哲

月

——修平は夢を見た。長いあいだ振り返ることのなかつた昔の思い出が、夢の中であざやかに蘇えつてきた。もう一度と立ち戻ることのないあの“一一八のころ”的、ほろ苦い、しかし甘酸っぱい、夢幻のような思い出であった——

それは、修平が十八歳になつた、昭和二十三年の秋の頃にさかのばる。修平はわずかな教科書と愛読書、それに擦り切れたセンベイ布団と、衣類を詰め込んだ行李をリヤカーに乗せて、金沢の街をあてもなく迷い歩いていた。ふと立ち止まって天を仰いだ。秋の空がようやく暮れなずみ、西の空は茜色の夕焼け雲に染まつてゐる。後ろ

を振り返ると、寒々とした青白い中秋の半月が、東のかた卯辰山の黒ずんだ山影から少ししづつ離れようとしていた。さすがに北国の秋の暮は早い。すこし汗ばんでいた背中が夕暮れの冷氣を吸つて薄ら寒く、修平は思わず身震いをした。

先ほどまで住んでいた学生寮の熱狂と喧騒が、今になつて妙に懐かしく思い出され、どこといつて行くあてもない今の自分が衰れっぽくさえ感じられてきた。それはわずかな月の光が、ここ一年余りの侃侃諤諤の世界から脱け出した修平の孤独な姿を投影しているように思われたからでもあつた。

前の年の昭和二十二年の春、修平は金沢にあつた四高の門をくぐつた。

太平洋戦争の敗戦から間もないその頃、國中が政治も経済も社会も混乱と苦難の極に喘いでいた。昨日までの権力や権威がすべて崩壊して、占領軍の鶴の一聲だけが絶対の価値をもつていた。

丹波の山奥の中学校をようやく卒業した修平は、世の中がどんなに變ろうと、父の跡を継いで師範学校に進み、小学校の教師になることが当然の進路だと決め込んでいた。ところが、軍國主義教育者のレッテルをはられ、教職追放の憂き目を負った父は、息子に自分の夢であった大学教育を受けさせることにひどくこだわった。修平は、学資の見通しがつかないことを気にしながら、背中を押されたように高校と師範学校の両方をかけることにした。

しかし、その頃の上級学校には、中学卒業生に倍する軍関係諸学校からの復員学生が大挙して詰めかけていた。戦災を免れた金沢には、とりわけ希望者が多いといわれた。

その上、GHQ（連合国総司令部）は、上級学校への軍関係者の採用を定員の一割以内に抑えるという指令を出していた。たった一年半のあいだ軍の飯を食つたというだけの、名ばかりの軍経験者であつた修平も、願書の裏面に自らの軍歴を朱書きされ、再度の負け戦を覚悟のうえ、半ば諦めの境地で受験に挑んだ。

祭や時習寮（学生寮）記念祭に、総勢二百人の寮生が尾山神社から香林坊、校門にいたる大通りに繰り出し、旗幟を押し立て陣太鼓を打ち鳴らして踊り狂う街頭ストーミュには、さすがの修平も目を見張らんばかりに驚愕した。しかも、この城下町では、学生の傍若無人ぶりを迷惑がるどころか、市内電車は一時停車して道を空け、人々は群がり集まつて見物し拍手さえ送るのである。むしろ憧憬にも似た寛大な市民の目に、修平はかつて経験したことのない衝撃を覚えた。

もちろん、この騒ぎに米軍のMP（憲兵）も押つ取り刀のジープを駆つてかけつけたが、多勢に無勢、ただ手を拱いて見送るよりほかなかつた。学校に“指導”してもなしのつぶて、さすがのGHQも、学生の蛮行にはほとほと手を焼いていたらしい。

一方、修平の住む寮室では昼夜をとわず激しい議論が闘わされている。いわく、生と死をめぐる人生論であり、愛と性をめぐる恋愛論であり、あるいは観念論と唯物論、実存主義や虚無主義の論争であった。西田幾太郎の「善の研究」三木清の「哲学ノート」、倉田百三の「愛と認識との出発」、カントの「純粹理性批判」「実践理性批判」などが、必読の書とされた。さらにはヘーゲルやマルクスからニーチェ、キエルケゴールなどといった、修平には初めて聞く先哲の箴言が耳を覆つた。

ところが、どういう巡りあわせか、修平は奇跡的にそ

の間隙をくぐり抜けることができたのだった。

一説によれば、当時の鳥山喜一という四高校長が、GHQの指令は教育の自治を侵すものとして、頭から無視したのだといわれていた。事実、戦争中修平と同じ釜の飯を食つた戦友と、敗戦後一年足らずで再び顔を合わせ、その奇遇に思わず手をとりあって再会を喜んだことがあつた。しかもそれが二人や三人ではなかつたのが、なんとも不思議に思えた記憶がある。

修平の奇跡は、大いにその余慶にあづかつたといえなくもない。

しかしこのことが、修平がその曲折を経て思わぬ好運に恵まれることになる始まりであつたと考えるのか、それとも初めから先が見える平凡な教師の道を選んだ方が幸福であつたと考えるのか、当然ながらこの時の修平にはまだ分るはずもなかつた。

ところで、狭い山国の、保守的で閉鎖的な世界で育つてきた修平は、金沢の街に降り立つやいなや、この百万石城下町の風土と、そのうえに、聞きしに勝る高等学校という独特の氣風にたちまち圧倒されてしまった。

弊衣破帽くらいは予想していたものの、時と所がまわぬ寮歌の放歌高吟、寮といわず街頭といわず繰り広げられる集団ストームの乱舞。わけても、年に一度の金沢市

いささかペダンチックな匂いに抵抗を感じつつも、独り孤讐を守るわけにはいかない。聞きかじるままに、そして意味不可解のままに、これらの書物を読み漁つた。中でも“無限と有限との相克の中に入間存在の悲哀を見出す”ことに懊惱した「絶対矛盾的自己同一」という西田哲学のメイン・テーマは、当時の四高生の精神構造を形成する基底となつていた。そして、二十年を経た今もなお耳朶の奥深く刻みこまれている。

こうした寮生たちの常識を超えた行動や、議論のための議論ともいえる果てしない論争も、この時代の思想の混迷に対する、若者のエネルギーの、ある意味での発散であつたのかもしれない。現に、この時期、進むべき道に迷い苦しんで、自ら死を選んだ学友が修平のすぐ近くにいたことに生々しい衝撃を受けたことを忘れるることはできない。

ともあれ、修平はこれまでの幼なかつた自分の思考力に鞭を打ちつつ、寮生活に耽溺した。昼は図書館通い、夜は寮歌とストームと議論に明け暮れ、授業は半ば代へんで済ませるという毎日であつた。ここまでくれば、虚飾などかなぐり捨てて、自ら素っ裸になる以外に方法はなかつたのである。

〈世間、世俗から超越して、真理を探求し、青春を謳

歌する。これぞわが四高の超然主義とする寮の氣風に、修平も自ら酔い痴れていったといえる。

入学当初、目を皿のようにして驚愕し戸惑いおののいた、数か月前の修平の姿はもうそこにはなかった。

半年が瞬く間に過ぎた。寮自治委員の改選を機に、修平は賄委員を自らかつてでた。自己変革のために案じた一計であった。

（世に「衣食（住）足りて礼節を知る」という。わが

四高生は、「衣」は弊衣破帽、「住」は荒れたるが故にわが時習寮をもつて誇りとする。しかるに如何せん。「食」にあつては“スイトン”でもつて、わずかに飢えを愈すのみ。カントもヘーゲルも飢餓の前には如何ともなし難し。よつて小生、渾身もつて食糧を確保せむ）修平は勇を鼓して全寮生の前で宣言した。

幸か不幸か、賄委員という誰もが敬遠した役目を担うこととなつた。

こうなれば、勇猛果敢、率先して身を挺する以外ない。その日から半年間、寧日もなく食糧の確保に奔走した。親しい寮友を誘い込み、トラックをチャーターして、白山山麓の村落へヤミ米の調達に乗り出すのである。山国育ちの修平にとって、農家とのやりとりはお手のものだ。

トラックの荷台には、下層に米俵、表面には薪を積み

いいワ」といわれて、ついその言葉に甘えてしまつたこととさえあつた。もつとも、この放埒ぶりでは出世は到底覚束ないと思い、金沢を去るに当つてなんとか清算を済ませはしたが。

夢中になつて過ごした寮生活もまたたく間に一年半余りが過ぎた。その頃から修平の胸に、寮生活への自省と静謐を求める欲求が忽然と湧いてきた。

折しも、学制改革のため最後となる新入生を迎えた寮室が手狭になつたこともあって、修平はこれを機に寮を退去し、学生下宿を探すことに意を決した。

幸い、一宿一飯の便宜を分け与えてくれた学友もいたが、予想していたとおり、食料の調達と自炊生活の壁がはだかつた。体調を崩しそうになつたこともあり、なんとしても食事付きの下宿を探そうと意を決したのだつた。

——ずいぶん遠回りをしたが、冒頭の、修平がリヤカーを引つ張つて金沢の街をさ迷い歩いている場面に、ようやく辿りついた。夢はまだ始まつたばかりである——

込んで偽装する。振り落されまいと、ヤモリのように薪の上にしがみつき、曲がりくねつた急坂をひた走る。途中、警察の検問にひつかかつた。警官は薪の中を探る振りをしながら、ニヤッと笑つて「急げっ！」ときた。

（金沢の警官はありがたきかな！）と、思わず手を合わせた。

その日から、食卓に僅かながらも銀メシが並んだ。寮生の顔に満面の笑みがこぼれた。

もちろん、怒号と喧騒だけの寮生活でなかつたことはいうまでもない。片町の裏通りに「ぼたん」という小さな喫茶店があつた。そこが、修平の唯一の安息の場であつた。「松田芳枝」という三十歳台半ばの美形のママが、いつも笑顔で迎え入れてくれた。レコードを選んで、黙つてショパンのピアノ曲を流してくれるのが常だつた。寮のコンパで酔いつぶれた修平を介抱してくれたこともあつた。永い間に滞つてしまつた代金を、「出世払い」で

この時、修平は“隅を照らす”悦びを初めて知つた。そして、このような波乱の寮生活をつうじて、「友の憂ひに吾は泣き、吾が喜びに友は舞ふ」と謳う一高寮歌の一節ながらに、生涯を通じて肝胆相照らす友を得たことも、その後の修平の人生にとって、なものにも替えがたい収穫となつた。

古い物・遠い夢

忠内正之

古陶聞話

「金富良瓶」

—金富良瓶— コンプラドールはポルトガル語で買弁つまりオランダ貨物の仲買人のことで、彼等によつて欧洲へ輸出された、醤油や酒を入れる磁器製の瓶をいう。

(やきもの事典より)

(二) 私の金富良瓶

私所有の金富良瓶（以後こんぶら瓶という）を下欄の写真で紹介する。

この瓶は、平成十七年秋、東京美術クラブで開かれた、アートフェア（骨董市）で求めたものである。

私の骨董狂いも長くなつた。その過程の中でこんぶら瓶については、資料や図録等によつて一応の知識を得て

いて興味があり、一度は直接出合いたいものと心掛けていたが品うすなのか仲々見つけることが出来なかつた。



高さ 19cm
底径 9.5cm

私のこんぶら瓶（ザキ）

クラブのフェアは正札会と比較して出展品のレベルが高く、年一回の開催で、一流の美術商が軒を並べて、

各々が前回以降ためていた自慢の品々を展示するのである。

その年も賑やかで一〇〇軒以上の店舗が競つていった。驯染みのK店を覗くと、珍らしくこんぶら瓶が十本近く並んでいた。既に図録写真等で解つてるのでこれがこんぶら瓶と直観した。

古伊万里だけに落ち着いた雰囲気がある。時代を経ている故か多少黄ばんだ白磁の出来で、肩のところにローマ字かポルトガル字かで、染付のマークが入つている。すぐに飛びついて買いたいという衝動にかられたが、珍らしい品があまりに沢山出ておりびっくりして瞬間とまどつてしまつた。また当日は他にお目あてがあつたので一旦あとにしてまず他の店へ廻つた。

他の店で目あての品を約定して、一巡後再びK店を訪

れた。驚いたことにこんぶら瓶はすでに大半が賣れてしまつて、あと二・三本残つてゐるだけであつた。

急いで店主に質すと「このこんぶら瓶はあるコレクターカからの出物を買ったもので、今時これだけの本数が揃つたのは珍らしい。今度のフェアの目玉商品として持つて来ました。値段も安くしてあるのでお買得ですよ。」といふ。

その日二ヵ店で買う羽目になるとは予算が狂つた。だがやめられる筈もなく、残つてゐる瓶のうち一番状態の

良いのを選んでもらつた。店主は「値段はこなれていますよ」という。こなれた値段とは業界の用語で「買易くしてある値段」だという程の意味である。つられた訳ではなく眞に欲しかつたので、言値で買つた。

あれから五年経つた。撫ぜたり、棚に飾つたり、花を生けたり、至福の時を楽しんでいた。

その後も骨董店巡りや、フェア等へこまめに足を運んでいるが、汚れたり、キズのある物、今出来の写し物、等はあつても、まともなこんぶら瓶に出合うことは無かつた。従つてこれを授かつたのはラッキーだったなど今も喜んでいる。

その後資料や図録等を調べて見ると更に次の様なことが解つた。

図録によれば著名な出光美術館に同類のこんぶら瓶が館蔵されていることが解つた。合計三本あり、図録には「古伊万里染付歐文德利、江戸後期」とある。サイズは私のものと殆んど同一で、時代も同じ頃であろう。

三本のうち一本は、アルファベットで「ジャパニッシュユ・ゾーヤ」。一本は「ジャパニッシュ・ザキ」とある。残る一本は細かく印字されており、特定の国向けのものだつたらしい。

ゾーヤは醤油のことであり、ザキは酒のことであり、

夫々中味を表示している。但しゾーヤ印瓶百本に対してもザキ印瓶は一本程度と言われ、ザキ印瓶は少い様である。幸にも私の瓶はザキ印で貴重な方であった。

江戸時代の日本のかくれた輸出品のひとつに醤油がつた。現在では醤油は世界各地で調味料としてボビュラーな存在となっている。現にアメリカなどではキッコマンが現地生産して販賣している程であるが、十八世紀の頃日本の醤油は不思議な東洋の調味料としてヨーロッパ人の間で珍らしがされていた。

長崎の出島に居住して貿易を行っていたオランダ人は日本人から樽詰めの醤油を買い入れ、瓶詰めにして輸出した。また量は少いが酒も外国に出されたのである。この醤油・酒を入れる瓶を生産した窯が長崎縣の波佐見焼であった。

波佐見焼は広義の伊万里焼に入る。磁器製のため水洩れが無いので、ガラス瓶が普及するまでは波佐見で作られたこの瓶が長期間に亘って大量に使用されたのである。

こんぶら瓶の語源は出島で貿易を営んでいた仲買人の名称であるコンプラードールからとったとの説が有力である。古伊万里の一種であるこの瓶に記された横文字が当時の異国情緒を表しており現在の好事家の間で人気が出

長崎ではたっぷりと自由時間があつた。そこで先づグラバ園を見学することにした。

私も妻も再度の訪園だが、今回はゆっくり廻ることが出来たので楽しめた。新緑の中すばらしい景観と共に古くて美しい什器や食器等の印象が残った。

まだ時間があったので石畳のオランダ坂へ向つた。長崎には雨が似合うと言うが、当日は好天で初春ではあっても九州の炎天下、歩けば暑い。途中ふと足を止めて右方の横丁を見ると一軒の骨董店が看板を出している。好きな途である一刻の涼をとるつもりでその店に立ち寄つた。嫌な性癖である。

小さな店ではあるが、いかにも観光地にふさわしい親しみのもてる上品な店構えである。

但し一見したところ並んでいる品々はみな平凡で、魅力のある物はなかつた。がつかりしたが「また余計な支出をしなくて済んだ」と言う矛盾した安堵心を一方でもつた。嫌な性癖である。

更に奥へと進む。すると驚いたことに右の戸棚に何と三本のこんぶら瓶が並んでいるではないか。一本は私所持と同様の乳白色の染付瓶、との二本はサイズが少し小さい印判手で明治以降の作と見受けられた。矢張り地元にはゆかりの物が残つてゐるのだなあと感概を新たにした。値段は本格的な方が私の買った三倍程度と高く、しかも上りはきれいではない。また時代の下

ているのである。

多量に生産され使用されていたと言つても現在流通している物は当時の未使用のものであつたり、里帰りしたもので当然汚れたものだつたりして現存するこんぶら瓶は数が少ない。殊に美品は稀で評価が高い。

幕末に長崎に来航したロシヤ軍艦に徳川幕府が数百本の醤油瓶を籠詰めにしてプレゼントした記録が残つていると言う。

明治になつて小説家の徳富蘆花が、ロシヤの文豪トルストイを訪ねたおり部屋にこの瓶が飾つてあるのを見たと言う。たぶんそれはその中の一本だつたのだからろう。

(二) 長崎でこんぶら瓶に会う

平成二十一年四月、私共夫婦は西九州への小旅行に出た。観光や温泉巡りが主体である。

最近ではあまり遠出は無理なので専ら気楽な老人ツアーリに年一・三回参加している。

今度のツアーは茶道や茶陶に関する史跡の豊富な、唐津、伊万里、平戸、長崎、雲仙、島原、熊本迄のコースであり興味深かつた。そして長崎でこんぶら瓶に出会つた。

がる方でも倍程度と高くてびっくりした。

人柄の良さそうな若主人に聞くと、最近は特に長崎へとこんぶら瓶を求めて来る人が多いという。一方で瓶の出物は少なく品薄である。市場に出ても買手が多くて値が吊り上がり仕入が難かい。地元業者としては何としても品揃えをする必要があり、高価仕入となるので、つれて販値は心ならずも割高になつてしまふ。お客様これでも勉強していますよ。最近では仿製品(うつしもの)まで出ている始末で、そんな物でも〇万円はしますよと言う。

結局、魅力のあるこんぶら瓶ではなかつたので見送ることにした。替りに妻の希望で中国の建窯製^{ヨウヤ}天目の小瓶を買つた。

何の変哲もない瓶であるが時代もあつて、物は良さそうである。一輪挿しか振り出しに転用出来ると思われる。意外に値段は安かつた。

これでも長崎の思い出の品にはなる。

期待した壠出物はなかつたが、店の主人からお茶をご馳走になりながら長居して聞いた話が面白くてこれが大収穫であった。

それは「ジャガタラお春」と「ンプラ瓶にまつわる物語りである。その内容を次の様にまとめて見た。

(三) ジャガタラお春

一六四六年、日本の正保二年である。

その年の二月のある日、バタビア（ジャカルタ）で一組の男女が結ばれた。役所へ出された結婚届では、新郎はオランダ東印度会社員のシモン・シモンセン、新婦はイエロニマ・マリア・お春である。

お春は寛永元年（一六二四）に平戸で生まれた。父はイタリア人パイロットのニコラス・マリン。母はマリアと呼ばれた日本人女性である。ニコラスは、お春が幼いころ病死し、彼女は母マリアの手で育てられたが、寛永十六年十五才のとき、ポルトガル人の追放と合わせて母子共にバタビアへ追われた。四つ違いの姉マグダレナ・マンと三才になるその子の万吉も同行した。

その年、幕府は三百十九人の混血児を海外へ追放している。二百八十七人がマカオへ、お春を含む三十二人がオランダ船ブレダ号でバタビアへ送られた。幕府の鎖国政策はそこまで徹底していたのである。

バタビアで、やがてお春が結婚した夫のシモンセンは、その父親が、かつて平戸の商館に勤務しており、その折に日本人妻との間に生まれた青年であつた。

シモンセンは家族を大切にし、また東印度会社では勤務振良好であった。やがて上級商務員、港務長官と次第に昇進し、一六六六年（寛文六年）には中国人財産管理

アヘ戻ってきたその船は日本からの醤油や酒や、香の物を沢山積んできてくれた。

久しく出会うことのなかった醤油の香りと味がお春をどれほど喜ばせたことだろう。

長崎の醤油がこの様なしやれた横文字のある瓶に入つて海外へ輸出されていることを、お春はまったく知らなかつた。お春が平戸を追われた当時は、長崎のコンドル（金富良仲間）はまだ組織化されておらず、從つてこんぶら瓶は世に出ていなかつたからである。

お春はこんぶら瓶に入つた醤油と酒を大量に買い込んだ。貿易商社の幹部であつた夫の立場からすれば、それらの品々を手に入れることは容易であつたし、その夫は平戸で生まれ、ある年まで平戸で暮らした日本経験者だつたから、彼もお春以上に日本の醤油や酒をなつかしがつたのは当然であつたろう。

中味を使つてしまつたこんぶら瓶を、お春は、居間の衣装箪笥の上に何本も並べた。

その白っぽい瓶は、彼女の生れ育つた故国の自然や四季を凝結した様な柔かくて快い手触りをもつていた。瑞々しい光を放す膚をもつていた。素朴な中に、そのブルーの文字が見事なコントラストを保つてゐる。

彼女は一日に何回となく瓶を撫で、掌の感触で、生まれ故郷の空や山河を想つた。

一六七二年（寛文十二年）に、夫のシモンセンが急逝

委員となつたが、そのポストを最後に会社を退職、以後自分で数隻の船を有して貿易業を営んだ。バタビアの教会の長老をもつとめたという。

シモンセンとお春の間には、四男二女、合せて七人の子供がいた。夫の庇護のもと、バタビアでのお春の暮らしさは、充分満ち足りたものだつたと言える。しかし十五才で母国を追われ、そうして、ついに帰国のかなわなかつた彼女の心の底には望郷の思いがやるせなく波うつていたのである。

彼女のそんな生活の中で一六五五年（明暦元年）から禁令が僅かにゆるめられ、一定の手續きさえとれば故国との文通が許されるようになつた。お春と同じ船でバタビアへ来た混血児たちが、オランダ船に託して故郷の縁者に送つた手紙が、後に言われるジャガタラ文である。ジャガタラとはジャカルタの訛つた言い方である。禁令がゆるめられたと言つても、それは手紙を託すことが出来る様になつただけであり、混血児たちの日本恋しやの思いはより以上につることになつたものと想像される。

お春も、オランダ船に託して故郷の身寄りに手紙や物品を送つた。バタビアへ入港するオランダ船は、インドネシア各地で砂糖や織物を仕入れて、頼まれた手紙他と共に日本へ運んで行く、そうして嬉しいことに、バタビ

アヘ戻ってきたその船は持ち船を処分した上、夫の残してくれた莫大な遺産によつて、経済的には恵まれた余生を送つた。

お春の死は一六九七年（元禄十年）、七十一才であつた。

生前、自宅の居間でくつろいでいる彼女の写真が、出島経由で平戸の身寄りに送られてきたことがある。彼女の背のところに衣装箪笥があり、その上に数本のこんぶら瓶が並んでいるのが写つてゐたそうである。

赤い花なら曼珠沙華、オランダ屋敷に雨が降る——と長崎物語りの歌詞に謳われるジャガタラお春は、このお春さんである。

悲哀に滲む歌謡曲のメロディから想像するよりもずっと幸福だったお春の一生と解ればホッとするのである。勿論、つのる望郷の念は如何ばかりであつたろうか。

私は自宅のこのこんぶら瓶を眺め、愛玩しながらお春さんの思いを偲んでいる。

ジャカルタの文書館には、お春が一六九二年（元禄五年）と死亡直前の九七年にしたためた遺言状、それにシモンセンとお春の結婚届の書類が、いまも保存されているという。

もつともこんぶら瓶とお春のかかわりを語る資料は写真以外には何も残つていらないらしい。

やきもの百科	中島誠之助	淡交社
日本の陶磁	岡田宗叡	光芸出版
やきもの事典	小松正衛	光芸出版
古陶見どころ	勘どころ	平凡社
うれしい骨董	岡田宗叡	淡交社
夙の声よりも遠く	中川友吉	その他

月例会

吉田忠雄

平成22年6月27日

人間は一人では生きられない。家族が最も身近な人々である。これはいやおうなしに仲良くしなければならない。家の外でも親しい人が必要である。仕事場ではまわりの人と協調し、規律があり、しかも和やかな雰囲気を作らなければならない。仕事を離れたところでも気の許せる友人がほしいものである。

私は現在4つの親しい個人とグループがある。個人の一人は故郷足利での古くからの親友である。あと3つはグループである。すなわち、同人誌「まんじ」の会の人々、火薬学会関係の友人および東大駒場寮で同室であった人々である。ここでは火薬学会関係の友人について記す。

私は昭和31年に東大工学部を卒業すると日本化薬株式会社に就職し、山口県の厚狭作業所に配属された。ここはダイナマイトを作る工場である。私は入社1年目には

ニトログリセリン製造工場に現場係員として配属され、2年目にはジニトロトルエン製造工場に現場係員として配属された。

ニトログリセリンは非常に危険な物質であり、この職場では、現場の見回りと日報の整理・解析に専念した。ジニトロトルエン製造工場は私にとつては天国であった。ジニトロトルエンはニトログリセリンに比べて危険性が格段に低く安心して実験研究ができた。また課長、係長は熱心に指導してくれ、現場の作業員とは親密に仲良く仕事ができた。仕事は、東大で恩師の難波先生から講義を受けた内容そのものであり、難波先生と頻繁に連絡を取り、技術情報を交換し、教えを請った。

毎年秋には九州小倉で火薬学会秋季研究発表会が開かれていた。私も入社2年目の秋にTNTの製造法の歴史調べて九州での火薬学会に発表した。この発表によつ

て火薬学会の会員の人々に私の存在が知られるようになつた。

しかし、昭和35年から37年にかけて別の仕事を会社から命じられ火薬から離れた。火薬学会の幹部たちはこれを憂い、私は昭和38年4月に東大の火薬学教室に勤めることになった。

ここから私の火薬学会との付き合いが始まった。私はまず工業火薬協会誌（現火薬学会誌）の編集委員に任命され、のちに長く編集委員長を務めた。火薬学会は当時東大の火薬教室の1部屋を借りて置かれ、平田理久三氏が火薬学会の事務局長であった。火薬学会会長は疋田強教授でその研究室の米田園昭さんが平田さんを補佐していた。

東大農学部の門の隣に南州屋という琉球泡盛を出す居酒屋があつた。私もある時期から南州屋に通うようになつた。それは、竹山君という大学院生に誘われたからである。最初はどこの馬の骨かという扱いであったが、頻繁に通ううちに上客扱いを受けるようになった。

南州屋には先輩として米田さんが通っていた。米田さんはお供には越君と安東君という米田さんと同じ研究室の大学院生が付いてきていた。越君はあまり酒は強くないらしく、カウンターに頭をつけてよく寝ていた。この

越君が今は東大大学院の教授で、火薬学会の会長である。安東君は酒が強く豪放な人であったが、現在は福井大学

の教授をしている。

私は南州屋には研究室の竹山君と藤原君を良く誘った。竹山君は現在岡山商科大学に、藤原君は三井住友化学（株）に勤務している。

私は米田さんは気が合い親しくなつた。米田さんも私も60歳の定年で相次いで東大を退官したが、二人の火薬学会の世話を親交は続いた。何時からかは定かでないが、米田さんは日本化薬（株）の橋爪さんと親しくなり、その親交は現在まで続いている。飲みに行くときはいつも一緒である。

いつからか、米田さん、橋爪さん、越先生と私は月に一度夕方越教授室で待ち合わせて本郷・根津かいわいで飲むようになった。月例飲み会の始まりである。また、いつからかこれに小川先生が加わった。メンバーの職を見ると、小川先生は、前火薬学会会長、越先生は現火薬学会会長、米田さんは前火薬学会事務局長、橋爪さんは現火薬学会事務局長で、わたしは火薬学会名誉会員である。まさに火薬学会グループである。

米田さんは私と年齢が近く私は米田さんと一緒にいると年寄りのコンプレックスを感じないで済む。米田さんは正義感の強い人で尊敬していたが、毎日自宅で般若心経の写経をしていることを最近聞いた。立派な人である。

橋爪さんは、日本化薬（株）に停年まで勤め、現在は米田さんの後を継いで火薬学会事務局長である。非常に

世話の上手なひとで、私たちはその恩恵を受けている。

小川先生は横浜国立大学名誉教授で総合安全研究所の専務理事であり、発破技術の権威である。酒は強いが乱れることはなく、まじめな人である。あやかりたいと思っている。

最近この月例会に臨時に参加する人が出でてきた。藤原修三さんは前産業技術総合研究所の産業安全研究センター長である。ときどきこの例会に参加するようになつた。会員ではないが会員の推薦によつて女性も参加することがある。馬里邑れいさんは女流作家である。「身代金」などの作品がある。彼女も例会に参加したことがある。

今年の3月27、28日には日本化薬伊東保養所で拡大月例会を開いた。2日目は伊豆高原で満開の桜を楽しんだ。これには、中村順（科警研）、恩田敏男（細谷火工）、井出記美代（足工大）の諸氏も臨時参加した。

化粧のルーツを訪ねて（一二二）

第九話 石器時代の化粧文化

鈴木守

古代文明発祥の地に化粧文化が開花していたことは前報まで述べた通りである。今回は開花以前の搖籃の時代として、石器時代の化粧について探索することにしよう。

第一節 石器時代の編年

石器時代は、人類が礫石器を使い始めた時から初まり、石器のタイプによって、旧、中、新の石器時代に三分され、更に旧石器時代は前期、中期および後期に区分されている。

石器時代の編年は地域によって異なるが、目安として捉えると、礫石器と握斧石器を使っていた二百万年前頃から一五万年前頃までを前期旧石器時代と呼び、原人の

時代であった。

次いで、一五万年前頃から四万年前頃には、ネアンデルタール人や旧人型サピエンスが剥片石器を使っており、この時代を中期旧石器時代という。

五万年前頃に至ると、クロマニヨン人などの現代型サピエンスが誕生して石刀石器を開発し、この石器で代表される時代を後期旧石器時代と呼称され、一万年前まで続く。

旧石器時代と新石器時代の狭間の時代には、一万四千年前頃から石匕（石匙）石器を特徴とする文化が現われ、七千年前頃に新石器時代へ進化した。これが中石器時代である。

七千年前頃になると、農耕と牧畜が行われるようになり、磨製石器で代表される新石器時代に入り、この時代

は三千年前頃まで続いた。わが国の新石器時代は、二万二千年前頃から始まつた縄文時代に該当し、二千三百年前頃に弥生時代へ代替わりした。

第二節 化粧の足跡

石器時代の化粧の足跡について時代別に紹介するが、石器時代の化粧の証拠というのは、櫛や抜歯遺体などは別として、多くの場合、情況証拠や傍証に基づく推論であることを前提にして話を進める。

一 新石器および中石器時代

わが国の縄文時代には、赤や黒の漆を塗つた櫛が数点出土している。中で最も古いものは、五千年前頃の福井県吉浜遺跡出土の櫛であった。また縄文晩期に盛期を迎えた抜歯習俗は縄文早期・中期の貝塚にも認められている。

二 旧石器時代

旧石器時代末期の日本には、陸前中沢井浜に赤色の人骨が残され、沖縄港川遺跡から一万八千年昔の抜歯遺体を散布しており、呪術的な匂いが感じられた。

中国における化粧文化を見ると、山東半島周辺の地域には六千年前頃の抜歯遺体が眠つており、龍山文化（四千五百～三千八百年前頃）や仰韶文化（六千八百～六千

年前頃）の頃の石笄や櫛などが発掘され、新石器時代晚期の銅鏡も発見されている。化粧を示唆する資料としては、耳環をつけた人物像を始め、耳環、指輪、腕輪が発掘されており、龍山や仰韶では黒、青、赤、白の釉薬を施した黒陶や彩陶が作られ、更に龍山文化の頃にはシャーマニズム、仰韶文化ではトーテミズムの氣配があつた。地中海沿岸に移ると、エジプトでは目の隈取りに使用したパレットが、イエリコの遺跡から櫛と化粧品が出土している。

中石器時代の資料は乏しく、唯一の例はドイツ・バイエル地方のオフネット洞窟出土の頭蓋であり、褚土に覆われていた。

中国では、一万八千年前頃に周口店上洞人が住んでおり、洞に彼らが装着した首飾りがあり、埋葬した遺体周囲に赤い粉が撒かれていた。

後期旧石器時代四万年前頃のスペイン・アルタミラ洞窟には、赤い石を碎いた跡と赤く塗つた人物を描いた壁画があり、アルタミラを始め、フランコ・カンタブリア

美術には赤鉄鉱、黄鉄鉱、マンガン鉱、白亜、骨を焼いた灰などの顔料が使われていた。

その当時のオーストリアでは、ビレンドルフの石のビーナスと呼ばれる妊婦像が彫られ、局部の刻みに赤い顔料が残っていた。また、クロマニヨン人は髪を結っていたという文献も見られた。

中期旧石器時代のネアンデルタール人は、体に岩絵具や赭土を塗っていたといわれ、六万年前頃のイラク・シヤニダールのネアンデルタール人の遺跡には、埋葬と供花の跡が見られた。

同時代の旧人型サピエンスは、五万年前頃のケニア南部の遺跡にダチョウの卵殻で作ったビーズを、七万七千年前頃の南アフリカ南部ブロンボス洞窟に貝殻のビーズを残していた。ビーズは腕輪か首輪に使用したようである。この洞窟には、長方形の赭土の塊が残されており、その表面には幾何学模様が刻まれ、身体彩色や日焼け止めに使われたのではないかと推測されている。

前期旧石器時代に入ると、二〇〇万年前頃のイギリス・スウォングスクームで発見された石器には中央に一枚貝の化石が配され、意図性が感じられた。また、ニース近郊には三五万年前頃のテラアマータ原人のキャンプ跡があり、そこから鉛筆の芯のような赭土の塊が出土した。この赭土は日焼け止めを兼ねて狩猟の無事と豊獵を祈願する護符に使用したと推測されている。

兼ねて呪術的な護符として赤土を塗布したと推測されている。だが、二つの機能を同時に認識して化粧し始めたとは思えない。三五万年前よりも昔に、既に日焼け止めなり、あるいは呪術的な化粧のいずれかが先行していたはずである。

因みに、化粧用に使用したか否かは別として、テラアマータ原人以前、七三万年昔のイタリア・イゼルニア遺跡に赤土を意図的に付着させた石組が残されており、この赤土は魔除けの護符だつたに違いない。更に古く、一五〇万年前頃のエチオピア・ガデブ遺跡に使途不明だが、赤土使用の痕跡が見られた。また一五〇万から一〇〇万年前のケニア・チエソワンジャ遺跡には火使用の跡があり、一五〇万年前頃には赤土同様、木炭や灰を日焼け止めに使うことは可能であった。

これらの資料から早期人類の化粧動向を想定すると、アフリカで誕生した原人が日焼け止め、または呪術的護符として赤土を塗るようになり、アフリカを北上して南欧に渡り、イゼルニアに呪術的な護符の跡を、テラアマータでは日焼け止めを兼ねた呪術化粧の跡を残すことになった。

なお、イギリスに渡った原人はスウォングスクームに、二枚貝の化石を中央に配した石器を残しており、この石器には美的センスを感じ取れたので、その時代・一二〇万年前頃の原人には、既に美的感覚が芽生え始めていたの

化粧用に使用したか否かは別として、七三万年前頃のイタリア・イゼルニア遺跡に赭土が付着した石組が残つており、一五〇万年前頃のエチオピア・ガデブ遺跡にも赭土使用の跡が認められている。

炭や灰も顔料になるので、火を使用した跡を探ると、六〇万から五〇万年前の北京原人を始め、火使用の跡は諸所にあり、古くは一五〇万から一〇〇万年前のケニア・チエソワンジャ遺跡でも発見されている。

第三節 石器時代の化粧史

石器時代は二百万年前から三、四千年前まで続き、時間的に極めて長い歴史にも拘らず、化粧資料が少なかつたので、少ない資料の間を推測で結び付けながら、石器時代の化粧史を綴ることにする。

前節の資料で、化粧行為が推定されている最も古い証拠は前期旧石器時代・三五万年前頃のテラアマータ原人が使った赭土であった。テラアマータは南仏コート・ラジュールのニース市内の地名であり、現在テラアマータ博物館に出土品が展示してある。なお、赭土やベンガラなど赤酸化鉄を含む赤色顔料を「赤土」と表記する。

一 前期旧石器時代の化粧

テラアマータ原人が施していた化粧は、日焼け止めを

ではなかろうか。

二呪術的赤化粧の系譜

前項で述べたように、呪術的な赤化粧は前期旧石器時代の一五〇万年前頃から三五万年前頃までに成立したと推測されるので、この化粧の系譜を辿ることにする。

テラアマータ原人以降の赤化粧、ならびに呪術もしくは宗教的な資料を見ると、中期旧石器時代には、ネアンデルタール人が体に岩絵具や赤土を塗っていたといわれており、七万七千年前頃の南アフリカ南部に住んでいた旧人型サピエンスは、身体彩色や日焼け止めに使われたと思われる赤土の塊をブロンボス洞窟に残していた。また、イラク・シャニダールのネアンデルタール人は埋葬と供花の跡を残していたので、六万年前頃には既に宗教心が育っていたのであろう。

後期旧石器時代四万年前頃のスペイン・アルタミラ洞窟には、赤い石を碎いた跡と赤く塗った人物を描いた壁画があり、オーストリア・ビレンドルフ出土の石のビナスの局所の刻みに赤い顔料が残っているため、当時のクロマニヨン人が赤化粧を施していたことが定説となっている。アルタミラ洞窟は豊獵などを祈願する呪術的な聖所とされており、赤く彩られた妊婦姿の石のビナスは子孫繁栄を願った呪術的な彫像であった。

中石器時代に入ると、ドイツ・バイエル地方のオフネ

ット洞窟には、赤土で覆われた頭蓋が残っていた。

東アジアに目を向けると、後期旧石器時代のわが国にも、陸前中沢井浜に赤色の人骨が残され、赤化粧伝播の跡が認められた。また、一万八千年前頃の中国・周口店上洞人や三内丸山遺跡の縄文人は、遺骸の周りに赤い粉を撒いていた。

石器時代より後のわが国の赤化粧に目を通すと、弥生時代の吉野ヶ里遺跡には顔面に朱が付着したシャーマンの遺体があり、邪馬台国の卑弥呼も赤化粧をし、古墳時代、埴輪の巫女像にも赤化粧が施されていた。かように、アフリカの前期旧石器時代に発した呪術的な赤化粧は日本本の古墳時代まで連綿と続けられていたのである。

二 その他の化粧

その他の化粧として、美的目的の化粧、光防御の化粧ならびに拔菌化粧について触れておく。

① 美的目的の化粧… 美的目的の化粧を著した資料は見られなかつたので、櫛と鏡を美的な化粧の指標とし、これら用具を使用した証拠を探すと、櫛は五千年前の縄文人が使つており、新石器時代の中国には櫛と鏡があつたので、新石器時代の美的化粧は確実に存在した。

化粧用具とは別に、装飾品や人工的な造型物は、美意識や美的感覚存在の証拠とすることができるので、これらの跡を辿ると、装飾品は中期旧石器時代のアフリカに、

約五万年前と七万七千年前頃の身体装飾に使つたビーズがあつた。

また、中国新石器時代の龍山や仰韶では、黒陶や彩陶を作つており、二、四万年前頃のクロマニヨン人の手による絵や彫像が残されている。これらの作品には美的センスを窺うことができる。中期旧石器時代には、前出ブロンボスの旧人型サピエンスは、長方形の赤土の塊の表面に幾何学的模様を刻み、更に古く、二〇万年前頃のスウォングスクームの原人は美的センスを感じさせる石器を作つていた。この作者は一枚貝の化石が埋まっている石を使い、貝殻を中心配して石器を作り上げたのである。

以上のような傍証を重ねると、前期旧石器時代の二〇万年前頃の原人に美的感覚の崩芽が見られ、中期旧石器時代以降の人たちは、既に化粧や装飾品によって美を演出していたと判断せざるを得ない。

② 光防御の化粧… テラアマーダ原人の赤化粧は呪術目的のほかに、日焼け止めにも使われていたと推測され、ブロンボス洞窟に残された赤土も身体彩色と日焼け止めに用いられたとされている。その後の石器時代の資料には、日焼け止めは登場しなかつたが、光防御の立場でいえば、新石器時代のエジプト人が光を防いで目を保護するために、目の周りに隈取りを行つており、この化粧は古代エジプトの代表的な化粧となり、メソポタミア

やエーゲにも伝播し、やがては美を演出する眉目化粧へと進化した。

③ 拔菌化粧… 縄文晩期の日本や新石器時代の中国山東省沿岸部に流布した成人表示の拔菌化粧は、一万八千年前頃の沖縄で行わっていたが、中石器時代の北部アフリカにも拔菌例が認められているので、アジアとアフリカで独立的に発生したのか、拔菌風習が伝播したのか不明であるが、後者の場合には、一万八千年より遙か以前に発祥したと推論せざるを得ない。

馬場悠男監、人類の起源、集英舎、一九八七

F. ファッキー二、人類の起源、同朋舎、一九九三

今西錦司ほか、人類の歴史、河出書房新書、一九九四

宮本正興ほか、新書アフリカ史、講談社現代新書、

一九九七

新人の起源を実証、朝日新聞一月一一日朝刊、

二〇〇二

平松隆円、化粧にみる日本文化、水曜社、二〇〇九

(次号に続く)

これまで述べてきた石器時代の化粧資料は考古学的な出土品を頼つてゐるため資料的には限界があるが、それでも可能性を含めると、旧石器時代には既に始まつてゐた化粧としては、呪術的な赤化粧、光防御の化粧、美的目的の化粧ならびに成人表示の拔菌化粧が見られ、中でも、前二者は一五〇万年前頃まで遡る可能性が窺えた。

参考文献

小金井良精、人類学雑誌三五巻、一九二〇

世界美術全集1、平凡社、一九五六

世界大百科事典、平凡社、一九七一

富村傳、文明のあけばの、講談社新書、一九七八

W. ピルツ、ハーマンライマー・コンタクト四二号、

一九八七

陰翳の美学（その二）

外山知

第三章 美を構成する要素

一、美の心理的要因

芸術家の意図は、美作を構成する前提にある。これは総ての表象を、如何に形成していくか。作者の心的要因に深くかかる所が多い。

すなわち、作者のもつ印象、感情の高ぶり、目からの光、大脳の中枢神経などで、どう捉え知覚し、構成に生かしていくかが、基礎的素因と言つてよい。

勿論、思考、思惟を司る、心神経の働きが、左右することは論をまたない。その働きが、構成を如何に形成していくか、近因してくる。

従つて視神經から受ける素材を、脳の中枢神経が、ど

う捉え、構成素因として結び付けていくかが、問題である。

かぎられたセンスの閃きが、形成過程に大きく拘つてゐることは勿論である。

今、私達の生命を司る細胞組織を、考察対象として、美的センス形成を探つて見たい。

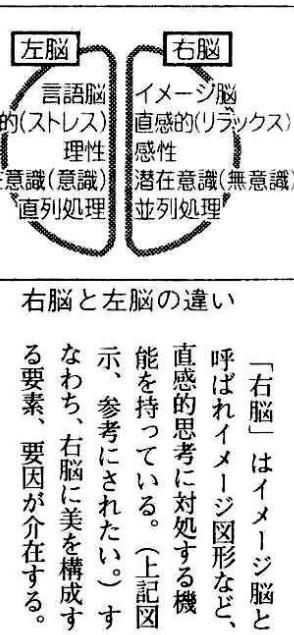
2. 脳の基本構造についての考察

それには茂木博士の「意識とは何か」に教わる所が多い。

人間の脳細胞は大脳半球（脳のしわ）という部分が、左右一対で出来ていて、「脳梁」と呼ばれる器管でつながつてゐる。この大脳半球を包む、大脑新皮質と呼ばれる表皮は、三ミクロン程の薄い膜で覆われている。

こゝには百四十億個とも言われる神経細胞「ニューロン」と、「ニューロン」を繋いでいる神経回路「シナプス」が、複雑な情報ネットワークを形成している。そして外部からの情報を処理するネットワーク網に、直接結びついている。

その左右一対の大脳半球のうち、「左脳」は言語脳をつかさどる。言語、概念、論理的思考などに対応するのである。



「美を構成する基礎的要素」の心理的要因は、同時に脳細胞の「右脳」の働きでもある。

すなわち、感性界を支配する。

1. 芸術家の意図。

2. 心的内容のイメージ。

3. 人間性と情緒性。

4. 環境性と心的要因。

5. 美的的感受性の捉え方。

いずれも右細胞を明確に究明して行く道程で、右の各要素が捉えられる。そこで心的内容を如何に引き出すか、実験心理学の領域も必備となる。

知覚の分野にまで構成されて行くことが、基礎要因究明の前提条件となる。美を構成する要素も、かくて生まれる。

たゞ先程「右脳」の働きを活性化するに及んで、「左脳」の思惟的、論理的要因、すなわち、感性に対する理性が、頭在意識をもつ。

右脳の潜在意識（無意識）に対し、「左脳」は意識的に、しかも直接処理される。

バランス感覚は右記に論述したが、細胞を適切に働くには、美的世界を捉える、基本的な視神經細胞が必要不可欠となる。

この働きは経験的、体験的に捉えられることによつて「右脳」の細胞効果が増大する。

それを認識する過程に「右脳」の体系化が論理的になれ、物象を捉える。視覚で捉えた物象が、どんなであるか。機能はどうか。

瞬時に認識できる働きは、脳細胞の発達した人間の英

知が、偉大な生命体であることを知る。

それこそインターネットの介入を待たず認識され構成される。

人知の仕業とはいへ、脳の働きは偉大である。しかし、

もし脳細胞が正常に働くかなくなつたらどうであろう。人類の英知はイメージすら湧き起らず、やがて廢人生活となり、そして死に至る。

私達はこの様な危機的状況にならない限り、その働きすら知らないでいる。

脳の働きが正常であつてこそ、感覚・知覚を供給出来る。脳が先駆的に開発されて行く上に、重要なステップを、教育、環境に託している。

その対応を人知の心理的要因として問題提起される。

野に咲ける白百合の花を単に美しいと感ずる働きから、より高度な情緒的感覚へと思惟する働きは、やはり「左脳」の発達過程に左右される。

美学への導入は、「左脳」の働きがあつて、体系的に整のう。

白百合の花を見て、様々な印象が想起される。段階こそ違うが、意識がより深いか、浅いかは一様に解されない。

「左脳」の発達過程に左右される。

人知の英知は、この中枢神経が供應しあつて、美を構成する要素となる、左右の細胞が連鎖反応を起こし、より高次の美意識及び美学を構成する。

單なる視覚的光が美の光彩となつて、前記Cの脳細胞で感覚的に受け止められる。

そして美の構成が、Cの（一、二の）認識過程に向つて前進する間に、統一的思惟が、美学の領域まで発展する。

科学的に論理認識する判断力は、視覚への光彩認識だけでなく、私達の感覚が捉え得る領域すべてにまたがると言える。

たとえば音は聴力を通して、リズムカルな世界を細胞能力に感知して、それを美的なリズムに構成する。音感もまた人を感じさせる美意識の一つとして、光彩の場合と同様、私達の知覚を振り動かす。すなわち、細胞能力のリズム美を構成する。

今までの論及以外の現象的芸術分野でも、構成要素や表現力の相違はあつても同様と見てよい。構成要素が、多様の体験能力を通して、美的構成に影響する事は論をまたない。

3. 脳神経と光彩（眼球から脳細胞への働き）

脳細胞の右脳と左脳についての構造的機構は前述の通

い。

例ば、旧約聖書に「ソロモンの栄華は野に咲ける白百合にしかず」と文献引用によつて、自然植物が人間世界に位置づけられる英知によつて、認識することが出来る。

自然世界が人間世界に例えられるのは、美学、美的体

すなわち、比較学の領域も想起される。

系の中に位置づけられる英知によつて、認識することが出来る。

このように哲学的思惟は、カントの判断力批判の中に、感性によつて摂取された物象を、理性的頭在意識にまで昂揚して行く、過程に取上げている。

A、美的世界観の確立

B、美的存在価値

C、美的認識的世界（一、感性的認識、二、理性的認識）の統一的思惟が思考される。

D、美的認識過程の構成要素の一因も顕現される。

E、美的連續性と非連續

F、美的形而上学的美意識と形而下學の対象的意識

G、美的認識の世界

などと、「左脳」領域として考察される。

感性的世界に対し、理性的論理世界の構成は、左右一対の脳細胞の認識判断力にかゝつてくる。美を構成する要素も、かゝる認識能力なくしてありえない。

H、力学的要因

I、美的認識の世界

りである。

たしかに私達の脳細胞は、眼球の左右の水晶体を保護する機能、すなわち、角膜、虹影、後眼房、結膜、外・内直筋、毛様体から水晶体を結ぶ水晶体、硝子体、網膜、視神經乳頭、脈絡膜の各器官を持つてゐる。

水晶体からくる光をほどよく屈折させ、脈絡膜の中心窩を包む眼窩脂肪から、視神經を通つて、左右が一度脳梁で合さつて、半分が交差する。

再び左右に分かれ大脳の真中に行き、そこからバラバラの線維となつて、後頭部にある大脳皮質の視中枢で、はじめて「見る」という感覚が生まれる。

わずかに直径およそ二四ミリの眼球によって、「見る」、「見える」働きが生ずる。

脳の基本構造でも記述したが、左の視野からは、右の脳だけ、右の視野からは左の脳へだけ、その視覚情報が入る。

脳梁の連絡によつて、バランスが保たれてゐる。たゞ左脳、右脳の働きについては、脳梁を断ち切つての医学的治療法に待つ。

そして、それぞれの機能が顕現され、各半球の持つ特性が現われる。

一般的には左半球は時間的情報の処理、継時的な処理に優れている。右脳の方は、同時的、空間的な情報の処理にすぐれている。

現代流に言えば左脳は分析的で、デジタルであると表現すれば、右脳は総合的でアナログ化とも呼ばれている。

左脳の論理的・思考的判断、文章表現能力に対し、右脳のもつ特性は、例えば美人の表象を持ち出すまでない。

それは、感覚的、また空間的な総合的イメージからくる、第一印象によつて感受される。

同じようなことで、音声、例えば電話で聞く彼女の音質は、音声的に巾広い音量をもつ。他と区別が可能で、感覚、感能を読み取ることが出来る。水晶体で光彩を感じ、さらに脳の視神経で受けとめる。

そして、感情豊かな情緒性を育み、心豊かな生活心情に直結して行く。

意識の問題とか、心の問題は、脳細胞の死滅と共に再生不能となる。人体のどの機能も脳を離れて、活性化は出来ない。それが脳神経を刺激して冷たいと感する。

前記の心と意識は、上部脳細胞で豊かな生活感情となつて、人間形成を保つていると思われる。もつとも私達が眠っている時は、意識も心も持たない。

1. 左脳の働き、論理的・科学的組立て。

左脳の働きについては、前述の脳の構造について論放した。

次に論理的思惟、理性的判断、言語表現、顕在意識、直列処理能力などに就て、機能分析を試みる。

まさに形而下学、科学的思考の組立てと解してよい。すなわち美の顕在意識の組立てにある。

顕在する物象に就て、細かく分析して、その断片的物象を如何に組立て、再構成していくか、左脳の働きが左右する。

限りないオブジェへと進化を求めて行くのは、諸芸道において、立体的世界観の組みなす造型も、美の領域を構成し得る素材となろう。

私達が美を感じる物には、幾多の物が創造に現われる。美の科学的要因、(形而下学的**方向性**)

これは自然科学の領域で、私達が精神世界から覗き見た美の世界と、自然科学の領域の物量の調和であると見てよい。

また物的対象を自然科学に喻えれば、医学、物理、化学、動植物、鉱物、天体、宇宙の神秘から自然世界に投げかける美的な物である。

その組立ては、合成が左脳の働きであることは論ずるまでもない。

夢は別問題である。

心や意識も似かよつた存在であるが、医学的、科学的尺度では表現出来ない。

今コンピューター社会で記憶のメカニズムを、インターネットに記憶させる働きを開発している。

記憶は人の脳で蓄積される。かなり高度な記憶は、「記録」「保持」「想起」の領域がある。この中で保持力は側頭葉がひきうける。

現在の領域では左右脳の「海馬」が記憶蓄積のメカニズムになっていることは定説としてよい。

記憶にも低レベルのものと、高度なものが、有限な神経細胞の中で無限の記憶をため込む事を、推定されるが、これにて定かでない。

こうして外界からの光彩、スペクトル、音声、音質など、五官から感じる視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚も脳神経細胞へと伝わる。

感覚、知覚をともなつて感性的認識となつて、私達を潤すことになる。すなわち、陰翳の美学に影響することにもなる。

二、美の科学的要因（形而下学的方向性）

およそ科学する心は、私達の内的世界から外的 세계へと広がりを見せ、私達の知覚操作の代表的なコンピュータソフトもある。

電子の光ファイバーから自然世界を科学することにおいて、新しい分野の美的世界観も育くまれる。新美学誕生が現実化してきた。

従来考えられもしなかつた、ロボットの活躍すなわち、現代の代用品的産物のなす役割といつてよい。

自然科学の進歩は人知の計り知れない領域を、まさに保ちつゝある。

技術革新が進み、遠く離れた国々の人々が衛星通信回線を利用して情報革命の最先端を共有する。

インターネット、パソコン、携帯電話回線の接続化に、若者の遊び道具が、負の領域に浸透して、危機的社会を誘発している。

然し大気圏は、私達の前に大きく開けて、ある面では寄せつけない分野も顕在する。

それをも押して、科学の先端に挑む人知の勇猛は偉大だ。

形而下学の**方向性**が、造型主体化の陰翳の美学を生むのは、管見の通りである。

たゞその光と翳のコントラストが光翳の素材を通して、脳の細胞を働かすことは、医学の分野では、はつきりと解説されている。

諸器官の解剖から、今日の内視鏡、C.T.、M.R.I.の治療、超音波、レーザー光線による治療も可能となつた。

臨床医療面で画期的治療をなすも先刻の「心・意識」の状態を、猶も科学では表現出来ない。やはり形而上学的接点とでもいえよう。

2. 医学的分野の解析

以上、最新の臨床医学を持出したが、諸器官の解剖領域で、素因はルネッサンス期にレオナルド・ダ・ビンチの素描に早や見える。

「医学的分野の解剖所見」が素描に生された。人首、頭部の解剖など三百遺体の多きにおよんだ。こゝには、こんな骨があり、また、そこには異質な骨格があつてと、構成要素に頭蓋骨性能まで解析している。それにして偉大な画家のなす美学の追究は驚くべき存在であつた。

ルネッサンス期に溯る風情を人知の偉大な追求があつて、今の風情に至らしめたのかも知れない。当時、すべての冒険が中世のローマ神学、スコラ学派から抜け出し、コペルニクス的転換をなした。

に通ずるのかも知れない。

芸術の分野で集大成されたものから抜け出るには、新しい素材、分野に道を開かなくては、歴史が認める美学は創造することが出来ない。

陰翳の美学は、そこから出発するのかも知れない。自然現象は幾多の美的な奥行きを、私達に投げかけてくれる。

やがてそれは移ろう物として、この世を去つて行く。自然のサイクルは次なる新鮮な物を育くみ、未来永劫に絶えず進化して行く。

そのサイクルの一端に人知も光り輝き、陰翳の美学を世に贈りなす。

かかる輪廻転生が、その時に生き、その時を榮えしめてくれる巧みさには、思わず涙さえ出る思いである。

4. 電子工学の指向性

なお、この領域で、陰翳の美学を喚起する物は、現在科学の粋を行く電子科学の真髓である。

その技術と結び、美を發揮するテクノは、人の思惟から導かれた技で、極微の世界である。すなわち、宇宙工学の領域まで、十九一二十世紀にかけ、認識されていた。それは、実用に供されるブラウン管や、光センサー、インターネットの核心にまで、触れることになった。

その気性も中世の精神世界の反動で、進取の気性が今日を生ましめた。こゝに形而下学の持つ偉大さも、見えてきた。

3. 宇宙工学的方向性

人類の英知は休むことなく進化し、宇宙工学の面に、天体の様なす領域へロケットの噴射から始まつた。

宇宙科学衛星まで無人から有人へ、あらゆる天体の神秘を開明し、宇宙世界の陰翳の美学も自然科学と共に、新分野の解明に至つた。

考えれば人知のなす働きは、先程の医学的分野に於ける究明が、人知にあらゆる融合反応を引き起しこした。

これはより高次の、また未知への挑戦として、貴重な資料を積上げた効果である。それは人類史上の画期的成果と称えてよい。

たゞ人類史上をさかのばれば、痛恨の極み、富を背景にみにくい殺戮が繰り返えされてきた。

ある哲学者が「戦争は文明の母たり得るか。」と言つたが、確かに破壊は創造の契機であろう。過去の歴史を繙く時に、その実感は得られよう。

しかし、その度ごとに喪失する物は、計り知れない。

芸術家が陶芸、描写の世界で、自分の作りなした作品を良しとせず、投げて割り、画布を切りさくのも、それ

世界の通信網は、私達の茶の間に情報提供してくれる。その巨大なエネルギーの発光も、宇宙衛星を通して行われるのである。

なお医学分野でも、最近の臨床医学は、不可能を可能にしている。

早期診断や治療、内臓器管の外科的手術には、光センサーの効用、レーザー治療が、プロジェクト化している。

注目を浴びて、ドクター・ヘリーの運用など、時間との競争において、目覚しい活躍が見られる。

さらにヒトゲノム解読による「生命科学」の研究が、新たな段階に入ることになった。これによつて、将来新たな道が開かれよう。

1. 生命科学のより深い理解。

例えれば遺伝情報面の解明、脳の仕組など、現代医学で解されない面まで明かすであろう。

二、医療産業への応用。

ポストゲノムの研究課題の一つが、蛋白質の構造と機能の解析である。これは一九五三年、ワトソン（米）と、クリック（英）がDNAの二重螺旋構造を解明している。

遺伝子の作る蛋白質が、生命活動に必備な新薬の開発に、また遺伝情報も一塩基の違いで働きが異なるたり、体质、感情の違いを生じたりする。

二〇〇七年十二月の初旬、京大中心の山中伸弥

教授の万能細胞研究が、人の皮膚の細胞移植、心臓の筋肉への臨床医療、にも可能視されている。

三、今後の開発研究で社会制度の整備も要求。

一八六五年メンデル（豪）が、遺伝の法則を発見して以来、DNA、ヒトゲノム計画の提言がなされた。その後DNA分析装置の開発、ヒトゲノムの解読完了をなす。

さらに人間内部の病気になる仕組み。生物学、医学的に受精卵から人になる仕組みなど、今後の研究領域に待つ。なお医療に薬学産業開発は貴重とされる。

Genom（独語）は細胞に含まれる染色体の一組を言うが、個人差がある。計り知れない多くの遺伝子の中で、候補と思われる何の遺伝子に着目したらよいか。

遺伝子相互の作用など、基礎的要因を掴まなくてはならない。前述した体内で遺伝子が蛋白質を作る仕組みも、現在は、分子レベルの遺伝子情報、複雑なネットワーク力を注ぐことが、人間をより深く理解する上に必備とされてきた。

東大医科学研究所の教授、榎住之医師は、「遺伝子が人の何もかも決める」という。俗に言う遺伝子決定論を初期に問題視した。「医学の実際の領域では、殆どの病気が環境要因と遺伝要因の両方で起こる。もっとも病気

も大きく左右されてきた。

三、美と非美の論理

1. 非美の論理

およそ美を構成する要因には、必ず非美なる要因が論理の対象となる。これは美学の陰翳にも近因する所かも知れない。

美はそれ自身、人間本位の持つ内在的美と脳の視神経を通して、自然（外在的）美を脳神経によって、光彩も作用させ美を認識する。

美を美たらしむるは、非美なる存在が顕現してこそ、より美なるもの、要因を深からしめている。

美を分析し論理化すると、感性の美学は勿論のこと、理性的、悟性的認識によるものが、私達の意識を構築し美を支える。

こゝには美的潜在的認識もあるう。

私達が意識する美的本性は、潜在的意識もさることながら、現在的物象にふれて感性の働きに宿る美が、美的表象として蘇えりくる。

その場合、環境的要因に従つても、美的潤いの度合が鮮明化して私達に映る。そこで環境的要因は時に非美的

によって様々であるが、現場の医師が、患者に説明して、理解を得る所までは、なお多くの研究の積重ねを必要とする。」

理化學研究所ゲノム科学総合研究センタープロジェクトリーダー（現ディレクター）は力説している。

やがて高齢化的進む中で、糖尿病や高血圧などの生活习惯病とゲノムの個人差の関連を調べようとすると、調査対象が問題である。

ともかく明るい未来貢献的な研究分野が、今後の研究目標として、スタートラインに糸口を見い出したことは、大きな成果と思う。

そして形而下学に美学を論ずることも、そう遠くはないであろうことを願つてやまない。

折しも名古屋で脳神経外科の国際学会が開催され、神野哲夫医師が、脳死臓器移植や、植物状態患者の治療で、科学会から表彰を受けた。

なお前述の京大、山中教授を中心とした研究に、対米医学、科学者との関係もあって、二十年度国家予算から開発費も導入された。

これによつて明るい人間生存への道が開けてきた。

個々の臨床技術開発で、夢の検診法とされていた陽電子放射断層撮影（PET）とCTの併用機で、治療方針

これを心理主義の方向でフォルケルトは、美的とは感情内容と表象形式との統一を計る。

すなわち直觀と結合させて、美意識の成立を可能にする。「感情移入説を取り上げ分析を試みている。」

と一部引用させていただき、本質に迫ることにした。

2. 美的表象の心象—内在的美

美的表象の心象は前述の心理主義者フォルケルト的な立場に立つ、内在的美による分野で、私達の心象に現わされる。

その幾つかの精神的な表象は、それぞれが、心的現象によって細分化する働きを持つ。故に人間の感情が多様化する。

その時に発する種々な感情によつて或る物は愛の情緒をとり、それが美的内在性と結びつく。

それ故、内的生命の表出と形式が、統一され美を育む。

その美にも内蔵する愛憎が、喜怒哀楽の感情によつて、幾多の表相を示す。

千変万化の感情移入が美的心象となつて、あたかもスペクトルの限りない愛に近いものから、憎しみに至る。

多種の感情の融合によつて、分散化され、複雑多岐の感情の結び合せで、それぞれの美を形成する。

3. 形而上の、形而下学的要因。

前述からの形而上のまた、形而下学的要因こそ、構成要素を構築する。いやそれなしには不可能かも知れない。

かかる基本的構成素材を人的英知で、今、工芸面に美意識を求める日常生活の潤いを感じて見よう。

人間の英知が構成要素に大きく開けることは、すべての物象に言える。

およそ藝術と呼ばれる物に、創作領域を探究すると、素朴ながら使用しやすさ、無駄のなさ、美的感覚が、蘇がえってきたと思われる。

今日から見れば確かに此が、人間生活の用具として、効を奏したかと、耳目を疑いたくなる。

しかし、この造型なくして、後の巧みの技はあり得ない。

(形而上の要因) をも構成過程に思考するようになる。

さらに、組立てたり、削つたりした跡、(形而下学的要因)にも及ぶ考古学的な資料によつて、上古人なりの文化を、より生活の支えとする芽生えがあつたことは確かであった。

古い出土資料から見られることは偉大で、この基礎的因素があつて、縄文、弥生の集団生活に新しい味を添えることになつたと思う。

このような機能もそれなりに、作り作られる過程にあつたことは、文明開化の素因、要因といつてよい。時代が下れば論はまたない。

人類の英知はすばらしい。これあつて、二十一世紀の宇宙世界に形而上、下学的要因を引つさげ活躍する素因は想像に頗くない。

科学する心にはこの二面性が、はや考えられていたのかも知れない。いや、今日の分析力はないにしても、素朴な英知は、育こんでいたと見てよい。

私達が歴史を懷古する時、人の英知に思考する二面性のあつたことを、今、目で感じ得たこと。これは人類の文化遺産である。

文化的美、そしてこの二面性を高く評価してよい。人の思考する働きの偉大さに感激し、改めて認識を深からしめる物を感じ得た。

その過程で、陰翳の美学も創造される。

人間の多感な感情からは色彩の織りなす美的体験、感じ方によつても、主、客の特殊な融合の境地が顕現される。

この多様な感情が相応じて、自己の基本的な美を造り出す。こうして感情優位な美的立場がなされる。

内在的美と外在的美的接点も、こうした美的表象の心象にあると言える。

美的表象の心象は前述の心理主義者フォルケルト的な立場に立つ、内在的美による分野で、私達の心象に現わされる。

その幾つかの精神的な表象は、それぞれが、心的現象によって細分化する働きを持つ。故に人間の感情が多様化する。

その時に発する種々な感情によつて或る物は愛の情緒をとり、それが美的内在性と結びつく。

それ故、内的生命の表出と形式が、統一され美を育む。

その美にも内蔵する愛憎が、喜怒哀楽の感情によつて、幾多の表相を示す。

千変万化の感情移入が美的心象となつて、あたかもスペクトルの限りない愛に近いものから、憎しみに至る。

多種の感情の融合によつて、分散化され、複雑多岐の感情の結び合せで、それぞれの美を形成する。

その造型は、その期の文化であり、構成要因である。生活に便利さを求める、無駄なく、より美しく作ることに、意が注がれた。

その美は、容易に推察される。生活環境を改善して行く工夫が、未開、未分化の期にもあり、組立てたり、削つたりした跡が見える。

構成期の内容、形態、容器などの様々に素朴な領域から、生活が育んだ工芸世界を、それぞれの期に集大成して行つた。

これを文化の美と呼んで、彼等の英知を、高く評価してよい。勿論、歴史的には早や、打製石器が、それなりの評価を受けた。

縄文、弥生、古墳と、生活素材の中に素朴ながら、美意識を感じた。

それを裏打ちするかのように、各種土偶、土器など、黒褐色、縄目の文様などにも、縄文の特質を見た。

弥生に入ると同じ土器にしても、貯蔵用の壺、煮炊き用の甕、食物を蒸すための甑、食物を盛るための高杯を基本とした。

いずれも薄手で硬く、均齊がとれていた。赤褐色、淡褐色など、美的装飾用にも意を注いでいる。实用性、陰翳の美学が感じられる。

こゝまで下つてくると、未開、未文化の生活様式から脱皮して、自然世界の物象にも心よせる情緒的な美、

四、陰翳の美学

1. 四季の翳

道元禪師（一一〇〇—五三）は「本来ノ面目」と題して、「春は花、夏ほどとぎす、秋は月、冬雪さて涼かりけり」の歌を通して、日本の四季の雪月花、花鳥風月を歌つた。

その中に日本人の感性を見聞し、禅的思惟を呼びさます端緒を知り得た。まことに雅趣に富めることとして、その心を読みとり得る。

単的に四季の特徴を一言で表現し得てゐる翳に。日本人の繊細優美な意識が、自然と合し、顯現している。「月見れば月に宿るか吾が心、月を離れて吾が影月に」自然の中に吾を見出す。

これは古来禅的思惟の一端として吾を捉え、無の境地が陰翳に投影されて、美的浸潤さが呼びさまされる。俗に東洋の美意識と解し得るのでなかろうか。

私達は感動に生き、感動を通して生活体験に新しい育ちを見た。草木の芽吹きを感じる四季の変化は、特に意識しなくとも時を忘れずにめぐつて来る。

生命力はその時が来れば、芽吹きの準備段階から、そ

つと芽生えを待ちわび、自然の環境を身に受け芽をほころばせる。

これは時空を越えた生命力の現われで、四季の環境的因素、温度差が与える影響によってなされる。

必要な水分や太陽の光は、すべての生命力の源である。自然世界の力、エネルギーが、物象に与えられる形而下学的世界かも知れない。

この認識こそ、人間が関与する一端といつてよい。

生々流転、これは人知を越えた働きで、悠久な世界の自然淘汰のサイクルの中で、働きかけられ、また働いて行く。その過程の中に私達が存在する。

自然を愛する感覺は、この美学を享受する。人にとって限りない愛着が、また生活の生き甲斐となつて、喜びを感じさせてくれる。

自然と対し、また自然の中に生き流転する。そのサイクルは私達の生活を包んで、自然の中に融合させ、不分离の中にも陰翳の部分を作り、作られる。

その関係に連續性を見い出しが出来る。山川草木の育みも、この連續性あつて永続の可能性を見る。私達は時と永遠の間に生きる一時を感じ、また歩むことが出来る。

永遠なる大宇宙の中で自然現象も培われ、おこがましくも宇宙に挑むことすら考え込む。

これは神秘、宗教的響きからすれば、全く疎かなことが必備と言えよう。

世の中に陰翳の美学は存在する。それを認め花を咲かせる補助的過程こそ私達が持つ形而上の領域ではないか。

私達の前に科学する心は、全てに先行する。たとえむなしく取るに足りない存在であつても、それが発端となつて、点から点を結ぶ線となる。

一つのステップが次のステップへの足がかりとなれば、方向性開発をつけ行くことが可能である。

もちろん形而下学の分野が先行するが、形而上學分野こそ、この支柱となつて思惟する。閃きに貢献することが必備と言えよう。

Aの研究が徒労に終つても、B、C、Dの方向性は働かないか、それらが全部にまたがつて無駄でも、こういうふう仮説で、こうやつた結果が機能しなかつたなら、次はこうやつて見てはどうか。

第一、第三の仮説を立案して行つて見る。これには勇氣と忍耐も必備であろう。勿論危険の一歩先は、死の深渊が覗いているかも知れない。あくことを知らない。

フロンティア、スピリットが、BC、いやADと連続する歴史の中で繰り返し続けられて現在に至つた。これを踏まえて前進する挑戦こそ、未来への開発である。この組織されたプロジェクトは、光る翳の存在として成果は大きい。

先程の基点をよしんば失敗した箇所が、根絶しないま

論理として、私達に蘇つてくるものである。

この感覺を感覺する美、これは表象から見れば、光る存在の影に隠れた美である。より深淵なもの、精神の内容なものに横たわる美学と見てよい。

ある面から言えば、神秘的な私達の決めがたい物かも知れない。千変万化する表象に一喜一憂している私達は、常にその表象に偉大さを感じる微弱な存在である。

人間はこの未知なものを感ぜざるを得ない。自然の織りなす恵みに、時として畏敬の念を抱くことすらある。

あるがまゝに受けとり、あるがまゝに覗き見るこの世界に、恵み豊かな物象の翳の美学を感じ得た時、表象の美を思う。

無心に、我を忘れ自然を生ける華道の心が、時に自然美をゆがめて花器に対する時がある。自然の理をまげ俗に、曲学阿世の徒たるか。

これは自然の理法に負けた存在として、自からを玉碎人知に恥じる行為として、深く反芻し、自然の前に跪く事が肝要である。

自然是人間が思惟する以上に寛大である。ただ、寛大をいいことに、自然に貪欲であつてはならない。

2. 四季を愛する民族性

およそ日本人ほど四季の変化を敏感に捉える国民性は

持つた。繊細な指先の動きにより、さらに微細な物が、新鮮なものへ生れてきた。

ミニの世界に極限の美を求めたのも、生活の知恵と言つてよい。

もちろん弛ま無い、怯むことのない研究成果の陰に、極微なもののが大宇宙を創造する糸口になろうと、誰が知ろうか。

研究成果の積み重ねと研究グループの弛み無い努力が、宇宙長期滞在を可能にした。若田光一、野口聰一、続いて古川聰、星出彰彦達が、一〇一二、一二年と予定されている。

たゞ宇宙に巨額な費用が必要で、曲り角に来ている現状だが、自然科学分野の働きは、世界の脚光を浴びるまでに成長してきた。

研究者の言説を尊重すれば、失敗があつたから、それ見のがさずに方向を変えることによつて、新しい成果に到達しえた。

もしその失敗がなかつたら、この成果は生まれなかつたことを考へる時、ちよつとした歯車の掛違いが、却つて大きな発展への足掛りにもなり得ることを示していく。

思いがけないアイデア、多面的思考過程こそ、貴重な存在たりえることを知らねばならない。

以上、自然科学的分野に触れてきた。しかし人文科学、

ない。古來から、その感性の豊かさがたゞえられている。

或る時は四季の中に自己を埋没させ、そこに自ずと自然贊美を生活の中に發見し、また作り出している。

現代もさることながら、古來の風物にふれる人々の輝き。それは私達の英知を生活の歴史の中に磨いて来た。

民芸と呼ばれる風雅な器物も、一時には生まれ得なかつた。古代人からの、弛み無い歩みの中に、貴重な物を育くみ出し光る物が出来るまで、辛苦の連続であつたろう。

この尊さこそ古代人の輝ける美学が、永続的に受け継がれてきた。それは失敗の連續の中にも少しずつ新鮮なものに着目する目、これは美学創造の新しい要因であった。

その要因こそ命を掛けた芸人の綾で織込まれ、にじみ出たものである。角度を変えて変化の妙を盡すことが、表象的な光り輝く部分に、それを際立てる。

翳の存在が、光の反射や屈折、採光などによつて、きらめく姿を私達の前に現出させてくれるのである。

これは今まで各分野、分野に歴史的にその流れを読みとつて来たが、その限界も確かにあつたと思う。

それを乗り越えて時々特徴を捉えて、今日の衣、食、住を育くみ出す物に到達した。民俗の英知にとり、変え難い物と言つてよい。

昔から日本は手の国と呼ばれ、指先の器用さは定評を

形而上学も同様に、人類の英知を傾けたつたことは事実である。

自然科学分野のように、実験結果の積み重ねと、枠組みは違つても、精神的思惟の積み重ねを、世界の平和な貢献のステップとして發展させてきた。

Aの思潮はB、Cを生み、感情、情緒の宗教、政治、思想世界の異なる民族でも共有出来る部分が少しでもあれば、それをきっかけにして、民族、人種の輪が一つ、三つになる。

さらに発展することが出来れば、弱肉強食の世は、平和、平等の社会を構築する礎にもなる。

民族国家がより基本的な生活にもどつて、新しさとは何か、より住みよい社会とは何か、また機構は何かと、共通項を模索することが出来る、きっかけがほしい。それは、平和への協議であり、一つのステップかと思う。

二十一世紀に及ぶ世界史の流れの中には、種々の攻争対立、殺戮もあつたが、一つの指向性は生れ、文明、文化の大好きな流れの中に包括されてきた。

人類の英知を生かすべき時が、今足下にあることを私達は忘れてはならない。四季を愛する民族性が、各土壤を掘りおこす。

その一步を大切に踏出すことが、翳の美学創造にも繋がることと信する。

四季の変化は生活構造にも影響を誘い、その特性は風

土性によつて民族文化を創造する。確かに日本を象徴する民族文化も、日本の風土を環境とした所に、特異性を育くんできた。

それは伝統文化といつてよい。従つてこのよい風土性を愛する私達日本人こそ、民族文化成長の担い手である。

過去から文化遺産を継承して行くことが、私達に課せられた大きな使命觀ではないか。

「言うは安く行うは難し。」今後の進展に寄与する途上、幾多の辛苦が待ち受けていることと思う。

古人が嘗々として積重ねてきた業績は、忍耐、努力の成果といってよい。光彩の当る部分ばかりではない。翳の部分こそ磨きあげなければならない。

幾人かの論客の中にも、「正、反、合」の論理が磨かれている。ヘーゲルの弁証法論理も、東洋文化に相通ずるものを持っている。

鎌倉五山に集まつた禅学僧侶、文化思想人など中心に、陰翳光彩、光闇を、自己の思潮体系の中で同化発展させた。

北鎌倉の風土と環境が、前述したイタリアのフローレンスにルネッサンスの華を咲かしめたのと酷似していたことを思い起こす。

当時、政治的権威は、京都五山に対しての鎌倉五山と、東西日本文化を象徴する、風土と環境を形成して行ったことは、当時の文化人達による成果と言つてよい。

3. 環境の美

(1) 人と愛と

人は「環境の子」と言われるが、環境構成は人間の作り成すものである。自然も人間空間もそれぞれ人にあつた環境の立地要件を、選択した。

そこで作り作られるのが環境で、それぞれの特異性で、構成化されていく。その過程には愛があつて、可能性を育くんで行つた。

自然に適応していくにも、その自然をどう取り入れ、そしてどう美的環境を作つて行くかは、愛する環境的因素に、全てが先行する。

人は形而上学の領域で、愛を作り作られて行く。この過程こそ環境構成に、不可欠な物と受け止めてよい。環境の美学は人と共に、愛の精神的働きが左右する。

愛は創造へのステップであると思う。人が新しい物を作る精神構造は、愛する意識が働いてこそなされる。

創作過程にも目標と共に、愛の精神構造が、対物、対人に働き、個々の物体が、作り作られる意識の中に定着していく。

およそ人は衣食住を環境の中に作る、働き掛けを対自然、対人的に、人間の英知によつて道具を用い、科学する。

もつとも五山禪林時は、古くインドの五精舎によつて中国から、我国に伝来、室町時代に幕府管轄下の禅寺となつた。

前記の修行僧、文化人など、研修道場として、広く中世禪林の文学が栄えた。

榮西の伝法以後、宋、元、明の間に渡航して禅を学ぶ中國禪僧も少なくなかつた。

法語「啓札（書簡）」の文書も、中國の作風に習つた。四六駢體や、律詩、絶句も製作され、室町幕府が五山の制を官僚化し、文章も莊重な文飾が尊ばれた。

十五世紀前半には、五山文学の最盛期が出現された。すでに道元の法語を弟子懷笑が筆録した「正法眼藏隨聞記」に、中國修行僧、宋朝禪林文學も五山文学への道を開き、將軍の保護を受け応仁の乱頃まで隆盛を極めた。

後に江戸漢詩集と歴史の流れの中で、脚光を浴びた。明治になつて京鎌倉の五山に集まり、独自の思想体系を育んだ。

光と闇、陰翳の美学の先覚者、鈴木大拙教授、「禪思想史研究」、西田幾多郎博士、「京都學派・無の自覺的限定」、西田哲学大系など、古今を通じて集大成の糸口となつた。

そもそも鎌倉五山の道場が生んだ、文化人への寄与であったことは論を待たない。

心を働かせ、自然を人間の生活の中に取り入れ、創意工夫がなされる。衣食住の環境の適合性を日常生活の中に、体験的素材として生かした。

そして古代から現代、今に至る経験を閲して來た。それは陰翳の美学にもかかわり、今日的視野につらなる。

作り作られる働き、これも実は作用、反作用の形で、色彩感覚で言えば、白黒、暖色系、寒色系も陰翳に左右される。光は闇の存在があつて浮び出る。

人は芸術を求め、芸術の中により脚光を浴びる生活を求める。芸術家は光輝を求めるが故に、輝ける部分を如何にして磨くか、古来から陰の部の生かし方に探求が進められた。

一面の画布へのこの陰翳の描き方が、画布により高度な方向付を与える。彫型にしても、より凹んだ彫りに陰の美を見、彫型の輝きを深める。ミケランジェロのダビデの像など、典型と言つてよい。

かつてヴルノー・タウトが絶讚した桂離宮の雅の建築様式、壮大な修学院離宮の借景、雄大な庭園の美は、規模もさることながら、構想、配置の陰翳の美は、見る者をしてその浸潤さに酔はしめる。

陰の存在があつてこそ、初めて光輝ある作風に感動、畏敬の念を感じる。人は自己陶醉と同時に他を同一化するアインデンティティーを持つ。

龍安寺の石庭に禪的な思惟を持つ虎の子渡しの配置な

ども、心底にしみ入る心境は、作者の持つイメージとともに鑑賞者にも伝わる。

輝ける心の世界を切り開く場を臨場感として持つ事が出来る。これも人の愛ありてこそ作風を表象化し得ると思ふ。

人は環境を美的な世界へと押広げる技を持つ。そこに精神的な心内葛藤を見る、イメージの世界が顕現する。

美を美たらしめるもの、非美なる領域こそ、構成要因として介在させなければならない。非美なる世界観究明が、芸術家の心を搖さぶったのに違いない。

この様に人は自然の中に美意識を見、またそれを愛し、後世に遺産として残す風習を、生活の中に取り入れた。

この美学は人知のよつて来たつた、美風と言つても過言ではない。龍安寺の蹲踞^{くつば}に見る、「吾唯足知」も見落としてはならない。

これは精神作用の発露で、禅の香漂うものと思う。本当に「知が足りている者こそ豊かである」と思いを新たにする。

もつとも、この庭園の誕生は、千三百年も昔の飛鳥時代で、その後王朝貴族達の権威の象徴として数多くの数に上つた。

平安朝に入つて貴族の「寝殿造」が庭園の原型となつた。仏教の極楽浄土思想から「淨土庭園」が造られた。

鎌倉に入つて禅の思想から石組の表現が登場した。室

り出す。

対自然、対人間社会に適応する諸現象は、人の感情移入から始められる。心的構成の働きかけが端緒を築きあげて行く。

感情のほとばしりが、自然に人間界に向けられた時に、美意識が形成作用をおよぼす。限られた人知の働きが、時により世界を動かすことすらあり得る。

人間この未知なる小さい思惟が、かかる存大な物に連なるとは誰が予測しようか。作用、反作用、明暗、黑白、陰翳の二面性があつてこそ、光輝を発するのである。限られた時空を持つ人間社会、個人の自然に対する環境構成も、そこに由来する。

人知の存する思惟過程を愛すること自体が、環境美のプラス思考として、問題たり得る。

(2) 生活即美

現在に生きる私達の生活を見る時に、生活そのものが美へ直結するか。私達の周辺を見渡す時、確かに生活が直ちに美たりえるか。

また、美が生活なのか、判然としがたい分野が介入する。それ程まで生活が美的で甘美な物と思えずする。反面、甘美な物ばかりではなかろう。醜惡極まりない生活

町期に水墨画の影響もあつて、砂と、植栽で表現する「枯山水」が流行した。飛石や手水鉢、石灯籠など、日本庭園に欠かせない要素として脚光を浴びた。

江戸期に名勝や街道風景のミニ化、縮景様式が「大名庭園」に生かされた。

明治に入つて西洋庭園と各時代を代表する思潮が、先人の英知と美意識を結晶させ、永遠の宝物として日本人の美意識を育ぐんだ。

四季を楽しみ、伝統文化に芸術的手法を介入させた。「美しいものを愛する」日本人の心は、遙かなる歴史の中で、世界に類を見ない優美さを生み出した。

庭園もさることながら、生活の隅々まで茶の湯の心得を施す。茶の道具が末端に及ぶまで。心憎い許りの手解きをなした。

これを支える人の愛も、茶室の陰翳の美にもとづくものと云つてよい。狭い茶室の隅は、より精神的な「わび・さび」の理念にも立ち入ることになる。

限られた空間の持つ働きこそ、茶の湯を高尚な領域へと誘う。人への畏敬の念、愛を感知させてくれる。人が

環境の美化に意を注ぐのは、自然環境への愛である。

愛する心の働きが、対美意識を育くむ要因を引き起す。

自から自然に溶け込む、そこから千変万化する諸相を作

を負う、反社会的な裏面に端ぐ生活もあるだろう。

社会正義に逆行する反作用面に生きる者にとつて、美とは何か。美を意識するゆとりすらないまゝ、負の生活を生きなければならない。

暗の世界には美を感知する働きすら消えうせている。その様な領域に生活即美なるものの認識すら不能とも言えよう。

人は様々な生活環境を構成するが、その中で生きる喜びを求める生活の向上化を計る。そのプロセスが美であり、美しい物を求めて、生活の糧として行く。

生活に潤いを求める、それを支えとして磨き生活の一部に供することが出来れば、それは美と呼んで差支えなかろう。

例え花を見て、美しいと感ずる情緒は、人間の持つ本能、本性である。

かく在りたいという、憧れの世界を身辺に感受することは、美との一体感で、生活の中に美を導入する。生活即美と感じとつてもよい。

かく在りたい。かくしたい。とめどない連鎖の中に、より高次の美の探究に生活を燃やすのが、人間生活であろう。

時には価値葛藤の場もある。より精神的な面に認識しあう価値意識もあるであろう。たゞ時代と共に価値意識も変貌して行く。

時代感覚、社会意識も時の思潮によって、大きく揺れ動くのが、現代の特性かも知れない。社会秩序、規範も、その時の変異によつて多様性を学ぶことにならう。自由主義社会一つ取つても、多様な価値を持ち、秩序も千差万別で規範も異なる。より内面的な宗教觀に至つては、まさにこの例外ではない。

第一次世界大戦のヨーロッパの火薬庫といわれた中東セルビア、バルカン半島が危機をはらんだ。そして第二次世界大戦へ、湾岸戦争、イラク戦争へと、推移過程の中にあって、この地程、多数民族の混入した地はなからう。

民族主義が宗教と絡みあつて利害関係にまで発展する、人種間同士の軋轢が武力で排除出来なくなる。テロ、内戦へと國家復興に力を借りようにも国運そもそもが、主導出来ない。

かゝる中で、平和を願う心情を踏みにじる状況では、世界平和への理念はおろか、人種のゆがみ会いに終始して犠牲を強いられている。

宗教、民族意識は人の生きるすべての要素を持つ、宗教觀の違う民族間の政争は、負の論理をプラスの論理にする為には、死を以て対抗するしかない。

それほど心的作用のなす、温かき血腥い抗争を余儀無く行なわなくてはならない。話しても解らない大きな意

からすれば、これも陰翳の美かも知れない。

活即美なる領域に活路を見出すべきと信じてやまない。

(3) 歴史とロマンについて

生活に根ざした美を感じる心情は、前述の通りである。生活にも余裕が出来、多少美を感じる潜在意識が、より深くなつて来るに従つて主情的ないし、理想的に物事をとらえてきた。

また、そのようにして把握された、世界の広がりが、俗にロマンとして歴史上きらめいた。もともとロマンスの語は、ラテン系諸言語の総称である。フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語で使用された。

諸分野に跨り光と翳を投げてきたことも、論述の対象としてきた。

煌めいた情態は、それを美的感覺として造形に生かした。それは古代人の美意識の現れである。例えば、古代ギリシアのドーリア式建築、我国の法隆寺金堂にも見られる。

いわゆるエンタシス、柱の底部が頂部より太い形である。また円柱胴部の緩やかなふくらみを感じる余裕が、見られるようになる。

それは一つのロマンを求めての、美意識発現と見てよい。如何にしてよりよい生活を、これは古代人現代人も、

心の問題は複雑で話し合いでもつても、なお理解し得ない領域かも知れない。人間は夢を追い求めて、コンピューターを開発し、新しい役割を果すに至つた。

危機迫る中でソフトの開発に、血眼になつて研究がなされる。それが生活向上面に利用されれば、より効果的生活を得る。

然しその利用を誤れば、翳の分野で人類の不幸を招くことになる。華やかな世界もかゝる逆美の世界を常に考えなくてはならない。

人知の生んだ科学技術も使用状況で、危険極まりない存在として、私達はそれを甘受しなければならない。

すなわち陰翳の美学が芸術の奥深さを極めるどころか、前記の如く破壊を以て私達に迫る。人知の予見しない物を、あえて肯定しなければならない。

逆説的な論理は形而上学的方向で、何としても断ち切らなくてはならない。その深淵さは深く、私達を寄せ付けないかも知れない。

IC開発の至難さに比べたら、人の心の問題である。個人主義的利害に踏み止つて、人類の大局的な見知に分け入る。

目的意識を踏み違えず、合目的的に前進することが、危機意識への救済とながる。

僅な小さな一筋の光をたよりに捧げる。

すなわち陰翳の美学効験につらなることを信じて、生

同じ意識と見てよい。

時代的流れの中で、美に対する意識は芽生え発展する。つまり、時代背景で、その美的表現を感じとる。

ある者は写実に、また、ある者は、浪漫的なものを探める者と、今日を象徴する多種造形も、時代によつて格差はある。

生活の中に美的感覺があふれ、食器に裝飾に、建築に、確かに素朴かも知れない。繩文から弥生へと古墳時代を脱皮し、土器から須恵器に、例えば葦など形象を見る。頸部に広口、細頸、短頸(坦)など、胴部に一孔を穿つた腹がある。他に平瓶、提瓶、革袋形土器、環状提瓶など、形象から造型へと、頸部の細いしなやかさに浪漫を求めている。

一転して胴部のふくらみ模様など、まさに古代人いや現代の私達から見ても、浪漫を感じざるを得ない。

やがて木器(弥生期)、そして銅、鉄による鎌金、鍛造、服飾品、武器、武具などに集団生活へと転換されてきた。

西欧ではローマ神話のミロのビーナスの浪漫は、今日私達の感覺をしても精巧極まりない。卓越した技法は、ロマン輝く金字塔といつてもよかろう。

この頃から歴史に刻むゲルマン的性格を基盤に古代の伝統と東方の影響をとり入れた。ゴシックに先立つ美術様式ロマネスクが、開化した。

根源は小説のように数奇で情熱的な手法が十世紀末から十一世紀頃にかけて、ヨーロッパ各地で展開された。

やがてヨーロッパ中世美術を支配する様式へ、殊に聖堂建築が典型的で交差肋骨で支えられた。ドームや高い尖塔など垂直効果の強調が特色であった。

活字の書体、縦横の太さが等しく撥ねなどのない、画一的な肉太のゴシック体（書体）が、今日でも使用されている。

当時の文化を拝聴するよすがにもなつて、貴重な存在として、管見を引く。

そしてルネッサンス十四世紀から十六世紀にかけて古代ギリシア、ローマの文化を範として、人間性の肯定を主張した。

文芸復興がイタリアのフローレンスを中心興った。文化、諸芸術に至るまで開化し、頂点を極めた。

もちろん、歴史に光を放つ画期的な文化現象であつた。翳を色どる内面性にはロマンの香りが漂いルネッサンス調に潤いを添えた。

やがて十六世紀から十八世紀にかけて、ヨーロッパに複雑華麗な感動を与えた、芸術様式は、バロック調芸風と呼ばれた。

音楽などにも顕著さを漂わせ、翳にそこはかとない口マンを感じさせた。

そして十八世紀にフランスを中心に、ヨーロッパで盛

言つた。

やがて西欧の自然主義思潮衰退と共に浪漫主義思潮が隆盛を極める頃、日本では逆方向の形で組入れ、日本の近代化、新体制への切換えが急務だつた。

「西洋事情」「学問のすゝめ」「文明論之概略」など福沢諭吉などによって説かれ詩歌にも近代詩様式が開かれた。

最も注目すべきは、明治十八—十九（一八八五—六）の坪内逍遙の「小説神髓」で画期的文学論を展開した。

「葉亭四迷によるロシア文学から学んだ卓越したアーリズム理論を「小説総論」に、また、「浮雲」で言文一致を、文章史上一時期を画した。

森鷗外訳詩集「於母影」また「舞姫」は日本の留学青年と踊り子エリス（明二三（一八八九））との恋物語は、「浮雲」に欠く近代文学への告知としての刊行であった。

明治二十年代の現友社、民友社など結社を中心とし同人達の活躍は、キリスト教系統に立ちつくも功利主義と分れ、浪漫主義、芸術至上主義を主張した。

北村透谷や島崎藤村らの「文学界」、藤村「若菜集」は、鷗外の「於母影」の詩情と伝統的情緒を融合させた。青春の自我の目ざめを歌つた近代的抒情詩として記念され、土井晩翠などによって浪漫的な詩風の謡歌が見られた。

なお十八世紀から十九世紀にかけて、ヨーロッパを中心へ隆盛を極めた思潮、及び芸術の傾向に、ロマンチズムが挙げられる。

情緒や自然を重視し、創造的個性の尊重など、古典主義に対立する風潮が台頭した。

夢や空想を好み、情緒や感傷、憂愁にひたる精神的傾向が文芸世界にも現われた。

ヨーロッパ、フランスで自然主義文芸思潮が、エミール・ゾラ（若い頃はロマンチックな傾向の作家だった）によってフローベール、ゴンクール兄弟らの観客を原理として、写実風の作品の感化を受けた。

一八六四年頃からアーリズム文学の方向へと転換した。

やがて「小説は科学である」とクロード・ベルナールの「実験医学序説」の思想へ。

ヨーロッパの自然主義の基本精神は、人間の生態を自然現象と見る。実験的仮説を小説にも導入した。

遺伝法則的手法を小説に、自然主義的文芸思潮の足掛りを得た。と、イギリス及び諸国家への浸透をはかつて

明治二十年代は近代詩の全盛時代を構築したといつてよい。この時期に古来の和歌が近代短歌となつた。

俳句も写生による実感の表現形式として、革新されていつた事も特記すべきであろう。

ただ歴史と浪漫を説く上で、忘れてはならないことは、歴史を作りなして行く人間の営みである。人間が生活の英知の中で作りなしたロマン、これは人間の営みの所産である。

限りない思惟の結晶といつてもよからう。輝くロマンは必ず翳の美学の功績があつてのこと、反自然主義の道を取つた。

前記の森鷗外の新声社「スバル」、「三田文学」系統の耽美派、夏目漱石中心の「余裕派」白樺派など特別な結社道をとつた。

美を人生最高の価値とし、人生の意義を美の享受と創造に求めた。

谷崎潤一郎や新感覺派の川端康成など、心象表現の綾を多彩に繰り広げ、川端康成は昭和四三年、ノーベル文学賞に輝く快挙を遂げられた。

その受賞講演に「美しい日本の私」と題して前述引用の、道元禅師（一一〇〇—一五三）「本来の面目」の中の歌を引用され、新感覺派の手法を余す所なく表象に生かした。

日本古来からの美意識を「雪月花の時、最も友を思う。」

とボッティエリ研究者の矢代幸雄博士の言葉を引用して。人間感情を美的感覚で顕現した。

また伝統的な茶道に「休禅師」（一三九四—一四八二）の水墨画、詩歌集に、そして禅道の禅定に、あらゆる雑念を退け、絶対の境地に達する。

すなわち、我をなくして竜（龍神）の境これが、東洋的「無の論理」として、道元の「四季の美、本来の面目」に歌い込まれた、ロマン禪道といつてよい。

（つづく）

☆ 同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあって、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になつていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

* 同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。
郵便振替口座 〇〇二七〇一〇一六四五九一
加入者名 まんじ

透明な時間（二）

宅見勝弘

一（続き）

経済評論家は企业文化と行員の性格から、東城銀行を「草食系銀行」と、西都銀行を「肉食系銀行」と表現して、次のように批評した。

（一）東西銀行赤坂支店の金庫室の中で竹森は目覺めた。竹森は何者かに殴打され、気絶していたのであった。隣に支店長の撲殺死体が横たわっていた。金庫室は格子扉と耐火扉で外から施錠されていた。（支店の通用口も施錠）格子扉と耐火扉と支店通用口のシリンドラ鍵は、死体の手の中に握られていた。金庫室は完全な気密性で、酸素も十分に無い様子で、竹森は生きて救出されるが分らない状況であった。

（二）東西銀行は、東城銀行と西都銀行が合併して誕生した銀行である。ある評論家は東城銀行を草食動物に、西都銀行を肉食動物に喩えて、合併を批難していた。

企業文化を考えると、東城銀行は草食動物を、西都銀行は肉食動物を連想する。このような異なる文化の銀行で働く行員の性格もそれ

【前号のあらすじ】

（一）東西銀行赤坂支店の金庫室の中で竹森は目覺めた。竹森は何者かに殴打され、気絶していたのであった。隣に支店長の撲殺死体が横たわっていた。金庫室は格子扉と耐火扉で外から施錠されていた。（支店の通用口も施錠）格子扉と耐火扉と支店通用口のシリンドラ鍵は、死体の手の中に握られていた。金庫室は完全な気密性で、酸素も十分に無い様子で、竹森は生きて救出されるが分らない状況であった。

（二）東西銀行は、東城銀行と西都銀行が合併して誕生した銀行である。ある評論家は東城銀行を草食動物に、西都銀行を肉食動物に喩えて、合併を批難していた。

社告（内規）

ぞれ特徴的な性格がある。

東城銀行ではMBA（経営学修士）取得者など知能的に優秀な人材が多い。一部の高学歴の行員を傷付かないように囲い込みして、純粋培養で育てている。

危機管理の知識はあっても机上の空論で、現実に修羅場を経験しないで、支店長・役員に出現している。危機に直面すると、狼狽して即断即決ができずに被害を拡大する。問題の先延ばしと責任逃れに長けた人物だけが残っている。

個々の行員が血縁・地縁を持っていることが多く、血縁・地縁の威力を發揮できる支店に配属される。

東城銀行では個人の成績よりも全体への貢献度を重視するというが、無責任主義が生まれ、強力なりーダーシップを発揮する人物が育たない。

そのような環境に育った東城の個々の行員の風貌を見ると、草食動物を思わせる行員が多い。

一方、西都銀行では高卒大卒に関係なく、同期同士で激しい生き残り競争の中で戦わせる。例えば、他の銀行で無く自行の他の支店から取引先を奪う例もある。西都銀行の行員にとってライバルは他行でなく自行の行員である。

行員を縁の無い土地に放り込んで、本人がいかに実力を發揮するかを試している。

将来の幹部候補といえ、営業店の現場で激しいノルマ

戸惑つたのは、銀行用語であった。

例えば、東城銀行と西都銀行はそれぞれ次のように用語が異なっていた。預金残高を越えて支払いする場合、当座貸越と当座借越と異なる。ジュシンは、受信つまり預金を、授信つまり融資を指す。ローンは、個人向け融資のみ、企業向け含め融資一般を意味する、など多くの違いがあった。

言葉の違いは合併後に統一したので問題は少なかつたが、企業文化や個々の行員の性格の違いについて簡単に融合しなかつた。

最も極端だったのは、企業に融資する姿勢であつた。

「石橋を叩いても渡らない東城銀行」に対しても、「石橋を叩き壊しても渡る西都銀行」とお互いを揶揄していた。また、「ブレークだけでアクセルの無い東城銀行」「アクセルだけでブレークの無い西都銀行」とお互いの融資姿勢に批判的であつた。

合併前も、東城と西都の両方に同じ条件で、企業が借入を打診した場合、東城は貸さない、西都は貸すという例が多かつた。合併時に両方の銀行と取引があつた企業の中には、メイン銀行が東城なのに、借入金額は西都の方が多い例があつた。

その代りに取引先の業績が悪化すると、西都銀行は融資を引き上げるのも速かつた。西都銀行をメイン銀行にしている中小企業が少ないのも、その融資姿勢のためと

競争に揉まれるので、たしかに精神的に強靭な人材が残っている。しかし、優秀な人材も営業現場でのノルマ競争で敗れ、銀行を去って行く者も多い。出世する人間は総じて野卑で、知性と教養に欠ける。

西都銀行では個人に権限と責任を与える。個人の暴走行為を生み出し、不祥事が発生する土壤にもなっている。

このような環境に居る西都の行員の風貌は、肉食動物を思わせる者が多い。

肉食系銀行と草食系銀行が一緒になれば、草食系銀行の行員が肉食系銀行の行員に食い殺されて少なくなるべくだろう』

経済評論家は合併前の二行と合併その後のものを痛烈に批判した。その激烈な批判がマスコミの評判を集めることになった。

肉食系銀行と草食系銀行という言葉がマスコミ受けして広がつていった。やがては銀行内部でも肉食系か草食系かという言葉が使われるようになつた。当初は銀行員が半ば自嘲気味に使われたのが、定着していつたのである。

保守的な東城銀行と攻撃的な西都銀行とがどのようにして調和していくのか、銀行内外で注目を集めることになつた。

竹森自身は合併時点ですで三歳しか東城銀行にいなかつたが、同じ銀行でも考え方が随分と違うと感じた。最初にが、不文律が出来て、採用しなくなつたということであつた。

東城ではコネも実力の内と評価され、コネを使って業績を伸ばす行員は優秀と評価された。西都ではコネによる営業は不正の温床と考へる傾向にあつた。

役員の構成を見ると、東城は審査部門が多いのに対し

て、西都は営業部門が多かつた。また、東城の役員は頭取経験者も含め財務省出身者が常にいた。西都の役員はプロパー（生え抜き）行員で殆ど占められていた。

扶養家族の居る行員が、転居を伴う転勤をする場合に銀行の対応が全く違つた。合併で旧東城が新会長に旧西都が新頭取になつたが、一人の対談が行内誌に掲載されると、その対応の違いが顕著に示された。

東城銀行の頭取は、入社時に親元から通勤した後は、自宅を建てて以降は引越しを経験していない、と語つた。西都銀行の頭取は、十二回の転勤の度に引越をして、自宅を建てた後、単身赴任ばかりで一度も自分の家に住ん

だことがない、と語っていた。

東城銀行では地方店舗に一度行く人を除けば、転居を伴う転勤はほとんど無かった。一方の西都銀行は、転居を伴う転勤は当然のこと、断ることが事実上できないのであつた。

東城銀行が首都圏を中心に店舗があるので対して、西都銀行は大阪が本店で、東京にも地方にも展開している。地方転勤の発令は、東城が二週間以上前に打診があるが、西都は當日に本人に有無を言わざずに行われる。

企業文化の違いは、行員の顔つき等にも現れているようであつた。

「行員を目見て、東城か西都が分る方法が有る」

東城の同期から言われたことがあつた。

「目尻が下がっていたら東城で、目尻が釣り上がついたら西都だよ」

彼の分析では次のようであつた。出世している行員について、東城は太っている人が多く、西都は瘦せている人が多い。東城は色白が多く、西都は色黒が多い。

単なる冗談と思っていたが、後日に納得できる場面があつた。

竹森の三年上に、一人は東城に一人は西都に入行した同じ大学学部出身の一卵性双生児がいた。二人は同時に係長に昇格したが、双子ということで、銀行内の新聞に写真付きで掲載された。

三

密閉された金庫室の中で、竹森は自分の書いた表を見つめて、犯人の脱出方法を考えた。しかし、暑さで推理もまとまらなかつた。

八月下旬で屋外の気温が三十五度を超えていたが、地下の金庫室内は屋外よりも十度以上も高いようで、意識が遠のく程であつた。

金庫室の中は不気味なほど静かであつた。竹森が目覚めて二十分ほど経過した頃、微かに音が聞こえてきた。氣密性の有る金庫室内にまで聞こえるくらいなので、相当な音量であつた。

「火災報知機だ」

犯人が支店に火を放ったのかと竹森は思つた。

耐火金庫室だから、火事でも安全だらうかと一瞬だけ考えた。しかし、耐火金庫室の耐火というのは、書類や貴金属が燃えないだけで温度は上昇する。火に包まれると、金庫室内の生物が生きている保障はない。長い時間をかけて焼け死ぬようなものだと思つた。

竹森は再び耐火扉を叩いた。両方の拳からは血が滲んできたが、気にしないで続けた。重く凶器の踏み台を手にして、耐火扉に投げつけた。重く持つ上がらないと思つていたが、必死のため軽く感じた。

東城出身の方は目尻が下がつて柔軟な印象で、西都出身の方は目尻が上がり精悍な印象であつた。

東城銀行の行員は表で優しいが、裏で厳しい。西都銀行の行員は表で厳しいが、裏で優しい。そのように評価する行員も多かつた。

合併して一年後に交流人事が始まつたが、当初から問題が発生した。

旧西都銀行の支店に転勤した旧東城銀行の行員の中で鬱病やパニック障害などの精神疾患に陥いる者が増加した。交流人事の中から旧西都の行員は退職者が無く、旧東城の行員が短期間に大量に退職するとなつた。

そのため、対等合併の筈が、交流人事で西都銀行が東城銀行を吸収したと言われた。しかし、合併後に旧西都銀行での多額の不良債権が発覚したことから、旧西都の支店長クラスの行員が大量に退職した。

合併して三年後の現在で、合併前の両行の行員数は微妙な均衡で保たれていた。

竹森は六年前に旧東城銀行に入社し、新宿支店に配属された。新宿支店では融資係を担当していた。

三年前の合併と同時期に、旧東城銀行の赤坂支店に転勤してきた。最初の半年だけ営業担当で外勤したが、営業成績が芳しくなく、融資係として内勤をしていた。

竹森自身は草食系銀行の中でも特に典型的な草食系の人間だと思っていた。

		入	出	○=開錠 ×=施錠 ?=不明
金庫室	格子扉	シリンドー錠	○	×
	耐火扉	シリンドー錠	○	?
支店	耐火扉	ダイアル錠	○	?
	通用口	シリンドー錠	×	?

		入	出	○=可能 ×=不可能 ?=不明	(同=上の表と条件が変わらない)
金庫室	格子扉	シリンドー錠	○	×	【入】同 【出】施錠は不可能
	耐火扉	シリンドー錠	○	○	?
支店	耐火扉	ダイアル錠	○	○	?
	通用口	シリンドー錠	○	○	?

		入	出	○=可能 ×=不可能	(同=上の表と条件が変わらない)
金庫室	格子扉	シリンドー錠	○	×	【入】同 【出】同
	耐火扉	シリンドー錠	○	○	×
支店	耐火扉	ダイアル錠	○	○	×
	通用口	シリンドー錠	○	○	×

眞跡かの考古学（一）

桜井茶臼山・壱与・磐余王朝（その2）

中山喬央
たかひろ

まえおき

今回は桜井茶臼山古墳出土の大量の鏡片を考える時、それに先立つ事例で最も基本となると考えられる、二雲南小路1号甕棺墓を含む二雲遺跡出土鏡の成分分析と、須玖岡本遺跡出土鏡の鉛同位体比分析の結果から当時の中国大陸と北九州との関係を考察します。

三雲南小路遺跡

管見するところ副葬品として鏡の大量埋葬が始まった世界最古の遺跡と考えられる二雲南小路1号甕棺墓と、それに隣接して発掘検出された2号甕棺墓、及び二雲遺跡最古の前方後円墳といわれている塚廻、端山古墳前方部周濠出土の鏡延べ十点の成分分析結果を「巖窟藏鏡」

に記載されている先漢式鏡、漢式鏡のそれと対比し、あわせて「周禮」「考工記」記載の内容と照合し考察した結果を説明します。

福岡県二雲丘土の青銅鏡分析試料

試料No.

F B 004	重圈彩画鏡	二雲南小路1号甕棺
F B 005	重圈文清白鏡	三雲南小路1号甕棺
F B 006	雷文鏡	二雲南小路1号甕棺
F B 007	雷文鏡	二雲南小路1号甕棺
F B 008	連弧文清白鏡	二雲南小路1号甕棺
F B 009	連弧文清白鏡	二雲南小路1号甕棺
F B 010	連弧文清白鏡	二雲南小路1号甕棺
F B 014	連弧文日光鏡	二雲南小路2号甕棺

F B 015	連弧文日光鏡2	二雲南小路2号甕棺外
F B 016	小形仿製鏡	二雲塚廻端山古墳前方部周濠

分析結果（百分比）

F B 004	銅 61.6	錫 31.3	鉛 5.76
F B 005	銅 40.9	錫 43.2	鉛 12.5
F B 006	銅 41.5	錫 43.9	鉛 11.2
F B 007	銅 56.9	錫 33.9	鉛 5.16
F B 008	銅 70.3	錫 21.6	鉛 6.19
F B 009	銅 54.6	錫 34.7	鉛 6.94
F B 010	銅 57.0	錫 31.8	鉛 8.57
F B 014	銅 49.1	錫 34.6	鉛 12.9
F B 015	銅 26.1	錫 58.6	鉛 10.3
F B 016	銅 90.4	錫 1.84	鉛 6.07

今度は銅・錫・鉛だけの百分比を示します。

変形蟠虺内行花文鏡 (虺文内向鏡)	銅 68.38	錫 22.60	鉛 6.53
細文地四鳳鏡	銅 71.19	錫 7.90	鉛 16.88
細文地虺龍文双帶鏡	銅 57.23	錫 20.51	鉛 0.45
細文地虺龍鏡	銅 61.57	錫 20.88	鉛 1.38
羽状変様獸文地丁字鏡 (獸文地丁字鏡)	銅 70.59	錫 26.88	鉛 0.79
細文地四葉鏡	銅 74.84	錫 20.80	鉛 1.94
禽獸文鏡（蟠虺文鏡）	銅 56.64	錫 22.95	鉛 6.42
蟠虺鏡	銅 66.65	錫 20.67	鉛 10.04
内行花文変形蟠虺鏡 (虺文内向鏡)	銅 62.92	錫 25.91	鉛 6.24
重圈蟠虺鏡	銅 68.87	錫 21.64	鉛 6.82
方格丁字蟠虺鏡（規矩蟠虺鏡）	銅 69.03	錫 25.33	鉛 3.79

↑の表は銅・錫・鉛の二種類の成分以外の亜鉛・鉄・ニッケル・砒素・アンチモンを含んだ百分比を表しています。

るものですので、次に銅・錫・鉛の三種類だけの百分比を算出します。

①細文地四鳳鏡	銅 74.18	錫 8.23	鉛 17.59
②变形蟠虺内行花文鏡	銅 70.12	錫 23.18	鉛 6.70
②禽獸文鏡	銅 65.85	錫 26.68	鉛 7.47
②蟠虺鏡	銅 68.46	錫 21.23	鉛 10.31
②内行花文变形蟠虺鏡	銅 66.18	錫 27.25	鉛 6.57
②重圈蟠虺鏡	銅 70.76	錫 22.23	鉛 7.01
②方格丁字蟠虺鏡	銅 70.33	錫 25.81	鉛 3.86
③細文地虺龍文双帶鏡	銅 73.20	錫 26.23	鉛 0.57
③細文地虺龍鏡	銅 73.45	錫 24.91	鉛 1.64
③羽状変様獸文地丁字鏡	銅 71.85	錫 27.35	鉛 0.80
③細文地四葉鏡	銅 76.70	錫 21.31	鉛 1.99

大きく①②③三つのグループに分ける事ができます。特に鉛の含有率がグループ毎に相違しております。

青銅製品に鉛を加えるのは、①鋳型のなかで溶解した合金の湯まわりを良くするため、②製品表面の鋳上がりをむらなく整つたものにするため、③冷却する時に収縮しない鉛の性質を利用して、鏡背の文様や銘を鮮明にするため、④銅と錫の合金を溶かした時に生じやすい気泡を少なくし、所謂砂目の発生を避けるためのものだと言えます。

「れを一番良く表しているのは各国が独自に鋳造し流通させた貨幣ですが、」れについては後日説明する事といたします。

漢式鏡の成分分析

重圈清白鏡	銅 68.22	錫 23.38	鉛 4.92
内行花紋明光鏡（内向連弧昭明鏡）	銅 67.22	錫 24.88	鉛 4.75
君宜高官内行花紋鏡	銅 69.21	錫 23.01	鉛 6.44
位至三公变形双龍鏡	銅 71.69	錫 22.21	鉛 4.69
盤龍鏡	銅 69.98	錫 23.47	鉛 5.88
画像鏡	銅 66.48	錫 23.01	鉛 7.34
長宜子孫内行花紋鏡	銅 66.72	錫 23.64	鉛 6.86
方格四乳葉文鏡（草葉鏡）	銅 67.13	錫 23.49	鉛 5.69
四乳变形虺龍文鏡	銅 68.99	錫 23.34	鉛 5.07
内行花紋清白鏡	銅 68.88	錫 23.55	鉛 4.97
内行花紋鏡	銅 68.24	錫 23.75	鉛 4.62
波文獸帶鏡	銅 68.87	錫 24.47	鉛 4.88
流雲文方格規矩四神式鏡	銅 66.70	錫 24.22	鉛 5.18
流雲文方格規矩四神式鏡	銅 69.62	錫 23.96	鉛 4.70
波文方格規矩禽鳥鏡	銅 68.60	錫 24.70	鉛 4.64
半円方形帶神獸鏡	銅 71.61	錫 17.88	鉛 7.69

われていますが、この様に様々な含有率が示されるということは他の要因（原材料調達・鋳造温度・価格等）を考えなければなりません。

今度は銅と錫の比率について考えます。ついで想起されるのが「周禮」「考工記」の銅製品には六つの種類があるという記事です。

鋤・鍔を作るには、銅6に対し錫1、
鐘を作るには、銅5に対し錫1、
斧を作るには、銅4に対し錫1、
戈を作るには、銅3に対し錫1、
太刀を作るには、銅5に対し錫2、
矢と鏡を作るのは銅と錫を半々とする。

このように鏡は西周の時代には銅と錫を半分づつ混合して鋳造していたようですが先漢式鏡のそれは三つのグループ共、明らかに異なります。

これは中国大陸において西周の時代は青銅製品の鋳造に関して、製品ごとにそれぞれの金属の持つ特性を生かす一定の鋳造法が確立していましたが、春秋戦国の時代に入りますと諸侯がそれぞれ独立して統治するようになります。その結果各地の鉱山が開発され、その鉱石に見合つた様々な鋳造法が開発されたことを意味するものだと考

三角縁画像式鏡	銅 70.58	錫 24.35	鉛 2.99
半円方形帶鏡	銅 67.31	錫 23.52	鉛 6.16
画文帶環状乳神獸鏡片	銅 68.08	錫 23.20	鉛 6.13
内行花紋清白鏡（樂浪出土）	銅 60.56	錫 24.99	鉛 4.81
方格規矩禽獸帶鏡（樂浪出土）	銅 68.40	錫 24.30	鉛 4.86
尚方獸帶鏡（樂浪出土）	銅 68.87	錫 25.20	鉛 4.70
波文二神二獸鏡（日本南山城出土）	銅 68.79	錫 22.80	鉛 5.75
長宜子孫内行花紋鏡（日本南山城出土）	銅 64.38	錫 26.36	鉛 6.68
正始元年神獸鏡（日本但馬出土）	銅 66.80	錫 24.00	鉛 5.28
尚方盤龍獸帶鏡（日本山城出土）	銅 64.67	錫 26.59	鉛 4.10
銅・錫・鉛に限定した百分比	銅 70.68	錫 24.22	鉛 5.10
重圈清白鏡	銅 69.40	錫 25.69	鉛 4.91
内行花紋明光鏡	銅 70.15	錫 23.32	鉛 6.53
君宜高官内行花紋鏡	銅 72.71	錫 22.53	鉛 4.76
位至三公变形双龍鏡	銅 70.45	錫 23.63	鉛 5.92
盤龍鏡	銅 68.66	錫 23.76	鉛 7.58
画像鏡	銅 68.63	錫 24.32	鉛 7.05
長宜子孫内行花紋鏡	銅 68.63	錫 24.32	鉛 7.05

方格四乳葉文鏡	銅69.70	錫24.39	鉛5.91
四乳変形虺龍文鏡	銅70.83	錫23.96	鉛5.21
內行花紋清白鏡	銅70.71	錫24.18	鉛5.11
波文獸帶鏡	銅70.64	錫24.58	鉛4.78
內行花紋鏡	銅70.12	錫24.91	鉛4.97
流雲文方格規矩四神式鏡	銅69.41	錫25.20	鉛5.39
波文方格規矩禽鳥鏡	銅70.83	錫24.38	鉛4.79
半円方形帶神獸鏡	銅70.04	錫25.22	鉛4.74
三角縁画像式鏡	銅73.69	錫18.40	鉛7.91
半円方形帶鏡	銅72.08	錫24.87	鉛3.05
画文帶環狀乳神獸鏡片	銅69.40	錫24.25	鉛6.35
內行花紋清白鏡（樂浪出土）	銅69.89	錫23.82	鉛6.29
方格規矩禽獸帶鏡（樂浪出土）	銅67.02	錫27.66	鉛5.32
尚方獸帶鏡（樂浪出土）	銅70.11	錫24.91	鉛4.98
波文「神」獸鏡（日本南山城出土）	銅69.73	錫25.51	鉛4.76
長宜子孫內行花紋鏡（日本南山城出土）	銅70.67	錫23.42	鉛5.91
正始元年神獸鏡（日本但馬出土）	銅66.08	錫27.06	鉛6.86
尚方盤龍獸帶鏡（日本山城出土）	銅69.52	錫24.98	鉛5.50
	銅67.82	錫27.88	鉛4.30

先漢式鏡と漢式鏡の成分分析を検討してみますと、鉛と錫の含有比率が異なるのに対し、銅の含有比率が類似している事に気がつきます。因みに先漢式鏡の鉛の含有比率は0.57%～17.59%であるのに對し、漢式鏡のそれは3.05%～7.91%、錫は先漢式鏡が8.23%～27.35%であるのに對し漢式鏡は18.40%～27.88%です。

一方銅の比率は先漢式鏡65.85%～76.70%、漢式鏡66.08%～73.69%とほぼ同様です。

鏡の成分分析結果について

先漢式鏡には黄赤色の細文地四鳳鏡が銅74.18、錫8.23%、鉛17.59%と、錫と鉛の比率が全く異なるものがありますが、これは鏡面に赤色を出す為の特別の鋳造であつたと考える事ができます。この鏡を除きますと先漢式鏡時代に、ばらつきの見られた鉛の比率が、漢式鏡の時代に入りますと3.05～7.91%となり安定したものとなります。一方銅の比率は先漢式鏡と漢式鏡の間におおきな差は見受けられません。

これに対し冒頭に示しました三雲遺跡出土の鏡群は、成分比に大きなばらつきがあります。これは極めて重要な実験を物語つてゐるものと思われますので説明いたします。

三雲遺跡鏡群の成分分析結果は四つに大別されます。

一つはE-B 005重圓文清白鏡とE-B 006雷文鏡で、銅と錫がほぼ同じ構成比率を示しています。これは中國大陸出土の先漢式鏡にも漢式鏡にも見受けられなかつた「周禮」「考工記」の鏡の鋳造比率と同じで、この鏡を鋳造した工人は「考工記」の鋳造技術伝承者であった可能性があります。

二つ目で改めて思い出されるのは『漢書』上巻「地理志第八下」に記載されている「彼は、道の行われないことを悼み、筏を設けて海に浮かび九夷の国に往つて住みたいと望んだ」という、孔子の東方に礼節を尊ぶ国ありといふ伝承です。

これは戦国時代から秦、漢への激動の時代に、既に遼寧半島まで交易に赴いていた北九州諸国の人々の往来で、中国中原の文化が伝播し青銅工人も移住して、彼等が先漢式鏡、漢式鏡を鋳造した結果、「周禮」記載の銅・錫折半の鏡が三雲遺跡1号甕棺墓から出土したということを考えることが出来ます。

次はその二つの鏡を除く三雲遺跡1号甕棺出土鏡で、何れも先漢式鏡・漢式鏡と相似する成分比率を示しています。

ところが時代がやや新しくなる2号甕棺出土鏡は、「これらとは違つた成分比率を示し特に棺外出土のE-B 015連弧文日光鏡2は、銅の比率が27.48%、錫の比率が61.68%と逆転しており、鋳造工人の相違を示しております。最

後に三雲遺跡最古の前方後円墳端山古墳前方周濠から出土した小形鏡は、錫の比率が1.87%極めて低く、時代の相違、鋳造技術の違いを物語つてゐるものと思料します。

最後に三雲遺跡1号甕棺墓出土鏡の年代を考察します。出土鏡を代表するのは径九寸約30cm弱の大型重圓彩画鏡です。これは鏡背面の縁以外の部分に朱、青色、白色の付着物がありました。この鏡は同伴の雷文鏡と共に先漢式鏡だという説と、双方漢鏡II期のものだと言う説がありますが、梁上椿の「巖窟藏鏡」には先漢式鏡10素地鏡のなかに三輪素地鏡があり、素地に彩色を加えた彩文鏡があると記されています。一番の決め手は先漢式鏡特有の鉗を持つてることで筆者は管見したところ列島で出土した唯一の先漢式鏡だと判断しています。

すなわち青柳種信の『筑前國怡土郡三雲村古器図説』で見た、鉗の基部がやや広く、鉗の口部が細くなつており、稜状に突起した弦条を持つてゐる点に注目しました。一方雷文鏡の方は、先漢式鏡・連弧文鏡のなかには雲雷文地四線連弧文鏡と、雲雷文地蟠夔連弧文鏡がありますが、これは青柳種信の『筑前國怡土郡三雲村古器図説』を見ますと、鉗が漢式鏡の乳式の円鉗ですから漢式鏡であると判断されます。

しかし先漢式鏡が一括遺物として出土していることにより、この遺跡の年代は從来言われてきた弥生中期後半

ではなく、弥生中期中葉、実年代では前二世紀代に入るものと判断します。

須玖岡本遺跡

今度は奴国の王墓といわれている須玖岡本遺跡出土鏡の鉛同位体比分析結果を中国大陸との繋がりの点から考察します。

鉛同位体比による鉱石使用鉱山判定基準

従来は 206/204 分の 10 未満、207/206 及び 208/206 分の 10 未満の差の場合に一致、それぞれ 100 未満の差の場合を符合という表現で表してまいりましたが、今後は数字による表現に改めます。そして違いの合計数字を相違指数として表示するにこよつて、より状態が明確になるようにしました。

即ち、違いの数字が全て 10 未満で、相違指数も 30 未満のものを使用確実なものとし、違いの数字が 100 未満で相違指数 300 未満のものを可能性高きものと表示しました。

38 草葉文鏡 1

206/204 · 17.698 · 207/206 · 0.8783 · 208/206 · 2.1658

42 草葉文鏡 5

17.703 · 0.8781 · 2.1659

「」れども前者同様、209 陝西省・丹鳳鉱山の鉱石 1 分の 1 · 201 遼寧省・青城子鉱山の鉱石を 1 分の 1 混合した指数、の 1/11 の指數が誤差の範囲で一致しており両鉱山の鉱石使用である。違いは僅か 10 · 2 · 8' 相違指数 20 である。

43 草葉文鏡 6

17.770 · 0.8750 · 2.1624

「」れども 201 及び 209 を等分に混合した鉱石を使用してこそ可能性が高くなる。違いは 41 · 24 · 28 相違指数 93 である。

44 蟬蠻文鏡

17.605 · 0.8836 · 2.1853

「」れども 209 陝西省・丹鳳鉱山の 17.622 · 0.8803 · 2.1809 と違いが 17 · 33 · 44 相違指数 94 で、「」の鉱山の鉱石使用と考えられる。

45 星雲鏡

17.760 · 0.8762 · 2.1672

「」れども 201 及び 209 を等分に混合した鉱石使用の可能性が高い。違いは 31 · 12 · 76 相違指数 119 である。

39 草葉文鏡 2

17.678 · 0.8782 · 2.1660

「」れども 209 陝西省・丹鳳鉱山の鉱石を 1 分の 1 · 201 遼寧省・青城子鉱山の鉱石を 1 分の 1 混合した指数、の 1/15 の指數 23 である。両鉱山の鉱石使用されたものと考える。

40 草葉文鏡 3

17.743 · 0.8754 · 2.1720

「」れども 201 を 1 分の 1 · 209 を 1 分の 1 とした 39 号鏡の回り鉱石を使用している。違いは 50 · 29 · 53 相違指数 132 で何れも符合している。

41 草葉文鏡 4

17.709 · 0.8779 · 2.1650

「」れども同様 201 を 1 分の 1 · 209 を 1 分の 1 使用している。違いは 16 · 4 · 17 相違指数 37 で近接している。

両鉱山の鉱石使用である。

46 星雲鏡

17.863 · 0.8712 · 2.1594

「」れども前者同様 209 · 210 両鉱山の鉱石 1 分の 1 · 210 丹鳳省・鄧家山鉱山の鉱石を等分に混合した 17.837 · 0.8730 · 2.1489 と違いが 26 · 18 · 105 相違指数 149 が近いので、両鉱山の鉱石が使用されたものと考えられる。

47 星雲鏡

17.857 · 0.8720 · 2.1599

「」れども前者同様 209 · 210 両鉱山の鉱石使用の可能性が高くなる。違いは 20 · 10 · 110 相違指数 140 である。

48 重圓文鏡 (明光)

17.758 · 0.8751 · 2.1581

「」れども 201 遼寧省・青城子鉱山の 209 陝西省・丹鳳鉱山の鉱石を等分に混合した 17.729 · 0.8774 · 2.1596 と違いが 29 · 23 · 15 相違指数 67 が少ないのでも、鉱石を使用してこそ考えられる事がである。

49 重圓清白鏡 (青白色の鏽入り)

17.775 · 0.8756 · 2.1649

「」れども前者同様 201 及び 209 の鉱石を等分に混合したものを使用している。違いは 46 · 18 · 53 相違指数 117 である。

50.連弧文清白鏡

17.607' 0.8826' 2.1748

「これは201陝西省・丹鳳鉱山の鉱石と、209陝西省・丹鳳鉱山の鉱石を等分混合した17.729' 0.8783' 2.1596を使用している。違いは15・23・61相違指数99.5%」柘に留まっています。

51.連弧文清白鏡「昭白」

17.671' 0.8796' 2.1707

「これは201遼寧省・青城子鉱山の鉱石を三分の一と、0.8783' 2.1667を使用している。違いは22・13・40相違指数75%小なり。」

52.日光鏡

17.741' 0.8767' 2.1672

「これは201と209を等分混合した17.729' 0.8774' 2.1596の鉱石を使用している。違いは12・7・76相違指数95%である。」

53.昭明鏡「以」

17.737' 0.8771' 2.1661

「これも同様に17.729' 0.8774' 2.1596となる201と209等分混合の鉱石を使用している。違いは8・3・65相違指数76.5%」柘である。」

54.昭明鏡

17.804' 0.8750' 2.1612

「これも同じく201遼寧省・青城子鉱山の鉱石と、209険西省・丹鳳鉱山の鉱石を等分混合した17.729' 0.8774' 2.1596を使用している。違いは75・24・16相違指数115である。」

1.の項のまとめ

この須玖岡本遺跡出土鏡の鉛同位体比分析から判明し重要な事柄が二つあります。

先ず第一の事柄は、この鏡の出土した甕棺の時代は甕棺の形式編年から弥生時代中期後半と考えられており、最近のAMS年代法研究の成果も踏まえますと、筆者は実年代が前世紀に入ると思っています。

一方出土鏡の中には復元径が23cmに達する草葉文鏡二面があり全般的に極めてレベルの高いものです。その上、陝西省・丹鳳鉱山を中心とする遼寧省・青城子鉱山と甘肅省・鄧家山鉱山という中国大陸の極限られた鉱山の鉱石使用から、同一の、官営工房あるいはそれに匹敵する技術水準を有する工房で製作されたものと考えることができます。

この事は、BC一世紀にすでに中国の優秀な工房で作成した鏡を九州の奴国が交易で入手していた事を意味します。」

し、従来言われてきた漢の武帝が朝鮮に楽浪郡など四郡を設置したBC一〇八年以降の往来開始ではなく、それ以前から恐らく遼寧半島辺りまでを交易の範囲に入れただ大陸との交流があつたことを裏付けるものだと思います。

従つてこの須玖岡本遺跡の被葬者すなわち奴国の王は、建武中元一年（五七）正月後漢に遣使奉獻し「漢委奴國王」という印文のある金印を光武帝から下賜された人物の何代か前の人と云う事になります。

次に今ひとつ大切なことは従来言われてきた鏡の伝世説を否定する」とです。

須玖岡本遺跡で出土した草葉文鏡は漢鏡II期に相当し他の同伴した鏡より古いので伝世したものだという解釈がありました。

これについては、「これら三面の草葉文鏡を詳しく調べますと、重圓四乳葉文鏡二面と方格四乳葉文鏡に分かれ、是は「巖窟藏鏡」19頁記載の鋤座を殆ど方形とする草葉鏡と、それと異なる型式を持つ重圓鏡が一緒になつたものだと考える事が出来ます。草葉鏡の方は秦代末から前漢時代前期までですが、重圓鏡の方は前漢時代の前期から後漢の時代にまで及んでいます。

ということになりますと両者の合併鏡の流布期間はより重圓鏡の方にウエイトがかかり、他の同伴鏡との年代

差はなく従つて伝世鏡説は消滅します。また前述の鉛同位体比分析によつても、同伴した他の鏡との差はなく、こちらの方からも同一時期、同一工房での製作と考えることができます。

今一つは甕棺外から出土した夔鳳鏡の年代についてです。従来この鏡は古墳時代中期のものだと言われてまいりました。その理由の一つは、銘文のなかに「宋」の字があるから六朝の宋時代のものだとしたことです。しかし六朝では国名を冠する場合多くが「大魏」とか「大梁」というように大の字を使う場合が多く「巖窟藏鏡」に記載されている鳳鏡すなわち夔鳳鏡の流布年代である前漢時代から兩晋時代までを適用すれば、甕棺内の出土鏡群と同時代のものであると考えることができます。

一方この鏡の鉛同位体比につき馬淵久夫は「須玖岡本遺跡」119頁の「須玖岡本遺跡青銅器の鉛同位体比」のなかで、208/206が2.11' 207/206が0.852を示す表を図示していますが、これは前述の一七面の鏡の鉛同位体比指數とは異なり、中國大陸ならば浙江省・日本列島ならば神岡を含む幾つかの鉱山の鉱石使用の可能性があります。

しかし従来言われてきたような、この甕棺外から出土した夔鳳鏡によつて、甕棺の年代を動かすとか、この夔鳳鏡が後世、他所から混入したというような考えよりは、甕棺内部の相伴の鏡群が中國大陸からの一括購入品であ

るのに対し、こちらは日本列島で製作した鏡であった為、棺外に埋葬したと考える方が自然だと思います。

次回は今回検討した以降の鏡大量出土遺蹟の検討を行い、桜井茶臼山古墳大量鏡副葬前夜の状況を考察したいと思つております。それはどりも直さず弥生時代後期における日本列島と中国大陆・朝鮮半島との交流研究につながります。

参考文献

- 青柳種信『筑前国怡土郡三雲村古器図説』刀江書院、一九三〇年。
岡部裕俊・角浩行・野田純子『倭人と鏡』「三雲南小路1号甕棺墓」埋蔵文化財研究会、一九九四年。
小田富士雄・田村圓澄『奴国の首都須玖岡本遺跡』吉川弘文館、一九九四年。
小竹武夫訳『漢書』上巻「地理志第八下」筑摩書房、一九七七年。
高橋愛訳『周禮』下「考工記」菜根出版、一九七六年。
橋口達也『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣、一〇〇五年。
馬淵久夫・平尾良光『福岡県出土青銅器の鉛同位体比』『考古学雑誌』75—4日本考古学会、一九九〇年。
望月明彦「三雲出土の青銅器のICP分析」『三雲遺跡』

鏡（その13）

アレクサンドレイア燈台の鏡

中山喬
たか
ひろ

ローマ帝政期、フィロは、人間が作った信じられないようなものとして、次の七つを挙げました。

今回は世界の七不思議にも出てくる、クレオパトラが建設者の一人にあげられている紀元前三世紀に建てられたファロス島の塔の鏡と、ロードス島の巨像が首にぶら下げた鏡についての伝承が、オリエントでは八七五年から一五五六年まで、ヨーロッパでは一一七三年から一五八四年まで少しも変化しなかつた事を述べ、それが、どのようにして、一九四七年にサンリゴバンの製造所で作られた200インチ(5.08m)の鏡を備えているカリフォルニアのパロマ天文台建設の基本的原理となつたのか、その劇的变化に迫ります。

ロードス島の巨像（図1参照）

世界七不思議

IV 福岡県教育委員会、一九八三年。
梁上椿『巖窟藏鏡』同朋舎出版、一九八九年。

ドス島はありますが、島民は彼等の太陽神の首にぶら下げられていた鏡によつて、シリヤやエジプトに行く船を見る事が出来たと、一五八四年ギヨーム・ブーキエ、ブクロールは視覚に関する『論集』のなかで述べています。またフィレンツェの商人クリストフオロ・デ・ボンデルモンティは、一四一四年、島に滞在しますが、彼が一四二〇年頃著した『多島海の島の書』には古代の資料に基く次の記事が掲載されています。

ある書物のなかに見つけたのだが、この偶像（ロードス島の巨像）は青銅製で、その胸の真ん中にとても大きな鏡をつけていて、エジプトを離れた船がそこに見えるくらい輝くのだが、そのうえ鏡はそこにあるだけではなく、島内にはもっと小さいとはい、一千以上も柱の上に置かれているのである。

一方、ヨーロッパに直接もたらされた柱の上に鏡を置く伝説には、次のようなものがあります。それはイスパニア出身のアラビア人のものです。彼、ハサン・イブン・ムハマッドのアフリカについての著作が一五五六年にアントワープトリヨンで刊行されますが、その中の記述を紹介します。

アレクサンドレイアには驚くべき高さのとても大きな

水に囲まれた岩の上に築かれた白い大理石でできた建物は、沢山の階があつた。それは航海に役立つ目印で、沖から入つてくる船がしぐじらないように、信号を高く見えるように据えつける必要があつた。

プリニウス（二三一九六）

燈台は夜間航行中の船舶に浅瀬と入港を、火で合図する。

スタティウス（四〇一九六）

夜ファロスの上に浮かぶ光は月そつくりだ。

これらの見方は近代になると次のように変えられます。

一七二九年—ベルナール・ド・モンフォーコン

塔が異常に高いので、そこに灯された火は月のように見えた。しかしさらに遠くからそれを眺めると、もつと小さくなつて、地平高く上つた星のように見えた。

オリエント・イスラム鏡の設置

柱があり、それは家の柱と名づけられているが、かつて紀元前三世紀のプトレマイオス朝時代に、アレクサンドレイアに一人の王がいて、その王が町を堅固にして陥落しないようにと、この柱を建てさせ、その頂きに鋼鉄製の鏡を置き、その鏡は、その前を通る敵方の船をすべて焼き尽す力を持っていた。しかしマホメット教徒がやって来て鏡を壊し柱も持ち去つてしまつた。

この物語はこの後、アレクサンドレイアの鏡が、たんに柱の上に姿を見せるだけではなく、ロードス島の巨像の上にも見出すことができるものであり、それはファロスの塔と対をなす、人間型燈台として認められるものとして発展します。

アレクサンドレイア燈台の鏡（図2参照）

ファロスという名で呼ばれるアレクサンドレイアは世界七不思議のなかで最も有名なものでした。塔は紀元前三世紀にアレクサンドレイア近くの小さなファロス島に建てられました。

これについての古代の記述を紹介します。

ストラボン（前五八—後一五）

古代のファロスの記憶は近世に入つても存続していませんが、その頂きの火のかわりに、一個の鏡、オリエント・イスラムの鏡が設置されることにより、影がうすくなります。

八七五年頃—ペルシャの旅行者イブン・コルダドゥベー

ファロスの塔の上に鏡が掲げられ、その下に座つた者には、あいだに海が広がつていてにもかかわらず、コンスタンティノポリスにいる者が見えた。……ファロスは一個のガラスの、ざりがにの上に建つていて。

九〇三年—イブン・アル・ファキー

世界には四つの奇蹟がある。その第一は、アレクサンドレイアの燈台に吊るされた鏡である。

九五四年—アラビアのヘロドトスたるマスードイ

アレクサンドレイアの燈台は、天文台兼監視所として素晴らしい器具、時や天体や船の運行を追う自動人形を備えると共に、高所にある種の透明な石の薄片で出来た大きな鏡を置いて、視力の及ばないところにいる、ローマからやつてくる船舶がみえるようにした。

ざりがに型のガラスの台座の上に建てられたファロス

の最上部には奇妙な青銅の立像達が設置され、これらの立像の一つは、その右手の人差し指を常に太陽に向けて天体の回転を描き出し、別の立像は時間毎に鳴る美しい音色により時間を知らせ、第三の立像は海に手を向け、敵が一晩で航海する距離のところまで来ると、警告音を発した。

一〇四七年—ペルシャの旅行者ナーシル・ホスロー

アレクサンドレイアで私は保存状態の良い燈台を見た。かつてその頂には一個の鏡があつてコンスタンティノボリスからやつて来るギリシャ艦隊がその正面に位置したとき、それを焼き払つたようだ。

一四四〇年頃—アーメド・エル・アブシヒ

伝えられるところでは、この燈台の上に支那の鋼鉄でできた七クデ（約3.5 m）の大きさの鏡があつて、そこにはキプロス島にいる船舶が映つていた。またこの鏡の中には、ヨーロッパのあらゆる国々から航海に出た船が見え、それが敵方の船であれば、町に近づくまことにさせておき、太陽が子午線を越えて傾き始めたときに、鏡をその正面に向けて船の方向に反射させ、そ

れを燃やし乗組員全員を殺害した。

一八九七年—「不思議要論」（伝説上のエジプトのファラオや古代エジプトに土着していたコプト人伝承のアラビア的集成をしたもの）
B・カツラード・ヴォー訳『哲学協会論文集』パリ

海辺の塔に昇つて、化合物でできた多種多様な鏡を置いた。太陽光線を敵艦隊に向けて反射し、それを燃やすものもあれば、海の反対側に据えられて、そこに町々が見えたり、またエジプトの土地が見えたりするものもあつた。一年前から、豊作になる地方と不作になる地方とが、また国の未来の様々な出来事を見ることができた。海の怪物が住民達に害を及ぼさないようする鏡もあつた。

このように十世紀に及ぶエジプトの伝承には、この時代にイスラムの世界に影響を及ぼした極東の寄与と、シユラクサイ・コンスタンティノボリスについてのビザンティン伝説との密接なつながりを見る事が出来ます。

ヨーロッパにおける伝承

一一七三年—スペイン、ラビ・トウデラのベンジャミン著『旅行記』

土地の住民達は、それをマグラアと呼び、アラビア人はマガル・アレクサンドレイアつまりアレクサンドレイアの燈台と呼ぶ。人の断言するところによれば、アレクサンドロスがこの塔の頂にガラス製の鏡を置くと、そこではギリシャやヨーロッパからエジプトに危害を加えようとやってくる艦隊が五十バラサンング（一バラサンングは5250 m）以上も離れたところから見えたので、防衛体制を整えることができた。アレクサンドロスの死後も長く保護されていたが、ギリシャからやつてきたソドロス船長は、衛兵を葡萄酒で眠らせ鏡の破壊に成功した。その結果エジプトは大打撃を受け、キプロス島、クレタ島という地中海の拠点を失う事になつたのである。

一五八四年—チューピングエンの教授マルティン・クルジウスがバールで出版した『テュルコグレキア』

彼はファロスについて、全く前述の記載と同じ事を述べるのですが、ただ一つ、ガラス製の鏡を置いて見る距離を十倍の五百バラサンングとします。これは大変な物議をかもし出し、ひいては反射望遠鏡の開発に結

びつきます。

このクルジウスの論述には当然反論も出ます。

一六三〇年—トルトナの司教アレシ

ブトレマイオスは通常の視力によつてではなくクリスタルガラスによつて、六百マイルの距離から敵船を見たといわれる。しかしこれは私にはいささか疑わしく思われる。というのは、海は球形をしているので、この事は不可能であり、またもしそれが事実だとすれば、そんな稀有な発明がたちまち消滅して占星術師達が用いていなかつたことは、ありえないからである。

一五九〇年—『著名なポイティンガーの蔵書からの旅行地図』（図3参照）

一二六〇年頃の地図にアレクサンドレイアの燈台が掲載されたことを明らかにしています。

それは三層から成り、最上階は円柱に似た丸い塔で、その上に巨大な円形の鏡が置かれていました。

一九二九年—「エネアス、十二世紀の物語」『中世フランス名作集』パリ、J・J・サルベエルダ・ド・グラーブ

十二世紀のテクストは、ファロス伝説の構成要素を探り上げ、そこから新しい物語を作り上げています。

海からでも陸からでも

包囲しようとするが、それでも

塔の上に据えた鏡で

とてもよく見える

塔の上に置かれた鏡で

敵がやつて来るのがよく見える

だから準備万端

守りを固めて

敵の侵入を防ぐ事ができるのだ。

反射光学法則の察知

古代人は反射光学の諸規則を、それらを増大する体系を含めて偶然見つけることが出来たという考え方です。

一六八五年—J・ツアーン『精巧な眼』エルフルト

ドイツ・ライプチヒの西南に位置するエルフルトの教会参事会員が、ある日、自分の部屋のなかを歩き回っているうちに、壁にかかった鏡を覗いて、人間ほどの大きさの十字架を見た。彼にはそれが、自分が参事会

一九〇九年—H・ティールシュ

ティールシュは、四角な建造物、及び八角形の高い塔を持つ三層の建物を作り、そのなかに、彼の考案した反射装置を組み込みます。

その装置は次の様に構成されていました。

いる点が違うだけです。

このようにアレクサンドレイア燈台の鏡を最近復元したものは、今日の最大の望遠鏡レベルに達しており、そこには科学が予想としてではなく、回顧的なフィクションになるという世界があります。

アレクサンドレイア燈台の鏡の復元装置（図4参照）

員になつてゐる教会の祭壇の中央に据えられたもう一つの十字架と同じもののように見えた。はじめ彼は驚いたが、位置を変えると、その像が消えたので、驚きは更に大きなものとなつた。彼が同じ場所に戻ると、すぐさま像は再び姿を現した。

彼はあちこち見回したが、こんなにも大きな像の出現を説明できるものを何も見出すことができなかつた。

が、彼は遂に高いところに十字架の小さな像のあることに気が付いた。

鏡はありふれたタイプのものだつたが、彼は表面が平らなように見えながら、実は僅かな窪みのあることを確認する。

この法則発見により、プトレマイオス朝の都市アレクサンドレイアは、その奢侈産業、鏡、宝飾品によつて、このような発見の機会を与えており、哲学者、芸術家、優れた観察者が、たまたまドイツの教会参事会員のように、鏡の焦点の近くにいて、遠方にある対象物が目前にあるように見えることに気がつく機会は大変確率の高いものであり、それがアレクサンドレイア燈台の鏡の設置に繋がつたのだと連想されました。

参考文献
ユルギス・バルトルシャイテス著・谷川渥訳『鏡』国書刊行会、一九九四年。

- ①エジプトの像は、上の階に据えられた四個の回転平面鏡によって、燈台の内部にまず水平に投映される。像は塔の頂きのカメラ・オブスクーラの内部にある、四五度の角度で先端を下にして吊るされたピラミッド形の鏡に当る。
- ②ピラミッドで受けた映像は次に、二階の床の上に据えられた四mの凹面鏡に垂直に反射される。
- ③観察者は最上階にて、井戸に身をかがめるように覗き込むと三十倍に拡大された像が見える。

反射望遠鏡の発明と現代天文台建設

一六六八年、ニュートンは反射望遠鏡を発明し、そのモデルに基づいて、現代の天文台が作られます。しかしその原型はティールシュによって復元されたアレクサンドレイアの燈台と瓜二つで、天文学者（すなわち見張り）が最上階に居を定め、立たず傾いた椅子に腰をかけて

愛、微笑み
 そして花はすぐに
 移ろいゆく
 夢はかなみ
 世をはかなみ
 たつた一人のぞみ捨てて
 歩きつづけた

愛、微笑み
 そして花を信じ
 求めた者は
 破れはてて心みだれ
 閣をさまよう

愛、微笑み
 そして花が心に
 やどつた者は
 夢かなつて
 愛にめざめ
 悲しみは去つた

泣きつくした
 涙枯れはてるまで

追伸 — サウダージ — より その一

メディタサン・瞑想

(ニュウトン・メンドンサ原詩
アントニオ・カルロス・ジョビン作曲)

松下壽男

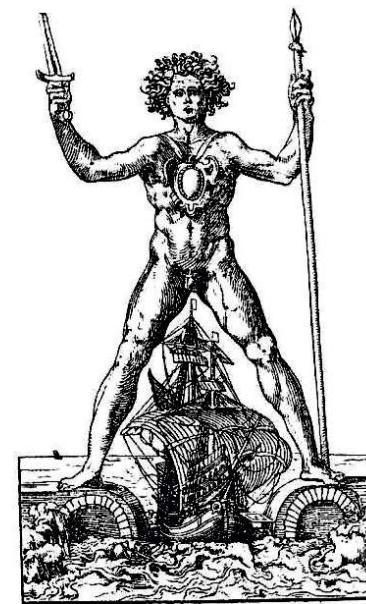


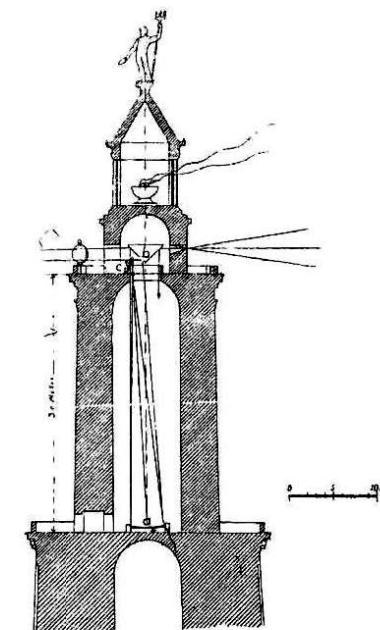
図1、ロードス島の巨像。
A・テヴェ、1554年。



図2、ファロス、アレクサンドレイアの貨幣、
コモドウス、180～192年。



図3、ファロス、ポイティンガーの地図、1260年頃。
H・ティールシュによる復元、1909年。
a—凹面鏡 b—45度の角錐鏡 c—上部基台の観察者。



日本近代文学点描 その二

松 下 壽 男

カルチャード・サーフィン

♡ 關さんはところどころで、足を留めて、

そろく芽を出し始めた草を探った。そしてそれを清三に見せた。風呂敷にも包まずに持つて居る清三の水薬の瓶には、野の暖かい日影がさし透った。

この「田舎教師」の一節は、印象的であり、しかも象徴的です。歌や俳句にまで凝縮できそうな情景です。その情景描写は、近代の印象派の絵画を思わせるものがあります。現代流に言えば、さながら映画のワンシーンです。

作者の田山花袋は、自然主義を代表する文学者と言われます。しかし、彼を文豪と呼ぶ声を聞いたことはありません。文豪の冠は、自然主義では島崎藤村が被り続けてきました。二人の違いは一目瞭然です。藤村の文学には

ヒューマニズムが色濃く、花袋の文学はルポルタージュ性が色濃いのです。

花袋が「田舎教師」で描いたものも時代でした。しかも関東の片田舎に新卒で赴任して一四才で病死する青年教師の数年間の生活描写に徹することで、日露戦争勝利によって頂点を迎えた明治という時代の光と影を見事に描き切りました。

彼はその七年後に「時は過ぎゆく」で時代の変遷を描きました。光から影が、影から光が絶え間なく生成する、時代を超えた時の流れというものを、新宿という田舎を舞台に江戸、明治、大正の三代を一執事として誠実に生きて行く人生とその身辺を記録することを通して描き切ったのです。若さのほかに失うものはなく長寿のほかに得るものもない淡々とした主人公こそが、生成という事柄をよく象徴し得るのです。

このようならルポルタージュ性は、古事記や芭蕉の紀行文に共通する日本文学の普遍性のように思われます。

ヒューマニズムを即人道と呼ぶのなら、それは即天道と呼べるでしょう。私には、世界に向けて咲き開いたカトレアの花のような藤村の文学よりも、日本固有の遺伝子を内に秘めた風蘭の胞子のような花袋の文学の方が、より重要に思われます。

藤村も花袋も共に浪漫派の詩人でした。そしてフランス文学の影響によって自然主義小説家の道を歩み始めます。

一方フランスでは、浪漫主義からの決別を果たすために、写実に加えて、生理学や遺伝学などの実証科学の研究を取り入れることによって形作られていったのが自然主義でした。そうしてゾラの唱える実験小説に比べれば、日本の自然主義などは浪漫的自然主義でしょう。

浪漫主義に根差した自然主義。それは一見矛盾のようですが、しかしながら日本の自然主義、就中花袋の自然主義は、そこから即天道の自然主義に至ります。

ゾラが、人生を、科学可能な自然現象としてとらえることによって、近代人の個性豊かな人間性にせめろうとしたのに対して、花袋は、人生を、普遍的な現象として象徴させることによって、時代を超えた自然性をとらえようとしましたのだと、私は考えています。西洋と東洋では、人生という現象の意味するもののどちら方に大きな違いがあると

考えるのです。それは至極当然なことでしよう。

さて、自然主義に対しても大きく考え方方が違うフランスと日本ですが、現象の描写に関しては共通点があること。それこそが近代の普遍性だというのが私の最大の主張です。

もう一度、冒頭の一節の、葛飾北斎のような、あるいはエドワール・マネのような印象派風のスケッチを味わってみましょう。

文学がフランスから受けた影響は、美術がフランスに与えた影響との相関の中でとらえるべき事柄だろうと、私は考えます。そうすると、ことによつてフランスの文化と日本の文化との間に、西洋画やジャポニズムといった中間文化を相互に生成する共通の接点が見えてくるのです。二つの文化に共通の接点があつたからこそ、双方向の交流が実現したのだと考えられるのです。その共通点とは、フランスに印象派を誕生させ日本にそれを浸透させたもの、言い換えば印象主義の原点とも言えるものでしよう。

しかも印象派は、近代絵画全体を括れるほどの普遍性を備えていて、世界の様々な文化と共通した接点を持ち、さらにその現象学的な思索を通して、自然主義や象徴主義などの芸術思潮を多様に生成して来たのだと考えられるのです。

それにしても、明治の文明開化が目標として中間文化を産み出し易い相手を選んで、芸術はフランス、経済はイギリス、学問はドイツ、農業はアメリカから、主に学んでき

たことは、当時はまだ日本が主体的な文化国家だったことの証しだといえるでしょう。

文化は、ある共通点を契機に相互に影響を受け合うものであり、教育もまた文化の現象であることを忘れてはなりません。

そして学習とは絶えざる中間文化の創造だと言い換えることもできるのです。

○えぼれつと かがやきし友

こがね髪 ゆらぎし少女
はや老いにけん
死にもやしけん

はたとせの 身のうきしづみ
よろこびも かなしごも知る
袖のぼたんよ
かたはどなりぬ

ますらをの 五と碎けし
もちたり それも惜しけど
こも惜し鉗鉗
身に添ふ鉗鉗

軍医になつたのです。
二人は陰と陽の対照的な留学生生活を送りつつ、かの地で文学に目覚めます。漱石が、洋の東西を貫く文学とは何かと悩んだ末に文化の自覚を果たしたのに対して、鷗外は文化の狭間で如何に生きるべきかと悩み、それを自文化の言葉で率直に表現することによって、日本の近代小説のさきがけとなる「舞姫」を発表したのです。

異文化との交流を通して文化の普遍性を追究しようとしたのが漱石だったとすれば、交流の現象そのものを文化としてとらえる視点に立とうとしたのが鷗外だったのかもしれません。その視点は、鷗外が武官として担っていた富国強兵と文明開化の国策を蕭々と進めて行くうえで、有効なものだったと考えられます。

留学を終えた鷗外は、軍医として陸軍の近代化の一翼を担う一方で、西欧文学の翻訳を通して文明開化の流れを作り出しています。

武官である鷗外は、文学の独り歩きが、過激な思想を分布させて、富国強兵策の妨げになる恐れがあることを熟知していました。だからこそ論争を厭わない啓蒙活動に取り組み、それが元で小倉に左遷されても、処遇に甘んじてしばらく筆を休めた鷗外でした。そして、うた日記に見るように短歌や俳句、新体詩の創作が身に添うように続けられます。

軍医監になつて軍医の地位を登りつめると、鷗外は、

「うた日記」は、鷗外・森林太郎が詩集の形で綴った戦記です。その中の一篇「鉗鉗」では、日露戦争という、近代日本が初めて西洋と戦う戦場で、はたとせ前のドイツ留学生の思い出がこもるカフスボタンを落とした嘆きがうたわれています。満州派遣第二軍の四十路を過ぎた軍医部長が、十万の戦死者の命と、一つの鉗鉗を比べてさえいるのです。

かつての憧れの西洋と同じ軍服を来て、青い目の将兵と戦うという浪漫的な戦いが日露戦争だったのでしょうか。

浪漫的な戦記という点で、うた日記は、平家物語などの軍記物の伝統に位置しています。とはいえ、その戦争は、満州という極東の隣人の、昔ながらの暮らしを踏みにじる戦いでした。鷗外は、彼らに対しても率直な眼差しを向け、戦争の真実を多面的に描き出してもいるのです。

浪漫派の詩人から自然主義の小説家になつた田山花袋は、一人の田舎教師に視点を当てて日露戦争に沸き立つ世相を「平面描写」していました。丁度その頃、軍医鷗外は、戦場で詠んだ浪漫的な詩を編んで、一編のルポルタージュに仕上げていたのです。

では、鷗外は、自然主義に踏み込もうとしたのでしょうか。

夏目漱石同様、森鷗外は文明開化の国策を担う留学生でした。しかし漱石が、文学を学ぶように義務付けられて帰国後は文学教授になつたのに対して、鷗外は医学を学んで

文学活動を再開します。しかも小説家として旺盛な創作を進めていきます。「青年」や「雁」など小説諸様式のお手本のような作品群が誕生します。

すでに文壇は成熟していました。短歌や俳句などの伝統文学のみならず、近代文学の新体詩や戯曲、さらには小説に、様々な流派が育つて重層構造を成し、西欧文学を選択的に取り入れる良識も育っていました。大正デモクラシーの土壤が耕されていました。

しかし、そのことは、文明開化のためには鷗外の出る幕がなくなっていることを意味します。文筆活動の自由を謳歌する鷗外は、同時に居心地の悪さを感じていたことでしょう。

自らが耕した花園で、自分以外の花々が咲き乱れているその中に、鷗外は選咲きの花を開いていくことになるのです。花園全体の彩りを考えながら、こちらには同系色、こちらには反対色、そして固有種の遺伝子を残したり、西洋種を移植したり、あたかも花園全体が日本の近代文化として咲き誇るようにしているかのようだ。

その立場はまさしく日本の近代文化的自覚者であり、それゆえ随一の文学者であり文豪であり、日本近代文学の花神だったと言えるでしょう。

しかし文豪鷗外は、明治という時代の流れに翻弄されたのかかもしれません。大きければ大きいほど、時の流れが身に降り注ぎます。巨人の目は、高踏的な高みから、異

なる文化や流派が互いに衝突したり交流したりする潮目を見抜いて、時代の流れをよりよい方向へと導こうと、不斷の努力を続けます。それは、絶えず自分がどの流れに立つたらよいかの選択であり、踏み込むか踏み止まるかの選択だつたことでしょう。

自らの努力が時代に翻弄されていたことに気付いたのでしょうか、晩年の鷗外は、好んで伝記を書き始めます。時代の流れに踏み込んだり踏み止まつたりする歴史上の人物の真実を、事実に迫る作者自身の行動と重ね合わせて描き切つていきます。そこには、それまで姿を現すことが少なかつた鷗外の「私」が、率直に言葉を発しているのです。真実を物語る客観的な事実に迫るほど、主観的な内面が吐露されていくのです。その姿に、私は、病巣に迫る解剖医の興奮と同質のものを感じるのでした。

宇宙も文化も層構造を成していますが、同様に人体も層構造を成す小宇宙です。そのことは、何より解剖という行為を通して実感されるものでしょう。まず皮膚というインターフェイス（境界面）があり、皮下脂肪があり、腹膜があり、その下の腹腔には様々な内蔵が層や境界を成して詰まっています。そして戦場での医療行為とは、肉体の層構造を露にして運ばれてくる負傷兵を前にして、手術用の針と糸やメスを手に、どのインターフェイスまで踏み込むか踏み止まるかの選択の連続だったに違いないでしょう。

さて、先の問い合わせですが、鷗外は、うた日記では自

然主義に踏み込めなかつたし、あくまで詩人に踏み止まろうとしたのだと、私は考えます。しかし彼は、戦場に転がり落ちたボタンながら、時代に翻弄されました。だからこそ、戦場の表層で今語らずにはいられない真実が詩を通して語られて、時代を超える作品が残つたのではないでしようか。

鷗外・森林太郎が、筆の代わりに解剖刀で執筆をしていたとまでは言いませんが、彼は、文化というものを、外科医が人体を見るように、層や境界を成すインターフェイスの現象としてとらえていたにちがいないと、私は強く感じます。文化の潮目を乗りこなして屹立する文豪森鷗外は、現代ならばサーファーに喻えることができるかもしれません。

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一 生（十六）

松 下 魏 三

二十六 大阪大学蛋白質研究所の創設

太平洋戦争が終り先進国は競つてタンパク質特に酵素の研究に取り組み、目覚しい進展が見られるようになつた。

赤堀博士は昭和二十二年（一九四七年）に大阪大学の理学部長に就任してから、このような世界的な生化学の潮流に遅れをとらないようにするために、まず多くの学生に生化学に興味をもたせ総合化をすすめることであり、それには大阪大学に生物科学科を設置する必要があるという持論にもとづいて理学部の刷新を図った。そして専門の研究機関として酵素の問題を蛋白質化学として研究する施設をつくる必要があることを痛感して

いた。

当時、先進国では^{〔註1〕}ペニシリンや^{〔註2〕}ストレプトマイシンなどの抗生物質が微生物から次々と発見されるなど微生物研究の進歩は目覚しく、また我が国では伝統的な酒や味噌などの発酵工業の高度な技術を背景にして、たちまち世界の微生物利用の一流国となつていた。

このような微生物研究の進歩と産業の発展のなかで赤堀博士は昭和二十八年（一九五三年）に大阪大学教授のまま東大・応微研の併任教授となり、微生物を使つて酵素による合成の研究を進めていた。

この頃の博士は東大の理学部の教授のほか千葉大学の教授を併任するとともに味の素の研究所の顧問として極めて多忙な日々を送つていたが、タンパク質化学として

の酵素研究に精力的な研究を続けていた。

このような研究に専念するなかで周到に企画検討していした理学部附属の蛋白質研究施設は、昭和三十一年（一九五六年）に文部省予算として認められ、同年の日本学术会議の総会決議などの関門を経て、昭和三十三年（一九五八年）四月一日には大阪大学に全国の研究者が共同で研究利用する施設として蛋白質研究所が誕生したのである。

そして博士は理学部長兼任のまま初代の研究所長に就任した。

この研究所は最初タンパク質の有機化学・溶液学・代謝の三部門で発足したが、その後さらに拡充され十三部門に分かれるようになつた。

その後は世界の学会で注目されていたタンパク質の構造とその働きを解明し、生命現象を分子の段階で追究する研究は世界でも最高の研究所となり、大阪大学の吹田キャンパスにある八階建のビルがその威容を誇っている。

（註1）ペニシリン

アオカビの産出する抗生物質。抗生物質としてははじめて実用化された。ブドウ球菌・肺炎球菌などの発育を阻止する作用があり、ジフテリア・肺炎・敗血症など多くの細菌性疾患に効果がある。一九二三年フレミングが発見・四〇年分離抽出に成功。

五巻を監修した。

この図書の特色は研究者のために実際に役に立つように、できるだけ新しい実験技術の記述を加えたことである。この図書の構成は、一巻は主に有機化学・二巻は物理化学・三巻は生化学及び各論・四巻及び五巻は海外の研究者でノーベル賞級の学者による国際色豊かな最新の研究内容であった。したがつて名著として注目され、多くの研究者が渴望した図書であった。

（註3）ミオグロビン

鉄を含む血色素。ヘモグロビンに類似の赤色のヘムたんぱく質・筋肉中とくに心筋に多く、酸素を貯蔵する役割をはたす。

（註4）インシュリン

脾臓のランゲルハンス島から分泌されるホルモン。ブドウ糖のとりこみを活発にしてグリコーゲンの生成を促進し、血糖を低下させる。糖尿病治療に用いる。

（註5）ヒドラジン

化学式 NH_2NH_2 アンモニア臭をもつ無色の液体。きわめて有毒。還元剤・ロケット燃料に利用。

（つづく）

（註2）ストレプトマイシン

抗生物質の一つ。多くの細菌性疾患に有効で、特に結核の治療薬として使用。尿路感染症にも有効。一九四年、ワックスマンらが土中の放射菌の培養液から抽出。

二十七 研究の充実発展

戦後になって、赤堀博士は中断されていたタカジアステーゼの研究を再開し、その成分であるタカアミラーゼAの結晶化に成功し、またミオグロビンやインシュリンなどの結晶化にも成功した。

これらの成果は日本の生化学が世界に誇る業績として高く評価されている。

そして博士の名を世界の学会において一層有名にしたのはタンパク質のC末端のアミノ酸を決定するためにビードラジンを使う方法であつた。この方法を国際会議で発表したところ画期的な方法として世界に認められた。

この業績により博士は昭和三十年（一九五五年）に日本学士院賞を受賞した。また昭和二十七年（一九五六年）には、日本で第一回のペプチッド討論会を始め、その後京都で第一回の国際ペプチッド討論会が開催され、その時赤堀の名を冠した記念賞が設けられるようになった。

また博士は東大理学部の水島三一郎博士と親しい間柄

編集後記

西宮市の報徳学園から「心田啓発」第四号が送られてまいりました。これは三戸岡道夫さんの「二宮金次郎の一生」を読んだ中学・高校一年生の感想文が掲載されている本です。何時もその文章表現の瑞々しさに感心させられていますが、今回は特に一生のうちで最も感受性豊で記憶力の高まるこの時期に、この感想文を書く機会を与えられた生徒はとても幸せ者だと痛感いたしました。

何故ならば、彼等の書いた感想文の中には、人生を乗り越えて行く上で基本的な数多の教訓が含まれており、知らず知らずのうちに、それらを自分なりに解釈した内容で、人に判るように文章で表現していたからです。

そして、この作文を書くことが、これから社会を創り上げて行く青少年が、出来上がつたどんな権威にも縛られず、流れ動く多数の意見に惑わされず、とらわれぬ若者独自の考え方で、今あるものを組替え造り直していく、基本的な「志」を持つ事に繋がると愚考いたしました。

「志」を磨くには先ず、自分は何のため生を受けたのか、社会のため何をすべきかという自己認識を持つ事が必要です。其の為には歴史、哲学、宗教、文明等の基本的教養を身につけなければなりません。それが相手の身になつて考えるということを出発点とした手抜きのなさ、品質の木目細かさという、我国の根幹を支えている「ものづくり」に直結します。要是是を永続させる精神文化を維持し発展させることが未来を切り開いて行く鍵になる、それは「二宮金次郎の一生」に含まれていると思ひ一文をしたためました。

(T·N)

まんじ第117号

平成22年8月1日発行（非売）

発行人 三戸岡 道夫 (みとおか みちお)

編集長 中山喬央 (なかやま たかひろ)

事務局長 鍋屋次郎 (なべや じろう)

(事務局) 〒223-0056 横浜市港北区新吉田東五丁目 76-35 太田善朗方
TEL·FAX 045 (544) 5947

(郵便振替口座) No.00270-0-64592 加入者名 まんじ

(印刷製本) 日東印刷株式会社

〒142-0054 東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について

「夢おいかけ千里を走る」

田寺 愉翠画

まんじ

No.118

2010.11.1

まんじ第百十八号 目 次

八つ当たり語録（二）	・	新
関東管領始末記① 大いなる陰謀	・	千坂井
関口隆吉こぼれ話	・	堀内永精
小説 家康と麻狂いの右近	・	堀内永人一宏
—遠州菊川の義人 中条右近大夫物語—（5）	・	：
誠忠の茶園（六）	・	：
走る不動産（その四）	・	：
短歌 三十首 廃車して	・	：
短歌 わが愛誦歌（十二）	・	：
短歌 行雲流水（二十九） 絲綢之路游中国	・	：
漢詩 潮騒錄（六三）『漢詩の流れ52』	・	：
特別寄稿 竜馬さんへ	・	：
私の町 今昔ものがたり	・	：
河童の初恋（二）	・	：
目耕録（その二）	・	：
花・	・	：
二八に帰るすべもなし（三）	・	：
古い物・遠い夢 古陶閑話	・	：
（司馬雑感）十五 司馬遼太郎の描いた「伊予」	・	：
陰翳の美学（その四）	・	：
化粧のルーツを訪ねて（一四）	・	：
還暦からの考古学（二十一）	・	：
鏡（その14）	・	：
透明な時間（三）	・	：
追伸 —サウダージーより— その二	・	：
日本近代文学点描 その三	・	：
文化勲章に輝く赤堀四郎博士の一生（十七）	・	：
編集後記	・	：
表紙	・	：

八つ当たり語録

(一)

新井 宏

つれづれなるままに、日ぐらしパソコンにむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつければ、あやしうこそものぐるほしけれ。

今日一日、昨日と同じ水準の日を過ごす事ができた。老人にとって最高！感謝！感謝！なに？昨日よりも素晴らしかった？祝杯だ、祝杯だ。不幸とは昨日よりも不幸な状態を言う。ずっと不幸？老人にだって、そんなことは有りえない。

日本の老人は恵まれすぎている。証明？そんなのは簡単だ。韓国では老人ほど自殺率が高いが日本では、若者ほど自殺が多い。

汚染の疑われる中国産や賞味期限切れの食品は老人が優先して食うべきだ。余命も少ないのだし、子孫を残す

わけでもないのだから。

ドイツでは昔から老人の手術は後まわし。日本でも子供の臓器移植は子供へと決まった。至極当然。

歴史を知らない老人の正義感ほど始末に負えないものはない。幼稚な正義感も同じ。宗教的な正義感も同じ。嫁姑問題、宗教紛争、いざれも我に正義あるため妥協ができないのだ。ああ、そうか。すべての正義感が始末に負えないのだ。

正義の反対は「悪」ではなく、「別の正義」である。

耳が遠くなり、最初の言葉を聞き取れないと、あとはさっぱりわからない。だから最初の言葉をゆっくり明瞭に話してから、スピードを上げるアナウンサーのしゃべりが視聴者たち。不祥事さまざまなのである。

またテレビで二人そろってやつてしている。（世間を）お騒がして申し訳ありませんでしたと。聞いているのは取材陣。何々、申し訳ない？そんなことはない。取材陣はニコニコしている。実は、その報道を聞いて喜んでいるのが視聴者たち。不祥事さまざまなのである。

クエックの「努力逆転の法則」というのがある。名前をつけたのはスイスのシャルル・ボーデヴァンという学者らしいが、寝ようと努力すればするほど寝付けない。そんな現象を法則化したものらしい。

同じことが政治の世界ではしばしば起こる。貧富の差を解消するために行つた労働者優遇により、企業が海外に逃げ出し、仕事が減つて、かえつて貧困層が増え、貧富格差が増大してしまった。韓国にその例を見る。

既存の政府間約束を反故にして、普天間基地を海外あるいは県外に移転することに固執すればするほど、普天間基地は固定化して動けなくなる。

命にさえ、歴然とした軽重がある。イラク戦争では十万名殺され、二百万名の難民が生じたが、米軍の戦死者は四千四百名。しかも、それでいて、自由も平和ももらはされなかつた。

運動会で手をつないで一緒にゴールする方式が一時流行つた。

オバマはイスラム世界に大きな期待を与えた。しかし、イスラエルをどうすることもできないことに失望して、イスラム穩健国さえ、イランの核を支持する方向に向かっている。鳩山前首相が沖縄に期待感を与えて、泥沼にはまつたようだ。

公然の秘密として、イスラエルは核弾頭を百発ほど保有している。しかし、オバマはどうすることもできない。いや、イラクの核施設完成直前に、イスラエルがイランを攻撃するのを期待しているのかも知れない。

韓国の高速道路料金はただみたいにやすい。だから、エネルギー効率の良い鉄道輸送が決定的に遅れた。

今更、高速道路の無料化など時代錯誤も夥しい。鉄道やフェリーと競合しないところだけは無料化しても良いが、無料化で大損した上に、フェリー業界へ四百億円補償支援するとは何事か。

子供手当の目的は出産率向上。しかし大部分は教育に備え貯蓄にまわり、いずれ将来の教育費増につながるであろう。教育費が増えるとますます子供を産まなくなる法則を知らないのか。

進学率の低かった時代、子たくさんは常識であった。韓国もきちがいじみた教育熱の果てに、子供を産まなくなつたのである。

最低賃金法の規定は、生活保護の基準を下回るという。だから最低賃金を引き上げなければならないというのは正論である。しかし、最低賃金が引き上げられると最も被害を受けるのは、弱者たちである。

無駄に放出される精子の生命倫理を語る者はいないが、卵子になると倫理上の問題が姦しい。しかし、連続する現象をどこかで明確に区分するのは偽善である。

血を吸う蚊も生命ある存在。家族、地域社会、国家、世界と並べてみると、遠く離れた世界の生命評価は、なんだん蚊の命に近づく。

そこには遠近法という連續のポテンシャル場が存在していて、どこで区切るかは、世界観の大小による單なる約束ごとに過ぎない。ヒューマニストは広く広く、エゴイストは狭く狭く。

百パーセント「白」、百パーセント「黒」なら問題ない。しかし九十パーセント「黒」なら「疑わしきは罰せず」によって無罪になる。それでは九十五パーセントの「黒」ならどうなるのか。いや九十九パーセント「黒」ならどうなるのか。

冤罪のみを声高らかに叫ぶのは良いが、それによつて犯罪者が大手を振つて歩いていく。社会といふのは不合理的を受け入れる場である。いやなら出て行け。

量刑にも罰金刑から死刑まで連続的にある。しかし黒さに応じて、刑を連続的に加減する方法がない。人事を尽くした上でも、誤りは避けられない。「疑わしきは罰せ

人並み以下の仕事しかできない弱者は、最低賃金でさえ儲つてもらえないくなり、ますます働く場から閉め出され。生活保護を受けるとでもいうのか。

障害者の立場を利用して、生活保護を受けている者同士が結婚すると、安定した生活ができるという。伝道者パウロの言葉「働かざるもの食うべからず」の真意は、「働こうとしない者は食うべからず」である。だから、半人前以下の働きしか出来なくとも、働くとする者こそ、食べる権利がある。福祉が、働くとする意欲を奪うとしたら、キリスト教によれば、食べる権利を奪うことになる。

手厚い福祉制度ほど犯罪を生む。いまや、日本の長寿統計が揺らいでいる。百歳以上の幽霊たちは、永久に生き続けなければならない。死ぬ機会を失つたのだから。

百歳以上の老人を貸し出します。お役所の調査に備えて下さい。

精子・卵子から胎児になり新生児となる。生まれ出でた新生児を「始末」すれば、極悪犯罪であるが、かつては「産児制限」の一種であった。今も胎児を流早産させれば法律上「墮胎罪」であるが、医師による墮胎は合法。

「す」ではなく「疑わしきは減刑する」と言う不合理な妥協こそが、社会の総合的な被害を最小化するのではないのか。

同性婚禁止は「憲法違反」だと言う。憲法などといふものは、人間の決めたものだから、どうと言うこともない。しかし、そうなると重婚禁止も「憲法違反」ということにならないのだろうか。

そもそも男と女の区分があいまいになり、そこに無理やり線を引けなくなつたから生まれた結果に過ぎないのではないか。社会とは線の引けないところに無理矢理に線を引くことである。国境のように。

男女さえ産み分ける時代。先天的な異常を持つ子の誕生を社会は歓迎しない。社会的な役割を終えた老人を歓迎しないように。

賢いラットを実験で選び出し、九十五世代かけ合わせて「天才ラット」を誕生させたと言う。東海大学の三十年かかりの実験である。普通のラットは学習能力の実験で七から八割は失敗するが「天才」はほぼノーミス。

美醜で結婚相手を選び続けると、美人ばかりの世界になるのだろうか。

結婚とは「カネ」と「カオ」の交換であり、女性は自分の「カオ」を棚に上げて「カネ」を求め、男性は自分の「カネ」を棚に上げて「カオ」を求めている。どこかで読んだ言葉のメモらしい。

イスラム女性の全身を覆っているチャドルやアバヤやブルカやニカブを虐げられた服装という。しかし、それはある意味で女性の平等を実現するための手段なのである。美醜を基準とした「結婚の機会」から自由になるための。

マレーシアの警察当局は、イスラム教女性のズボン着用を禁じロングスカートを着用することを条例化した。

私は生れてこの方、女性の性的な魅力は百パーセント「おっぱい」にあると思っていた。マリリン・モンローのスカートが地下鉄通気口からの風で舞い上がるのを見ても、「それがどうしたの」という風であった。

その感覚に変化が生れたのは、女性のズボン着用が一般化したこの十数年来のことである。

そもそも、日本の着物も韓国のチマチョゴリも「お尻」はもとより「おっぱい」も如何に目立たぬようにするかの工夫で満ちている。世界の衣装文化は、女性の性的な魅力を如何にして隠すかに努力してきた。それは性的な魅力を衣装によって平等化する素晴らしい知恵であった。それが正義の本質である。

イラン核問題。「正義」の名のもとでは、どんなに屁理屈をつけても、核保有国が核開発や核拡散を阻止する権利など論証できる訳がない。唯一の方法は、核保有国が核クラブ入りを希望する国に対して「見返り」を与えることである。給ではなく「恐怖」という見返りを。

遊覧飛行まで提供した民主党は「政治」以下である。

喜んだのは、マスコミと低俗な国民だけである。韓国には彼女の行為によって亡くなつた三百名の遭家族がいる。招請費用はいくら掛つたのか。これで外交に利することが少しでもあつたのか。これらの費用は全て、マスコミや低俗な国民が負担すべだ。

真理が宿つていれば短く言う。それが格言、箴言、ことわざ。下手な外国语では微妙な言い回しはできない。だからストレートに短く言うと日本語よりも良く通じる。ましてや深淵な言葉で短く言えば、相手は勝手に判ってくれる。誤解されたつて、こちらのセイではない。

数字ほど鋭く短く語る言葉はない。特に経済関係の数値は芸術品である。ちょっと拾い読みしても飽きることがない。デリバティブの想定元本は七百兆ドル、マネー経済規模は百五十兆ドル。それに対して、全世界の穀物生産規模は一兆ドルにも満たない。原油でさえ二～三兆ドルである。

デリバティブは、いくらリスク分散などとつくろつてみても、所詮は「ねずみ講」。マネーゲームで、無から有を出し続けることなどあり得ない。かならず最後に誰かがババをつかむ。

藤原正彦は五年前のベストセラー『国家の品格』で、デリバティブ残高が二百五十兆ドルになつており、そのリスクは十兆ドルほどに達していて、大規模なデリバティブが一つでも破産すると、その瞬間に資金の流れは止まり、連鎖的に全世界で決済不能に陥ると言つていた。

経済の局外者でもこの程度のことが判つていたのに、当事者たちはどうしていたのか。もちろんそんなことは熟知していたのである。ただ、綱渡りの知恵があると信じて、もうちょっとは大丈夫と過信していただけなのである。

テレビで魅力的な女性を食傷するほど見ている若者はちは、その基準で身の回りの女性を見る。だから相手が見つからない。顔も知らずに結婚できた時代が羨ましいのではないか。若い女性の場合もまたしかり。

晩婚化の流れは、経済的な理由よりも、お互いに選択の基準を高めてしまった結果である。その点ではイスラムは賢明である。

全世界の青年層の失業率が十二パーセントになり、過去最高を記録した。世の中が豊かになり、青年層が働くなくとも食つていけるようになつたのである。めでたし、めでたし。

新大卒の就職内定率が七割以下だという。三割は必要ない社会ということか。

かつては、学歴差別が社会の約束事にあつた。しかし、いまや全員が大卒となり、差別のよりどころがない。むしろ、差別が社会的な規範であつたころの方が、精神的には楽だつた。今は冷酷な社会である。

「三年間新卒扱い」が推進されるという。大いに結構だけど、ただでさえ低い新卒の就職率が五割以下になるであろう。いつのこと、新卒の初任給でよければ、全ての旧卒を新卒扱いにする方が、すつきりする。

で頑張つてから売り逃げるのがプロ中のプロ。バブルやネズミ講のゲームで一番儲かるのはその崩壊の直前だからである。

デリバティップとの比較から云えば、ちょっと見劣りするが、米国政府の債務は十三兆ドル、日本政府の借金は九兆ドルである。我ら夫婦で千五百円を越える税金の未払いがあると云う勘定になる。

たかが九兆ドルの借金、しかしその九兆ドルで世界中の全ての穀物を十年分近く買える勘定となつてることを知ると、氣絶しそうになる。やはり九兆ドルは巨額である。

でも心配しなくとも良いらしい。日本には政府の資産も二兆ドルほどあるし、対外純資産も一・七兆ドルある。何よりも国民の貯蓄が十二兆ドルもある。だから、相変わらずの円高なのだとさうである。デリバティップの七百兆ドルと比較すると、確かにそんなみみつけいことはどうでも良くなる。

だから、財政赤字など気にせずに、大減税を行い、じやぶじやぶ公共投資を続ければ、景気が良くなり、かえつて税収があがるという政治詐欺師の口上が出てくる。

「その心」はいざれ起ころるハイパーインフレが借金を棒

引きしてくれるとの意味である。しかし、たまつたエネルギーが大きいほど大崩落するのが原理。これが無責任政治家の実態である。

インフレと徳政令。

借錢をしている者はインフレをのぞんでいる。世界中の政府がそうである。その代表格は日本の政府。いや米国政府か。借錢棒引きの常套手段。

インフレと増税。

累進課税制の所得税では、インフレは自動的に膨大な増税効果をもたらす。企業でもインフレによる資産効果で名目上の利益が拡大し法人税収が拡大する。譲渡税・相続税もしかり。インフレは増税の打出の小槌である。

インフレと低金利。

低金利にするとインフレになるなどと当たり前のことを言っているのではない。低金利で得をするのは「借錢している者」、損をするのは「お金持」。同じくインフレで得をするのは「借錢している者」、損をするのは「お金持」。だからインフレと低金利とは同じである。

インフレは社会正義。

お金に困り「借錢している者」が得をし「お金持」が損をする。だからこれは社会正義だ。

ドル信用失墜の前兆として、金価格が史上最高の一ト

ロイオンス当たり約一三〇〇ドルを記録している。かつての最高値は一九八〇年頃の八八〇ドルであつたからその二倍に近い。

しかし、日本では一九八〇年頃、グラム六五〇〇円まで高騰したが、今はグラム三六〇〇円ほどで、まだ半額である。

ドルに替わり得る国際通貨を見つけられないでいる国際社会では、いつそのこと金本位制に復帰したらとの議論もある。その場合、地球上の金保有量から見て、金価格はトロイオンスあたり一万ドル程度、すなわち今の十倍くらいでないと基準通貨として機能しない。

そうなれば金を八千トン持つ米国は、その価値二・八兆ドルで、中国と日本が持つ米国債を完済できる勘定である。ちなみにブレトン・ウッズ体制ではトロイオンスあたり三十五ドルであつた。

ついでに、もう少し数字を続ける。

主な灾害・戦争の被害をその当時の国の資産の比率で評価してみる。阪神大震災は〇・八パーセント、伊勢湾台風は一・九パーセント、関東大震災は一〇・五パーセント、太平洋戦争は二十五・四パーセントである。

今、米国のメキシコ湾の原油流出事故の損害額を二百億ドルとすれば、〇・二パーセント、中国の二〇〇九年の自然災害による被害は三百億ドルほどで、〇・七パーセント

セントほどである。米国のリーマンショックによる公的資金の投入を七千億ドルとすれば、五パーセントになる。

まず酒屋が駄目になつた。床屋も駄目になつた。認可や規制で守られていた仕事は、規制緩和でだめになつた。小泉前首相らによる規制緩和で生じた都心の高層ビルラッシュは、郊外の疲弊を生んでいる。

高度成長期には、郊外の山間地へ無秩序に住宅地が造成され、それを借金して買ったサラリーマン達。それでも土地の値上がりしている間は幸福感に酔つていた。

しかし人口が減少するなかで、都心や交通至便の駅周辺に高層ビル住宅が乱立すると、もはや相続者さえ住まない。老人街になつて、いざれ死滅する。古い貸家は皆な空になり、空地化して車の無い駐車場になる。これでは国による詐欺なのではないか。

若きによらず、強きにもよらず、思ひ懸けぬは死期なり。今日まで遁れ来にけるは、ありがたき不思議なり。

大いなる陰謀

千坂精一

一

関東管領^{かんとうかんれい}というのは室町幕府の職制で、鎌倉におかれた政治機構鎌倉府の統轄者鎌倉公方（または関東公方ともいわれた）を補佐する役職のことである。

幕府で將軍を補佐し政務全般を総轄する管領が足利氏の支族斯波^{しば}、細川、畠山^{はたけやま}三氏の交代就任だったのにたいして、関東管領は將軍家の外戚上杉氏の世襲であつた。だからこれは、上杉氏歴代のはなしなのである。

上杉氏といえばなんといつても謙信が有名であるが、じつは謙信は上杉氏の血筋ではなく上杉氏が守護職を兼ねていた越後国の守護代長尾氏の出身で、最後の関東管領上杉憲政^{のりまさ}に家名を譲られた人物なのである。

それはさておき、さつそく本題に入ろうと思うのだが、

いきなりでは途惑われる向きもあろうから、因つて来たるところの概略から話をすすめることにしよう。

まずは武家政権が確立した鎌倉初期にさかのぼる。

源賴朝が征夷大將軍に任じられて鎌倉に幕府をひらいでから六年目の建久九年（一一九八）十一月二十七日、稻毛重成^{いなげしげなり}が亡妻追善で相模川に架けた橋供養に出席した。

稻毛重成の妻は賴朝の妻北條政子の妹であつた。

賴朝はその橋供養の帰途に落馬したのが因で、二週間後の翌年正月十三日に五十三歳で死去したという。

ところが、初代將軍死去というこの重大事が幕府の公式記録「吾妻鏡」に記載されていないのである。

『吾妻鏡』は治承四年（一一八〇）五月源賴政拳兵から文永三年（一二六六）七月前將軍宗尊親王帰洛にいたる

八十七年間に重要な史料なのに建久六年（一一九五）正月

から十二月の卷十五のあと卷十六は建久十年（一一九九）二月六日から正治二年（一二〇〇）十二月まで賴朝の死を含む建久七年（一一九六）正月から同十年（一一九九）正月までの三年一箇月が欠落しているのである。

故意か、散逸か、書かなかつたのか、疑問が残る。

卷十六は、二月六日賴家、賴朝の遺跡を繼ぐではじまり、三月一日賴朝四十九日佛事、四月二十三日賴朝百箇日佛事とあるだけで死因の記録がどこにもないのだ。

賴朝は倒れてから二週間生存していたということは心

臓麻痺ではなく脳卒中か蜘蛛膜下出血であろうが、それならそうと記述しても差し障りはないはずで、記録されていないとということはなんとも不可解で訝しい。

かえりみると、治承四年八月の賴朝伊豆での挙兵はか

ならずしも源氏の再興を希つてのものではなかつた。賴朝はそのつもりだつたが、味方した豪族たちは

関東に残つた平氏の支族が多く、彼らは徵税だけして給付をしない京の平氏政権への不満が昂じて東国に自治権を確立しようとして立ち上がりつたのであつた。

だが、誰を棟梁に立てるといつても抽^{ぬき}出た者がおらず結束を欠いていたところへ恰好の人物が現れた。

それが伊豆に流されてきた源氏の御曹司賴朝であつた。賴朝を担げば京の平氏への報復という大義名分が立つ

ということで挙兵した東国武士団の蹶起であつたのだ。だから平氏を倒して鎌倉幕府が成立するともはや源氏の血統は無用になり、賴朝の影は薄くなつていつた。賴朝の法要記録はあるが、死因が判然りしない。

藤原定家の日記『明月記』にも、賴朝急病とあるのみで病名は明記されていない。死因は謎に包まれていた。

こうなると下司の勘織りで、諸説紛々としてくる。

ある説は、

「橋供養の帰途、稻村ヶ崎の辺りで義仲、義經や平家公達の怨靈が海中から現われたので傍^{わざ}いで落馬した」

というし、またある説は、「壇の浦で戦死したと思つた平教經^{けうけい}が女装で賴朝を襲い、重傷を負わせた」ともいう。

これら荒唐無稽なものは採るに足りないが、二、三おなじ説が唱えられていることに注目させられた。「女装して女の家に忍び込んだ賴朝を、政子が宿直の近習に命じて斬殺させた」というのである。

これなら女好きの賴朝と嫉妬深い政子のことだからあり得る話だと頷ける。

その後、この話を真山青果^{まやませいか}が戯曲に書いていることを知つた。調べてみたら「賴朝の死」という作品で、宿直の近習は畠山重忠の嫡男重保になつていていた。

賴朝の死因についてはいつまで詐索していくも際限がないから、このくらいにしておいて、東国武士団の蹶起が成功して平氏を滅じさせたことによって源氏の將軍を必要としなくなったのではないかということについて

は、二代將軍になつた賴家から訴訟親裁權を取り上げて北條時政・義時父子ら宿老十三人の合議決裁にしてしまつたことで、將軍無用論が表面化したことがわかる。

幕府の頂点に立つ將軍という独裁者が有名無実の存在になると有力豪族たちがたがいに腹を探つて牽制し合

い、猜疑心を抱いて蹴落とそうとする相剋が激しくなる。

まず賴家の乳母夫で傳役でもあって權勢を誇つていた梶原景時が宿老たちの反感を買つて槍玉に挙げられた。

御家人六十六人からの要請によつて鎌倉幕府を追放され、一族を率いて京へ向かう途次に駿河國清見ヶ関（静岡市清水区興津清見寺町）で討たれた。

ついで賴朝の弟阿野全成が謀叛の疑いで捕えられた。

全成の妻は北條時政の娘であつたが、賴朝の乳母だつた比企局の甥能員は娘若狭局を賴家に嫁がせて將軍家の外戚になつてゐたので、能員が時政の勢力を削ぐために仕掛けた先制攻撃だつたのであろうと推測される。

だがその直後に賴家が病に罹り危篤に陥つたことから時政は形勢逆転の好機とすかさず賴家の承諾なしに家督譲渡を取り仕切り、本来嫡男一幡が相続すべきものを関東二十八箇国の中頭職と惣守護職にとどめて、関西三十

八箇国は賴家の弟千幡（後の實朝）に与えてしまつた。賴家は三日後に死病から生き返つて小康を得たがあとの祭りで、すでに政治生命は絶たれてしまつてゐた。

これを千幡擁立を目指す時政の陰謀と看破した能員は、時政追討を目論んだが事前に漏れてしまつた。

時政は気づかぬ体で自作の薬師如来像開眼供養の仏事に託けて能員を北條邸に誘き出すと謀殺し、間髪を容れず小御所を襲わせて六歳の一幡とその母若狭局はじめ能員を氣遣い集まつてきていた比企一族を全滅させた。

この（比企の乱）は宿老勢力争いの幕開けであつた。

怒つた賴家はただちに和田義盛と仁田忠常に時政追討を命じたが、義盛がその使者を時政に差し出してしまつたことで忠常はやむなく立ち上がり討ち死にした。

時政は賴家死歿を朝廷に奏上して十二歳の千幡を征夷大將軍に任じさせると實朝の名を賜わらせた。

北條政子はやむなく賴家を出家させ伊豆國修善寺に幽閉して難を逃れさせようとしたが、翌年殺された。

つぎに北條時政が狙つたのは畠山重忠であつた。

畠山重忠と京都守護職平賀朝雅の妻はどちらも北條時政の娘であるが異母姉妹で、重忠の妻は伊豆國の豪族伊東入道祐親の娘の子、朝雅の妻は後妻牧ノ方の娘である。

重忠の嫡男重保が上洛して朝雅と面会したおりに、諍になつて重保に罵声を浴びせられたことを根に持つた朝雅が、牧ノ方に讒言したのがことの起こりであつた。

牧ノ方に乗せられた時政は、息子の義時や時房らの反対を押し切つて畠山重忠・重保討伐に立ち上がつた。

重保が時政の娘婿稻毛重成に呼び出されて鎌倉で騙し討ちにされたことに抗議するため重忠が軍勢を率いて鎌倉へ向かう途次に、武藏國（ふざくに）二股川（横浜市旭区二俣川）で待ち伏せしていた幕府軍と合戦になり戦死した。

JR横浜駅と小田急線海老名駅とを結ぶ相鉄線の鶴ヶ峰駅から国道十六号線へ出て鶴ヶ峰交差点を右に下つたところに、昭和三十年（一九五五）重忠の七百五十年忌追悼で地元有志が建てたという（武州鶴ヶ峯畠山重忠公古戰場跡碑）があり、その近くの藥王寺（横浜市旭区今宿）には畠山靈堂、重忠地蔵尊、家来たちの六つ塚などもあり、また二俣川駅の南に位置する万騎ヶ原にも（畠山偉勲碑）があつてその遺徳が偲ばれている。

初代將軍賴朝についてはさだかでないが、梶原景時、阿野全成、比企能員、二代將軍賴家、畠山重忠とつぎつぎに排除して伸し上がつてきた時政だつたが、その傲慢無礼の極みが命取りになるときがやつてきた。

その原因をつくつたのはまたも牧ノ方の欲望であつた。

牧ノ方は義理の娘政子の子實朝を廃して、娘婿の平賀朝雅を將軍に擁立しようとしたことが露見した。

この謀叛はいかに実父と雖も捨ておけず、政子・義時姉弟は大豪族の宿老三浦義村を抱き込んで父時政を失脚

させると、出家して伊豆國北條（伊豆の国市葦山）に隠棲することをおさめ、義時が執權の座に就いた。

義時はすぐさま平賀朝雅を討つと禍の芽を摘みとつた。

この年元久二年（一一〇五）十一月一日、賴家の子善哉（公暁）が鶴岡八幡宮別當尊暁の弟子になつた。

一一

義時が執權になつて八年経つた建暦三年（一一一二）正月、實朝・義時体制打倒の陰謀が露見した。

注進してきたのは御家人千葉成胤で密使を捕えていた。

信濃國の泉親衡（いずみのひらひら）という者が賴家の子千手丸（後の榮實）を奉じて謀叛を企て、加担を誘つてきたといつのだ。

義時はことの次第を實朝に言上すると、大江廣元らと相談して御家人の同調者を隈無く探索させた。

すると、同調者のなかに和田義盛の子義直・義重兄弟と甥胤長の名があつたので評定衆は愕いた。

和田義盛は賴朝・賴家・實朝三代にわたり武士団を束ね取締る幕府中枢の侍所別当職を勤める大重臣である。そんな義盛の息子や甥が幕府打倒の陰謀に加わるはずはないのだが、これは独裁權を維持しようとする義時が父時政の遺志を継いで拮抗する勢力を潰滅するために

種々策を用いて挑発するその一方策だったのである。

このとき上総國にいた義盛は、報らせを受けるとたちで鎌倉に駆けつけ、實朝に陳情して宥免を懇願した。

實朝も疑心暗鬼だったので宥めたが、義時は胤長だけは赦免しなかった。元も子もなくなってしまったからだ。

義時は胤長を陸奥國に配流しておいて、誅殺した。

和田義盛は忠節無比の鎌倉武士であつたがどちらかといふとも容易く義時の術中に嵌つてしまつた。

義盛は同族三浦義村と糾合して義時討伐を図つた。北条義時の専横をゆるさぬ国人たちが義盛に応じた。

だが、幕府の重職執権を斃そうとするのは叛逆である。北條氏打倒の確たる勝算がなければ起つべきではないと覚った三浦義村は、義盛に同心の起請文を書いておきながらよくよく考慮した末に蹶起を思い留まつた。

しかし義時のことだから、義盛を斃しておいて同族の義村にも言い掛かりをつけておくことは考えられた。ならば保身のため先手を打つておくに如くはない。

そう考えた義村は、義盛の動静を義時に告げた。真逆こんなに早く義盛が謀叛するとは思つていなかつた義時は、義村のおかげで急遽幕府の防衛態勢を整えた。

ために和田勢は御所を包囲して炎上させたところまでで守勢に立ち、僅か一日間の戦闘で衆寡敵せず、由比ヶ

濱に追い詰められた義盛は一族とともに討ち死にした。義時は義盛と同族の三浦義村をも斃して権勢を恣にしたかったのだろうが、義村の泣いて馬謖を斬るにひとしき捨て身の画策によつてことは成し遂げられなかつた。だが、和田義盛の謀叛を鎮圧した義時は、執権とともに侍所別當をも兼ねて、三浦義村を取り逃がした禍根は残しながらも幕府内での指導的地位を確立させた。

二

北条時政が歿して四年後、四月に承久と改元される建保七年（一二一九）一月二十七日に大事件が起つた。

史上有名なこの將軍暗殺事件は万人周知のところなので経過は省略するが、惨劇の被害者三代將軍源實朝、加害者實朝の甥公暁はわかつていても、公暁を動かした黒幕は誰か今日にいたるも諸説あつて謎に包まれている。

なかでも執権北条義時の陰謀説がもつともらしい。

当日、實朝の右大臣拝賀の行列が鶴岡八幡宮に向かつたときに、北条義時は不可解な行動をとつてゐるのだ。

實朝の牛車の直前を騎馬行進していた義時は楼門を潜つて間もなく急に氣分が悪くなり、捧持していた剣を隣にいた源仲章に譲つて行列を離れ宮内で休息したのちに小町の自邸に帰つてしまつたことが疑惑を持たれたのだ。『吾妻鏡』は鎌倉幕府の事績編述であるはずなのに

ことであつた。

そうすれば後鳥羽院の院政下にあつて幕府と張り合う公家とも協調が図れるし、一石二鳥の効果があつた。

そこで義時は、姉政子と弟時房を京へ派遣した。

政子は院の乳母卿一位藤原兼子と話し合いをすすめて、後鳥羽院の第三皇子六條宮雅成親王か第四皇子冷泉宮頼仁親王を候補に選ぶ密約を交わすことに成功した。

だからといつてそのことで義時を疑うのは早計である。

というのは、義時はまだ藤原兼子からの沙汰待ち状態であつたのだからそのままに將軍暗殺事件を起こそうものなら話は毀れてしまうから暴挙に出るはずがない。

義時の嫌疑についてさらに証明しておくと、建保四年（一二一六）六月實朝は東大寺大仏建立の首の鋸造に成功した宋の工人陳利卿を引見したとき、中国の医王山詣でを勧められてその気になり大船建造を命じた。

中国へ渡海するなど將軍職の放棄に等しい無謀な計画だと義時たちは反対したが、實朝は諾き入れなかつた。

翌年四月に大船は竣工したが由比ヶ濱での進水に失敗したので結局実現しなかったのだが、もし義時が實朝排除を考えていたのならこのとき渡米させたであろう。

さらに、實朝の乳母は政子の妹阿波局なのである。

この時代の乳母というのは、生母に代わり幼児に乳を与える単なる養育係というだけではなく、幼児との糾が

明らかに北條執権寄りになつていて、事件の前後に態々弁解がましい記事を載せているのがなんとも訝しい。その記述というのはこうである。

事件の前年七月九日のところに、

（義時が昨日将軍の鶴岡参拝に同行して夜帰邸し休息したとき、夢の中に薬師十二神将のうちの戌神が枕許に来て「今年の神拝は無事であつたが明年拝賀の日には供をしないよう」と告げたという）

とあり、さらに翌年事件後の二月八日のところには、

（義時が大倉薬師堂に詣でたとき、去る二十七日戌の刻の難を免れたのは、白い犬がそばに現われとたんに氣分が悪くなつて御剣を源仲章に譲り、伊賀四郎朝行だけを供させて自邸に帰つたのだが、恰度白い犬が義時そばに現われたその戌の刻ごろ、この堂の戌神将の像がここから消えていたと禪師に言われた）

とあって、この前後の記述は取つて付けたようにわざとらしく、違和感があるのだ。

わざわざこんなことを記述するということは、幕府内

で北条義時元兎説がまことしやかに噛かれていたに違ひなく、それを打ち消すための弁解だつたのである。

義時に嫌疑がかかる原因は皇族將軍擁立にあつた。（將軍を徹底的に有名無実の傀儡にする）

（次期將軍を皇族から迎える）

固かつたから、その養君が成育し転て権力の座に就いたときには一族を挙げて権勢を恣にできたのである。

だから、實朝は北條一族にとつて大切な存在なのだ。

その實朝を義時はみずから弑逆するであろうか。

こうなるとどうやら義時の嫌疑は晴れそうである。

もうひとり、疑わしい人物がいる。三浦義村である。

源氏の血統の公暁が次期將軍になつたときには、三浦

義村が北條義時に代わつて優位な立場になれるわけだ。

だからといって公暁が實朝を討てば義村に唆した嫌疑

がかかり、謀叛人ということで誅伐される破目になる。

だが、今日まで、

「御父上の御敵は叔父實朝將軍と執權北條義時である」

ことを執拗に吹き込んでその気にさせておいて、いまさら仇討ちを思い留まらせるなどできなかつた。

そうかといつて公暁が實朝と義時を討つたとしても、

公暁が將軍になり義村が執權になれる保証はなかつた。

侍所別當として武士団を完全掌握していたのである。

その泰時の妻は三浦義村の娘であつた。

義村は和田合戦のとき同族和田義盛を裏切り北條時政

に恩を売つて生き延びてきたように、ここは義時にそうして北條氏との対立を避けようと考えをめぐらした。

義時に公暁の實朝暗殺計画を打ち明けて拝賀式の御劍

捧持役を途中で誰かに代わらせて難を避けさせる。

そうしておいて公暁に實朝を殺害させれば義時の皇族

將軍擁立計画が早まり、義村は感謝されて一目置かれる。

つまり義村と公暁は一心同体と看做されているのだから、義村の潔白が證明されれば義時の信頼が高まる。

その権謀術数を義村に打ち明けられた義時は愕然たる。

「だが將軍を討つたあとはかならずやわれらを持みましようから、匿うとみせて剛の者に討たせましょう」

義時は義村の言葉を疑つた。將軍を討つた叛逆者といつても親の敵という名分があるから、三浦が庇護すれば幕府を二分する騒動になるやも知れなかつた。

「公暁は將軍を討つたあとはかならずやわれらを持みましようから、匿うとみせて剛の者に討たせましょう」

将軍を討した者を捨ておくわけにはいかなかつた。

「だが將軍を討つたあとはかならずやわれらを持みましようから、匿うとみせて剛の者に討たせましょう」

義時は義村に打ち明けられた義時は愕然たる。

かといつて、義村が処分を引き受けると明言するのを疑うわけにもいかなかつたので、義時は渋々承諾した。

そして、事件は起こつた。

この日は雪になつたので止むのを待つて酉の刻（午後六時）から將軍實朝右大臣拝賀の儀式が執り行われた。

義村は病氣と称して嫡男小太郎朝村を参列させ、義時は途中で氣分が悪くなつたといつて捧劍役を源仲章に代わつてもらい、實朝と仲章が公暁の兇刃に斃れた。

これで、源氏の貴種を絶やして東国武士団が自立する北条義時と三浦義村の共同謀議は見事に成功を収めた。

四

三代將軍實朝の不慮の死により義時は二階堂行光を上洛させて懸案の皇族將軍を督促したが、朝廷は將軍暗殺の不祥事を起こした幕府の弱体化を懸念して渋つた。

義時は諦めず、源氏の血筋を絶つたあとの將軍は有名無実の傀儡にする所期の目的からいつても是が非でも皇族から迎えねばならず、そうすることによつて幕府と張り合つてゐる公家とも協調できて好都合であつた。あせつた義時は、ちょうど實朝の死を弔う勅使として下向してきていた藤原忠綱にしつこく督促した。

忠綱の弔問使は表向きて、実は幕府の様子を探る密命を帯びていたので、交換条件に難題を持ち出した。

「地頭職のなかに院のお気に召さぬ者がいて、そのことが幕府の心証を悪くしているのですから、まずはその者たちを改補なされるのが先決でござりますよう」

「その地頭職とは、どこの誰でござるか」

「摂津の長江と倉橋莊の地頭職などでござるよ」

この両莊は後鳥羽院の女房龜菊の所領であり、皇族將軍承認について地頭職更迭を条件にするとは公私混同もはなはだしく、幕府も見縊られたものであつた。怒り心頭に発した義時は、藤原忠綱の帰洛を待つてすぐさま弟時房、嫡男泰時それに大江廣元などを姉の政子邸に集めて地頭職改補要求を拒絶することを主張した。

そして、時房を使者に立て千騎を与えて上洛させた。この幕府の強硬な態度に院側も硬化して皇族將軍拒絶の報復手段に出たので、交渉は決裂してしまつた。義時はやむなく皇族將軍を諦め、後鳥羽院の后任子の実家で親幕派藤原（九條）兼實の孫に当たる左大臣道家の四男二歳の三寅（後の賴經）を迎えることでなんとしても京から征夷大將軍を迎へねばならぬ折合いをつけた。そして四月十二日に承久と改元された六月三日に宣旨が下り、三寅は京を發して七月十九日に鎌倉に下着した。渋々宣旨を下したものの朝廷に楯突く義時に激怒した後鳥羽院は、そのおさまらぬ胸中を第四皇子の順徳帝に明かしてひそかに倒幕計画を練つていった。

翌承久三年（一二二一）四月、順徳帝が讓位して第一皇子懷成親王が仲恭帝になつた。この時点で後鳥羽院の第一皇子土御門、第四皇子順徳の両帝が上皇になつた。翌五月十四日、後鳥羽院は倒幕に立ち上がり、京都守護職伊賀光季を誅殺すると、親幕派の西園寺公經父子を幽閉しておいて、（北條義時追討）の宣旨を下した。

推進者は後鳥羽、順徳両院をはじめ坊門、高倉の公家などで、土御門院は局外者、摂関家は反対派であつた。幕府は北條政子の御家人結束の出陣宣言を受けて信濃、遠江以東十五箇国二十万の軍勢を動員し、義時の嫡男泰時を総大將に弟時房を副將に添えて都に攻め上つた。

朝廷倒幕派は、この大軍に一箇月で潰され慘敗した。

後鳥羽、土御門、順徳院と仲恭帝は比叡山に逃れたあ

と東坂本の梶井御所に移り、【宣旨】を撤回した。

これが世にいう『承久の乱』である。

朝廷と幕府のもつともはげしい対立であった。

六月十六日、幕府は朝廷監視のため泰時を京・波羅の

北に、時房を南に駐在させた。これが【探題】である。

乱後一箇月経った七月三日、幕府は上皇の処置を決定

し、出家した後鳥羽院を隠岐へ順徳院を佐渡へ配流し

た。このとき、土御門院はみずから土佐へ落ちていった。

三上皇配流という史上稀な結末であった。

さらに幕府は、仲恭帝に代わって即位歴のない後鳥羽

院の兄宮守貞親王を後高倉院として院政を執らせた。

そして、仲恭帝に譲位を促すと、後高倉院の第一皇子

茂仁王を即位させて後堀河帝としたのである。

これを契機にして王朝は衰微し、幕府は隆盛を極めて、

北條執権政治は益々強力なものになつていつた。

その三年後、十一月に元仁と改元される貞應三年（一

二三四）六月十三日北條義時は六十二歳で急死した。

父時政のあとを受けて鎌倉幕府を統轄し、武家政権を

拡大充実させて権力の座に上り詰めた義時であつたが、

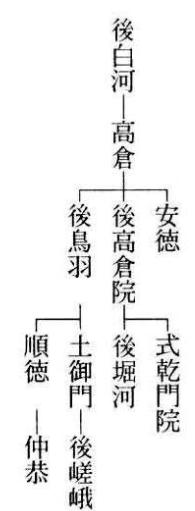
その突然の病死によつて拮抗する勢力を有する三浦義村

を肅正できなかつたことが唯一の心残りであつたろう。

さすがの義時も、天命には勝てなかつた。

(了)

〔皇室略系譜〕



(20)

(21)

一、はじめに

刊行した。

堀内永人

関口隆吉こぼれ話 —家康の正室築山殿は隆吉の先祖の娘— ——隆吉は慶喜の姻族——

初代静岡県知事関口隆吉（一八三六—一八八九）は、江戸幕府十五代将軍徳川慶喜（一八三七—一九一三）の側近として、幕末から明治にかけて活躍した政治家である。

関口家の禄高は、百六十石（推定）、なぜこのように微禄の御家人が、将軍の側近になれたのだろうか……。ちよつと気になるところである。

ところで、人には、大なり小なり、ネガティブ（陰）の部分がある。実名小説や私小説などでは、これを書くこともあり、意外と読者に受けたりする。

しかし本人やご家族の名譽を考えれば、それを書かないと、いのも、作家の倫理である。
昨年（二〇〇九）六月に、三戸岡道夫さんと共に著で『初代静岡県知事関口隆吉の一生』を、静岡新聞社から

関口隆吉の伝記を執筆するに当たり、隆吉に関する資料を集めましたが、ネガティブなことは、なんとなく書きにくいもので、書こうかどうか迷つていて、書きもらした部分が、どうも気になつて仕方がなかつた。

そんなところへ、先日、三戸岡さんからインストラクション（助言）をいただいたので、少しネガティブと思われることも、史実として残すべきと思い直した。

二、関口隆吉の略歴

関口隆吉は、天保七年（一八三六）九月十七日、江戸本所相生町一丁目において、江戸幕府御持弓与力関口隆船、琴（のち、キン、菊と改名）の次男として生まれた。幼名は正次郎。兄の秀松が天保九年に四歳で死亡した

ため、以後長男の扱いを受け、正太郎と改名、その後「隆吉」と改める。隆吉は、幼時から穎悟（さとく賢い）の子といわれていた。

十五歳で元服、十六歳で御持弓与力見習、翌年、十七歳で家督を相続し、御持弓与力となる。

この間、十三歳のときに斎藤弥九郎の練兵館道場に入門、神道無念流の剣を磨くとともに、思想上の影響も受けた。その頃の練兵館塾頭は、長州藩士の桂小五郎（明治維新的元勲木戸孝允）で、以後、二人は深いつながりを持つ。

徳川慶喜は、慶應三年（一八六七）に大政奉還をした後、上野寛永寺に謹慎した。

隆吉（三十三歳）は、謹慎中の慶喜の警護役を命ぜられ、以後徳川家公用人、留守居役、清寛院宮（和宮）京都西還警護役、金谷開墾方頭取並（静岡県の牧之原茶園開拓に従事）などを務めた。

明治維新後は、新政府に出仕、山形県参事、山口県令、元老院議官（現在の国會議員）、高等法院（現在の最高裁判所）陪席判事などを歴任後、明治十七年（一八八四）、四十九歳で静岡県令、五十一歳のとき、地方官制の改正により初代静岡県知事となる。

静岡県知事のときに、東海道本線開通直後の鉄道事故（当時は単線のため、機関車同士の正面衝突）に遭遇、そのときの傷が原因で破傷風に罹り、明治二十二年（一

八八九）五月十七日、五十四歳で没した。

関口家が、江戸幕府の最初（初代）と最後（十五代）の将軍と親戚であったのである。まさに「事実は小説より奇なり」である。以下詳細を記す。

三、関口家と徳川家の関係

関口家の先祖を遡ると、清和源氏に祖を発する。

五十六代清和天皇—貞純親王—①源經基… 分家して①足利義氏（足利家初代）… 分家して①今川基氏（今川家初代、今川義元の先祖）… 分家して①関口経国（関口家初代）… ⑦正興（夫人は今川義忠の娘）… ⑨義弘（夫人は今川義元の妹で、娘が築山殿娘）… ⑩氏数（このときに大名の地位を失う）… ⑯重矩（重利）… ⑯重利… ⑯隆透… ⑯隆船… 二十一代目が関口隆吉

家康は、天文十八年（一五四九）、八歳のときに今川方の人質となり、三河国から駿府（現静岡市）の今川元のもとにおくられた。

今川方の人質になつた家康は、弘治元年（一五五五）、十四歳のときに、今川義元の加冠（元服式で冠をかぶせる役）、関口義弘の理髪（元服式で前髪を切り落とす役）事関口隆吉である。

この重矩には男子がなく、娘に養子⑯重利を迎えた。この重利にも男子がなく、⑯隆透を養子に迎えた。

二度あることは三度あるという譬えのとおり、隆透も男子に恵まれず、娘の琴に婿養子隆船（遠江国城東郡佐倉村出身）を迎え、二十代目として家督を相続させた。そして隆船の嗣子が、初代静岡県知事関口隆吉である。

このように、関口家が、家康の正室築山殿を通して徳川家に繋がる家系であるため、家禄は百六十石と微禄であつたが、名門として遇され、隆吉が十五代將軍徳川慶喜の側近になることに大いに家系が役立つた。

四、関口隆吉と徳川慶喜の関係

二十一世紀の現在は、少子高齢化時代であるが、明治、大正、昭和の初期までは、どこの家庭も子沢山で、特に大家では、いろいろな事情もあって、艶福家が多かつた。徳川慶喜は、美賀子夫人（一條家）との間に子供はなかつたが、側室新村信（一八五二—一九〇五）との間に五男五女、もう一人の側室中根幸（？—一九一五）との間に五男六女、合計二十一人の子供がいた（うち五男三女の八人が夭折）。

関口隆吉も、五男七女（うち養子が一人）の子福者である。その後関口家は、一度母方の姓である「飯泉」を名乗る重矩のときに、本姓の関口に復した。

義弘の嗣子⑯氏数は、関口家の家督を相続したが、領地の持舟四万二千石は没収され、やむなく氏数は駿河国を去り、関口家一族は四散してしまつた。そのため義弘は、氏真の怒りを買い、切腹を命ぜられた。

その後関口家は、一度母方の姓である「飯泉」を名乗る重矩のときに、本姓の関口に復した。

七月に、水戸から駿府（現静岡市）へ移る際に、一色須賀（一八三八一一九二九、子供なし）、新村信、中根幸の三人のほかは、すべて暇を取らせた。駿府に移つてからは、信と幸が交代で夜伽よかをしたといわれている。

ちなみに慶喜の第一子は、新村信との間に生まれた長男敬事（一八七一年生まれ、二歳で死亡）である。

信は、千二百石の旗本松平勘十郎の娘で、一度旗本荒井省吾の養女となつたが、のちに御小姓頭取新村猛雄の養女となり、御殿に上がつて慶喜の側室になつた。

慶喜は、慶應三年（一八六七）十月十三日、在京諸藩の藩主や重役を二条城の大広間に集めて大政奉還を宣言したが、そのとき慶喜の傍らで、佩刀を持っていた御小姓が、信の養父新村猛雄である。

猛雄は、明治になつてから、慶喜の執事長となり、慶喜の没するまで、側近として仕えた。

明治三十年（一八九七）に東京に帰つた慶喜は、明治四十三年（一九一〇）に家督を、新村信が生んだ七男慶久に譲つて隠居、大正二年（一九一三）、感冒に罹つて七十七歳で没したが、徳川歴代将軍の中で、最も長生きした人物である。

隆吉は、明治十七年（一八八四）に静岡県令を命ぜられたが、この人事も、「三、関口家と徳川家の関係」の項で述べたように、関口家が徳川家と縁戚関係にあつたことが、大いに関係があつたと思われる。

なお、新村出は、昭和三十一年（一九五六）に文化勲章を授与されている。

隆吉の次男の出が新村猛雄の養子になつたことで、関口家と新村家は親戚となり、さらに、猛雄の養女の新村信が生んだ七男徳川慶久が、徳川慶喜公爵家を相続しているので、

徳川慶喜—嗣子慶久（七男）の母新村信—信の養父

新村猛雄—猛雄の養子新村出—出の実父関口隆吉

という縁戚関係ができたのである。

なお、隆吉には、全部で五人の男子がいたが（うち一人は養子の隆正）、全員頭脳明晰で、それぞれ要職に就き、その道で名を為している。

隆吉は生涯に三度結婚している。

最初の結婚は、安政六年（一八五九）、隆吉二十四歳、相手は隆吉の武家故実の師匠稻生虎太郎の娘である。この女性は病弱で、その翌年に死去、子供はなかつた。

二度目の結婚は、文久三年（一八六三）、隆吉二十八歳、相手は茶道宗偏流家元山田宗也の娘綾（明治十四年（一八八二）に三十八歳で没）で、隆吉との間に一男四女がある。

三度目の結婚は、明治十四年（一八八二）、隆吉四十六歳、相手は大塚静、二度目の妻綾の後妻として入籍し、三男四女がある。

明治十七年に静岡県に赴任した隆吉は、単に旧主として慶喜に接しただけではなく、慶喜が明治維新最大の功労者であつたということを、誰よりも強く認識し、かつ、尊敬の念をもつて接したのである。

慶喜の子供は、慶喜が静岡に住むようになつてから生まれているが、静岡には子供の勉強を見てくれる適当な人物がないので、慶喜は、隆吉の次男で、秀才の評判が高い関口出（静岡中学校の生徒）を、執事長の新村猛雄の推薦で、子供たちの家庭教師に頼んだ。

慶喜は、三十年間に及ぶ静岡在住中、表向きには趣味に明け暮れしていたようであるが、新村猛雄など執事の勤務日誌によれば、慶喜は、家康の再来といわれたほど の実力者であり、なんといつても前の将軍であつたので、東海道を往来する皇族や旧大名公家が慶喜邸を訪れ、内外ともに多忙な日々を過ごしていた。

そんな折、静岡県知事として東京から赴任してきた隆吉が、住居や子供のことなど、慶喜家の私生活まで気配りしてくれたので、慶喜は、隆吉に大変感謝し、隆吉が五十四歳で死去すると、隆吉の次男出の将来について心配し、男子のいない新村猛雄と十三歳の出を養子縁組させている。

このような経緯があつて、「関口出」は「新村出」となり、のちに言語学者、京都大学名誉教授、国語辞典「広辞苑」の編者となるのである。

静は、隆吉が明治六年（一八七二）に、山形県令として単身赴任したときに、身の回りの世話をするために江戸から同行し、次いで隆吉が山形県令から、山口県令に転任したときにも、山口県に帯同している。

そして、山口で次男の出（新村猛雄の養子）を生んでいる。この次男は、山形県と山口県の両方に縁があつたので、山が二つ重なるということで「出」と名付けられたといわれ、自らも「重山」と号した。

五、おわりに

明治九年四月に、長男壯吉（母は綾）が静岡県城東郡月岡村（現菊川市）で生まれ、同じ明治九年十月に、次

男出（母は静）が山口県の官舎で生まれている。

それ以後も、綾が死ぬまでの五年間に、綾と静の二人から、それぞれ一人ずつ子供が生まれている。

当時の家族制度下にあつては、これも認めざるを得ないことかも知れない。

小説 家康と廻狂いの右近

—遠州菊川の義人中条右近大夫物語— (5)

堀 内 永 人

(五)

中条右近が住む嶺田村の西方、約四糠に位置する高天神城が、武田勝頼の手に落ちてから三年が経過した天正五年(一五七七)九月のことである。

黄金色に穏つた嶺田村の稻田を、初秋の太陽が眩しく

照りつけていた。

右近の祖父田代嘉蔵の家は、代々名主を務め、農業のかたわら住民たちの生活必需品も商つていた。嘉蔵は、店で商いする品物を、嶺田村より西へ約十糠ほど離れた城東郡横須賀村(現掛川市横須賀)の海産物問屋清水屋から仕入れていた。

清水屋は、遠州灘に面する横須賀湊第一の大店であつた。

横須賀湊は、下紙川の河口の入江に造られた湊で、遠州灘が荒れたときの避難港の役目を果たしていた。

そんなこと也有つて、海上を航行する船乗りたちは、この入江の横須賀湊を「乳母のふところ」と呼んでいた。

それほど良い湊であつたのである。

もちろん、海の平穏なときにも、遠州灘を往来する廻船が、船荷の揚げ降ろしに寄港停泊するため、遠州随一の商業港としても栄えていた。

『なお、横須賀湊は、百二十五年後の宝永大地震の地盤隆起で、入江全体が陸地となり、この湊はなくなつてしまふ』

この日も嘉蔵は、横須賀の清水屋に出向いて、昆布などの魚介類の仕入れについて商談していたが、そのとき思いがけない情報を聞き込んだ。

嘉蔵は、この思いがけない情報を、一刻も早く娘のよしに聞かせたいと思い、仕入れもそこそこに、汗を拭き

拭き大急ぎで嶺田に帰ってきた。

我が家に着くや否や嘉蔵は、早速、老妻のすぎと娘のよし、孫の右近を座敷に寄せた。

みんなが揃つたところで嘉蔵は、神棚に燈明を灯し、柏手を打つて室内安全を祈つた。そして三人に向かつて、「みんなよく聞くがよい。これから私が話すことは、嶺田村を始め、近隣の村々にとって、吉となるか凶となるかはわからないが、いずれにしても大きな関わり合いが出てくるに違ひない。それほど重大なことであると思うので、決して他言するでないぞ……」

そこまで言うと嘉蔵は、

「ぐりつ」と、唾をのみ込んだ。

「じつは今日、清水屋さんである情報を耳にした。この情報は、今の段階では不確実なものであるが、これが噂となつて、人から人へ伝わつて世間に広まれば、話に尾

ひれがついて、重大な結果を生むかも知れない。そのうえ、万が一にも高天神城内の武田衆に知れたらば、情報源のわれわれの命は、どうなるかわからない。そして、よしと右近に閥わりの深い徳川さまにも、大変ご迷惑をかけることになるかも知れない。よつて、重々気を付けてもらいたい。よいな……」

と、きつく口止めしてから、次のようなことを語り出した。

「今日わしが、横須賀湊の清水屋さんで、手代の長次さんといつものように買い付け交渉をしていると、そこへ一人の旅の商人がやってきて番頭さんと二人だけで話し出した。この旅の商人は、わしの知らない人であつたが、よほど番頭さんと親しいと見えて、顔をくつつけるようにして、ひそひそと内輪話のような話をしていた。

始めは用心してか、声も小さかつたが、次第に大きくなり、話しがとぎれとぎれではあつたが、わしにも聞こえてきた。そこへ清水屋の主人が加わつて、三人で話しだしたので、さらに声が大きくなつてきた

と、ここまで話すと嘉蔵は、大きく息をして三人の顔を順に見てから、農作業でふしくれだつたごつい手のひらで、顔の汗をぬぐつた。よしは、

「それでその旅のお方は、どんな話をしたの……」

と話の先を促した。

右近も、嘉蔵の次の言葉を待つた。

『美濃詫りのあるその旅の商人が言うには、浜松の御用商人から聞いた話と前置きして、高天神城に居座る武田軍は、浜松城主の徳川家康さまにとつて、喉元に突き付けられた槍の穂先のように、手ごわく、かつ、邪魔な存在である。家康さまは、この邪魔な槍の穂先を取り除くために、

『どうしても高天神城を我が手中に收めるのだ』

と決意し、高天神城奪回作戦を強行する橋頭堡として、

城東郡横須賀村の三子権現跡地に、横須賀城を築城することになつたらしい。

そのため徳川さまは、横須賀城の築城を直々にお指図され、完成後は、高天神城を奪回するまでの間、しばらく横須賀に御滞在になるのでは……

ということであつた。さらに、「そうなれば、よしも、右近も、いま一度、徳川さまにお通りが叶う時があるかも知れない……」

そう言つて嘉蔵は、夫の糸重蔵を、織田徳川連合軍の朝倉攻めの戦いで亡くし、浜名郡雄踏村の糸家から戻つてきた不幸な娘よしと孫の右近の二人に、慈愛のまなざしを向けるのであつた。

徳川家康は、難攻不落の高天神城の抑えに、戦いの都度、馬伏塚城（現袋井市浅羽）を補強して、武田軍と戦つていた。

一方、武田軍は、高天神城を手中に収めてから、城を補強するなど防備をさらに補強していた。これに対して家康は、高天神城を奪つて遠州を完全に支配下に置くためには、より強力な対抗策を立てる必要があると考へた。

そこで家康は、三河時代から戦争の際には、常に先陣を務めて一番槍の功名を上げ、戦いが不利で後退も止む無しという時には、最も危険な殿軍を引き受けて、徳川軍

のピンチを救つた勇猛な武将、大須賀康高に対して、横須賀に、新しい城を築城するよう命令したのであつた。この武将は、家康から、名前の一字「康」をもらつて「大須賀康高」と名乗ることを許されたほどの人物であるから、その能力は高く評価されていた。

見方を変えれば、横須賀城は、それほど重要な城であつたともいえるのである。

この横須賀藩が、後に本編の主人公中条右近に深く関わるようになるとは、このとき誰も予想しなかつた。

ここで、物語を解りやすくするために、中条右近の出生、高天神城の築城、横須賀城の築城などを、時系列的に並べてみることにする。

①応永二三年（一四一六）、今川家の一族今川貞世が高天神城を築城

②永禄三年（一五六〇）、桶狭間の戦い以後、高天神城は徳川家康の支配下に入る

③元亀元年（一五七〇）、中条右近が浜名郡雄踏村の地侍、糸家に生まれる

④元亀二年（一五七一）、武田信玄は、高天神城を攻めるが、難攻不落のため攻撃をあきらめる

⑤元亀三年（一五七二）、家康は、三方原で武田軍に敗れ、糸家でよしと右近に助けられる

⑥天正元年（一五七三）、糸よしは、わが子右近を連れ

（六） 実家の城東郡嶺田村に戻る

- ⑦天正二年（一五七四）、第一次高天神城の戦い
- ⑧天正六年（一五七八）、家康、横須賀城を築城
- ⑨天正九年（一五八一）、第二次高天神城の戦で武田氏は敗北、高天神城は廃城となる。

のちは、下紙川と弁財天川を利用して遠州灘から、城内へ物資を運ぶようになったのである。

現在は、県道六九号線を、浜松方面から東へ向かって御前崎方面へ自動車を走らせると、横須賀の街並みに入る手前の辺りで、左側の丘陵に横須賀城の遺構を見るこができる。

なお、天正十八年（一五九〇）、徳川家康が豊臣秀吉の北条攻めのち江戸城に入ると、大須賀康高の嗣子の忠政も関東上総久留里（現君津市）に移封され、以後、渡瀬繁詮、有馬豊氏、大須賀忠政（再）、徳川頼宣（後の紀州徳川家）松平重勝、重忠、井上止就、正利、本多利長（たとびたび城主が替わり、天和二年（一六八二）に西尾忠成が信州小諸から一万石で入封し（その後加増されて三万五千石）、明治維新まで続くのである。

中条右近が住まう嶺田村は、徳川家康が天下を制覇した以降は横須賀藩の領地となり、明治維新を迎えることになる。

閑話休題

徳川家康は、天正七年（一五七九）には、高天神城の中条右近の祖父田代嘉蔵が、横須賀の海産物問屋清水屋で、旅の商人から横須賀城築城の話を聞いたその翌年のことである。

徳川家康は、高天神城に対する抑えの城として、高天神城から西方へ約五糠離れた丘陵に、天正六年（一五七八）三月、横須賀城の築城工事に着手した。

この城は、二年後の天正八年（一五八〇）七月に完成した。

城は、平地にある丘陵を利用した総面積三万坪（十ヘクタール）に及ぶ平山城で、北は小笠山に続く山岳地帯、南は遠州灘に面した要害で、本丸の南側城壁に天竜川の自然石を使つた玉石垣の珍しい城である。

玉石垣に面した入江には、天然の良港横須賀湊があり、横須賀街道と共に物流の拠点となつていた。

この横須賀湊は、その後、宝永四年（一七〇七）に起つた宝永大地震による地盤の隆起で陸地となり、その

ついた）などで囲み、高天神城の攻撃準備を固めた。

天正八年（一五八〇）七月に、横須賀城が完成すると、浅羽村の馬伏塚城主であつた大須賀康高を、そのまま横須賀城主に任命した。

さらに家康自身も本陣を横須賀城において、翌年（天正九年）の三月には、直属の旗本三千と、本多忠勝、榎原康政らの兵五千とともに、高天神城を包囲して、奪回作戦に出たのである。

第二次高天神城の戦いである。

その頃、嶺田村の田代家では、嘉蔵とすぎ、その娘のよし、よしの長男中条右近の四人は、天正六年（一五七八）六月に、横須賀湊の清水屋で嘉蔵が耳にした家康の横須賀城築城の噂が現実し、ひそかに家康と対面できるチャンスを待っていた。

そんな折、嘉蔵は、

《家康、横須賀城に入城》

という情報を探しにした。

（あのとき浜名湖畔雄踏村の糸家で、また逢おうぞ……）
と言つて浜松城へ帰られた家康さまに、いま一度御目文字でできる。あのお優しい家康さまに……）
よしの胸は高鳴り、顔の火照りを感じた。
ついに对面のチャンスが訪れた。

をさらに増していた。

一方、右近は十一歳。大人をしのぐほどの背丈となり、わずかに幼げが残る顔には若い血潮が満ち溢れ、少年とは思えないほど頼もしく成長していた。

横須賀城は、本丸天守閣の東側、三の丸御殿に城主の大須賀康高が居住し、西側の二の丸御殿が、家康の作戦本部になっていた。

よしと右近は、天正九年三月三日の朝十時過ぎに、家康側近の本多正信の指示にしたがつて、西追手門前にやつてきた。二人が門の前に立つと、門番が近づき、「おい！ ここは女子供のくるところではない。そういうに立ち去れ……」

と大声で咎められた。ここで引き下がつては、横須賀城に来た意味がない。よしは気を強くして、御門番衆にお願い申し上げます。わたしは嶺田村のよしと申します。これなる連れは、わたしの伴右近と申します。上様にお目通りいたたく、まかり越しましてござります。なにとぞ、よろしくお取次ぎのほどお願い申しあげます……」

「なに、上様に目通りしたいと……はて上様とは誰のことだ？」

嘉蔵が清水屋を介して、家康の政治参謀として頭角を現してきた本多正信に、伝手を得ることができたのである。

天正九年（一五八一）三月、小笠山に連なる丘陵には吉野桜が咲き誇り、まさに春爛漫の良き日、よしは、かつて織田徳川連合軍の朝倉攻めの戦いで戦死した、夫糸重藏の忘れ形見糸松吉改め中条右近を連れて、横須賀城へやつってきた。

元亀三年（一五七二）の三方原の戦いのあと、浜名湖に近い雄踏村の糸家で、武田軍の追捕の手を逃れるため、よしと家康が仮の夫婦になつてから、数えて八年の歳月が経つていた。

よしは、背丈こそ並の女性と同じであるが、均整のとれた肢体と豊な胸、しつかりとついた内置きは、大振りの被布を羽織っていても、男の目から隠し切れないと、魅力ある体型をしていた。

そのうえ、ツンと威張ったような形良い高い鼻、ギュッと小さくつばめた口許、切れ長のうるんだような黒い瞳が美白の瓜実顔に妖しく輝き、控え目な化粧、質素な服装で身を包んでいても、天性の美貌が輝き、鄙びて稀なその容姿は、女性が見てもハッと思をのむほどの魅力を湛えていた。

さらに、興奮すると朱色に染まる右口許の淡いホクロが、色気を漂わせていつそう野心を刺激し、よしの魅力

門番は、一瞬戸惑つた。

門番が戸惑うのも無理はない。当時、農民の、それも女子供が、単独で城主の大須賀康高に会うなど、常識で考えられぬことである。

ましてや、上様、すなわち城主の主君である領主の徳川家康に会うなどとは、天地がひっくりかえつても、あり得ぬことである。

門番は、地味に装つても、美人であることが察せられるよしを見て、敵方の女忍者かと思つた。「いい女だな……だが、こんな女が怪しい」と言つて、六尺棒の先で、よしの胸の辺りを押した。よしは、門番に押されて、一、二歩下がつたが、「はい、上様とは、浜松城主の徳川家康さままでござります。いまはこの横須賀城にご滞陣と承つております」

門番は、びっくり仰天した。それもそのはずである。農民風情のよし母子が、三河と遠州の大半を支配する徳川家康に、直接会いたいと申し出たのである。

「お前たちは何をぬかすのか……お城で働く俺たちですら、ご領主さまのお顔を拝むことができないので、なんで農民のお前たちがお目通りできるのか、バカも休みやすみ言つたらどうだ。打ちのめされないうちに、とつと立ち去れ！ 目障りだ……」

胸元をどんと突いた。

よしは、突き出された六尺棒を避けきれず、裾を乱して倒れた。すると門番は、好色な目つきでよしの乱れた裾を見た。その瞬間、よしの左側にいた右近が、

「ははさまに何をする！」

と、すばやく右手を伸ばして、門番の持っている六尺棒を掴んで、グッと引いた。

門番は、女子供と侮つて、六尺棒でよしを突き飛ばしたが、十一歳の右近の逆襲に遭い、反対に六尺棒を奪われそうになつた。

慌てた門番は、

「この小僧、手を放せ……」

と大声を出して、六尺棒を手元に引こうとした。

子供と侮つていた右近が、意外な剛力で六尺棒を掴んだので、門番は、六尺棒を盗られてはならぬと、足を踏ん張り力んだ。

その瞬間、右近は、掴んでいた六尺棒をパッと放した。じつにいいタイミングである。

門番は、六尺棒を、右近少年の手から取り戻そようと、渾身の力を込めて引っ張ったその瞬間、右近が手を放したからたまらない。力あまつて、

「ウアー……」

と大声を上げ、ものの見事にひっくり返つてしまつた。

その場の光景を一部始終見ていた、仲間の門番が駆け

付け、大きな声で、
「ややや……狼藉者だ。出合え！出合え……」

と叫び、ひっくり返つて、したたかに腰の辺りを打ちつけた仲間を、援け起こそうとした。

騒ぎが大きくなつては大変と、よしは、

「お待ち下さい、けつして怪しい者ではございません。わたしのことは、本多正信様がご承知でございます。本多様にお取次ぎを願います……」

と、裾の乱れを直しながら、必死になつて門番に願い出た。

「いま、だれと言つた。本多さま？ 上様側近の本多正信様か……」

門番は、またもや驚いた。よしは、

「はい、さようによります。本多さまには、八年前にも目にかかるております。本多さまから、この西追手門に訪ねて来るようとの、お指図がございました」

と言つて説明した。すると門番は、三度びっくり仰天して、

「これはえらいことをした。すぐに本多様にお取次ぎいたします」
と、今までの横柄な態度は消えて、腫物にさわるような丁重さで、門番詰所に案内した。

家康側近の本多正信は、三河以来の譜代の家臣である。

「本多さま、お懐かしゆうござります……ご壮健で何よりでござります……」

といつたが、あとは胸が詰まり、言葉にならなかつた。

あの八年前、家康とよしは、武田軍の追求を逃れるために、形ばかりとはいえ夫婦となり、危機と背中合わせの生活の中で、少しずつ情愛が行き交つたのも、自然な成り行きであつた。

そのような家康とよし、右近の仲睦まじい生活を知つているのが、本多正信であつた。

したがつて、よしと正信は親しかつた。

正信は、家康より四つ年長で、今は家康の側近第一の地位を確立しつつあり、よしには、最も頼りがいのある人物である。正信は、

「よしさま、雄踏村以来でござりますな……その節は、上様も、われ等も大変お世話になりました。その後、お変わりもないようで、まずは祝着至極でござる。右近殿も、見違えるように大きくなられたな。背丈も大人に負けないほどに成長されて、たくましゆうなられた。上様も、いつも二人が参られるかと、大変お待ちかねである。それにしても、さきほどは、門番が粗相をいたしました。それで、まことに申し訳ない。ぜひお許し下され……」

といつて、一人に詫びるのであつた。

正信にとつては、主君家康の命の恩人ともいうべきよ

門番から知らせを受けた正信は、急ぎ門番詰所に駆け付け、よし、右近の母子と再会した。

「おお、よしさま、お久しぶりでござる」

正信は、満面の笑みをうかべて、遠くから声を掛けてきた。

よしも懐かしさのあまり、思わず涙声で、

しを、知らぬとは申せ、門番が六尺棒で突き倒したとあつては、そのままにはすまされない。万一、このことが主君家康の耳に入れば、叱声は免れない。それを心配して、よりいっそう、よし、右近母子の接待に意を配つた。正信は、二人をひとまず御殿の御用人社えの間に通して、乱れた衣服を整えさせ、その間に、家康に取り次いだ。

家康は、直ぐによしと右近を、私室といえる小書院に呼んで、元亀四年（一五七三）一月以来の再会が実現した。

「よし、右近、もつと近こう参れ……お互に夫婦、父子ではないか。そこでは他人行儀だ。遠慮せずにもつと近こう参れ……」

家康は、二人の来訪を手放して喜んだ。

よしにとつては、現在の家康は、八年前の武田軍に追われているときの家康とは、立場が違う。そう簡単には、身分の壁を乗り越えるわけにはいかない。

遠慮する二人を見た家康は、今度は、自分の方から御座を降り、相好を崩してよしの前に座つた。

「よし、あれから何年になつたであろうか……」

そう言つて家康は、小太りの身体を、よしに近づけた。

いまにも抱き寄せんばかりである。

よしは、久振りに肢体が熱くなるのを感じた。

「上さまが、雄踏村の祝家をお立ちの際に、『また逢お

うぞ、達者で暮らせよ』とおつしやいましたが、あれはその場限りの御言葉とあきらめておりました。いまこうして再びお目通りが叶いましたことが、夢のようでござります」

「よし、そちはまた一段と美しくなつたな……」
「まあ、おたわむれを……」

よしは、耳まで真っ赤になつた。恥ずかしがるよしの顔を見て、家康は、

「予のところに参るところを見れば、まだ一人身であるな……。そう言えば、そちはいくつになつた……」「はい、三十一歳になりました」とよしは、恥ずかしげに目を伏せた。

家康は、かつての仮の妻よしを、優しく見つめていたが、やがてよしと右近を人々に見ながら、「右近も成長したな。成人のあかつきには、予のところに参れ。よいな……。そうだ、八年前のあのときには、祝家にも大変助けられたが、今一人、名主の中村家にも大変世話になつた。中村源左衛門殿なかりせば、今日の予はなかつたやも知れぬ。いずれ両家には、しかるべき礼をいたすつもりじや」

そう言つて、家康は、視線をはるか西方浜松城の方角に向け、しばし想いを八年前に寄せるのであつた。
つづく

誠忠の茶園（六）

太田精一

（二）大草高重、慶喜邸を訪問
大草高重のもとに徳川慶喜から一通の書状が届いた。明治三年の春、大谷内龍五郎の切腹事件の起る半年余り前のことである。牧之原の入植地、岡田原での百姓仕事にも慣れた頃であった。

書状には、これまでの高重の忠誠に対するねぎらいの言葉に添えて、来訪を求める文面が認めてあつた。

明治二年九月、新政府より謹慎が解かれた慶喜は、仮住まいの宝台院から紺屋町の元代官屋敷に移り住んだばかりである。部屋数こそ少なかつたが、敷地は一万坪ある。慶喜は、この屋敷に移り住んで以来、朝早く起き、庭の散歩を日課としていた。その庭の一隅に、稻荷を祀つた祠がある。祠の前に来るときまつて慶喜は、足を止め、徳川家の繁栄を祈つた。

（将军職を辞してから、血氣に逸る幕臣たちを抑え、ひたすら恭順を続けてきた。その誠意が、ここに来てやつと朝廷に認められた。新政府は、幾多の難題を抱え、徳川家の存在は、最早脅威ではない。むしろ有能な幕臣の登用を図つて、新政府の人材不足を補い、基礎固めをしようとしている）

慶喜は、徳川家の存続に安堵の胸を撫で下ろすとともに、新政府の政策の変化を敏感に感じ取つていたのである。

高重が、慶喜邸を訪れたのは、春霞の漂う朝の九時頃であった。早朝六時に家を出て、馬を駆り、牧之原から大井川を渡つた。八里の道を三時間で駆け抜けてきたのである。

慶喜は、高重の顔を見るなり、満面の笑みを浮べながら迎えた。高重の来訪を心から待ち望んでいたようであ

る。

高重は、用人の案内で、客間に通された。

「麗しきご尊顔を拝し奉り恐悦至極に存じます。この度は、謹慎も解かれ、新しきお屋敷に移られ、おめでとうございます」

「太起次郎よく来てくれた。そちたちにも何かと苦勞をかけたが、やつと謹慎も解け自由の身となつた。近頃は、庭歩きするのが楽しみでのう。堅苦しい挨拶は抜きにして、鳥の声でも聞きながら話そうではないか」

慶喜は、高重を促し、庭に出て、床机を勧めた。

「恐れ多いことでございます」

高重は、固辞したが、たつての勧めに従つて、慶喜と共に床机に腰を下ろした。竹林に朝の光が差し込み、その光が、風に揺れる枝の間でキラキラ光つている。池の水面に大きな鯉が姿を現し、悠然と泳いでいる。

「のう太起次郎、予が上野の大慈院から水戸、駿府と居を移すたびによく警護の務めを果たしてくれた。そちたちのお陰で無事こうして生き延び、徳川家を潰さずに済んだ。朝敵の汚名を着てまで生き延びようとした予を、不甲斐ない将軍と思つたであろう」

「そんなことはございません。かねてから英明の誉高い上様を、多くの家臣が信頼申し上げております」

「予には、新しい日本を造り上げなければならぬといふ使命があつたのじや。そのためには幕府は、老大木で

あり過ぎた。陋習ろじゅうと先例にとらわれ、物事が前に進まない。中から腐りかけていた。そこに海の向こうから強風が吹きつけた。メリケン、エガレス、フランスなどの西洋の列強が開国を迫つてきただのじや。それを阻止するには武力がなくてはならない。幕府には、こうした列強に

対抗するだけの武力を整え、使いこなすだけの力は、もはやなかつた。そこで雄藩の力を借りることを考えた。

朝廷を盟主として、幕府を中心とする連合政権を打ち立てることである。ところが、予想以上に薩長の力が強くなつていて。藩内の守旧派を押しのけて改革を進め、新しい時代を迎える準備を進めていたのじや。鳥羽、伏見の戦いを見て予は、戦はどうしても避けなければならないと思った。これ以上戦をすれば、双方に、あまりにも多くの犠牲者が出て、泥沼化する。そのことを怖れたからじや。内乱を防ぐためには、將軍の地位を捨ててもかまわない。朝廷を中心とした新しい政体のもので、この国を立て直して行くことが必要である。そのため、薩長中心の政府が形成されることになるかもしれないが、それでもかまわないと考えた。ただ、ご先祖様から引き継いだ徳川家だけは何としても守りたい。また、これまで忠誠を尽くしてくれた家臣たちを見殺しにすることはできない。それには、予が、ひたすら恭順を通して、徳川家の旗本たちに戦をさせないことである。戦を起こさなければ朝廷も薩長も徳川家を潰す口実がなくなり、断絶

谷開墾方の実情を視察して頂いたらどうだろうか。家達公は、八歳の幼君ではあるが、聰明であられる。われわれが、一致協力して開墾に当つている姿をお見せしたい

高重は、景昭に提案した。

「分かつた。家達公にご来臨願い、牧之原開墾の苦闘をつぶさに視察して頂こう。それにはまず静岡藩に出向き、大久保一翁、勝海舟、山岡鉄舟など、藩のご重役方を説得しなければならない。重役方に顔の効く高橋泥舟を説つて、貴公と三人で静岡に参ろう」

景昭と高重は、田中藩の町奉行に転出していった高橋泥舟に同行を頼み、静岡に出向いた。

家達は、幼いとはいえ、物事の判断ができる年齢に達している。

藩重役方の協議の結果、牧之原への家達の視察が決まりた。

家臣たちが家族ともども鎌や鋤を持って土と戦つている姿を見て頂くことは、将来の家達の人格形成と治世に役立つ。また、金谷開墾方の武士たちにとつても主君のねぎらいの言葉は、これから開墾を進める上で、励みになると判断されたのである。

家達の牧之原視察は、旧暦明治三年三月三日と決まりた。

牧之原に行くには、大井川を渡らなければならない。大井川には、江戸時代から橋がなかつた。川を渡るため

には、川越人足たちの手を借りるか、舟を利用するしかない。

幼君家達公を無事お渡しするために、安全な渡河方法が検討された。

その結果、水が流れている本流には、仮橋を架け、河川敷には小石を敷き詰め、歩きやすいようにするということが決まったのである。幸いにして、視察日の四、五日前から、雨が無く水量が少なかつた。開墾方の藩士たちはもとより、人夫たちも動員して材木を切り出し、三日、三晩の徹夜作業で架橋を終えた。

当日、景昭、高重以下開墾方藩士三百五十名が河原にひざまずいて家達の来訪を待っている。

薄雲のかかつたうららかな良い天気である。

家達は、途中ところどころで駕籠から降りた。満開の桜を眺め、富士を見し、家臣の説明に耳を傾け、終始ご機嫌である。

大久保一翁と榎原健吉が家達に従い、三十人の供廻りを連れている。

一行は、大井川堤で河原へ下り、小砂利を敷き詰めた仮道を進んだ。

家達は、駕籠に乗ったまま仮橋の前まで進み、そこで駕籠から降り、歩いて橋を渡つた。

開墾方藩士たちの中には、家達の姿が見えると感涙し、嗚咽する者も少なくない。

世界最長であり、ギネスブックにも掲載されている。

(二) 川越人足の牧之原入植

徳川家達の牧之原視察の翌月、大井川徒渉制度が民部省令によって廃止された。

二百數十年続いたこの制度は、それによつて生活してきた川越人足たちの生存権を奪うことになつてしまつたのである。

困窮した人足たちの中に不穏な空気が漲つてゐる。事態の收拾を図るために、救済策を藩に訴えようとする動きが高まつた。だが、人足の中には、藩への交渉を有利に進めることのできるような人物はいない。

そこで、金谷宿の商人仲田源藏が選ばれた。川越人足総代として、その交渉に当ることになつたのである。

明治三年九月、仲田源藏は、島田郡役所に人足救済嘆願書を提出している。この嘆願書には、金谷、島田両宿場の川役人および名主、組頭の奥書があり、丸尾文六ら六人の世話人が署名している。その嘆願書に、次のような内容が盛り込まれていた。

「当大井川歩行越えは、二七〇年余、規則によつて守られ、人足は、それに従つて生活してきました。そのことは、深く感じ入つてゐるところであります。このたび維新によつてこの制度が廃止されました。結構なことであるとは思いますが、川越人足共は、その日の生計にも窮る、飢餓に瀕する者が大部分です。つきましては、持測

家達が、仮橋の中央に差しかかった。すると漢学者の服部一翁が、「ああ、蓬莱、ああ、蓬莱」と叫んだ。その声を聞いた迎えの家臣たちは、河原に両手をつき、平伏して頭を上げることができない。

「まこと蓬莱でござります」

服部の音頭に唱和する声が、大井川の川風に乗つて、遠くまで聞こえた。

その日は、開墾方の家族全員五百人が、谷口原に集まつた。

床机に腰を下ろした家達の前で景昭が、開墾方藩士を代表し、牧之原の土地を下賜され、はるばるご来臨賜たお礼を言上した。続いて高重が、開墾家族たちを代表して、徳川家安泰の祝辞を述べている。

大久保一翁が、家達の言葉を伝え、儀式は終わつた。

家達の渡つた仮橋は、それ以来蓬莱橋と名付けられ、江戸時代から続いた渡船は禁止された。だが、この仮橋は、翌年秋の台風によつて流出し、改めて三隻の渡船が許可されている。

その後、島田の宿屋清水永蔵氏が架橋運動に奔走し、明治十一年春、架橋が完成し、改めて「蓬莱橋」と名付けられ、今日まで利用されている。

この橋は、全長九百三十メートル、近年堤防の改修などで短くなり、八百九十六、五メートルとなつてゐる。あちこち修繕した跡が見られるが、木造の橋としては、

山御林跡開墾地（牧之原の一部）をこれら窮民にお譲り頂き、渡船および通船の一切を彼等にお任せ願いたいと存じます」というものであつた。

仲田源藏が、何故川越人足の総代に推されたかは、明らかでない。多分、仲田は、金谷宿を取り仕切る有力な商人で、身長、体格ともに人に優れ、学問もあり、洞察力と行動力を兼ね備えた人物であつたからであろう。

仲田は、島田郡役所に失業人足の救済を再三陳情したが、らちがあかない。そこで、静岡藩への請願を試みたのである。

静岡藩では、それを受け、川越人足の生活実態をさらに詳しく知るため、仲田に調査を命じた。仲田は、速やかに報告書を取りまとめ、同年十二月、静岡藩に提出した。

しかし、その後、何度も藩庁に督促したが、一向に進展する様子はない。その間にも、川越人足の窮状は、増すばかりである。

痺れを切らした仲田は、直接明治新政府の民部省に嘆願することを決意した。上京した仲田は、民部省駅通司に出頭し、嘆願に及んだ。が、その場で捕らえられた。直訴嘆願は、江戸幕府の慣例に倣い、依然として、禁じられていたのである。

しかし、その熱情と誠意あふれる嘆願に動かされた新政府は、明治四年三月島田郡政役所を通し、救済策を提

示した。

その内容は、特別困窮者二百七十四人に土地を払い下げるというものである。だが、そのうち、実際に川越人足が入植したのは、百人ほどであった。それでも、川越人足には、東西西荻間村（旧相良町）に属する入会採草地、二百四町七反（二百二ヘクタール）が分け与えられた。

明治四年六月八日牧之原開拓を希望する川越人足百人は、住み慣れた宿場町の島田、金谷から入植した。請願書には、島田、金谷の両宿場町の川役人、名主、組頭らの奥書と丸尾文六を初めとする世話人六人の署名がある。世話人には、近郷近在の富農が名を連ねている。このことから、開墾、営農に当つては、ずぶの素人である川越人足たちの指導に、これら世話人たちを当らせようとする意図が、仲田にあつたに違いない。その意図を静岡藩も明治新政府も支持していたようである。

請願書には、六人の世話人の署名がある。ところが、仲田源藏の名は記されていない。仲田は、もともと商人であつたことから、入植して、開墾の仕事をするつもりはなかつたのだ。川越人足たちの救済の目途さえ立てばそれでよかつたのである。六人の世話人は、署名はしたもの、入植した者は四人で、最終的には、丸尾文六だけが残つた。それだけ開墾は、困難な仕事であつたのだ。

六である。

丸尾は、牧之原南部、池新田を拓いた豪農であった。祖先は、高天神城の徳川方の武将丸尾修理亮義清である。義清の兄は、本間八郎三郎氏清といった。兄弟とも武田方の猛攻を受け、天正二年（一五七四）六月二八日討死した。兄の氏清二十八歳、弟の義清は、二十歳であった。一族は、池新田村や山名郡高部村に隠れ帰農した。後に、本間、丸尾両氏は、池新田の開発に努め、横須賀藩の大庄屋となつたのである。

丸尾は、川越人足の世話人として明治十一年までに一万八千円の巨費を投じている。その費用は、ほとんど丸尾の個人資産から出でていたという。彼は、牧之原台地開墾と併せて、近くの低地に水田を拓いた。水田の収穫は、少なかつたが、茶園の生産が、生活を支えるまでの数年間は、入植者たちの食糧確保に役立つた。

また、丸尾は、茶の未成木の間に、食用の雑穀、芋などを作らせる一方、楮、雁皮などの換金作物の栽培や桑を植え、養蚕を奨励するなどのキメ細かな農業指導を行つてゐる。

丸尾は、常に開墾の陣頭に立ち、人足たちを激励した。家族と離れ泊り込み、家を建て、村づくりをしている。

明治五年三月、丸尾は、郷里の池新田から水神宮を勧請し、入植者たちの氏神としてこれを守らせた。この水神宮は、丸尾の祖先たちが、徳川の初期に新野池を干拓

この入植地北側には、開墾方の藩士たちの千四百町歩の原野が広がっている。川越人足の入植地も開墾方の土地と同様、赤松の生えた疎林で、林の下には、イヌツゲ、ヒササキなどの低木と雑草類が生えている。赤褐色、重粘土質のやせた土地であった。

二年前に入植した開墾方の藩士たちに比べ、川越人夫たちの入植は、さらに悲惨であつたと伝えられている。

人足たちは、米、味噌、醤油、鍋、釜を背負い、家族を連れての入植であった。家も無く野宿をしての開墾作業が続いたのである。百家族入植したが、過酷な労働に加えて、慣れない仕事のため、六十七家族が当日貰った十円の下附金を受け取ると、そのまま土地を捨て、逃げ出してしまつた。

仲田源藏が命懸けで勝取つた失業対策であつたが、結果この開墾地に残つた者は、わずか三十三人に過ぎなかつた。それでも後世になって、仲田の功績は、この残つた人々によつて顕彰され、牧之原に頌徳碑が建てられるほどの評価を受けている。

残つた三十三家族は必死の覚悟で開墾に当つた。幾多の困難を乗り越え、食糧を確保し、茶園を造り、成功した。

その成功を支えた一人の偉大な人物がいたことを忘れてはならない。それは最後の世話人として残つた丸尾文

する際に、池端の新野から新田村の氏神として勧請したものである。

川越人足たちの開墾事業は、丸尾文六の献身的な努力により、着々と成果を上げることができた。

水田を含めた丸尾組の茶園は、二十二一家族で、明治十一年には、四十二町に拡大している。ちなみに二百人で入植した開墾方隊士たちの同年の茶園は、二百町歩である。そのことからしても、いかに丸尾文六の指導が適切であり、川越人足たちが、それに応え、厳しい労働に耐えたかを物語つてゐる。

丸尾は、明治二十二年五月、郷里に残してきた愛妻に、茶の事業が順調に進み、新しい機械を入れ、四十五十人の摘み手と三十人の職工を使って、製品にして三百六十貫の茶葉を生産したと書き送つてゐる。

牧之原に入植した三十三世帯のうち、丸尾組に入った一七人と八十原付近の野村組の六人と合わせて二十三人の子孫が、平成の今日でも茶園を続けている。子孫たちは、結束して、仲田源藏、丸尾文六の報恩碑建立の発起人となつた。

丸尾組二十一戸が入植した四集落は、現在丸尾原と呼ばれている。そこには、氏神水神宮が建ち、境内には丸尾文六、仲田源藏の報徳碑二基が立つてゐる。大窪の丸尾の住宅には、今も子孫が住んでいて近在の川越人足の子孫たちとともに茶業を営んでいる。

十一、廃藩置県後の牧之原

(二) 廃藩の衝撃

明治四年（一八七二）七月十四日、「廃藩置県」に関する詔勅が布告され、各藩に衝撃が走った。

当時、二百六十一藩あつた日本全国の藩が消滅し、新しく府県制が敷かれるというのである。当初は、三府三百二県であつたが、多過ぎるとする意見が強く、同年十一月、三府七十二県に落着いた。さらに、これまで大名の世襲となつていた藩知事がすべて免官され、東京在住が義務づけられた。新しい府県知事は、中央から派遣されることになつたのである。

また、この改正で、県知事は、県令と改められている。この版籍奉還によつて、徳川幕府の残滓が一掃され、中央集権的な統一国家が、名実ともに誕生したのである。廃藩置県当時の静岡県は、東から韋山県（伊豆）、静岡藩（駿河、遠江）堀江藩（遠江の一部）の二藩一県であった。それが、廃藩置県によつて、静岡藩は、駿河と遠江が分離し、駿河のみで静岡県となつた。一方、堀江藩は、静岡藩の遠江の部分と合併し、遠江の国を「まどめにした浜松県として新発足した。また、韋山県は、足柄県の一部となり、韋山県の県名はなくなつた。

藩知事の徳川家達は、免官となり、東京に居を移すことになつた。新県令には、大久保一翁が就任している。

牧之原は、遠江の国に属していたことから、静岡県ではなく、浜松県に編入された。開墾方は、藩の廃止にとらない消滅した。それによって、静岡藩から支給されていた給金も、廃止されることになつたのである。牧之原に入植した士族たちにとっては、まさに死活問題であったのだ。

大草高重は、中條景昭の内意を受け、善後策の相談のため、服部一徳と共に、勝海舟宅を訪れた。

「大草さん。茶が錢になるのは、あと何年くらいかかりそうかね？」

「三年くらいかかる見込みです。家達公も東京に戻られることになり、最早徳川家からの支援は覚束なくなりました。新知事に陳情するにしても、今度赴任してきた浜松県の多久茂族県令は、旧幕臣ではないので、おそらくまともには取り合ってくれないでしょう。勝さん。何とか三年ほど持ちこたえられる資金を出してくれるよう新政府に掛け合つては頂けませんか。中條さんからも、よろしくお願ひしたいとのことです」

高重は、勝海舟の政治力に期待した。

勝は、高重に言われるまでもなく牧之原の開墾方の藩士たちの将来を心配していた。

「大草さん。服部さん。そのことについては、わしも気を病んでいたところだ。先日も新政府の大久保利通さんを訪ねました。何とか新政府から金を引つ張り出しました」

「静岡に残した旧幕臣たちが、暮らしの立つよう新政府の中に入つてできるだけのことはするつもりです」

「その目には、時代の流れに翻弄され、市井の片隅に消えて行つてしまつた幕臣たちへの愛憎の念がこもつています」

高重は、万感の思いを込めて勝の目を見た。勝は、表情を崩さず、ぽつりと言つた。

「静岡に残した旧幕臣たちが、暮らしの立つよう新政府の中に入つてできるだけのことはするつもりです」

「その目には、時代の流れに翻弄され、市井の片隅に消えて行つてしまつた幕臣たちへの愛憎の念がこもつています」

表向きは、旧藩侯徳川家達から二万両下賜されたことになつてゐる。だが、廃藩置県後の当時の徳川家の財政状況から見て、二万両もの開墾資金が与えられたとは考へにくい。

「いずれにしても、廃藩置県にともない、静岡藩は無くなり、開墾方という職制も消滅した。牧之原に入植した旧幕臣たちは、茶が収穫期を迎えるまで、困窮と苦難に耐え抜かねばならなかつたのである。

「では、そういうことにしておきましょう」

「ところで、勝さんも、山岡さんも東京に行つてしまわぬえ、などとおかしな意地を張る奴もいるかも知れないからね」

「では、そういうことにしておきましょう」

「大草さん。金の出所については、新政府からと言わぬいほうが良いでしょ。徳川家から出たことにするほうが無難だ。薩長から出たとなると、受け取らねえ、などとおかしな意地を張る奴もいるかも知れないからね」

「大草さんも、山岡さんも東京に行つてしまつた」

(二) 収穫の準備

一度も茶摘みを経験することなく、多くの入植者たちが牧之原を去った。借金の抵当に土地を取られ、夜逃げ同様にしていなくなつた人、過酷な労働に体を壊し、仕事を続けられなくなつた人、華やかな都会生活が忘れられず、土地を売つて出て行く人など、様々な理由により、開墾地を離れている。

また、牧之原茶園の誕生に尽力し、陰で支えた静岡藩の要人たちも静岡から各地に移つて行つた。勝海舟、山岡鉄舟、関口隆吉なども廃藩置県にともなつて、静岡を後にしている。

まず、関口隆吉が、明治五年一月五日権参事となつて、三浦県（現福岡県）に赴任した。関口は明治二年、東京から金谷開墾方頭並となり、牧之原に茶園を造るため移転してきて、一年しか経つていなかつた。勝海舟が、その年の五月、東京に移つた。

大草高重は、静岡まで勝を見送つている。勝は、別れに際して、高重に牧之原開墾の後事を託した。

「牧之原開墾は、道半ばである。徳川家の威信にかけても、幕臣の名譽にかけてもこの事業を完成してもらいたい。国の政は、薩長に譲つたが、国を富ませ、豊かな暮らしを支えるには、何が大切か身をもつて示して頂きたい」

高重は、勝の言葉に頷き互いに手を取り合つて別れを

それだけではない。廃藩置県後、明治新政府に対する士族たちの不満が高まり、日本各地に、反乱の危険が漲つている。新政府としても、その芽を摘み取り、懷柔の必要があつたのだ。特に、旧幕臣たちの動きは、新政府としても警戒しなければならなかつたのである。

そうした世間の動きを横目で眺めながら、残つた牧之原の士族たちは、目前の生活に追われ、茶や作物生産に懸命の努力を続けていた。

そんな時、牧之原戸長役場が新設された。戸長には、中條景昭が就任した。景昭は、毎日役場に出所し、牧之原の行政に専念している。そのため、茶園の経営は、任せにせざるを得なくなつていた。そのことが、後に牧之原開墾方士族の分裂の危険をはらんだ苟美館事件の遠因にもなつたのである。

明治六年元旦、高重は、牧之原のうち、彼と共に岡田原に入植した旧開墾方士族とその家族を自宅に招いた。その年の五月に茶の収穫を迎えるに当つての具体的な準備と作業心得を協議するためである。

高重は、年頭の挨拶に、これまでの開墾の努力に、ねぎらいの言葉をかけ、さらなる団結を呼びかけた。開墾方伍長で岡田原二十九番地に入植した小島勝直が、協議の取りまとめ役を努めている。高重は、全員に語りかかるように、収穫期の協力を要請した。

惜しんだ。

勝の後を追うように、六月には、山岡鉄舟が東京に居を移した。西郷隆盛が推挙した宮内省の侍従に着任するためである。高重と鉄舟は、千葉周作道場玄武館以来の旧友で、共に幕府講武所で師範を務め、その後幕末の動乱期に手を携え、駆け抜けた仲である。二人の胸の奥には、特別な思いがあつたに違ひない。

高重は、鉄舟のこれまでの交誼を謝し、別れを惜しんだ。

「東京に行つても、牧之原の同志のことは忘れないでくれ。これからも引き続き支援をお願いしたい。貴公は、侍従になることによつて、幕府時代からの勤皇の志しを十分發揮する場が与えられたのだ。活躍を期待する」

「有難う。今更、宮仕えする気はなかつたが、西郷さんからの話で、断るわけにも行かなかつた。幕臣の拙者が、帝に仕えるようになつたのは、逆賊の汚名を世間から払拭するためでもあつたのだ」

鉄舟は、侍従になつた心情を高重に吐露し、住み慣れた静岡を後にした。梅雨の終わりを告げる強い雨が降つている。

旧幕臣の中でも有能な家臣は、人材不足の新政府にとって、必要な人物であった。政権基盤を固めるために、有用な人物を必要とした新政府は、かつて敵対した幕臣であつても、有能とあれば、登用に躊躇はしなかつた。

「今年初めて茶が収穫できることになった。だが、生育状況から見て、全戸が収穫できるとは限らない。来年からは、全戸がこぞつて、毎年収穫できるようにならなければならない。そのためには、手入れを怠らないで頂きたい。収穫までに、妻女には、茶摘み用の作業着を調え、手揉み師の飲食、寝具などの用意をして頂きたい。費用については、勝さんが静岡を去る時に用立ててくれた五百両がある。中條さんと話し合つてそのうちの百五十両を岡田原のわれわれに配分して貰うことになった。その金をここにいる小島氏に、わざかずつであるが、全戸に行き渡るように分けてもらう」

高重の家に集まつた全員が感涙に咽んだ。廃藩置県以来、収入の当てもなく貧乏所帯をやりくりしてきた妻たちにとつては、まさに干天の慈雨であつた。多くの妻たちがその場に泣き崩れた。

高重は、収穫に間に合うよう弓道場の脇に茶部屋を作つた。中央には、焙炉を置き、湯を沸かす大釜を用意した。部屋の隅には、畳を敷き、茶摘み娘たちの食事や休息ができるようにしている。摘んだ生葉は、大釜に入れ蒸し、それを焙炉で乾燥させながら手揉み師が製茶をするといった作業を一ヶ所で行えるようにしたのである。

牧之原で初めての茶摘み日は、明治六年五月二日八十八夜の日と決まつた。入植した開墾方全員がその日を待つ

ち望んでいた。

この年は、春から雨が多く霧の深い日が続いた。茶の葉にはこの霧が大切である。

入植した武士たちが、これまで開墾した土地は、百余町歩で、茶園は、そのうちの八十町歩であった。それでも下賜された土地の一割にも満たない。茶園の周囲には、まだまだ広い未開墾の原野が広がっている。

(三) 辛苦の初茶

いよいよその日が来た。岡田原入植の全員が、早朝から茶園に出た。茶樹は、腰の高さまで育っている。黄緑の新芽が、朝の光を浴びて、まぶしく輝いている。女たちは、青空に映える緑の茶園の中を、慣れない手つきで、茶摘み始めた。

紺の手甲・脚絆に、赤前垂、赤襷を掛け、頭には、紅白に染め抜いた手拭を被り、赤紐で吊った茶駕籠を首に掛けている。

駕籠いっぱいになった新芽を男たちが運ぶ。茶園は、収穫の喜びに沸き、笑顔で包まれていた。

岡田原の茶樹は、ひときわ生育がよかつた。なかでも、高重の組は、最初に摘むことができるほどの素晴らしい出来であった。

一番摘みは高重の茶園から始められた。

高重は、新芽がていねいに摘み取られる風景をじっと

ところですからな」

景昭と高重は、まだ残された未開墾地を眺め、これらが正念場であることをお互に確認し合つた。

牧之原産の最初の茶は、国内はもとより、輸出にも向けられた。横浜に店を持つ英米の商社は、広く茶の仕入先を求めている矢先であつたので、飛ぶように売れたのである。

摘んだ茶の葉は、釜の上の蒸駕籠で蒸してから筵に移し、焙炉の上に乗せて、揉み上げる。朝、摘んだ茶葉は、その日のうちに仕上げなければならない。この時期は、休む暇もないほどの忙しさであった。

高重は、初めての製茶に失敗は許されないと考え、熟練した茶摘み女五人と腕の良い手揉師を一人、金谷の茶産地から雇い、品質に万全を期した。高重の妻うらも茶摘みの方法を、茶摘み女たちから学ぶため、一緒になつて作業をした。武士の妻などという体面にこだわつていなかった。

うらは、茶摘み作業を続けるうちに、汗を流して働く喜びが、体の中から湧き出てくるのを感じるようになつていた。

茎の先に丸まつた針のような葉が一つ出る。それを芯という。この芯の下に一葉ずつ間隔を開けて一枚の葉ができる。芯と一枚の葉を摘むことを「一芯二葉摘み」といってこの二葉を蒸して手摘みにすると極上の茶ができる

見ていた。すると、後ろで中條景昭の声がした。

「どこの茶園の樹も、立派に育ちましたな。日頃の大草さんのご苦労が実つたわけで、目出度いことです。おそらく来年は、この牧之原一帯で、茶摘みの風景が見られることでしょう」

景昭は、短い袴に刀を差し、岡田原まで祝いに来たのである。

高重は、中條と初めてこの土地を視察に来た時のことを見出しだ。

(狐狸の棲むこの原野は、灌木と雑草に覆われ、人間の立ち入りを拒否するかのように、立ちはだかっていた。その土地に鉈や鍬を振るい、開墾を始めて三年有余。一部ではあるが、緑の茶園とすることができた。ここまでにすることができたのは、徳川家の庇護と勝海舟、山岡鉄舟、関口隆吉など先見の明がある旧幕臣の力によるものである。それに、精銳隊、新番組、金谷開墾方へと続く誠忠の仲間たちが、家族ぐるみ命懸けで、牧之原開墾に当つたからである)

「中條さん。これで、この土地での茶の栽培に、何とか目途をつけることができました。だが、まだこの数倍の土地が残っています。すっかり緑の茶園にするには、後何年くらいかかりますか、見当も付きません」

「そう。わたしたちの次の世代までかかるかもしません。大きな敵陣に対し、やっと突破口を開いたといった

るのである。

高重は、全部を「一芯二葉摘み」とした。それを蒸し、茶師が手揉みで丹念に仕上げる。

床の間に前に、白い布を敷き、できたらばかりの新茶を一面に広げた高重は、銀葉や茎の小さい切れ端を取り除いた。綺麗になつた新茶を茶筒に入れて「牧之原園」と記し、床の間に備えた。牧之原で最初にできた極上茶を東京にいる徳川家達に献上するためである。

岡田原で摘み取った茶葉は、高重の茶部屋に運び込まれ製品化された。献上品、贈呈品などを除いて、すべて商品化され、生葉の収穫に応じて、その収益金を現金化し、各戸に分配した。

初収穫は、一週間で終わった。最後の晩は、分配金の報告と焙炉上げのため、高重は、岡田原のすべての家族を自宅に集め、祝宴を設けた。

宴が始まった頃、景昭が、丁髷姿の一人の老人を連れて、高重の家に現れた。

男は、かつての講武所仲間伊佐新次郎である。

伊佐は、江戸にいる頃、講武所支配世話人を務め、景昭と昵懇の間柄で、高重もずいぶん世話をなつた人物である。下田奉行所に支配組頭として勤務中、アメリカ領事ハリスに唐人お吉を世話をした人物としても知られている。漢学、仏典、和歌に通じ、書道家でもある。彼が、苟美館事件の解決に大きな役割を果たすことにな

なるとは、この時には、知る由もなかつた。

伊佐は、牧之原の初収穫のことを見聞き、景昭から誘われて、そのままに静岡に来た。多芸多才な伊佐が加わり、祝宴は、一段と盛り上がつたのである。

日が暮れ、月が雲間に見え隠れしている。高重は、庭に筵を敷いてその周りを提灯で囲み、集まつた家族に酒食を提供した。妻のうらは、その家族の女たちとともに酒や料理の支度に余念がない。帰りには、赤飯を用意し、それぞれの家に持たせた。

金谷原から来た茶師の虎次郎が、得意ののどを鳴らし「茶摘み唄」を唄つた。

宇治で茶師として修業した時に覚えたものだけに、見事な節回しである。

その時、客人で来ていた伊佐が、立ち上がり、即興で、「茶摘み唄」を作詞し、その席で披露している。

現在牧之原地方に伝わる「茶ぶし」は、この時代に伊佐新次郎が作ったものであるという。

(つづく)

走る不動産（その四）

三戸 岡 道 夫

「えつ、全部ですって……、ご冗談をおつしやつては困ります。わたしは、そんなに沢山のビルを持つてはおりませんよ」

「いえいえ、ご謙遜を。もう調べはついております」

「いやはや、これは怖いこと。でも、そんなにたくさんビルをお買いになつて、いつたいどうなさるおつもりで？」

赤山社長の斬りこむような質問に、八溝社長は、「いまテレビでやつてあるNHKの大河ドラマ、『翔

ぶが如き』をご覧になつておりますか」

「ええ、見ています。わたしは西郷隆盛の大ファンです」

「わたしは西郷隆盛の反対をやつているのです」

「と言いますと……？」

「西郷隆盛は『子孫のために美田を残さず』ですね。わたしはその逆で『子孫のためにビルを残す』という方

梅本老人が仮契約書にハンを押し、帰つていくと、大願不動産の八溝社長と赤玉建物の赤山社長は、応接セツトに向かい合つて座りなおした。

「これはどうも、わざわざ……」

赤山社長が更めて挨拶すると、八溝社長は、

「今日は赤山社長さんのお力を借りにまいました」

「大願不動産さんへお貸しするような力が、わたしにありましたかな。でもまあ、なんなりとどうぞ。わたしに出来ることでしたら、お力になりましよう」

（いったい何が狙いなのだろう）

（鋭い視線を八溝社長に向けた）

（赤山社長さんのお持ちのビルを、全部売つていただきたいと思って、お伺いしたのです）

針です」

「うむ、不動産屋らしい考えですね」

「この不動産ブームに、ビルを買って買って、買いまくり、会社の将来に備えたいのです」

そう言つて、八溝社長は大願不動産のビル倍増計画をくわしく説明した。

「でも、よく資金がつづきますな」

八溝社長は胸を張つて、

「それは大丈夫も、大丈夫です。この通り、わたしには強力な天山銀行さんがついていますからね」

そう言つて、天山銀行の国友信彦と神川昇のほうを指さした。

「これは、これは、天山銀行さんという後ろ楯があるのなら、鬼に金棒ですな」

「幸い、いま、不動産の値段に変化が起きはじめています。赤山社長さんもご承知のように、東京の不動産の値段が頭打ちになりました。その代わり、大阪の不動産がどんどん上がり、また、名古屋の方も上がりはじめています」

「そちらしいですな。聞くところによると、大阪の新歌舞伎座に近い御堂筋に面した土地が、坪一億円で地揚げされたというじやありませんか。目茶苦茶ですよ」

「だから、東京の不動産に割安感が出ているのです。この機会に、東京のビルを大量に買っておきたいのです。

それにはなんといつても、東京にいいビルをたくさんお持ちの、赤玉建物さんにお願いするのが一番いいと思いましてね」「そうですか。わかりました。売れとおっしゃるのなら、わたしも商売ですからお売りいたしますが……。でも、八溝社長さん、そんなにお買いになつて本当にいいのですか」

「もちろんです。先ほどもお話をしましたように、西郷隆盛の逆の精神でやつてあるのですから」

「そうでしたね。でも、わたしの方は西郷隆盛の精神です。八溝社長さんとわたしとでは、経営哲学が逆です」

「赤山社長さんが売つて、わたしが買う、逆だから丁度いいのではありませんか」

「そうですね、ワッハッハッ……」

二人は大声で笑つたが、赤山社長にもなにか考えがあるのだと感じた八溝社長は、

「赤山社長さんの経営哲学も、ひとつお聞かせくださいよ」

とその顔に真剣なものが走つた。

「いや、わたしには八溝社長さんのような経営哲学はありませんがね。ただ、漁師の遠見役だと思って、いつもやつてているのです」

「漁師の遠見役、……？」

「同感です」

「わたしは不動産を十年サイクルでやつています。いや、二十年サイクルかもしれない。安い時に仕入れて、十年、二十年と寝かせておいてから売るのですから、どんな値段で売つても、十分儲かります。だから、目先、少しばかり値段が下ろうと、また少しばかり安く売ろうと、びくともしません」

神川昇は横で話を聞いていて、
(うーむ、なるほどそういうことか)

と、先ほど空地の売買で梅本老人に見せた赤山社長の不思議な余裕は、こうしたところから生まれてきているのだと、その謎がはじめて解けた。

「不動産を十年、二十年と寝かせておくのですから、借錢で不動産を買つたのでは、金利ばかりかかるダメです。わたしは銀行から借りた金では不動産は買いません」ということは不動産のサイクルから言うと、もう不動産の値段は峰を越したということです。ご覧なさい。もう少したつと、今度は大阪、名古屋が頭打ちになつて、次に地方の都市の不動産の値段が上りはじめます。そして次に、リゾート地の山や海岸の値段は頭打ちで、大阪、名古屋が上がつていると言われましたが、ということは不動産のサイクルから言うと、もう不動産の値段は峰を越したということです。ご覧なさい。もう少したつと、今度は大阪、名古屋が頭打ちになつて、次に地方の都市の不動産の値段が上り出します。そして

「さつき八溝社長さんが、東京の不動産の値段は頭打ちで、大阪、名古屋が上がつていると言われましたが、ということは不動産のサイクルから言うと、もう不動産の値段は峰を越したということです。ご覧なさい。もう少したつと、今度は大阪、名古屋が頭打ちになつて、次に地方の都市の不動産の値段が上りはじめます。そして

（その点は自分と違うな）

（思つたが、黙つて聞いていた）

「だからわたしは、不動産を売つた金はすべて銀行へ預けて、定期預金にしておくのです。そして次の不動産サイクルの谷で不動産を買う資金として、待機させておくのです。これなら自分の金ですから、金利を払う必要もないし、借金返済の督促をされる心配もない。わたしす。それと同じですよ」

は、不動産を買って損したとか、借金が返せなくて困ったとか、ハラハラドキドキするのが嫌いなのです。いつも泰然自若としていたいのです」

神川昇は、赤山社長が不動産を売った代金を、すべて銀行の定期預金にする謎もわかつた。

赤山社長は話し終えると、

「いやはや、これは八溝社長さんとまったく逆になつてしましましたな。ハツ、ハツ、ハツ」

と大笑いした。すると八溝社長は、

「いえ、不動産をロングサイクルで見る点は、わたしもまったく同じですよ。だが、わたしはビルを買つたら絶対に売らない。赤山社長さんはサイクルの高嶺になれば、それを売つて利益をがつちり取る、そこが違うのですよ。それは、わたしと赤山社長さんとでは、最終目標が違うからです。わたしはビル倍増計画を達成して、ビル王国を造りたいのです。ですが、赤山社長さんはもつと別のものを狙つておられる。でも、それはそれでいいのじやありませんか。不動産業の行き方は、一つではあります。いくつもあるのです。どれを選ぶかは、その人の人生哲学の反映ですから」

「たしかにそうです。でもね八溝社長さん、くどいようですが、いまは不動産を買うときではなく、売るときですよ。不動産の値段は峠を越しました。もうすぐ、下降局面に入りますよ。不動産の値下がりがきつかけになりますよ。いくつもあるのです。どれを選ぶかは、その人の人生哲学の反映ですから」

妻の隆子は十日間ほど海外旅行に行つて、今日帰つてくることになつていて。社交好きの隆子はいつのまにか不動産会社の社長夫人グループと親しくなり、今回は五六人の仲間といつしょに、ハワイやアメリカ西海岸を廻つてきたのである。

八溝社長は夕食を先にすませて、居間でくつろいでいる、しばらくして門の方にざわつきはじめ、「ただいま帰りました」

隆子が晴れやかな声で、土産をいっぱい抱えて入ってきた。

「あなた、とてもよかつたわよ。すばらしかつたわよ」

「常盤不動産の社長さん、ハワイに別荘を持つてているのね。それがすごい別荘なの。広くて、大きくて、海岸沿いだから景色がすばらしくて……」

今回の海外旅行は、社長夫人たちがそれぞれ海外に持

第十二章 表街道

つて、バブル景気ははじけますよ」「そんなにはやく、はじけますかねえ」「はじけますよ。あと一年はもたないのでありますかねえ」「それまでに、赤山社長さんは手持ちの不動産を全部売り切るわけですね」「そうです」「ですか、そのビルを全部わたしが買いましょうと言つているのです。お互に、いい取引じやありませんか」

赤山社長の持つているビルを全部買おうとしたら、いくらくらいになるだろうかと、国友信彦は頭でソロバンをはじいたが、あまり巨大すぎて見当がつかなかつた。

「それにしても八溝社長さん、不動産が狂乱価格だというのに、政府は根本的な手を何も打ちません。こんなことで本当にいいのでしょうかかねえ。もつとも、それは不動産業者にとっては福の神ですがね」

赤山社長が、ふと、さめた眼でそう言つた。

「いいじやありませんか、そんな神風が吹いているうちに、われわれはうんと商売をさせてもらいましょうよ。明日は明日の風が吹く……ですよ」

「それは、そうですな」「一人は大声をあげて、またカラカラと笑つた。

と隆子はソファーに座りこんだまま、まだ旅の余韻にひたり切つた表情で、うつとりと/or>いた。すると八溝社長が、「別荘、別荘といつたって、どうせ会社のものなんだろう」と、隆子の夢に水をさすような言い方で、突然そう言つた。すると隆子は

「ええ、まあ、そう言つてしまえば実際はそんなところね。でも会社名義だつて、実際は自分のものと同じだわよ。社長専用の別荘ですもの。その上、経費も全部会社持ちで、タダであんなすばらしい別荘が持てるんですね。こんなすてきなことつてないわ。私たちだつてハワイぐらゐ別荘ぐらい持ちたいわねえ」と言つて、ねだるような、催促するような視線を八溝社長の方に送つた。

八溝社長は隆子の話を、少しにがにがしい気持で聞いた。

ていたが、

「そんなものに興味はないね」

と吐きするようにそう言つた。

「あら、どうして。そうなれば会社の資産だって増えることになるんだし、一挙両得じやありませんか」

「わしは公私混同は嫌いなんだ」

「あら、どうして？ 大願不動産は自分の会社でしよう。公私混同もへちまも、ないじやありませんか。あなたは少し堅すぎるからダメなのよ」

そう投げするように言うと隆子は、

「ああ、疲れた。疲れた」

と立ち上がり、ダイニングキッチンの方へ行つてしまつた。八溝社長はその後姿に、

（少しもわかつていらないんだな）

と舌打ちをした。

その翌日、ホテルオーネクタで開かれた日本不動産協会のパーティに、八溝社長は出席した。

その会場で、隆子が海外旅行でお世話になつた、南山地所、常盤不動産、東西建物などの社長とも顔を合わせたので、

「家内がすっかりお世話になりました、ありがとうございます。それにしましても、すばらしい別荘を海外にお持ちで、うらやましいですな」

赤山社長はそう答えながら、八溝社長の耳もとに口を寄せてると、

「さつきの常盤不動産の社長、気をつけた方がいいですよ。あの人は汚いですかね。もし、共同プロジェクトでも持ちこまれたら、ぜつたい一緒にやらない方がいいですよ。いい所だけを自分が取つて、カスをこつちへ押しつけてきますからね」

「聞くところによると、別会社をたくさん持つているようですね」

八溝社長は昨夜、妻の隆子から聞いた話をちらと頭に浮かべながら、そう答えた。

「そう、その別会社が曲物なんですよ。あの人は私利私欲のためなら、どんな汚いことでも平気でやる人ですから……」

「公私混同がひどいみたいですね」

「別会社をたくさん作り、資産隠しもやつているようです。良質の不動産やビルは、別会社へ所有権を移して、いざという時に銀行が貸金回収のために資産処分をしようとしても、すぐには出来ないようにしているのです。その所有権移転も、一回も三回も次々に名義変更を縱横無尽に行うものだから、もう、なにが何だか、わからなくなつてしまつていています。税務署や銀行が調べに来ても、複雑すぎて、ちょっとやそつとでは、わからないようにしているんですね」

と、お礼の言葉とお世辞を半分ずつのべると、「いや、いや、あんなものは序の口ですよ」と、どの社長も得意顔で答えるながら、

「八溝社長さんのところは、国内のビル専門で、海外には御興味がないようで……」

と少し見下したような口調で言つた。

「ええ、とてもそこまでは……、甲斐性がないものですから……」

「でも、八溝さん、不動産もインターナショナルの時代ですよ。海外にはいい物件が山ほどあります。わたしはロスアンゼルスを足場にして、これからアメリカ本土を狙います。今やらなければ、やるべきはありませんよ」

（ええ、それは私も同感のですが……）

「八溝さん、別会社をうまく使うことですよ。別会社をたくさん作って、窓口をたくさん増やせば、銀行なんにもなりますしな、ハッ、ハッ、ハッ……」

常盤不動産の社長はそんな言葉を残して、人混みの中へ消えていった。

するとその時、八溝社長の肩を後からポンとたたく者がいた。振り返ると、赤玉建物の赤山社長だった。八溝社長は、

「やあ、先日は大変お世話になりました」「いや、こちらこそ」

「君が一日酔いをしてしまいまして、ちょっと酔いをさまに外へコーヒーを飲みに行つてきたのです」

折原一夫は蒼ざめた顔でそう言った。

「二日酔いをしてしまいまして、ちょっと酔いをさまに外へコーヒーを飲みに行つたのです」

（ええ、でも昨夜は相手が相手だったものですから、つい……）

「相手が相手……？ それは誰？」

「はい、実は……」

折原はちょっとと言いにくそうにしていたが、「常盤不動産に僕の友人がいるのですが、昨夜その友人から『常盤不動産へ来ないか』と、しつっこく誘われたのです。しかし僕がオーケーしないものだから、オーケーするまで帰さないって、それで一日酔いになつてしまつたのです」

常盤不動産の社長とは、さつきパーティで会つたばかりである。パーティでは『不動産もインターナショナルの時代ですよ』などと言しながら、陰では優良社員の引

抜きなどを平氣でやつていたのである。さつきの赤山社長のアドバイスも充分納得できた。

「それで常盤不動産へ行くのかい……？」

「冗談じやありません。あんな会社へ誰が行くものですか。いい時はいいのですが、必要なくなれば、すぐボイです。これまでにも何人もの若い人が、ひどい目にあっています」

「誠意のなさそうな顔をしているものな」

「常盤不動産の社長は本当に悪ですよ。いえ、反対に利口だというべきかもしません。二百億円ぐらいの隠し預金を持っているということです。僕の友人の言うことですから、まちがいありません」

「二百億円……それは凄いな」

「別会社をいくつも作りましてね。別会社といつても、実体のないペーパー・カンパニーです。そこへ会社の金を移して、社長が管理しているのだそうです。中味は社長以外、誰も知らないそうです。そうした金で外車を何台も買って乗りまわしたり、夜の銀座で豪遊したり、ハワイに別荘を買っているのです」

「ふーむ」

「社長も感心などしていないで、わが社も少しはそうした操作をした方が、いいではありませんか。昨夜、酔っぱらいながらそう思いました」

それを聞きながら八溝社長は、

「社長も感心などしていないで、わが社も少しはそうした操作をした方が、いいではありませんか。昨夜、酔っぱらいながらそう思いました」

（つづく）

（この折原も、昨夜の隆子と同じようなことを言っていた。）
と思つた。時はまさに不動産バブルの爛熟期である。
世間一般から見れば、そう考えるのが当たり前なのかもしない。

「ご忠告ありがとうございます。だがな折原君、わたしの目的は、ビル王国の建設なんだ。いつか話したね、『子孫のためにビルを残す』という経営理念だ。残すのなら、いいビルでなくてはならない。そのためには、会社も会社でなくてはならない。汚れた会社を残したくないのだ」

「はい、社長の方針はよくわかつています。酔つたはずみとはいえ、バカなことを言つて申し訳ありませんでした」

「人生の裏街道という言葉は、会社の場合にあるんだよ。だが、私はいくら金のためとはい、会社に裏街道を歩かせたくない。いつもお天とう様に顔向けができる会社でいたいのだよ……」

八溝社長は折原にそう言いながら、後半は心の中で、（……そうでなければ、大願不動産と、会社の名前今まで神様に願をかけて、会社を大きくしている意味がない）

と、深く思うのだった。

短歌 三十首

廃車して

泉ふかく白きしづもり満天の星々低く掌にとるごとし

すくはんか黒き滑車のゆらぎつつ半ば欠けたる十三夜の月

早く行け早く走れとバック・ミラーにぴつたり迫るダンプのライト

自らにくるま洗ひしこともなく埃つもりて九年車あり

手放ししくるまはときに恋しかりガランと空きしわが玄関まへ

堤防に立ちて見放ぐるおそ夏の白蝶にゆたふハーバーの波

曾根竣作

にび色の空より落ちる晩夏光右に左に波打つごとし

ひとり行き子の合否をば確めて振り向けばアネモネ紅く咲きたり
秋は未だ小雨の中にのこりつつ合ひのコートを再びも出す
つねいこふ苑のベンチに夕べ来て今日のひと日を心に刻む

政変

乗り換への駅に今しも昇りつつ半月するどく曲がりてゐたり
いつも買ふ八百屋守りて渾名するサンチョパンサが所在な氣なり
店頭の大根真白く光りおり他に並びたるものを圧して
清貧の頃をへだててけふあるを僥倖をして望の月光る

両足を取られたる気がさびしいよ永く乗りたるくるま手放す

さらにふかく鎮もりて咲く紅ダリア一輪はげしく政変を告ぐ
病状をたしかめ合ひて訣れたり丸ビル六階五人のクラス会
胸厚く腕太きかなメジャーたち、こんな奴らと鬭つたのか
いづこ行く普天間のヘリ唸りつつ沖縄の空まだ明けやらず
静けさを打ち破ること客席にベートウベンの「運命」響りぬ
つばめ返し

花季すぎし泰山木のさゆらぎて零す代赭の花片は許さう

雨氣つれてエレベーターに乗り合ひし男壯年麦の匂ひす

花菖蒲直ぐ立つ水面まくなぎの終りを知らぬ旋回つづく

かはたれの渚に低く海どりのつばさばさらと藍青へ向く

緑陰にきのふ日の射しけふ霖雨いち病のたい作務衣着ながす

風冷ゆる堂宇に立てば思想なくただに新樹の暗きかがやき

いまここに無へと消えゆく時ありてあら草を引く秋の日の暮れ

長剣につばめ返しの秘法あり斬られて白き胴ひるがへす

渡り来しつばくろ一尾自在なり小次郎の剣をひらりと躲し

文学はか弱き魂こんが生むものかけふどんよりと桜桃忌くる

わが愛誦歌（十二）

——昭和から平成へ——

曾根竣作

○手を品を変へていぢくる万葉集しかれども遂に日本
の歌

『疎々散吟集』(平・17) 所収。作者は、大正四年千
葉に生れ、昭和九年旧東京高等師範学校入学後、五味保
義に師事し、以後専ら「アララギ」畠を歩む。

その作品は一貫して、市井の生活者の哀歎が主題である。頑固な生き方が表現されているが、それとともに、事実を重視するところから、時代や社会に対しても、一個人の人間以上の思い入れや同調を拒むところがある。そのためか、作品は凡ね冷たさや、ニヒルを指摘する声も多くあつた。

「アララギ」の大御所として君臨した土屋文明没後、作品に自由な空氣を生まれたような気がする。従来の剛直な詠みぶりが、フモールというべきか、微苦笑という

べきか、中々に不思議なゆたかな世界に変容して來ているのである。

掲出歌もとにかく面白い。「いぢくる」という皮肉な視線と同時に、下句で「しかれども遂に」といわざるを得ないところに作者の真骨頂がある。作者は、剣道の高段者であり、漢文学選考という経験がどこかで作用し、一本筋の通った歌を作ったというべきであろうか。万葉集と言へば、歌をする者にとつては或る意味で聖典である。しかし乍ら、聖典はあく迄聖典にしか過ぎず、必ずしも現代の作歌に、どれ程の参考になるであろうかという疑問は残るのである。

近年は口語を交えた作品も多く、高齢になるにつれ、ますます自在になり、ゆたかな世界が展開されている。
予科練出身戦死者は八十パーセント統計表よりまなこ

放たず」
「白き瓶」を中に交はりの十三年事実ひとつ突きとめむとして（周平さん）、「戦中派などと呼ばれてながらへて勝てぬいくさを戦つて負けて」（春日ざし静かなる思ひはガダルカナル生き残りの友も逝きて「十年」野暮くさき歌詠みちらし過ぎゆかむ妙巧短歌注溢の世に）。

○ いちにちは音楽ブンガクレキシガクガクシカイカン
薺の黄落 紀野 恵

【La Vacanza】（平・11）所収。「ガクシカイカン」はいうまでもなく「学士会館」である。侃々諤々、一日中議論している人びと、男たちといつてもよい（おそらく、結社の歌会が想定されているのかも知れない）。「ガク」から「学士会館」を引き出している。音の響きは、「よくもまあ続いているなあ、あきれたものだ」といった半ば揶揄する気分が伝わってくる。このリズム、軽いタッチで洒落た一首であるが、また結句に「薺の黄落」を持つて来て、いかにも古色蒼然とした「学士会館」の雰囲気をかもし出している点が巧みである。

紀野恵の作品には、多くの歌人が作れると思えないユニークさと魅力が、溢れていると思う。短歌という詩型の幅広さと豊かさを、まさに証明するような作品が紀野の世界である。しかし乍ら、短歌総合誌に作品を見ることが余り多くない。作者自身、歌壇から距離をとろうと

しているのだろうか。そうだとすると、とても残念に思う。

読む者は、初句からどこへ連れていかれるのか、いつも不安と期待に直面している。それゆえに、結句が鮮やかに決まつたときの興味は格別である。スリル満点といえなくもないが、もちろん歯が立たずよく分からぬといふ場合はないとは言えない。

同世代の女流たちの、もの分りのいゝ境涯詠に對して、反旗を翻すような作品の存在は貴重なのではなかろうか。

（ミニユーズ社製時計を提げて迎へ擊つ春といふ名の手ごはき女）英雄にしてこひゞとが死にてゆく画面にけふのやうな雨降る）（とりあへず美々しき衣装誂へて一文無しに燃や春は来る）（霜と紛ふましろき地平何処からが美神の領土軍神の庭）（好きなのは商船隊といふ言葉 海の駱駝の背なが次々）

作者は、昭和五十八年「荷風氏のくしゃみ」で短歌研究新人賞次席に入り、衝撃的な歌壇デビューを果したが、やはり歌はむつかしく、難解の部類に属しよう。

○ ここはどこどこにでもなる街として私は歩む冬の歩道を 大島 史洋

【封印】（平・18）所収。この一首、何でもない様であるが、歌としては深い。同じ頃、自つむればここに

もたぎつ沢はあり燐々として望郷をせよ〉があるが、故郷は岐阜県中津川市、東京に暮らすようになつてからも山林と川に囲まれて育つた少年時代が生き生きと心に息づいている。「燐々として」という形容で飾られる望郷の華やぎが、都会のイルミネーションと重なるように煌いて寂しい。

掲出歌も同様で、その虚しさに呼応する一首、現代にあつての都市と故郷の距離を一瞬にして言い切つた歌である。

大島史洋の作品には、どこか些細で、ごくごく日常的なモノが多く出てくる。そういうものに愛着をもつている。しかし、そう言つたものを採り上げるのに、一般の人達と変つた採り上げ方をする。町を歩いていても、多くは場末であり、路地の端つこである。つまり意識してメインストリートを描かないでのである。

それはどこかで、青年期に学問の道を放擲したという悔しさのあとの思想的選択や決意なのかも知れない。

（囚人のごときノルマは嫌いならず味氣なき人と妻は言えども）も徹頭徹尾、大島流が出て居り面白い歌だ。他に「はがねなすソルジェニーツィンたまひびくカザルス幽明隔てて帰る」（斎場の茶毬の終わりを待ちて）、この所在なき閑雅な時間）（わが歌の源たりし路地消えて凶器にあらぬ鉄パイプ光る）（学問を放擲したる悔しさの瀑布のとき古書店の棚）（人間の脆さを深く知る

ゆえに女人禁制の山に籠もりき）などがある。

氏は慶應義塾大学文学部哲学科を経て、昭和四十四年早稲田大学国語科専攻修士課程修了という変つた経歴を持ち、昭和三十五年に結社「未来」に入会、近藤芳美、岡井隆に師事している。「学問を放擲したる悔しさ」はその辺りのことをいつているのであろうかと推測する。

○ ものおもふひとひらの湖をたたへたる藏王は千年なに もせぬなり 川野 里子

【五月の王】（平・2年）所収。掲出歌の藏王山は山形県と宮城県にまたがる大きな火山で、いくつもの高峰を抱え、頂には火口湖をたたえる。作者は、その湖の姿を「ものおもふ」と深い沈思の表情でとらえた。さらにこれを受けて下句では「千年なにもせぬ」と表現する。擬人的な表現ではあるが、むしろここでは人間を超えた一種の神格化があるといつた方が正確であろう。なにしろ「千年」の「ものおもひ」にふけつっているのだから。「藏王」という王者のような山の名も、一首の中で効果的にひびいている。

第一歌集「五月の王」の中の代表歌と言つてもよい秀歌であるが、藏王をとらえる作者のこの直感の卓抜さ、ダイナミックさにまず魅了される。歌の根底には人間と自然との対比があることはまぎれもない。藏王に真向つて立つ作者の自我の強靭さをも物語つてゐるいつてもよ

いだろう。

ついひと月まえ、惜しまれてこの世を去つた「河野裕子」の、
○たっぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言
へり

川野里子は、大分県竹田市生まれ。初期の頃の作品に
〈あめんぼの足つんつんと蹴る光ふると捨てたかちち
はは捨てたか〉という離郷の一首があるが、この上句に
みられるような自然に対する親和性が川野の歌の源には
ある。また一方、作歌と同時に書き始めた批評の資質は
適格にして、よく歌意を汲み取り現代短歌への分析の鋭
さでは第一人者といつてもよい。〈ふと君の表情のなき
視野のかなたバベルの塔が風に揺れてる〉〈樋口一葉
またの名を夏まつすぐに草矢飛ぶこと金借りにゆく〉
〈解散のなき整列はつづくなり硫黄島区域に連なれる墓
碑〉バベルの塔は旧約聖書に出てくる塔、転じて実現性
のない空想的な計画を言ふ。樋口一葉は本郷当り借金し
て歩いたことで著名。硫黄島の歌は、アーリントン墓地
三首より。

○「修身」の時間やさしくよみがへるわが少年期昏くま
ぶしき

志垣 澄幸

最近の作品は、初期作品のもつ暗さが徐々にうすれ、
宮崎の地の明るい日差しに覆われて来ているが、同時に、
年齢意識が濃厚に作品にしのびよって来ている。
近作を見てみると次の様な作品がある。〈夜の街にゆ
きかふ貌のやさしかりなべて地上より消えてゆく人〉
〈この世から退散するがに空高く花びら群れてながれゆ
きたり〉〈二階より降りてきしかど降りてきし用事忘れ
てまたのぼりたり〉
短歌とは関係ないが、氏は海釣りにかけてはプロ級と
言ふ話しだある。

○しぴがねのゆふぐれ近き雲の秋いづこにか水漬く鐘の
あるべし

雨宮 雅子

バイエルン国王ルートヴィッヒの足跡を訪ねたドイツ
への旅の中の一首である。空に鳴りひびく鐘の音ではない。
水漬いてひびかせることのできない鐘、そこに亡き
夫を始めとして、世に受け入れられなかつた多くのさま
ざまの死が想起され、暗喩されていることはいうまでも
ない。

雨宮雅子は、四十歳ぐらいまで出産・離婚・子どもとの
離別、幾度かの病気・入院といった苦労が、絶えなかつた。彼女の人生は苦難の連続であった。併し乍ら、それを救つた彼女がキリスト者であつたことの意味が非常に大きい。たとえば第二歌集『悲神』には〈百合の蕊

かすかにふるふこのあしたわれを悲しみたまふ神あり〉
という雨宮の代表歌があるが、この清らかな内面性と、
神をみつめる意思的な光線の強さは、彼女の歌に一貫す
る魅力である。「神に遠去かりまた近づこうとねがう私
は、つねに『神を悲しませている者』である」と自身の
信仰を語っているが、この搖れの中で掬いあげる歌は、
骨格が大きく、清潔で強い。

ご主人を亡くした折の散骨の歌に次のようなものがあ
る。〈うつそみの人なるわれや夫の骨還さむとさがみの
海に出で來つ〉〈わたつみに花束の彩巴なし散骨の船は
孤を描きたり〉〈北緯三十五度東經百三十九度相模湾沖
きみが奥つ城〉〈遺言のひとつひとつをはたしゆく身は
鶏頭の朱に染まるまで〉

私生活をあまり描写しなかつた作者が『眉顔の譜』前
後から、素顔を見せ始めている。直接には、夫の重篤な
病、看病、死をみつめる日がきつかけなのである。

〈この世よりはぐるるわれかひつそりと夜の車窓に顔映
されて〉〈面映ゆく生きてゐるやうな寡婦われが水の都
の敷石を踏む〉〈ユダはかぐろく描かれたりいつの世
もユダあることを安心として〉〈ひと日ひと日石積むや
うに過ごしきて馬酔木の房のふくらかに遭ふ〉彼女の信
仰も新たに問い合わせられているのではなかろうか。

第一歌集『空曠のある風景』にすでに顯著なのである
が、描かれた世界は静謐で、陰りをもつていて。活動的
でなく、どちらかと言えば受身で、対象を包み込むよう
な傾向がある。疼くようなものが表現にあらわれる。

掲出歌しかりである。昭和九年生れの作者は、「修身」
の時間がやさしくよみがへると上句で持つて来て、下句
でわが少年期昏くまぶしきで詠い納めている。昭和一桁
生れの者なら少なくとも共感一入のものがあるのでな
からうか。

また、〈予科練に歳足らざる悔しさをわが言ふまでに
国は育てき〉も回想詠であるが、当時の少年達がどう考
え、どう生きんとしたかを具さに表現している。

志垣澄幸のひとつの特徴であるが、動詞で終る作品が
多い。他の歌人に比べて、体言止めが少い。同時に、つ
ねに作者はモノを見つめている。そして、そのモノのな
かのわざかな蠢きや、異和感を作品化する。例えば〈け
ふわれはかなしき遊子はるかきて天平仏の指に触れた
り〉と歌ひ、あとは読み手に想像させるのである。一首
から余計なものをとことん消してゆく。そういう作り方
なのである。

参考文献

現代歌人二五〇人（牧羊社）

現代名歌観賞事典（桜楓社）

現代百人一首（朝日芸文庫）

現代短歌の観賞事典

現代の歌人140（新書館）

短歌

行雲流水（二十九）

石黒修身

シルクロードの旅
絲綢之路游中国

二〇一〇年九月、予てから憧れていたシルクロードの旅をする機会に恵まれた。

友人ら四人と案内に帰化中国人を伴つた、個人旅行のようなものであつたが、要所には現地ガイドが付き、比較的自由に動くことが出来た。十日余の日程での行動は広く浅くならざるを得なかつたのは否めない。

取りこぼしは多くあつたと思うが、自身の興味と好みの赴くまゝに見聞した事柄を詠んだ。旅行詠につきものの平板な描写が多くなつたが、少しでも動きのある情意を盛り込む努力をしたつもりである。以下十九首

憧れのシルクロードを巡らんといま起點たる西安に着く

夢幻の軍団埋まる「兵馬俑」秦始皇帝の威光偲ばる

始皇陵守り続ける兵馬ありその壯大なロマンに感動

悠久の歴史遷りし敦煌はオアシスの都市ゴビ灘たんの中

敦煌のもの識る人らおしなべて「井上」を敬し「平山」を慕う

井上靖 小説と映画「敦煌」の作者

平山郁夫 中国との文化交流でこの地域に多大の貢献をした

ゴビ灘を駱駝で涉りしひと時は隊商キャラバンを氣取り往時を偲ぶ

この老人も乗るのかという顔付きで敦煌の駱駝暫く起たたず

駱駝に乗り暫し歩めり「鳴砂山」夕陽傾き「月の砂漠」が

「陽関」に佇み心昂ぶりて独り吟ぜり王維送別の詩

唐の王維「送元二使安西」

敦煌で買い求めたる夜光杯「葡萄の美酒」の詩篇を憶う

唐の王翰「涼州詞」

此処こそが万里の長城西の果て「漢長城」に狼煙の痕跡あとが

敦煌ゆ西に向える夜汽車では「吐魯番」を想い「烏魯木齊」を恋うる

吐魯番のウイグル人は顔付きが吾らに肖てり親しみ覚ゆ

ウイグルの人ら日本語巧みなり文法似てり表現易しと

「美しい牧場」の意とう烏魯木斎は今近代化し新疆省都なり

烏魯木斎の夜の屋台で煙喫ぐ男らの焼く「燒羊肉」

カザフスの一家仲良くパオに住む生活問いつつ馬乳酒飲めり

帰国途次暫時寄りたる上海は多人種群れて万博の盛り

西域は少数民族あまた住み夫々文化伝統守る

短歌

金澤 智佐美

くちなしさは今日も香りてわが心虜になりて蓄数えり

玄関に友の土産の石けんはラベンダーの香運び漂う

珈琲をひと口含みほろ苦き味と香りを飲みて和めり

テーブルの器の中で紫陽花は人の語らいかに聞きしや

同じ顔陽に向け立ちし向日葵に元氣と笑顔もらいカメラに

わが夫はわが作品をと夏野菜笑顔もつけて配り楽しむ

それぞれの野菜の出来の品定め褒め慰むる菜園仲間

赤き品送りて友の還暦を祝いし仲間永き友なり

自信なく氣弱なる時完全な人なしと書く紙に何度も

ひと夏の蝉の鳴き声人生も宇宙の刻みで同じひと時

身を灼きてひたすらじつと獲物待つ小さき蜘蛛は巣の真ん中に

憎しみは平和を生まぬと言う人よ九・一一で子亡くせし父

人類が平和の道を歩むようイマジンの歌詞つぶやき祈る

漢詩

潮騷錄（六二）

仰尊・漢譯詩三首連作 平成廿二年四月

(一)

仰貴我師恩
訓庭幾歲痕
唯懷年月疾
告別已無言

(二)

相睦復共論
勿忘思索園
立身名可勵
今散去從門

(三)

窗下學晨昏
螢燈白雪軒
當知駒過隙
再會不離魂

(一) 仰げば尊し・漢譯詩二首連作 訓説・七七調
仰げば貴し 我らが師恩
訓への庭に幾歲の痕
唯だ唯だ懷ふ 唯だ唯だ疾きを
別れ告ぐるに 已に言無し
相に睦み 共に論ぜし
身を立て名あげ 梢な忘れそ
今散に 窓下に學ぶ
門を去りゆく

(二) 仰げば尊し・漢譯詩二首連作 訓説・七七調
仰げば貴し 我らが師恩
論語「仰彌高」
論語「庭訓」
身を立て名あげ やよ励む可し
孝經「立身、揚名」
身を立て名あげ やよ励む可し
孝經「立身、揚名」
身を立て名あげ やよ励む可し
孝經「立身、揚名」
身を立て名あげ やよ励む可し
孝經「立身、揚名」

(三) 晉書「蟹雪之功」
莊子「白駒過隙」
め推量の助動詞

鯨游海

〔原詩〕

ここに掲げるのは、戦後全音楽譜出版社から発行された阿部徳二郎、今井巖編集の「日本の詩情」より転記したものである。現代かなづかいで常用漢字を用いており原作そのものではない。明治十七年小学唱歌として制定。原詩者不詳

作曲者スコットランド民謡

仰けば尊し

(一)

仰けば尊し 我が師の恩

教えの庭にも はや幾年

思えばいと疾し この年月

今こそ別れめ いざさらば

(二)

互いに睦みし 日頃の恩

別るる後にも やよ忘るな

身を立て名をあげ やよ励めよ

今こそ別れめ いざさらば

(三)

朝夕なれにし 学びの窓

螢のともしび つむ白雪

忘るるまぞなき ゆく年月

今こそ別れめ いざさらば

〔解説〕

一番では論語から一ヶ所引用している。

〔これを仰けばいよいよ高く、これを鑽ればいよいよ堅し。これを瞻るに前に在れば忽焉として後に在り……〕

〔顔回が孔子に感嘆して洩らした語で子罕篇に在る〕

〔鯉趨りて庭を過ぐ。曰く、詩を学びたりや。対えて曰く、未だし。曰く、詩を学ばずんば以て言うことなし〕

〔庭訓の故事で李氏篇に在る〕

二番では孝經から引用している。

〔身を立て道を行き、名を後世に掲げ、以て父母に顯かにするは、孝の終なり〕

三番では晋書から引用している。

〔車胤夏月練り絹のふくろを以て数十の螢火を盛り、書を照らして之を読む。夜を以て日に繼ぐ。孫康家貧しくて油無し。かつて雪を映して書を読む〕

このようにこの詞をよく吟味してみると、漢籍からの引用が随所にあるのに加え、我が国古来の文章の精妙な表現を引き出す「未來の推量の助動詞む」を駆使し余韻嫋々、感情の濃まやしさを巧みな修辞で詠んでいる。

このことからも、この作詞者は当代第一級の詩人だったことが伺える。なお詞はスローな曲に合せた八六調。

私は後掲の「螢の光」とこの曲が、送別曲と留別曲といふ一対の応酬詩、即ち一対の姉妹曲であり、幾つかの類似があることから、この不詳の作詞者は、「螢の光」の作詞者である稻垣千穎ではなかろうかという仮説を持つ。

一、漢詩について

形式は五言絶句の三首連作。

押韻 平仄等全て近体詩の規則(一四不同、下三連同韻禁、一孤平禁、冒韻禁、同字重複禁)に拠る正確の詩。

押韻は上平声十三元。即ち恩、痕、門、論、園、言、昏、軒、魂。読み下しは「七七調」とした。

二、原作について

(一)、何故スコットランド民謡の曲か

近代国家確立を急いだ明治政府は、学校制度を整え義務教育を実施した。当然卒業式等に相応しい歌が必要となつたが、未だ洋楽に通じた作曲家が育つておらず、取敢えず送別曲「螢の光」と併せ、この留別曲「仰けば尊し」の曲を英國から借り、これに詞を付けた。

格調高い文語文で、當時主流の漢文脈の趣きも深い。

(二)、原作者は不詳

文部官僚の伊澤修一はスコットランド民謡から選んだ曲に大急ぎで歌詞を付けさせ小学校唱歌として普及を図った。曲は外国の借り物としても、せめて歌詞だけは我が国の伝統を踏まえた立派な作品にしたいと、當時第一級の文人に依頼した。

依頼を受けた文人は伊澤修一の意図を理解し、全智全能を傾むけて作詞に没頭したと思われる。近代国家建設に邁進する日本民族の誇りや、整備されつつある学校文化をも明示しようとした。

〔螢の光・漢譯詩三首連作〕 訓説・七五調

(一)

螢光・漢譯詩三首連作 平成廿一年四月

螢火夏夕窗雪冬
讀書月日幾重重
忽知戶隙白駒過

(二)

揮手今朝去從容

(三)

留者行人刻限鐘

偏懷千萬此遺蹟

一端心緒一言賦

多幸可歌籠舌鋒

(一)

筑紫涯平陸奧衝

海山縱隔汝與儂

不離不滅互眞意

共盡神州八百峰

(二)

書読む月日幾重々

知るは戸の隙白駒過

手拂り今朝去從容

(三)

〔螢の光・漢譯詩三首連作〕 訓説・七五調

〔晋書「螢雪之功」〕

〔莊子「白駒過隙」〕

〔李白「揮手自茲去蕭蕭班馬鳴」〕

の明かりで読書（学問）に励み、後年宰相と大臣に大成し善政を敷いたという。

(b) 掛け詞

「いつしか年もすぎの戸を開けてぞ今朝は……」この文章は「いつしか年も過ぎ」と「杉の戸を開けて」、更に「（夜が）明けてぞ今朝は……」の一ヶ所が「掛け詞」。なお「戸」が唐突に出てくるが次の故事を引いている。莊子「人生天地之間若白駒過隙忽然而過」。即ち隙は戸の隙間である。白馬が戸の隙間を駆け去る程の短かい時間が、人生の長さに等しいという。後世、白樂天も詩に引用している。

(b) 「心のはしをひとことにさきくとばかり……」この文章は「心の緒を一言に」と「心の橋を人毎に」と二重の掛け詞とみるべきであろう。

(b) 「陸の奥」と「陸奥」とが掛け詞。

(c) 「限り」とは「今日限り」の意。

(d) 「心のはし」とは「心緒」（心持ち、情緒）および「友人との心の橋」。

(e) 「さきく」とは「幸いに、平穀無事に（副詞）」。

(f) 筑紫は①福岡県地方。②九州一円。ここは②である。なお訓読みは「つくし」と訛るのが一般的。

(三) 留る者も偏へに懷ふ一端の心緒幸多かれど

筑紫の涯て乎か陸奥の衝おこし①衝おこし②突き当り。海山うみやまたとひ隔つとも汝と儂とを隔つとも不離不滅なる共に尽くさん

歌う可し舌鋒籠めて歌う可し

原詩作詞者＝稻垣千穎

典＝阿部徳一郎、今井巖「日本の詩情」全音楽譜出版社。漢字、仮名等原作そのものではない。

螢の光

（二）

螢の光 窓の雪あゆみ④ふみよむ月日 重ねつついつしか年も すぎ戸戸をあけてぞ今朝は 別れゆくとまるも行くも 限りとてかたみに思う ちよろずの心のはしを ひとつことに

（二）

前項「仰げば尊し」で述べた如く、同じ頃に作られた姉妹曲だが、こちらは作詞者が判明している。

歌詞については「七五調」で、やはり漢文脈の趣きある古文。随所（五ヶ所）に「掛け詞」の修辞法がみられる等和文の伝統も重視している。

(a) 螢の光 窓の雪（螢雪の功）の出典

車胤「夏月以練囊盛數十螢火照書讀之以夜繼日」孫康「家貧無油嘗映雪讀書」（晋書）。春秋時代、晋の車胤と孫康は、貧しくて灯油が買えず、一は螢の火、一は雪

さきくとばかり 歌うなり

（三）

筑紫のきわみ 陸の奥みち①海山遠く へだつともその眞心は へだてなくひとえにつくせ 国のため

【解説】

一、漢詩について

形式は七言絶句の三首連作。

押韻、平仄等全て近体詩の規則（三四不同二六対、下三連同韻禁、四孤平禁、冒韻禁、同字重複禁〔除意識的使用〕）に拠る正確の詩。

二、原作について

前項「仰げば尊し」で述べた如く、同じ頃に作られた姉妹曲だが、こちらは作詞者が判明している。

歌詞については「七五調」で、やはり漢文脈の趣きある古文。随所（五ヶ所）に「掛け詞」の修辞法がみられる等和文の伝統も重視している。

(a) 螢の光 窓の雪（螢雪の功）の出典

車胤「夏月以練囊盛數十螢火照書讀之以夜繼日」孫康「家貧無油嘗映雪讀書」（晋書）。春秋時代、晋の車胤と孫康は、貧しくて灯油が買えず、一は螢の火、一は雪

さきくとばかり 歌うなり

（三）

筑紫のきわみ 陸の奥みち①海山遠く へだつともその眞心は へだてなくひとえにつくせ 国のため

【解説】

一、漢詩について

形式は七言絶句の三首連作。

押韻、平仄等全て近体詩の規則（三四不同二六対、下三連同韻禁、四孤平禁、冒韻禁、同字重複禁〔除意識的使用〕）に拠る正確の詩。

二、原作について

前項「仰げば尊し」で述べた如く、同じ頃に作られた姉妹曲だが、こちらは作詞者が判明している。

歌詞については「七五調」で、やはり漢文脈の趣きある古文。随所（五ヶ所）に「掛け詞」の修辞法がみられる等和文の伝統も重視している。

(a) 螢の光 窓の雪（螢雪の功）の出典

車胤「夏月以練囊盛數十螢火照書讀之以夜繼日」孫康「家貧無油嘗映雪讀書」（晋書）。春秋時代、晋の車胤と孫康は、貧しくて灯油が買えず、一は螢の火、一は雪

（漢詩の流れ52・清その一）①錢謙益

一六一六年、明が亡び女眞族の後裔滿洲族の清朝が成立した。一九一二年の辛亥革命で滅びるまで、およそ三百年の歴史を持つ王朝である。最初は後金と称した。清朝は絶対多数の漢人を統治する為、中国文化を尊重し、漢人学者や知識人を優遇した。蒙古族が漢人を抑圧した歴史を踏み反面教師としたのである。

この故に学術芸術は未曾有の発展を遂げ、詩に於いても唐詩の流れと宋詩の流れとを咀嚼した多くの詩人を輩出した。順治帝（康熙帝）（一六四四～一七二三年）統治の清初には、錢謙益と吳偉業の二人の明朝高官だった老詩人がいる。一時清朝にも仕えたので売国奴と揶揄されたが、もしたが文名は高い。

錢謙益（一五八一～一六六四年）字は受之、号は牧齋。江蘇省の人。明滅び福王が南京に独立した時礼部尚書になつたが、清軍に攻められ降服しそのまま清朝に仕えて礼部右侍郎となつた。この裏切りで非難されたが、その学問、詩文の優れていたことは否定しようがない。

柳枝（四首の内一首）

離別經春又隔年 離別して春を経またとし又年を隔へだつ

搖青漾碧有誰憐 青を搖るがし碧を漾わすも誰か憐れむ

春來羞共東風語 春來つて東風と共に語るを羞またとく

背却桃花獨自眠 桃花に背却して独り自ら眠る

（柳よ、お前と別れて春が過ぎ、また年も変つた。）

あい変らず緑波を揺るがせ漾わせているお前を、誰が
いとしんでくれようか。

春來たつて、春風は話しかけるさえ羞すかしく、
お前も私も桃の花に背を向けたまま独り眠つてゐるあ

りさまだ
罷免され故郷に帰る途中での作。時代に翻弄される自
からを憐れむ内面的な詩である。

舟中

断岸蘆抽白

断岸 蘆は白きを抽し

斜陽蓼褪紅

斜陽 蓼は紅を褪ぐ

舟行秋色裏

舟は秋色の裏を行き

人在水聲中

人は水声の中に在り

掠燕經殘雨

掠燕 残雨を経

吟蟬晚風

吟蟬 晚風を趣す

陰蟲休切切

陰虫 切々たるを休めよ

已是白頭翁

已是れ 白頭の翁なれば

(断岸には芦が白い穂をのぞかせ、斜陽の中で蓼の紅が
色褪せてゐる。舟は秋景色の中を行き、人は水音の中に
居る。燕は降り出した雨の中を掠めて飛び、蟬の声にせ
きたてられて夕風が起る。秋の虫よ、切ない声で鳴く
のはよしてくれ。私はもう白髪の老人なのだから)

特別寄稿

竜馬さんへ

(編集前書き)

池辺瑞姫

池辺瑞姫さんは小学校四年生の女子生徒です。坂本
竜馬が大好きな、幼い歴女です。夏休みの読書感想
文が寄せられましたので、ご披露いたします。

竜馬さん、こんにちは。今の日本は竜馬さんが夢見た
国になっていますか？

今、日本はカンパニーをやりまくっています。けいざ
い問題やかんきょう問題、世界では争いをしている国も
まだあります。日本の国は身分の差別ではなく、世界と
ぼうえきをし、血を流さないゆたかで平和な国です。こ
れも竜馬さんが強い日本、開国への道を開いてくれたお
かげだと思います。

また、現代ではテレビというものがあり、歴史上の人

物をえがく「大河ドラマ」という番組があります。今年
の主人公は竜馬さんで、今すごいブームになっています。
身分差別がどこよりもきびしかった土佐藩の、下士の家
に生まれた竜馬さんの人柄や生き方、日本を一つにまと
め、大きな歴史の流れを作ったことで、竜馬さんにあこ
がれている人やファンが日本や海外にたくさんいます。

私が歴史をとても好きになつたのも、竜馬さんの本を
一年生の時、読んでからですが、また竜馬さんに会いた
くなり本を読みました。

十二になつても寝小便が治らず、勉強もダメで、泣き虫だつた竜馬さんの、才能を見ぬいた乙女姉さんやお父さんは、すごいですね。

(人の心をやさしくする、太平洋の様なおおらかさと底知れない深さ。竜馬の中には、みがけばかがやく玉がある。それは世界を照らす玉である)

と乙女姉さんは思えたそうです。

私も乙女姉さんのように、人の才能を見ぬく目を持ちたいと思いました。

武市半平太さんや岡田以蔵さんのような大切な友のしさえがあつて、竜馬さんは幸せだなと思いました。家族や親友の支えは、竜馬さんの強い心の柱になつたと思いました。私にも、大切な友達や、いつも支えてくれる家族がいます。だから竜馬さんの持つ心の強さは、少しづかります。

竜馬さん、あなたを暗殺した犯人は、決定的なしょうことなく、いまだにわかつてない本には書いてあります、だれですか？これからもつと活躍する竜馬さんを暗殺した人がとてもにくいです。ぜつたに私はゆるせません。もし、タイムマシーンがあつたら、一八六七年の十一月十五日、暗殺者よりも早く、京都伏見の近江屋に行つて、竜馬さんや中岡慎太郎さんを助けたいです。そして歴史をぬり変えてみたいです。

最後になりましたが、私は竜馬さんが大好きです。

私の町今昔ものがたり

勝山道子

出来るという噂がひろまつた。

陸軍が買収にかかり半強制的に地主に印を持って来る様にと云われて、役場で買収面積に印して、買収に応じた事になつた。

畑 一坪 五十銭

水田一坪 一円五十銭

全買収面積 六十万坪

全買収価格 六十萬円

すべての買収が終り昭和十三年から工事が始まつた。

これ等の記録は 昭和十八年六月二十三日 福島県会津城下町より十名その他 田島 喜多方 郡山いわき白河と 六十八名が多摩製造所に入所し それぞれの部署についた。終戦で一たん帰郷されたが ここに勤務された方と結婚後現在 多摩市に住まわれている 私の友人富永さんの標題

堂々としていて、強くてやさしい。私も、竜馬さんのように生きて生きて、生きまくる人生が送りたいです。大きな夢に向かつて前に進みつづけた強い心が、かつこいいと思いました。

私は竜馬さんのように、とてつもなく大きな夢はありませんが、大人になつたら歴史の先生になりたいです。竜馬さんのように、真つすぐりに生きて、いろんな人と出会い、たくさんの人と感じて、今よりもずっと大きな人になりたいです。そして、竜馬さんのようにすばらしい人たちのことを、子どもたちに伝えられる先生になりたいです。

夢に向かつてがんばります。

昭和八年頃 私の夫の両親つまり、義父母は 東京の中央線にある中野に住居を構えていた。両親は 福井県出身であった。

ここもだんだん都市化して來たので、ここを離れて田園のあるもつと広々とした処に、やりたいと思つていた。丁度お隣りの方が 東京府の農事試験場の場長で立川市へ勤務させていたので何かと相談されて、候補に稻城村と云う処を紹介された。義父母は何度か土地を見に行き、多摩川等眺め田園の多い 農村で気に入り、昭和九年 早々に決めたとの事だった。

田園を埋め立て整地に手間取り 家の新築 庭の整備等で引越が完了したのは昭和十年 三月末であった。

昭和十一年の二、二六事件以降誰云うとなく 東長沼の新住所の隣の部落つまり大丸の谷戸橋から蓮光寺の春日神社までの下り一里「大丸山」一帯 谷戸橋から二〇〇米位奥にあって 街道からは見えない処に 弾薬庫が

多摩製造所 回顧 戰後五十年を振りかえつてのなかにある。

東京第二陸軍造廠多摩製造所

一九三七年（昭和十二年）稻城村に火薬製造所を建設することになった。

板橋製造所より多摩製造所へまわされた人を中心には昭和十三年六月には工員募集が始まり多摩村稻城村近辺の人々男女合せて二十数名が採用された。第一次募集の工員は技術習得のため板橋製造所で四ヶ月の訓練を受けて多摩に配置された。その後第二次以降募集工員が増えていった。昭和十三年一月多摩の作業が開始された。

昭和十四年十月一日東京第二陸軍造兵廠多摩製造所として独立した。

昭和十四年十月一日より第一次徴用工員～第四次徴用工員が國家総動員法の施行により徴用されて入職して来た。これらの徴用工員は主に都内の遊休産業の労務者サービス業理容師 板前 吳服店等平和産業従事者の若者たちであった。徴用工員は全員男子寮に入寮し宿泊の若者たちであった。徴用工員と同様に訓練を受けた。

第一工場 第二工場と建設され、昭和十八年六月から八月末迄に突貫工事で第三工場が建設された。第三工

職員 七九人

一般男	五七九人
一般女	三五四人
徴用工	二五三人
学徒	八二〇人
合計	一、〇八五人

TAMAレクリエーションセンター

東京第二陸軍造兵廠多摩製造所跡地は現在米軍に接収され米軍横田空軍基地の米軍人及びその家族のための「TAMAレクリエーションセンター」と呼ばれてゴルフ場並びに宿泊施設 乗馬に利用されている。朝鮮戦争の時はアメリカより送られてきた弾薬を野積にしたまま、横田基地へ送られる中間基地としての役割を果たしていた。多摩製造所跡地に事務所第一工場は建設後五年の現在も残っている。私達の手の届くところに存在している。

然し「安保条約」によって米軍に接収され アメリカの権限が存在するところなのである。他の建物はなくなり米軍専用のゴルフ場となつている。

而し多摩製造所から一K近く離れた本部事務所 男子寮、女子寮 食堂 浴場 官舎は 東京都の土地であつたので 敗戦後外地から 引揚げた人の引揚寮に改造し満州 中国朝鮮からの引揚寮として活用し 又東京大空襲の焼け出された方々の住宅としてずい分活用された。

第四工場の建設 第四工場の建設についてはそれにかかわった人でもこれが第四工場と呼ぶことは知らされていなかつた 現在多摩市東部に作られたのである。

三万平方メートルの土地を地主より借地して横穴式地下壕をつくつた。昭和十九年六月に始められ 翌年 昭和二十年五月に完成した。建設の目的は 火薬を安全に保管することであつた。この建設にあつたのは 工兵隊 二百名他 建設会社松村組支配下の三百～四百名の朝鮮労務者 府中刑務所の囚人も参加した。

一つの横穴は入口二メートル位 奥行四メートル程で全部で六十四の横穴を作つた。

横穴式地下

横穴式地下壕を作るのに入口に木型を入れ これが腐らない様に コールタールを塗る工事を 学生動員の学生達がしていた。

この横穴式倉庫に 終戦の日昭和二十年八月十五日以降 火薬を工場より運び入れすべての横穴式倉庫は火薬でいっぱいになつた。後日米軍が進駐して来てこの横穴式倉庫は現地で爆破された。

東京第二陸軍造兵廠 多摩製造所は 昭和二十年の終戦を迎へ火薬工場としての役割を修了した。

終戦時における多摩製造所の職工員数

その後行政の対応によりこの引揚寮は都営住に変り今日に到つてゐる。

私の家も義父母の夢だつた田圃の中の一軒家も十六メートー道路 駅前からの十八米の道路 丁字型の頂点昭和四十年代から田圃の用水は廃止され当然道路に添つて住宅は 蜜集して来てまさに都市化である。

対照的に六〇万坪の多摩弾薬庫跡地の米軍地はしつかりフェンスで囲まれ ゴルフ場 入口の一部を除けば樹木が繁茂しまさに樹海の如き 様をなし景観を卓している。

これが現代の状況である。

終り

河童の初恋（二）

鍋屋次郎

チーがジュニア将棋大会に優勝した三日後、北森村には新聞社の社旗を翻した黒塗りの乗用車が終日走っていた。

車は、北森小学校、北遠高校北森分校、北森村役場、宮川伸一宅と取材に駆け回っていたが、分かったことは「宮川ちずこは戸籍上も学校にも宮川宅にも実在しない」。宮川伸一はある日突然姿を消して、本人からの北遠高校北森分校木口先生宛のメールでは河童と一緒に生活をしているとのこと。逃げ出すことを再三試みたが、不可能であったこと。勉強は続けており、道真進学通信塾では相変わらずトップクラスの成績を収めていること』。『北森村では宮川伸一の救出について何度も協議をしたが、河童の生息地が分からず、救助の手立てがつかめない』。

その頃、伸一は渓流のやや上流に湧きだしている温泉に浸かりながら、針葉樹の緑と、透き通るような紅葉と、どこまでも青く澄み渡っている晚秋の空との美しいコントラストを眺めながら、自分自身が河童世界から人間世界に戻ることと、将棋界との関係から、チーが河童であることをいつまで隠し通せるか、これからどの様にするのがいいか、一人考えていた。

樵小屋へ戻るとチーが待っていた。オンバから「河童は神の湯に浸かつてはならない」と河童全員に命じられているので、伸一が温泉に浸かるときだけはついて行かなかつた。

将棋連盟からチー宛にプロ六段との対局申込みがきていてチーは行きたがっていたがオンバが許さないのでまだ回答をしていない。伸一の顔を見ると直ぐ

「伸一さん、この前テスト対局をした柴田六段との対局ができるようにオンバ様に一緒に頼んでください」と言いながら、いつの間にか伸一の胡座の中に入つて甘えていた。

「オンバは、チーをそう何度も人間に変化させるわけには行かないからダメと言つていてるのだろう。パソコン対局にしようよ。チーが人間世界に行かないで対局できるならきっと許してくれるよ。今からお願ひに行こうよ」と立ち上がり、チーと一緒にオンバのいる洞窟へ向かって歩き出した。

「北森村の宮川伸一さんの自宅ですよ」の答えに「受取人の宛名は」と聞くと「宮川伸一さんとちずこさん宛の連名で出しています」と、至極当然のことと答えた。

ということは、宮川伸一の両親は、息子である伸一と郵便物受け渡しをしていることになる。担当者は直ぐ宮川家に電話したが、父親は「郵便物は受け取っていない。伸一とは村長と高校の先生がパソコンで通信ができるだけだ」と答えるのみで要領を得ない。

翌日静岡日報は担当者を北森村に派遣したが、伸一の両親の答えは昨日の電話での答えと同じ。嘘をついているとは思えない。

その二日後、将棋新聞に
「天才美少女『宮川ちずこ』柴田六段とパソコン対決！
決定！」

の見出しに続いて
「四日前に郵便で申し込んだ回答が、兄の宮川伸一氏からメールで回答がきた。対局は十二月一日午前九時から」と書いてある。

これを読んだ静岡日報は直ぐ将棋新聞社に、出した手紙の宛先を尋ねると

郵便局に行き配達員にも聞いたが
「そのような手紙があつたかどうかは記憶にもないし、そのようなことは個人情報でもあり答えられない」とのことで話が前に進まない。
そこで北遠高校北森分校の木口先生を訪ねたが
「伸一との連絡は全てパソコンのメールで行つていて、郵便が着くとは思つてもいないので出したことはない」

との返事。

配達された郵便物は、宮川家では受け取っていない。しかし、宮川伸一は受け取っている。いくら考へても、この不可解な事実は謎のまま。帰社してもこのままでは上司から

「そんな馬鹿な！子どもの使いではあるまいし。お前は何をしに行つたのだ」
と言わることは目に見えて いる。

そこで記者は再度北遠高校北森分校に木口先生を訪ねて、伸一宛のメール発信をお願いした。メールは「静岡日報記者の桑原弘明といいます。私は貴方と宮川ちずこさんにお目にかかりたく、北森村に来ましたが、貴方の住んでる河童の世界とはどこなのか、誰も知りません。だからお訪ねすることはできません。しかし、貴方の自宅住所を記載した貴方宛の将棋連盟からの郵便物を、あなたのお父様は受け取つていないと仰ついますが、貴方は受け取つていて、柴田六段と宮川ちずさんのパソコン対局を応諾している。また、貴方は道真進学通信塾には毎回トップの成績を收めている。貴方の住んでる河童の世界とはどこなのか、郵便物をどのようにして貴方は受け取つているのか、その辺りのこと教えて頂きたい。自分のメールアドレスはここなので、是非

返信して頂きたい」との内容であつた。

暫くして静岡日報は、河童の世界に住む宮川伸一探索式は洞窟の中で行われ全員三十二匹が参加している。それぞれが草花で綺麗に編んだレイを、雌は花嫁の、雄は花嫁の首に掛けて祝福している。

オンバが中央に進み出て何か話している。河童言葉で伸一には分からぬ。隣に座つてゐるチーの通訳で「今、キューとマーは夫婦になつたことを宣言する。この二人にも河童の撃は守るように話してある」といつた結婚の宣言であつた。

伸一はチーに
「河童の撃つてどんな撃？」
と聞くと
「夫婦が、他の雄または雌と姦淫したら死罪」と答えた。

ているのでしょ。朝まで帰つてこない」と意味ありげな微笑みを伸一に投げていた。

夫婦全組が出ていたのを見届けたオンバが、伸一とチーを自分の部屋に招いた。

「伸一さん、お願いを聞いてくれますか」

とオンバが真剣な口調で切り出した。

「できることは・・・」

との伸一の言葉に、オンバは

「お願いということは、伸一さんに後一年と少し河童の世界にいて欲しい。高校三年になる春三月までいて下さい」

ここまで言つて伸一を見つめ

「この前教えて貰つた将棋で、河童全員はルールを守ることがどれだけ必要で、また、ルールを守ることによつてどんなに楽しい遊びができるのかが理解できたと思う。今度は百までの算数でいいから、足し算、引き算、掛け算、割り算を教えて頂きたい」

傍らに座つてこれを聴いていたチーは

「伸一さんがいなくなるの、いや」と泣き出した。オンバは無視して

「伸一さんが東京の立派な大学を出て、この村に帰つてきたときは、河童全員で歓迎します。伸一さんの生涯をオンバはここから見ていて、応援が必要なときはどの様

な応援でもします。私の願いはこの河童社会が、伸一さん協力して貰つて少しでも向上することです。伸一さん、お願ひします」と頭を下げた。伸一は

「ここでは、同じ年齢の人間同士の交わりも競い合いもできない。高校三年になる前にそれなりの受験勉強したいし、運動、特に野球の投手としての練習もしたい。ここではそれができない」

これを聞いたオンバは、立ち上がって籠を持ってきて「これは東京駒場にある東京大学入学専門塾の入塾許可証、これから毎月テキストとテスト問題を送つてくる」そして、更に籠の中から野球のグローブとキャッチャーミット、スパイク、それと新しい硬式野球ボールを何個か取り出し

「体格のいいゴンザにキャッチャーをさせるから、毎日二時間でも三時間でもピッチングの練習をしなさい」

といつて、「あつ、それから大事なことがあった。伸一さんは高校一年の半分と高校二年を学校に行つていないことになるから、県立高校が三年編入を認めないかも分からぬ。私は伸一さんのことは大歓迎するでしようけれど。来年一月十五日にある文部科学省の高校卒業程度資格認定試験を受験して下さい。受験資格は満十六才から受験できる。これに合格しておけば、例え高校に行かなくても

というものの。

北森村では、北森村長、木口先生、伸一の父親、静岡日報の桑原記者が集まり、救出方法がない状況の中で、伸一が高校三年進級前に戻つてくることと、河童社会の中にあっても勉強と運動に留意しながら生活している様子に安心もした。

郵便局が宮川家のポストに配達した郵便が、どうして河童世界にいる伸一の所に届くのかの確認のため、郵便配達員が宮川家の郵便受けに郵便物を入れるとき目立つように、静岡日報が大きめのブルーの封筒で伸一宛の手紙を出した。翌日郵便配達員が宮川家の郵便受けにその大きめのブルーの封筒を投函するところは確認したが、暫くして行つてみると、その封筒は郵便受けにはなかつた。

どうして郵便物が姿を消してしまうのか、郵便受けを取り除いて直接家人が受け取るようにしたらどうか、などいろいろな意見が出たが、北森村長が

「今、伸一が元気に勉強も運動もしているのだから、伸一の人間社会との接点となつてある郵便の授受を邪魔することは止めよう」との提案でそのままになつた。

大学受験はできる

これらを見て、伸一はオンバの先回りした準備の良さに呆気にとられていた。

伸一は、傍らで泣きじやくつているチーにどの様な声をかけていいか分からぬ。ただチーを見つめているだけの伸一を見て、オンバが

「チー、伸一さんが東京の大学に行つても、必ず会えるようにするから安心していなさい」となだめたが、泣きじやくつは止まなかつた。

翌日、木口先生と静岡日報に伸一からのメールが届いた。内容は

「高校三年が始まる前、多分三月には人間世界に戻ることができそうだ。それまでは道真通信進学塾と東京駒場の東京大学進学専門塾の通信課程で勉強する。入塾許可も出ている。高校二年の教科書の全てを送つて欲しい。野球は硬式野球ボールでピッチングの練習を始めた。捕手は河童。高校卒業程度認定試験を来年一月に受験しておこ。これは高校で卒業認定ができなかつた場合の対策。河童世界での生活は後日送信する」

翌日の将棋新聞はもとより、静岡日報も「天才少女 宮川ちずこ、プロ柴田六段を破る」の見出しで、最初から最後までの差し手を解説しながら大きく報じていた。但し、宮川ちずこは本人の届出先の宮川伸一宅の戸籍にも記載がなく、北森小学校にも在籍しておらず、所在不明の少女であり、全ての連絡は河童と生活をしている宮川伸一がパソコンで行つてゐる。その場所は静岡県中西部奥の北森村近くではないかといわ

チーのパソコン将棋対局は、オンバのいる洞窟にパソコンを持ち込み、ジュニア将棋大会の優勝賞品の漆塗りの将棋盤上にパソコン画面を再現し、柴田六段とチーが駒を動かすごとに、パソコン画面が変わり、同時に音声が「6四歩」のように流れた。これは柴田六段の指し手は将棋連盟から即時に伸一のパソコンに送信され、チーの指し手はその逆に、伸一のパソコンから即時に将棋連盟に送信された。

マーとキュー夫妻が伸一と共にチーの傍らで見守つてゐる。中盤で、柴田六段は持ち駒全てを使つて攻め続けたがチーの逃げは柴田六段の読みを上回り逃げ切つた。そこでチーの持ち駒が圧倒的に多くなり、それに対する自陣の守りの手薄さを確認した柴田六段は投了した。初日が朝十時から夕五時まで、続きが翌日の十時から行われ午後三時に終わつた。

れているが分からぬ。」

と報じられていた。

オンバと伸一は、将棋界でチーがいつまでも所在不明の少女では困るので、あと四回のこつて「人間変化」を全て使つて、今年のジュニア大会に伸一と出席させることにした。

そこで、伸一が静岡日報の桑原記者宛、「宮川ちずこは河童の世界にいる。自分が河童の世界で出会つた唯一の人間であり、物心ついたときは既に河童に育てられていた。人間の言葉も将棋も自分が教えた。将棋を教えてみて、将棋ルールを理解した後の戦術組み立ては二、三ヶ月で自分を追い越してしまった。これは彼女に天が与えた才能であろうと思う」とメールしたから、この情報が静岡日報を通じてあつという間に全国に流れ、伸一のメールには全国から問い合わせが殺到した。

翌年のジュニア将棋大会も宮川ちずこが昨年に引き続く連続優勝で幕を閉じ、熱海のホテル「海洋荘」で谷山八段との対局が行われようとしたとき、将棋界識者から「住所も分からぬ。学校にもいっていない。出生も分からない。ジュニア将棋大会でも、どこから会場に入ってきたのか、いつの間にいなくなってしまったのか、言

北森村長は、学校を訪ねる都度木口先生から伸一の成績を聴き、我が事のように喜び機嫌で帰つていった。

伸一が禪を木の枝に掛けて、渓流に湧いている温泉に浸かっているとき、チーはオンバの命令に背いて、そつと足音を忍ばせて傍らの平らな岩までやつてきた。

それに気がつかない伸一は湯から上がり、持つてきたタオルで体を拭き、岩の上に胡座をかき、湯が噴出する岩の片隅の、硫黄で黄色くなつてゐる所を眺めていた。

突然、胡座の中にチーのお尻が入つてきた。驚いた伸一は倒れそうになつて両手で思わずチーを抱きしめた。両手はチーの成熟した乳房を抑えていた。

禪をしていない伸一は、チーのお尻のやや冷たい柔らかさに心地よさを感じていた。伸一の両手はまだ乳房を抑えたまま。一方、チーは禪をしていない直接伝わつてくる伸一の感触に動けないでいた。

伸一は暫くしてチーを胡座から下ろして、立ち上がりて禪を締めた。

その夜、東京の東大専門進学塾の問題集を終えて、電

うなれば神出鬼没。このような少女をただ将棋が強いと言つたところから、チーは夜以外の全ての時間、伸一の傍にいた。オンバをはじめ河童全員に、チーの恋は見え見えであつた。

伸一は投手としての練習を続けた結果、球速はめきめきと速くなり、河童のゴンザのミットに当たる音が重く響き、伸一は球速が百五十キロは出ていると感じていた。

河童たちの算数は簡単な加減算は既に終わり、目下算数の九九に挑戦していた。オンバの計画、最初に将棋を通してルールを守らなければならないことを教えたことが効を奏し、全員が算数に挑戦して競い合つてゐる。算数の数字の書き方呼び方は、将棋と同じように、人間の書き方呼び方で行つてゐる。

北遠高校北森分校の木口先生は、校長の承認を得て高

気を消して藁布団に寝たが、夜中に少し冷たい柔らかなものが触る感触で目が覚めた。

するとそれは伸一を抱きしめるように腕を回した。

「伸一さん、今日はどうしてもここに来て傍にいたかった。洞窟をそつと抜け出してきた」と小声で言つて、体全体を重ねてきた。

チーが伸一を迎えるには時間がかかるなかつた。

そのあとチーは

「ねー伸一さん、来年三月に人間界に帰つても、チーは必ず行くからね。オンバが行かせてくれなかつたら、死んでしまうから」と涙声で言つていた。

明るくなる前にチーは戻つていつたが、その日は終日オンバはチーに話しかけなかつた。

北遠高校北森分校校長室では、校長、木口先生、村長でもあり北森村教育委員長でもある北森優作の三人が朝から協議を重ねていた。

「校長先生、宮川伸一は自分の意志でなく河童世界に拉致されてしまつたのですよ。そして逃げ帰ることを何度

も試みて、失敗を重ねて不可能だと判断したのですよ。それにもかかわらず勉強は続けて、立派な成績を維持しているのですから、県の教育委員会にその旨を話して、宮川伸一が戻つて来たときに、出席日数については不問に付し、無条件で高校三年に進級させようではありませんか」

との村長兼教育委員長の言葉に、校長は

「村長さん、出席日数が不足しても当北森分校としては進級を許可する旨の申請書を私が書きますので、村長さんは村の教育委員長として、私と一緒に県の教育委員会に二人でお願いしましよう」

ということになり、校長は受話器を取り、その場で県の教育委員会担当者に三日後のアポイントを取つた。

その頃、来年度のジュニア将棋大会の計画段階で、将棋界として「宮川ちずこ」のことが問題になつていた。先の谷山八段との対局が流れしたことから、将棋界の有識者から

「宮川ちずこは、ジュニア将棋大会参加申請書に記載している小学校に在籍していない、宮川伸一の妹と称しているが宮川家の戸籍には記載されていない、北森村役場には出生届けもなく住民票もないことは判明している。この点を宮川伸一とちずこに郵便とメールではつきりす

るよう指示しているが回答がない。天才といわれるほど将棋が強くても、宮川ちずこ自ら素性を明らかにすることを条件として、ジュニア将棋大会事務局は対応すべきだ」「宮川ちずこの出生と居住場所を明らかにするように。それまでは一切の公式対局への出場は認めないとの内容証明郵便が届けられた。

伸一はオンバと三日間話し合つた結果、将棋連盟、静岡日報宛メールを発信した。

「自分は今河童の世界に住んでいます。ここがどこなのかは分かりません。何度も逃げ出すことを試みましたが、全て失敗に終りました。そのあと頼まれて河童に将棋を教えたところ今では全員が将棋を楽しんでいます。中でもチーという雌河童の覚えが早く、盤上で先を読み通す力は計り知れないものを持っています。この雌河童が宮川ちずこで河童年齢は六歳です。人間の少女ではありません。河童社会の中に靈的な能力を持つた老雌河童がいて、河童を人間に変化することができます。そして河童次元の世界では河童でも人間でも瞬時に異動できます。うまく説明が付きませんが、漫画『どちらもん』の「どこでもドア」と同じと考えてください。自分もその力で人間界から河童世界に連れてこられたものと思いま

す。河童は将棋を覚えたことにより、相手を認め、ルールを尊重することができるようになり、小さい社会ながら共同の社会生活を営むことができるよう成長しました。簡単に言えば、社会生活を営むために最低限必要な、相手の言うことを理解し、自分を抑えて待つことができる、この力を身につけました。また、現在は百までの数字で加減乗除に取り組み、あらかたの河童が九九を理解し言えるようになつてきました。これにより河童社会の精神構造は動物から人間に近づく飛躍的成长がもたらされるものと思います。これらは先に説明した靈力を持つた老雌河童の発案です。自分はそのために河童世界に連れてこられたようです。自分はそのために河童世界に連れてこられたとき、もつと詳しく報告することができると思います。

どうか、河童社会を暖かく見守つてください。そして河童将棋との交流を今後とも宜しく御願いします」

のメールに、デジカメで撮つた大勢の河童が将棋を指している場面と、伸一と一匹の雌河童がパソコンに向かっている写真が添付されていた。その雌河童には「宮川ちずこ」と矢印で説明されていた。

翌日の静岡日報と、提携している全国紙ニッポン・タイムズは一面に

「将棋界の天才美少女『宮川ちずこ』は六歳の雌河童だつた!」の見出しで、伸一からのメール全文と伸一のメールアドレス、添付送信された写真二枚を一面に掲載していた。

その日は伸一宛のメールは引きも切らず、パソコン受信トレイに表示された受信数はアツという間に三百を越し、河童が将棋をするなど考えてもいなかつた将棋連盟もまさに驚天動地。

(続く)

目耕録（その一）

— きだみのる著『にっぽん部落』を読む（岩波新書、一九六八年） —

目耕・自分で紙田を耕す。読書することを警えていう（『世説新語』）

山本鎮雄

山村に暮らす

きだみのる（一八九五—一九七五）は本名を山田吉彦と言い、本名でフランスのエミール・デュルケームの論文集『社会学と哲学』、revイ・ブリュールの『未開社会の思惟』、アンリ・ファーブルの『昆虫記』、マルセル・モースの『太平洋民族の原始経済』その他を翻訳した。

その間、山田は慶應義塾大学を中退後、フランス政府の給費留学生としてパリ大学でデュルケーム学派の泰斗モースから民族学と古代社会学の指導を受けて帰国した。きだみはジョゼフ・コットが創設した東京のアテネ・フランスでフランス語とギリシア語および社会学を教え

ながら、アルバイト（知識人の）としてフランス語文献の翻訳に専念した。

山田は東京・本郷の東大前の借家で暮らし、そこに来た東大生とその仲間にフランス語や社会学を教え、日中戦争の頃には学生は三十名に上った。さらに、山田は山中湖の東大合宿所などで学習会を行い、その後は食料増産のために農村に動員された学生の要望に応えて、東京府南多摩郡恩方村辺名部落の無住寺・医王寺を借り、夜間に私塾を開設した。

ところが、アジア太平洋戦争下の学徒出陣・動員によって学生・生徒は戦場や兵舎、軍需工場などに駆り出されたため、私塾は永くは続かなかつた。その後、彼は本

郷の借家に住み、東京大空襲に備えて医王寺の庫裏に内

縁の妻と子供を疎開させた。戦後、家族に替わって庫裏に住みつき、当地でフランス語文献の翻訳のかたわら、十四戸の小さな山間部落とその周辺の村人の生活や意識を参与観察した。

文豪・徳富蘆花は、当時は純農村の世田谷の千歳村柏谷に都落ちして、晴耕雨読の生活を始めた。柏谷に定住して六年目に短文集『みみずのたはこと』（一九一三年）を上梓した。「田園生活のスケッチ」は好評を博して洛陽の紙価を高め、ロングセラーとなり、耕地四千坪を買ひ増し、書院一棟を建て、「柏谷御殿」とはやされた。山田は、「美的百姓」（趣味としての百姓生活）と自嘲した蘆花とは異なり、野良仕事はせず、山村で翻訳と觀察に専念した。彼は辺名部落の村人から「じぐまぐれ」（怠け者の意味）と陰口を叩かれながら、部落の慣行や組織、村人の生活や意識を克明に觀察した。その後、全国各地の農村を歩き、辺名部落が部落として「純粹」であること、しかも都市を含む日本社会の「原型」であり、かつ「縮図」であると提唱したのである。

「気違い部落」シリーズ

フランス語文献の翻訳家として著名な山田は、「きだみのる」（木田稔）というまったく無名なペンネームでユニークなドキュメント『気違い部落周遊紀行』（一九四

八年、初出は『世界』四六年九・十月号）を上梓した。その翌年、本書は毎日出版文化賞を受賞した。

戦後の混乱期に本書に感激した文学青年の開高健は、いささかペダンチックな趣きがあるが、古代ギリシアや中世フランスの知識を巧みに織り混ぜ、「精神の爽快」と「明晰な精神」という文学的な美德を感じ、きだみが「精神の貴族」だと思ったと言う（開高健「自由人の条件」、『人とこの世界』所収）。

受賞に氣を良くしたきだみは『気違い部落紳士録』（一九五〇年）、『気違い部落の青春』（一九五八年）、『東京気違い部落』（六〇年）、『気違い部落から日本を見れば』（一九六八年）その他の一連のシリーズを出版し、特異な文明批評を展開した。

きだみはフランス語版に翻訳されることを予定し、シリーズの決定版『にっぽん部落』（岩波新書、六七年）を出版した。その際、日本の部落という人々の群れ（「村」と同義）の英語翻訳語として、Village（村落）、Community（共同体）などは不適切で、部落の発音に即して Brakあるいは Braqueを使用したいと提唱したが、きだみの数種の「著作文献目録」に当たつたが、同書のフランス語版は記載されていない。

今や「気違い」や「部落」は差別語として定着している。ちなみに「部落」は「広辞苑」では、①一般的な概念として「村の一部」と記述され、さらにそれから派生

した②特別の概念として「被差別部落」が記述される。ところが、きだは偏見と差別の意識、つまり②の意味で一連の書名に採用したのではない。

ユーモアとエスプリの精神

ただ、きだにはフランス的教養のユーモアとエスプリのサービス精神から東京近郊の八王子恩方の山村部落にたいして、いわば斜に構えて「気違い部落」と表現したのである。しかも、きだに部落の情報を伝えた世話役たちを「英雄」とか「勇士」と称したが、これもまたきだに特有の諧謔の精神に由来したのである。

きだの一連の「気違い部落」ものは、社会学的に言うと、部落（集落）という小規模な地縁集団の参与観察に基づく比較分析だろう。とは言え、現地の登場人物の語り（会話文）を特有の訛り言葉で再現し、読者に特異なノンフィクション小説という印象を与えていた。ところが、後に述べるように、内容的に読むと、果たして虚構をまじえず、^{フラン}事実を忠実に伝えたノンフィクション小説かどうか、いさか疑問が残るのは否定出来ない。

私は村落社会学の特異なドキュメントとして友人から『氣違い部落周遊紀行』を読むことを勧められたことがある。ところが、きだは村人を露骨に面白おかしく表現しているという不愉快な印象をもち、途中で放り出した

ことはある。三好京三は、「子育てごっこ」（一九七六年）で晩年のきだの岩手における奔放と放縱な行動の一端を描き、文学新人賞と直木賞を受賞した。

岩手県僻地の小学校教師の三好は「老作家」のきだを

「老画家」と称して、「世の中に苦渋をまき散らして八年間を暮らしてきたような醜怪な老画家」、「中古自動車に同乗させ、小学校の年齢で無学籍の愛娘ミミの」德育を決定的に欠けさせた元凶の老画家」と描いている。私は「子育てごっこ」を読み、きだの「気違い部落」ものと「さよなら」することにした。

中途半端な畠仕事の体験から

私は退職を契機に妻の実家の畠で週一回、農繁期は一泊二日（今年は酷暑のため昼間は畠に出られない）で、二泊三日に延長した）、農閑期は日帰りの野菜作りを始めた。テレビでの「晴れ」の天気予報を見て、JR中央線に乗り、山梨県東部の桂川沿いの河岸段丘の平坦地の畠に出かけた。

ゴルフやウォーキングは健康と趣味のために最適だろう。野菜作りはそれ以外に自然の恵みという収穫の楽しみがある。畠で胡瓜やトマトをもぎ取り、塩をふりかけ、かぶりつくと、甘みがあつて最高に旨く、元気を回復する。ところが、野菜作りも四年目を迎え、鍬を振り上げると、すぐに息が上つて腰に痛みを覚える。そこで、丸

「部落の原型」と称された辺名部落と大差はない。そこで、きだの『にっぽん部落』をあらためて「雨読」することにした。

『にっぽん部落』を雨読する

きだは、山村の辺名部落を中心にして戦後日本の農村部落をレポートした。辺名部落は空襲の被災を免れた。戦後初期、史上空前の凶作にもかかわらず、辺名部落は戦時から強制された食糧管理法に従い、部落を上げて食糧の供出に応じた。ところが、食糧の欠配と遅配のために食糧難に陥り、ジャガイモの収穫まで飢餓が深刻化し、わずかの米に大量のせりなど山菜を混ぜ、オジャヤを常食とした。

戦後初期、GHQにより日本の非軍事化と民主化の一環として農地改革が進められた。その結果、地主制のもとで形成された親方／子方の身分階層制、村落共同体の規制、家父長制的な「家」制度は大きく変容した。

きだは村人の幸福は「物豊かで、それを買う錢こそ稼げ、駐在がうるさ過ぎず、税の安い世の中」と強調している。きだの幸福論は自作農の創設という農地改革と矛盾するものではないが、戦後の農地改革について一切言及していないのは、誠に奇妙な感覚である。

おそらく、きだは逆説的に表現したのであろうが、「終戦の大混乱のときでも、部落は過去と同じように、

静かにその日その日を繰り返していた」と言う。都市に限らず、農山村は家族や親族を頼つて都市被災者や引揚者とその家族、さらに復員兵が出身地の農山村に殺到した。農山村では史上空前の人口が増加した。しかも食料品の調達のために都市住民の「買い出し」が殺到した。おそらく、東京近郊の僻遠山村の辺名部落もまたこれまで経験したことのない「戦後の大混乱」に直面した。このような時期、平穏にその日その日を暮らしたと言うのは、きだの最大の創作上の作話的表現だと思えてならない。生活再建のために、大多数の国民は「静かにその日その日を繰り返す」余裕など全くなかった。

砂川闘争は条件闘争だったのか

きだは、「にっぽん部落」の第二章「奇妙な时限」でアメリカ軍立川飛行場の拡張をめぐる砂川基地闘争（一九五五—六九年）に触れている。砂川町は五日市街道沿いにあって、飛行場の拡張問題がマス・メディアで盛んに報道された。拡張反対の町民・支援者と警官・機動隊の衝突が必至と見られた当日、きだは報道班の腕章をつけ、取材記者の案内で、激突が予測される近くの盛土の木立の中で見物した。

きだが見たのは、都労組のマークをつけたメンバーが警官隊の侵入を阻止するためにピケラインを張り、労組のリーダーがマイクで盛土で見物している群衆に向かつ

て、第二ビケに加わるように要請したが、誰も動かなかったと言う。そこで、きだは「砂川の反対運動は都労組と都の警官との戦いで村の者とは関係がないように見える」と、その印象を書いている。

砂川闘争は「先祖伝来の土地を守る」、「土地に杭を打たれても、心に杭は打たれない」をスローガンに、砂川町民が組織した「基地拡張反対同盟」が主体となり、砂川町、町議会の支持、労働組合や全学連の支援を受けた歴史的な反基地闘争だった。

表現の詐術

同行した取材記者が「われわれがどんなに反対運動を支持して世論化しても、結局は地価の吊り上げに終わるだろう」と語る意見にたいして、きだは全面的に同意した。支援労組が組合員を動員し、基地拡張を強硬に反対すれば反対するほど、政府（調達庁）は天井値で補償金を支払うだろうと言うのである。

その夜、きだは辺名部落に帰り、馴染みの居酒屋に立ち寄り、そこに居合わせた部落の世話役と意見を交わした。きだの疑問は、盛土で見物している群衆が、なぜ、ピケ隊に加わらなかつたかという点だつた。世話役は「都労組のリーダーがあらかじめ砂川の親方や世話役に話しを通しあけば、町民はピケに参加しただろう」と言ふのである。

きだは、そのように話す世話役の説明に全面的に賛同した上で、砂川闘争を見物して帰つて来た若者に向かつて、「あるのは、地価の吊り上げだけだぜ。……進歩だと、米帝反対などは地価吊り上げの道具にしているだけさ」と、砂川闘争の結果を断言した。きだが「にっぽん部落」を擱筆したのが、一九六七（昭和四二）年で、そのほぼ十年以前の一九五六（昭和三）年に政府（調達庁）は基地拡張のための測量を中止した。その後、米軍は立川基地から全面的に撤退した。

ノンフィクション作家のきだは、自らの認識と予言がはずれても、それを訂正する勇気を欠いているだけではなく、きだに同行した取材記者や井の中の蛙の世話役に、いわば狂言回しをさせてまで自説に執着した。きだが「表現の詐術」を弄して書き著わしたのは、論壇における彼の特異な立場と無関係ではなかろう。

「村八分」同然の扱い

きだが辺名部落を中心に全国各地の農村部落で観察されたことは、部落は十一十五戸で構成される地縁的小集団であり、この小集団を円滑に運営管理するには「親方」あるいは「世話役」というリーダーがいて、「平」がいる。さらに部落の意思を決定する総会では多数決によらず、全会一致主義による。しかも部落には「殺傷するな」「盗むな」「放火するな」「村の恥を警察に知らせ

部落への基本的な認識不足

すでに触れたように、私は退職を契機にJR中央線で週一回、妻の畑に通い野良仕事に励む、いわば中途半端な「晴耕雨読」の生活を始めた。我が家では本読みと物書きで暮らし、そのため鈍った身体を畑で酷使したが、寄る年波には勝てないことを痛いほど知つた。ところで、

「目耕録　その一」では徳富蘆花「みみずのたはこと」（岩波文庫、一九三八年）を取り上げたが、この得体の知れない怪物の著作に共感しながら、きだ自身は本当に村落社会を認識していたのかどうか、疑問を感じるようになつた。

すでに触れたように、きだは「部落の親方或は世話役が支配できる戸数は十五、六軒に止まる」と強説している。そもそも、きだが住んだ辺名部落は世帯数十四、耕作面積二町一反。「人の篤農家の耕地面積は一町五反で、そのうち一町を自作し、五反を西隣りの部落の村人に小作地として貸している。残りの一町六反を十三戸の農家が所有し、平均すれば、一戸あたり自作地は一反余りに過ぎない。親方／子方（自・小作人）は庇護・奉仕（支配・依存）を相互に確認し、それは必ずしも部落内で成立するものではない。

ところが、世話役は部落の総会などで選出（現在、圧倒的に輪番制である）。され、部落の運営管理にあたり、複数の部落の体育會や演芸会、部落単位の親睦会などのイベントを行なう一方、行政機構の下部組織として市報などの配布に協力している。かつて世話役はときに「平事搜し」に奔走したが、今や世話役がそのような面倒を見ることは珍しい。

すでに触れたように、きだは「部落の親方或は世話役が支配できる戸数は十五、十六軒に止まる」と強調したが、親方が実質的に庇護できる子方の戸数は、小作地として貸せる面積によって左右される。辺名部落の西隣りの小作地は五反であるから、親方が子方に平均して一反を貸しても、五戸に過ぎない。

きだの誤解は親方と世話人を概念的に区別せず、部落のリーダーとして親方と世話役を無造作に並記したことである。私のさきやかな農村の経験と知識をもとに、「にっぽん部落」で記述された事実に異議を申し立てたい。つい最近、私が通う部落で親方／子方が世代を超えて約束で耕地の貸借関係を結んでいることを小耳に挿み、驚いたことがある。村落研究と言えば、本家／分家、親方／子方、血縁関係や地縁関係その他を明らかにしたところが、経済の高度成長期に農村も大きく変わり、本家／分家関係を始め、その他の関係や意識も大きく変容した。農村の摩訶不思議な出来事について理解を深めることは決して醉狂ではなかろう。

- きだみのる著『にっぽん部落』（岩波新書、一九六七年）
- きだみのる著『気違い部落周遊紀行』（富山房百科文庫、一九八一年）
- 新藤謙著『きだみのる』（リブロポート、一九八八年）
- 星紀市編『砂川闘争50年 それぞれの思い』（けやき書房、二〇〇五年）

花

吉田忠雄

平成22年6月23日

私は、昨年まで定職についている間は桜を除いて花に

対してあまり関心を持っていなかつた。それまで桜に关心を持つていたのは、寒い冬が過ぎて暖かくなり桜の花が満開になってその下で酒盛りができたからである。しかし、昨年定職を退き、時間の余裕ができて今年の春になると、桜以外の花にも関心を持つようになつた。義務的な時間の束縛がないと心の余裕もできて美しい花を見るなど楽しいからである。

まずは、近所にある県民健康福祉村に散歩に出かけそこに咲いている花を楽しんだ。また自宅の庭に咲く花も楽しむようになった。桜に関しては、既に元の勤務先足利工業大学の千本桜、風と光の広場の桜、足利千歳町の夜桜、隅田川の桜、上野の桜、千鳥が淵の桜、小金井公園の桜、越谷の桜、などを楽しんだ。越谷には、綾瀬川堤、元荒川堤、県民健康福祉村、出羽公園など多くの桜

の名所がある。

3月末の桜に始まり、それから5月にかけては多くの花を見て楽しんだ。3月27日（土）には火薬学会関係者の月例会を伊東の日本化薬寮で開き、翌日は伊豆高原の桜を楽しんだ。4月3日（土）には県民健康福祉村に行き、遊歩道を散策して満開の桜を楽しんだ。

4月4日（日）には足利工業大学の岡平理事長と私の共催で足利工業大学風と光の広場で花見大会を行つた。大勢の招待客が集まつた。私の関係では、東大の旧吉田研究室OBと火薬学会関係者が集まつた。その中の一部は、恒例によつて2次会、3次会に流れ、足利のニューミヤコホテルに泊まつた。

4月9日（金）には、自転車で越谷市内の桜を見て回つた。自宅から西に向かうと綾瀬川に出る。対岸は見渡す限り満開の桜並木である。堤を川に沿つて左に進む。

対岸の桜並木は尽きないが、出羽堀を左折して堀に沿つて進む。南部浄水場のところを斜めに右折し、照蓮院の先で元荒川右岸に出る。ここを左折すると中央市民会館の立派な建物がある。この二階でミルクコーヒーを飲んで小休止した。

ここを出て元荒川沿いに上流に向かって進む。越谷市役所を過ぎて越谷流山線の道路を進んだ。やがて桜が満開の元荒川桜堤に達した。文教大学付近の元荒川桜並木は見事なものであった。文教大学の学生たちが大学前の河川敷で花見を楽しんでいた。羨ましく思った。それから元荒川フジバカマ公園に行きひと休みした。ここも桜が満開であった。その先の梅林公園にも行つた。いくらかの梅の花が咲き残り、数本の桜が満開であった。

4月11日（日）今度は学生主催で足利工業大学風と光の広場で再度花見大会を催した。外部招待客は火薬学会関係の人たちであった。再度温暖な好天に恵まれ、桜も散り始めていたがなお満開であった。親友の米田、橋爪の両氏と甥の豊は再度この花見に参加した。そして2次会までやつたが、今度は足利に泊らずに帰つた。

4月12日（月）顧問をしている菅生の細谷火工（株）に行く。工場内の桜は満開であった。火工品工場でなければ近隣の住民に公開して楽しんでもらつたらよいと思われるが、業種の関係で無理であろう。

4月21日（水）東武線茂林寺駅でおりて館林郊外の

人が記念撮影したいといわれるので、みんなで記念撮影させてもらつた。

それから両側に花壇を配した館林のメインストリートを皆で歩いて進んだ。途中に皇后陛下のご実家である正田邸があり、その外壁にも花が飾られていた。その向かいは皇后陛下が子供のころ通われた小学校で、その道路沿いは花壇となっていた。

しばらく行くと市役所への取り付き道があり、そこには立派なつづじが咲いていた。市役所の前にはレスリングの記念碑があつた。兵頭さんが館林高校3年生の時館林高校はインターハイで全国制覇を成し遂げた。その当時兵頭さんの弟子であり1年生であつた小幡（旧姓上武）洋次郎さんは後に東京とメキシコのオリンピックにおいてレスリングパンタム級で2度金メダルを獲得している。

参加者は市役所を見学し、兵頭さん手配の屋形舟に乗り込み、各家庭で作った持ちよりの手料理に舌づみをうつた。沼には名物の鯉のぼりが多数空を舞つていた。船からつづじの名所つづじが岡公園に上陸し、つづじを見物した。

5月5日足利織姫神社の神事に参加したのち、足利フラワーパークを行つた。足利フラワーパークはふじで有名である。各種のふじを楽しむことができた。最初に目についたのはピンクがかつた紫ふじである。ついで咲き

始めの白ふじである。上のほうから咲き始めていた。

つぎは、大きな鉢植えで紫ふじと薄紫ふじが並べられていた。そのつぎはおおきな紫ふじの下に白い花が配されコントラストの妙を示していた。つぎは紫ふじの集落で岡の上からでないと全容を見ることができない。この場合も前面に赤い花を配してコントラストを与えていた。次有名なふじ棚をみたが残念ながら満開になる前であった。池のそばの巨木の紫ふじは満開であった。

足利フラワーパークには各種のつづじが植えられており、華やかに咲いていた。パーク内には池があり、この池には、ピンクと白のつづじが規則正しく植えられた四角い島が作られている。

私は最近花に关心を持つようになってから花に関する3冊の本を読んだ。第一は牧野富太郎『花物語 続植物記』ちくま学芸文庫、2010である。牧野富太郎先生には1952年に私が東大1年生の時に予備校時代の友人に連れられてご自宅を訪れ、お会いしたことがある。ここにこして相手してくださつたことを覚えている。

この本を読むと、ここにこして私たち若者の相手をしてくださつた先生の印象とだいぶ異なることが書いてある。この本の中では先生は長年にわたつて研鑽を積まれた植物学の第一人者として、間違つたところに対しても呵責ない批判をしておられる。軽い気持ちで花に興味を持ち始めた私はうかつにはこの道には入れないと思つ

「野鳥の森ガーデン」の芝桜を堪能した。広い敷地一面にピンクの芝桜が咲いている。まずはこの景色に圧倒される。ここでゆつくり椅子に座つてこの景色を楽しんだ。さらに先に行くと紫芝桜に変わり、ホピーの小道を進むと、薄紫芝桜、青芝桜が現れる。

せつかく芝桜を楽しんだので、余韻の冷めないうちにと久しぶりに根津権現のつづじを見に行つた。神社の境内は赤、ピンク、白のつづじが咲き乱れていた。遊歩道沿いに見事な白つづじの大きな株があつた。

一日きれいな花を楽しんだのち、夕方東大での会合をこなし、浅草の神谷バーでビールと電気プランを飲んでもらひ、兵頭夫人、室内とともに記念の写真を撮らしていただいた。

5月1日私たち夫婦は東武電車で館林に向かつた。館林駅では今回の行事の主宰者の兵頭三郎氏の夫人が私たちを出迎えてくださつた。駅前には綺麗な花壇があり、駅前から延びる歴史の小道には色鮮やかな花々の花壇が作られていた。間もなく安楽岡一雄館林市長の夫人が来られ、兵頭夫人、室内とともに記念の写真を撮らしていただいた。

館林駅前広場で参加者と待ち合わせ正在り、偶然に向井千秋宇宙飛行士のお母さんがおられ、市長夫人と話をかわされた。私もかつて宇宙開発委員会の安全評価部会長をしていたので、なんかの会で向井千秋さんとお母さんにお会いしたことがある。ごあいさつした。皆さん

た。

その後八坂書房編『花』よみ花だより』2003という本を神田の古本屋で見つけ購入した。2000円の定価の本が1000円であった。この本は便利な本である。1月1日から12月31日まで365日に割り当てて季節の花が写真入りで解説されている。自宅の庭や外で見た花を見た季節で探すと出てくる確率が高い。この本で花の名前を知るようになることを期待している。

長岡求監修『色と咲く順でわかる 花の名前辞典 最新品种十人気の花々460種』長岡書店、2008を自宅近くの本屋で買った。目次は、小さい花のカラー写真で作られ、花の色と咲く季節で分類されている。本文では、1ページにひとつまたはふたつの花がアイウエオ順に並べられ、写真と解説がのっている。これから折に触れて読もうと思っている。



写真5 文教大学付近の元荒川桜並木



写真6 「野鳥の森ガーデン」の芝桜



写真7 根津権現のつつじ



写真8 館林の道路沿いの花壇



写真9 足利フラワーパークの藤とつつじ

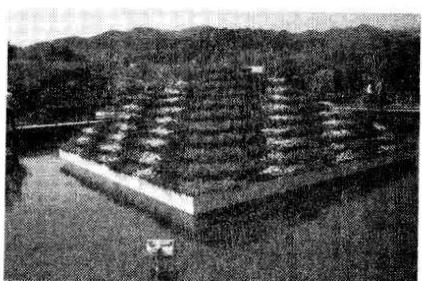


写真10 足利フラワーパークのつつじ島

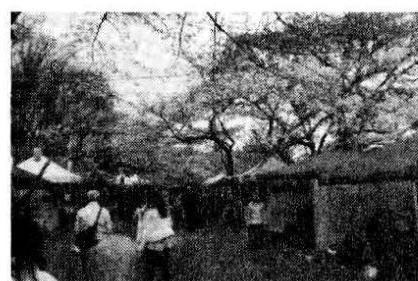


写真1 伊豆高原の桜



写真2 県民健康福祉村の桜並木



写真3 「風と光の広場」の花見大会

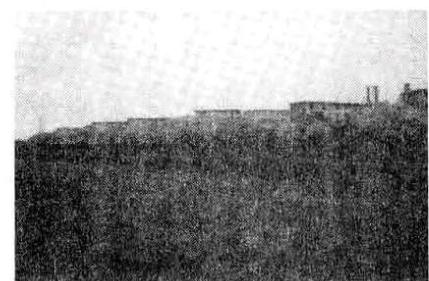


写真4 自宅付近の綾瀬川堤の桜

二八に帰るすべもなし（二）

—愛する北国のひとに寄せて—

伊治哲

星

修平はリヤカーを引きながらふと思つた。

（オレは今、今までの寮生活から脱け出すことばかりに気をとっていたが、もっと大事なことを忘れていたのではないか。下宿を探すのはいいが、それに必要な財布の工面ができるのだろうか。身のほど知らずに、自分の都合だけにこだわりすぎているのではないか……）

今までの寮の生活はなんとかやりくりができてきただ。僅かながらも父からの仕送りがあつた。中途から育英資金貸与の恩恵にもあずかることができた。そのおかげで学費と寮費はまかなうことができた。その他の必要な費用はアルバイトで稼いだ。家庭教師も続けてきだし、時には金沢球場のアイスキャンデー売りまでやつた。

たい。——

父は、修平と同じ中学を三〇年前に卒業した先輩でもあつた。卒業後、学費免除の恩典があるため多くの人が希望した京都師範学校へ進み、郷里の小学校の教師になる道を選んだ。

しかし、父は父なりに初めかなり高い志を抱いていたようである。かけだしの青年教師の時代から、玉川学園（東京・町田。現在の玉川大学の前身）の創始者、小原国芳師が主唱する「全人教育」に傾倒し、夏休みの度に学園を訪ねて教えを請うてきた。上京すると必ず玉川学園での体験を、目を輝かせて修平たちに聞かせてくれた。

それは、教師は生徒を対等な人格者として接し、学校教育は生徒の知識や成績だけを上げるためにではなく、生徒一人ひとりがもつ長所を引き出し、それを大きく育てるための場であるというものであつた。幼い修平たちにはちょっとむづかしかつたが、父のひたむきな話を聞くたびに、修平は眩しいような尊敬の念で父を見詰めたことを思い出す。修平たち兄弟にとって、父はわが家の誇りであつた。

机上には「全人教育」の月刊誌が山と積まれ、「和顔愛語」「教育とは子供を愛することなり。いづくんぞ子供の欠点の看破者たる勿れ」といった、師自筆の色紙や

寮の生活費は極端に安かつたからどうにか凌ぐことができたが、下宿となるとそうはいかない。世の中は戦後のインフレの波に洗われているのだ。そのうえ、教職追放の身にある父からの送金は、ここのこところ途絶えがちになつてゐる。

修平は思った。（父はこの頃どうしているだろうか）歩きながら父の温和な顔が目の前に浮かんできた。

この夏、半年振りに帰省してからまだ二ヶ月もたつていない。修平の父は面長、長身で、見るからに教師然とした偉丈夫である。その父がこの夏は妙に沈んでいるよう見えた。教職を追われたことを気に病んでいるのかもしれない。修平の弟妹たちもこのことについて多くを語りたがらなかつた。

——ここで、修平の父についてどうしても触れておき

扁額を部屋に掲げてわが信条としていた。教職に身を奉ずることが自分の「天職」であると、よく聞かされたのはこの頃のことである。

父をして、小学校教師の道を「天職」といわせたのは、理由があつた。

それは、山村のどんなに貧しい家の子でも、子供に玉川学園流の全人教育を施していくば、かならず優れた個性をもつた人格に育てあげることができるという信念であつた。

そのころ、こんなことがあつた。

当時、多くの教え子たちが卒業や入学のたびに父に喜んでもらおうとわが家を訪ねてきた。その中で帝大の角帽をかぶつた青年が、足繁く父を訪ねて來たことがあつた。来訪の度に、修平に国語や算術の勉強を教えてくれ、修平は「角帽のお兄さん」といつて慣れ親しんだものである。父はその青年を「高橋、高橋……」といつて、いつも目を細めて喜び迎えていた。お互に交わす話し振りからも、師弟というより親子の間柄のように思えたものだ。

その「高橋」なる青年は、父が師範学校を出てホヤホヤの教師になりたてのころの教え子であつた。貧しい農家の長男であつたが、山村の小学校高等科を卒業して、父の助言で町の酒屋に丁稚奉公しながら苦学力行、独学で中学卒業の検定試験（専検）に合格した。親の反対を

説得して、東京物理学（現在の東京理科大学）に進学し、遂には東京帝大の工学部を卒業したのであった。父にとつては、多くの教え子のなかで最も将来を期待した逸材であった。

それにもかかわらず、激しさを増した戦争が彼を徴兵し、あたら有為な青年の命までも奪つてしまつたのである。修平のかすかな記憶のなかに、凛々しい陸軍将校の軍服をまとつてわが家を訪れた時の青年の姿が、おぼろげながら残つている。出征を前に父との最後の別れに訪ねてきたときのことであつたのだろう。

しかし、戦死の報を父は決して信じようとはしなかつた。いつまでたつても、「高橋、高橋・・」と言つて、今にも自分の目の前に帰つてくるかのように自慢話の種にしていたものである。

父は、自分の夢を多くの教え子一人ひとりに託していたのである。

修平が、当初父の「天職」をそのまま引き継ぐことになんの疑いももたなかつたのは、そのためでもあつた。

それだけに戦後、軍国主義教育者という名をかぶせられたうえ、一片の退職金にも恩給にもあずからず教職を追われたことに強い憤懣を抱き、以来他からの就職斡旋はすべて辞退していた。やむなく、自ら求めて保険の代理店の仕事や、自分自身の娘が通う新制高校の事務員にしていていたものである。

修平はようやく思い直して、一歩一歩重い足を運んだ。辺りに夕闇が迫つてきた。北国の中天に、いくつかの星が瞬きはじめた。

修平はようやく思い直して、一歩一歩重い足を運んだ。気がつくと、賑やかな商店が並ぶ片町通りから一步入った細い裏通りに入り込んでいた。途中、それとおぼしい家々を二、三当つてみた。しかし案の定、修平のぶしつけな求めに応えてくれるところはなかつた。

それはそうであろう。古びた学生服に破れ帽子、それにリヤカー一台の全財産。四高生といえば多少のことは大目に見てくれるこの街の人も、さすがにこの闖入者はよくよく辟易したものとみえる。

片町から豊町通りの商店街を抜け、犀川を跨ぐ桜橋に辿りついた。

犀川沿いには、室生犀星が幼少期から青年期を過ごしたといふ「雨法院」がある。修平が金沢に来て最初に訪ねたところだ。犀星の詩や小説に親しんでいた頃が、なにか遠い昔のことのように思い出された。

ここから町の西郊、寺町の高台に出るには、ダブル坂ともドッペリ坂ともいわれるジグザグの急勾配の坂道を登らなければならぬ。修平は力を振り絞りながら、喘ぐようにリヤカーを引き上げていった。

かすかに空腹を覚え始めた。ひと休みする。温もりのある家の灯りが洩れて、どこからか琴か三味線らしい音

まで身を落としていた。小なりとはい、小学校の校長まで勤めた立場からいえば、どんなに無念の思いをしたことであろうか。

口にはいつさい出さなかつたが、晩年になつて父が最も苦しんだ時代であったと思う。

また、修平のすぐ下の妹は、学制改革を機に高等女学校を三年で中途退学し、看護婦養成所に転じて自活の道を選んだ。一家の家計を考えることであつたのだ。修平には心配をかけまいと、全く知らされてはいなかつた。後にそれを聞いて、修平はなお一層家族への深い罪の意識に沈んだ。

考えれば考えるほど、去寮を決断したことが、親兄弟の苦労を考えない、いかにも軽率で無謀な行動であつたのではないかと、後悔の念に胸を締めつけられた。

修平がリヤカーを引きながらふと立ち止まつて思わず身震いしたのは、こんな良心の呵責と寂寥感に襲われたからもある。

（だがここまでくれば前に進むほかない。当つて碎けるだけだ・・）

修平はそういう性癖をもつていた。やや危なつかしいところがある、と自分でも思つてゐる。

だが事態はもうここまで進んでしまつてゐる。修平は、自分で叱咤するようにもう一度身震いをした。

色が聞こえてきた。どこかで聞いた覚えのある「六段の曲」のようだ。この時代でもこんな雅な世界があるので、修平はしばし耳をそばだてて聞き入つた。さすがに城下町の風情だ。

いやさてよ。そういえば、この近くにはたしか色街があると聞いてゐる。道理でそれとなく艶かしい空気が漂つてゐるはずだ。とんでもないところへ迷いこんでしまつた。修平は慌ててリヤカーを引っ張つた。

坂を登りきつて寺町の市電通りを渡る。この辺りは寺が多い。妙法寺と読める山門に、いちょうの大木が黒い影を落としている。寺の土屏のかたわらを抜けると、そこは閑静な住宅街だった。「茶畠」の小路」という町名らしい。それほど広くもない通りに人影はほとんど見当らない。そのうえ、どの家もどつしりと落ち着いて立派な門構えである。

とても下宿屋風のたたずまいではない。もつと下町風で開放的な家並みを予想していた修平は、さすがに門を叩くのをためらつた。半ば諦めて踵を返そうとした。しかしここまで来て、一軒もぶつかつてもみないで退散するのはいかにも口惜しい。

（当つて碎けるだけだ）

例の開き直りの気分がまた湧いてきた。

修平が立ちどまつた小路の目の前に、ひどく静まり返つた一軒の住まいが目に入った。

重々しい門構えに松の枝振りが夜目にも見事である。邸宅といつていいであろう。表札を覗くと「澤村」とある。

やや威圧感を覚えたが、勇を鼓して表門の引き戸に手をかけた。高屏に遮られて外からは窺えなかつたが、邸の中はあかあかと燈が灯つて明るい。

「こんばんは……ごめんください」

自分でも少し弱々しい声に聞こえた。思い切るよう、玄関に向かつてなんどか声をかけたが、返事がない。ちょうど夕餉どきなのであろうか。食卓を囲んでいる賑やかな笑い声が洩れてきた。

家の中の団欒がいかにも羨ましく、自分にはあまり縁がなさそうだと思われて、引き下がろうとした。すると急に笑い声が静まって、玄関の戸が静かに開いた。顔を覗かせたのは中学生と思われる少女だった。

「なにかご用？」

と少女は言った。修平はちよつとためらいながら口を開いた。

「わたしは四高生の館修平といいます。実は下宿を探しているのですが、この近くで心当たりはないでしょうか？」

「さあ……？ でも、うちは下宿屋ではありません

に、ホツと息をついた。

招じ入れられるままに、今度は神妙な面持ちで玄関をくぐつた。
広い玄関だ。上がり口に続く板の間もきれいで磨き上げられ、その上に分厚い絨毯が敷かれている。
和服姿の裾を慎ましく重ねあわせて、板の間にひざまづいた女主人に、修平は伏し目がちにようやく挨拶をかえした。

「夜分に申しわけありません。四高の学生です。館修平といいます。下宿を探しているのですが……。どこかお心当たりがあつたら教えていただけないかと思いまして……」

女主人は、いかにも申しわけなさそうに、しかしくぶん改まつた言葉遣いで詫びるようにそう言つた。

「そうですか。しかたありません。夜分にお騒がせして申しわけありませんでした。失礼いたします」

女主人がわざわざ出てきて話を聞いてくれたことに、人の気持の温もりを感じ、修平はそれだけで嬉しかった。結果は否であつたのに、救われたような気持になつて、

よ！」

細面で初々しい顔に似合わず、少女はうさんくさそうな目で冷たくそう言い放つと、玄関の戸をピシャリと閉めた。

「どうだろうな。

「よりによつてこんな時間に下宿を探しに訪ねてくるなんて、失礼だわ」

「やはりオレの了見が間違っていた」

少女はきっとそう思つたに違いない。修平は、閉ざされた玄関に向かつて、それでも軽く頭を下げた。

「そう思ひながら門の引き戸に手をかけた」

その時、修平のあとを追いかけるように、一段と華やいだ女の声が耳に入った。

「あら、どうしたの？ どなたがいらしたの？」

「学生さん……？ こんな夕暮れにどうしたんですか……？」

表門の扉に手をかけようとしている修平の背中に、半ば心配気な声がかかった。修平が返す言葉に詰まつてもじもじしていると、

「冷えるから、とにかく中へお入りなさいよ」と、打つて変わつた明るい声が修平をいざなつた。

修平はその声の主がこの家の女主人であるらしいこと

修平はふかぶかと頭を下げて再度玄関を出ようとした。

—— づづく

古い物・遠い夢

忠内正之

古陶閑話

「薩摩焼の沈香壺」

—沈香壺—古伊万里にある蓋付壺の一種で、高い瓶口があり、肩部が張り、裾に下るにしたがつてすぼまってゆく長めの胴部をもつ。（やきもの事典、平凡社刊）

沈香壺は学問上の名称ではない様である。美術商や好事家たちの間で長年に亘って使い慣らされた表現であるらしい。

なお又、加藤唐九郎の説は、次の通りである。

（原色陶器大辞典より）

襟が立ち肩が張つて腰の細いところなどはほとんどの普通の壺の形である。一六二七年（寛永四年）吉田光由の著わした書に「塵劫記」がある。三巻から成る和算の解説書で、数学の原理を日常生活に密着させて平

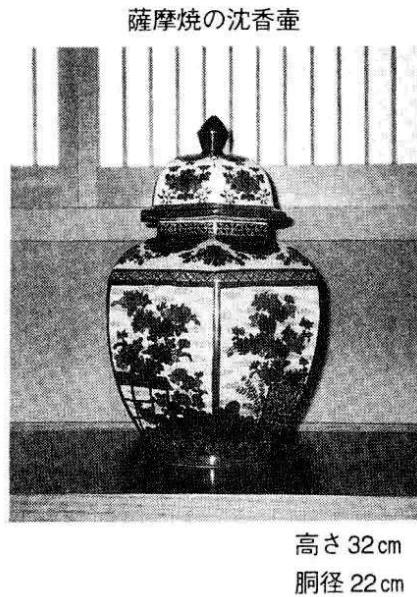
易に解明し、当時広く大衆の間に浸潤したものであるが、名称の上でのこの壺との関係は不詳。

この様に解釋は分かれる。唐九郎は異能の人物でその言動に独斷の多い点は否めないが、斯界の権威であり等閑にする説にはいかない。他にもいろいろ調べては見たが、算術と陶器の関係は判然としない。尤も筋は違うが、茶道の花入に“算木手”という焼物の型があるくらいであるから、何等かの関係があるかも知れない。今後の研究課題である。

私としては、沈香壺とは一般的の通説通り、伊万里その他の窯元で焼かれた、きれいな有蓋壺が沈香を入れるなどして接客用に飾られるのでこの名称となり、江戸中期以降ヨーロッパに向けて輸出され好評であった陶磁器の壺として話を進めたい。

（二）薩摩焼の沈香壺

私が探して手に入れた薩摩焼の沈香壺を次の写真で紹介する。カラー写真ではないのが残念であるが、見る通り上品で美しい壺である。



ある黒物が中心で、藩の御用窯のため品物が少ない。そして殆んど伝来品であるため現物に接することは至難で、美術館や図録等で鑑賞出来るのみである。市中に出廻ることは希である。

一方色絵の焼物は江戸後期や明治初年の出来が主体であり、華やかではあるが、茶陶とは縁遠い物として軽く見て来た。

だが今接するこの壺の美しさ上品さは何であろう。一目で魅了されてしまい、眼が点となつて離れない。

美術店は自家の備え付けで非売品だといったが、無理やり譲つてもらった。尤も代金支払を済ますのに苦労した。

さて、美術商に聞くところでは、この壺は沈香壺といふ飾り壺で、古伊万里の色絵磁器が十七世紀半、明の色絵に替つてヨーロッパ各地に輸出された時の花形商品が原形であることが解った。高さは一メートルにも及ぶ大作ものもあるという。ドイツのドレスデン、マイセン、フランスのセーブル等の窯場にも影響を与えて、現在も幾つか所蔵されているという。

薩摩焼も江戸後期には藩公の命を受けて、独自の色絵磁器を完成して幕末にかけてパリの万博等に出品し好評を得たというから、その頃焼かれた出来の良い沈香壺の伝世品ではないだろうかとの判断であり一応納得した。

自分の持物になつてからまだ間もない壺である。

当初美術商の応接室で見せられた時、これは京焼の出来かと思った。六面体の立ち姿で、落ち着いた黄白色の地肌に細かい貫入が出来ている。金襷手の絵付けが盛りつて美しい。菊と梅の花の吉祥文である。好ましい飾り壺であるが茶との関連は薄い。

古薩摩の茶陶は有名であるが、江戸初期までの出来で

さて、自分の所有物となつて満足したが、唯飾つて眺めているだけでは勿体ない。そこでこの美しい焼物の身元調査をしたり、薩摩焼の生い立ちから調べることにした。

と言つても、私が所有する古い薩摩焼はこの壺一点のみである。

しかも、薩摩焼の茶道具の本命は朝鮮陶磁の流を汲む黒物である。残念乍ら黒物の品は未だ私の手に入つてないし、あっても「薩摩焼」を語る資格は本当はないかも知れないと思う。

大國島津藩の庇護によつて歴史を重ねて来た薩摩焼きである。そして多様な種類の中で色絵も完成されたのであるから、調査、研究も簡単ではない。本稿はまだ不充分な内容となるが、先づ第一歩として進めたい。

(二) 薩摩焼について

薩摩の焼物はきわめて変化に富んでいる。「黒物」と総称される素朴な黒釉陶器、かつては藩主の専用品であった「白物」、豪華な「金欄手」「蛇蠍変」「三彩」「鮫肌焼」、そして豪華な「鼈甲焼」など、時代の変遷と共にさまざまである。

この多様さの故に、薩摩焼に対するイメージは、人によつてかなり違うようだ。欧米では、はなやかな錦手、

この朝鮮の役が、俗に「やきもの戦争」といわれるのもそのためである。
朝鮮からの渡来者には、陶工のほかに石工や木工など技術者もあり、薩摩藩は彼等を特殊技能者として優遇している。従つて渡来陶工は、いわゆる単純な捕虜ではなく、技術者の強制召致とでも解すべきではなかろうか。尤も、当時の薩摩藩は、朝鮮の役の巨額の出費、国内の反乱に加えて、関ヶ原の合戦の敗北によつて、義弘は敗残兵とともに命からがら帰国するといった状況であり、渡来者への援助も思うにまかせなかつたようである。従つて、渡来して数年間は彼らは衣食住にも事欠き、言葉も通じず不遇な歳月を送つたが村民の助けによつて次第に異国の生活にもなれ、秀れた作陶の力を發揮していくのである。

この優秀な朝鮮技術者たちが、わが国の窯業にもたらした功績は計り知れない程大きい。しかしその反面、多くの働き手を失つた隣国朝鮮が致命的な打撃をこうむつたことを忘れてはならない。直直りにはかなりの年月を要したのである。「文禄・慶長の役」、朝鮮ではこの災難を「壬辰・丁酉の乱」と呼んでいた。

朝鮮の役で薩摩に渡來した陶工の氏名、人数、上陸地については諸説があり、必ずしも一致していない。詳細は不明としかいわざるを得ないが、総勢は男女併せて七

金欄手が（本稿で紹介する壺）が「サツマ」であり、茶の世界では古帖佐（古窯の一つ）の茶碗や茶入が、また庶民の暮らしのなかでは黒い機能的な猪牙やからから（酒器の一種）の民芸品が……というぐあいである。

朝鮮陶工のすぐれた作陶技術を骨格に、有田、瀬戸、京都などからの意欲的に新しい手法を学んで、薩摩焼の内容は豊かになつていったのである。

(イ) 朝鮮陶工の渡来

薩摩の陶磁器の歴史は、秀吉の朝鮮出兵に加つた十八代藩主島津義弘が、多くの朝鮮陶工をつれ帰り、領内に陶器窯を築いたことにはじまる。

薩摩藩が朝鮮陶工をつれ帰つた目的は、藩主の茶道趣味と藩の産業振興のためであつたと思われる。当時の日本は、桃山時代の茶道はなやかなころで、藩主義弘は千利休門下の茶人でもあり、茶陶を領内で焼くことをつく望んでいた。この事は九州諸藩、長州の諸大名の場合にも同様であつた。

豊前の細川忠興、肥後の加藤清正、長門の毛利輝元など利休門下の茶人はもとより、片桐石州門下の茶人であつた平戸の松浦鎮信も、帰国後、茶陶の製作をこころみ、自藩の産業振興の一助としても窯業の発展をはかつたのである。

十余名、上陸地点は串木野島平、市来神之川、鹿児島前之浜の三地点のほかに加世田浦を加えて四箇所としておいて苗代川へ移動集結したといふ。
前述する様に、島津家は朝鮮出兵の後始末、天下分け目の大合戦であつた関ヶ原合戦の敗戦処理と大問題が山積していた。このため連れ帰られた陶工たちは保護されることではなく数年は異国の地で苦労の連続であつた。

薩摩焼の古窯跡は現在判明しているだけで五十余箇所に及んで分散している。その後庇護を受けることになつた島津藩主の居城の移動、陶工のグループや集落地などの関係で、苗代川窯業、堅野窯業、龍門司窯業の三大系統にわけられ、それに西餅田窯、平佐皿山窯を加えた五系統からの構成となつてゐる。

慶長所期からの長い年月の間薩摩焼は変遷と盛衰を繰り返して、また窯場相互の交流をもつてその発展の歴史を繋げて來たのである。

次に薩摩焼の種類についてみよう。

薩摩焼は、朝鮮陶工のもつ技術によつて始まつたために陶工たちの出身地や陶歴の違い、各窯が藩主用であつたか、庶民のための民需用であつたかの性格の相違、日

本国内諸窯業先進地からの導入技術（例えば瀬戸とか京都）の違いなどによって多くの種類の焼物が生産され、薩摩焼の多様性が生じたと思われる。

薩摩焼全体を理解するためには次の3種類にわけると分りやすい。

「白薩摩」

無色や淡黄色のひび釉（貫入）に覆われたもの、これに染付、京焼の影響が大きいと思われる多色の絵具を使用した錦手、さらに華やかな金欄手などの絵付を施した陶器で、鹿児島城下の堅野系の窯で発展し、江戸末になると苗代川（日置市東市来町）でも錦手や金欄手の作品が作られるようになった。

「黒薩摩」

黒釉、褐釉、飴釉などやそれらの組合せによる各種の色釉に覆われたもので、初期の古瀬戸の風格を持つ茶道具、朝鮮王朝の流れを汲み諸国の技術を取り入れた日用品を中心としたものなど多彩である。これ等は堅野系、苗代川系、龍門司系（加治木町）、西餅田系（姶良町）などの各窯で生産された。

「磁器」

白磁や染付、色絵のもので、肥前系の製磁技法の導入で始まつたが、磁器の原料は薩摩焼が生産される地域内には存在しておらず、天草から運ばれた。平佐系（川内市）が中心で、苗代川系の南京皿山窯、龍門司

薩摩焼が含まれていたのはいうまでもない。

薩摩焼全般については、今後更に実地調査を含めて研究を続けて見る心算であるが、改めて目の前の薩摩沈香壺を見てみよう。

“沈香も焚かず屁もひらず”とは、役にもたたないが害もないことの譬である。

どうも自分の人生を、言い得て妙に当てられている心地がしてこの譬を以前から気にしていた。しかしこの沈香壺は決して平凡な姿でなく端正な形をなしており、梅と菊と花籠が金彩をふんだんに使って盛り上つて美しい。壺のまわりと頸の部分には鱗文が金彩で細かく画かれている。

白薩摩釉は薄目にかかり、貫入の大きさが揃つた乳白色の素地に各種の色釉、金彩が用いられ格調高い、優雅な絵付けがされている。

高台内の銘文は同時代の製品と同様で作者のサインは無くただ「⊕薩摩」とだけある。

とり寄せた薩摩焼のカタログ写真の中に、私の沈香壺によく似た作品が載つており、「苗代川系、十九世紀後半」とあるので、この壺も同じ頃の同じ苗代川窯の製品であると確信が持てる。

前所有者によつて余程大切にされていたらしく無創で綺麗な姿で保たれている。キチンとした合せ箱には○○

系の弥勒窯・日本山窯などで磁器製品が作られた。

藩政時代の窯場の経営は直接あるいは間接に薩摩藩の庇護を受けて続けて来た。殊に幕末ではパリ万博やウイーン博等に色絵磁器を出し大いに名声を博した。また“さつま焼き”とは金欄手の代名詞となる程輸出面でも貢献した。しかし明治四年の廃藩置県以降は藩主の庇護も絶え他からの援助もなかつたので自主経営が厳しくなつた。

協同経営その他の工夫と努力で生き残つた窯元は県内に多く復活し、現在でも堅野系、苗代川系、龍門司系の流れを汲む伝統窯と、新しい技術、技法を修得した新興窯が存在して伝統の火を守り続けている。

（三）結びとして

さて、沈香壺一箇を取得したのみで、本来の薩摩焼の名品茶道具には到底手が届かない今まで薩摩焼の勉強を進めて見たが、結局対象が大き過ぎて、ほんの入口で留まつてしまつた。今更の様に大国薩摩の底知れぬ実力を改めて認識したところである。資料によれば、幕末のパリ万博（一八六七年）では、幕府と対抗して、幕府、佐賀藩とともに参加し、「薩摩太守政府」と称して幕府と対等の立場を宣伝したという。勿論その展示内容の中に

家と記入されている。

私はこの綺麗な壺を部屋に飾つて毎日楽しんでいる。いずれ茶会を開いた時、飾つて皆さんに見せたいものだとニコニコしている。なおまた薩摩茶陶の本命に対しても、いつの日にか挑戦したいものと野心を燃やしている。

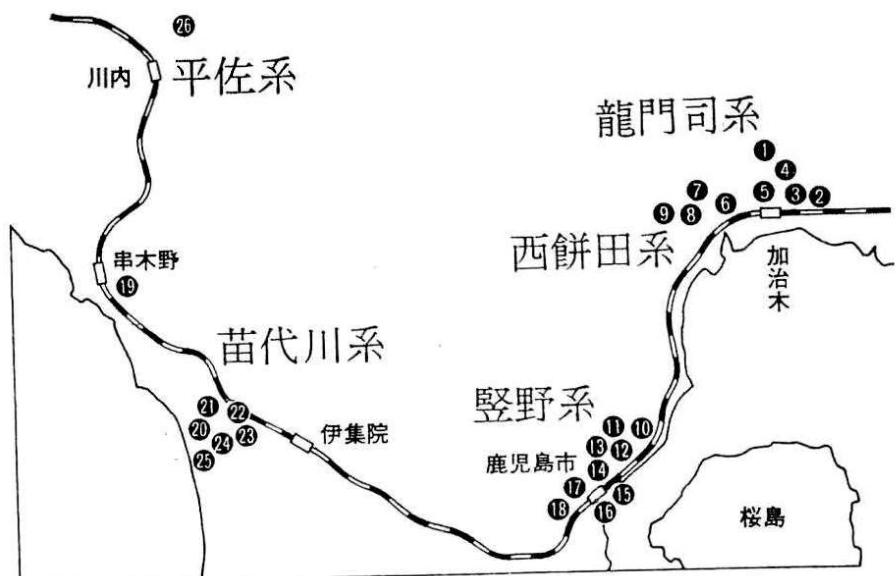
参考資料

- 故郷忘じがたく候 司馬遼太郎 文芸春秋
- 薩摩焼 薩摩焼パリ伝統美实行委員会
- 日本の焼物さま 日本陶磁大系⑯ 平凡社
- 薩摩民窯 日本のやきもの⑧講談社
- 「大正名器鑑」補説 林屋晴二 淡交社
- 広峰社

薩摩古窯址分布図

82

- | | |
|--------|---------|
| ①竜門司窯 | ⑭稻荷窯 |
| ②龍口坂窯 | ⑮田の浦窯 |
| ③吉原窯 | ⑯慶田窯 |
| ④山元窯 | ⑰豊野冷水窯 |
| ⑤御里窯 | ⑱豊野長田窯 |
| ⑥弥勒皿山窯 | ⑲串木野皿山窯 |
| ⑦帖佐宇都窯 | ⑳五本松窯 |
| ⑧西餅田窯 | ㉑堂平窯 |
| ⑨小松窯 | ㉒ウチコク窯 |
| ⑩花倉窯 | ㉓南京皿山窯 |
| ⑪仙巖窯 | ㉔御定式窯 |
| ⑫磯御庭窯 | ㉕元屋敷窯 |
| ⑬市来窯 | ㉖平佐窯 |



(118)

(司馬雑感 二十五)

司馬遼太郎の描いた「伊予」

山 田 嘉 久

（伊予は愛比売（えひめ）で、文字どおりいい女という意味である。（中略）「いい女」などという行政区の名称は、世界中にはないのではないか。）

（街道をゆく「南伊予、西土佐の道」）

この「街道をゆく」^⑩（昭和五十六年）は正岡子規の弟子高浜虚子の書いた「子規居士と余」の紹介から始っている。その中で出てくる野球の「バッティング」をする子規の姿に、司馬は興味をおぼえ、そこから始った連想が長編「坂の上の雲」になつた、と本巻の冒頭で明かしている。

司馬は「あとがき」（単行本第一巻）にこう書いている。

（このながい物語は、その日本史上類のない幸福な楽天家たちの物語である。やがてかれらは日露戦争というとほうもない大仕事に無我夢中でくびをつっこんでゆく。（略）樂天家たちは、そのような時代人としての体質で、それのみをみつめて坂をのぼつてゆくであろう）

一 「坂の上の雲」のふるさと松山

事実、子規の好きな司馬が、子規の生まれた伊予松山のかつての士族町を歩いているとき、子規と海軍の秋山真之が小学校から大学予備門まで同じコースを歩いた仲間であることを始めて知る。更に真之の兄が陸軍の好古

であることも知る。そしてこの三人を主人公にして書き上げた長編小説が後に彼の代表作となつた「坂の上の雲」である。

（まことに小さな国が、開花期を迎えるとしている）という出だしの文章で始まるこの小説は、松山生まれの三人の生い立ちから友情、そしてそれぞれの生き様を描きつつ、急展開する明治日本と世界の成り行きを描写している。

司馬は「あとがき」（単行本第一巻）にこう書いている。

（このながい物語は、その日本史上類のない幸福な楽天家たちの物語である。やがてかれらは日露戦争というとほうもない大仕事に無我夢中でくびをつっこんでゆく。（略）樂天家たちは、そのような時代人としての体質で、それのみをみつめて坂をのぼつてゆくであろう）

(119)

この長編の第一章は「春や昔」。いわすと知れた子規の「春や昔 一五万石の城下かな」から取つたものだが、三人のふるさと松山を舞台に、ゆつたりとした松山弁（伊予弁）が縦横に使われ、のんびりした青春小説としてスタートしている。

①子規と真之

子規は慶應三年（一八六七）に現J.R.松山市駅前近くで生まれたが（現在、石碑と案内板が立っている）、その子規生い立ちの家の一部が近くの正宗寺境内に「子規堂」として復元されている。入り口には子規旅立ちの像も立つ。室内にある子規の勉強部屋は、「坂の上の雲」では子規が十三歳にして既に書斎を持っていることに親友の秋山真之が驚いたことが描かれている。

正岡家と秋山家は共に松山藩下級武士だが、僅か十石取りにすぎなかつた秋山家に比べて、外祖父が藩校の教授で漢学者として有名な大原觀山であつた正岡家のほうが僅かに裕福だつたようだ。

年は子規の方が一つ上だが、小学校は同学年、互いに「淳さん」「升さん」と呼び合う竹馬の友だつた。そして共に松山中学（現松山東高校）に入学するが、東京への憧れが強く、子規が明治十六年（一八八三）、四年中退で上京、真之も翌年、子規の後を追つた。

共に共立学校（予備校）を経て、子規は明治一七年に、

真之は一年遅れで大学予備門に入学するが、真之は一年

明治三〇年、海軍の戦略戦術の研究のため米国に留学した真之は帰国後も、彼の先祖である伊予水軍の戦術も徹底的に研究している。そして後に日本海海戦において彼が提言した戦法——七段構えやT字戦法など——はその昔、能島村上水軍が取つた戦法でもあつたといわれる。

なお 日露戦争前夜、日本陸軍はかつて来島水軍の活躍場であつた来島諸島の小島にロシアの進攻に供えて「芸予要塞」を作つた。上原勇作中佐（好古と同期、陸大一期生、後に元帥陸軍大臣）によつて設置された二八インチ砲が二〇三高地攻防戦に動員され、勝利に貢献したこととは有名である。

今、このあたり「しまなみ海峡めぐり」として観光客に人気が高く、私も訪れたが、肝心の要塞跡はすっかり忘れられていた。

好古、真之兄弟の秋山家は、前述の通り伊予松山藩の下級藩士の出で、父の久敬は一〇石取りのお徒士の身分であつた。二人の生まれた家は昭和二〇年の空襲で焼失してしまつたが平成一七年に復元されている。そして邸内には二人の銅像が立つてゐる。いずれも戦前に建立された像のレプリカだが、乗馬姿の兄好古の目線は弟真之のほうを向いてゐる。

③子規と漱石

夏目漱石が松山中学の教師をしていた頃、子規は日清

後に経済的理由などもあつて海軍兵学校に転じ、一人は全く異なつた方向に進むことになる。

日清戦争勃発時、子規はすでに病魔に冒されていたが、強引に恩人陸褐南を説得して従軍記者となる。しかし

「子規の従軍は、結局はこどものあそびのようなものにおわつた。（略）要するにその従軍はほんのひと月あまりだつたにすぎない。」

その後も一人の友情は続くが、明治三〇年、米国留学に選ばれた真之を送つた病床の子規は新聞「日本」に次の句を載せた。

君を送りて思うことあり蚊帳に泣く

子規はそのとき何を思つたか。刎頸の友真之に對する多少のジェラシー（嫉妬）もあつたかもしれない。人間子規の心情を垣間見る秀句に違ひない。

②好古と真之

「おまえ、秋山家の先祖が伊予水軍であることを知つてゐるか」と、好古はいった。真之は知らない。「坂の上の雲」②

秋山兄弟は伊予の豪族河野家の出である。

室町時代には村上水軍を支配下に置き強力な勢力をふるつたが、戦国時代になると、この村上水軍が頭角を現す。その後、村上水軍は三家に分かれ、来島村上家は豊臣秀吉に、因島村上家は毛利家に、能島村上家は小早川隆景についた。

戦争の従軍記者として中国へ渡つたのは前述の通り。しかし大喀血しようやく小康を得て帰松した子規は、松山にすでに家がなかつたため、漱石の下宿「愚陀仏庵」に転がり込み、五十二日間にわたる共同生活が始つた。毎日のように子規のところには俳句仲間が押しかけてくるうち、漱石も加わるようになり、ここに俳人漱石が誕生した。

「桔梗活けてしばらく仮の書斎哉」（子規）

「具陀仏は主人の名なり冬籠」（漱石）

この愚陀仏庵も昭和二十年の空襲で焼失してしまつたが、現在は満翠荘（旧松山藩主の別邸）裏手の高台に復元されていた。（その後、一九二一年夏、豪雨により全壊）なお「具陀仏庵」の復元は「松山市立子規記念博物館」でも見ることが出来る。この博物館の建物は隣の道後公園の緑とよく調和し、明治という時代にふさわしい雰囲気を醸していた。

子規は明治三十五年九月一九日、わずか三五歳でこの世を去つた。臨終に立ち会つた弟子の高浜虚子は

「子規逝くや一七日の月明に」と詠んだ。

当然、子規は日露戦争のことは知らない。したがつて「坂の上の雲」で子規が登場するのは前半の三分の一ほどに過ぎない。

「この小説をどう書こうということを、まだ悩んでいる。

子規は死んだ。好古と真之は、やがて日露戦争のなかに入つてゆくであろう。

著者自身が率直に吐露したように、この長編の後半三分の一は、今までの松山を舞台にした主人公三人の「青春物語」から、一転して「日露戦争」が主題になつてゆく。あまりの変わりように、戸惑つた読者は私一人ではないだろう。

そのため評論家中には主人公を子規から漱石に換えたらとの意見もある。

たしかに漱石なら日露戦争を全部、見終わつて大正時代まで生きた。それに司馬はなによりも子規同様、いやそれ以上に漱石が好きだつた。司馬夫人の述懐では晩年の司馬は漱石ばかり読んでいたという。

特に「三四郎」の「あの部分」を司馬は講演などで何度も語つていた。

「あの部分」とは、三四郎が東京帝大に入学するため熊本から上京の列車の中の話である。名古屋から三四郎の前の席に四〇男（広田先生）が乗り込んでくる。時は日露戦争が終わつて二年ほど経つた頃、日本全国が不況のどん底にあつた。三四郎はカラ元気を出して、これからはもう少しよくなるでしようと広田先生に話しかけると、彼は即座に「日本は滅びるね」三四郎は驚いた。

事実、四〇年後の昭和二〇年には広田先生の予言となり（つまりは著者の漱石の予言とおり）になつてしまつた。

久し振りに訪れた松山は、前回と違つて、「坂の上の雲」一色だつた。

松山のシンボル松山城址でも、「坊ちゃん」で有名な道後温泉街でも、果ては坊ちゃん列車やマドンナバスの車体にいたるまで、町中至るところにNHKドラマ「坂の上の雲」のポスターが溢れていた。

「坊ちゃん球場」のネット裏まで、「坂の上の雲」ふるさと松山の大弾幕が踊つていた。

これは若い松山市長（中村時広氏）が「坂の上の雲」でまちづくりをしよう」と二年越しで司馬宅に通つて、

日露戦争が終わつた直後の「日比谷騒動」辺りから日本は少しずつおかしくなつていったとの司馬の持論と漱石の予言は見事に一致するわけである。

ならば、この本の主人公の一人を漱石にすることに対する異論がないようと思われるが、一方で司馬はこの小説で「明るい明治」対「暗い昭和」に分断してとらえるのが司馬史觀の特徴だが、その「明るい明治」を描こうとしたら、それにはやはり無類の樂天家だった子規をおいて主人公はいなかつことになるのではないか。

「明治」というこのオペティミズムの時代にもつとも適合した資質をもつっていたのは子規であつたかもしれない）

（『坂の上の雲』⑤あとがき）

南下して卯之町に入つて、明治時代に建てられた「開明学校」に立ち寄り、明治期の教育資料に触れて日本語教育について考察するのである。卯之町は幕藩時代には宇和島藩の在郷町として栄えただけに、今でも白壁、うだつ、出格子など伝統的な建築様式が残つている。

司馬は江戸期にこの町に住んでいた蘭学者二宮敬作や彼に学んだシーポルトの娘イネに思いを馳せる。

さらに南下して法華津崎を越えて、吉田を経て宇和島に至る。宇和島は司馬が日本で一番好きな町。したがつてこの町には再三訪れているし、此処を舞台にした作品も多い。

竜馬が脱藩して、いちど足をとどめた場所でもある。また、「歳月」の江藤新平とも関わりをもつてゐる。

竜馬は土佐から松丸街道を経て宇和島に入ったが、逆に佐賀ノ乱に敗れた江藤新平は、宇和島から土佐に侵入したことを考えながらこの地に立てば、何かしら歴史のロマンを感じる。

① 「花神」と「伊達の黒船」

長州の村医者村田藏六（後の大村益次郎）は幕末といふ動乱の中で西洋軍学を究め、官軍を率いて幕府軍を打ち破る。かくて近代日本の礎を築くようになる藏六の青春の舞台として宇和島が登場する。

宇和島藩伊達十万石。慶長十九年（一六一四）伊達政宗の嫡男秀宗が入封し、以来伊達氏は幕末まで在封した。

司馬夫人をようやく納得させた結果だつたとは、今回、「坂の上の雲ミュージアム」に行くために乗つたタクシーの運転手さんの話だつた。

このことは生前の司馬が遺書まで書いて「坂の上の雲」ドラマ化に反対していたのを、没後数年かけて遺族側を納得させたNHKとよく似た経緯である。

大阪の「司馬遼太郎記念館」を設計した安藤忠雄により平成一九年に開館した前記「坂の上の雲ミュージアム」は、その町づくりの中心となつてゐる。松山のシンボル松山城を頂く城山の南裾に建つていた。

秋山兄弟と子規が生きた明治という時代の風景を様々な視点から捉えているが、今年の企画展として「秋山好古」を開催中だつた。

二 卯之町、宇和島を舞台にした司馬作品

「街道をゆく」（南伊予、西土佐の道）で司馬が辿つたコースは、松山市内から重信川を越えて砥部焼の町砥部に入る。窯元「梅山窯」を訪ねたのち大洲を目指す。

途中、古い町並みの残る内子を通り過ぎ、大洲城下町の肘川と城山が織りなす「刺繡画のよう」風景を楽しんでいた司馬だが、城跡の隣に建てられた城下町に全く相応しくないコンクリートの建物（昭和四十年代にできた市立市民会館と市立中央公民館）に失望している。

「いずれも、市の行為である」と嘆くのである。

(そのため宇和島は「上方語圏」の伊予にありながら、微妙に「アズマ方言」が混入しているという。これも仙台伊達家の影響であろう。)

幕末の四賢侯の一人とされる八代宗城は、嘉永六年（一八五三）、浦賀に黒船襲来、この幕府開闢以来の大騒動のなか、薩摩、佐賀の二雄藩相手に途方もない約束を取り交わす。

「誰が最初にあの船をつくるか、競争しよう」

そこで宇和島藩は無名の蔵六をスカウトし、軍艦一隻と西洋式砲台をつくることを命じた。短編「伊達の黒船」（昭和三九年）は宇和島時代の蔵六とともに蒸気船づくりに挑戦した提灯屋嘉蔵を主人公にした物語。その後に書いた長編「花神」（昭和四四—四六年）の予告編といえる。

また、この藩にはシーボルトの高弟で日本近代医学の父とされる二宮敬作がいた。

「二宮尊徳あるを知つて、二宮敬作あるを知らず」と嘆いたのが地理学者志賀重昂（一八六三—一九二七）だったそうだが、その志賀は「ドイツ人名事典」に載つた数少ない日本人名の中に日本の理学者二宮敬作の名を発見して感動したという。

その敬作を慕つてシーボルトの娘イネもやつてきた。

その時期「蘭学は宇和島」いわれるほど洋学が熱を帶び、蔵六とイネのほのかな恋は発火寸前となる。その後

蔵六は日本陸軍の礎を築くことになるが、そのため薩摩人に襲われ、深手を負う。その死までの五〇余日間、蔵六の傍らにあって寝食を忘れて看病するイネの姿を司馬は「花神」の最後で感動的に描いている。

ところで藩主伊達宗城もイネに強い関心を持つていたと司馬は推察しているのは興味深い。

「あるいは性的な関心もあつたかもしれないが、それは当の宗城にきいてみなければわからない。ただかれはヨーロッパを学問のかたちにして日本に持ち込んでくれたシーボルトを深く思い、そういう思想の中からイネを見ると、格別な感情のさざめきがあつたのであろう」

宗城の養父、七代藩主宗起は長命で明治二十一年まで生きた（九十七歳）。七〇歳を過ぎた頃、これまで質素儉約の人生だったが多少の贅沢は（天も赦す）だろうと周遊式大庭園を造り「天赦園」と名づけた。

この園名は藩祖政宗の晩年の詩

「馬上少年過世平白髪多 残躯天所赦 不樂是如何」

にも由来しよう。

（司馬も「天赦園」の由来が政宗の漢詩から来ていることに感動して、政宗の青少年時代を取り扱つた短編「馬上少年過ぐ」の構想を得たといわれる。）

敬作と同様、シーボルトの逸材と謂われた高野長英を逃亡中にもかかわらず、宇和島に招いたのも宗起だつた。

（現在、卯之町にその長英が身を隠した家が保存されており、後家鞆彦六は明治後、大阪商工会議所会頭などを務めた関西経済界の重鎮土居道夫の若かりし時代の通り名である。

また司馬が、同じ年昭和三八年に書かれた短編「最後の攘夷志士」の主人公土肥慎太郎は後家鞆と同一人物とされている。

（お道を）

南伊予（愛媛県）から西土佐（高知県）への県境を越えたとき、司馬たちは愛媛県人の知人から「お道を！」と云われて送られた。

「お道を」とは南伊予の言葉で、一路平安を祈るという意味らしい。

この優しい伊予言葉に感心した司馬は、県境を過ぎて土佐に入ると、一転して「たまるか そんなに飛ばして」の交通安全の立て看板の土佐弁に仰天する。

一山越すと優しい伊予弁から無骨な土佐弁に一県境一つで、こうも変わるのが日本の面白さであるとこの巻を終えている。

②「花屋町の襲撃」

慶応三年二月、坂本竜馬は中岡慎太郎ともども殺された。海援隊、陸援隊の残党たちは、陸奥宗光（後の外務大臣）を中心に竜馬の仇討ちを計画する。

先鋒となつて斬り込む腕達者は十津川郷士中井庄五郎と宇和島脱藩後家鞆彦六の二人と決まつた。

彦六はかつて宇和島にやつてきた竜馬に魅了され、竜馬脱藩の噂を聞くと、しゃにむに自分も脱藩して大阪まで来たものの竜馬に会えず、高利貸しの手代として世を忍んでいたのである。そこへこの話が飛び込んできた。彦六は率先して一味に加わつた。

二人の目標は紀州藩用人三浦休太郎。竜馬暗殺は、三浦が守護職を通じて新撰組、見回り組をそそのかして決行されたと陸奥らが判断したからだ。

そして一二月七日、その三浦が新撰組の用心棒と定宿としていた天満屋で酒宴を張るという情報が入り、決死のあだ討ちが決行された。

陰翳の美学（その四）

外山知

第三章 美を構成する要素

3、環境の美

(4) 美の本質

美の本来的な姿、感覺、感性は、日常生活の中の、美しいというもののなかから、生れた物であると思われる。

従つて、それは、その物の持つている本来の性質や、基礎をなすものなのであり、私達の感覺に輝き光として写るものなのであった。

その物が「何」であるか、どんな働きをするのかは、人の生活手段として開発された。類型的なものが集められ、種目を作る。確かな物でなくとも、素材ながら体系化され、系統化されるようになつた。

学の Substantia. 本質は悟り的認識で概念規定されることが多い。

美そのものゝ性質となると、感性、感覺にうつたえることが多い。そこに私達の五感を通じて自然世界に存在するものが着目され、本来の美をさぐり得る。

百花繚乱の中にあって、野に咲ける一輪の白百合の見事さを讀える言葉として、「ソロモンの榮華は野に咲ける白百合にしかず。」というものがある。

如何にソロモン王朝の大王が榮耀榮華を極めても、所詮作られた物であつて生気がなく、一片の白百合の美には遠く及ばないというのである。

こんな所に美意識の本質があるのでなかろうか。もちろん自然世界を模倣した美の躍動感を、取るに足りない物とは言わない。

模倣から創造への歩みが、美の本質に挑戦するものであり、捨て難いものである。

およそ美と感ずるにも前記したように、私達の視覚から網膜、そして脳細胞の一部海馬から感覺、知覚を司る脳細胞へと伝達される。

光と闇を包む物象の認識へ、美なる存在を認識する。

形而上の働きによつて、真実な美を体得する。

形態、色彩、状況などと、実像に迫ることが出来る。美は本来、非美なるものと対比される。

美本来の中に翳の非美なるものを持つことによつて、

学とまでは行かなくとも、分化、統一、解析、の作業が営まれるようになると、芸、巧み、類型的近似的なものから、創造がなされるようになつた。

手の芸である手工芸も、芸の綾なす組み技や素材から、芸術という学が成立した。

長い年月の中で分類作業から空間芸術（建築、工芸、絵画）、時間芸術（音楽、文芸）、総合芸術（オペラ、無踊、演劇、映画）などと体系化され、分化され今日に及んだ。

その長い歴史は人類の英知であり、計りしれない至難さを超越した上での成果であった。そのことは論をまたない。他の記述領域で触れてきたので、重複は避けたい。俗に、美学、芸術哲学の領域として形而上の諸科学と論証してきた。すなわち、カント的判断力批判の俎上に蘇えつてくる。

私達の感性に響くのは、美学、芸術哲学の部門で、哲

より本来の美をかもし出すこともある。

すなわち美が美である為の本性、本来の性質が保たれて美の本質が、形而上的に見える。

すなわち美学、芸術哲学の領域であつても、発生的には、実生活から生れたものなのである。人が社会生活中で他者を意識することから美的、芸術的なものへの、憧れが生れる。

裝飾芸術は身体裝飾から器具裝飾へと、さらに工芸的裝飾から、造形芸術へと進展する中で、実生活の裝飾が本来の意味を失なつて行つた。

それに対し純粹な美的形式が求められた。写実的絵画、彫刻は形を作る素朴な快感から、派生したと受け止めでよいだろう。

グローゼは、これを静止の芸術と呼んだ。さらに動きのある運動の芸術として、舞踊を取り上げている。

この模倣的な舞踊に演劇の美的効果をねらつたことは言うまでもない。

そして人間の心情や現象に美的言語表現の効果を、詩歌に、戯曲的、叙事的、抒情的に結びつけたのが、音楽であった。

この情緒的運動を通して、運動の芸術を深からしめた。運動の美学に翳の論理を添え、より立体的感覺でもつて、美の本質を追求することが可能である。

かくて、美の本質も発生時から、時代感覺、感情も時

の流れによって変化する。この意識を持つて美の本質も時代と共に取られる。

もちろん、美は非美なる翳をはらんで、美の輝きを示すことは前記のとおりである。客観的美、すなわち、芸術の本来の美こそ、芸術の根本的本性、本質と言つてよい。

この光と翳、矛盾する二元的要素の内蔵こそ美の本質を形成する。

芸術の創造、創作過程にもかかる要因あつてこそ、純粹感情を表現に生かし得るのではなかろうか。

(5) 過去と現在

前述の各分野にみる芸術、美意識、感情の変遷過程をもう取り上げて論攷を重ねてきた。

歴史的な流れの中には、過去から現在に変転する美意識の開花に触れ、その都度、新しい感覚、快感の覺醒を発見し、今日に至った。

思えば、より素朴な段階から、その流れは遅々たる流れもあれば、急流を一氣加勢に流れ落ち下る所もあった。

その過中には、民族間の対立抗争もあり、今日の地球規模へと發展を見て、現在点に立脚したと言つてよい。

思えば時代感覚も、その時めきの中に生きた英雄豪傑

物であつても、管見にふれることは出来なかつた。

その世界にもX線を当てる事によつて彩色の片鱗までを、覗かせる事が可能となつてきた。私達の認識過程も限りなく続く持続性に食い入ることも出来る。

それに伴なつて古代人の思惟の輝き、また深さも、伝承過程も文化圏の交流など、どんなであつたかを知る手掛りを、つかみ得る。

過去の捉え方、歴史認識、またそこから派生する美意識も得られることを忘れてはならない。

木簡とか書跡の断簡でも取えれば、書誌学的分野が開かれ、古代史も大きく変位する。過去は現在点に立つて過去である。

時代の永続性もあつて、上古、中古、近世、中古、中世、近世、近代、現代など、歴史上時代区分もある。

過去の考え方も様々であり、觀点も自ずと異なる。

過去認識は現在あつての過去である。また過去あつての現在と、かかる認識の上に立つて美的感覚の取らえ方も重みを持つて来る。

言はず悠久な歴史の中での過去の積上は、想像を絶する。思惟的所産で、我々が予見する以上に、新しい世界觀を築き上げている。

先程の地球規模の論理、殊に科学技術の進化は論をまたない。また二十一世紀の現在点に立つて過去を過去として看過來ない。

の眠る夢の跡となつて、新しい文化、芸術を生んできた。

過去と言うからには、歴史的現在点に立つて閲みし來たつた時代への追憶といつてもよい。たとえそれが偽い存在であつたとしても或時、或る時点に営みを保つた。

その文化圏に生きる芸術も一つの過去の遺産であつたであろう。例へばギリシャのアポロンの神殿の遺跡などは、かつての榮枯をしのばせるものである。

またその神殿の持つ意味、思潮、文化が燐として輝いていたかが偲のばれ、歴史の響きが伝つてくる。

時代感覚、認識は時を経て真価を發揮することが多かる。

過去が過去としてときめきを持つには、過去のもたらす文化的刺激が大きくも貴重な資源となつて蘇がえつてくることが、不可欠である。

埋没した資料を発掘しても資料的価値も定かでなかつたり、手にする価値も乏しい物があつたならば、過去ははかなくも瓦礫となつて碎け散る。

然しそんな中に過去の人の生活の温もりが少しでも残つていたなら、その生活を通して考古学的に、また文献が他に現れたら、それとの校合によつて、予想以上の再発見となる。

そんな事から過去の遺産が單なる枯木に等しいような

諸問題をこの延長線上に捉え、そこに浮遊するものを歴史認識の中で証明することが、過去と現在の連続性であり接点であるとも言える。

私達が歴史認識の中で捉え得るものは、微々たるものだが、そこに生き、そこに歴史的な時間を刻んだものにとっては、永遠の一隅に生存したあかしである。

それは今日の私達の生活の一部に生かされて残つている。すなわち、文化遺産が、未来構築の指針となつて歴史の年輪を刻んで行くことに貢献する。

私達が現在に生きるその場は、歴史的場であり、瞬間にもある。その瞬間の連續性が、私達の今を構築する。

それは限られた時間かも知れない。

陰翳の美を内に秘めながら時を刻む生に、時には畏敬の念をいだくことすらある。

ゲーテは「人生は短かく芸術は長し」と言つたが、過去から積上げられた芸術の美は、永遠の時の中で、たとえ短かくとも輝き存した。

私の生であり過去の幾多の貢献者の手になるものとして蘇つてくる。そのアイデンティティに他ならない。

自分であることの感覚に支えられ、時の中に流れ行く。

過去の燐めきは人類の英知である。

輝やける対象は、一瞬一瞬の時を、刻んだ蓄積でもある。

人は水を求めて集団生活の舞台を展開し、集落から小

国家建設へ、さらに中央集権化と国家体制を整備する中に、時の集大成は民族文化を形成し、時代を育んできた。

ただ民族文化、殊に宗教、教祖を中心に集まつた文化圏同志の対立抗争は、時空を越えて、平和な文化圏も立ちどころに血を流す殺戮と化す。

時によつては民族文化の生んだ貴重な芸術品まで破壊されるに至る。これは自からを奈落に導入する極めて逆説的な行為である。

たゞたゞ宗教的対立意識と平和建設に、その一步を踏み入れる氣概を、何んとしても持ちたいものだ。

過去何千年もの貴重な文化財も指弾改命によつて、葬り去られ痕跡すらなきは、誠に遺憾なことである。

昔日の文化を再現さすには、はかり知れない多大な労力、知力、精神力、財力などを以てしても、昔日の遺産は再現されず、悔恨は綿々として留まる所を知らない。

幾多の感懷も栄枯盛衰となつて降り積る過去こそ、貴重な財源となつて今日に蘇がえる。

思えば傍くも消えた、文化財の発屈こそ現在に生きる私達の責務であり課題でもある。

為政者の梶取り如何によつて右記したことも起こり得る。そのことを常に考え対処することが必要である。過去と現在この未知な課題に取り組んできた。

今過去を新しい視点に立つて見なおし、未来を睨んだ

も含む。

環境の整備は、まず日常生活から潤いのある趣、情趣は美的、美化、環境から生成される。古きよき時代は、このような環境汚染、またその対策など考へても見なかつたことだ。

現代化の波が田舎、田園地帯にまで及び、それだけ汚染原が至る所に現われる。

現在を生るに至つたことなど、色々な化学物質の仕業と言えよう。

先程の論の中に古きよき時代と述べたが、美しい自然美に囲まれた環境は、人間生活にも潤を保ち、人間関係も今日のよき異常な環境要因は、はらんでいなかつた。

自然美を友として生きて来た事情とは異なつた角度から物を見る眼識が、必要となる。

今日では緑化運動として、緑の日を設定して潤を持つ環境育成を計つてゐる。
たしかに片田舎の末端まで、かゝる汚濁が心配される現状では、もはや昔の論理は通用しない。

今の自然美の消滅は、人間が生活向上のためと研究に研究を積重ねてきた化学物質によつて、その弊害をもたらしたものである。

歴史的現在に立つて論理を進め、陰翳の美学を考察することが、新しい問題点発見の素因となると思う。

「嘗々たるかな天」、過去と現在とに跨る悠久な史観は停る所を知らない。

世界の文化遺産保護法のあり方も、検討され実施に移されている今日ではあるが、一歩道を踏みあやまれば、二度と再現不可能なものさえある。

私達の将来像を見定め、限られた段階において、前進の歩みを後世の為にも施して、行かなければならぬ。

それを念頭に生きとし生ける今を、意義深く痛感する現在である。

(6) 美的再生の背景

昨今環境の美化が叫ばれ、大きくは地球規模の美的再生構想も考へられ、地球汚染、大気汚染防止条約も取沙汰されている。
今日地域社会でも汚濁防止対策で、環境汚染に力を注いでいる。
産業廃棄物処理問題から日常生活の汚染処理に至るまで、意を注ぐ。すなわち、美しい環境作りから美的再生への切り換へが、検討対象として、各所で問題化している。
地球環境の浄化は私達の生活の美化に連結する問題を

私達は今こそ生活净化のため、自然美の再構築に意を注がなければ、生活破壊はまぬがれない。

美的再生は、美自然美を取り戻すきっかけとして、美のルネッサンス、すなわち、美への回帰、復興である。たしかに破壊されたものを再構築する現代アートは、自然を離れて破壊されたものを、自分の意識に従つて組立て、行く。

あるいは、それが幾何学的、再構築であつても自分ながらの意に従つた、組み立ての斬新さをよしとする。

ピカソ、マチス的手法を悪しとはしない。いや、そのような前衛的手法に心酔する芸術家、その他の人々もい

る。
抽象化はよいが、しかし、それだけが万能ではない。古きよき時代を生きてきた芸術家達に、再び生命の息吹を汲み取りたい人もいる。

二十世紀から二十一世紀にかけて点と線の藝術。一色のカラーリに塗りつぶされた画材に、「意識」とテーマし、鑑賞批判させる斬新さ。

これは、ロマネスク、ゴシック、ロココ調、印象派はない破壊性を、人に考へさせた。また訴える響きを投入する手法を謳歌させた。
人々を一時の鑑賞に魅了させるのも、一つの流れかも知れない。それとしてのよさもあるう。

鑑賞者をあつと言わせるような、趣向もさることなが

ら、より自分を表現に生かそうとする。

その内奥に忘れ去られた物の追求に、目を向けようとする風調は、様々な手法を模索する中で、眞の美への回帰にほかならない。

いわばネオ・ルネッサンスの叫びとして、私達の心を捉えて離さない。

いわゆる「自然に帰れ」と叫んだルソー的発想として、転換期には一服の清涼剤的な効果を担う趣もあつたろう。

余りに自己本位に走つて、本来のあるべき物を失いかけているのではないか。

人間の本性に逆行しての創作過程に陰翳の美を取られ得ようか。もちろん、心象表現の現れとして心の中での葛藤を表現に生かそうとする。それで良いではないかの諸論もある。

生活に直結する環境の美化を叫ぶ中で、失われた物への回帰こそが、私達を救つてくれるのではない。

私は鑑賞した作品、作風の中で現代アートの持つ物に、何か物のたりなさ、はかなさを感じさえする。日々を充足してくれる物は何か。心引かれる思いすらする。人に安らぎを与えてくれるもの、それは抽象世界であろうか。また形成素材であろうか。

物的構成のなすものの自体にアイデンティティーを欲求したい。そこにこそ前記のような、安らぎを得る暖かさ

に、触れ得る世界がある。

私はそれを待望しつゝ美的再生論を考察したい。

ネオ・ルネッサンスを前述したが、西欧のルネッサンス期には、ゴシック様式が、中世から近世にかけ美術建築様式の華麗を極めた。

古代ギリシア文化に溯り、文艺復興を極め、殊に東ローマ帝国の滅亡を期に貢献していた多くの学者達が、フイレンツに集まつた。

そして文芸復興の狼煙を擧げ、文化、芸術の華を咲かしめた。

後に北方ルネッサンス、ロッテルダム、ブリュッセル、ロンドン、オックスフォード、ケンブリッジなどに及ん

だ。

あの輝きは一時代を象徴する動きでもあつた。中世から近世にかけて過渡期的存在として文化、芸術ばかりではなく、政治、経済あらゆる面に活発化した時期でもあつた。

あたかもその期を新しくした装いネオ・ルネッサンス期と言及してよい。すなわち破格的な要素礼讃は時を経て、あつと驚嘆させた。

然し本来の本性など、人の心を魅了するものなく、しょせん詰りをきたした。

そして、そこから脱け出す事もできず、沈潜し衰退の一途をたどつた。そんな時、印象派から新環境美を求める

る声々が高なつた。

大気圏の浄化、緑の地球を求める心の動き、これは現在の動きではなかろうか。すなわち現代的ネオ・ルネッサンスに匹敵すると思う。

美的再生の論理は新しい環境美の復活であり、復興でもあるだろう。

私達が今為し遂げなければ、地球も滅び費え去つて行くかも知れない。環境の美化は、それ程までに深刻だと言つても過言ではない。

今こそ美的再生論を復興させなければならない時に立ち至つてゐる。輝ける緑陰を求めていこう。

生活も美的感覚も麻痺して、枯渴状況にあると言つてよい。もう一度潤いのある緑の文化圈を構築し、輝く國家、文芸社会を築きあげる事を急がなければと、叫ばずにはいられない。

その背景を考察するために、陰翳の美を、先ず磨いて行くべきではなかろうか。

美的再生の背景についても歴史的経緯の中で捉えてきた。いたずらに過去の栄光に羨望することなく、現在を熟慮して美的再生論を考えるべきだと痛切に思う。

（7）禅の道

環境の美学を論ずるに当つて、まず禅について考えて

みたい。すなわち、有らゆる妄想、雜念を去り心を一つの対象に集中して、思惟することである。

古来禅の道は仏教修行の一法で、その道は厳しく踏み入りがたい。

禅宗の僧侶の心血を注いだ修行体験を通して上記のような心的統一を計り得るものである。

私達凡人の組みするところではないとまで言われる修行過程で、厳しく厳しい体験、宗教的な瞑想状態に入るのが、禅定である。

京都三千院、越前の永平寺などの道場にその厳しい美学を覗き見ることが出来る。

インドに古くから精神集中をなし、すべての雜念を去る法であった。釈迦（BC五世紀）もゴータマ・ブッダ成道（悟り）を禅から開かれた。

原始仏教以来、戒定慧の三學を中心、修行道を説く禅定と呼ばれるのも、その一つだった。中国仏教は隨、唐代に最盛期で、天台、華嚴宗では「止觀」として実践された。

後に仏教の根本思想である、「空」を禅宗で説き、唐末に隆盛を極め日本にも伝えられ仏教の主流となつた。

かくて東洋の神秘主義の象徴とされ、世界化の歩みを辿つてゐる般若心経は、二六二字に圧縮表現された仏典の根本理法である。

淨土真宗以外の諸宗派でも、共通して広く深く誦誦さ

れ、信仰の対象となっている。

仏教概論と言れるように、全体の内容や方法を要約して論じる性格を持つている。

十三世紀頃鎌倉初期に臨済宗は、榮西禪師に、曹洞宗は道元禪師によって伝承、江戸初期に黄檗宗（中国では臨濟の一派）は隱元禪師によって伝えられた。

そして武家社会を中心広く普及した。臨済・曹洞宗は中世に、京都、鎌倉五山で、学問、思想、文芸、社会生活に大きく貢献した。

今日流布している般若心經は、唐の玄奘三藏によつて印度から持ち帰った原典を、太宗聖帝の保護のもと翻訳されたのが中心である。

我国でも玄奘三藏の流布本を読經に使用する事が多い。以下（中村 元教授訳文引用）

經典は最初の觀自在菩薩は、盤若波羅密多（智慧の完成）を実践していた。すべてこの世に存在するものは実体をもたない。

五つの構成要素から成り立つてゐることを理解して、一切の苦惱や災厄をとり除き下さつた。（前文） 舍利子よ（以下本文） 色は空に異ならず。空は色に異ならず。色は即ち是れ空なり、空は即ち是れ色なり。感覺、表象、意志、知識も、復是の如し、舍利子よ。是の諸法の空想は不生にして不滅。

不垢にして不淨、いうこともなく、汚れたものでもな

上の真言、比類のない真言はすべての苦しみを鎮めるものである。

偽りがないから真実であると、その真言は知慧の完成において、次のように説かれた。（結語） 韻文、往ける者よ。（時に） 往ける者よ。（時に） 彼岸に往ける者よ。

彼岸に全く往ける者よ、悟りよ、幸あれ。以上は般若心經の解説、釈文である。

般若心經の内容は基本的には前文に示す通り知慧の完成を目標とする所は実体をもたない。「空」を究めようとしてすることにある。

「照見五蘊皆空、度一切苦厄」目的達成の方法論として、舍利子に向け次々に諸論を投げかけている。

すなわち、物質的現象として存在するもの、形あるものは、現象としてはあつても、実体としては捉えるべきものがない。

なにもない状態と異ならない。逆論理もまた同じで、受想行識も同様だ。眼耳鼻舌身意も無く、色、声、香、味、触法も無い。

眼の領域から意識の領域にいたるまで、ことごとく無いのである。更に悟り、迷いもない。老死もなく、老死も無くなることもない。

苦しみの原因、また苦しみ制すること、またその道もない。知ることも、知られた理法もない。

それ故、諸の求道者の智慧の完成に安んじて、恐れ顛

く、（生じたと言うこともなく、滅したと汚れを離れたものでもなく）不増にして不滅なり。（減るということもなく増すということもない。）それが故に空の中には色もなく、実体がないという立場においては物質的現象もなく、感覺もなく、意志・知識もない。

眼もなく、耳もなく鼻、舌もなく、身体もなく、心、形もなく、声、香りもなく味もなく、触れられる対象、心の対象もない。

眼の領域から意識の領域にいたるまで、悉くないのである。（悟りもなければ）迷もなく（悟りがなくなることともなければ）迷いがなくなることもない。

こうして遂に老いも死もなく、老いと死がなくなることもない、というに至るのである。苦しみも、苦しみの原因も、苦しみを制することも、苦しみを制する逆もない。

知ることもなく得る所もない。それ故に得ると言うことがないから、諸の求道者の知慧の完成に安んじて、人は心を覆われることなく住している。

心を覆うものがないから、恐れがなく、顛倒した心を遠く離れて、永遠の平安に入つてゐるのである。

過去、現在、未來の三世にいます目ざめを覺りえられた。それ故に人は知るべきである。

知慧の完成の大いなる真言、大いなる悟りの真言、無

倒した心を遠く離れて、永遠の平安に入つてゐる。

過去、現在、未來の三世の目ざめた人々は、すべて知慧の完成に安んじて、最上の正しい目ざめを覺りえられた。

それ故、知慧の完成の大きな真言、大きな悟り、無上の真言、無比の真言は、すべての苦しみを鎮めるものである。

「偽りがないから真実である」と、仏教の基本的思想である空の理法は説いた。その内容を前述の諸論に述べた。

（結語） 彼岸到達に弥栄あれと結んだ。

大乗佛教が紀元前後に中國に伝來した後、十二世紀後半から十三世紀にかけて、新鎌倉佛教となり、京都、鎌倉五山の創建開宗の運びとなつたのは、前述の如きである。

禅宗の坐禪を通しての臨済、曹洞二宗による禅の道が修行の対象となつたのも、この頃である。

鎌倉の建長、円覚寺にも禅の道場が出来て、京都五山と並んで全国的な規模で、禅道文化が旺盛を極めた。

榮西禪師は「興禪護國論」を著し、坐禪を組みながら師から与えられる。公案という問題を一つ一つ解決して悟りに達することを主眼として深慮に努めた。

また曹洞宗の道元禪師は自から「正法眼藏」を著して、

ひたすら坐禪すること「只管打坐」によつて悟りに達す

ることを主眼とした。

権力から離れ、永平寺に拠つた。北陸を中心として地方武士の間に広隆した。現存する鎌倉建築の禅宗様のものゝ中、円覚寺舍利殿は宋僧の無学祖元が開山した。

舍利殿は禅宗様の代表的遺構で簡素にして、素朴な感じが禅の心に通じ、禅宗寺院に多く採用された。

木割が細く、軒反が強く屋根は急勾配で、棟唐戸、花

頭窓は（アーチ形の窓）をなし、特色がうかがえる。

なお只管打坐の代表的な座法として、高徳院阿弥陀如来像（鎌倉大仏）に見られる。銅像十三世紀中頃の造像是禅の心を強く意識する冥想の姿といつてよい。

禪の道、仏造修行は正法眼藏第一、摩訶般若波羅密の

中に、その本質にふれ禅定について詳述している。

すなわち、人が本来持っている心の妙徳を説き禪の道はかくあるべしと、規範を示めされている。

前述した空の理法内容を鮮明にした。いわゆる大藏経と言つても過言ではない。内面的美意識は精神文化を造りなした教典にも、かくの如き思想の現われとして頭現している。

思えば、BCに逆のぼる頃に、もう芽生があつたとは、計り知れない人知の偉大きさを痛感し得た。

禪の道として只管打坐の阿弥陀如来像（呂座の大仏）に、禪の心を強く意識する。冥想の姿は美的象徴として、私達の常に求める陰翳の美を、その姿に大成している。

壯麗なまでに美的な姿は近寄りがたく、畏敬の念すらおぼえる。

五、美的象徴

(1) 美なるもの

私は陰翳の美学について各分野別に歴史的背景と、そのものの持つ意味を、感覺・知覚を通して、生活の中で位置づけて来た。

今美的象徴として現れている事象や心象を、感覺的に思惟対象として、考究して見たい。

先ず、この美なるものの持つ意味付けとは、私達の日

常性の中に美なるものと、非美なるものがあげられる。

美の論理は非美的論を育くむが同時に、介在様式として美なるものの中に非美なものが介入する。すなわち、第三者的な要素で弁証法論理の正反合の認識過程が見られる。

対象の持つ意味付けも、これを忘ることは出来ない。すなわち、「美なるもの」の持つ価値認識も、感覺・知覚の働きを通して現われ、存在価値となつて蘇つて来る。

美なるものも色彩、色感覺で、例へば赤（純粹な赤）により近い赤色もあれば、かすかな違いこそあれ薄れた赤色もある。

同様に私達が美的なものと呼んでも、主觀的な差異によつて、今の色彩感覺的な響きも、当然考えられる。

主觀性の異なる領域からは、美なるものも様々に変化する。それは容体世界から見れば、美なるものも稀には非美と写るかも知れない。

このような観点からは、ものの価値判断も判然としがたい分野もある。あるいは二者の介入によって、より高い価値意識さへ生み得るとも思われる。

また金属に例をとれば、より価値を高める合金などのように、もとの金属に他の金属を混入させることにより、新たな性質、質剤、美的素材などにもなり得る。

美的価値意識も、倍化または、より高次の段階へと進む過程認識もとらえ得る。

人間観の中にアイデンティーチの働きを見るようなものである。すなわち、美なるものの持つ意味づけも、また違つてくる。

單一なものから複数的化合のイデアが持ち込まれる。いわゆる、心的構成の異なる容体世界から見れば、また違つた領域として取られることかも知れない。

私達の感覺、知覚の働きによつて、他律的なニュアンスにもなる。また多岐にまたがる認識過程に於いて、広義な意味要素が働くことになれば、美なる存在も自ずと異なる。

従つて種々な美なるものが発生する。たゞ容体世界を

もつて、より普遍的な何人かが介入して見ても、比較的美的なものに近い形は形成されよう。

私達はそれを「美なるもの」のよりどころとして論攷するが、可能と言つてよい。

古来幾多の哲学者が見識をかざして、この未知なものに挑み、人間の知覚、感覺現象をつかさどる脳の解析にも究明してきた。

従つて私達が物を見る角度によつても様々な現れ方をする。感性的認識過程は個々によつて千変万化する現象の中で、様々な現れ方を私達に提供してくれる。

濃度の高い美もあれば、淡い美もある。それを主体的に如何にとらえるかによって、様々に変化する。

美は先に述べたように、單一のものばかりではない。他義的範疇の中で、多様に解され、また意識化されて享受される。

静的なものであれ、動的なものであつても、いずれも物のもつ内的美意識が、その物にとつて、価値体系として捉えられた時に、美学となつて顕現化される。

学的認識は、それ自体を抽象づける過程に於いて、意識されるか、いなかにかゝつてくる。

ある物は排他的な要因になつて、意識方向を決定付けてくる物もある。それも物象世界から見れば、陰翳の要素と言えるかも知れない。

物の見方によつて、価値意識を形ち造るか、否かが、

はつきりしてくる。

美なるものの感性的印象化、インスピレーションも、確かに一つの考え方かも知れない。そこには時、空間の広がりもある。

感性の広がりが多様化すればする程、認識過程も増幅化する。勿論、意識も変化しよう。

輻輳化した感性が、新しい美を生み出し、従前の美なるものを超越えて、新しい世界を築き上げて行く過程は、歴史の流れの中で取られる。

また私達もその過程の中に生き、発展の一翼をなつて来た。

その時、その時の印象を通して礎石の積上げのステップをなし、限りない心象美の再現を心に刻んで来た。

その光跡は網膜から脳へ視神経を経て、感覚、知覚となつて蘇つてくる。心象であり、表象として伝わつてくる。

その心象、表象を認識する過程に人知の働きが、心的過程に作用して輝ける物象の変化をもたらす。

美そのものの存在形成は、こうして認識され、芸術分野の一部として再生される。美的認識はほかでもない、美そのものの組立て構成技術による。

絵画、彫刻、彫塑、工芸、建築、音楽、舞踊、文芸劇、能楽、茶華道、およそ芸道と呼ばれるものは、美そのものとの積重ねによって立体化作用をともない、私達が心に解しがたい。

今を時めく一流の名人達も、やがて、かつての世を時代かした人々同様に、肉体は滅び作品によつて生きる存在となる。

「人生は短かく芸術は永し」かつてゲーテの言葉が、こんな所にも蘇がえつてくると思うや切である。

愛くるしくも艶やかな、この世の花も時と共にうつろうものである。来し方、行く末を思うは、人事に交よわせて眺む風情と、情緒を同じうする物を感じる。

「美なるもの」を感じながら、陰翳の芸道いづくにかけ解しがたい。

思惟的分野も歴史的経緯の中で考察すれば、現在に生き現在をかみしめる私達の感覚も、古きよき時代の認識の時めきの中で、輝きをはなつのではないか。
今をしてかくあらしめた美も、複合的な美なるものは單調ではなく、重層的構造を示めしてくる。

これは「美学の粹」美なるものの本質的な姿といつよい。

(2) 時間と空間のあや

時空の存在が如何に芸術にかゝわつて來たかは、前述した。

時空それ自体は、歴史的流れと空間の広がりとして、「場所の論理」に連なつてくる。それは人類の生存にも

響くものを作る。

すなわち感性の作用の訴えが、芸術となつて蘇つてくれる。繊細な動きを内蔵して空間を構成して行く過程に、美そのものの働きが巧みな手技を發揮する。

換言すれば、見せばと百戦錬磨の打工師（国宝級）の芸道者達によって、現在いや後世に伝存されて行く。

これは、うまし日本の持つ名人芸ならではの誇りといつてよい。榮枯盛衰は世の常である。

ある時、ある時点で、ときめいた名人の香り高い芸術品を、眼前に鑑賞した。

その時、その場所を懷古して、時間、空間の流れに如何に対処したであろうか。

蘇えつては後の世代に呼び語りかけるような働きがある。

ちょうど平泉に立つて北上川の眺望を眺め、「夏草や武者どもが夢の跡」と三代の榮耀一睡の中に云々、「笠打敷て時の移るまで泪を落し待りぬ。」と昔を懷しんぐ往時を懷古する。

名人芸の思いに馳せるのも同様な思惟として、改めて時の推移に英雄（名人芸）を交よわすことが出来る。

各分野に人間国宝として名声を博する名人芸は、個々人の肉体は滅び去つても作品は永遠に残る。

その作品を通して個人の業跡を想起することは可能である。

その場は実に芸術を生み出す礎石でもあつた。もちろん、過去、現在、未来にまたがつて、歴史的時間の流れと、それを包む世界的な空間の広がりに、多くの世界遺産を形成した。

今、私達の社会に貴重な文化財として蘇つて來ている。もちろん、その過程には血流を洗つた攻争過程もあつた。民族間の対立感情の現れであつたろう。そんな時空間をも超越えて、あやなす文化遺産を眼前に見ることの出来ることは、人知の計りがたい貢献である。

それを未来に継承していくのも、今を生きる私達の責務である。

限りない時空の流れの中で、人知の織なす綾は歴史的現実を肯定的に導く、融和の精神があつてこそ可能だ。輝かしい芸術の光を将来に残していく為にも、民族、宗教などの対立が殺戮をよぎなく行つて、文化の否定的過程を繰返さないため、世界平和と共に存が、呼ばれる時

ではないか。

その現在にあつて抗争がテロ化し、あらゆる物を破壊する暴挙は、なんとしても、食い止なくてはならない。かかる事は理解していても、ただ一時の感情におぼれて殺戮抗争にあけくれるのは、地球規模の繁栄のためにも、今すぐ停止せねばならない事である。

おろかさが生む暴挙は人類社会の破滅で、崇高な文化財保護の警鐘である。自爆行為など否定的態度を、断固阻止しなければならない時にきている。

暴虐非道な行為は、世界的規模から豊な天然資源の破壊で、それは人類社会繁栄のためにも大きな損失である。これをもつても、人類社会繁栄の基礎がゆがめられる。これは時空の存在価値にとつても、大きな社会悪と言わざるを得ない。

一時の権力者の暴挙は時によつて、人類社会の滅亡を招来しないとも限らない。今を生きる人知のすべてを持つて、抗争終結をさせる強い使命感を、改めて認識すべきだ。

更に江戸期に入つて、各藩の殿中、お屋敷内で女中達によつて美しい手鞠が編まれた。これは少女の遊びに、また鑑賞用に、社交的贈答等、飾り物にも供された。古くは芯にハマグリのからや、ゼンマイ、もみがら、いもがら、コンニャク玉、山繭、砂鉢など入れて弾力性や、かわいらしい音を出すように工夫された。

表面の綾糸の巻き方によつて、梅、菊、牡丹、楓等種々な模様がある。今日、御殿鞠、花手鞠などと呼ばれ愛されている。

一方この間にも、てまりは農村にも伝わり庶民感覚としても素朴な手鞠が、各地で作られ民芸品として、今に伝つてゐる。

明治になつて、ゴムまりに人気が集まり、次第に手鞠衰退の一途をたどつた。

現在では手鞠の材料も自由に入手出来、そのデザインも昔ながらの素朴なものから大胆で華やかな模様まで、実に多くの手鞠が作られている。

そして伝統手芸として、一針一針に愛をこめて作り上げられ、芸術効果を發揮している。

前述の通り、古来、手の国日本の礎を築いたのも女性の手の器用さあってのこと、緻密で繊細な感覚は時間と空間のあやを見事に織なした粹といつてよい。

同様な感覚の手芸品に組紐の技術が上げられる。いわゆる、糸で組んだ紐で打紐とも呼んでゐる。

いる。

ITは宇宙科学に、また携帯電話、DVDの領域へと進展の歩を進めてゐる。時空の綾なす世界は、人類社会への貢献であり、開発は日常化の至福といつてもよい。

とめどなく欲求される時間的芸術科学に対応する、空間の広がりは果てしない。人類社会のあやとして受けとめられる。

私達はこのような存在の中に科学する心、芸術を求める心を忘れてはならない。

基礎的分野の恩恵をなつて、より高次の世界に輝いて行かねばならない。この認識を歴史的現在点に立つて積極果敢に対処すべきだ。

時間と空間の織なす綾模様の織細さ、芸術品を前に、もちろん試行錯誤と手の技巧の、からみ合いを試みもし、また解きもした。

再度の組みし方を幾度もの挑戦の末、純粹芸術の綾、絹織物の反物を顕現している。思えば氣力と忍耐力の結晶といつても過言ではなかろう。

また同じく手芸品として手鞠も五色の絹糸、綿糸を組合せて雅やかな風情をかもし出した。

芸術品として遠く七世紀頃、唐朝から渡來した。蹴鞠から発展し平安朝に入つてから公家階級等、貴族社会を中心に行われた。また神事や祭具の一つとして利用されていた。

綿糸、木綿、麻などを何本かまとめて、一定の太さにした単位（一手または一玉と言う）を二単位以上使つて、一定方式の組み方に従つて、交互に斜めに交差させて出来る。

すなわち細幅の織維製品を言う。たゞ織紐や結びの連続などの編紐とは、まったく違う技法である。

発生は原始人が物を縛縛したり連結する為に用いた樹皮や獸皮を単純に結びつけた紐がはじまりのようである。

いわゆる補強のため二、三本を撫り合せ繩を考へ出し、三本、四本撫り合せた三つ組、四つ組などが、更に複雑化していくと、考えてよい。

これも前述の組紐は、形の丸型のものを丸打と言い、平たいものを平打と呼んでいる。組紐を作る道具は、今日も見ることが出来る。

古くから四つ打ち台、丸台、高台、綾竹台（駿河台）

（博物館所蔵）台に種々の色糸の玉を下げ、一定の組み方によつて互い違いに綾をとつていく。

丸台は中央を丸くり抜いた直径三〇厘米ぐらいの円板の四方に足をつけたものを言う。ごく一般的に解され馴染むことが出来る。

四つ打ち台は丸台の原始型と言つてよい。高台は約一、二十一、五メートルぐらいの木工台で、台上の中部に座して、平打ちの組紐を左右の糸で組み合せる。

複雑なものを組みあげるのに、適したものと言つてよい。綾竹台は高台を小型化したものに似て、織物に近い組織の駿河打とか、綾竹打用のものを組むという。

高台以外は、皆正座した膝前に台を置き組む。丸台と高台の組み方は同一方法で、同じものを両方で制作することが可能である。

後に機械組の技法も量産化されるが、手組の手法には遠くおよばなかつた。

用途は武具、宗教用具、工芸、服飾関係の四部門に利用され、甲冑の纏毛に刀剣の平緒、帯取、下緒、絹糸、馬具や弓具類の各種の組紐に用いられた。

工芸では箱、その他小物の組紐、几帳、二階棚、厨子、樂器類の組紐に使用される。

服装では帯、縁飾りに有職故実、舞楽の衣装、また神官、僧侶の衣服の組紐に帶締め、羽織紐などに用いられた。

かかる伝統的な手工芸の美も歴史的には、古く縄文式土器文様から奈良朝になつて、飛鳥文化の影響によつて、中国大陸の影響もあつて高度な優美組紐となつた。

元禄期に前田家伝来の「百工比照」工芸見本が集大成された。

江戸末期には和装の帯や帯締に金工品や宝石類が使用されるようになつたのは、明治から大正期にかけてであつた。

伝統ある工芸組紐を帶締めに応用して、新しい組紐の美を現在に継承している。

かかる伝統工芸にもその時、その時の煌めきと輝きを持ちえたのも、時間と空間の織なす綾（美学）といつてよい。

(3) 美的情緒と芸術

人間の心的感覚を心理学では、意識の主観的側面の快、不快や情緒、情操の状態をさして、物事に感じて起くる喜怒哀楽などの気持が、芸術を生みだす切つ掛けを作り出す。

従つて作家のその時の心情が、如何なる状態であるかが問題である。より効果的価値意識が、作品決定の鍵となることと思う。

芸術家には多感な心情が普通以上に鋭敏で、磨かれた感覚が、その場において發揮される。

物象に対する働きかけが極度に高まつた状況において構成されたものが、芸術美を生むのである。

法隆寺、正倉院などでは、裝飾的な物を拝見することが出来る。平安、鎌倉期になると色彩、意匠が纖細優美に、純日本的な洗練さを加え、技術も高度となつた。すなわち、前代までは三単位から多くて三十単位で組まれたが、この期になると数十単位から百単位を越える組紐となつた。

薄い平型組紐の複雑化と今一つは肉の厚い角型立体型となつて、巖島神社の平家納経の巻緒に、また神護寺の経帙の組紐となつた。

角型のものは四天王寺の懸寺の紐として、また中尊寺秀衡館の紐となる。亀甲文様が表裏に出る両面亀甲組紐は、東京都下の御岳神社、三島神社、熊野速玉神社等に発見される。

もちろん、管見にも触れることが出来る。このように平安末期から鎌倉初期にかけて、質的にも高度な段階を向えた。

その後は普及化、実用化は進むが組紐本来の美は進まず、衰退の一途をたどつた。

室町、桃山期には茶道や禪の影響もあってか、渋い感覺が好まれ、茶道具、掛物、手箱類に顯著に見られる。

武具も地味な組紐が用いられた。

江戸期に入つて町人物の道中服、羽織などに飾組紐と

して紋を組入れるなど、職人技巧にはしる傾向が見られると。

従つて、その心的過程がなかつたら、芸術作品は生まれ得ない。このような相関する二極が相待つて、純粹芸術が可能視される。

それ故美的情緒の高まりは、ある感動の深さによつても垣間見られる。人は物象に対しても、異状なまでに激しい感情にゆきぶられ、その場を構成に導くことを、常々練磨する。

絵画で言及すれば、デッサンに何枚となく心血を注ぎ、纏細なあやが試される。漸次構成段階まで洗練されていく過程に、反復練習が行われる。

研ぎ澄まされた思惟が意識をふまえ、感覺、知覚の機能を動かし、物象に迫つていく。（第一過程）。

続いて物象の持つ色彩感覺を、いかに表現に結びつけていくか。知覚作用の鋭敏性が、幾多の物象に見え、経験的思惟を積重ねていく過程に、内的葛藤が保たれる。同時に色彩的手法も塗りつぶされている。その上に試彩されていく練磨の過程が、（第二段階）。

そして全体的構成過程が、デッサンの基礎過程を踏台に再構成されていく。全体的調和はどうか、破格的要素の導入はと、物象の持つ特性を、画布にいかに表象させしていくか。

また印象的手法はどうか。最終段階での綾は、その時の心的状況に遺漏はないか。

「万遗漏なきを期す」の心境までを、自己の心象とし

て自分に書いてみる。

いわゆる形而上の精神作用の試みをもつて、完成の域に達する。これらの手法は、およそ芸術指向をめざす、種々の分野に意図内容こそ違え、大筋は同様な過程が見られる。

名工のためまぬ研鑽過程が試される時、それは壯麗な状況とも言える。

また伝統芸能の琴箏曲で、昭和四十三年、人間国宝に推挙された、故中能島欣一の「さらし幻想曲」を、NHK教育、花舞台再放送で拝視聴した。

山田流派のもつ伝統を、師匠死後二十年になる今日、その芸道は不朽の名演奏として、再現されている。

それを私達が甘受する時、畏敬の念をもつて接しえることは、永遠の美を象徴するものである。

また三味線奏者、杵屋長五郎（八十六才）が言われる、「故師匠の芸は神業で人間離れした業を見ることが出来る」と、絶賛している。

さらに「新さらし」を故師匠の奥様、慶子夫人の箏曲、師匠の長唄三味線の演奏で、三味線方を奏てる師匠の芸を神様とたたえた。

特に左手の冴は神業的な動きで、真似など出来ない所である。

長唄は日本三味線音楽の一種で、上方で地歌（唄）の中の長歌と呼ばれていたが、享保年間（一七一六—二六）

以後、長唄と呼ばれた。

元禄の頃、盲法師が三味線音楽として演奏していた。

筋の長い歌詞が出現して歌舞伎と結びついた。

上方から江戸歌舞伎を出現させた経緯があった。長唄は安永から寛政期に大成期を迎えて、文化—文政期にかけ全盛期をなした。

変化物舞、舞踊の流行もあって、短編の舞踊曲が作られ、豊後節系、淨瑠璃との掛け合によって、変化の妙をつくすようになった。

「越後獅子」、「汐汲み供奴」「浦島」「舌出し三番叟」など、多く作曲された。加えて、お座敷用の演奏曲、「老松」「吾妻八景」なども作曲された。

さらに、豪快な節回しの大薩摩節を吸收し（一八二六年文政九年）ときめいた。

天保から安政期に入つても全盛は続き、「巽八景」、「秋色種」、「五色の糸」、「松の緑」など作曲された。

また復古調の謡曲に物語曲が現れ、「石橋」、「鶴亀」、「勧進帳」、「時雨西行」、「紀州道成寺」など、曲風に時代差と個人差も現れた。

唄方や三味線方として独立して宗家の発展に寄与するに至つた。明治から大正、昭和へと軍国色の濃い作曲へと傾いていった。

戦後長唄界は、大きく変つて唄、三味線、鳴り物を、家元制度の組織化及び交流も盛となつた。

長唄の領域を越え雅楽、能楽、さらには、洋楽の技法まで取り入れられ、新傾向の創造運動も起つて來た。

古典尊重の国立文化財研究所、日本放送協会などの組織化された動きも見られ、大きな進展を見せるに至つた。元来、長唄は邦楽の中で多様性に富んだ歌曲で、本来は歌舞伎舞踊の伴奏音楽であった。

発展途上に、「地歌」「豊後節系淨瑠璃」、「義太夫節」「大薩摩節」「謡曲」「狂言」など取り入れて、古典音楽から日本音楽への集大成の方向をたどつた。演奏法も多様で、歌舞伎と共に管楽器、打楽器などの鳴り物に加え、淨瑠璃との掛け合もおこなわれた。

大合奏と変化に富む歌曲で三味線音楽の中でも上品な内容の芸術的歌曲として生れた。家庭音楽にも箏曲、小唄と共に素人の世界にも深く浸透した邦楽といえる。

前述の如く琴（琴）は平安朝の頃は、琵琶、琴、箏、「箏篋の琴」と琴をつけ呼んでいた。

日本では箏、和琴、一弦琴、八雲琴、二弦琴）大正琴など、中国の琴（七弦琴）、瑟、朝鮮半島では伽倻琴、玄琴と呼ばれていた。

いずれも箏の別名として「こと」琴を使用していた。

江戸期を通して盲人の専業で、極めて感覚的傾向の強い音楽として発達した。近世邦楽の大部分が演劇、舞踊と結びついた。

箏曲は単独で鑑賞される音楽で、大部分は歌を伴つて

いた。平安中期から催馬樂の伴奏に箏を用いた。

平安末期に平家の落人が九州地方に移住し、北九州に広まった。

安土、桃山になって、久留米の僧賢順（一五四七—一六三六）が筑紫箏を開いたのが、今日の箏曲の基礎となつたようである。

門弟法水が江戸期に盲人、八橋検校に箏組歌と段物を制定して、今の箏曲の祖となつた。

やがて諸流派を吸收して、関西で一大流派となつた。

文化、文政期（一八〇四—一三〇）京都の箏曲家、八重崎検校は当時の地歌の大部分に三味線と異なる箏の旋律を加え、原曲と合奏させるように編曲した。

幕末期には京都の光崎検校、名古屋の吉沢検校によつて、三味線にとらわれることなく、純箏曲が作曲された。一方江戸では文化文政期頃、山田検校によつて江戸の淨瑠璃や謡曲を参考にした、歌本位の箏曲が確立した。

関東で大きな勢力をもち明治になつて盲人専業であつた箏曲は、一般に開放され公開演奏、楽譜の刊行となつて大衆に普及した。

大正になつて宮城道雄達によつて、洋楽と接近し、新日本音樂を出現させた。さらに、中能島欣一らによる新

しい筝曲も生まれ、国際化も進み、邦楽革新の種目となつた。

人間国宝中能島欣一の至芸は前述にも述べた。ことに指の纖細な動きは、三味線奏者の杵屋五三郎の表現ではないが、「七弦の上を走るが如き」という表現よりは、むしろ両者が相対的に呼応する風情と言つた方がよい。すなわち、濶なく細波を立てるかのよう、神業的な運びである。（第一樂章から第二樂章へ。）

音色のうねり、高まりの大きな波濤、それとともに違う旋律、限りない音色の飛沫が時間芸術の中に組込まれた。そして静寂をよそおう、陰翳の美を絵くが如き変化が感じられた。

第三樂章にひたひたと迫りくる飛散する波しぶきも、やがて静寂さを取り戻して、平安の内に終末の静けさを迎える。

芸術的な手法も拝聴していて、神々しさを感じ幻想曲のすばらしさを、心に響かせてくれた。

人間国宝の妙えなる指弾は神がかりな至芸といつてもよい。

音曲に合せ歌われる声には時に哀調を帯び、また一転して華やいだ声調を響せた。老体とは思えない風貌に煌めきすら覚える風情が見られた。

その場を作り構成さす品位は、芸道全体を支配し、人をして寄せつけない程の威厳さが、滲み出ていると思わ

れる。

よく口にこそ人間国宝と言れるが、その至難さは、日頃のうまず弛まらずの修練から築かれると思う。その偉大さを改めて感ぜられ、口調をついて出た溜息が、観客を魅了させたことと思われた。これが至芸の域かと、美的情緒と芸術の領域を改めて感じさせられた。

（つづく）

化粧のルーツを訪ねて（一四）

第十話 化粧ルーツ序曲

鈴木守

（二）清淨化粧

前報にて、石器時代の化粧を述べたので、いよいよ化粧のルーツに挑戦する運びとなつたが、これまでの記述の中から夫々の化粧種ごとに最も古い資料を復習し、次いで化粧のルーツの手掛かりを求めるために、從来から提唱されている諸家のルーツ論を参考にし、更に人類進化のプロセスを述べて序曲とする。

第一節 古代化粧史を振り返つて

これまでの資料をスキンケアの化粧、彩色化粧、毛と爪の化粧、ならびにその他の化粧に別けて、化粧種ごとの最古の資料をピックアップする。

古代インドでは、遅くともマウルヤ朝（前二二一～前一八七）の頃には香樹香草を香り化粧と兼ねてスキンケアに使い、スパルタ（前六～前四世紀）ではパック、エジプトでは薬用化粧料が使われていた。

クリーム・乳液については、ガレノス（一二〇～一二〇）がコールドクリームを創始し、中王国（前一〇五〇

祝出版

情熱の経営

三戸岡道夫編

栄光出版社 1,400円

二宮金次郎が教える
人にやさしい経営

(前一七七八) では乳化型のクリームを作っていた可能性が高い。クリームの前身・香膏の歴史は初期王国(前三〇〇〇～前二六五〇)の時代まで遡ることができた。

二 彩色化粧

(一) 顔面の彩色化粧

白粉は中国の書に記載されている前一四〇年頃から前二二〇五年頃、頬紅は旧約聖書記載のヘブライ(前一二～前八世紀頃)、口紅は中王国の頃であり、黄化粧はシユメールの“黄金の土”が最も古い証拠であったが、紅とは別に赤土などを顔に塗る赤化粧があり、この化粧の現在最古の証拠は後期旧石器時代末期(一万年前以前)の陸前中沢井浜で発見された赤い人骨であった。

(二) 顔のポイント化粧

額の化粧では、南北朝時代(四三九～五八九)に始まつた額黄、四世紀頃の西域に見られた花鉢、一世紀頃に起源をもつビンディ、クレオパトラ(前六九～前三〇)が行つていた額の血管上に青い線を入れる化粧などがあり、グプタ朝(三三〇？～五一〇？)の若者たちは額を赤く染めた。

ほかに、こめかみ近くに描いた斜紅は三国時代(二二〇～二八〇)、口辺に施した齧鉢は前漢(前二〇二～一八)の時代に始まり、古代インドでは頬に模様を描く化粧がマウルヤ朝の頃から見られるようになった。

(二) 除毛

断髪や脱毛に必要な剃刀、毛抜き、脱毛剤は古代エジプト人が既に用いていた。僧侶の剃髪は仏教創始期の前六五〇～前二三〇)にはスキンヘッドの王があり、古代エジプトの王冠や髪装着は剃髪あるいは断髪の指標となり、王冠姿はノモス(前四〇〇〇頃～前三〇〇〇)の時代に認められたので、断髪あるいは剃髪はノモスの頃まで遡る。

(三) 染毛と養毛

時代は不詳だが、古代エジプトでは染毛剤、白髪染め、発毛剤が使われていた。

(四) 髭と体毛

付け鬚は初期王国時代に見られ、シユメールでは鬚を落とす一方、鬚髪を蓄える男性もいた。体毛の手入れについては、マウルヤ朝の若い男性は胸と陰部を剃毛し、腹部は模様状に剪毛した。古王国(前二六五〇～前二二〇)のメンカウラー王妃像はリネンの衣装をまとった下に、綺麗に整った偏平なデルタが透けて見られた。

(五) 爪の化粧

(三) 眉目化粧

付け睫毛はクレオパトラ、マスカラはアッシリア人(前七三〇～前六一二頃)、アイシャドーは新王国のネフェルティティが使っていた。眉墨とアイライナーはシユメールの時代から認められたが、エジプトには眉目化粧用の顔料を漬す新石器時代(前六・七〇〇〇頃)のパレットが出土し、眉目化粧の歴史は新石器時代まで遡ることができた。

三 毛と爪の化粧

(一) 結髪と整髪

また、マウルヤ朝以降の女性は肩、足の裏、足の甲、指頭を赤く染め、ギリシャ盛期(前六～前四世紀)の婦人たの中には手や乳首、尻を彩ることがあった。

(二) 結髪と整髪

ポマードはローマ盛期(一～二世紀)に登場したが、整髪料の香油は新王国時代まで遡り、整髪用具について始まっていた。

中国戦国時代(前四〇三～前二三二)には、爪の保護のため指套を嵌め、インダスには爪磨きの鏃が残されていた。また、新王国時代には、爪を伸ばして整える風習と爪紅が見られ、シユメールでは甘皮押し用の金属棒を使っていたので、爪の手入れはシユメールの時代に既に始まっていた。

四 その他の化粧

(一) 齒の化粧

クシヤン朝(四五？～一五〇？)時に練歯磨、ギリシヤ盛期には歯磨粉、シユメール人は楊子を使っていた。歯を染める風俗は、クシヤン朝の頃は蓮の花のような赤に染め、倭人のお歯黒風習は前四世紀頃には始まっていた。古代ローマ盛期(一～二世紀)の貴婦人たちは拔歯して象牙の入歯で飾っていたが、拔歯例は一万八千年前の沖縄に見られ、これが歯の化粧で最も古い証拠であった。

(二) 入墨

『倭人伝』などに三世紀頃の倭人の黥面文身が記され、中国の前五世紀、勾践の時代の入墨が最も古い資料であるが、中国新石器時代晚期の銅鏡が現在、最古のもの

とされている。

第二節 ルーツの手掛かりを求めて

前節で述べた化粧種のうち、鏡、整髪用の櫛、眉目化粧用のパレットは新石器時代まで遡り、赤化粧と抜歯例の足跡は後期旧石器時代末期（一万年前以前）まで辿ることができたが、これらの事例が化粧のルーツとは思えなかつた。したがつて、ダーウィンなどが化粧のルーツ説を提唱しているので、先人たちの掲げている説を紹介し、次いで、これまでに化粧と推定されている資料をピックアップしたうえで、化粧目的ごとに傍証を加えて旧石器時代の化粧について再考する。

一 これまでのルーツ諸説

これまでに例えば、ダーウィンは異性の注意を引くために化粧したという雌雄淘汰説を初め、異性に自分の性を強調するために行ったのが化粧の起源だとするウエスター・マーク説、悪魔や災難から逃れるための護符を起源とするブントの呪術説など様々な説が唱えられている。これらの諸説を樋口、青木両氏が簡潔に紹介したうえで、樋口は「アルタミラの事例は現在最も古い証拠であつて、化粧のルーツを示すものではない」とい、青木は「複数の説があることは、創始の化粧が何であるか定着した

説がないことを示している」と述べていたので、著者なりに先達の諸説を化粧目的別に類別すると、
①ダーウィンの雌雄淘汰説やウェスター・マークの性器強調説などの性本能説
②美を演出することから始まつたとする美意識説
③ブントの呪術説を含め信仰を起源とする宗教説
④お歯黒の既婚者標識のような表示説
⑤保温とか蚤や虱の忌避、カムフラージュなどを起源とする実用説
の五種であった。

二 化粧が推定されている石器時代の資料 旧石器時代の歴史の中にも、化粧の足跡を窺わせる事例が幾つかある。

先ず、後期旧石器時代の例を挙げると、スペインのアルタミラ洞窟には赤い石を碎いた跡が見られ、そのうえ、壁画に赤く塗った人物が描かれているので、呪術的な化粧ではないかと推定されている。また当時のクロマニヨン人が結髪していたと述べている著書もあつた。

中期旧石器時代には、ネアンデルタル人が岩絵具や褚土による身体彩色をしていたといわれ、また、七万七千年前頃の南アフリカ南部ブロンボス洞窟で褚土の塊が発見され、この褚土は、身体彩色や日焼け止めに使われたと推測されている。

る。

前期旧石器時代にも、化粧の形跡が推定されている事例があつた。それは三五万年前頃のテラアマータ原人キヤンプ跡出土の褚土の塊であり、日焼け止めを兼ねて狩猟の無事と豊漁を祈願する護符に使用したと推測されている。

三 表示説と性本能説に関する資料

表示説に関しては、成人を標識する抜歯風習が一万八千年前に認められた。

一方、ウェスター・マークのいう性器強調の化粧については、まんじ一一〇号の『化粧雑記』で著した股間の瘢痕化粧、前出の古代インドの陰部剃毛、エジプト王妃像の陰毛の手入れにその形跡を窺うことができるが、石器時代の資料は見当たらなかつた。

しかし、三、四万年前の赤く彩られたビレンドルフの石のビーナスは股間にスリットが刻まれた妊婦姿であり、子孫繁栄を祈願した呪術的な赤化粧と見られるので、子孫繁栄に重点をおけば、種の維持、即ち性本能に基づく化粧という見方が成立するであろう。

四 美意識説を支持する資料

櫛は美を演出する目的で髪を整えるのに使い、美意識説を支持する化粧用具である。現在知られている最も古いのは新石器時代のイエリコの遺跡で発見された櫛であ

る。

化粧とは直接関係ないが、美意識の指標となる資料に目を向けると、中期旧石器時代五万年前頃と七万七千年前頃の首飾りに使われたビーズがアフリカで出土した。そのほか、後期旧石器時代にはフランコ・カンタブリア美術があり、中期旧石器時代七万七千年前頃のブロンボス洞窟出土の褚土の塊の表面に幾何学模様が刻まれ、前期旧石器時代二〇万年前頃のスウォングスクーム遺跡で発掘された石器には中央に二枚貝の化石が配され、美的センスを感じさせた。特にブロンボス洞窟の褚土は身体彩色に使われたと推定されており、同時にビーズも出土しているので、七万七千年前頃には美的目的の化粧が始まつていたことが類推される。

五 宗教説に関する資料

わが国では、古墳時代の巫女像の埴輪に赤化粧が施され、シャーマン卑弥呼が鉛丹を使い、吉野ヶ里遺跡から顔面を朱で彩ったシャーマンの遺体が出土し、三内丸山の縄文遺跡には遺骸にベンガラを散布した跡がある。したがつて、赤と呪術との関連を追跡する。

後期旧石器時代一万八千年前頃の周口店上洞人は埋葬した遺体周囲に赤い粉を撒き、三、四万年前のビレンドルフの石のビーナスは子孫繁栄を願つて赤く彩られ、四万年前頃のアルタミラ洞窟などの聖域に赤く塗つた人物

が描かれていた。

前期旧石器時代には、三五万年前頃のテラアマーラ原人の残した褚土の塊が出土し、七三万年前頃のイゼルニア遺跡に褚土が付着した石組が残つており、これは住居出入口に赤い石を配置したのだろう。恐らく、旧石器時代の人たちは、日、火、血の色・赤に神秘を感じ、魔除けの赤を信じるようになり、七三万年前頃には、魔物の出入口に赤い呪符を施し始めたのではなかろうか。

六 実用説を支える資料

古代エジプトの目の隈取り化粧は、強い光から目を保護する実用的目的で施されたという説もあり、この化粧は新石器時代まで遡ることができた。

実用説に關わる旧石器時代の資料としては、七万七千年前頃のプロンボス洞窟と三五万年前頃のテラアマーラ原人キャンプ跡に残されていた褚土は日焼け止めに使用したと推測されている。

化粧用か否かは別として、一五〇万年前頃のガデブ遺跡にも褚土使用の跡があつた。灰や炭も日焼け止めになるので、火使用の跡を探ると、一五〇万から一〇〇万年前のエソワソジャ遺跡に認められた。したがつて、実用的な光防御の化粧は褚土と火使用の形跡から一五〇万年前頃に始まつていた可能性がある。

二 猿人の時代

一九二四年に猿人アウストラロピテクス・アフリカヌスが発見され、猿人の名が知られるようになつた。現在知られている最も古い猿人は七百万～六百万年前のサヘラントロップス・チャデンシスであり、原人が現われたのが、二五〇万年前頃とされているので、人類歴史の半分以上は猿人の時代が占めている。とはいゝ、猿人に関する研究の歴史は日が浅く、化粧関連の資料は乏しいのが実情である。

現在ヒト科動物の定義は『直立二足歩行』であり、出土した化石の骨格から猿人は直立二足歩行が可能と結論され人類の仲間入りしたのであるが、猿人類の脳容積は類人猿とほとんど変わらない。

第三節 人類の進化

石器時代の出土品を頼りに化粧の起源を追求してきたが、出土品は石器や骨、褚土のような化学的に安定な無機質に焦点が当たり、片手落ちな結論を導きかねないので、これまでとは違った観点で古い時代の化粧を検討することも必要であろう。

そこで、ここでは人類の進化に目を向けることにしよう。人類進化といつても、当然のことながら化粧行動が可能な構造と機能（形質）の進化ならびに化粧に関連する文化的行為の発生に焦点を当てる。

一 サルの遺産

動物園へ行くと、サルが顔を撫でているのをよく見掛ける。顔を撫でる行為は顔にものを塗る行為を約束しているよう思えるので、最初に、サルが獲得した形質と文化に目を向けよう。

ヒトがサルから分化したことは衆知のことである。ヒトとサル、即ち靈長類は七千万年前頃に原猿が現われてから樹上生活するようになり、一千五百万年前頃に類人猿が現われる間にサルは木の枝を掴んだり、握ったりするとの必要性から母指対向性、手足の指紋、平爪などの構造を確保した。また、三次限空間を移動する樹上生活の必要により物を立体的に見、色を感じる機能を得る

には二足歩行を完成させ、河辺林を伝つて草原に進出して水辺に生活の基点をおき、肉食獣から身を守るために集団生活をしていたと推測されている。

三 原人の時代

原人は最初のホモ属であり、前期旧石器時代を担つていた。原人はほぼ二五〇万年前に誕生し、晚期の猿人と同時期、同所に共存していた。

原人進化の特徴は脳の巨大化であり、脳の発達は人類進化の武器であったが、脳の発達に伴い新生児の頭蓋が拡大し、そのうえ直立姿勢が完成するにつれて上体の重量を支える必要から骨盤が発達して産道狭窄が生じたため、未熟児出産が種の維持に必要不可欠な条件となり、その結果、幼児期や學習期間の延長に拍車をかけた。ホモ化した人類は幼児期が長くなり、育児のために一夫一婦制になつていたと想像されている。

原人の生活は狩猟・採取の混合経済で支えられ、統率者の下で家族とともに血縁関係で結ばれた二、三十人くらいの集団・ヘルドが形成され、食肉獣が跋扈するサバンナでは強い糾が必要とされた。

一五三万年前の初期原人の男児全身骨格がツルカナ湖畔で発見され、ツルカナ・ボーイと呼ばれるこの骨格から、まだ言語機能は未発達であるが、乾燥性熱帯気候のサバンナに適した体型をもち、現代人的な無毛性と発汗

による体温調節機能を備えていることが想定されている。

その後、原人の進化が更に進み、出アフリカを果たす頃には、言語機能が発達して言語によるコミュニケーションが可能となり、家族ごとの住居も作られるようになつたとされている。原人における脳の発達は、道具づくりや火の使用にみられ、現在知られている最古の石器は二五〇万年前に原人が作つたといわれている。

第四節 序曲総括

考古学的資料に沿つて旧石器時代の化粧史を外挿すると、一万八千年前の沖縄には成人標識の抜歯習俗があり、七万七千年前頃の南アフリカ・ブロンボスの旧人型ホモサピエンスは、美的目的の装飾や身体彩色を施していた。この化粧は赤土によるもので日焼け止めを兼ねていたと推測されている。

化粧が推定されている最も古い資料は三五万年前頃のテラアマーダ原人が日焼け止めに使つた赤土であり、これは狩猟の無事と豊獵を祈願する化粧でもあった。化粧に関するか否かは別として、二〇万年前頃のスウォンゲスクーム遺跡には美的センスを感じさせる石器があり、七三万年前頃のイゼルニア遺跡には呪術の発生を思わせる赤土が使われていた。

た。

参考文献

- 樋口清之、化粧の文化史、国際商業出版、一九八二
青木英夫、日本化粧科学協会報一一号、一九九〇
諫訪元、朝日新聞日刊、二〇〇三・六・二九
河合信和、ネアンデルタール人と現代人、文春新書、一九九九
今西錦司ら、人類の誕生、河出書房新書、一九八九
諫訪元、新書アフリカ史、講談社現代新書、一九九七
ファッキー著、片山一道監訳、人類の起源、同朋舎出版、一九九三
馬場悠男監修、人類の起源、集英社、一九九一
NHK第一テレビ、ほ乳類大自然の物語⑨、二〇〇三・七・三一
河合雅雄、サルからヒトへの物語、小学館、一九九一
(次号に続く)

更に古くは、一五〇万年前頃のガデブ遺跡に赤土使用の跡があり、火使用の形跡は一五〇万—一〇〇万年前のチエソワンジャ遺跡に認められた。火使用によって得られる炭や灰は赤土とともに光防御に利用できるので、一五〇万年前頃には日焼け止めの化粧が始まっていたかも知れない。

一方、人類進化の過程をサルの時代から原人の時代に向けて内挿すると、サルの時代に化粧行為の必須条件である立体視と色感を獲得し、母指対向性などの構造を確保したことにより塗布行為を可能にした。現にオマキザルは虫除けに植物の葉を塗っている。そのほか、ニホンザルの水浴が知られているので、サルでさえも動機があれば、塗布や水浴を行う能力を有しているのである。

猿人の時代に入ると、直立二足歩行を始め、ラエトリに残された猿人の足跡に見られるように、三五〇万年前頃には二足歩行を完成させ、河辺林を伝つて草原に進出し、水辺を生活の拠点とするようになった。

原人は二五〇万年前頃に誕生し、乾燥性熱帯気候に適応するため、毛を退化させ汗腺を発達させてきた。それを裏付ける証拠が一九八四年にツルカナ湖畔で発見された。この証拠は一五三万年前頃の初期原人少年・前出ツルカナボーイの全身骨格であり、ボーイは乾燥性熱帯気候のサバンナに適した体型をもち、現代人的な無毛性と発汗による体温調節機能を備えていることが立証され

還暦からの考古学（二十二）

桜井茶臼山・壱与・磐余王朝（その3）

中山喬央たかひろ

まえおき

前回に引き続き、博多湾沿岸地域における鏡の大量出土状況について説明しますが、それに先立つて世界最古の鏡大量出土状況を詳細に記した青柳種信の業績を紹介し、その記述に基づいた中山平次郎の探求、それに伴う発掘調査の実態について触れます。

更に鏡の一括大量埋葬を発生させた博多湾沿岸地域には、大陸・半島を通じ、遠くインド、エジプトの文化も流入すると共に、日本列島と世界との文化・交易の接点として、新たな金属製鍊、ガラス鋸造等の新産業も勃興し、あたかも小アジアの北西隅にあるトロイアとか、イラン南西部に位置するスーサのような存在となっていたことを考察します。

青柳種信

この功により大正五年十一月、青柳種信は従四位を追贈されました。墓所は福岡市廉原顯乘寺に在ります。

三雲遺跡調査にいたる経緯

三雲遺跡を最初に世間に紹介した文献は、文政五年（一八二三）に青柳種信が著わした『柳園古器略考』です。彼はその中の「三雲古器図考」で、三雲村の農長清四郎が南小路で土塀を築く為に三尺ほど掘ったところ、有柄銅剣と銅戈を発見し、その下に朱を入れた小壺があり、さらに掘ると大甕2個があつて、口と口とを合せていた。これは甕棺墓で、その中に古鏡大小三五面、銅矛大小二口、勾玉一、管玉多数があり、また鏡を重ねた間には、経二寸八分の扁平で中間に穴がある硝子製品（壁）があったことを、これら出土品を図示して詳細に説明しています。

更に埋葬方法として、石槨の代わりに甕を用いた事にも触れております。

この後、翌文政六年（一八二四）にも、『筑前国怡土郡三雲村古器図説』を著わし、その中にも「筑前国怡土郡三雲村所掘出古器図考」があり、ほぼ同様の内容ですが、後者は写本のようで、図などに変化が見られます。

一方昭和五四年に福岡市歴史資料館所蔵の青柳種信資料が公開されましたが、この中に三雲出土の三種類の鏡

の拓本と、銅剣・銅矛・銅戈の図があり、文政五年の本は、この写しであることが明白となりました。

第四番目の記録は、文久三年（一八六三）に、同じく青柳種信が手がけた『筑前国統風土記拾遺』で、これは出土地点を最も正確に記録していました。

中山平次郎

明治四年六月三日生まれ、昭和三十一年四月二九日没（一八七一～一九五六）。明治～昭和期の病理学者であります。京都に生まれ、東京帝大医科大学を卒業し、明治三九年京都帝大福岡医科大学病理学教授になりました。人体寄生虫についての業績の他、古代九州の考古学研究を行いました。特に北九州を中心とした弥生式土器文化の研究、元寇防墾の名付け親として知られています。

その中山平次郎が「三雲字南小路に於ける特殊埋蔵物発掘地点」と題しまして、大正十二年五月発行の『考古学雑誌』第十三卷第九号で発表しておりますので概要を紹介します。

三雲の遺物発掘地点の所在については、青柳種信の『筑前国怡土郡三雲村所掘出古器図考』（本誌すなわち考

種信、初めの名前は種磨といい、通称は勝次、柳園と号しました。明和三年（一七六六）黒田福岡藩で六石三人扶持の下級武士の家に生まれました。幼い時、井上周徳の学僕となり、弱冠にして家を継ぎ、屡々江戸に祇役しました。祇役の途中、伊勢の松阪で本居宣長に会って、弟子となり、江戸では賀茂真淵の高弟野田誠成をはじめ、加藤千蔭、村田春海等の国学者を歴訪して学識を深めました。

『筑前国統風土記拾遺』編集の功勞により、生涯で二度加増を受けましたが、それでも僅か十一石四人扶持の微禄藩士でした。

しかし我々は彼の著した『柳園古器略考』『筑前国怡土郡三雲村古器図説』『筑前国統風土記拾遺』等によつて、我国独自の文化である、世界最古の鏡一括大量埋葬の実態を知ることが出来るのであります。

古学雑誌七ノ二、銅鉢銅劍考、高橋健自君)には「南小路」なる地名が見え、同じく青柳氏の著書『筑前国統風土記拾遺』には同じ発掘の事を記した文に「産神細石社の西半町田間」とあるのを見つけた。拾遺の細石社、即ち古器図考の佐々禮石神社は、今も三雲に現存する同地の産神であるから、その西方半町程の田圃のなかの南小路と称する地名のあるところを探してみようと思いつた。

しかし明治に入つて小字の整理が行われた為か、簡単には見つける事が出来なかつた。

しばらくして、三雲を訪問した際、古器図考に南小路が農長即ち庄屋の清四郎、抱の田圃とあつたことを思い出し、昔の庄屋の家に就いて尋ねれば、或いはこの事が判るのでないかと、部落西南隅の構えが最も大きな平山氏宅を訪問、尋ねてみたところ、主人は不在であつたが家人が昔庄屋をしたことがあり、南小路という小字は、同家裏の田地の名であると、その地点へ案内してくれた。しかし同家の先祖に清四郎という人物はいないという事、及び古器図考の文面とは微妙な違いがあることに気が付き再度訪問して調査する必要を感じた。

次の日曜日再度三雲の平山氏宅を訪問したところ、主人が在宅し、その話から全てが解決されることとなつた。

主人の話による、清四郎は平山家の人ではなく、以前

出土地点は、「鍛溝（三雲村と井原村の接する地点）という溝の中」と書いてあり、それは南小路の南方一二〇m地点なのですが、現在のところ確認されておりません。

三雲南小路遺跡の調査

この「伊都国」の中心地ともいえる「王」の居住する地域で、昭和五十年度を初年度とする三雲地区圃場整備が計画されます。昭和四八年度、この計画が福岡県教育委員会文化課に持ち込まれ、前原町土地改良区は直ちに対応し、昭和四九年度から調査を開始します。

この結果、南小路1号甕棺墓に続き、2号甕棺墓も検出する事となり、盗掘を受けてはいたものの、貴重な埋葬品を数多確認する事が出来ました。これは青柳種信執筆内容の信憑性を裏付けると共に、1・2号甕棺墓副葬品発見という大きな成果に結びつく事となりました。

第一次調査（昭和四九年度）

昭和五十年二月十四日
南小路の甕棺出土推定地に50×70のトレンチ設定。

一月十六日
近世遺物に混じつて銅鏡片や朱を検出。

この家の真向かいに住んでいた三苦家の先代で当主よりも四代前の人ということ。文政の頃在世の人物として符合し、この三苦家も昔庄屋をされた家柄ということであるから、農長清四郎なる人物は三苦清四郎であることが判明した。

次に遺跡の場所であるが、平山家主人の説明により、農長清四郎の宅の南隣に南小路とて農長が抱の田圃ありの文と「細石社ノ西半町田間」記事に一致する場所を見つける事が出来たのである。

更にこの地点は昔ながらの畠地であり、地面に散在する遺物を調査すると、弥生式と認める事の出来る素焼土器碎片の散列があり、なかに二三、斎錠（甕棺）の破片が混じっているのを見つけた。

一方『柳園古器略考』・『筑前国怡土郡三雲村古器図説』・『筑前国統風土記拾遺』には、三雲の南側に隣接する、井原村鍛溝でも、天明年間（一七八一～一七八八）に溝の岸を穿つたところ、朱が流れ出した一つの壺を発見し、その中から古鏡二一面、鎧の板のようなもの、刀剣の類、巴形銅器三個を取り出した事が記録されていると共に、『柳園古器略考』の「同郡井原村穿出古鏡図」には銅鏡と巴形銅器の拓本を、『筑前国怡土郡三雲村古器図説』中の「筑前国怡土郡三雲村所掘出古器図考」には見取図を掲載しています。

一月十七日
ガラス勾玉・管玉・鏡片が続出。

一月十九日
金銅製金具出土、四個体分となる。

二月二六日
ガラス勾玉一個となる。

三月八日
雷文鏡の乳の部分発見。

第二次調査（昭和五十年度）

文政五年発見甕棺の原位置確認の為、該地にあつた物置小屋を移転し調査したところ、推定通り小屋の直下で盗掘穴を見つけ、その先に甕棺墓を検出した。これが文政五年発見の甕棺墓であり、その西側に多くの撹乱穴があり、もう一基の甕棺墓を発見することができた。それにより文政五年発見の甕棺墓を1号とし、新発見の甕棺墓を2号とした。

十一月十六日

2号甕棺墓も盗掘されている事が判明。棺内の撹乱土中には多くの朱が含まれている事、及び棺内上層で連弧文日光鏡片三面分を発見。

十一月十七日
ガラス製勾玉検出。

十一月十九日

ガラス容器細片を利用したと思われるペンドント発見。

十一月二十六日

完形の鏡発見。

十一月二十八日

硬玉製勾玉発見。

この間、日を追うごとに鏡片、ガラス製勾玉は出土量が増加し、鏡は一〇面分、ガラス製勾玉は十二個となつてゐた。

一方棺外では、墓壙の搅乱されていない床面に鏡片を発見、五面分の鏡片、棺外副葬を確認することが出来た。また1号甕棺墓盗掘穴からは、鏡・璧・管玉・四葉蒂形飾金具の破片が多く出土したが、甕棺本体は完全に壊上られていたようで発見されず、出土したのは小破片のみであつた。

一方井原鏃溝遺跡甕棺墓確認調査は前年に引き行つたが、墓地群は発見されず、弥生時代後期から古墳時代の住居跡が検出されただけであつた。

第三次調査（昭和五一年度）

十一月六日

次に遺跡及び甕棺墓別に一括埋葬鏡を中心に副葬品の出土状況と、時期について説明します。

三雲南小路遺跡2号甕棺墓

1号甕棺墓の北西に隣接して発見したものです。超大型の甕を合せ口にした接口式の甕棺です。下甕の内に原位置を保つた8号異体字銘帶鏡（連弧文銘帶式）があり、更に円形の影が四面分残つていて、復元できた鏡のうちで、合致するものがありました。

棺内には青銅利器、鉄器の痕跡はありませんでした。出土したのは星雲鏡一面と異体字銘帶鏡（大半が連弧文銘帶式と判明）二一面分、及び硬玉製勾玉、ガラス製垂飾と勾玉です。これら出土遺物と甕棺の型式により、時期は弥生時代中期末葉で、須玖岡本遺跡と次に述べる井原鏃溝遺跡の中間に位置すると考えることが出来ます。

井原鏃溝遺跡

あるも有といえども是また悉くは讀難し。字形も上と同じ。其の質白銅には非ず紫黒色にして光瑩はない。古雅なることは三雲に出たるよりは勝りて見ゆ（下略）

〔三雲村所掘出古器図考〕の拓本等により考察した結果を、富岡謙藏が『考古学雑誌』第八卷第九号508～510頁に次の様に掲載しております。

（前略）

これは場所も確定できておりらず、出土遺物も全て拡散してしまいました。しかし手掛かりはあります。

青柳種信が著わした『筑前国怡土郡三雲村古器図説』

を、富岡謙藏が『考古学雑誌』第八卷第九号508～510頁に次の様に掲載しております。

更に富岡は
遺跡より銅劍、銅鋸を出さざりし点において三雲・須玖二遺跡とは異なるが、遺物が壺に納められ、しかも封土を持たない地下より出土して、朱が混じつてゐる状態は、三雲遺跡と一致し、特にこの遺跡だけ鐵器を伴うことが興味を惹く事と、鏡が何れも四神鏡の類で、中に委言之、始又は漢有善銅の銘を持つ物があり、外区の文様が様々な形式に属して鏡の年代考定にヒントを与え、伴出の銅器が巴形をして、半を欠く。と述べております。

この遺跡で出土した鏡は鉢で数えますと二一面となり、そのうち十八面まで、復元されております。

種類は何れも方格規矩四神鏡で、鐵器である鎧の板のようないもの及び刀劍の類が出土したことと共に、共伴した巴形銅器により、佐賀県・桜馬場遺跡と同年代である、弥生時代後期前半と考えられております。

平原遺跡

仲田一一十六地区1号住居跡床面中央部で、表面緑色のファインス丸玉を発見した。時期は弥生時代後期である。

のファインス丸玉を発見した。時期は弥生時代後期である。

地で、農業を営む井出勇佑、節子夫妻が長男信英氏とともに、蜜柑の苗木を植えるため、自宅に近い曾根丘陵の一角にある通称「ツカバタケ」の自家の畠で、幅1m、深さ80cmほどの植樹溝の掘削中に、土中から大量の銅鏡片が出土し、平原遺跡調査の端緒となりました。

その後、福岡県教育委員会が事業主体となり、考古学者の原田大六を調査主任とする平原遺跡調査団が組織され二月一日調査開始、五月十七日までの約三ヶ月半調査を実施しました。

その結果、遺跡からは①弥生時代中期初頭の竪穴住居、土壙などの集落遺構、②弥生時代後期の墳丘墓、土壙墓群とこれらに伴う祭祀遺構、③古墳、④鎌倉時代の土壙墓などが確認されました。

このうちで最も重要な②に属する1号墓の盛土部分は調査当時既に削平されていましたが、地元ではこの場所を「ツカバタケ（塚畑）」と呼んでいたことからも明らかなように、近世まで墳丘が存在したことが知られ、その高さも2mを超える可能性があります。

周溝は東西13m、南北9.5mの長方形の範囲を囲んでおり、南東の隅で溝が途切れていますので、ここから墓に出入したものと思われます。また北西の隅から北に向かって排水溝がのびています。

周溝内からは、弥生時代後期前半と終末期の土器片が

出土しており、棺内頭部から出土した後漢後半期の特徴を持つとされる耳璫（ピアス状装飾品）が検出されています。

共に、一号墓の年代を定める上で貴重な資料で、弥生時代後期前半の土器周溝内出土と、棺内から発見された後漢後半期の耳璫により、從来言われてきた古墳時代のものであるとか、弥生終末期～古墳時代初頭のものではなく、弥生時代後期中葉の遺跡で、実年代は二世紀のものであると考えます。

平原遺跡1号方形周溝墓出土遺物の概要

一、銅鏡

内行花文鏡—七面出土

我国では、内向きの花弁状の文様を花に見立てて内行花文鏡と呼びますが、中国では之を光の光芒表現とし、外側に配された雲雷文との組合せで、光と影を組み合わせた陰陽説を反映した文様と考えられ、連弧文鏡と呼ばれています。

この連弧文鏡は、中国大陸では前漢初頭から後漢半ば過ぎまで鋳造されています。出土した七面のうち五面は、同じ型から鋳出された同型鏡と考えられていますが、雲雷文帯が太い同心円の圈線表現と簡略化され、更に鏡の中心に放射状に配された

八葉座は他に類例を見ないもので、これらの鏡が仿製鏡であることを物語っています。

更にこの五面の鏡は、直径46.5cmで、ほぼ完全に復元された十号鏡は、重さ8kgに達し、日本列島はもとより、中国大陸にも其の例を見ない大型鏡であります。

又他の二面のうち、面径18.74cm～18.75cmの16号○宜子孫銘内行花文鏡は、『故宮藏鏡』図版18の長宜子孫銘鏡（直径23.3cm、重さ1,288g、後漢）と雲雷文帯が相似しております。

方格規矩四神鏡—三一面出土

この鏡は、中国大陆では前漢後期から、後漢・三国期に盛行した鏡です。鉢を中心として方格で囲み、各辺の中央から外向きにT字形、対面に逆L字形、其の上、方格の角の対面にはV字形を配して、これらによつて分割された八区画に青龍、白虎、朱雀、玄武の四神と神仙禽獸などを配置するのを基本としています。

これは漢代に流行した天圓地方觀に基く、陰陽の思想、四神の思想や神仙思想などと結びつく圖文表現と考えられております。

日本列島では、弥生時代後期前半から古墳時代前期にかけて出土しています。

四螭鏡—一面出土

鏡背を乳で区画した四区画に逆S字の龍文を配し、その内外に小禽獸を配置する鏡式です。各龍文の背部に朱雀一体、龍、虎が表されており、面径は16.52～16.55cmと同種の鏡としては大型です。
〔泉屋博古・鏡鑑編〕33、虺龍文鏡（前漢後期・径9.3cm）の流れを汲むものと思われます。

二、玉類

ガラス勾玉—頭部に四条沈線を巡らす、形の整つた丁子頭の大型勾玉三個で、穿孔は両側から行われ、深みのある青色をした鉛バリウムガラス製の優品です。
瑪瑙管玉—弥生時代の資料としては極めて珍しい黄丹色の良質の瑪瑙で作られたエンタシス状、両側穿孔の管玉十二個です。

ガラス管玉—瑪瑙管玉と同様エンタシス状です。約三十個が確認されていますが、青緑色で半透明、ガラスの質感を残すものや、著しく風化して白色化したもの、あるいは淡茶色を呈するものなど様々です。ガラス勾玉同様、鉛バリウムガラス製です。
ガラス連玉—経4～5mm、長さ1.5～2mmの縹色（ダックブルー）のソーダ石灰ガラス製の玉で、上下二層構造「重層ガラス」の精緻な優品です。破片を含め多数出土しております。

このソーダ石灰ガラスは最も一般的なガラスで、石英

など白くて堅い石や砂を珪酸とし、草木灰や天然ソーダをアルカリとし、石灰を混合して1000度以上の高温で熱すると出来る、最もポピュラーなガラスです。

上下二層構造の製品は管見するところ他に見当たりませんので、当地で鋳造された可能性が強いものと考えます。

ガラス小玉—棺内から500個を超える直径6~8mmのアメ色のカリガラス製小玉が出土しました。

又周濠の西北角に存在した7号土塙墓から出土した赤褐色不透明な「ムチサラ」と呼ばれるソーダ石灰ガラス製のガラスは、紀元前三世紀頃からインドで製作が始まわり、東南アジアに広まつたといわれているもので、東南アジア地域から直接か、あるいは中国経由で当地に持ち込まれたものと考えられます。

更に棺内頭部附近から経2~4.5mm、長さ1~4mmの紺色を呈する良質のガラス玉が多数出土しています。

ガラス耳瑠—三點出土。

前にも述べましたが、弥生時代としては管見する限り国内唯一の出土例です。重要な事は、この出土場所が棺内の遺体埋葬頭部箇所と一致し、被葬者がピアスをした女性であると判明した事です。

三、鉄器

鐵素環頭大刀—全長80.2cm、環頭部は右に曲がり、刀身

はほぼ直線です。

鐵鎌—1号墓の北側の周溝から、弥生時代の鐵鎌としては、例の無い中型双孔式で細身のもの三本、大型丸型多孔式で身幅が広く逆刺が極端に長いもの五本、大型五角形多孔式のもの一本が出土しました。

鉄鉈—1号墓周溝の東側から出土しています。切先を欠きますが、残っている部分の長さ8.0cm、幅1.9cmです。

ノミ状鐵器—これも1号墓、東側の周溝から出土しました。残存していた長さは9.7cm、幅0.7cmでした。

鐵刀子—東側の周溝から出土しました。長短一本です。

鐵刀子—東側の周溝から出土しました。長短一本です。

其の他特記事項

1号墓の主体部は、墳丘の中央よりかなり北東に偏つて墓壙が掘られていました。その規模は東西約4.6m、南北の西側3.22m、東側3.5m、深さ約44cmで、墓壙の中央よりやや北側に割竹形木棺を納めていました。棺材は腐朽していましたが、内面に塗布された朱からプランを確認すると、長さ3m、西側幅約82cm、東側幅68cm、西側深さ約22cm、東側深さ7cmの木棺でした。棺底は丸底ですから、木棺横断面が正円形と考えると、中央部直径は約2.0cmです。

約1mとなります。

木棺は厚さ4cmほどの青粘土を用いた棺床に据えられ、棺内には多くの朱が納められていました。木棺の検出時に、西側から朱と共に、管玉、勾玉などの玉類と、耳飾りである耳瑠が出土しましたので、西側に頭を置く西枕と考えることができます。

墓壙内と棺内には多量の副葬品が納められています。棺内には前述の通り西側から多くの玉類が出土しました。其の数量は、瑪瑙管玉十一個、ガラス管玉三十個以上、ガラス小玉約五〇〇個、細片を含むガラス連玉多数、ガラス耳瑠片三個に達します。

また鉄素環頭大刀一口、ガラス勾玉三個、ガラス小玉約五〇〇個は、其の出土状況から、木棺の上に置かれていたものと考えられます。

棺外墓壙内からは総数四十面の鏡が出土しました。その場所は墓壙の四隅と木棺南側の中央部の五カ所に限定されしていました。そのうち一ヶ所は蜜柑植樹溝により搅乱されていましたが、他の二ヶ所では破碎された状況で銅鏡が出土しました。其の他の一ヶ所も鏡片としての出土でした。

其他、1号墓の東14.8mで、大柱の掘り方と柱痕跡に敷設するスロープ、大柱を巡るよう検出された三日月形土坑も見つかりました。一方1号墓墳丘の西側では二対の鳥居状並び柱列、北側で一对の並び柱列が発見されました。

三雲南小路遺跡 1号墳棺墓

BC 200~300年（弥生時代中期中葉）

鏡—重圓形画鏡一面、四乳羽状獸文地雷文鏡一面、異体字銘帶鏡（連弧文銘帶式）十八面、異体字銘帶鏡（重圓雙銘帶式）三面、異体字銘帶鏡片三面、鏡緣（異体字銘帶鏡？）八面、鏡鈕（異体字銘帶鏡？）二面、合計三十六面。

伴出遺物—有柄中細銅劍、中細銅戈、細形銅矛、中細銅矛、ガラス製璧、ガラス製勾玉、管玉、金銅製四葉座飾金貝。

須玖岡本遺跡D地點

BC 100~200年（弥生時代中期後半）

鏡—草葉文鏡三面、星雲鏡五面、異体字銘帶鏡十六面、其他鏡片多数。

伴出遺物—中細銅劍、異形銅劍、銅矛、中細形銅戈、ガラス璧、ガラス勾玉、ガラス管玉。

三雲南小路遺跡2号甕棺墓

B.C.0～100年（弥生時代中期終末）

鏡一星雲鏡一面、異体字銘帶鏡（連弧文銘帶式）一面、異体字銘帶鏡片三面、鏡緣（異体字銘帶鏡？）一面、合計二三面。

伴出遺物—ガラス製垂飾、硬玉勾玉、ガラス勾玉。

井原鑄溝遺跡

A.D.0～100年（弥生時代後期前半）

鏡一方格規矩鏡（複波鋸齒文緣四神鏡）三面、方格規矩鏡（凹帶緣四神鏡）一面、方格規矩鏡（唐草文緣四神鏡）七面、方格規矩鏡（唐草文緣四神鏡）一面、方格規矩鏡（獸文綠四神鏡）一面、方格規矩鏡（流雲文緣四神鏡）四面、方格規矩鏡一面、合計一八面。

伴出遺物—凹形銅器、鎧の板の如きもの、刀剣の類。

平原遺跡1号墓

A.D.150～200年（弥生時代後期中葉）

鏡一方格規矩鏡（龍雲文緣四神鏡）九面、方格規矩鏡（複波鋸齒文緣四神鏡）一三面、虺龍文鏡一面、雷文帶内行花文鏡一面、同心円文帶内行花文鏡五面、合計四十面。

伴出遺物—ガラス勾玉、瑪瑙管玉、ガラス管玉、ガラス連玉、ガラス小玉、ガラス耳璫、鉄素環頭大刀、鉄鎌、鉄鉈、ノミ状鉄器、鉄斧、鉄刀子。

を指すようになります。

ところがその後、鑑の字が「かんがみる。反省する。」という意味で用いられる事が多くなる一方で、鏡は器物としての「かがみ」を表すのが主たる目的の語となります。

六朝時代の書物『劉子新論』因題第二十では

火は吹熱を以つて焰を生じ、鏡は瑩払（えいぶつ）（磨き清めること）を以つて鑑と成る。

と記し、器物としての鏡、能力としての鑑の字を、それぞれ使用しております（拙稿『まんじ』106号148～149頁）。

このように、ただ単に物を写す実用の器物をあらわす

ものとして現れた「かがみ」は、次第に神靈性を有するものと考えられるようになります。

先ず内編『莊子』で明鏡止水が道の体得者の象徴とされ、外編『莊子』では、鏡を聖人帝王の権力のシンボルとします。

前漢王朝末期からは神仙讖緯思想の影響で、鏡はこの世界の政治的支配者、帝王権力の象徴として神靈化し、神靈化して行きます。魏・晋代に入りますと深山幽谷に入つて自ら道術を修める神仙術が盛んになり、鏡の呪術的な威力が強調されるようになります。

このような鏡に対する神秘的宗教的な思いは、その

中国大陸・朝鮮半島における当時の鏡出土状況及びその由来と経緯

中国大陸

中国では四千年前の齊家文化で銅鏡が二面検出されたのに続き、「婦孔墓」からも出土品がありますが、銅鏡の製作と使用が全国的になるのは、戦国時代からです。

ただし銅鏡の型式編年研究に大きな役割を果たした洛陽焼溝漢墓でも、前漢中期から後漢後期までの墓、一二五基から銅鏡一一八面と鉄鏡七面の出土であり、同一墓で鏡の大量埋葬は見られませんでした（拙稿『まんじ』105号、157～158頁）。

今度は鏡に使用されました監・鑑・鏡の三字につき、その由来と経緯等について考えてみます。

先ず水の入った、たらいに向けている字の構成から、監が、「水かがみを見る。ひいてはかんがみる。みはる」という意味を表す文字として登場します。

その次に金を加えた鑑（鑒・鑑は鑑の別体）という字が現れ、鏡に映してみる、手本とする、いましめとする、という意味などに使われます。

そして鑑の字が長く用いられた後、鏡の字が現れ、後漢時代の辞書『廣雅』に「鑒、これを鏡と謂う」とあるように鑑の字と、鏡の字が平行して用いられ、同じもの

時々の鏡の銘文、図像等からも覗うことができます。

朝鮮半島

弥生時代早期～中期前半頃の朝鮮半島青銅器副葬遺物の組合せは、次の四通りに分ける事ができます。

- ① 遼寧式銅劍、磨製石劍、有茎柳葉形磨製石鏃に丹塗り磨研壺のセット。—松菊里、鎮東里遺跡。
- ② 細形銅劍、多鈕粗文鏡、防牌形銅器、劍把形銅器、無茎式磨製石鏃に円形粘土帶土器、黒色磨研長頸壺のセット。—大田槐亭洞、牙山南城里、禮山東西里、扶餘蓮花里、清州飛下里、沿海州イズヴエストフ丘遺跡。
- ③ 細形銅劍、銅矛、銅戈、多鈕粗文鏡、多鈕細文鏡、銅鑿、銅鉈に黒色磨研長頸壺のやや退行型式のもののセット—扶餘九鳳里遺跡。
- ④ 細形銅劍、多鈕細文鏡、銅鉈、銅斧、鉄斧がセット—黃海道鳳山松山里、和順大谷里遺跡。

この④の副葬遺物の組合せが弥生時代前期末～中期前半頃、北部九州で見られるようになります。

また朝鮮半島系の鏡である多鈕細文鏡は、佐賀県唐津市・宇木汲田遺跡の甕棺墓と、山口県下関市・梶栗浜遺跡の箱式墓からそれぞれ銅劍と一緒に出土し、奈良県御所市・名柄遺跡では銅鐸と共に伴で、大阪府柏原市・大畠

遺跡からは単独でそれぞれ出土しています。

しかし博多湾沿岸地域での鏡一括大量副葬は全て中国鏡とその仿製鏡で占められ、朝鮮半島系の鏡は全く含まれておりませんでした。

中国鏡大量一括副葬の発生原因

二つの原因と、それを裏付ける四つの事例を紹介します。

①当時の博多湾周辺地域は広く中国大陆・朝鮮半島と結びついていただけではなく、日本列島内でも漸く活発となり始めていた経済力を活用して、中国大陆・朝鮮半島との交易網を整備しつつあつたということです。

これは丁度、ダーダanelス海峡を通じて行われた海上交易と、ヨーロッパとアジア大陸内陸部との陸上交易を統制する君主がいた城塞都市として大きく発展したトロイアとか、メソポタミア文明とインダス文明の交易中継点として名高いイラン西部のスーサと似ています。

そして交易によりもたらされた富により、急速に都市国家としての体制を整えるようになります。

②しかし博多湾岸諸国の王達が直面した事実は厳しいものでした。それは中国大陆に強大な統一国家が成立し（BC221年、秦による統一）、次いで朝鮮半島を侵略したからです

（BC108年、漢の武帝、衛氏朝鮮を滅ぼし楽浪・真番・臨屯・玄菟四郡を設置）。

これらの出来事は、今までの体制を維持していた大陸・半島の支配者階級、専門工人にとつては死活問題でした。

彼等のうちで当時すでに朝鮮半島西海岸を通じて、東半島まで交易圏を拡大していた博多湾沿岸諸国に亡命を求め、新天地で活路を開こうとしたグループが出来たことは、当然の結果と考えます。

それが一番良く現れているのが、中国鏡の大量一括埋葬の採択だと思います。

鏡は中国大陆における青銅器文化を考える時、この時代唯一、発展しつつあつた分野です。警戒すべき中国の最新情報の入手、すなわち中国大陆文化を知るには様々な鏡を交易で入手し、銘文・文様の持つている意味、新しい金属铸造方法の入手研究を、亡命した渡来人グループのそれぞれが持つている分野の特技を生かして研究させることは、国防上必須の課題でした。

そのため湾岸諸国の王達は、その富を活用して様々な鏡を入手し、それぞれのグループに研究材料としてレンタルし、様々な情報入手すなわち文字情報、神仙思想等中国文化を支えている新しい物の見方、考え方の解明及び青銅製品の铸造最新情報等を研究させ、その入手に努めたのだと考えます。

その一方で鏡には聖人帝王の権力の象徴であると共に、破邪、来世の再生、子孫の繁栄をもたらす魔力もあると考えられるようになり、権力者である王が死にますと、それらが伝世することなく、全てそれを入手して活用した王の墓に副葬されるようになつたのだと思料します。

それを裏付けるものとしては、

①三雲南小路遺跡1号甕棺墓出土鏡に、「周禮」「考工記」

に見られる銅と錫の混合比率が同じものがあり、これは周時代の技術を伝承する青銅工人の渡来を考えさせ、其の一方で須玖岡本遺跡甕棺墓一括埋葬鏡の鉛同位体比が全て、中国大陆遼寧・陝西・甘肃三省の三鉱山の鉛同位体比と一致し、BC一世紀には既に博多湾沿岸の奴国が、中国の中原の官営工房若しくはそれに順ずる優秀な工人を持つ工房の製品を交易で入手していましたことがあります。

また鉱山の開発、銅製鍊の開始につきましては、平原遺跡1号周溝墓出土の五面の当時世界最大の仿製鏡内行人文鏡五面の出土が、それを雄弁に物語つております。集中出土しています。通説では中国大陆での翡翠利用

はビルマ産が発掘されるようになつた一八世紀以降だとされていますが、「魏志倭人伝」に「青大勾珠二枚を貢す」と出てくる他、唐時代の小説『遊仙窟』にも「金の履物には翡翠が細工してあつた」（拙稿「まんじ」109号130頁参照）と記載されていて、古代から中国大陆で貴族・富裕階級に貴重な玉製品として珍重されていたことは間違ひなく、それが交易中継点の博多湾沿岸を通じて、大陸に渡つたことは明白です。

③三雲南小路遺跡・仲田地区の弥生時代後期住居跡中央からファイアンスが出土した事です。

ファイアンス製のうずくまるカバの小像が、エジプト中王国第十一王朝時代～第二中間期第十三王朝時代（BC2040～1650）ルクソール西岸、ドウラ・アブー・アル＝ナージャから出土しています。また前述のイラン南西部・スーサからは、BC六世紀～BC四世紀のエジプト風「ウジャト」な目を象った護符、ベス神を象つた護符（何れも明るい緑色で石英フリット、「軟質磁器に使う溶解したガラス質」）等が出土し、このファイアンスはシルクロードを伝わって入つて来たといわれている薬師寺金堂薬師如来像台座上框・葡萄唐草文よりも、七〇〇年以上も早く伝來したことになります。またファイアンスが出土したことにより、葡萄唐草文はギリシャから伝わつたものだといわれて

きましたが、エジプトから伝来したものだと考えた方が良いと思います。

岡部裕俊・角浩行・野田純子「倭人と鏡」第2分冊、埋蔵文化財研究会、一九九四年。
三年。

④最後に採り上げるのが、平原1号墓周溝の北西に位置する7号土壙墓から出土した「ムチサラ」と呼ばれるソーダ石灰製、赤褐色不透明なガラス小玉です。この種のガラスは紀元前三世紀頃からインドで製作が始まっていますが、漢代の中国では生産されておらず、そのまま交易品として持ち込まれたものです。

このように博多湾沿岸地域は、中国大陸に出現した強大な統一国家の影響のもと、弥生時代中期中葉（後期中葉）にかけ、日本列島と朝鮮半島・中国大陸を結ぶ交易の中継点として繁栄しますが、突如その繁栄を畿内に奪われます。

次回は、博多湾岸で発生した鏡の大量一括埋葬が桜井茶臼山古墳を初めとする、大和にどうして移ったのかといふことを中心に考察を進めたいと思います。

参考文献

- 青柳種信「三雲古器図考」文政五年（一八二一）、「同郡井原村所穿出古鏡図」、文政六年（一八二三）
橋口達也「甕棺と弥生時代年代論」雄山閣、一〇〇五年。
和田萃「古代日本における鏡と神仙思想」『鏡』社会思想社、一九七八年。

以上でござります。ご寛恕の程、お願い申し上げます。

お詫び

拙稿「まんじ」117号「還暦からの考古学」（一一一）におきまして、製本時のコンピュータ・トラブルにより誤字一八字が発生いたしました。

何れも○螭→×題です。

訂正箇所は171頁、下欄7行、上から4字。

下欄10行、上から4字。下欄11行、上から4字。

下欄15行、上から7字。下欄16行、上から2字。

下欄17行、上から8字。下欄19行、上から4字。

下欄20行、上から6字。上から12字。

172頁、上欄5行、上から5字。上欄7行、上から3字。

上欄8行、上から9字。上欄9行、上から5字。

上欄10行、上から7字。上欄11行、上から5字。

上欄12行、上から5字。

177頁、上欄14行、上から3字。

178頁、上欄3行、上から6字。

宮井善朗「青柳種信関係資料」『福岡市博物館名品図録』福岡市博物館、一〇〇〇年。
柳田康雄「三雲遺跡」1、福岡県教育委員会、一九八〇年。
廣川守「泉屋博古・鏡鑑編」泉屋博古館、一〇〇〇四年。
何林主「故宮藏鏡」紫禁城出版社、一〇〇八年。
松本健「メソポタミア文明展」NHK、NHKプロモーション、一〇〇〇〇年。

鏡（その14）

ピタゴラスの鏡

中山喬央たかひろ

まえおき

今回はピタゴラスの定理、すなわち三平方の定理である直角二角形の斜辺の上に立つ正方形の面積は、他の二辺の上に立つ正方形の面積に等しいという、日本では、昔は鉤股弦の定理といつていましたが、それを解明したピタゴラスと彼にまつわる鏡の話を、月面を利用した文字映像の伝達、悪魔が関係する衛星放送の観点等から説明し、最終的にはピタゴラス神話の解体にいたる経緯をお話します。

ピタゴラス

ギリシャの哲学者、数学者、宗教家で、生存したのは紀元前500年頃とされています。

彼はエーゲ海トルコ沿岸のサモス島で生まれ、南イタリアでピタゴラス学派を結成します。それは靈魂の救い

を目的とする新宗教で、宇宙の調和の原理を、数とその比例とした点に特色があります。

言葉を変えて説明しますと、靈魂の不死と輪廻を信じ、靈魂の浄化を説きました。其の一方で、世界の根源は数で、全ては奇数と偶数から成り立つとする考えです。そしてこの考えは、紀元前5～4世紀にかけて盛行し、特に数学・天文学・音楽の進歩に寄与しました。

前一世紀には新ピタゴラス学派として、其の伝統が復活します。

ピタゴラスと鏡の結びつき

この物語はアリストパネス（アリストファネスともいう）と、彼の註釈者のまわりに出現します。

プリニウス『博物誌』第30巻「ウェルギリウス『牧歌』8、69」に掲載されていて、周知の事実でした。

その一方で、1607年に刊行された「アリストパネスの古代註釈付き十一の喜劇」「アウエルリアエ・アロブルグム」の169頁にピタゴラスの物語が掲載されます。

これにつきましては、アレクサンドレイア時代末期のアリストパネスの情熱的な註釈者ディデュモスに基づいて、バシェが1626年、フランス・リヨン北東のブールカンブレスで刊行した『オウイディウスの書簡』608頁に次のような翻訳文を掲載しておりますので紹介します。

この種の、鏡を用いてなされるピタゴラスの発明による遊びがある。満月の時、誰かが鏡になんでも自分の望むことを血で書いて、それを他の人に伝えようと思う時、後ろ向きになつて鏡に書かれた文字を月の方へ向け、そして別の人気が注意深く月面を眺めれば、鏡に書かれたすべてのことが、ちょうど月に書かれているように読めます。……

この鏡とピタゴラスの関係につきましては、P・ブドウローが、パリで1919年刊行した『アリストパネスのテクストとその註釈者たち』84頁に見られますように、極めて広範囲に広がりました。

この中で前423年に作詞された「雲」は、鏡と月を、ソクラテスにストレプシアデスが言い返す話として、次のように結び付けています。

テッサリア（バルカン半島ギリシャ中部に位置）の魔女を雇つて、夜の間に月を引き降ろし、それを鏡みたいな円い容器に閉じ込めて、それを見張つていて、したら、どうだろうね。……月がもう上がらないとすれば、どこだって利息を払う事もいらないだろう。……錢を借りるのは月ぎめだからさ。

このテッサリアの魔女たちが夜の天体を引き降ろす技術を持っていたことは、プラトンの『ゴルギアス』513a、

先ず 1529 年、コルネリウス・アグリッパはケルンで『隠秘哲学』を刊行しますが、その卷一、第六章で次のように発表します。

さらに感嘆すべき別の不可思議は、誰かがなんらかの仕方で、絵を描いたり文字を書いたらしく、満月の出ている良い天気の夜に、それらを月光にさらすと、月面やその周りに姿を現わし、他の者たちは皆それを見たり読んだりすることができるのですが、そうした表象は空中高く上つてその数も増えるので、これは陣地や町が包围されているときには、情報を知らせるのに極めて有効である。これは、その昔ピタゴラスが実践し、そして私が実践し、そして知つているように、今日では何人かの人間には知られている秘密である。

アグリッパ自身もこの種の鏡を作成したようです。

更に、ラファエル・ミラーミは 1582 年、イタリア・ボローニャの北東フェラーラで刊行した『鏡の学第一部』への序論の中で、次のように述べております。

ピタゴラスの鏡は、明るく輝き、実に精妙につくられていて、夜間でも遠くのものを発見させてくれるので、反射によって、何千マイルも離れた所にいる友人に、メ

その時の記事の内容は次の通りです。

私はさらになんとも不可思議なものを王宮のなかで見かけた。それは大して深くはない井戸の上にかけられた大きな鏡だった。井戸のなかに降りていけば、地上でかわされる話がなによらず聞こえるし、またその鏡のなかには、あらゆる町あらゆる人々が、まるでそうした町々や人々のなかにいるように見えるのだった。私もそこで私の故国やあらゆる友人たちを見た。向こうでも私が見えたのかどうか、しかとは断言いたしかねるが、私の言う事を信じられぬ人は、自分もそこへ行つてみれば、私が嘘つきではないことがおわかりになろう。

ピタゴラス悪魔伝説の発生

ところで、古代の人が書いているところによれば、こうした見解は、いくつかの円い鏡を用いてまるで空から引き抜いたみたいに月を映し出す工夫をするという事実に基づいている。そうしてこうしたやり方は、ピタゴラスの創意になるものだった。……

一方古代のこのよだな伝説は L・リキエーリ（通称コ

エリウス・ロドリギヌス）が 1516 年ヴェネツィアで、

1542 年バールで、それぞれ刊行した『古代学論集・全十

六巻』卷九、第二三章、347 頁で、言及していますが、

それはミラノの神話誌家ナターレ・コンティによつて 1551 年ヴェネツィアで出版された『神話学あるいは寓話の説明・全十巻』によつて広められます。ナターレ・コンティは、ローマの詩人ウェルギリウス（前 70～前 19）の『牧歌集』から次のように引用します。

呪文が月を空から引き寄せる。……

一方、デッラ・ポルタはナポリで 1589 年『自然魔術、全 21 卷』を出版しますが、彼が卷 17、第 17 章、276 頁で、火の言葉を無限の距離へ投射する事のできる放物面について書いた内容を紹介します。

偉大な驚くべき事ども、とりわけ月面に文字を記すために、この工夫（円錐台四面鏡）を用いることができる、私は述べもし觀察してきましたのだが、というのも、私が言つたように、この鏡になにを書こうとも鏡は特にその光の助けを借りて、月と同じくらいに無限に遠い距離のところへそれを送り出すからである。……

またギリシャの諷刺作家で『ティモン』『神々の対話』などを書き、世相・哲学などあらゆるもの嘲笑・諷刺したルキアノス（120 代～180 代）のことを書いた『ルキアノスの本当の話』がパリで 1885 年刊行されます。がその 286 頁で

彼は天高く舞い上がりにくうちに、空中にぶらさがった光り輝く円い島、月に到着します。

ツセージを伝える文字などの映像を、輝く月面に見ることができるのではないかと、それは想像させたり考えさせたりしてくれるものである。

悪魔学者として最初に登場するのは、魔術に詳しいフランス・ロアール盆地のアンジェ司法官ル・ロワイエが 1586 年刊行した『幽靈あるいは幻、および人間にはつきりと姿を見せる精霊、天使、悪魔のビジョンについて』

の78頁に記載した、新しい細部がいくつか覗われるアリストパネスの韻文訳でした。それには次の様に掲載されています。

テッサリアの女を雇つてさ

魔女だから月を引き寄せてもらつてさ

そいつを円い光つた鏡みたいな確かな場所に

閉じ込めてしまうつのはどうだらう

従つてピタゴラスの鏡は、空から取り外した月を容れ

る事のできる、この器のように、球凸面形だったのです。

しかし人が血で文字を書いたという、血の問題が解決されではおりませんでした。

ル・ロワイエは、こう続けます。

さて、このピタゴラスの鏡と、人間の血で書かれたこれらの文字が、山羊の血に似ているかどうか、または輝かしい太陽あるいは月に向けられた二個の鏡が、どちらも悪魔の仕業に由来するものであるかどうかということについてはポンボナツツイ派の判断に任せたい。

もともとどんなやり方をしたのかについては、疑いの余地がないのである。

ピタゴラスは、当時最も偉大な魔術師で、しかも悪魔と密接に結ばれており、偽りの奇蹟と、まやかしを行つ

だ鏡について述べております。

其の一方でド・ランクルは、パリで1622年『十分に得心のゆく妖術の不確実と不信心』を出版し、その252頁で

ピタゴラスは、鋼鉄製の鮮明な鏡をもつていて、なんでも好きな事をそれに書きつけ、月が満ちるとそれに向つて鏡を示したが、鏡のなかに書かれていることを、それがあたかも月に書かれているように、全てを読むことができた。だから我々もこうして自分の思つている」と書き、それを遙か遠くの国にいる人に知らせることができる。

と前述のミラノの出来事を翌日パリでフランソワ一世が知る事が出来たことを裏書すると共に、鏡は鋼鉄製であつたと説明しています。

このように、すべてが鏡占いに組み込まれて、伝説は細部を除けば安定したものとなつていきます。ポルタの放物面鏡に続いて、窪んだ鏡はル・ロワイエの膨らんだ鏡に代わります。そしてそれはド・ランクル以来鋼鉄製です。

しかしそまだ血をめぐる論争がありました。人間の血なのか、山羊の血なのかということです。

このことが書かれているが、それこそ彼のような人物にふさわしいものであった。

このように普遍的調和音楽の発明者として自由学芸と共に中世に姿を現した学者ピタゴラスは、悪魔の領域に追いやられています。

ピタゴラス神話はこうして悪魔化されて広まります。魔術博士たちは、拷問や火あぶりによつて魔術と戦う任務を背負わされるのですが、其の証明のため、ピタゴラス神話が利用されます。

フランス北西海岸フランドル地方で厳しい取り締まりをしたM・デル・リオが1612年パリで刊行した『魔術についての論争と研究』78頁では、

最近の何人かの著者たちの語るところでは、ピタゴラスは人間の血を用いて文字を、窪んだ鏡の上に書き、その鏡を月に向けるという方法で、占いをするのが常だつたという。

このように凹面鏡を用いた占術を問題にしております。

スペインの宗教裁判官トレブランカは「悪魔をいかに喚び寄せるかについての手引書」をマドリッドで1615年刊行しますが、その第五七巻で同じく鏡占いに使う窪んめをつぶして、それをしばらくのあいだ月にさらすと血液にかわる」という方法を引用して次のように証明します。

これについてG・ノーデは「不当にも魔術の嫌疑を受けたすべての偉大な人物たちのための弁明」を1625年パリで出版し、その227頁で、R・セローがパリで1625年刊行した『サレルノの学校』325頁に掲載した「そらまめをつぶして、それをしばらくのあいだ月にさらすと血液にかわる」という方法を引用して次のように証明します。

ピタゴラスがそらまめを血に変化させたことは、モロー氏が化学者の諸原理にしたがつて、これがありうべきであると、極めて明瞭に指摘している事から見て何ら異常ではない」と言う事ができる。

一方衛星によるコミュニケーションの話は、物語の続

F・リスナーはパリで1606年刊行した『光学、全四巻』の211頁で、ルテティア（パリの古名）はコンスタンティノボリスのメッセージを受け取ることが出来たと述べ、G・ショットはバンベルク（ドイツ・ニュルンベルクの北）で1657年出版した『自然と人工の普遍魔術』439頁で、「うしたやり方は、イエズス会士として悪魔的とみなしながらも、其の一方でロンドンで書かれたことが、明るい夜にはコンスタンティノボリスで読む事が

出来たとしています。

イタリア・ルネサンス晚期の学者カンパネッラ（1568～1639）も同様彼がフランクフルトで1620年刊行した『物の感覚と魔術に就いて』329頁で、ローマがこうした方法で、決まった時間にスペインやナポリと交信していると、イタリアで信じられていましたと掲載しております。

アリストパネス註釈者への批判

このように十六世紀に隠秘哲学、神話学、悪魔学で採り上げられたアリストパネス註釈者物語は十七世紀の二十年代までは順調に展開しますが、やがて幾つかの批判を受ける事となります。

それは十世紀ビザンティンの文法学者スイダスのテクストが発見されたことに端を発します。

彼に関する刊行物、とりわけ1610年に刊行されたものには、幾つかの名前が誤って転写されていたのです。そして問題の「雲」に関する解題に記載されていたのはピタゴラスではなく、ピュタスだったのです。

メウルシスはリヨンで1625年刊行した『遊びにみちたギリシャ、ギリシャの遊びについて』58頁で、この事に

イタリア・ルネサンス晚期の学者カンパネッラ（1568～1639）は魔術を信ぜずスコラ学的伝統と戦い二七年間牢獄で過ごしましたが、ローマとスペイン、ナポリ間の夜間通信説を痛烈に批判します。

その理由は次の通りです。
①月の方に上るにつれて、文字の光は弱まる。
②極めて遠方に投射された諸光線は徐々に隔たる。

G・ショットは1657年『自然と人工の普遍魔術』のかで、同じ理由で逆の推論を行います。

「問題発生の原因是映し出す対象の形を縮小する球凸面鏡である。そこでは映像や記号が現れても見分けるには小さ過ぎると」というものです。

フランスの数学学者ルール・ショーンは、彼の著書『数学娯楽』の再版（1626）のなかで、ピタゴラスの鏡について、文字が月面上で読まれるために、逆さまに書かなければならぬことを指摘します。

P・マセは1579年パリで刊行した『悪魔、占い師、および妖術師の策略と欺瞞について』71、109、122頁で、「数学はわがキリスト教國、荒廃の原因である」と叫び数多くの古いテクストを結びつけています。

初期キリスト教会最高の思想家、聖アウグスティヌス（354～430）は次のように数学者がローマから追放された

ついて触れ、ピュタスというのは古代の鏡遊びの名前であって、あの高名な学者ピタゴラスとは何の関係も無いと述べております。

其の一方で、『オウディウスの書簡』を1626年刊行したG・バシェはその608頁で次の様に述べております。

スイダスに関して言えば、彼はただこの一節を逐語的に転写しているだけのよう思われるが、しかし出版されたこの著者のあらゆる書物には、多くの誤りがある。だからといって、メウルシスが月に文字を書く遊びがピュタゲスと呼ばれていた事と、なにも意味しないピュタスを結びつけるのはおかしい。

またブーランジエはリヨンで1627年刊行した『家でやれる私的な遊びについて』58頁の「ピタゴラスの鏡あるいはピュタゲスについて」で、B・スーシはリヨンで1638年出版された『鉱物学あるいは自然哲学宝典』466頁で、同様にピタゴラスは関係していないと修正をしていますが、遊びの名前ピュタゲスは、その発明者の名前に由来するものだとしています。

衛星放送に関係した鏡もまた激しい攻撃の的になりました。

ことに触れております。

主イエス・キリストは、皇帝アウグストゥスの治世下に生まれたが、皇帝が行つた準備作業のなかでも、神の子にとつても、自分にとつても為になつたのは、法律によってローマとイタリア全土から、魔術師と数学者を、特にアナクシラスというピタゴラス派の大哲学者を追放したことだつたと、エウセビオスが彼の著書『年代記』の中に記載している。

数学の法則はキリストの教えと対立しますので、その信奉者は悪魔の手先とされたのです。

一方G・ノーデはこうした中傷を批判し、深遠な知識を獲得した廉で、魔術の疑いを掛けられ誹謗されるのは、いつも最も数学者であるとします。彼の著書『不當にも魔術の嫌疑を受けたすべての偉大な人物たちのための弁明』55、76頁以下で、魔術にはもっぱら自然学に依拠し、その隠秘な力によって、しばしば驚くべき不思議な結果を生み出す魔術と、なんら不純なもの無い、数学の諸規則にしたがつて、更に驚くべき事態を出現させる仕掛けや機械を作り出す魔術が在ると述べ、それを区別しなければ駄目だと批判します。

そしてピタゴラスは、古代ローマの政治家・哲学者でアントニウスと対立したキケロ（前106～前51）の説に従いますと、あらゆることを数字から演繹し、大いなる神祕や特定の場所の名前すら数字に繋がりを持たせ、自分自身の主張に基づいて、無数の奇蹟を実現する為に数字を使つたので、不當にもル・ロワイエによつて魔術師とか魔法使いの汚名を着せられたということになります。

更にノーデは彼の著書『不当にも魔術の嫌疑を受けたすべての偉大な人物たちのための弁明』のなかで、一方ではピタゴラスが血の代わりに、そら豆の汁を用いることができたと認めながら、この道具の効力を疑い、更にフランソワ一世とカール五世二人のミラノ、パリ間の情報連絡に就いては次の様に完全に否定します。

すなわちナターレ・コンティの物語につき次の様に述べたのです。

彼ナターレ・コンティの報告は、その昔ニヌスとゾロアスター、ピュロスとクレシウス、ネクタネブスとマケドニアのフィリッポスがそうしたと言われているようすに、フランソワ一世とカール五世二人の偉大な王の武力に魔術を結び付けようとした者たちのつちあげた純然たる作り話である。

ユルギス・バルトルシヤイテス著・谷川渥訳『鏡』国書刊行会、一九九四年。

ピタゴラスを信奉し、彼の行つた手段の超自然的能力を確信したピタゴラス神話解体の本当の理由はなんだつたのでしょうか？それともイエズス会悪魔学への妥協なき反撃だつたのでしょうか？その理由は永遠に解き明かされることはないでしょう。

悪魔の印は、四半世紀後のデカルトの著作『嚴密学』にも押されます。

もし結果がその原因に似ているはずだとすれば、数学が魔術の原理だと聞いて誰が驚くだろうか。この光り輝く学問が闇しか生み出さないとすればどうだろう。我々の目を魅了する稀有な事物は恐怖の光景に成るだろうし、純粹知性によつて動かされる天球を観察すれば、それを自らの玉座にしようと望んだ反逆天使と共に我々は突き落とされるだろう。

1680年パリで刊行されたル・P・ダヴィッド（子）著「あらゆる時代の福音の教えの一般史、一年の一日一日に教会と世間で起きた最も注目すべき事柄を教える」の六月二十二日欄に

「魔術を用いずに不在の事物を知る方法として、鏡を使つて、其の上に大きな文字を書き、その鏡を月に向けれ

社 生口(内規)

☆ 同人参加へのお誘い

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆ 維持会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になつていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティへのご案内などを差し上げ交流を行つております。

* 同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

加入者名 まんじ
郵便振替口座 ○○二七〇一〇一六四五九一

透明な時間（三）

宅見勝弘

三（続き）

【前号までのあらすじ】

（二）東西銀行赤坂支店の金庫室の中で竹森は自覺めた。竹森は何者かに殴打され、氣絶していたのであった。隣に支店長の撲殺死体が横たわっていた。金庫室は格子扉と耐火扉で外から施錠されていた。格子扉と耐火扉と支店通用口のシリンドラー鍵の鍵は、死体の手の中に握られていた。金庫室は完全な氣密性で、酸素も十分に無い様子で、竹森は生きて救出されるか分らない状況であった。

（三）東西銀行は、東城銀行と西都銀行が合併して誕生した銀行である。東城銀行は「草食系銀行」と西都銀行は「肉食系銀行」と呼ばれ、合併後の行内の融和が進まなかつた。

（三）竹森が金庫室に閉じ込められた状態で、火災報知器が鳴っているのに気付いた。

東西銀行は、東城銀行と西都銀行が合併して誕生した銀行である。東城銀行は「草食系銀行」と西都銀行は「肉食系銀行」と呼ばれ、合併後の行内の融和が進まなかつた。

竹森が投げつけた踏み台は、金庫室の耐火扉に跳ね返された。耐火扉が壊れる筈が無かつたが、竹森は再び踏み台を掴んで、耐火扉に叩き付けた。
音が外に届いても、金庫室の外に人が居なければ何も意味が無い、と頭では理解していた。しかし、耐火扉を叩き壊そうという衝動が止まらなかつた。
竹森の顎からは汗が滴り落ちてきて、既に脱水状態に陥つていただけで、激しく動いたためか呼吸も荒くなつていただけで、激しく動いたためか呼吸も荒くなつていただけだ。
幻覚なのか金庫室の外から声が聞こえたような気がした。いつの間にか火災報知器の音は聞こえなくなつていただけだ。
報知器が鳴つたことに気付いてから、何十分も経過したようを感じた。

竹森は耐火扉に背中を着けて、もたれかかった。そのまま力なく崩れ落ちて、床に足を伸ばした。体力は残されていなかつたので、動くことができなくなつた。

竹森は自分が死ぬことを覺悟した。未だ健在で田舎に居る両親に親孝行してなかつたことを後悔した。
誰が犯人で、どのようにして金庫室から抜け出したか、分らないまま死ぬのが残念であった。この姿勢のままで自分が死ねば、耐火扉を開けた瞬間に自分の死体が飛び出すだろうと思つた。
失われつつある意識で背中に振動を感じたが、幻覚のようでもあつた。

赤坂支店の火災報知器の音が、支店の周辺数十メートルに亘り響いていた。

草津史郎が休日出勤をしようとした、赤坂支店の近くまで来ていた。草津は赤坂支店で取引先係をしている。旧東城銀行の出身で、竹森の一年先輩になる。
支店の方から火災報知器が鳴つているのを草津は聞いて、通用口に駆けつけた。草津が通用口に着いたとき、沢木雅子が数字錠の暗証番号を押しているところであつた。

草津は雅子に声を掛けた。雅子は出納係で、竹森と一緒に一年である。雅子は高卒なので、一浪で大卒の竹森より五年先輩になる。
「赤坂に買い物に来たのだけど。支店の前を通つたら、中の火災報知器が鳴り出したの。それで慌てて支店に入ろうとしたけど。中から鍵が掛かっているわ」

雅子はもう一度、数字錠を開錠して通用口を入れるうとノブを回したが、開かなかつた。草津も同様に暗証番号を押したが、同様にドアは開かなかつた。
「つまみを内側から回しているな。支店長と竹森以外にも休日出勤する人がいるかもしれないから、何も中から鍵を掛けなくてもよいのに」
数字錠を開けても通用口が開かないのは、シリンドラ鍵が施錠されていると草津は考えた。シリンドラ鍵は内側からサムターン（つまみ）を回して施錠する。
「中の電気が点いているから、一人は居ると思うわ」
雅子が指した窓から光が漏れていた。

支店長と竹森が支店に居ることを一人は確信したので、何度もインターフォンを押して呼びかけた。しかし、支店内からは全く反応が無かつた。

草津は赤坂支店の休日用の電話をしたが、誰も出なかつた。竹森の携帯にも電話をしたが、電波の届かないところにいるようで、繋がらなかつた。

「支店長の携帯にも電話したの」

雅子が草津に尋ねた。

「そんな恐ろしいこと出来る訳ないだろ。電話して何も無ければ支店長に殺されるよ」

「草津が真っ赤になつて、反論した。
「火事かもしれないのよ。緊急事態に支店長に電話できないなんて。いいわ、私が電話するわ」

雅子は自分の携帯電話を取り出して、支店長の携帯電話に電話をした。電波の届かないところ居るようで、繋がらなかつた。

「今週の鍵当番は誰かしら。もし、中の二人に危険が迫つていたら、開けてもらわないと」

「鍵の一つは支店長に渡しているから、残り一つは鹿田さんが持つていて。電話してみよう」

草津は当日の鍵当番の鹿田係長に携帯で電話をした。

鍵当番は、役職者（係長以上）と非役職者（主任以下）との二名が交代で担当している。鍵当番は毎日始業前の午前八時過ぎに開錠して、終業後に閉錠する規則になつてゐる。

他に通用口の鍵は不動産を管理している管理会社と本店の総務部にも予備の鍵は備えられていた。

鹿田は旧東城銀行の出身で、竹森の三年先輩で、取引先係長をしている。鹿田は支店の近くにいるという回答であつた。

鳥居副支店長にも電話が繋がり、二十分位で到着できるという話であつた。

「支店長が出勤しているので、副支店長も係長も一人とも突然の呼び出しを喰らつて良いように、支店の近くに待機していたみたいだ」

草津は一人を憐れむ様な表情をした。

「支店長が休日出勤しているのに、副支店長たちは最初

から出勤する予定はなかつたの」

「持井建設の破産で、支店長が竹森と二人で処理するから副支店長たちは邪魔をするなと言つたそうだ。ただ支店長の気が變るかもしれないのに、関係者は自宅や支店近くで待機しているらしい」

草津の言葉に雅子は不審に思つた。取引先の破産であれば副支店長や取引先・融資の役席が無関係な筈がない。

「持井建設は支店長案件だよ。実際に持井建設は支店長自らが新規取引を始めて、案件も一人で交渉していた。竹森は稟議書の作文をするだけで、形式的に稟議書に副支店長と融資の担当者の印鑑を押しただけだよ」

雅子は疑問が残つたが、この非常事態に疑問点を口にする状況ではなかつた。相変わらず火災報知器が激しく鳴り響いていた。

火災報知機が鳴つたことで、十分後には消防車が駆け付けた。しかし、出火が確認できなかつたので、消防隊員たちも誤報でないかという様子で見守つていた。鍵が無いので、報知機の有る支店内に誰も入れなかつた。

消防車が到着した五分後に鹿田係長が現れた。鹿田の持つている鍵で通用口の扉が開かれた。火災報知機は通用口の近くの設置されていたものが、指で押されたものと判つた。

駆けつけた消防隊員も支店の中に入つて、出火が無いか確認していた。暫くして火事は無いと判断したようで、

消防車も引き上げた。

誰かが支店内で火災報知器を鳴らしたのは間違いがないのに、支店内には誰も居ないのである。

支店内は電気が点いた状態であった。支店長席に上着が掛けられていたこと、竹森の席上に書類が広げられていたことから、一人が支店にいたことが明らかであつた。

鳥居副支店長も到着したので、四人で支店長と竹森を捜したが、見付からなかつた。

「物品庫の鍵を開けてくれないか。私は支店管理部の担当に連絡を取つてゐるから」

鳥居は自分の鍵束の中から物品庫の鍵を握つて、雅子に渡した。雅子は物品庫に向かつた。鍵束は物品庫の鍵だけでなく、他の鍵も付いていた。雅子は物品庫を開けると、鳥居に鍵を返した。

「もしかしたら金庫室の中に居ないでしようか」

鹿田の言葉で、全員が金庫室の有る地下へ行くことにした。

金庫室の近くまで着たとき、草津がゴム製の楔^{くぎ}を拾い上げた。それは耐火扉が開いたときに固定するものであるが、蹴飛ばされたように不自然な位置にあつた。

「支店長は金庫室の鍵を借りていましたから、開けて中に入ったのでしょうか」

草津は鹿田に尋ねた。

「支店長と竹森の二人が金庫室に入っているなら、閉ま

つてゐる訳が無い。しかし、支店長が竹森を閉じ込めている可能性は在りませんか」

鹿田が自分の推測を話した。

「そうか。そもそも二人が休日出勤したのは、金曜日に持井建設の破産申立があつたからだ。当然ながら金庫室の中に資料を探しに行つてゐるだろう。持井建設の担当の竹森に対して、支店長は八つ当たりをしたかもしれない。それで、金庫室に閉じ込めて、自分は悠々と外で飯でも食つてゐるじゃないか」

鳥居が鹿田の話を受けて、納得したように言つた。

「確かに支店長なら金庫室に閉じ込めるくらいやりかねませんね。成績の悪い部下を倉庫に一日も閉じ込めたという噂を聞いたことがあります。支店長は過去に部下を自殺未遂に追い込んだこともあるらしいですよ」

草津が同意するように続けた。

「そんな非人間的なことは東城なら有り得ないが、西都是日常茶飯事だそうだ。行員を強引に退職に追い込む人間が西都では評価される。そもそも、西都との合併は……」

鳥居の演説が始まりそうであつた。鳥居は支店長の前では這いつくばる様にしてゐるが、支店長が居ないと威張り散らしている。旧東城銀行の行員だけしかいないので、旧西都銀行や支店長に対する悪口で永遠に続きそうであつた。

「愚痴を言つてゐる場合じゃないわ。もし竹森君が閉じ

込められているなら、早く助けましょうよ」

雅子がたしなめる様に言つた。

「もし彼が中に居るとしても、勝手に開けると、後で支店長に何を言われるか分らない」

鳥居は、他人事だと悠然として落ち着いていた。しかし、問題が自分の責任に及ぶと、周りから見て見苦しいほど狼狽する。

「そんなこと言つて、今日の気温で金庫室に閉じ込められたら死ぬかもしれないでしょう」

金庫室外でも意識を失いそうな暑さなのに、金庫室の中だと生命の危険もありそつだつた。

「中で竹森が死んでいても、私の責任じゃないし、支店長の責任だよ。それに勝手に開けたら、私が支店長に怒られて、私の人事評価にも響く」

鳥居は言い訳した。風見鶏という渾名^{あだな}を陰で付けられ、いる鳥居らしい発言であった。責任転嫁の能力だけで副支店長までになったと陰口を言われている。

「何を言つているの。人の生死がかかっているかもしれないのに。早く開けなさいよ」

普段は大人しい雅子が声を荒げた。雅子の声に押されるように、鳥居が後ずさりした。雅子に導かれるように、全員が金庫室の耐火扉の前に集まつた。

「ダイアルの目盛が0でない。やはり一度は開けたのか」

金庫室のダイアル錠を閉める際の支店内のルールで、

施錠した後には目盛を0に合わせることになつていた。外観からダイアル錠が施錠されていることが他の人にも分るようになっていることだった。

「ダイアル錠を開けるから、後ろを向いていなさい」

ダイアルの開錠方法を知るのは役職の有る者に限られているので、草津と雅子に背中を向けさせた。鹿田係長が鳥居副支店長の開錠する様子を見つめていた。

鳥居は先ずダイアル錠だけを開錠した。取手を引いたが、扉は動かなかつた。

「やはりシリンドラ錠も掛かっている」

鳥居は鍵束を取り出して、金庫室のシリンドラ錠を開けた。

耐火扉がゆっくりと開くと、竹森の体が仰向けになつて飛び出してきた。

皆が驚きの声を挙げた。草津は金庫室内を指差すと、大声で叫び声を挙げた。指差した方向には、頭蓋骨を碎かれた支店長の死体が転がっていた。

「落ち着きなさい」

耐火扉の陰になつた鳥居が悠然とした口調で言つた。竹森の体が飛び出しても、驚く様子も見せなかつた。

しかし、鳥居は支店長の碎かれた頭部を見つめると、凍りついたように立ち竦んだ。

鳥居の股間部分に染みが広がり、異臭が漂つた。死体を見た衝撃で、鳥居は失禁していたのであつた。

追伸 — サウダージ — より その一

松 下 壽 男

フエスター・ジーア・ジ・クリアンサス

(子どもの日のパーティーにて)

知らない言語をあなたは話した

私がきよとんと聞くときに

あなたは一番かがやいた

きらめく言葉のサロンのまなかで

知らない異国をあなたは語つた

憧れのボッサが生まれるバイアの

悲しい陽射しの青春を

私の勧めた隣の椅子で

日本近代文学点描

その二

松 下 壽 男

近代的狐像の登場と異文化理解

♡可愛らしい狐の女の子が桑團子をのせたお皿を二つ持つて来ました。

四郎はすっかり弱ってしました。なぜってたった今太右衛門と清作との悪いものを知らないで食べたのを見たのですから。

それに狐の学生徒がみんなこっちを向いて「食ふだらうか。ね。食ふだらうか。」なんてひそひそ話し合つてゐるのです。かん子ははづかしくてお皿を手に持つたまま、まつ赤になってしまひました。すると四郎が決心して云ひました。

「ね、喰べよう。お喰べよ。僕は紺三郎さんが僕らを欺す

なんて思はないよ。」そして二人は桑團子をみんな喰べました。そのおいしいことは嬉つべたも落ちさうです。狐の学生徒はもうあんまり悦んでみんな踊りあがつてしまひました。

キックキックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のはかり

よるはツンツン月あかり、

たとへからだを、さかれても

狐の生徒はうそ云ふな。」

キック、キックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のはかり

よるはツンツン月あかり

たとへこゝえて倒れても

狐の生徒はぬすまない。」

キックキックトントン、キックキックトントン。

「ひるはカンカン日のはかり

よるはツンツン月あかり
たとへからだがちぎれても
狐の生徒はそねまない。」
キックキックトントン、キックキックトントン。
四郎もかん子もあんまり嬉しくて涙がこぼれました。

宮沢賢治は、大正十年（一九一二年）に、「雪渡り」を雑誌「愛國婦人」に発表します。その時手にした五円は、生前得た唯一の原稿料だったと言われています。賢治の作家デビューは、狐の異界のファンタジーなのでした。私は、それを近代的狐像の登場と呼ぼうと考えます。

狐は狐と並んで日本人に馴染みの深い野生動物です。彼らは里と大自然との境界に生息し、しばしば村人と縄張りを争ってきたからです。

「カチカチ山」など口承の昔話に多く登場する狐に対しても、狐は「葛の葉」などの古典文学にも度々登場してきました。しかも狐が擬人化によって物語られることが多いのです。しかも化けたり化かしたりするだけでなく狐火を吐くという力までも与えられ、稻荷神や荼枳尼天の信仰と結びついて、神格化されたのでした。

私は、狸と狐を対照させる民俗の背後に、先住民族・縄文人（文化）と渡来民族・弥生人（文化）との対比を感じます。

理は、野蛮で残酷で貪るのです。狐は、利口で、狡猾で、掠め取るのです。その対比は、賢治の童話においても「蜘蛛となめくじと狸」の狸と、「貝の火」の狐との間に見られます。とはいえ、賢治は、「雪渡り」で、近代的文化觀自覚するのです。もつとも、口承口伝を含めて文化を対比的にとらえて自立した構造として考える現代の文化人類学の発想は、まだ賢治の時代には十分に自覺されていませんでした。

同時代（大正一五年）に、官僚でもあつた柳田国男は、「山の人生」の「大和尚に化けて廻国せし狸のこと」の中で、狐や狸が人に化けたという伝説の科学的根拠を意味論的に探し始めています。今それをしておかなければ、急速に進む近代化によって非科学的な伝説が見捨てられてしまうだろうという危機感がありました。また在野の博学者・南方熊楠は、洋の東西の伝説を通時的・共時的に対比し、それを生まざるを得なかつた文化の有り様を明らかにしようと企てを試みていました。

東京と熊野の間で頻繁に交わされていたこの二人の文通は、しかしこの時代に途絶えます。文化に対する互いのとらえ方のどうしようもない違いが生んだ絶交だと私は思われます。

「自心で同情なき物を、いかにしても研究どころか觀察も成らぬものなり」

と考える熊楠は、相対する異文化を異化したまま普遍化

する道を歩もうとします。一方、

「民俗学のようなナショナルな学問に外国文を用い……日本、支那の話を披露すとすれば、言わばロンドンの博覧会にアイノ（アイヌ）を連れて行きして、一種好奇的歓迎を受くるまでにて仲間入りはできます。しかも、せつかくの努力が学問全体の進運には貢献し得ず」と考へる国男は、自文化の中心性のもとに異文化を同化して系統化する道を選びます。両者のどうすることもできない空回りは、国男が編集し、熊楠が寄稿していた雑誌「郷土研究」を居心地の悪いものにしていったのでした。

狐と里人とは異なる世界に住むように、山人と常民には異なる人生があり、熊楠と国男にも異なる文化観があつたのです。

では、同じ時代に、やはり異界の狐や山男の登場する物語を創作していた賢治は、熊楠と国男と、どちらの文化観に立つていたのでしょうか。

どうやら、賢治には、自分を狐と同化させていた節があるのです。

「すこやかにうるはしき友よ病みはてゝわが眼は黄なり
狐に似ずや」

これは、一八才の賢治が詠んだ歌です。盛岡中学校を卒業した彼は、蓄膿手術のため岩手病院に入院し、同一年の看護婦に恋をし、彼女との結婚を父に申し出、反対

中心に異文化を同化するのではなく、相対する異文化に自分が同化することを意味します。そしてそれができたのは、純真な誠実さであり、人間にも狐にも、およそ心あるものに共通した普遍性でした。

こうして「雪渡り」は、狐をめぐって、異界、すなわち異文化との交流や共生を歌い上げました。そのテーマにもつてこの動物は古来狐だったのです。またそれは賢治個人にとっても必然の動物なのでした。

ところで、この物語からは、被差別の生々しい嘆きが聞こえています。その被差別は賢治の現実ではありません。しかしその嘆きは時空を超えて普遍的です。たとえば、狐を現代の出稼ぎブラジル人に置き換えるても、ブラジル人学校の現実として人の心を打つものがあるでしょう。

それを可能にしているのは、先の熊楠の言葉を借りて、自分で同情なき物をいかにしても創作成らぬものなり、と語れるようだ。同情や共感、賢治の言葉を遣えば交響の力でしよう。「雪渡り」の世界は登場人物ばかりか自然や風景までが互いに交響し合っています。なかでも、子ぎつね紺三郎が担つてゐるのです。そして紺三郎の姿こそが、賢治の心のもつとも自覚化された表現形と言えるでしよう。紺三郎は、狐はもちろん、人間とも、そして大自然や宇宙の原理とも交響しながら一同を崇高な志

されました。その失恋の中で、彼は、生涯の心の拠り所となる「法華経」に出会うのでした。

賢治の写真を見ると、確かに、狐のような目をしています。しかも彼が後を継ぐべき家業は質屋で、世間からは、人を騙しかねない職業だと思われても仕方ありません。繊細な賢治の心は、子供のころから父親の職業に道徳的な負い目を感じていたようです。もしそれを、最愛の女性から指摘されたとしたら……。

その後、賢治は、女性に対する愛情を、同じ境遇という点でも、よき読者という点からも、自分に対する最大の理解者である二才年下の妹、トシに向けます。病弱な彼女は、花巻の家に居心地の悪さを感じて盛岡へ東京へと落ち着くことのない賢治を、故郷につなぎ止めていく存在になりました。彼の珠玉の童話の数々は、東京で書かれ、トシ喀血の電報を受けて、賢治が大きなトランクに詰め込んで彼女の元に齎したものでした。

ですから冒頭の「雪渡り」の兄妹は、恐らく賢治ヒトシのことでしょう。物語を書きながら、賢治は、トシと共に、狐の異界へ入つて行きます。そしてそこは実は、賢治の心の世界なのです。

純真的トシは、狐の異界の規範を、すなわち文化を受け入れます。騙されるかもしれない、うさのくそかもしれないという不安を振り捨てて、狐の差し出す団子を、賢治の勧めるままに食べるのです。それは自らの文化をしようか。

へと導くのです。

しかしその交響の普遍性こそは、賢治自身が常民から心から受け入れられない疎外感の原因であり結果でもあつたことでしょう。その疎外感の象徴として、賢治は、鏡を見ながら「狐」とつぶやいたことでしょう。彼は、狐が山と里の境界をうろつくように、どうしても自分が心中にあるとは感じることができなかつたのではないかでしょうと私には感じられるのです。

「ああ、風のなかに溶けこんでしまいたい」

弟・清六も何度か聞いたことがあるという賢治のこの言葉は、自己の中心性を風のように空しくして他者や森羅万象に寄り添うことを願う、賢治の心のつぶやきだつたろうと私には感じられるのです。

初めて宮沢賢治が「雪渡り」で示した、狐を疎外された異文化の象徴としてとらえる近代的狐像は、後進の新美南吉の作品にも色濃く見られます。さらに、あまんきみこにも……。

こうして考えたとき、国語の教科書に狐のお話が取り上げられている場合に、私たちは、言葉を教えるだけではなく、文化とは何かを教えるのだということを、自覚しなければなりません。それが、そもそも文化の自覚としての文学の、教材としての値打ちだと私は考へるので

文化勲章に輝く

赤堀四郎博士の一生（十七）

松 下 魏 三

学蛋白質研究所長に就任した頃からである。
そして昭和三十五年（一九六〇年）になると、博士は教授会によって学長に選出され、大阪大学学長に就任した。

赤堀博士は明治三十三年（一九〇〇年）生れであるから西暦の下二桁が年齢になる。
特に後半の一九五〇年代は第一線の研究者であり、研究の指導者として組織者であった。

そして一九六〇年代は大学行政の管理運営に首脳として活躍し、一九七〇年代には大学教育の充実振興のために献身的に尽力した学界の大御所であった。

大学の管理運営にかかわって手腕を発揮したのは、昭和二十二年（一九四七年）に大阪大学理学部長として昭和二十八年（一九五三年）に理学部長兼任のまま大阪大

状では学生の教育指導はもとより研究はできないので移転すべきであるという声が一層大きくなっていた。

そこで早急に大学を移転するための候補地を物色しなければならなくなつた。

戦後の大学はどこでも規模が大きくなり、都市の中心部から郊外へ移転するようになつていて、大阪大学は移転の候補地として吹田市の千里丘陵に適当な土地を見つけることができた。

この千里丘と呼ばれていた低い丘陵はいくつかならない竹藪の多い地帯であつたが、二十万坪の土地を買収するために、資金をどのようにして捻出するか。赤堀学長は日夜陣頭に立つて奮闘した。

赤堀博士は大阪大学が創立されて以来、四半世紀に及ぶ長い間勤続した教官であつたので関西の政財界に知られており、その外交手腕を遺憾なく發揮し、政府をはじめ自治体や財界にはたらきかけ、財政投融資の資金一十億円を借り、土地の先行取得に成功した。後日「この時の感激は今でも忘ることはできない」と多くの人々に語っている。

その後大阪府と建設省による千里ニュータウンの建設をはじめ昭和四十五年（一九七〇年）の万国博覧会の計画と一緒になつた吹田キャンパスの建設は着々と進められ移転が完了したのである。

この千里丘を中心とする大学移転を含めた新しい都市

計画は当時のわが国では最大のプロジェクトであった。

（註1サイクロトロン）
荷電子を加速する装置の一種。真空中に電極を置き、高周波電圧をかけると同時に、上下に強い磁場をかける。物理学では物質粒子の構造研究に使われる。医学では放射線感受性の低い悪性腫瘍や進行性癌の治療に用いられる。

（註2財政投融資）
国が一般会計とは別に財政資金を政府関係事業や民間企業に投資・融資すること。

二十九 老いを知らない青春

赤堀博士は昭和四十一年（一九六六年）には大阪大学学長として二期六年の任期を終り退任した。この時大学教授を退官し名誉教授となつた。

退官した多くの大学教授は悠々自適の日々を送る隠居生活が出来る毎日であるが、博士は長年にわたる研究生生活や教育行政について奥深い識見と優れた手腕と実績をもつていることを知っている大学関係者はもとより多くの市民は誰もが然るべき要職に就任することを期待していた。

その願いに応えるかのよう退官の年には、理化学研究所の理事長に就任した。その後昭和四十三年には大阪府の教育委員会の教育委員長という要職に就き、地域の初等中等教育や社会教育などの広範な教育の振興発展に尽力した。

また、大学に在職していた頃から考えていたことは、現在の大学生は身体は大人になっていても、本人は身心ともに大人になつたつもりでいるが、正しい判断力や思慮分別の出来るようなほんとうの人間としての躾ができるでない、大部分の青年は未成人のまま大学へ入学してくるのである。

特に最近のマンモス化した大学では学生と教官が人間的に触れ合う機会が少なくなっているので学生と教師が静かに語り合い互いに啓発しあえるような研修の場がどうしても必要であった。

この構想を実現するためにはまず資金を集めなければならぬので、関西の財界をはじめ関連する諸団体から協力と援助をお願いしたところ、多くの関係諸団体からご協力をいただき、宝塚に近い神戸市北区の道場町に関西地区大学セミナーハウスを建設することができた。

そして博士はこのセミナーハウスの提唱者であつたから財団法人関西地区大学セミナーハウスの理事長に推挙されることになった。

その後一九七三年の石油ショックなどがあり、資金面

では苦しい時もあったが、学生や教官の研修の場として活用されている。

このセミナーハウスのロビーにはアメリカのマッカーサー元帥が座右の銘として愛誦し、日本でも松下幸之助氏はじめ多くの財界人などが自戒の言葉としていたサムエル・ウルマンの「青春」の詩が豊一枚の大きさの額にして掲げられている。

その詩のなかの「青春とは人生のある期間を云うのではなく、心の様相を云うのだ。……年を重ねるだけでは老いはない。理想を失う時に初めて老いがくる。……」という一節は生涯を理想を求めて生きてきた老いを知らない博士の青春をうたつてゐるようと思われる。

また、博士が八十八歳になつたとき出版された「生命とは—思索の断章」と題した書の巻頭には、

〔学生に望む〕

甲北の　山の　葉陰に　良き友と
起き伏して

君たちの　希望や　悩み

社会や　人類の持つ　問題などを

深く　思索し　正しく学んでほしい

新しい友と　めぐり会うこともあるう

良き師の　助言を得ることもあるう

たとえ問題は　解きがたく　限りなくとも

人生の　意義ある一日を送り
若い命に　静かな輝きを　加えてほしい

という詩は春秋に富む学生諸君に静かに語りかけている老いを知らない博士の尊顔が想い出される。

(つづく)

赤堀四郎

編集後記

三戸岡さんから「生活療法の開祖二宮尊徳」という題名の小論文を送っていました。従来の見方とは違う、二宮尊徳の仕法についての効果が述べられていると思いましたので要旨を紹介します。

二宮尊徳が死を迎える前年大晦日の日記には「私の手を開け足を見ておくれ、手紙や日記を読んでほしい。恐る怖る深い淵を覗くように薄い氷の上を渡るよう、私が生きてきたことが判るだろう。」と書かれていました。

彼は自分の考え方を実現するため、出世願望や権威志向とは無縁に、身を削る思いで身分を少しずつ武士階級に近づけていきます。そして困っている農民を救うべく我国で始めて生活支援を計画的に実行します。その内容は自然の物質・物理的な条件や原則に従いながら、人々の行動を生理・心理的活動の目標に沿って方向づけ、変動・流通・交換の自由を高めるために経済的手段を活用するという時代を先駆けるものであり、現在の精神科医療と保険、リハビリテーションの実践においても、そのまま適用できものであります。

最近生物多様性のことが論ぜられるようになりましたが、一言でいえばそれは稻作を米の「量産工場」へと單純化すると、周囲の自然が不安定になるということです。複雑な事象を極めて微少な要素に分解して「原理」を突き詰める要素還元主義が近代の科学技術を支えてきたのですが、其の一方で関係性を重視する生態学を見直そうとする動きも出てまいりました。このように様々な角度から物事を考えるということはとても大切な事で、至誠・勤労・分度・推譲の報徳精神適用分野が益々広がっていくことは、大変喜ばしい事だと思つております。(T·N)

まんじ第118号

平成22年11月1日発行(非売)

発行人 三戸岡 道夫(みとおか みちお)

編集長 中山喬央(なかやま たかひろ)

事務局長 鍋屋次郎(なべや じろう)

(事務局) 〒223-0056 横浜市港北区新吉田東五丁目76-35 太田善朗方
TEL·FAX 045(544)5947

(郵便振替口座) No.00270-0-64592 加入者名 まんじ

(印刷製本) 日東印刷株式会社

〒142-0054 東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について

「夢おいかけて千里を走る」

田寺怜葦画